福岡市埋蔵文化財調査報告書　第874集

金　武　3

－金武地区農村振興総合整備統合事業関係調査報告－

－浦江遺跡第５次調査５・城田遺跡第２次調査２・乙石遺跡第２次調査１－

２００６

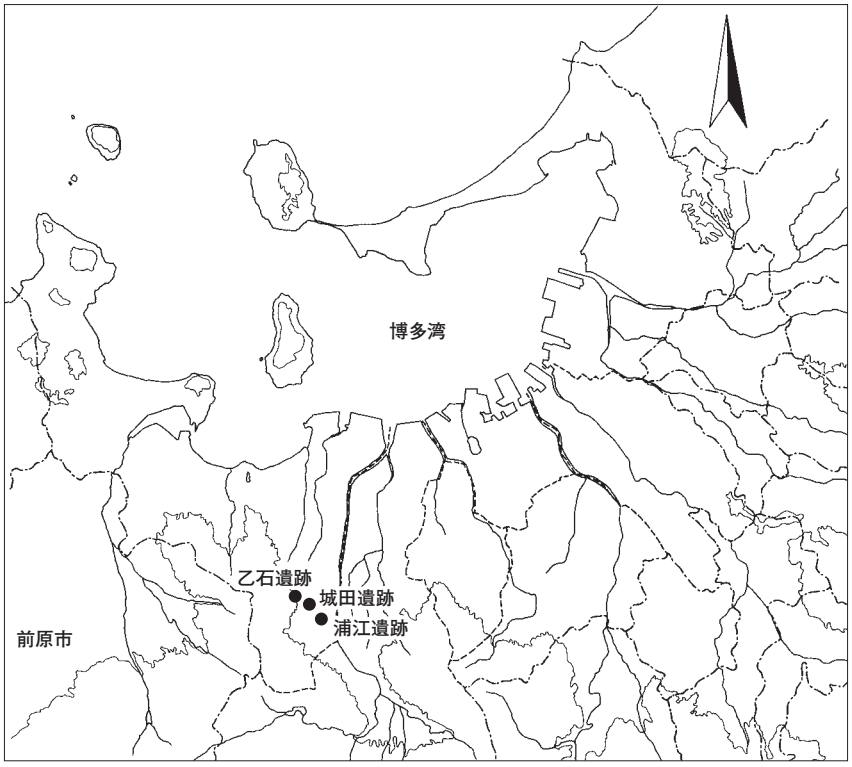
福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第874集

金　武　3

－金武地区農村振興総合整備統合事業関係調査報告－

－浦江遺跡第５次調査５・城田遺跡第２次調査２・乙石遺跡第２次調査１－

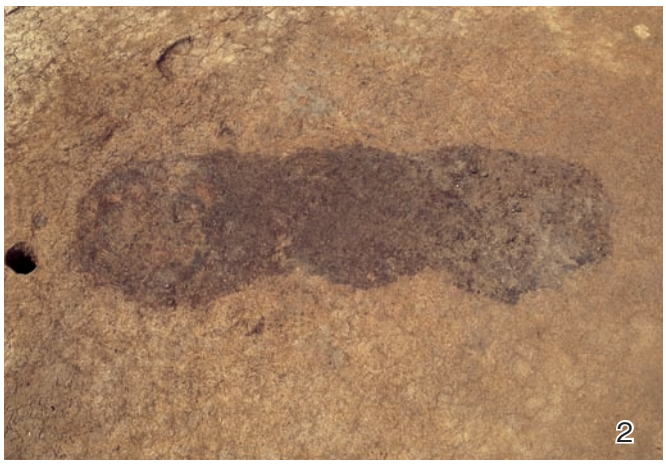


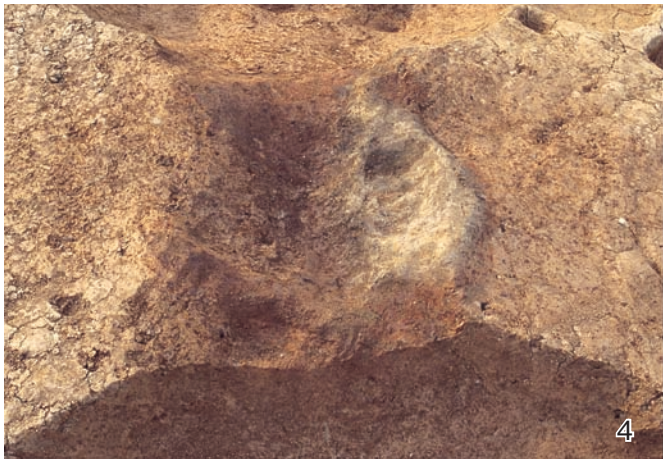
遺跡略号：URA-5　KTI-2　OTA-2
調査番号：0144　0329　0411

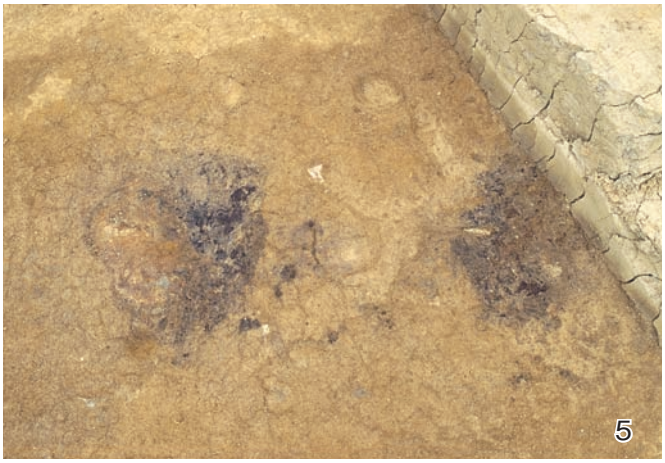
２００６

福 岡 市 教 育 委 員 会

1．浦江５次調査２区（他）全景写真（空撮）







1．４区SX003（東から）　2．５区SX007（東から）
3．５区SX012（東から）　4．５区SX012炉（南から）
5．18-4区SX039（東から）　6．18-2区SX042（東から）
7．18-5SX062（北から）　8．18-5区SX070（北から）

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。早良平野には吉武遺跡群を始め、大規模な遺跡が多数みられます。近年の著しい都市化による開発により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、金武地区農村振興総合整備統合事業による圃場整備に伴い調査を実施した浦江遺跡群第５次調査・城田遺跡第２次調査・乙石遺跡第２次調査の内容について報告するものです。これらの調査では浦江遺跡の装飾古墳、城田遺跡の獣帯鏡を始め、重要かつ貴重な遺構・遺物が多数出土しました。これらは古代における早良平野の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで多くのご協力を賜りました金武地区土地改良組合様をはじめとする関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成18年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　植 木　とみ子

― 例　言 ―

1．本書は福岡市教育委員会が圃場整備事業に伴い、福岡市西区大字金武地内において実施した発掘調査である浦江遺跡第５次調査・城田遺跡第２次調査・乙石遺跡第２次調査の報告書である。

2．本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

遺跡名	浦江遺跡第５次		
調査番号	**遺跡略号**	**調査面積**	**調査期間**
0144	URA-5	36,387㎡	2002.1.7～2002.12.30
地番		分布地図番号	
西区大字金武字塚原・大塚地内		94　金武	

遺跡名	城田遺跡第２次		
調査番号	**遺跡略号**	**調査面積**	**調査期間**
0329	KTI-2	16,927㎡	2003.5.1～2004.1.30
地番		分布地図番号	
西区大字金武字城田地内		94　金武	

遺跡名	乙石遺跡第２次		
調査番号	**遺跡略号**	**調査面積**	**調査期間**
0411	OTA-2	24,241㎡	2004.4.5～2004.10.28
地番		分布地図番号	
西区大字金武字乙石地内		94　金武	

3．今回の報告については福岡市教育委員会吉留秀敏・米倉秀紀・常松幹雄・池田祐司・久住猛雄・藏冨士寛・阿部泰之が分担して執筆した。各分担については目次に示した。

4．本書に掲載した遺構ならびに遺物実測図は各担当者の他、名取さつき・矢野幸子・宮元香織（奈良女子大学大学院生）遠藤茜・山田ヤス子・宮原邦江・山口譲治・山口朱美・井上加代子・山崎賀代子が作成した。

5．本書に掲載した挿図の製図は各担当者が行った。

6．本書に掲載した写真は、各担当者が撮影した。

7．本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より6°40′西偏する。標高は海抜高である。

8．遺構の呼称は掘立柱建物をSB、溝をSD、井戸をSE、土抗をSK、ピットをSPと略称する。

9．本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

10．金属製品の処理等については福岡市埋蔵文化財センターの協力を仰ぎ、同職員比佐陽一郎には多くの重要なご教示を賜った。

11．調査期間中は多くの方々がご来跡され、貴重なご指導・ご助言をいただいた。以下ご芳名を記し、深く感謝申し上げたい。

青柳泰介　穴沢義功　阿部芳郎　石野博信　上杉彰紀　小田富士雄　遠部　慎　甲元眞之　白井克也　鈴木正博　武末純一　西谷　正　禰宜田佳男　林　潤也　原田博志　松本　茂　溝口孝司　柳沢一男　柳田裕三　朴　天秀

12．本書の編集は阿部が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1

第２章　浦江遺跡群第５次調査の記録 …… 5
１．1区（東）の調査（常松）…… 7
２．1区（西）の調査（阿部）……27
３．2区の調査（米倉・久住）……35
４．3区の調査（藏冨士）…… 111
５．6区の調査（吉留）…… 125
６．7区の調査（吉留）…… 128
７．20区の調査（吉留）…… 135
８．21区の調査（吉留）…… 139
９．22区の調査（吉留）…… 142
10．23区の調査（吉留）…… 143
11．浦江遺跡群第5次出土の旧石器時代資料 …… 149
12．浦江遺跡群第5次調査のまとめ …… 152

第３章　城田遺跡第２次調査の記録 …… 155
１．11・17区の調査（阿部）…… 157
２．14区の調査（阿部）…… 167
３．15区の調査（阿部）…… 171

第４章　乙石遺跡第１次調査の記録（池田）…… 173

挿　図　目　次

Fig.1　浦江・城田・乙石遺跡と周辺の遺跡（1/25,000）…2
Fig.2　浦江および城田遺跡調査区位置図（1/8,000）…3
Fig.3　乙石遺跡位置図（1/6,000）……4
Fig.4　浦江遺跡群第5次調査区位置図 ……6
Fig.5　１区（東）SK101～103土坑実測図（1/20）……8
Fig.6　１区（東）SK101・102・104出土遺物実測図（1）（1/4）…10
Fig.7　１区（東）SK103出土遺物実測図（1/4）…11
Fig.8　１区（東）SX-017、SK-104実測図（1/60・1/40）…12
Fig.9　１区（東）出土遺構実測図（2）（1/60）……14
Fig.10　１区（東）出土遺物実測図（1）（1/4）……16
Fig.11　１区（東）出土遺物実測図（2）（1/3・1/4）…18
Fig.12　１区（東）出土遺物実測図（3）（1/3・1/4）…19
Fig.13　１区（東）出土遺物実測図（4）（1/3・1/4）…21
Fig.14　１区調査区遺構配置図（1/400）
Fig.15　１区（西）遺構配置模式図 ……27
Fig.16　１区（西）SB4001・4002・4004実測図（1/100）…28
Fig.17　１区（西）SB4003実測図（1/100）……29
Fig.18　１区（西）掘立柱建物出土遺物実測図（1/4）…29
Fig.19　１区（西）SD3001土層断面実測図（1/40）…30
Fig.20　１区（西）SD3001出土遺物実測図（1/4）…30
Fig.21　１区（西）SD1005・1017・1021出土遺物実測図（1/4）…31
Fig.22　１区（西）出土土製品実測図（1/3）……31
Fig.23　１区（西）柱穴・ピット出土遺物実測図（1/4・1/2）…32
Fig.24　１区（西）その他の出土遺物実測図（1/4）…32
Fig.25　浦江５次２区全体略図（東部除く）（1/600）…36
Fig.26　浦江５次２区東部平面図（1/200）……37
Fig.27　SB01・02・05・04・07・10・06・11・12・18・20・15（1/100）…39
Fig.28　SB03・09・14・13・25・17（1/100）……40
Fig.29　SB16・21・22・28・24・26・27・30・29・34・33・32（1/100）…41
Fig.30　SB31・40・38・39・42・36（1/100）……43
Fig.31　SB35・45・46・44・53・54（1/100）……45
Fig.32　SB47・48・43・41・50・52（1/100）……46
Fig.33　SB49・55・51（1/100）……47
Fig.34　SA01・02・03（1/100）……48
Fig.35　SC（SX）05（1/50）……49
Fig.36　SC13（1/50）……50
Fig.37　SC（SX）20（1/60）……50
Fig.38　SC72（1/50）……50
Fig.39　SK01（1/30）……52
Fig.40　SK30・08・22・11（1/40）……52
Fig.41　SK31・07・201（1/40）……53
Fig.42　SK27=28（1/50）……54
Fig.43　SK18（1/50）……54
Fig.44　SK14（1/50）……54
Fig.45　SK75・198・1051・43・63（1/40）……56
Fig.46　SK208（1/40）……56
Fig.47　SK535（1/50）……57
Fig.48　SD01－イ区詳細図（1/60）……58
Fig.49　SD01－ロ区詳細図（1/60）……58
Fig.50　SD01－ロ区・西側土層（1/40）……59
Fig.51　SD01－A区東詳細図（1/60）……60
Fig.52　SD01－C区東詳細図（1/60）……60
Fig.53　SD01－C区中央詳細図（1/60）……60
Fig.54　SD01－D区中央～東詳細図（1/60）……61
Fig.55　SD01－D区西～中央詳細図（1/60）……61
Fig.56　SD01－D区西詳細図（1/60）……61
Fig.57　SD01－D区北側凹みSX01（1/100）……61
Fig.58　SD01－D区西・東側土層（1/40）……62
Fig.59　SD01－D区中央・東側土層（1/40）……62
Fig.60　SD01-D区東詳細図（1/50）およびD区東・東側土層（1/40）…63
Fig.61　SD01－E区中央詳細図（1/60）……64
Fig.62　SD01－E区東・東側土層（1/40）……64
Fig.63　SD01－F区西詳細図（1/60）……64
Fig.64　SD01－F区中央詳細図（1/60）……64
Fig.65　SD01－F区東（～G区西）詳細図（1/60）…64
Fig.66　SD01－H区・西側土層（1/40）……65
Fig.67　SD01－G・H区詳細図（1/60）……66
Fig.68　SD01－H区東詳細図（1/60）……66
Fig.69　SD01－L区中央～東詳細図（1/60）……67
Fig.70　SD01－L区・南東側土層（1/40）……67
Fig.71　SD01－ロ区・北側凹みSX53（1/100）……68
Fig.72　SD1068（SD01－C区東・北側）（1/100）……68
Fig.73　SD472（SD01－D区中央・南側）（1/50）…68
Fig.74　SD10（SD01－E区東・北側）（1/100）……69
Fig.75　SX12,SD16・16東,SD18他（SD01－F・G区北側）（1/100）…70
Fig.76　西端調査区SD24・25・26（1/80）……71

Fig.77　SD02・03（1/100）……72
Fig.78　SD01出土土器1（1/4）……73
Fig.79　SD01出土土器2（1/4）……74
Fig.80　SD01出土土器3（1/4）……75
Fig.81　SD01出土土器4（1/4）……76
Fig.82　SD01出土土器5（1/4）……77
Fig.83　SD01出土土器6（1/4）……78
Fig.84　SD01出土土器7（1/4）……79
Fig.85　SD01出土土器8（1/4）……80
Fig.86　SD01出土土器9（1/4）……81
Fig.87　SD01出土土器10（1/4）……82
Fig.88　SD01出土石器1（1/2）……84
Fig.89　SD01出土石器2（1/2,1/1）……85
Fig.90　その他の出土遺物1（1/4,1/1）……86
Fig.91　その他の出土遺物2（1/2,1/1）……87
Fig.92　調査区周辺における弥生時代中期後半～後期前半の水路と可耕地（1/3,200）…93
Fig.93　SC22（1/60）……111
Fig.94　SC46（1/60）……112
Fig.95　SC54・56（1/60）……113
Fig.96　SC86（1/60）……114
Fig.97　SC出土遺物（1/4）……114
Fig.98　SK58・59・79（1/60）……115
Fig.99　SK10・24・25・31・60・61（1/60）……116
Fig.100　SK出土遺物1（1/4）……117
Fig.101　SK各種（1/20・1/60）……118
Fig.102　SK66・67・68（1/60）……119
Fig.103　SK出土遺物2（1/4）……120
Fig.104　SK126（1/40）……121
Fig.105　その他の遺物（1/4）……122
Fig.106　６区全体図（1/300）……125
Fig.107　６区東壁土層断面図（1/150）……126
Fig.108　竪穴式住居SC02・03（1/60）……126
Fig.109　６区出土遺物（1/4）……127
Fig.110　SX35出土遺物（1/4）……128
Fig.111　７区全体図（1/300）……129
Fig.112　土壙SK02～04（1/40）……130
Fig.113　７区出土遺物1（1/4）……131
Fig.114　７区出土遺物2（1/4）……132
Fig.115　７区出土遺物3（1/4）……133
Fig.116　７区出土遺物4（1/4）……134
Fig.117　20区全体図（1/300）……135
Fig.118　溝SD01～03土層断面図（1/30）……136
Fig.119　溝SD01～03出土遺物（1/4）……137
Fig.120　20区出土遺物（1/4）……138
Fig.121　21区全体図（1/300）……139
Fig.122　竪穴式住居SC02（1/60）……140
Fig.123　掘立柱建物SB03他（1/60）……140
Fig.124　21区出土遺物（1/4・1/1）……141
Fig.125　22区全体図（1/300）……142
Fig.126　22区出土遺物（1/4・1/1）……143
Fig.127　23区全体図（1/300）……144
Fig.128　掘立柱建物（1/80）……145
Fig.129　炉跡SR02（1/30）……146
Fig.130　23区出土遺物（1/4）……147
Fig.131　浦江遺跡群旧石器～縄文時代遺跡分布（1/10,000）…148
Fig.132　浦江遺跡群第５次出土旧石器時代資料1（1/1）…150
Fig.133　浦江遺跡群第５次出土旧石器時代資料2（1/1）…151
Fig.134　検出遺構・遺物の分布1（弥生時代）……152
Fig.135　検出遺構・遺物の分布2（古墳時代）……153
Fig.136　検出遺構・遺物の分布3（古代・中世）…154
Fig.137　城田遺跡第２次調査区位置図……156
Fig.138　城田遺跡第２次調査11区・17区全体図（1/400）…157
Fig.139　11区西壁土層断面実測図（1/40）……158
Fig.140　11区SD100遺物出土状況実測図（1/40）…158
Fig.141　11区SD100出土弥生土器実測図（1/6）…159
Fig.142　11区SK01実測図（1/20）……160
Fig.143　17区SB05実測図（1/40）……161
Fig.144　17区SD03土層断面実測図（1/40）……161
Fig.145　17区SK01実測図（1/40）……162
Fig.146　17区出土遺物実測図（1/4）……162
Fig.147　14区全体図（1/200）……167
Fig.148　14区西壁土層断面実測図（1/160）……168
Fig.149　14区SX01土層断面実測図（1/40）……168
Fig.150　14区SX01出土土器実測図（1/4）……168
Fig.151　14区SD07・遺構検出面出土土器実測図（1/4）…168
Fig.152　15区全体図（1/200）……171
Fig.153　15区SX01出土遺物実測図（1/4）……171
Fig.154　調査区位置図（1/2000）……174
Fig.155　3区全体図、掘立柱建物、焼土坑、SK004出土遺物実測図（1/400、80、40、1/4）…176
Fig.156　４区全体実測図（1/400）……177

Fig.157　４区出土遺物実測図（1/4）……178
Fig.158　４区掘立柱建物、土坑実測図（1/80）……179
Fig.159　４区焼土坑、製鉄関連遺構実測図（1/40）…180
Fig.160　５区全体図（1/400）……181
Fig.161　５区溝土層、断面実測図（1/60）……182
Fig.162　５区出土遺物実測図（1/4）……182
Fig.163　５区焼土坑実測図（1/40）……183
Fig.164　５区製鉄関連遺構実測図（1/40）……184
Fig.165　５区出土遺物実測図（1/4）……185
Fig.166　８区全体図（1/400）……186
Fig.167　８区溝土層、断面実測図（1/60）……187
Fig.168　８区溝出土遺物実測図（1/4）……187
Fig.169　７区焼土坑、土坑実測図（1/40）……188
Fig.170　７区土坑実測図（1/60）……189
Fig.171　７区土坑、ピット出土遺物実測図（1/4）…190
Fig.172　７区製鉄関連遺構実測図（1/40）……190
Fig.173　９区全体図（1/400）……191
Fig.174　10区、11区焼土坑、土坑実測図（1/40）…192
Fig.175　10、11区全体図（1/400）……193
Fig.176　11区掘立柱建物実測図1（1/80）……194
Fig.177　11区掘立柱建物実測図2（1/80）……195
Fig.178　11区掘立柱建物実測図3（1/80）……196
Fig.179　11区出土遺物実測図（1/4）……196
Fig.180　12、13区全体図（1/400）……197
Fig.181　12、13区土坑、焼土坑実測図（1/40）……198
Fig.182　12、13区出土遺物実測図（1/4）……198
Fig.183　14区全体図西半（1/400）……200
Fig.184　14区全体図東半（1/400）……201
Fig.185　14区溝出土遺物実測図（1/4）……202
Fig.186　14区焼土坑、土坑実測図、出土遺物実測図（1/40、4）…203
Fig.187　14区周溝状遺構実測図（1/60）……204
Fig.188　14区周溝状遺構出土遺物実測図（1/4）…204
Fig.189　14区掘立柱建物実測図1（1/80）……206
Fig.190　14区掘立柱建物実測図2（1/80）……207
Fig.191　14区掘立柱建物実測図3（1/80）……208
Fig.192　14区掘立柱建物実測図4（1/80）……209
Fig.193　14区掘立柱建物実測図5（1/80）……210
Fig.194　14区ピット包含層出土遺物実測図（1/4）…211
Fig.195　17区全体図（1/400）……212
Fig.196　17区出土遺物実測図（1/4）……212
Fig.197　18-1区全体図（1/400）……214
Fig.198　18-1区焼土坑実測図（1/40）……215
Fig.199　18-1区落とし穴状遺構実測図1（1/40）…216
Fig.200　18-1区落とし穴状遺構実測図（1/40）……217
Fig.201　18-1区土坑実測図（1/40）……218
Fig.202　18-1区掘立柱建物実測図（1/80）……218
Fig.203　18-2、-3全体図（1/400）……219
Fig.204　18-2区溝土層実測図（1/60）……220
Fig.205　18-2、-3区溝出土遺物実測図（1/4）……221
Fig.206　18-2区落とし穴状遺構、土坑実測図（1/40）…222
Fig.207　18-2区掘立柱建物実測図（1/80）……223
Fig.208　18-2、-3区製鉄関連遺構実測図（1/40）…224
Fig.209　18-2区SX040出土遺物実測図（1/4）……225
Fig.210　18区SD060土層実測図（1/60）……225
Fig.211　18-4区全体図（1/400）……226
Fig.212　18-5、-6全体図（1/400）……227
Fig.213　18区SD060出土遺物実測図1（1/4）……228
Fig.214　18区SD060出土遺物実測図2（1/4）……229
Fig.215　18区SD060出土遺物実測図3（1/4）……230
Fig.216　18-4、-5、-6区焼土坑実測図（1/40）……231
Fig.217　18-4、-5区土坑出土遺物実測図（1/4）……231
Fig.218　18-4区SX062、SD060実測図（1/100）……232
Fig.219　18-4区SX062実測図（1/40）……233
Fig.220　18-4区SX039、SX062出土遺物実測図（1/4）…234
Fig.221　18-4、-5、-6区製鉄関連遺構実測図（1/40）…235
Fig.222　18-4区SX073、077、078出土遺物実測図（1/4）…236
Fig.223　18区ピット出土遺物,表採遺物実測図（1/4）…237
Fig.224　19区全体図（1/400）……238
Fig.225　19区落とし穴状遺構、土坑実測図（1/40）…239
Fig.226　縄文土器実測図（1/4）……240
Fig.227　縄文時代、弥生時代の石器実測図（1/1、2/3、1/4）…241
Fig.228　旧石器時代の遺物実測図1（1/1）……243
Fig.229　旧石器時代の遺物実測図2（1/1）……244
Fig.230　14、20区の石材組成比率差 ……245
Fig.231　調査区地形概念図（1/4000）……247

付　図　目　録

付図１　浦江５次　２区西部平面図（1/200）
付図２　浦江５次　２区中央部平面図（1/200）
付図３　浦江５次　３区全体図（1/100）

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

1998（平成10）年に福岡市農林水産局より本市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課）宛に西区金武地区における集落基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の確認について事前の問い合わせがあった。これを受けて埋文課は平成11年以降、対象地の既調査記録の検討と現地踏査を行い、遺跡の確認を行った。その結果、平成13年度対象地以外の圃場整備事業対象地でほぼ全域にわたり濃密に遺構・遺物の存在が確認された。この成果を元に両者で協議を行うとともに遺存する埋蔵文化財の保護についての対策案について検討を行った。しかし対象地が扇状地上の斜面であること、広い水田面造成のため大規模な造成工事が必要であることから、造成工事によって遺構の破壊を免れないため、全体の盛り土量を増やし保存範囲を増やすこととなったが、なお工事による影響を免れない範囲については発掘調査を実施し、記録保存を図ることとした。その後、委託契約を締結し、2002年４月１日から発掘調査、翌2003年度以降に順次資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

（参考文献：『金武１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第792集）

２．調査組織

（浦江５次）

調査委託：福岡市農林水産局
調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
調査総括：埋蔵文化財課長　山崎純男（前任）　山口譲治（現任）
同課調査第１係長　力武卓治（前任）　田中壽夫（前任）　山崎龍雄（現任）
調査庶務：文化財整備課　後藤泰子
調査担当：同課調査第１係　杉山富雄　吉留秀敏　米倉秀紀
常松幹雄（現・埋蔵文化財センター）　池田祐司　久住猛雄
藏冨士寛　阿部泰之　赤坂亨

（城田2次）

調査委託：福岡市農林水産局
調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
調査総括：埋蔵文化財課長　山崎純男（前任）　山口譲治（現任）
同課調査第１係長　力武卓治（前任）　田中壽夫（前任）　山崎龍雄（現任）
調査庶務：文化財整備課　後藤泰子
調査担当：同課調査第１係　吉留秀敏　池田祐司　藏冨士寛　阿部泰之

（乙石1次）

調査委託：福岡市農林水産局
調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
調査総括：埋蔵文化財課長　山崎純男（前任）　山口譲治（現任）
同課調査第１係長　田中壽夫（前任）　山崎龍雄（現任）
調査庶務：文化財整備課　後藤泰子
調査担当：同課調査第１係　池田祐司

Fig.1　浦江・城田・乙石遺跡と周辺の遺跡（1/25,000）

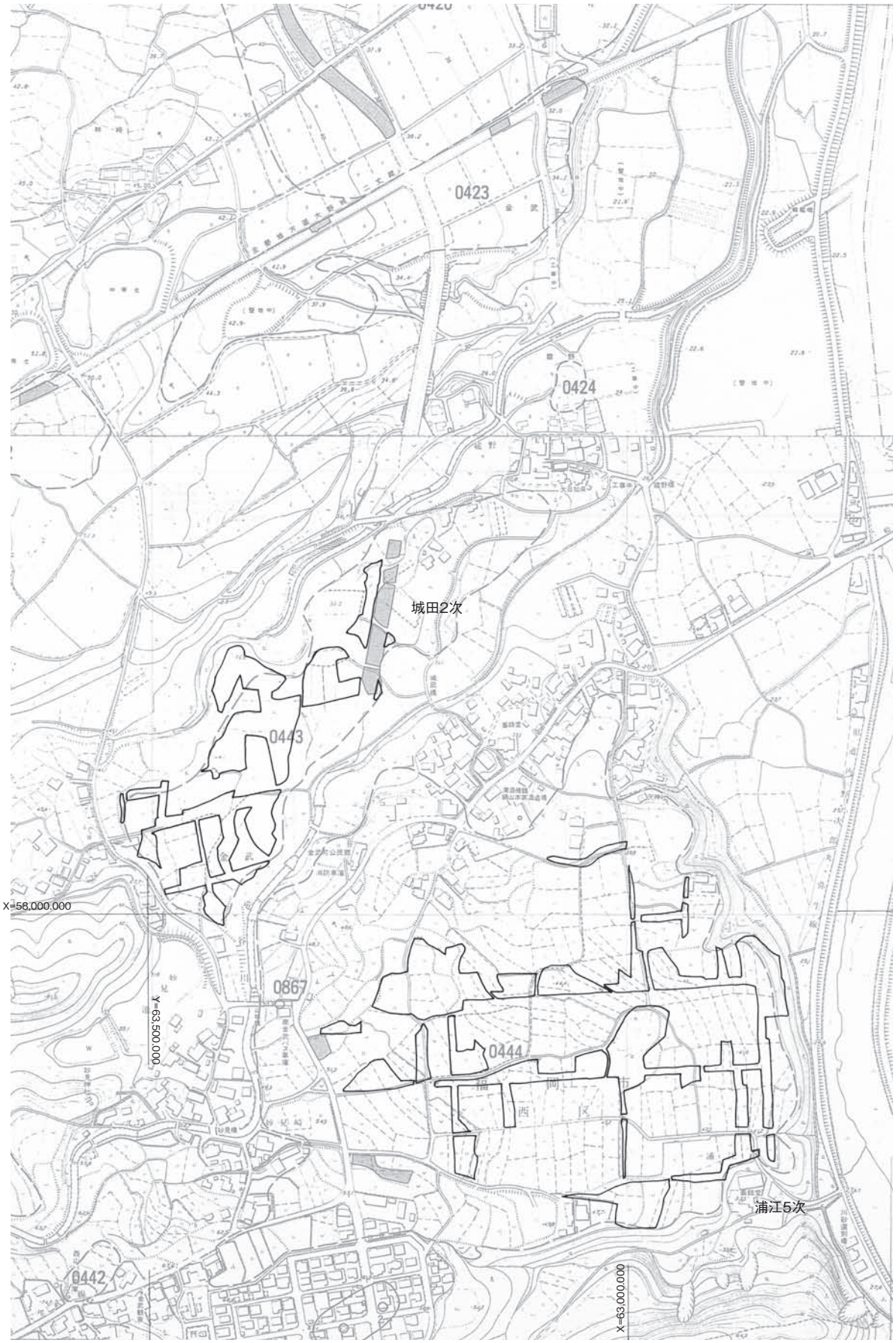


Fig.2　浦江および城田遺跡調査区位置図（1/8,000）

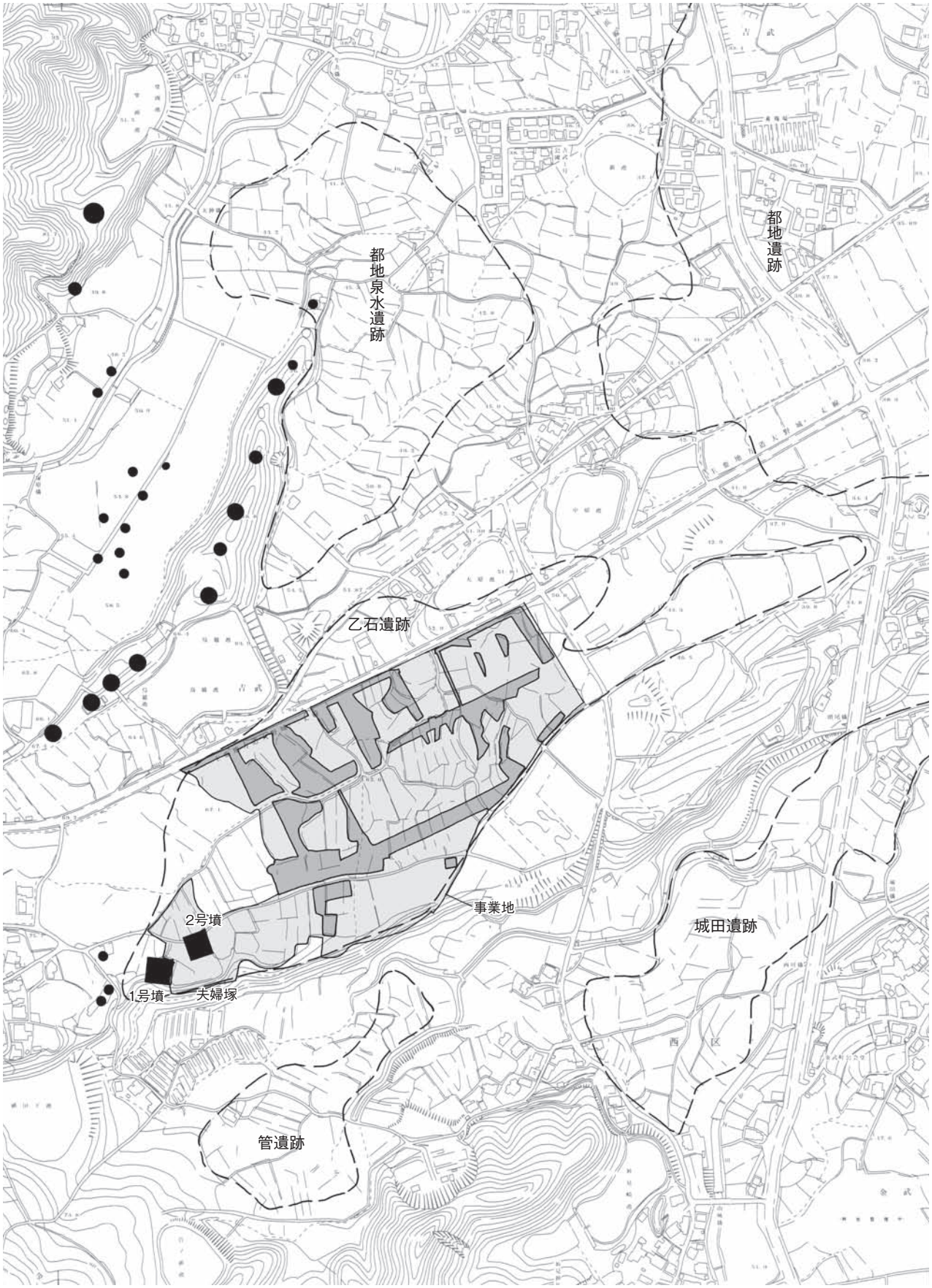


Fig.3　乙石遺跡位置図（1/6,000）

第２章　浦江遺跡第５次調査の記録

１．浦江遺跡の位置

現在の行政区では福岡市早良区に当たる早良平野は、背振山系から西方に派生する西山・飯森山・叶岳に南から西を限られ、東は油山から北に派生する低丘陵に囲まれる平野である。この平野は主に室見川とその支流によって開析された沖積平野で、現在は北部から幹線道路沿いに市街地化が進んでいるが、旧来広大な水田地帯であった。この沖積平野の西を限るように西入部から金武周辺にかけて比高差約10mの段丘崖がみられる。これの上部は更新世中～後期にかけて形成された扇状地形である。

この扇状地は室見川を主としてその支流にも浸食され、複数の台地状の地形となって残っている。

浦江遺跡は、この扇状地上に形成された弥生時代～中世にわたる複合遺跡である。

２．調査概要

浦江遺跡第５次調査は圃場整備事業に伴う発掘調査の常として、圧倒的な遺構・遺物量、それも重要なものが多いという遺跡の内容に比して圧倒的に少ない人員・時間で作業が進められた。そのためいくつかの調査区については一部不本意なまま調査を終了せざるを得ないという状況が見られた。しかし１遺跡を広範囲にわたって発掘調査するという希有な事例であり、数々の重要な遺構・遺物の発見があった。以下、時代ごとに遺構・遺物の概要を報告書既刊の部分について概観したい。

旧石器時代の明確な遺構は検出されていないが、８区・12区に旧石器の出土があった。

縄文時代は、早期の貯蔵穴が６a区で検出され、撚糸文土器・両面加工石器などが出土した。３区では遺物包含層が検出され、後・晩期の遺物が主体であるが早期の遺物も含まれる。24区では集石炉が検出されたほか、主に遺構覆土中から条痕文・刺突文を有する土器が出土している。

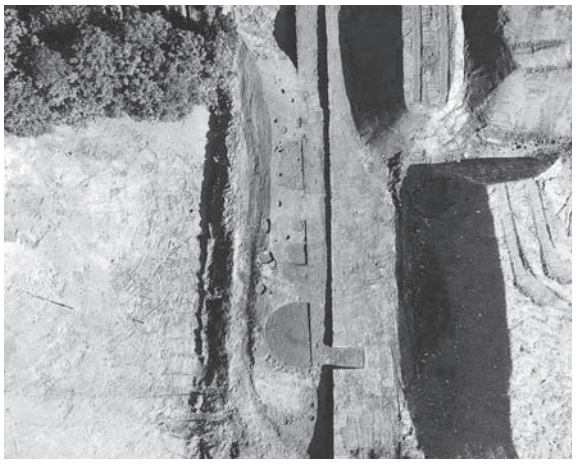
弥生時代はまず１区検出の区画墓が挙げられる（市報863集）。東側を失っているが東西幅13.0mの矩形の幅と推定され、中期中頃～後葉の甕棺が26基検出され、うち１基から水銀朱の出土があった。このほか13・14区をのぞくほぼ全域で前期末～中期後葉にかけての遺構・遺物が検出されている。竪穴住居・掘立柱建物なども検出されており、集落が存在したことが推測される。

古墳時代には３区とその周辺に古墳が造営される。いわゆる後期群集墳であるが、1号墳で石室から彩色壁画が発見された（市報862集）。

古代は主に浦江遺跡が位置する扇状地の東部、段丘崖近くに掘立柱建物がみられる。柱穴の１辺１m近い大型の堀方を持ち、一部布堀り状を呈する。すべて一定の方位を指向し、何らかの施設の存在が推測される。

中世には多くの掘立柱建物・溝がみられ、浦江遺跡が乗る扇状地に集落が形成されたことが推測される。前半期には１区・23区などに小規模な建物が散在している散村的状況であったものが後半期には15区・18区などに遺構が集中し、集村化の傾向を呈する。13区は残丘部分の調査だが、ここで中世末頃の小規模城郭が検出された。条里に沿って直線的に伸びる道路に直結し、折れを持たせて主郭に導く虎口をもつ構造である。

なお、市報第866集に未収録であった24区全景写真を次頁に掲載する。



24区全景

Fig.4　浦江遺跡群第5次調査区位置図

１．１区（東部）の調査

（１）調査概要

ここで報告するＩ区は、2004年度に報告した弥生中期の区画墓周辺の遺構である。Ｉ区は、早良平野の南西部、扇状地形の基部、室見川中流域西岸の標高40mあまりの段丘上に立地する（PL.1）。川岸との比高差は10m程度である。１区遺構配置図(Fig.14)に示すように、調査区は、区画墓南の道路予定地を境に地区を東西に２分した。これは担当者の異動によるもので、Ｉ区（東）とする。調査面積は3,553㎡である。

１区の北東に位置する区画墓は弥生中期中頃につくられたもので、25基の甕棺墓を長方形の土坑で囲む構造である。甕棺墓の墓域の北側は、崖面で崩落をうけているが中央の13号甕棺を中心に展開すると東西幅13m、南北21mの矩形の規格に復元される。甕棺墓群を囲む溝は、墓域の南東隅をみると南辺と東辺に沿って掘削された個々の土坑のつながりであることがわかる。本来は矩形の各辺にそって東西南北の各辺に沿って掘削された土坑がつながった結果である。

区画墓外周の南西部にある掘削を受けていない箇所は、陸橋としての機能をもつもので、ほとんどの甕棺墓の主軸が陸橋の方向性と同じ南北方向で重なる点は注目すべきである。陸橋に接続する区画墓の南西隅は、墓群の空白地帯となっている。このスペースは、葬送儀礼や墓前祭祀など状況に応じて機能した空間と理解できる。

PL.1　1区調査区全景（南より）

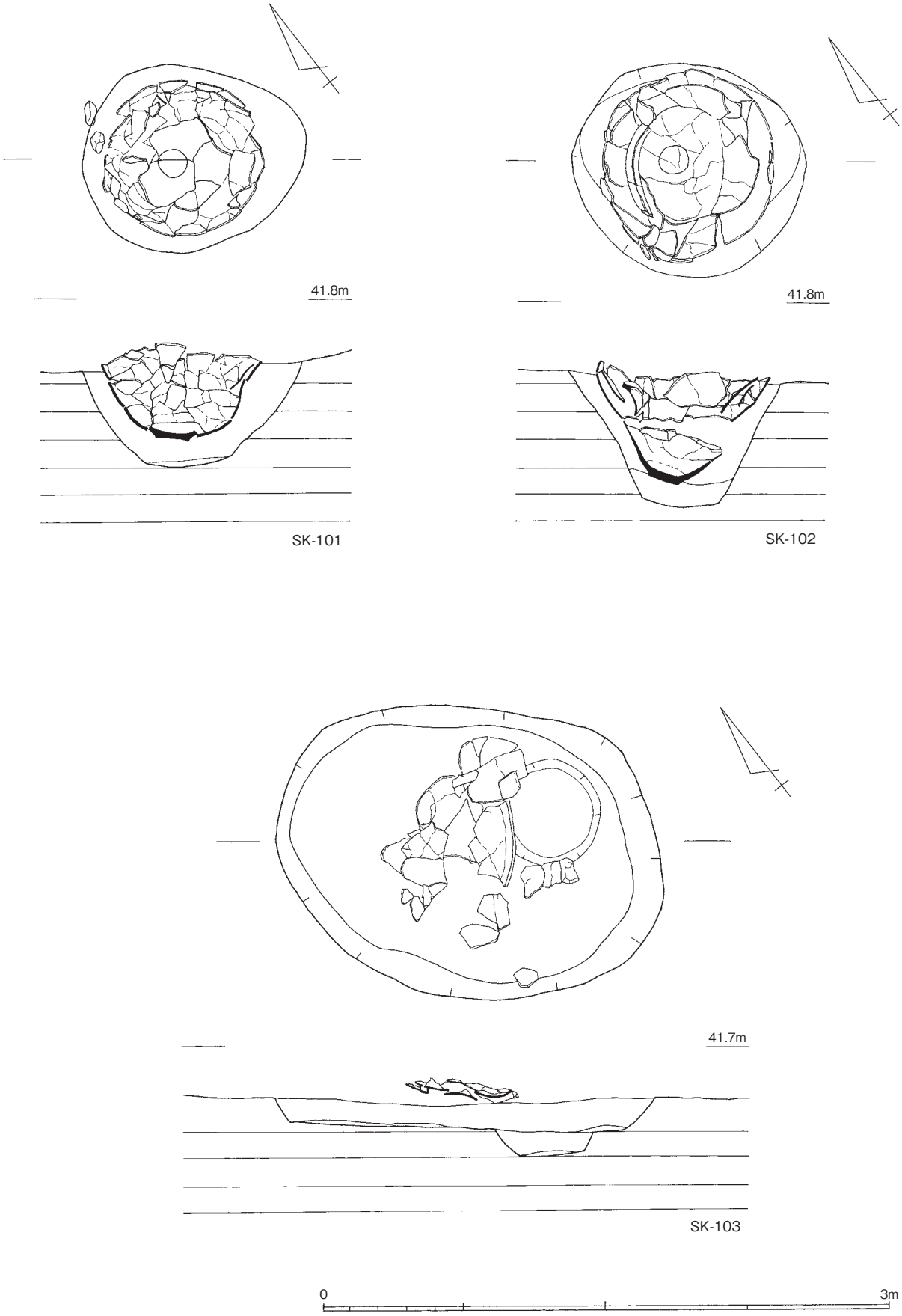


Fig.5　1区（東）SK101～103土坑実測図（1/20）

区画墓の北側は、谷が深く切り込んでおり、現在も浸食は進行している。谷の浸食開始時期は定かでないが、墓地の造営が始まった段階では、谷の開析は見られなかったと考えられよう。区画墓の詳細については埋蔵文化財調査報告書の863集「浦江遺跡　第５次調査２」を参照されたい。

区画墓の南側には弥生中期段階の集落が立地しており時期的に墓地が営まれた期間に先行する。また西側には前期末段階の３基の土坑が確認できたが、何れも撹乱を受けて原位置をとどめていない。

区画墓の南東にはコ字の溝に囲まれた、性格不明の土坑（SX-017）が存在する。溝から出土した土器は、区画墓の土坑から出土した土器と共通する器種が含まれており、両者の関係が注目される。

（２）遺構と遺物

区画墓に先行する土坑

区画墓の西側には前期末段階の土坑３基と埋土に炭や焼土を含んだ隅丸方形の土坑１基が確認された。各土坑から弥生土器が検出された。土器の形状から2基はもともと甕棺墓であった可能性がある。区画墓と区別するため、桁数を変えてSK-101、SK-102、SK-103、SK-104とよぶ。

SK-101（Fig.5、6・PL.12）

区画墓の西８ｍに位置する土坑で甕棺の底部が埋置された状態である。甕棺墓が削平を受けたものかもしれない。上部は削平を受けている。土坑のプランは楕円形で、土器は、土坑の底から10cm程度浮いた状態で埋設されている。

土器は、底部の立ち上がりから12cm程しか復元できなかった。底径１２ｃｍで、やや上底気味である。明灰色で、胎土は大粒の砂礫を含む。伯玄式から金海式古段階の甕棺の一部と思われる。

SK-102（Fig.5、6・PL.13）

SK-101の東南４ｍに位置する。上部は削平を受けている。土坑は円形に近く、土器の傾斜角は、直立気味である。

土器は、口縁部と底部について図化することができた。１の口縁部は、内側に内傾する粘土帯で肥厚する。口縁下端に刻目を施し、くびれ部に二条の沈線をめぐらす。２の底部は上げ底をなし、ハケ目調整痕をのこす。復元口径65cm、底径14cmをはかる。金海式古段階の甕棺の破片と思われる。

SK-103（Fig.5、7）

SK-102に南接する楕円形の土坑で、主軸方向の長さ1.35m、最大幅1.00m規模を呈している。上部はかなり削平をうけている。床面から浮いた状態で土器片が検出された。土坑内のピットは土坑の掘削以前のものである。

１は甕棺の口縁部で、口縁下に刻目をめぐらす。橙灰色で、粗い砂礫を含む。２は、甕棺の底部破片で、１と同一個体の可能性がある。壷の形状をとどめた伯玄式の甕棺である。

３は、小型甕の口縁部から胴部にかけてである。口縁部はいわゆる如意状を呈し、胴部上半に二条の沈線をめぐらす。褐色で、石英・長石の砂礫を含む。４は甕の上半部である。口縁部は如意状を呈し、胴部上半に二条の沈線をめぐらす。石英と長石の砂礫を多く含む。

５は大型土器の底部で、やや上げ底気味である。復元底径10.6cmをはかる。石英と長石の粗い砂礫を多く含む。金海式古段階の甕棺の底部か。６は土器の底部で、やや上げ底気味である。灰橙色で、胎土には長石・雲母粒を含む。壷の破片であろうか。７は甕の底部の破片である。底部は厚みがあり、外面にはハケ目が観察される。

SK-104（Fig.6、8・PL.14）

SK-103の南２ｍに位置する楕円形の土坑である。長軸1.75m、短軸1.15mをはかる。土坑は30cmあ

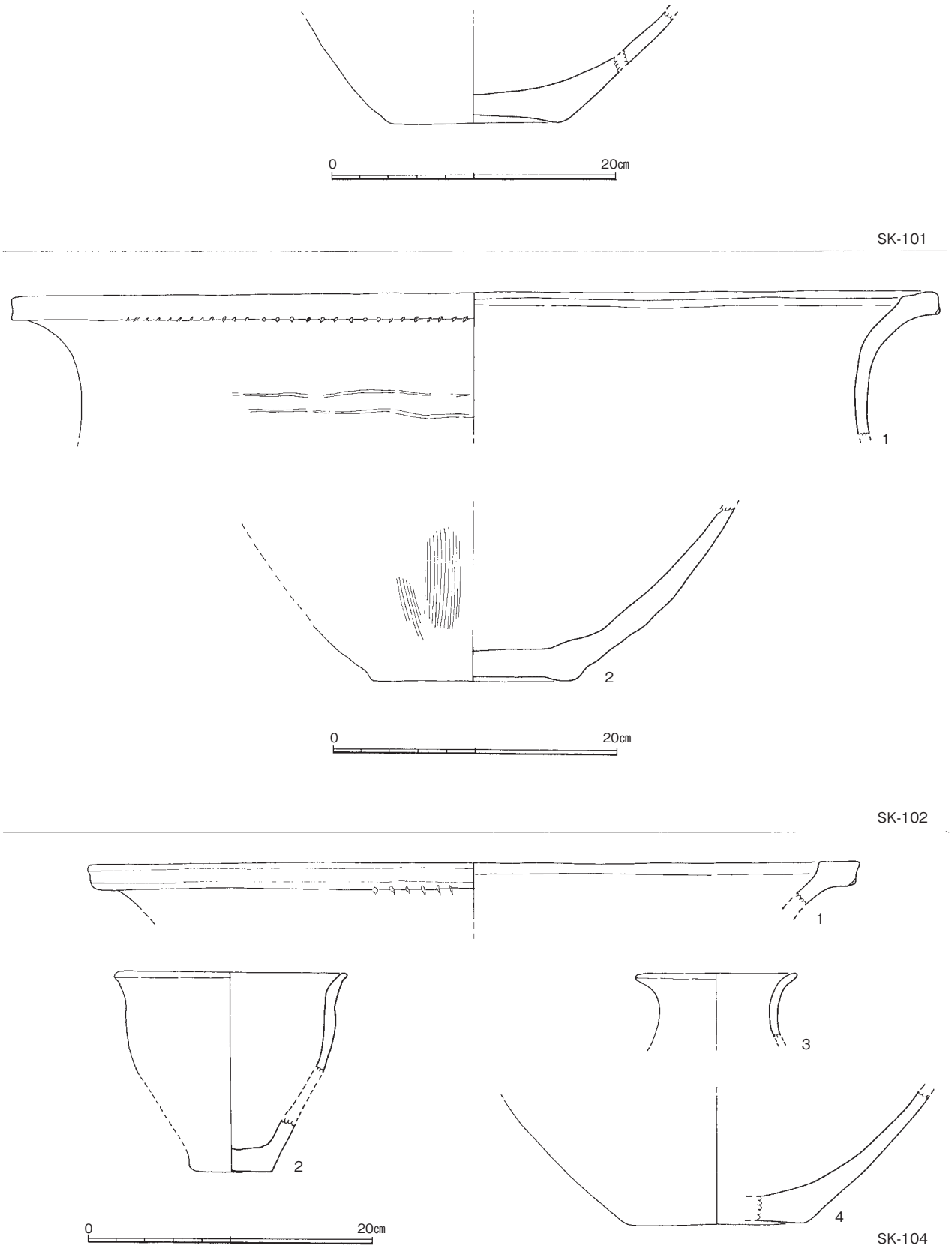


Fig.6　1区（東）SK101・102・104出土遺物実測図（1/4）

まりの深さで遺存しており、床面から数cm浮いた面に炭と焼土が約5cmの厚さで堆積していることから土器焼成遺構の可能性がある。

上面で検出された１の大型土器は、その特徴から金海式古段階の甕棺の破片である。４も甕棺の底部であろう。

炭と焼土層にともなって出土した土器片のなかで復元できたのは壷と甕各1点のみである。板付Ⅱ式新段階に比定できる。

SX-017（Fig.8、10・PL.5～11）

区画墓の中心から南東31mに位置する長方形プランの土坑とそれを囲むコ字形の溝状遺構。コ字形の溝は、遺構検出時に土器片の分布によって確認できた。断面逆台形で、溝底との比高差は深いところで20cm程度である。

溝に囲繞された範囲にトレンチを設定したところ全長3.2mの長方形プランの土坑が確認された。土坑断面は、不整形なＵ字形で地表からの深さは50～60cmである。土坑の西側には自然礫が並ぶが

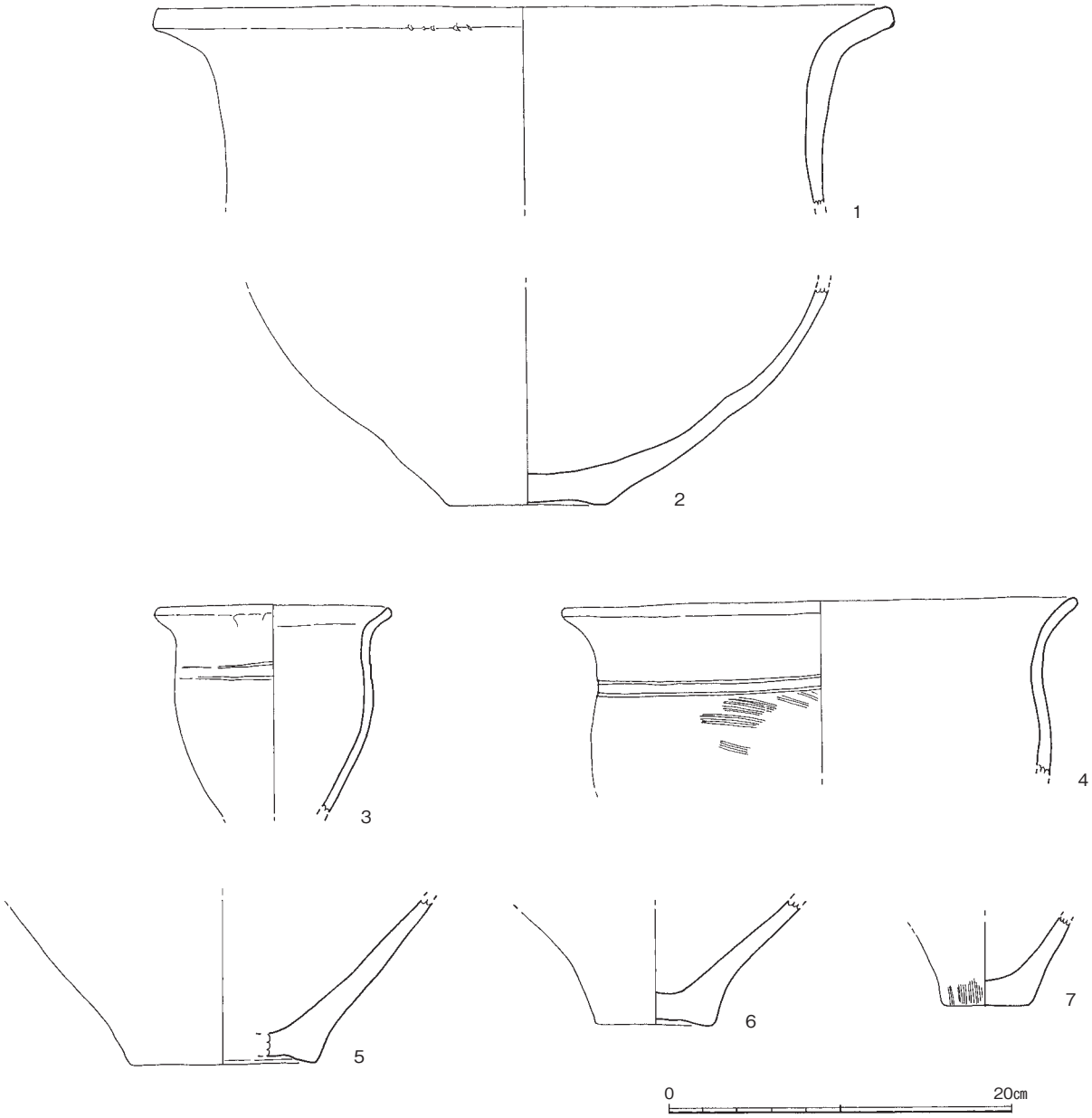
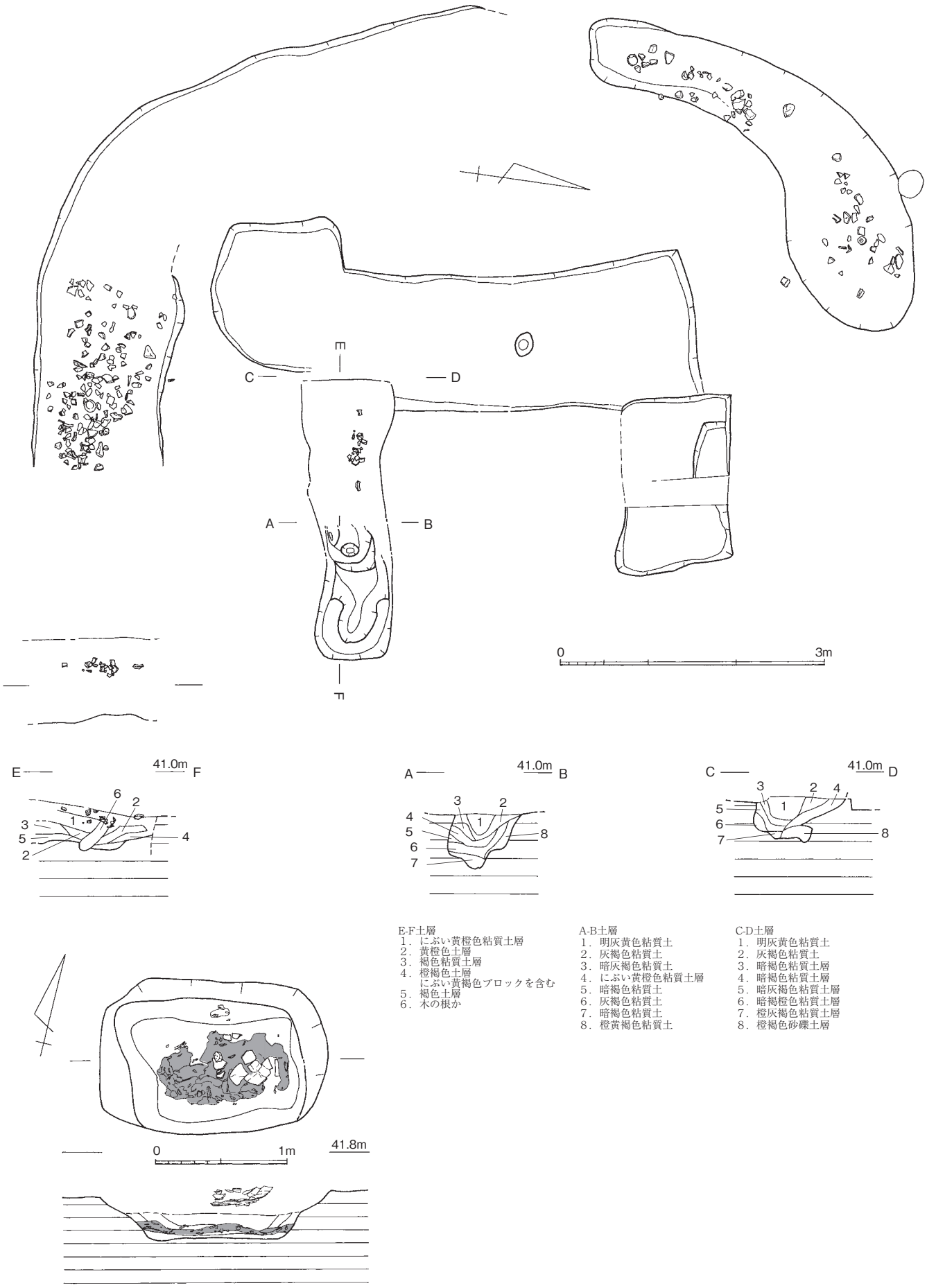


Fig.7　１区（東）SK-103出土遺物実測図（1/4）



E-F土層
1．にぶい黄橙色粘質土層
2．黄橙色土層
3．褐色粘質土層
4．橙褐色土層
　にぶい黄褐色ブロックを含む
5．褐色土層
6．木の根か

A-B土層
1．明灰黄色粘質土
2．灰褐色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．にぶい黄橙色粘質土層
5．暗褐色粘質土
6．灰褐色粘質土
7．暗褐色粘質土
8．橙黄褐色粘質土

C-D土層
1．明灰黄色粘質土
2．灰褐色粘質土
3．暗褐色粘質土層
4．暗褐色粘質土層
5．暗灰褐色粘質土層
6．暗褐橙色粘質土層
7．橙灰褐色粘質土層
8．橙褐色砂礫土層

Fig.8　SX-017、SK-104遺構実測図（1/60・1/40）

意図して配置されたものではない。土坑内の上層からは土器片が多く検出された。

SX-017は、長方形プランの土坑をコ字形の溝状遺構が囲むもので、いわゆる周溝状遺構とよばれるものの一種である。土坑は東西の長軸方向が、日向峠を向いていることから、当初は大柱を埋設するような階段状の掘り込みを期待したが、確認することはできなかった。次に埋葬施設を想定したが、横断面は地表から50～60cmの深さで不整形なＵ字形となっており、底から20cm程度の深さで段掘りにならなければ船底状の木棺の埋置とは考えがたい。

SX-017出土遺物（Fig.10）

SX-017の溝から出土した土器は、中期中頃が主体を占める。この中には筒形器台のように区画墓から出土した器種と共通する資料も含まれており、両者の関係性を考えるうえで重要である。

SX-017の溝は、コ字状を呈するものであるが遺物の分布はおよそ南北に分かれている。１～６は北側出土の資料で、７～23は南側出土の資料である。

１は広口壷の口縁部の破片である。２は逆Ｌ字口縁の甕で、口縁下に一条の三角突帯をめぐらす。３は逆Ｌ字口縁の甕で、屈曲部は２に比べて内側にせり出している。４は甕の底部で、上げ底をなすことから中期初頭の資料であろう。５・６は甕の底部で、底部外面は上げ底気味である。

７・８は広口壷の口縁部である。内面に粘土帯を肥厚させる。９は短頸壷の口縁部であろうか。10～13は逆Ｌ字口縁の甕で、13は口縁下に一条の三角突帯をめぐらす。口縁部の発達の度合いから10がもっとも古相を呈している。14・15は円筒形の器台である。16は筒形器台の破片である。中央に窓を切り出している。表面は摩滅のため灰白色の胎土だが、本来赤色顔料が塗布されていたのかもしれない。

17～23は甕の底部である。17～19は厚みをもっており中期前葉、20～23は中期中頃に比定される。

SK-005（Fig.9-1、13）

調査区中央の遺構が集中した箇所で検出された不整形の土坑で、長軸方向の長さ2.20m、最大幅1.50mの規模を呈している。上部はかなり削平をうけている。床面から浮いた状態で土器片が検出された。

図化できたのは（Fig.13）の17・18である。17は壷の口縁から胴部上半にかけてで、口縁端部は三角形を呈する。頸部に三角突帯がめぐる。18は壷の胴部から底部にかけての破片である。中期前葉に比定される。

SK-024（Fig.9-1、12）

調査区の南東部で検出された不整形の土坑で、東西方向の長さ1.60m、南北幅1.50mの規模を呈している。複数の柱穴が重なり合っているようである。

出土遺物は、12は甕の底部破片。13は逆Ｌ字状の甕の口縁部である。中期中葉に比定される。

SK-003（Fig.9-1）

調査区中央の遺構が集中した箇所で検出された長楕円形の土坑で、長軸方向の長さ1.92m、最大幅0.74mの規模を呈している。上部はかなり削平をうけている。床面直上で土器片が検出された。

SK-025（Fig.9-1）

調査区の南東部で検出された長楕円形の土坑で、長軸方向の長さ2.0m、最大幅0.74mの規模を呈している。土坑の南側に平たい礫が重なっている。

SK-018（Fig.9-1）

調査区中央の遺構が集中した箇所で検出された不整形の土坑で、長軸方向の長さ2.66m、最大幅1.80mの規模を呈している。床面から少し浮いたレベルで礫や土器片が検出された。

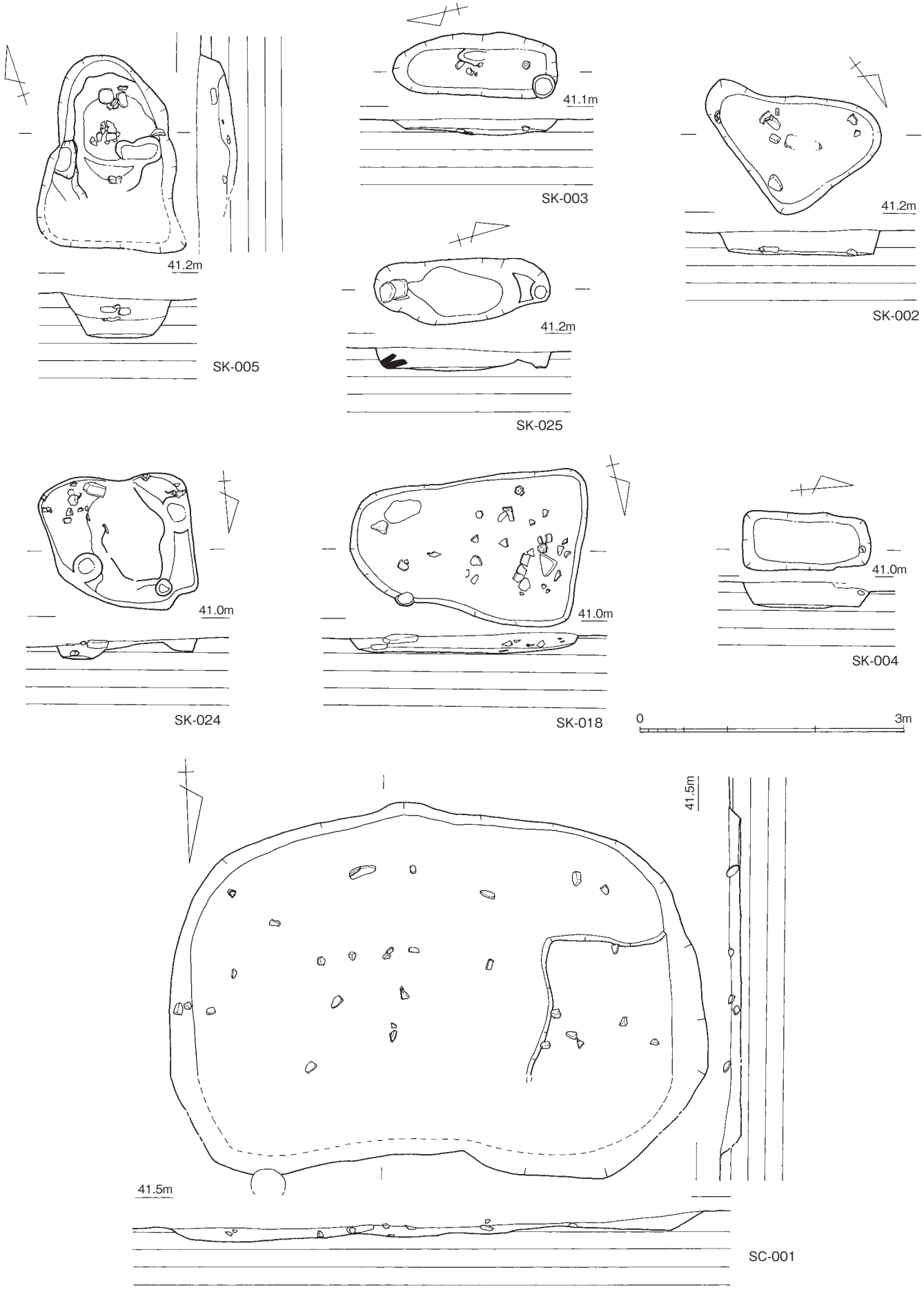
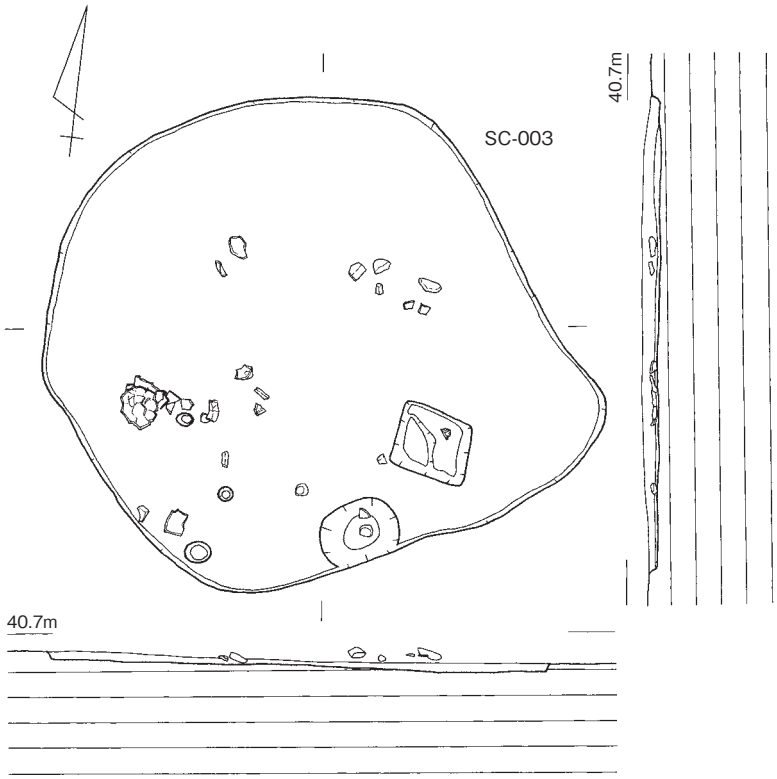


Fig.9-1　1 区（東）出土遺構実測図（2）（1/60）



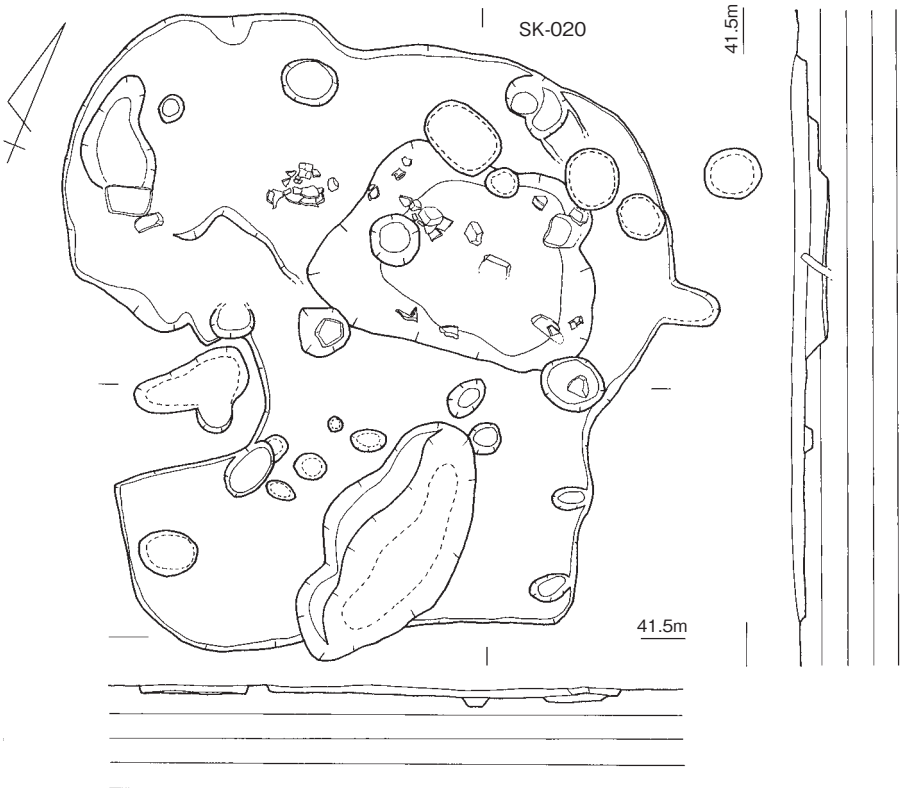


Fig.9-2　1 区（東）出土遺構実測図（3）（1/60）

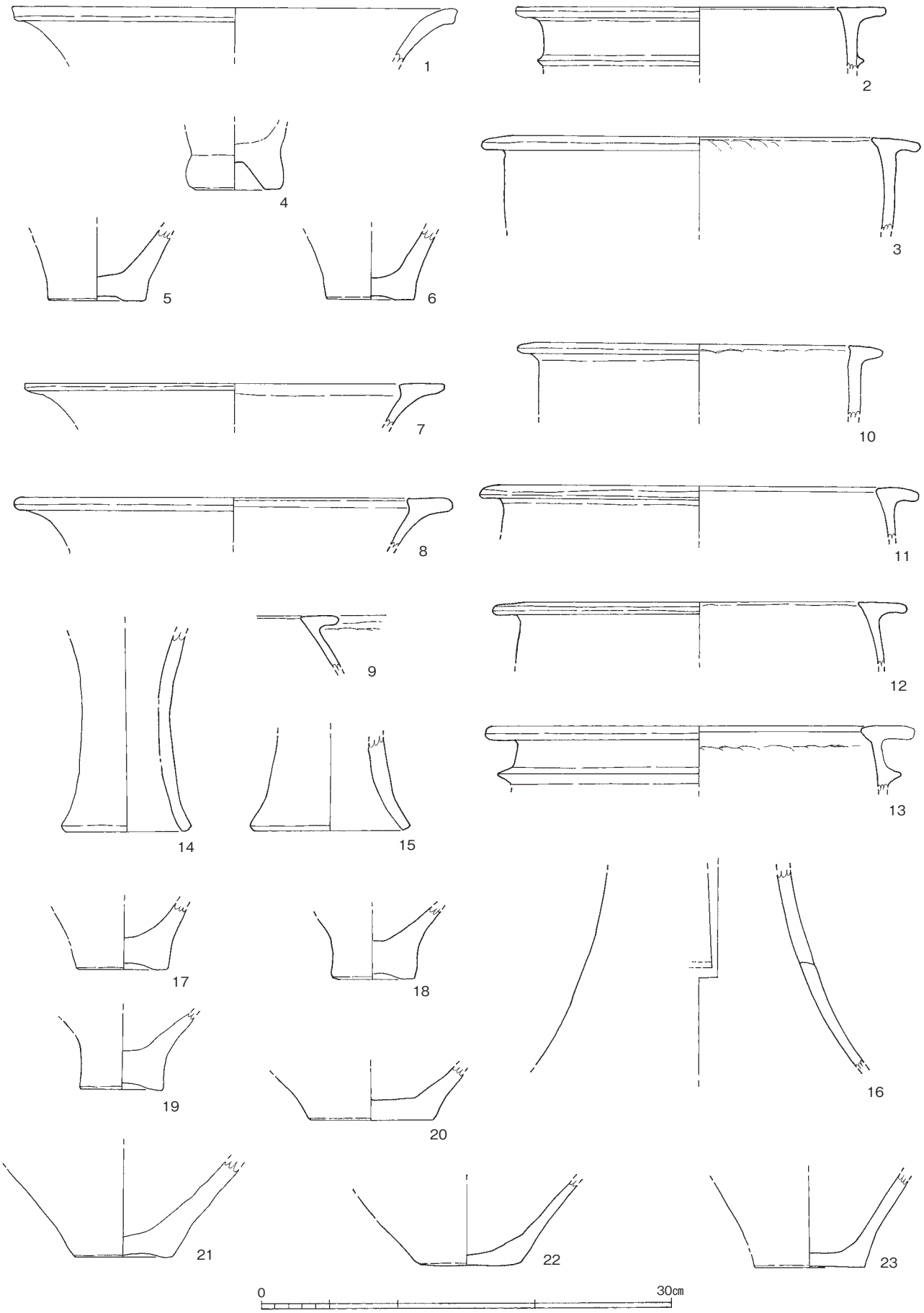


Fig.10　1区（東）出土遺物実測図（1）（1/4）

SK-002（Fig.9-1、10）

調査区中央の遺構が集中した箇所で検出された不整三角形の土坑で、長軸方向の長さ2.0mをはかる。床面直上で礫や土器片が検出された。

出土遺物で図化できたのは（Fig.13）の16のみである。逆Ｌ字口縁の甕で、中期中葉に比定される。

SK-004（Fig.9-1、10）

調査区中央の遺構が集中した箇所で検出された長方形プランの土坑で、長軸方向の長さ1.46m、最大幅0.71mの規模を呈している。床面から浮いたレベルで礫や土器片が検出された。

SC-001（Fig.9-1、13）

調査区中央の遺構が集中した箇所で検出された不整円形の土坑で、住居跡としたが主柱穴などは検出されていない。長軸方向の長さ6.15m、最大幅4.15mの規模を呈している。かなり削平を受けており、壁の立ち上がりは10cm程度を残すのみである。床面から少し浮いたレベルで礫や土器片が検出された。

図化できたのは（Fig.13）の10のみである。小型の杯で、銅部に突帯がめぐる。中期前葉に比定される。

SC-003（Fig.9-1、11）

調査区中央の遺構が集中した箇所で検出された不整円形プランをもつ住居跡である。しかし主柱穴などは検出されていない。長軸方向の長さ6.15m、最大幅4.15mの規模を呈している。壁の立ち上がりは10cm程度を残すのみで、かなり削平を受けている。住居内の方形と円形のピットも床面とのレベル差は10cmくらいしかない。床面から少し浮いたレベルで礫や土器片が検出された。

出土遺物　1～10の10点を図示した。１は蓋形土器。２は焼成前の穿孔がある甕の底部。３～５は逆Ｌ字状を呈する甕の口縁部で、なかでも３は古い様相をとどめている。５は傾きがより平坦になるかもしれない。口縁下に一条の三角突帯をめぐらす。６は偏球形胴部をもつ壷の底部。以上土器には中期前葉の特徴がみられる。

７は身の中央に鎬が通る有茎の磨製石剣。先端部を欠き、現存長10･0cm、身幅は最大で3.3cmをはかる。関部は下端に向かって傾斜し短い茎部を形成する。８は磨製石斧の刃部の破片である。現存長10.0cmで、刃部の幅は6.2cm。断面は長楕円形を呈する。石材はいわゆる玄武岩である。９は、完形の磨石。長軸10.0cmで、幅は8.9cmの楕円形を呈する。10は粘板岩製の砥石で、４面ともよく使いこまれている。

SK-020（Fig.9-1）

調査区のやや南側で検出された不整形なプランをもつ土坑である。南北5.0m、東西幅4.75mの規模を呈している。壁の立ち上がりは10cm程度を残すのみで、かなり削平を受けている。いくつかの土坑やピットと切り合っているが、床面とのレベル差は10cmほどしかない。床面から少し浮いたレベルで礫や土器片が検出された。

その他の遺物（Fig.11～13）

11～14（317遺構）、15～18（314遺構）はそれぞれ一括遺物である。11は偏球形の胴部をもつ壷の底部か。12は大型壷の底部。13は甕棺の底部破片であろう。14は、太形蛤刃石斧の基部の破片。玄武岩製で、折損した後も転用石器として使われた可能性がある。現存長13.3cmで、幅7.6㎝、厚さは約5cmをはかる。

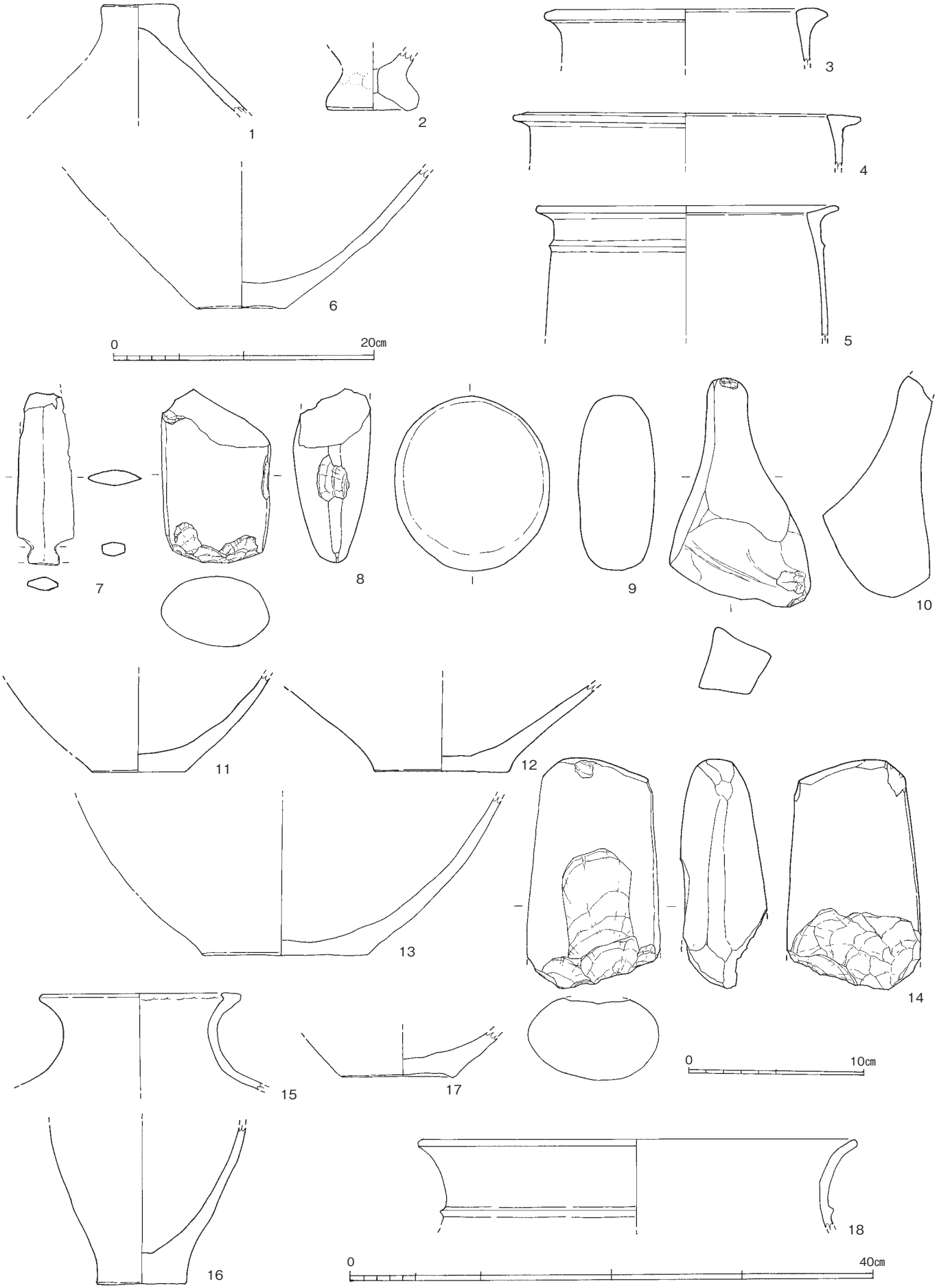


Fig.11　1区（東）出土遺物実測図（2）（1/3・1/4）

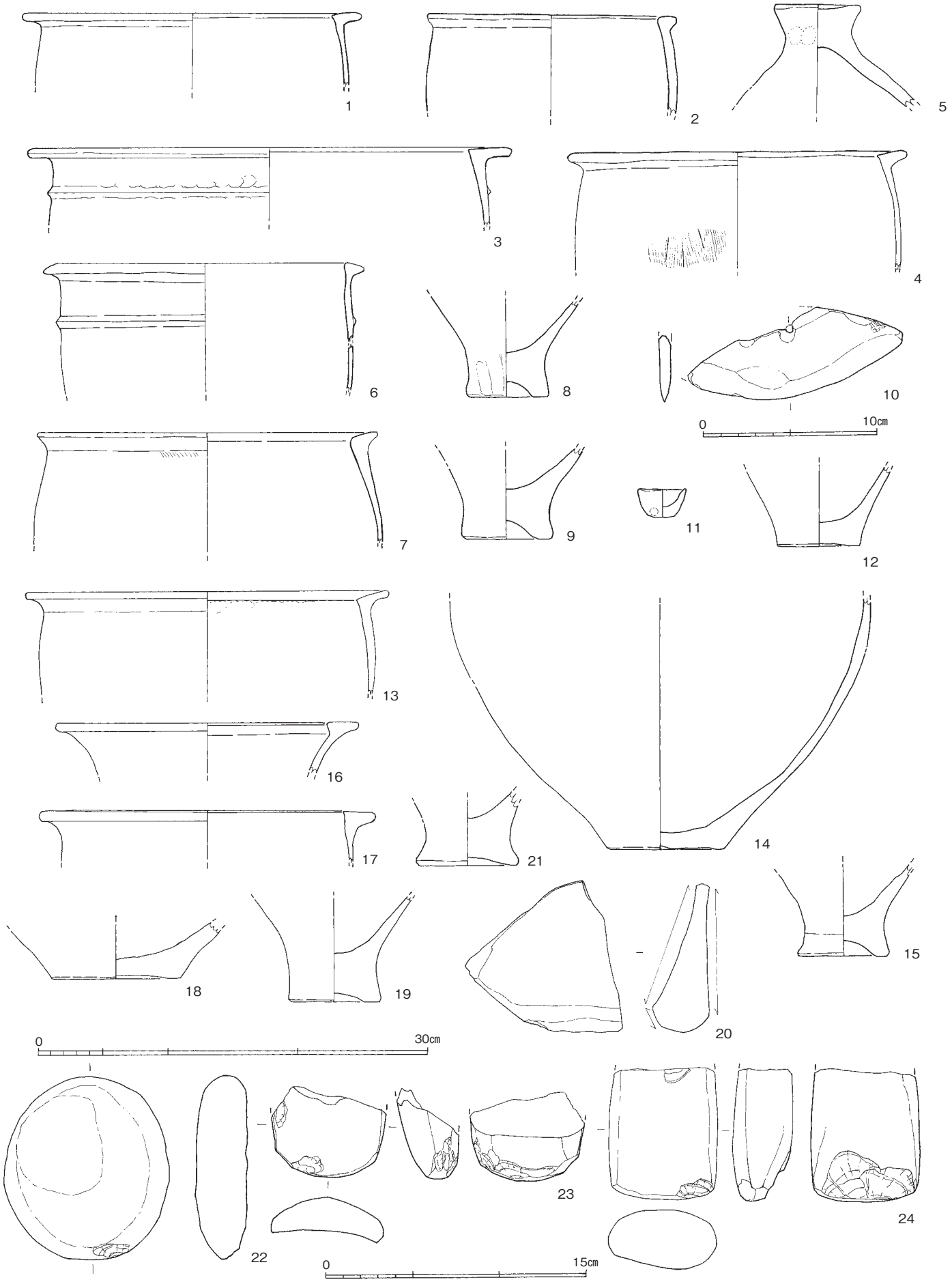


Fig.12　1区（東）出土遺物実測図（3）（1/3・1/4）

15は、壷の口縁から頸部の破片である。口縁端部は内側に突出している。中期前葉に比定される。16は甕の胴部から底部にかけての破片。現存高12.1cm、底径6.6cmをはかる。17は立ち上がりから壷の底部であろうか。18は大型の壷の口縁部と思われる。

(Fig.12) １～５（SK-11）１～４は甕の口縁部である。２は中期初頭の特徴をもつ。１・３・４は逆Ｌ字状を呈している。５は蓋形土器の頂部である。

６～10は（018遺構）６・７は甕の口縁部の破片である。８・９は甕底部の破片で、いずれも上げ底を呈している。10は石包丁の破片である。刃部は片方の面に使い込まれた痕跡がうかがえる。

11は（020遺構）手捏ねの小型の鉢。このほか22の磨石が出土している。

14・15は（169遺構）14は壷の胴部から底部にかけての破片である。15は上げ底を呈する甕の低部破片。中期初頭に比定される。

16～20は（302遺構）16は広口壷の口縁部で、口縁の平坦面は内側に突出している。17は逆Ｌ字状を呈する甕の口縁部。18は大型壷の底部であろう。19は甕の底部で、上げ底気味で厚みのあるつくりである。20はかなり使い込まれた砥石の破片である。土器は中期前葉に比定される。

21（036遺構）は、上げ底の甕の底部である。中期前葉に比定される。

23（172遺構）は、石斧の刃部の破片である。

24（319遺構）は、石斧の刃部の破片である。断面は長楕円形を呈する。

(Fig.13) １（308遺構）は、ほぼ全形が復元できる壺形土器である。頸部に浅い沈線をめぐらす。中期初頭の特徴をもつ。

２（304遺構）は、逆Ｌ字状を呈する甕の口縁部である。

３（313遺構）は、蓋形土器の頂部である。

４（310遺構）は、高杯の脚部の破片である。

５～７（316遺構）は、付近で表面採集された資料である。５・６は甕の上げ底の底部である。７の小型壷はほぼ完形である。中期前葉に比定される。

８（038遺構）は、甕の口縁部。小片のため傾斜は不確定である。

９（305遺構）は、上げ底を呈する甕の底部。中期前葉に比定される。

11・12は検出面出土の砥石の破片。

13（301遺構）は、柱状片刃石斧である。全長7.7cm、幅2.0cmで厚みは約2.4cmである。

14は調査区西側で検出された完形の石斧。蛇紋岩系の石材を使用する。全長11.6cm、幅4.2cmで厚みは約1.7cm、断面は扁平で、刃部はわずかに一方に偏っている。

小　結

１区（東部）の調査区は北から東が崖面に面している。検出された遺構のうち住居跡や柱穴などの集落は、おもに南側に集中する傾向がみられる（Fig.14）。住居跡の壁面の遺存の悪さから、遺構面はかなり削平を受けていることがわかる。SC-003の南西の円形住居プランも検出時には確認できたものの、調査の段階で壁面の立ち上がりを確認することはできなかった。また今回、土坑として報告した遺構についても住居跡内の土坑が含まれている可能性がある。住居跡や土坑から出土した土器は、中期前葉から中頃にかけての時期が主体を占めている。

北半の調査区で注意されるのは、区画墓とSX-017とした周溝状遺構との関係である。周溝部から出土した土器は、区画墓を囲む溝（土坑がつながったもの）と時期や器種が共通しており、墓の方位と土坑主軸の関連など弥生中期段階の墓制を考えるうえで興味ある問題を含んでいる。

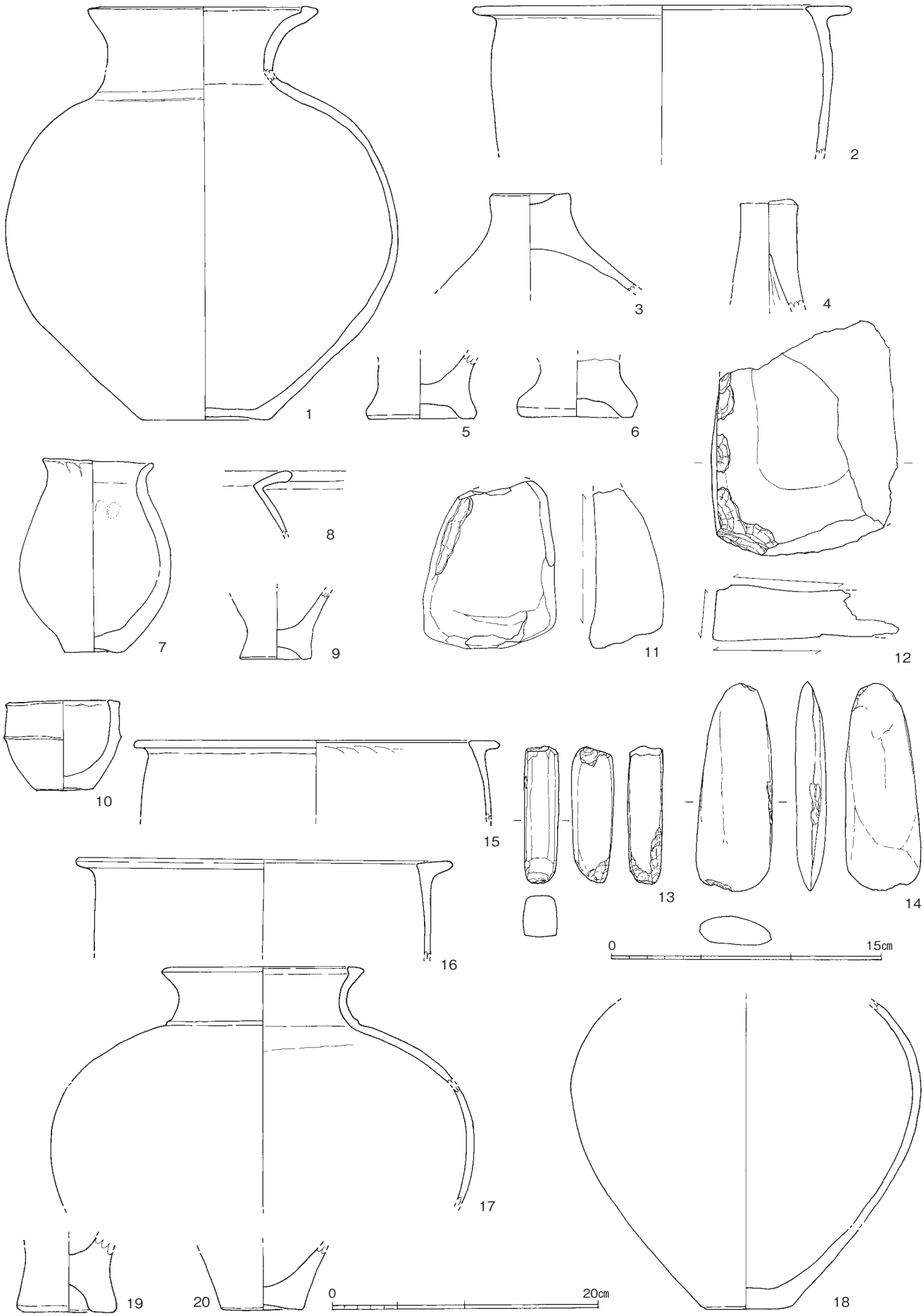
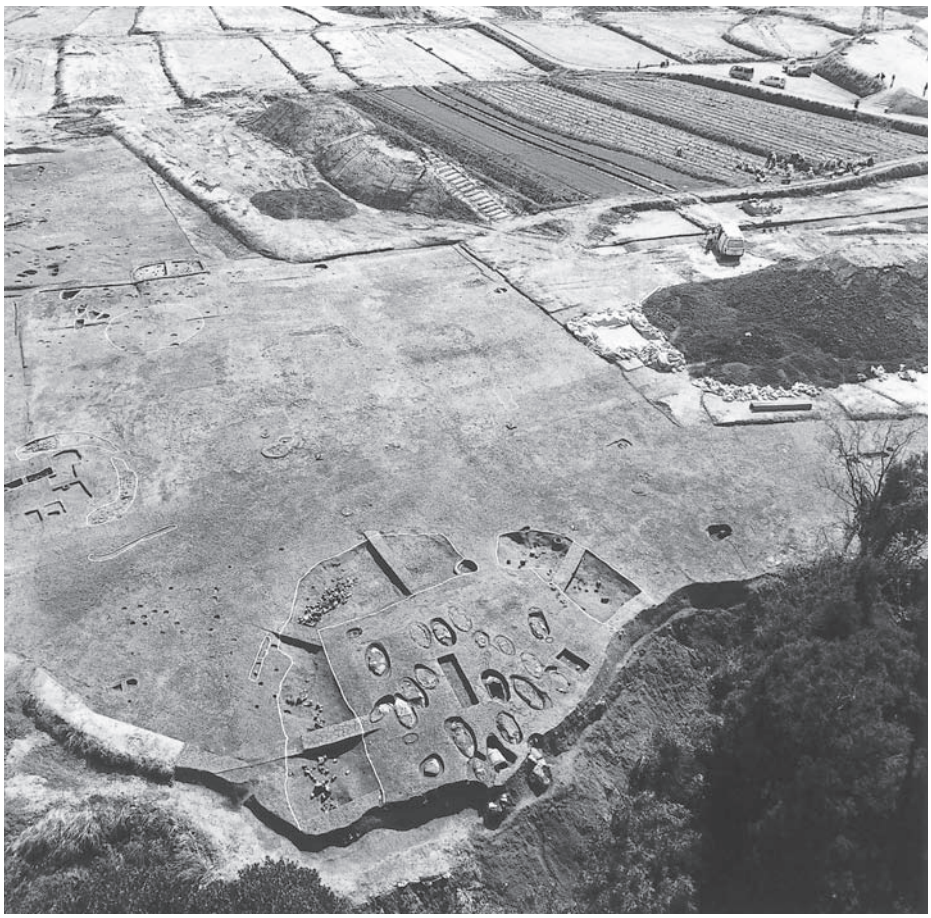


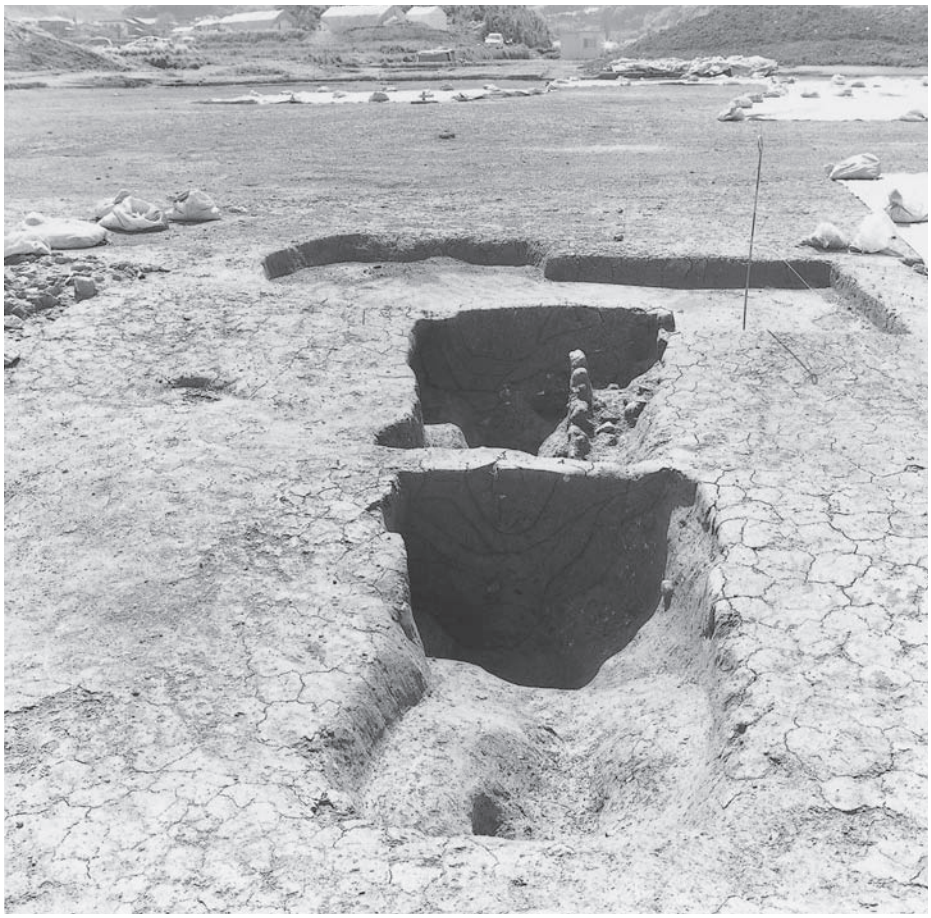
Fig.13　1区（東）出土遺物実測図（4）（1/3・1/4）

PL.2　1区調査区全景（南東より）

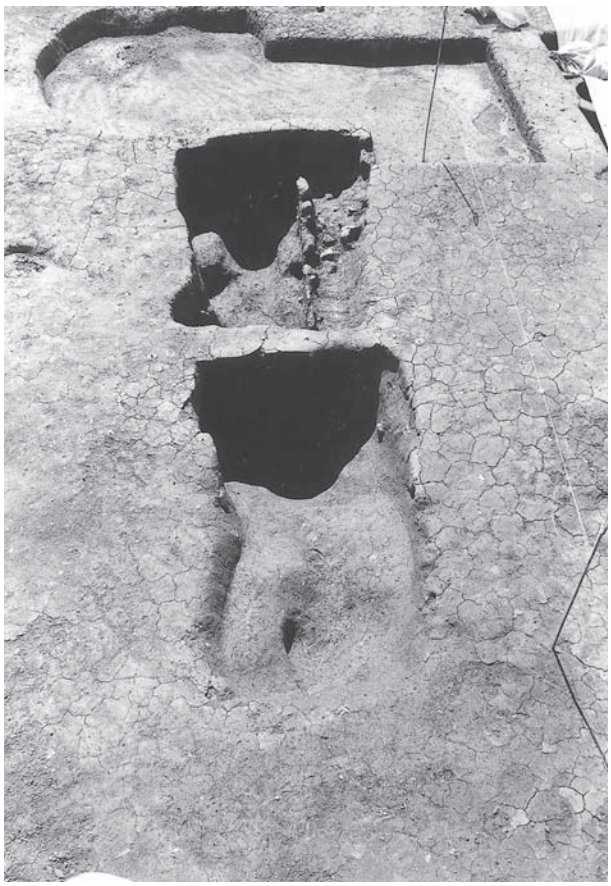
PL.3　1区（東）調査区全景



PL.4　1区（東）調査区全景（北より）



PL.5　SX-017（東より）



PL.6　SX-017（東より）

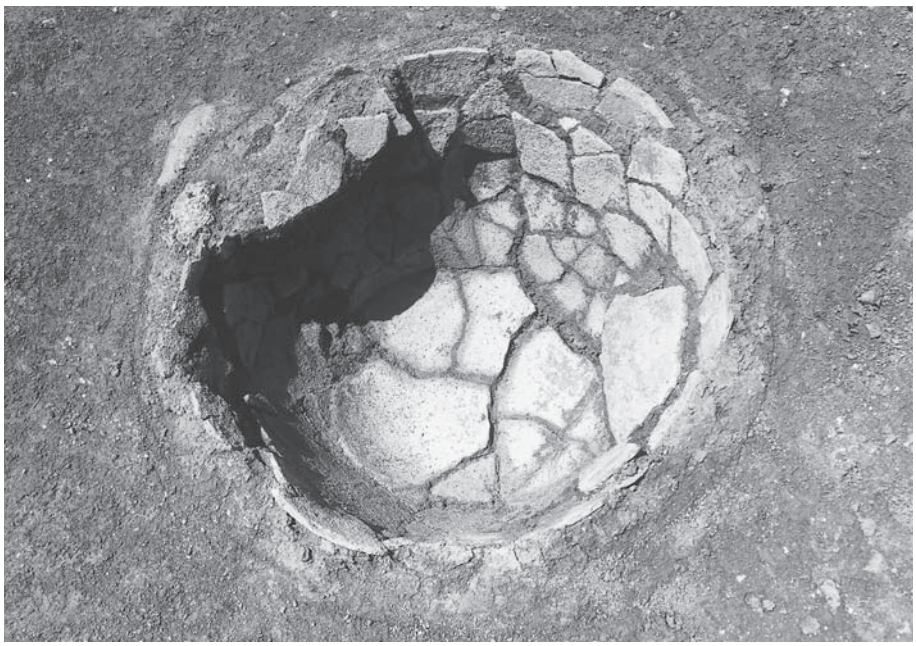
PL.7　SX-017（東より）

PL.8　SX-017土層（A-B）

PL.9
SX-017土層（C-D）

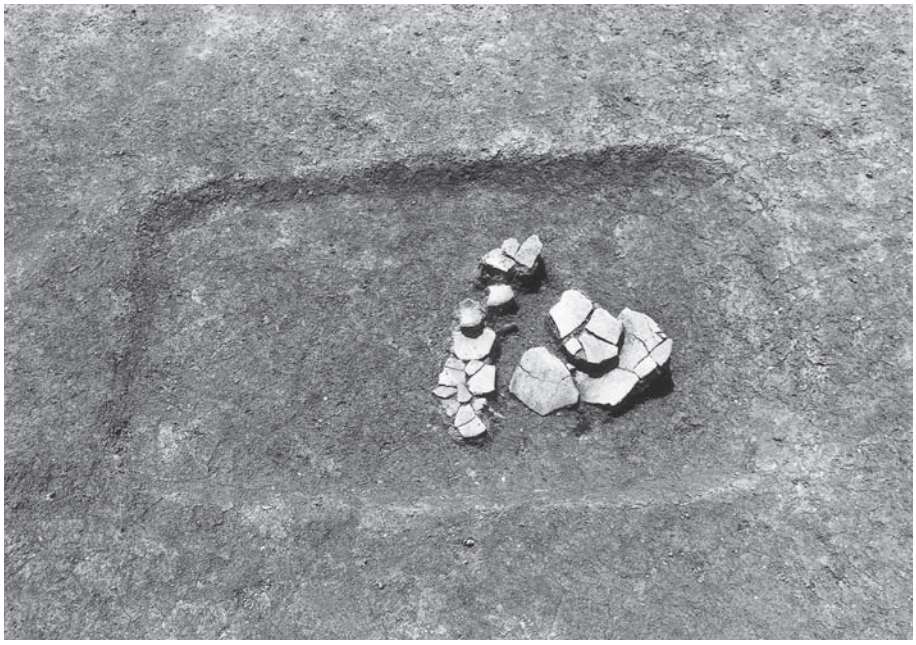
PL.10
SX-017土層（E-F）

PL.11
SX-017土層（E-F）



PL.12
SK-001（南より）

PL.13
SK-102（北より）



PL.14
SK-104（南より）

Fig.14　1 区調査区遺構配置図（1/400）

１区（西）の調査

１．調査概要

１区は、浦江遺跡群第５次調査地の北東部分に位置する。１区の東部は2002年の調査開始後はやくから調査に着手し、墳丘区画墓が検出されている（市報863集）。一方西部の調査については同年12月に入ってからの着手であり、まったく個別に調査が進行した。

１区（西）での検出遺構は、掘立柱建物５棟・溝４条である。このほかに多くの柱穴、ピットを検出したが、建物を検出するには至らなかった。遺物は少なく遺構の時期を確定するのは困難である。掘立柱建物の時期は中世で12～13世紀頃、溝は西部の３条が中世、東部検出の1条が弥生時代中期後半頃と思われる。

２．遺構と遺物

①掘立柱建物（SB）

SB4001（Fig.16・PL.1-2）調査区北西部で検出した。長軸を南北方向に持つ２間×３間の側柱建物である。柱穴は不整円形を呈し、径0.2m～0.3m、深さ0.3～0.5mを測る。柱痕跡は、確認できなかった。柱穴の間隔は、中心同士を結ぶと長軸方向の柱筋で1.6～2.1m、短軸方向で1.5～2.1mを測る。

出土遺物（Fig.18）１は、土師器小皿である。小片だが、口径9.6cmに復元できる。外底面には回転ヘラ切り痕と板状圧痕が観察される。胎土は精良で、焼成は良好である。

SB4002（Fig.16・PL.1-3）調査区西部、掘立柱建物SB4003に近接して検出した。ほぼSB4003の柱筋に平行なそれをもつ２間×２間の側柱建物である。柱穴は不整円形を呈し、径0.2m～0.4m、深さ0.15～0.5mを測る。南側中央の柱穴が比較的小さい。柱痕跡は、確認できなかった。柱穴の間隔は、中心同士を結ぶと1.5～1.9mを測る。

出土遺物（Fig.18）３は、瓦器である。小皿で1/2個体残存し、復元口径10.6cm・器高1.7cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。胎土は精良で焼成は良好である。４は、土師器である。小皿の小片と思われる。器壁は磨滅し調整は不明瞭。外底面はヘラ切りか。胎土は精良で焼成は良好である。

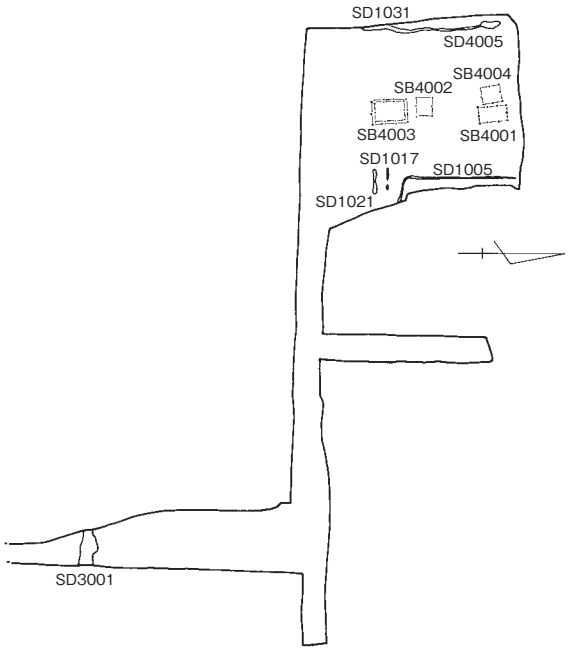


Fig.15　１区（西）遺構配置模式図

SB4003（Fig.17）調査区西部で検出した。長軸を南北方向に持つ２間×３間の側柱建物である。周囲に同様の規模を持つ柱穴が列をなし柱筋にほぼ平行に巡っており、四面に庇が付属する建物と思われる。柱穴は不整円形を呈し、主柱穴・庇を構成する柱穴ともで径0.2m～0.3m・深さ0.2～0.5mを測る。柱痕跡は確認できなかった。主屋の柱穴の間隔は、中心同士を結ぶと長軸方向の柱筋で2.0～2.2m、短軸方向で1.9～2.0mを測る。庇部の柱穴の間隔は長軸方向で2.1～2.9m、短軸方向で2.2～2.5mを測る。

出土遺物（Fig.18）２は、土師器小皿である。2/3個体残存し口径9.4cm、器高1.2cmを測る。外底面に回転糸切り痕および板状圧痕が観察される。胎土は精良

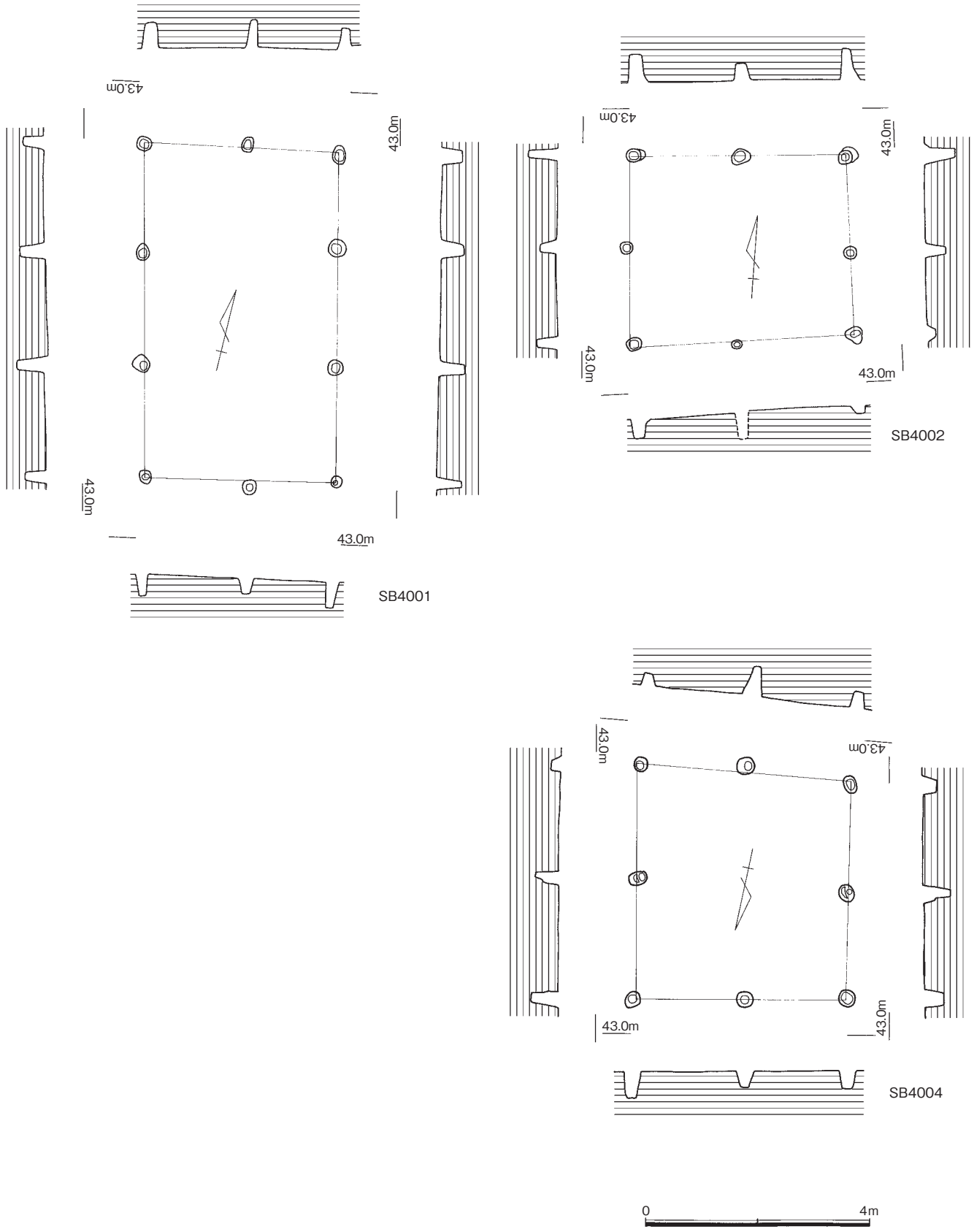


Fig.16　1区（西）SB4001・4002・4004実測図（1/100）

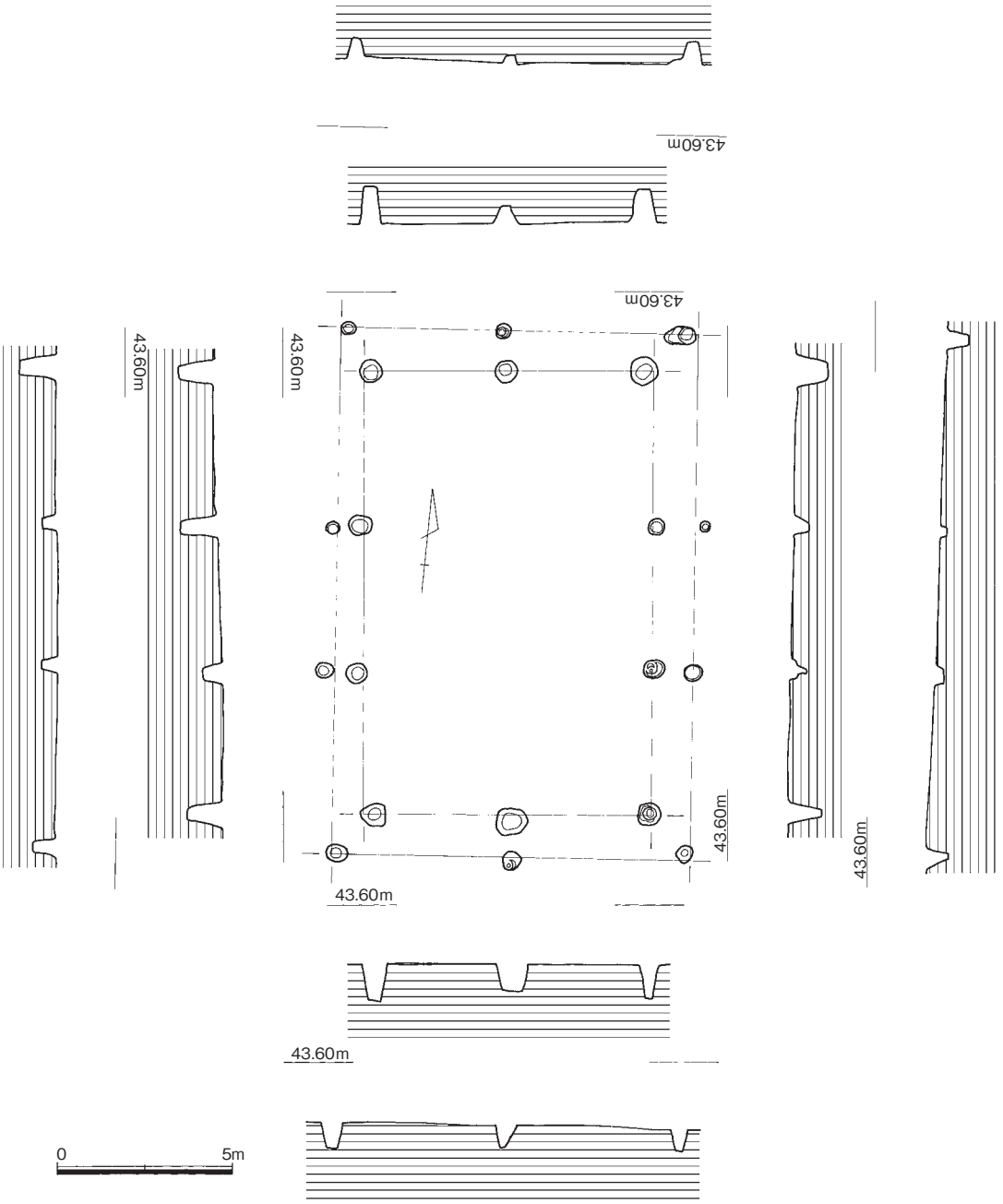


Fig.17　1区（西）SB4003実測図（1/100）

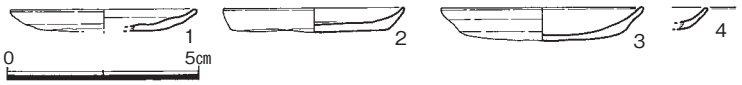


Fig.18　1区（西）掘立柱建物出土遺物実測図（1/4）

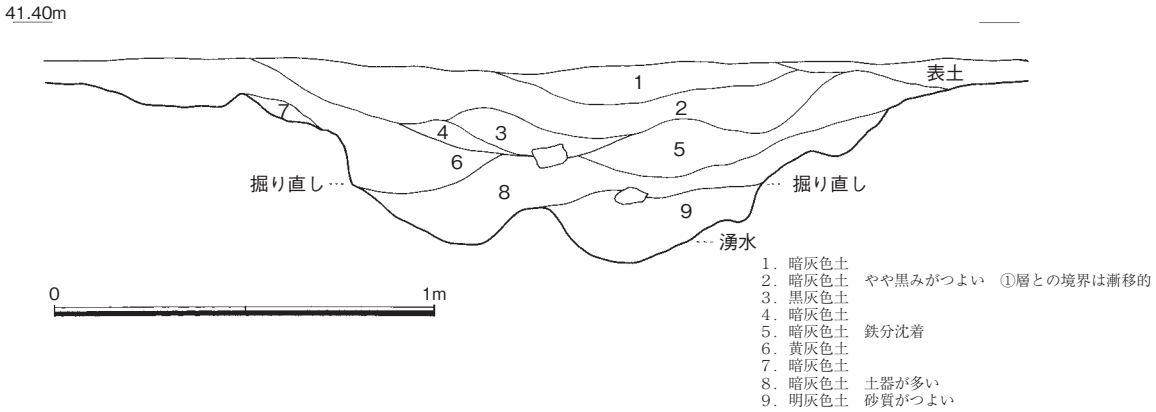


Fig.19　１区（西）SD3001土層断面実測図（1/40）

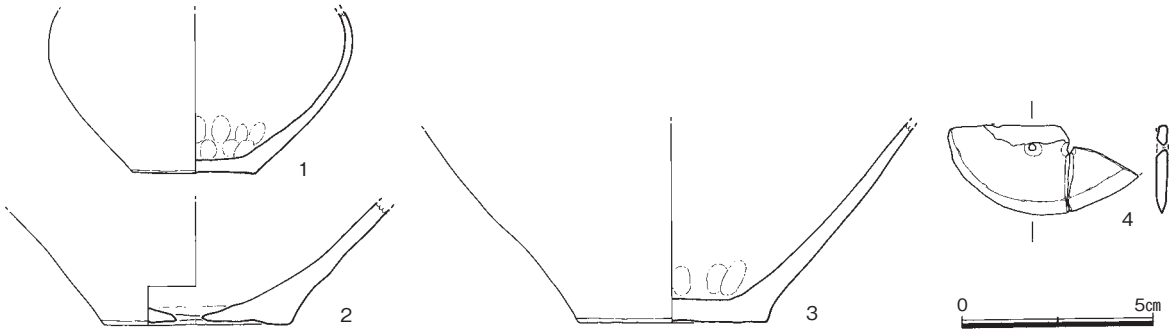


Fig.20　１区（西）SD3001出土遺物実測図（1/4）

で焼成は良好である。

SB4004（Fig.16）調査区北西部にて検出した2間×2間の側柱建物である。SB4001に柱筋がほとんど接するほど近接し、先後関係があると推測される。柱穴は不整円形または楕円形を呈し、長径0.25m～0.4m、深さ0.2m～0.5mを測る。柱痕跡は、確認できなかった。柱穴の間隔は、中心同士を結ぶと長軸方向の柱筋で1.8～2.2mを測る。遺物は、出土しなかった。

②溝（SD）

SD3001（Fig.19）調査区東部、19区と接続する部分で検出した。ほぼ次北に直交して掘られた溝で、幅1.8～3.8m、深いところで0.5mを測る。上端部のプランは不整で、底面は凹凸が多い。

土層断面図をFig.19に示す。最下層の９層は砂質が強く、SD3001は掘削当初は流水があったと推測される。２カ所に不整合がみられ、掘り直しが２回以上あったことも推測される。遺構検出面から－0.48m付近で湧水がみられる。用水路または排水溝として掘削された溝であると推測される。

出土遺物（Fig.20）１～３は、弥生土器である。１は壺形土器である。底部から胴部にかけての破片で、外面が赤彩されていた可能性がある。底径6.3cm、胴部最大径15.9cmを測る。内底面に指押さえ痕が観察される。胎土は精良で焼成は良好である。２は、甕である。底部の破片で、底径9.6cmを測る。底部中央付近に焼成前に施した穿孔がみられる。器壁は磨滅するが、胎土は精良で焼成は良好である。３は甕の底部である。底径9.8cmを測る。器壁は磨滅するが内底面に指押さえ痕が観察される。胎土は精良で焼成は良好である。４は、石製穂摘具である。3/4個体残存し幅6.7cmを測る。背部から1.3cm内側に2カ所両面から穿孔を施す。欠損のため紐ずれの痕跡などは観察できない。石材は頁岩質である。

（Fig.22）１は、投弾である。土製で下部を欠損する。全体を指押さえで成形しており、最大径1.8cm、残存長3.8cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。

SD1005（Fig.15）調査区西部にて検出した。調査区東壁から約５m西に延びたのちほぼ磁北方向に屈曲し約23mまで検出した。ここで切れるのは削平のためと推測され、本来はさらに北に延びるものと思われる。平面プランはほぼ一定しており幅0.2～0.5m、底面はほぼ平坦で深さ0.15～0.1mを測る。流水の痕跡は看られなかった。掘立柱建物SB4002・4003と方位がおおよそ同一で、屋敷地の区画溝と推測される。

出土遺物（Fig.21）３は、白磁碗である。口縁部の小片で、口径15.8cmに復元される。釉は透明感ない淡緑色を呈し、胎土は精良堅緻で焼成は良好である。４は瓦器碗である。口縁部の小片で、口径19.2cmに復元される。口縁の下部2.0～2.5cmまで燻しがかかる。２次的に被熱している可能性がある。胎土は精良で焼成は良好である。

SD1017（Fig.15）調査区西部にて検出した。磁北に対しほぼ直交する溝で延長約2.6m、幅0.2～0.4m、深さ0.1mを測る。削平された溝の残欠か。

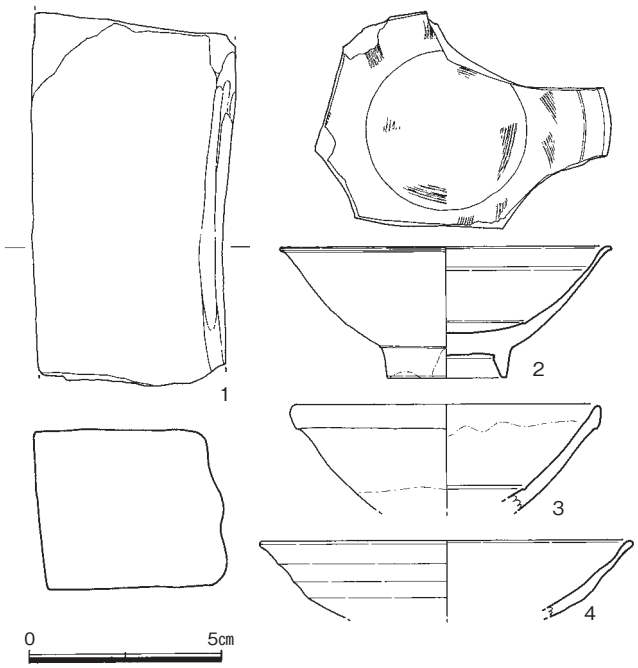


Fig.21　１区（西）SD1005・1017・1021出土遺物実測図（1/4）

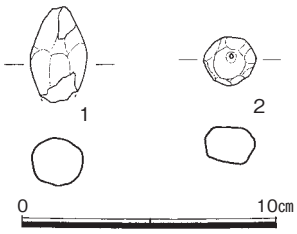


Fig.22　１区（西）出土土製品実測図（1/3）

出土遺物（Fig.21）２は、白磁碗である。1/2個体残存し復元口径16.8cm、器高6.9cm、底径6.1cmを測る。内面に劃花文を有し、釉は透明感ある淡緑色を呈する。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。

SD1021（Fig.15）調査区西部にて検出した。磁北に対しほぼ直交する溝で、SD1017の南に位置する。延長約5.4m、幅0.4～0.7m、深さ0.15mを測る。削平された溝の残欠か。

出土遺物（Fig.21）１は、砥石である。砂岩質の石材を用い、残存長19.7cmを測る。長辺を４面とも使用し、うち１面に２条のゆるい溝状のくぼみがみられる。

SD4005（Fig.15）調査区西端部にて検出した。調査区西壁にある近世の溝に切られるが、そこから約3m北東に延びたのちほぼ磁北方向に屈曲し約17mまで検出し、たまり状の落ち込みに繋がる。平面プランは土壙をつなげたような部分もあるが幅0.4～1.0m、深さ0.15～0.1mを測る。遺物は出土しなかったが、近世の水路に切られることからSD1005同様屋敷地の区画溝と推測される。

③柱穴・ピットからの出土遺物（Fig.23）

柱穴・ピットから出土した遺物のうち、主なものをFig.22・23に図示し、以下、説明を加える。

（Fig.22）２は、土玉である。SP2079出土。完形で径2.0cm、厚さ1.4cmを測る。胎土は特に精良で焼成は良好である。

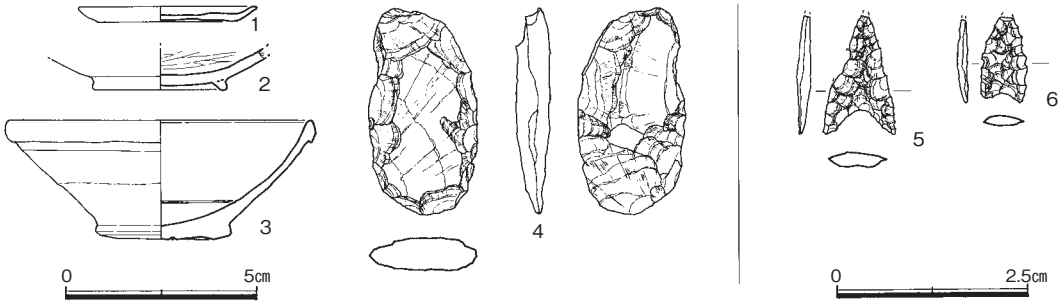


Fig.23　１区（西）柱穴・ピット出土遺物実測図（1/4・1/2）

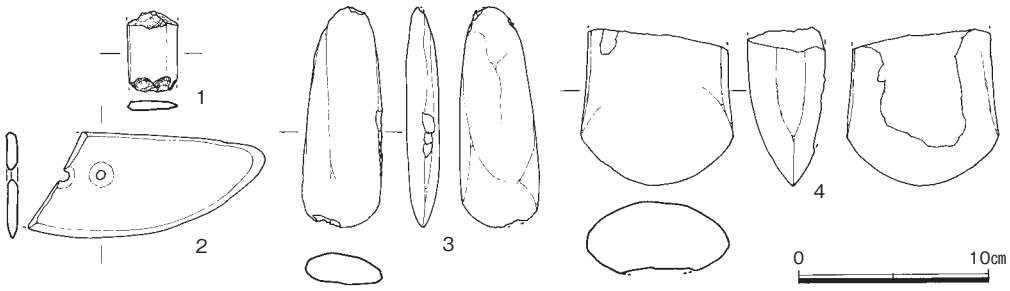


Fig.24　１区（西）その他の出土遺物実測図（1/4）

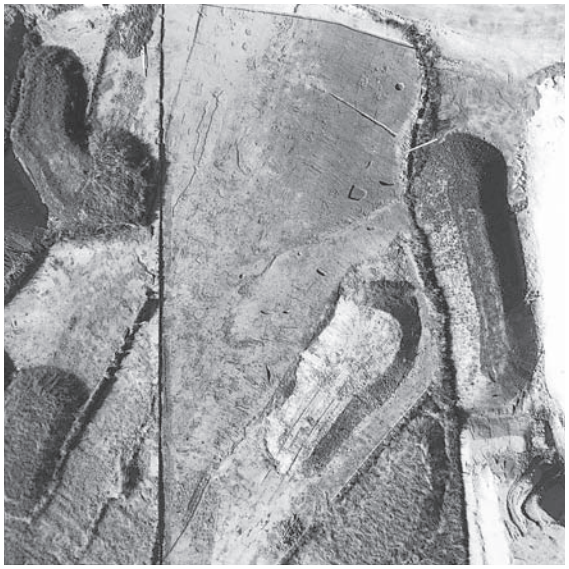
（Fig.23）１は、SP2270出土の土師器小皿である。ほぼ完形に復元でき、口径9.2cm、器高0.8cmを測る。底面に回転糸切り痕および板状圧痕が看られる。２はSP2050出土の土師器碗である。底部が1/2程度残る破片で2次的に被熱する。底径6.6cmに復元される。３はSP2022出土の白磁碗である。2/3個体残存し口径15.6cm、器高7.2cm、底径5.2cmを測る。外面上部まで施釉され、釉は透明感ない乳白色である。４は打製石斧である。左右両縁辺部にノッチが観察され、器長10.8cmを測る。５・６は打製石鏃である。５はサヌカイト製の三角鏃で先端部を欠損する。６は黒曜石製で先端部を欠損する。

④その他の遺物（Fig.24）

１はSD1031出土の石製品である。磨製石剣の両端を打ち欠いている。２は出土位置不明。石製穂摘具である。1/2個体残存し、中央部に２カ所両面からの穿孔を有する。３・４は磨製石斧である。３はSD4005を切る近世以降の水路から出土した。石材は蛇紋岩質で器長11.6cmを測る。４はSK1048出土。身部を欠損し、幅8.0cmを測る。石材は玄武岩質。

⑤小結

１区（西部）の調査では、中世の掘立柱建物５棟・同じく中世の溝３条、弥生時代の溝１条、ほか柱穴、ピット多数を検出した。中世の掘立柱建物および溝はほぼおなじ方位を持つ傾向が見られる。１区の西に隣接する里道（丘陵東の沖積地にみられる条里にほぼ平行する）にほぼ沿った形で、この里道の初現が中世に遡る可能性がある。出土遺物は僅少だが、これら中世の遺構の時期はおおよそ12～13世紀頃と推測される。北に位置する23区でも同様の建物群が検出されており、建物群の範囲はさらに広がるものと思われる。中世前半期の農村集落の一角を検出したものであろう。弥生時代の遺構で確実なものはSD3001のみで、地形に沿った水路を構築し水田に導水していたものと推測される。



1．1区全景（東より）

2．1区SB4001（南より）

3．1区SB4002（南より）

1．1区SB4003（南より）

2．1区SB4004（南より）

3．1区SD3001土層（東より）

１．2区の調査

（１）調査の概要（Fig.1･2，付図1･2，巻頭図版）

２区は事業対象地の浦江遺跡群5次調査範囲のほぼ中央に位置する東西200m、幅5～30mの長い調査区である。調査面積は3,109㎡を測る。旧地形では西を扇頂部とし東へ広がる扇状地形の微地形の東西尾根部にあたり周囲よりわずかに高い。標高は西端で50.8m前後、東端で46.8m前後である。

調査地はもと耕作地（水田）であるが、耕作土・床土を除去した直下の地山上面で遺構を検出した。地山は扇状地堆積のため場所により複雑に変化するが、灰色～浅黄橙色シルト主体の部分、砂層主体の部分、礫層部分、シルト・砂礫混合層部分がある。場所によっては大小の礫が露出したり、遺構面の乾燥状況などにより土色が分かりにくく遺構が認識しにくい部分もあった。また後世の耕地開発によるものと考えられる削平のためか、遺構は総じて削平を受けている。特に任意座標のX=10～70、X=115～180の範囲については削平が顕著で遺構が少なく、遺存状況が悪い。

主な遺構としては、調査区を縦貫するように西から東に流れる弥生時代水路（大溝）SD01を検出した。SD01は調査区中央やや東（任意座標X=135付近）で南側に直角に折れ調査区外となる。溝からは弥生時代中期末から後期前半を主とする大量の土器が出土した。他はこのSD01に関わる小溝や凹み状遺構、弥生時代の集落遺構（竪穴住居？、土坑、掘立柱建物）がある。ただし弥生時代の遺構は総じて顕著に削平されており、竪穴住居の可能性があるものは竪穴の壁の立ち上がりがほとんど残っておらず、床面付近での検出である。次に述べる中世遺構群は同じ箇所でも遺存状況が良好であるので、中世の建物群（屋敷地）が成立する際にも旧地形の削平・整地が行われた可能性が高い。一方、出土遺物が少ないため詳細な時期幅は明らかにできないが、任意座標のX=70～110前後に柱穴が多く、特にX=90～110おいて柱穴が多数密集し、多くの掘立柱建物を復元できた。これらの建物は一部に弥生時代があるが大部分は中世とみられ、これらに伴うとみられる溝も検出されている。また調査区東端のX=175～200付近にも柱穴群があり、建物が復元できる。これは地形的に高くなる13区で検出されている中世の建物群に続くものであろう。ただしこの２箇所の建物集中範囲の間についてはすでに述べたように著しい削平がなされていると考えられるため、当初より中世の屋敷地が展開していなかったかについては不明である。なお２区の出土遺物の総量はパンケースおよそ110箱である。

なお調査区内の座標軸についてであるが、調査区はまず東西に任意の座標杭を打ち（Y=0軸）、これを基準として調査区内の遺構を測量している（Fig.1･2、付図1･2）。本調査区のY=0軸上の座標杭を基準として浦江５次全体の他の調査区にも同じ任意座標軸を移動しており、後にこの任意座標軸に基準点より国土座標点を移動して求めている。そのため２区の主要点における国土座標値を以下に記しておく（Fig.1･2，付図1･2の⑩，⑨，⑯，⑰点を参照）。なお任意座標軸は磁北Ｎ－1°－Ｅである。

任意座標軸上の点	／	国土座標（日本測地系）
点⑩（X=0,Y=0）	／	X=57,819.619 ，Y=63,214.707
点⑨（X=30,Y=0）	／	X=57,822.325 ，Y=63,184.841
点⑯（X=82,Y=0）	／	X=57,827.204 ，Y=63,131.057
点⑩（X=184,Y=0）	／	X=57,836.397 ，Y=63,029.466

なお隣接する調査区の任意座標基準杭との関係では、６区の基準杭は点⑩から北に振り、７区は点⑨から北へ、８区は点⑨から南へ、９区は点⑯から南へ、２区は点⑰から南へ振り、13区の座標軸は点⑰から移動して設置している。他の調査区はこれらからさらに移動している。各調査区の報告では必ずしも各区の任意座標が明示されておらず、他の調査区との関係も明らかでないが、ここで一部示

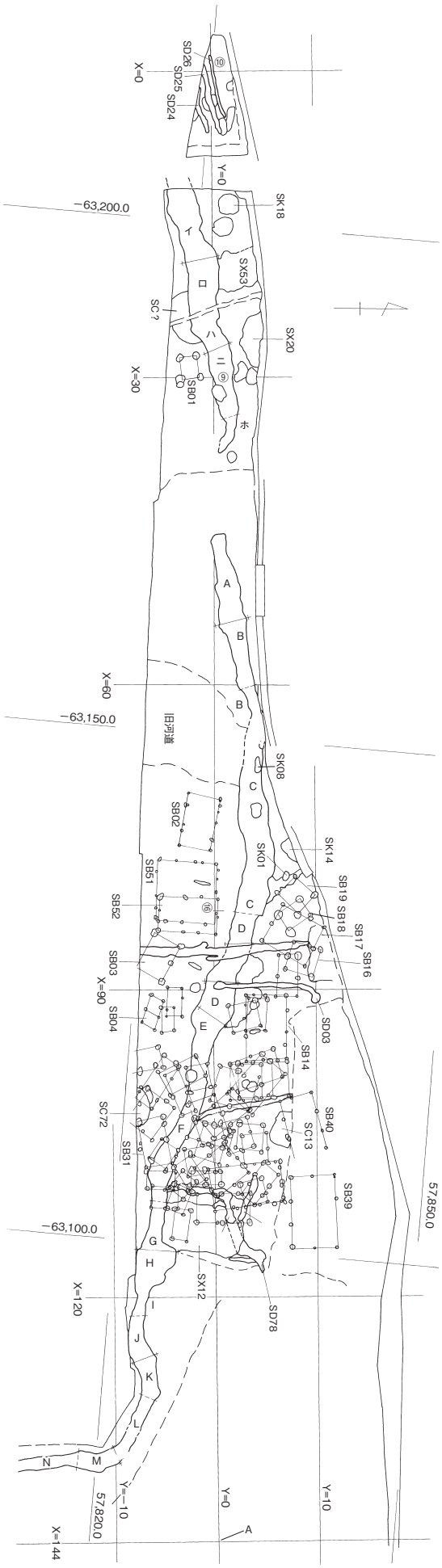


Fig.25　浦江５次２区全体略図（東部除く）
（1/600）

しておく。詳細は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定の座標杭配置図を参照されたい。

ここで調査の経過と問題点について述べておきたい。２区の調査は2002年（平成14年）１月より開始した。調査担当者は以下のように途中で入れ替わっている。はじめは米倉秀紀（当時埋蔵文化財課調査第１係主任文化財主事、現大規模事業等担当課主査）が他の調査区の総括も兼任して担当したが、３月下旬より久住猛雄が（当時埋蔵文化財課調査第１係）２区の調査担当者として合流した。2002年４月の新年度（平成14年度）になり、米倉が埋蔵文化財課事前審査係に異動となり、４月中旬より代わって吉留秀敏（大規模事業等担当課主査から埋蔵文化財課調査第1係主任文化財主事へ異動、現埋蔵文化財課事前審査係主任文化財主事）が浦江５次の調査総括担当となった。この間、久住が２区の調査については担当していたが、やはり異動により（事前審査係へ異動）担当を離れることになり、2002年５月からは吉留が他の複数の調査区の担当と浦江５次調査全体の総括も兼任して２区の調査を担当した。２区の調査は2004年７月に終了した。

担当者がこのように短期間で入れ替わったこともあり、調査の進行具合や調査方針、遺構の認識などについて十分なすり合わせを必ずしも出来ず、一部に不十分な遺構の認識が残ってしまったことが否めない。また２区を主に担当する者がいた期間が限られ、他の期間は他調査区の担当と総括を兼任していたこともあり、特に2004年5月以降の担当者は一度に広い複数の調査区を担当しながら調査全体の総括をせざるを得ず、先に一応調査が開始進行しており、ある程度調査が片付いていると思われた（実際は調査途中でありこのあたり十分な引き継ぎが出来ていなかった）２区については必ずしも最終的に十分なチェックが出来ず、一部に図面の不備などが生じてしまった。これは当時、ほぼ単年度の2004年1～12月の調査期間で37,000㎡以上の面積の調査を終了させ、造成工事（単年度完了事業）に引き渡さざるを得なかった状況、特に2004年７月末までに調査予定範囲のうち1～11区の計約20,000㎡の調査を同時進行し、一部保存された部分もあるがこれらを先行して終了して造成工事を始めなければならなかった状況からはいた仕方ないところもあ

Fig.26　浦江５次２区東部平面図（1/200）

るが、結果的に拙速な調査をせざるを得なかった点で調査担当者としては悔いが残るところである。これは他の調査区も同様であろう。平成14年度の調査は、単年度で調査する面積や遺構の質量としてはきわめて厳しいものであったことは否定できず、今後、同様の大規模事業に伴う発掘調査の場合には調査期間や担当人員配置などについて、十分な配慮がされることを望みたい。

上記のような調査時の問題が原因となり記録不十分な部分もあるが、整理報告ではせめて調査成果についてのやや詳細な提示を以下にしたいと思う。なお２区の調査成果の整理・報告は調査担当者の協議の上、全体の調査概要と遺構、調査のまとめについては久住が、遺物については米倉が担当した。報告記述の都合上、まず遺構について報告し（～72頁）、出土遺物については後でまとめて報告する（73～91頁）。

（２）検出した遺構

①掘立柱建物（SB）（Fig.３～Fig.９）

２区の調査では、調査概要にも述べたようにきわめて多数の柱穴を検出した。調査中はあまり余裕がなく、遺物が多量に出土し掘削土量も多かった大溝SD01の精査に主に力を入れたため、掘立柱建物の現地での検討についてはあまり行うことができなかった。また特に任意座標X=90～110の間の柱穴密集部分については、柱穴が多すぎるゆえに前節で述べたような調査状況もあり建物の復元自体がやや困難であった。以上のような理由により掘立柱建物の復元は、整理時の図面上によるものが大半である。図面上の操作による掘立柱建物の復元については、柱穴の同時性の証明など疑問もある。実際、本調査においては、例えば個々の柱穴覆土の土色や質について記録できるような状況に無かったし、柱穴の出土遺物は少なくあっても細片が多く遺物による検証は難しい（さらに整理時の混乱により一部の遺物が不明になっている）。しかし、建物の復元を試みなければ、検出されたかなり多数の柱穴についてほとんど何も提示しないことになり、調査成果自体が無意味にもなりかねないので、あえて図上により復元したものを提示する。対称形であるなど平面的に矛盾が少ないことと、柱穴の底面レベルについて比較的近いものでそろうものを建物復元の条件としている。ただし一部の柱穴については、図面上のチェックミスによりレベルが不明なものがあるのが残念なところである。なお平面的には建物になりそうな構成の柱穴のうち、柱穴レベルや柱穴の各プランから疑問が残るものは今回の報告では個別図の提示は省略した（付図２中のSB08・19・23・37は個別図を掲載していない）。ただし、検出した柱穴の数から言えばむしろさらに多数の掘立柱建物（や柵列）があった理屈になるが、これはあるべきはずの位置での柱穴が記録していなかったりすることもあり、最終的なダメ押しの遺構検出があるいは一部甘かった部分もあった蓋然性も否めない。また柱穴レベルに不揃いがあるものも一部は掘り足りない部分がある可能性があり、レベルの記録が欠如している場合もあり（一部は周囲状況から推測したが）、建物の復元に躊躇したものもある。

以下、やや煩雑になるがFig.ごとに報告する。なお建物規模・柱間距離は柱穴芯々での計測である。

・（Fig.27）

SB01（Fig.27　上段左）

SD01のハ・ニ区の南側で検出。長軸2.18m×短軸1.72mの１×１間の建物。方位はN（以下全て磁北）－84°－E。周囲が削平で遺構密度が比較的少なかったため、逆に現場でもこの建物の存在を容易に認識できた。柱穴の覆土はいずれも炭粒混じりの淡褐灰色粘質土で共通していた。柱穴掘り方が大きく、弥生時代遺構と考えられる。高床倉庫か。

柱穴からは、**SP1035・1036・1038**より弥生土器片が出土しており、弥生中期末～後期初頭か。

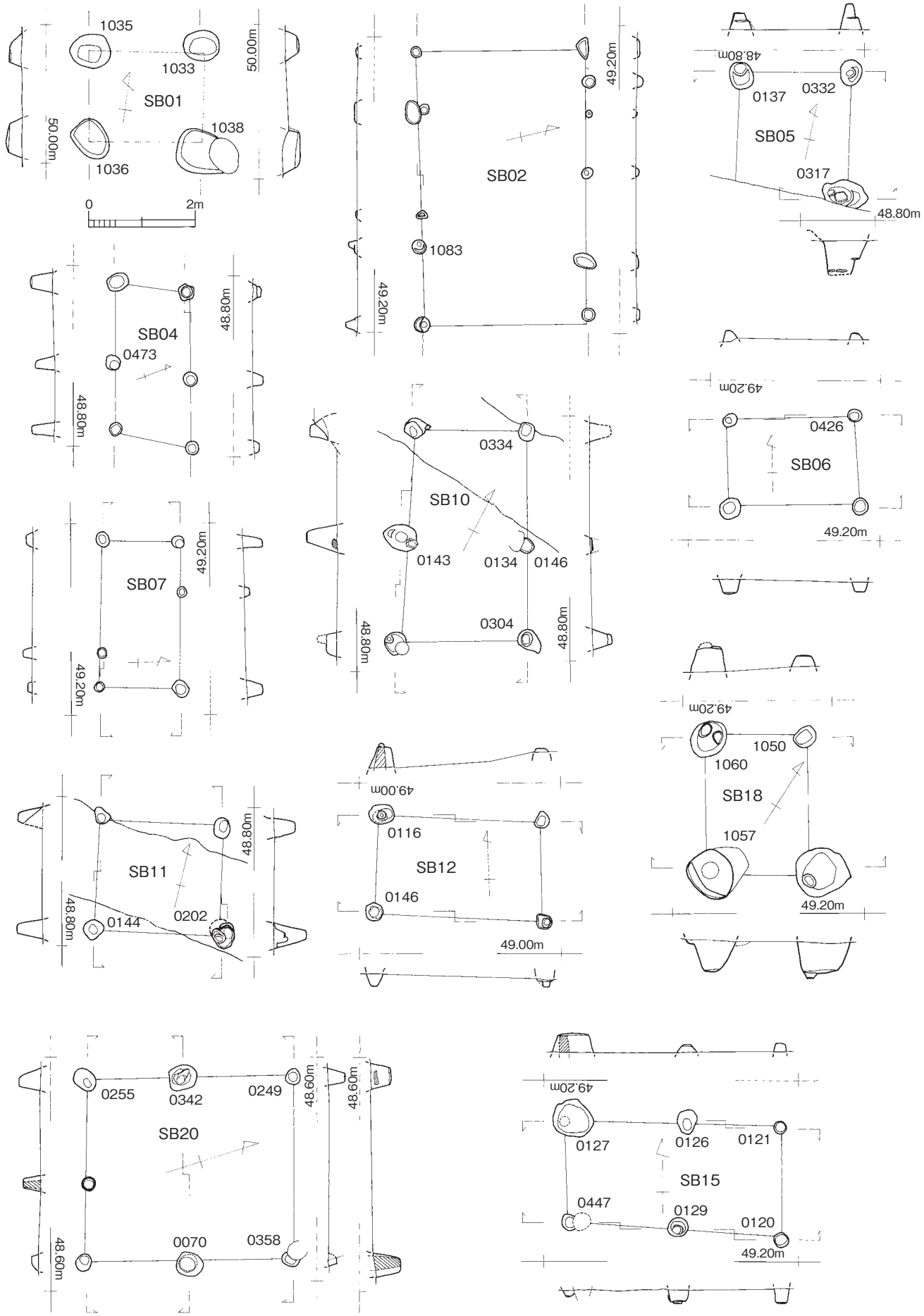


Fig.27　SB01・02・05・04・07・10・06・11・12・18・20・15（1/100）

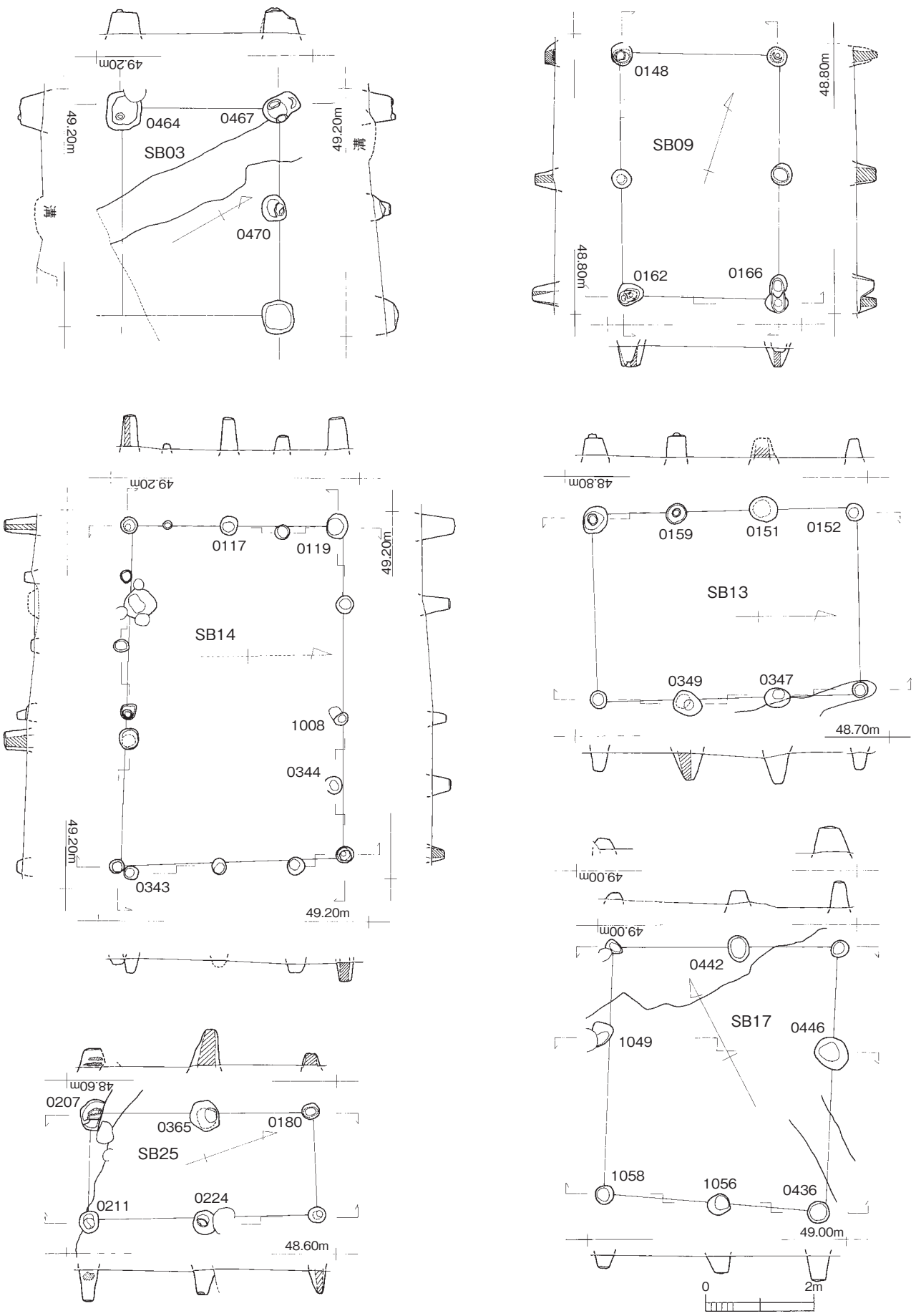


Fig.28　SB03・09・14・13・25・17（1/100）

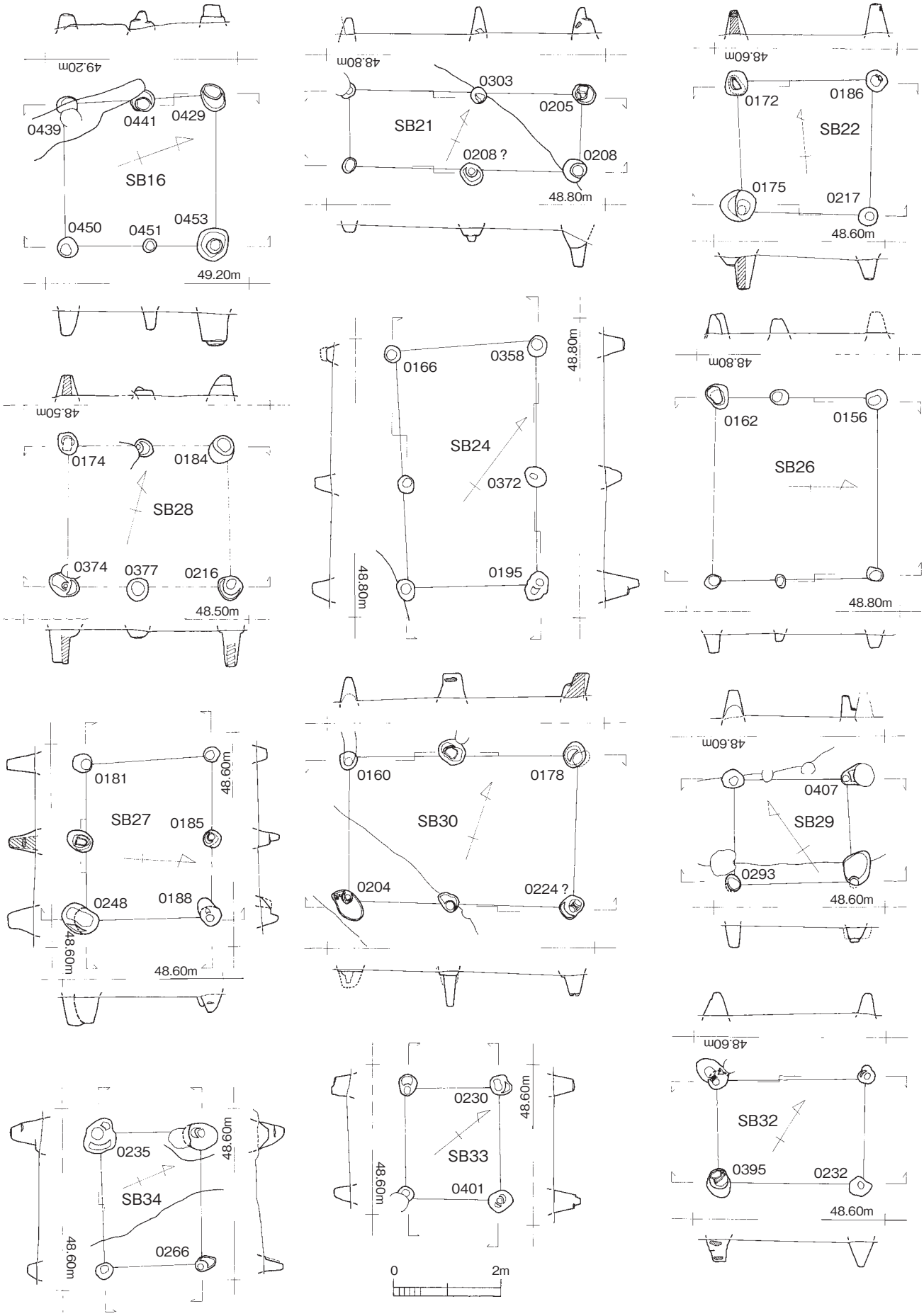


Fig.29　SB16・21・22・28・24・26・27・30・29・34・33・32（1/100）

SB02（Fig.27　上段中央）

SD01のＣ区の南側、旧河道の東側で検出。長軸5.16m×短軸3.04mの４？×１間の建物。方位はＮ－77°　－Ｗ。梁行は幅広で、桁行は不等間隔の柱間。柱穴は総じて小さく、削平もあるが柱穴の深さは浅い。中世の建物か。

柱穴の出土遺物は、**SP1083**より弥生土器片が出土しているが、混入であろう。

SB04（Fig.27　左列2段目）

SD01のＤ・Ｅ区の南側で検出。長軸2.92m×短軸1.44mの２×１間の建物。方位はＮ－70°　－Ｗ。平面形が平行四辺形状に歪むが、柱穴の大きさや間隔は矛盾無く、建物としてよいだろう。柱穴は総じてやや小さく、中世の建物か。

柱穴の出土遺物は不詳であり（出土なし？）、遺物で時期を検証できない。

SB05（Fig.27　上段右）

SB04の東側で検出。現状では長軸2.50m×短軸2.10mの１×１間の建物だが、調査区外に延びて南北に長い２×１間になるとみられる。方位はＮ－10°　－Ｗ。建物プランと柱穴の特徴からは、弥生時代か中世かを決めるのは難しい。

柱穴からは、**SP137・317**より中世の土師器皿片が出土しており、遺物から中世とすべきか。

SB07（Fig.27　左列3段目）

SD01のＤ・Ｅ区の南側で検出。長軸2.76m×短軸1.50mの１？×１間の建物。方位はＮ－86°　－Ｗ。桁行きに芯から外れた束柱がある。柱穴は総じて小さく、中世の建物か。

柱穴の出土遺物は不詳であり（出土なし？）、遺物で時期を限定できない。

SB10（Fig.27　中列2段目）

SD01のＥ区に重複して検出。長軸3.98m×短軸2.36mの２×１間の建物。方位はＮ－25°　－Ｗ。SD01の完全埋没後に柱穴が掘られたとみられ、中世の建物であろう。SB53を切る。

柱穴からは、**SP304**より弥生土器片が出土しているが混入であろう。

SB06（Fig.27　右列2段目）

柱穴の直接の重複はないが、SB04とSB07と重複関係にある。長軸2.46m×短軸1.65mの１×１間の建物。方位はＮ－89°　－Ｗ。柱穴は総じて小さめの円形で、おそらく中世の建物であろう。

柱穴の出土遺物は不詳であり（出土なし？）、遺物で時期を限定できない。

SB11（Fig.27　左列4段目）

SD01のＥ区に重複して検出。長軸2.34m×短軸2.10mの１×１間の建物。方位はＮ－79°　－Ｅ。SD01の完全埋没後の構築であり、中世の建物であろう。SB21を切る。

柱穴からは、**SP202**より中世の土師器皿片が出土し、時期を示すか。

SB12（Fig.27　中列3段目）

SD01のＤ区東の北側で検出。長軸3.14m×短軸1.86mの１×１間の建物。方位はＮ－85°　－Ｗ。柱穴は総じて小さめの円形で、中世の建物であろう。一部の柱穴に柱痕跡が残る。SX01を切っている。

柱穴からは、**SP116**から弥生土器片を出土するが、建物の時期を示すか疑問である。

SB18（Fig.27　右列3段目）

SD01のＣ区の北側で検出。長軸2.66m×短軸1.92mの１×１間の建物。方位はＮ－33°　－Ｗ。柱穴の掘り方は大きめの不整円形で、その特徴がSB01に類似し、弥生時代の建物の可能性がある。SB17を切っている。またSB18の西側に近い方位で重複関係のある**SB19**は、一部の柱穴のプランや底面レベルに疑問があるため個別図の掲載を見送ったが、同様に弥生時代の建物の可能性ある。SB18の柱

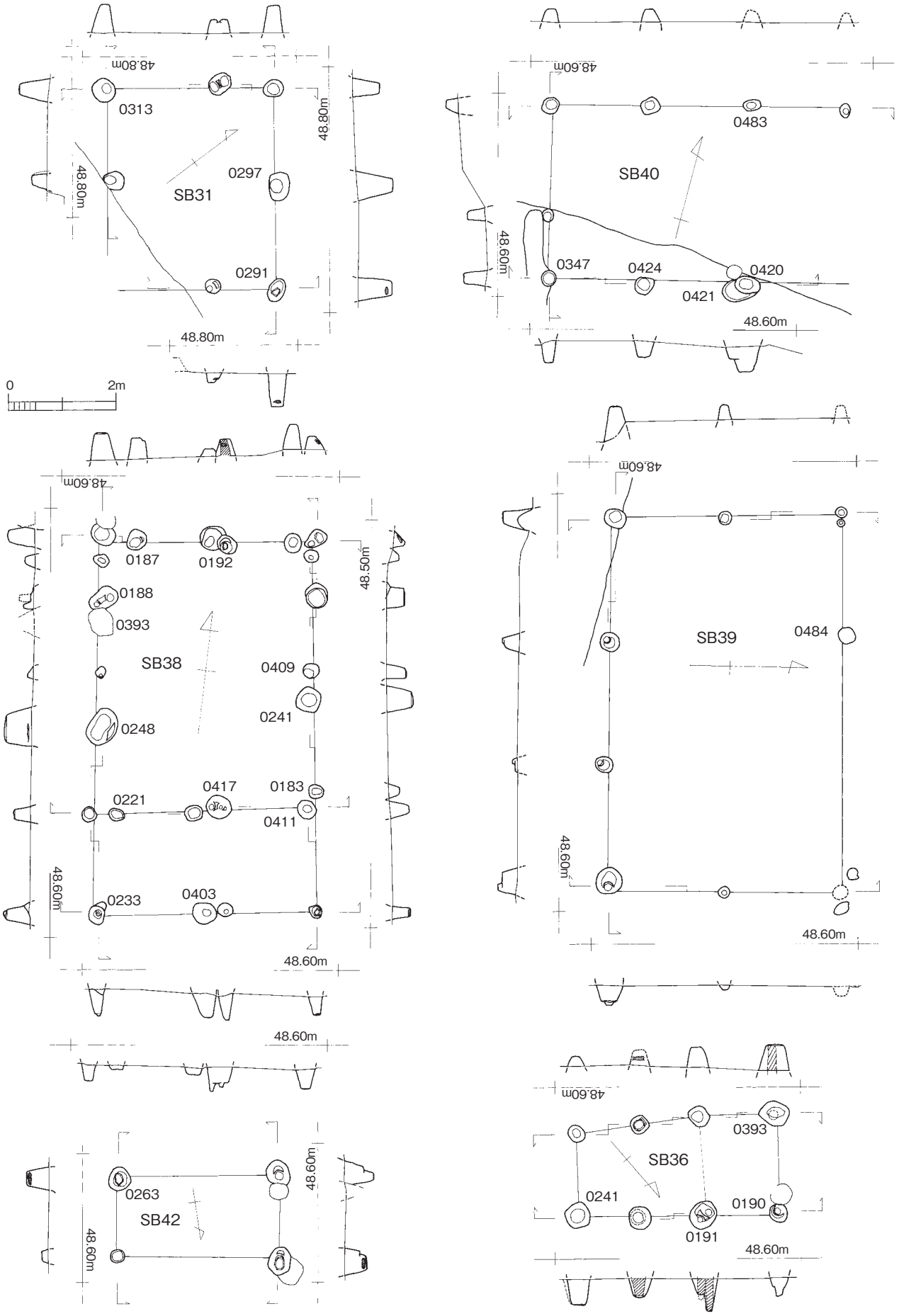


Fig.30　SB31・40・38・39・42・36（1/100）

穴からは、**SP1057・1060**より弥生土器片が出土し、時期を示すか。

SB20（Fig.27　下段左）

SD01のＥ区の北側で検出。柱穴がSD10を切る。長軸3.96m×短軸3.44mの２×２間の建物。方位はＮ－16°－Ｅ。中央に床束は無いとみられる。一部の柱穴に柱痕跡が残る。中世の建物か。SB24に切られる。

柱穴からは、**SP255**より天目陶器碗や青磁碗の破片、中世の土師器皿片が出土し、時期を示すか。

SB15（Fig.27　下段右）

SD02・03の北側に重複するように検出。長軸4.08m×2.10m、２×１間の建物。方位はＮ－86－W。北西隅の柱穴を除き総じて小さめの円形柱穴である。一部に柱痕跡が残る。中世だろう。

SP127より弥生土器の器台片が、**SP129**より中世の土師器片や粘土塊が出土するが、後者の時期か。

・（Fig.28）

SB03（Fig.28　上段左）

SD02の南側で重複して検出。長軸3.82m×短軸2.92mの２×１間の建物と推定する。桁行南辺の柱穴はSD02に切られる部分は検出できず、また一部は調査区外になる。方位はＮ－61°－W。SD02に切られ、SB52の柱穴にも切られる。柱穴はやや大きめの隅丸方形基調で、切り合い関係も考慮して弥生時代の建物（高床倉庫か）の可能性がある。SB52に切られる。

柱穴からは、**SP467**から弥生土器片、**SP470**から弥生後期前半の甕形土器が出土し、時期を示すか。

SB09（Fig.28　上段右）

SD01のＥ区の北側、柱穴密集範囲で検出。南西隅の柱穴はSB26と重複するが、SB26を切るとみられる。長軸4.50m×短軸2.98mの２×１間の建物。方位はＮ－17.5°－W。中世の建物であろう。一部の柱穴に柱痕跡が残る。なお**SP162**より中世の土師器皿片が出土し、時期を示すか。

SB14（Fig.28　左列2段目）

SD01のＤ・Ｅ区の北側で検出。長軸6.28m×短軸4.12mの４？×２間の建物。梁行には主柱の間に束柱がみられる。方位はＮ－88°－W。SB13と東側で接する。SD03の区画に関連する建物か。中世であろう。一部の柱穴に柱痕跡が残る。

柱穴からは、**SP119**より弥生土器片が、**SP343**より擂鉢片が出土し、後者から中世後期であろう。

SB13（Fig.28　右列2段目）

SD01のＥ区の北側、柱穴密集範囲で検出。長軸4.92m×短軸3.46mの３×１間の建物。梁行が広い。方位はＮ－2°－W。SB14と西側で接する。SD10を切る。中世であろう。一部の柱穴に柱痕跡が残る。柱穴のうち、**SP159・347・349**からは土師器皿片が出土し、時期を示すだろう。

SB25（Fig.28　下段左）

SD01のＦ区の北側、柱穴密集範囲で検出。長軸4.26m×短軸1.97mの２×１間の建物。方位はＮ－18°－Ｅ。SB54に切られる。一部の柱穴に柱痕跡が残る。

柱穴のうち、**SP207・211**から中世の土師器皿片が出土し、時期を示すだろう。

SB17（Fig.28　下段右）

SD01のＤ区西の北側で検出。長軸4.90m×短軸4.16mの２×２間の建物。方位はＮ－30°－Ｅ。SD02に切られるほか、弥生時代の可能性が高いSB18に切られ、弥生時代の可能性がある。柱間隔がやや不等間隔。中央に床束はなく平地建物か。

柱穴からは、**SP436・1058**より弥生土器片が出土しており、弥生時代として矛盾ない。

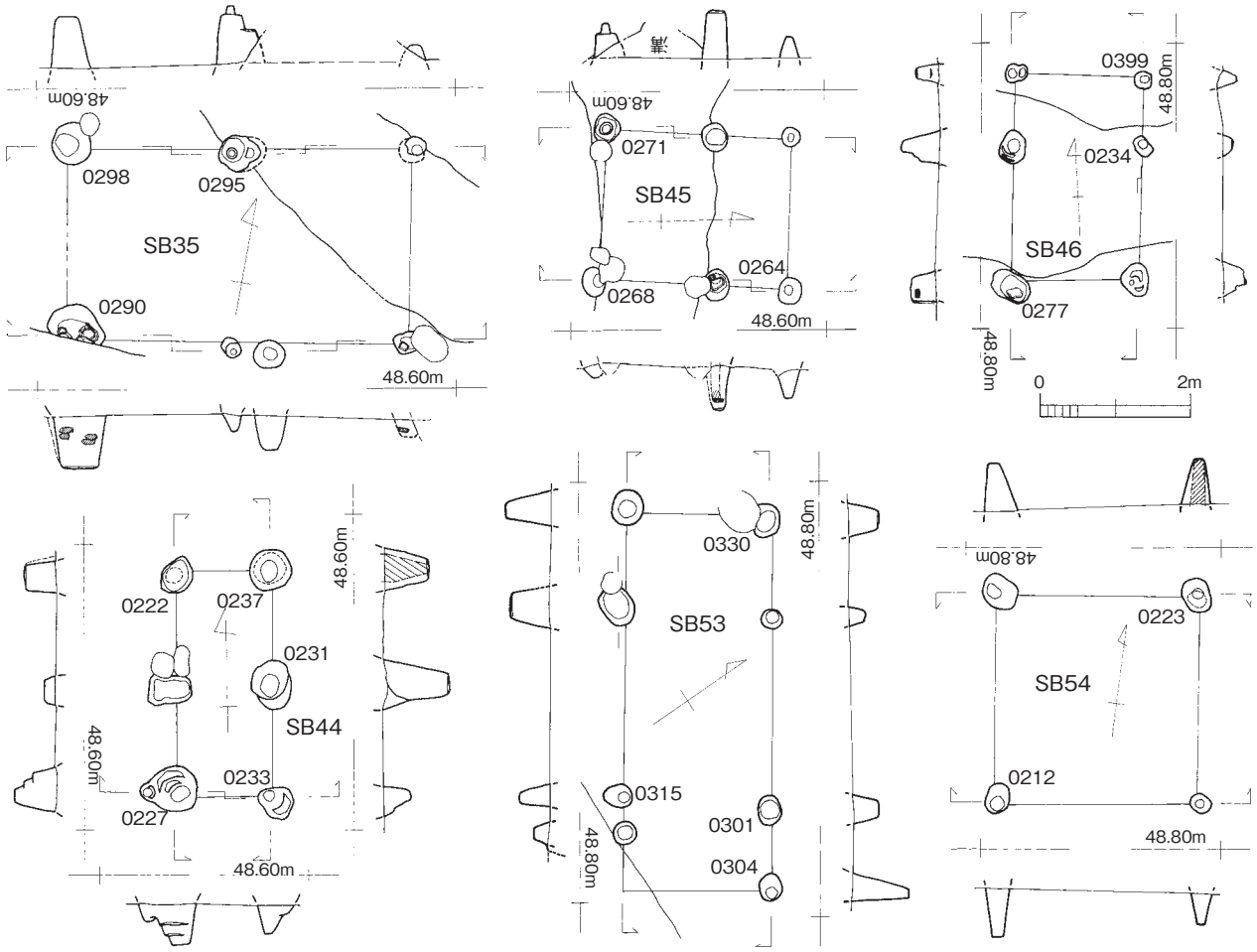


Fig.31　SB35・45・46・44・53・54（1/100）

・（Fig.29）

SB16（Fig.29　上段左）

SB18の東側に重複する位置で検出。長軸2.86m×短軸2.82mの２×１間の建物。方位はN－18°－E。SD02に切られ、あるいは弥生時代の建物の可能性もあるか。

柱穴からは、**SP429・450・453**から弥生土器片が出土し、弥生時代としてよさそうである。

SB21（Fig.29　上段中央）

SD01のE区に重複して検出。長軸4.34m×短軸1.46mの２×１間の建物。方位はN－67°－E。SD01の埋没後の構築で、SB53を切り、SB11に切られる。中世の建物であろう。

柱穴からは、**SP303**より土師器坏や土師質の擂鉢（捏鉢？）が、**SP205**より土師器の釜・皿の破片が出土した。15～16世紀か。

SB22（Fig.29　上段右）

SC13の南側、SD10の東側の柱穴密集範囲で検出。長軸2.54m×短軸2.52mの１×１間の建物。方位はN－3.5°－W。柱痕跡のある柱穴が多い。SB27・28等と重複する関係。柱穴からは、**SP172**より須恵質擂鉢片、**SP217**より土師器皿片が出土し、中世の建物であろう。

SB28（Fig.29　左列2段目）

SD10の東側の柱穴密集範囲で検出。長軸3.04m×短軸2.60mの２×１間の建物。方位はN－74°－

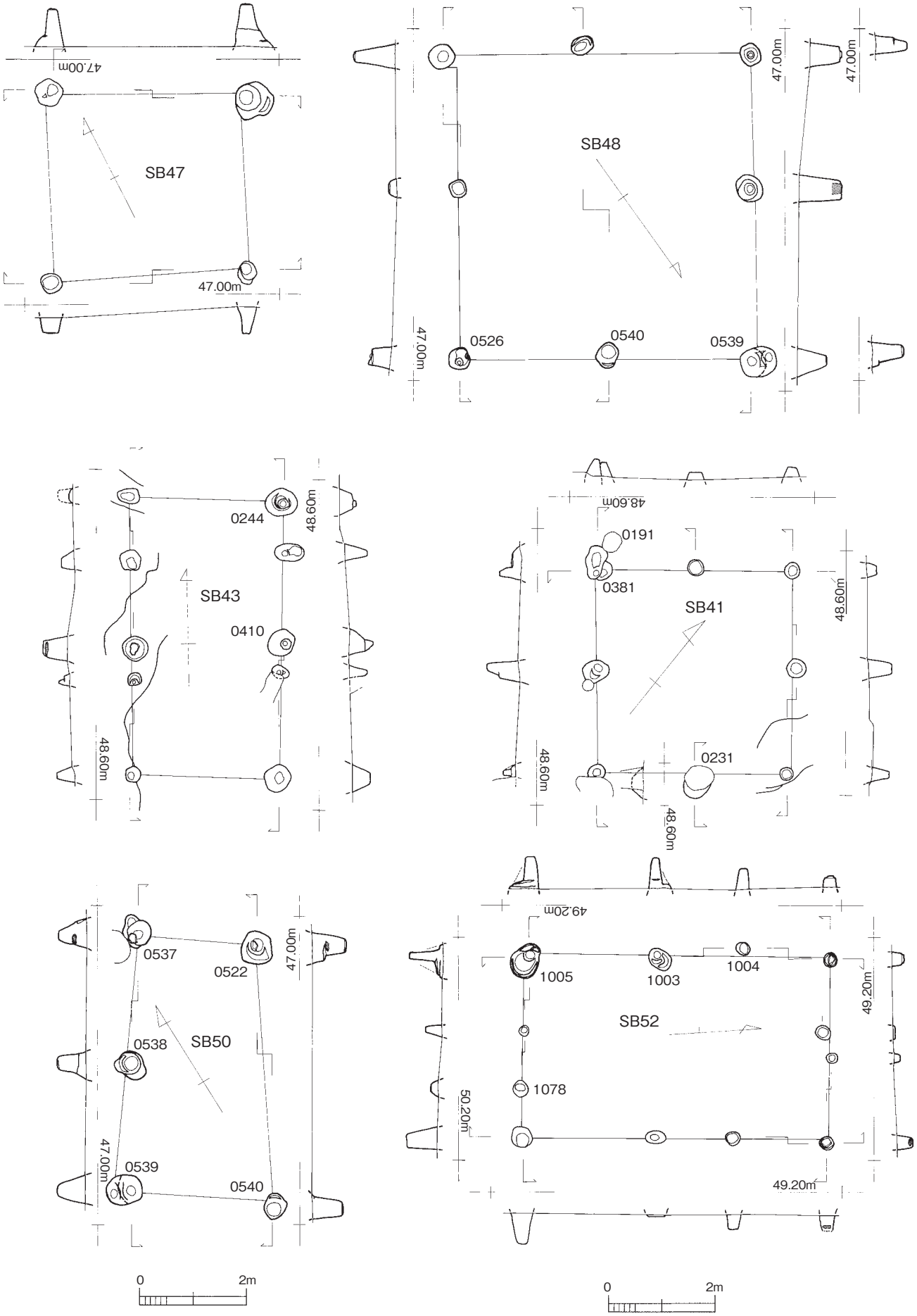


Fig.32　SB47・48・43・41・50・52（1/100）

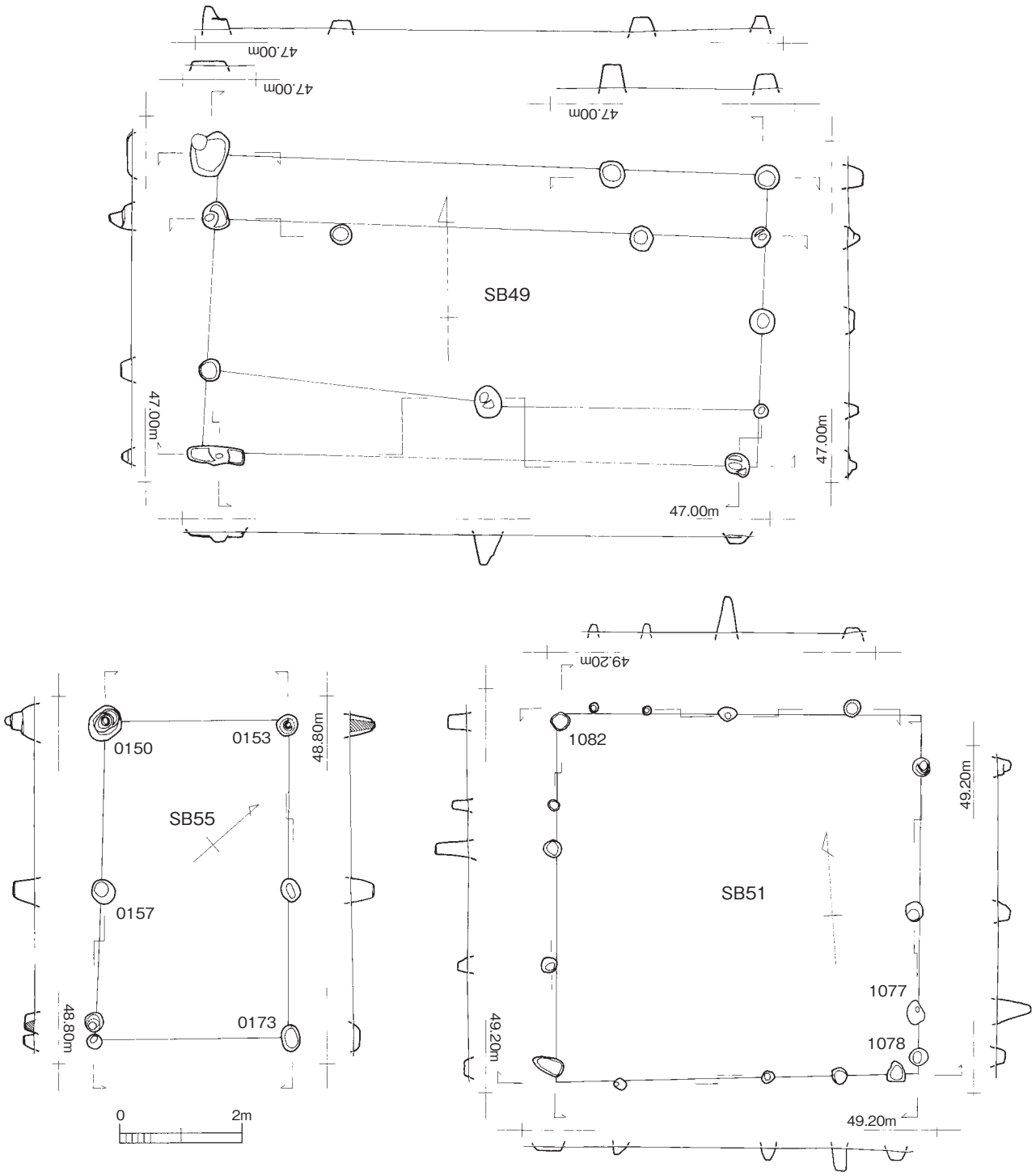


Fig.33　SB49・55・51（1/100）

E。複数の建物と重複する関係。柱痕跡が残る柱穴が多い。桁行中央の柱は束柱として１×１間とすべきか。柱穴の出土遺物は不詳であり（出土なし？）、遺物で時期を限定できない。

SB24（Fig.29　中列2段目）

SD01のE区の北側、柱穴密集範囲のSD10をまたぐような位置で検出した建物。長軸4.56m×短軸2.62mの２×１間の建物。方位はN－37°－W。SB20を切る。柱穴は総じて小さめの円形で、柱痕跡が残るものが多い。柱穴からは、**SP195**より土師器擂鉢の皿の破片が、**SP372**より土師器皿片が出土し、中世後期であろう。

SB26（Fig.29　右列2段目）

SD10の西側、SD01のＥ区の北側、柱穴密集範囲で検出。長軸3.42m×短軸3.10mの２×１間の建物。方位は磁北と直交している。南西側柱穴はSB09に切られている可能性が高い。桁行中央の柱穴は束柱として１×１間とすべきか。西辺の南・北の柱穴には柱痕跡があった。中世であろう。柱穴からは、**SP156**より中世の土師器皿片が出土している。

SB27（Fig.29　左列3段目）

SC13の南東側の柱穴密集範囲で検出。長軸3.00m×短軸2.37mの２×１間の建物。梁行がひろい。方位はＮ－87°－Ｅ。SB36に切られる。一部に柱痕跡がある。SB22・38等とも重複する位置にある。中世の建物であろう。

柱穴からは、**SP248**より粘土塊が、**SP181・188**より中世の土師器皿片が出土している。

SB30（Fig.29　中列3段目）

SD01とSD10の合流部付近で検出。長軸4.28m×短軸2.84mの２×１間の建物。方位はＮ－72°－Ｅ。一部の柱穴に柱痕跡がある。SD01の埋没後の構築で、SD10を切る。柱穴からは、**SP178・204・224**より中世の土師器皿片が出土している。

SB29（Fig.29　右列３段目）

SD01のＦ区をまたぐ位置で検出。長軸2.20m×短軸1.96mの１×１間の建物。方位はＮ－51°－W。SB46に切られる。中世の建物であろう。柱穴からは、**SP178**より土師器皿片が出土し、中世の建物であろう。

SB34（Fig.29　下段左）

SD01のＦ区東の北側のSD11付近、柱穴密集範囲南東部で検出。長軸2.54m×短軸1.86mの１×１間の小さな建物。方位はＮ－68°－W。SB45を切り、重複関係から中世の建物であろう。

柱穴からは、**SP235・266**より中世の土師器皿片が出土したほか、**SP266**からは粘土塊も出土した。

SB33（Fig.29　下段中央）

SD01のＦ区東の北側、柱穴密集範囲南東部で検出。長軸2.10m×短軸1.77mの１×１間の小さな建

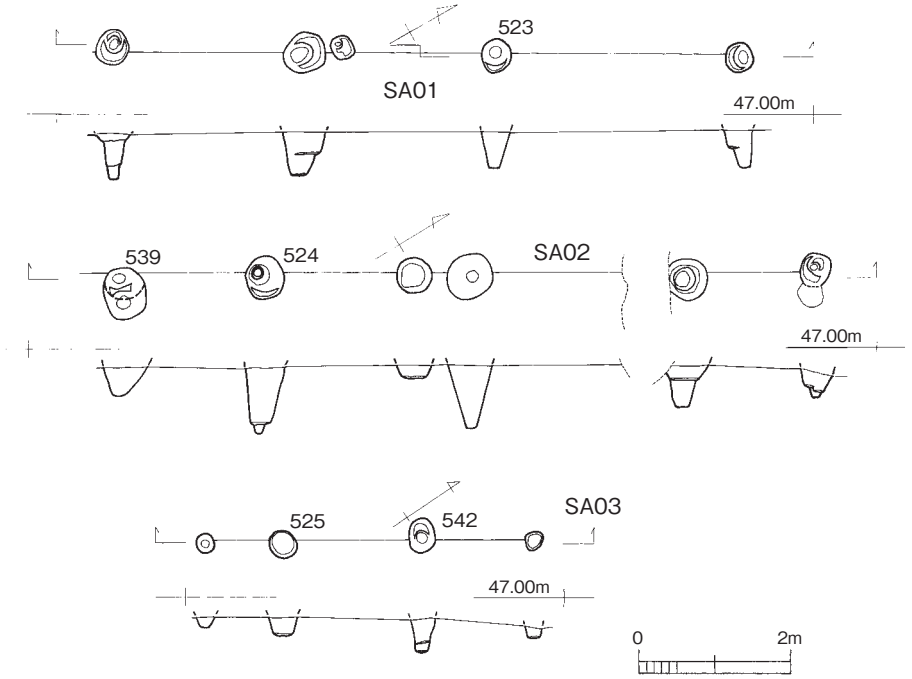


Fig.34　SA01・02・03（1/100）

物。方位はＮ－52°　－Ｗ。SD01・11を切り、SB45に切られる。SB34とも重複関係にあるが、SB45との関係からSB34より古いことになる。柱穴からは、**SP230**より土師器皿片が、**SP401**より糸切底の土師器坏片が出土し、中世の建物であろう。

SB32（Fig.29　下段右）

SD01のＦ区の北側、柱穴密集範囲中央南部で検出。長軸2.76m×短軸1.97mの１×１間の建物。方位はＮ－57°　－Ｅ。柱穴の関係が微妙だが、SB23に切られている可能性がある。SD01・11を切る。柱穴からは、**SP232**より青磁片（明代？）と土師器皿片が出土し、中世後期であろう。

・**(Fig.30)**

SB31（Fig.30　上段左）

SD01のＥ・Ｆ区の南側、柱穴密集範囲南部で検出。長軸3.76m×短軸3.10mの２×１間の建物。梁行の中央やや東寄りに小柱穴があるがこれは束柱だろう。方位はＮ－53°　－Ｗ。SC72を切る。SB53やSB35とも重複関係がある。中世の建物であろう。柱穴からは、**SP291**より土師器の皿・坏の破片が多数、**SP313**より土師器皿5片が出土しており、時期を示すだろう。

SB40（Fig.30　上段右）

SC13に重複するように検出。北辺側の柱穴は削平（段落ち）により残りが悪く、一部不明である。長軸5.48m（以上？）×短軸3.24mの３（以上？）×１間の建物。方位はＮ－76°　－Ｅ。SD10を切る。中世の建物であろう。柱穴からは、**SP424**より中世の土師器皿片が出土している。

SB38（Fig.30　左列2段目）

SC13の南東側、SX12の北西側、柱穴密集範囲東部で検出。長軸6.96m×短軸4.19m。方位はＮ－6°－Ｗ。主柱がやや不明確だが、基本的には４×２間の建物か。束柱や床束？柱、隅角の束柱があり、中世にままみられる建物構造である。一部の柱穴に柱痕跡がある。SB36・37・41等と重複関係にある。柱穴からは、**SP233**より土師器皿片が、**SP411**より中世後期の土師器釜片が出土しており、時期を示すと考えられる。

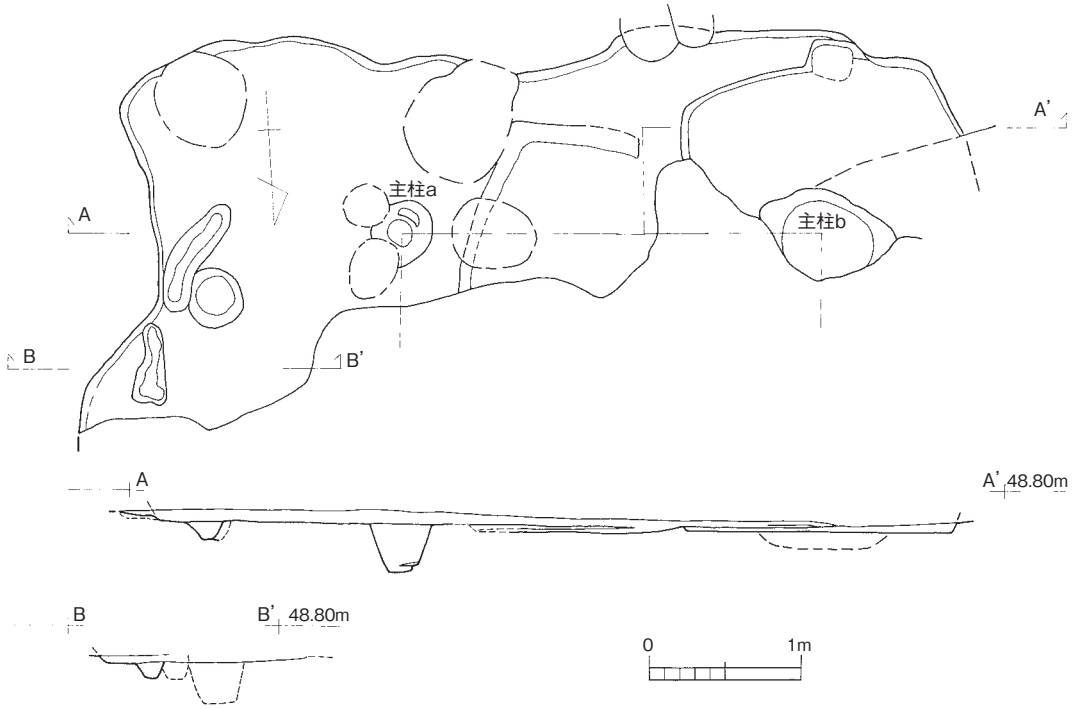


Fig.35　SC（SX）05（1/50）

SB39（Fig.30　右列2段目）

Ｘ＝100，Ｙ＝10付近で検出。長軸7.04m×短軸4.37mの３×２間の建物。方位はＮ－89°－Ｅ。段落ちによる削平が著しいため柱穴の残りが悪く、特に北辺はあまり残っていない（詳しい図化記録も省略されている）。小さい円形柱穴からなり、中世の建物であろう。**SP484**より土師器皿片や土師器釜片（中世末）が出土している。

SB42（Fig.30　下段左）

SD01のＧ区の北側、SX12の上で検出。長軸3.06m×短軸1.56mの１×１間の小さい建物。北西隅の柱穴が浅くやや不審もあるが、あるいは

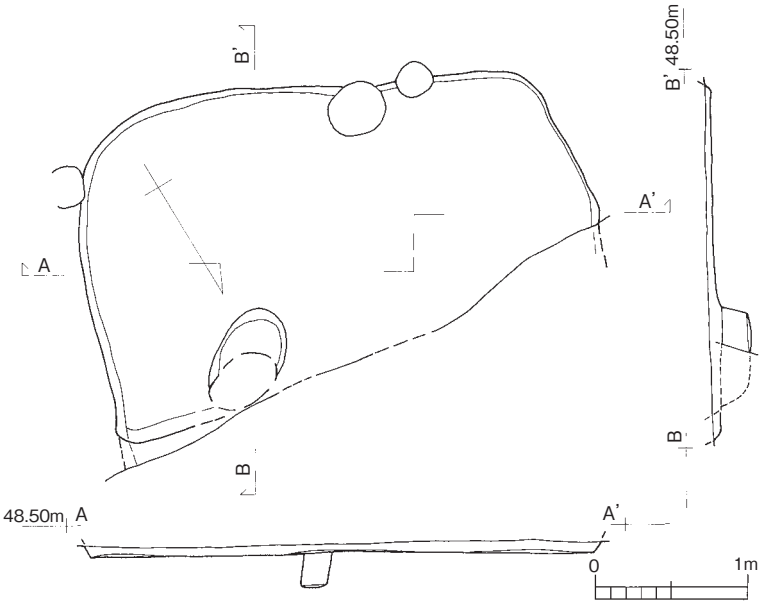


Fig.36　SC13（1/50）

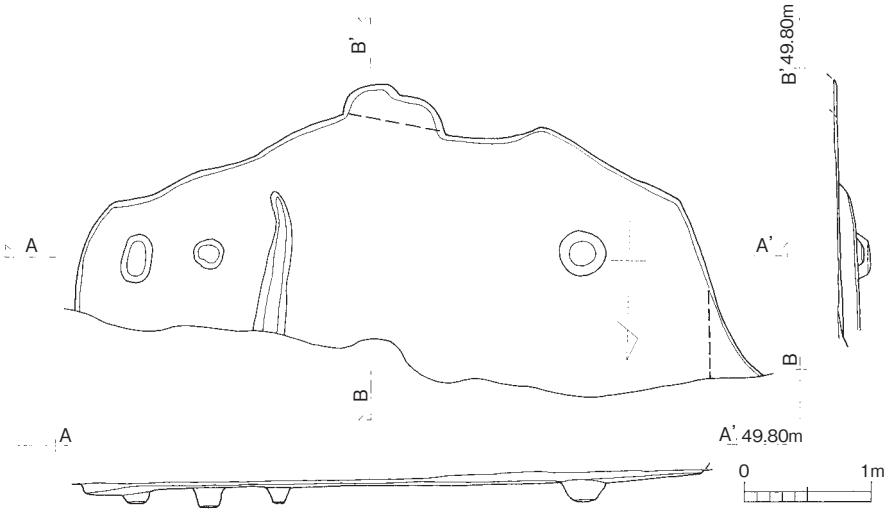


Fig.37
SC(SX)20（1/60）

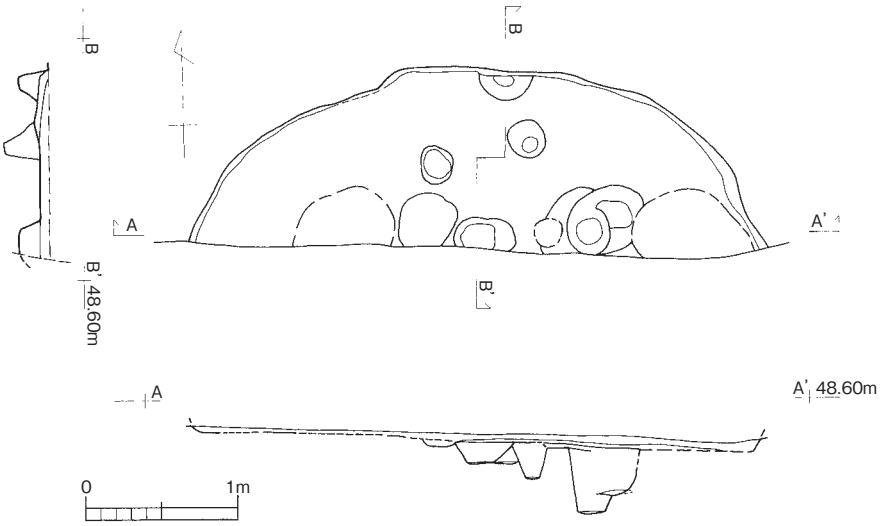


Fig.38
SC72（1/50）

掘り足りない可能性もある。方位はＮ－82°－Ｗ。中世の建物であろう。SB45の柱穴と接する部分があるが切り合いは微妙である。

柱穴からは、**SP263**より弥生土器片が出土するが、時期を示すか不明である。

SB36（Fig.30　下段右）

SC13の南東側、SX12の北西側、柱穴密集範囲東部で検出。長軸3.79m×短軸1.88mの３×１間の建物。方位はＮ－52°－Ｗ。SB36と重複関係にあり、SB27を切る。平面プランは南東側の梁行がやや狭く台形状だが、柱筋は通り建物として問題ないだろう。柱痕跡が残る柱穴がみられる。中世の建物だろう。柱穴からは、**SP241**より中世の土師器皿片が出土している。

・**（Fig.31）**

SB35（Fig.31　上段左）

SC72からSD01のＦ区東にかけての柱穴密集範囲南部で検出。長軸4.60m×短軸2.60mの２×１間の建物。方位はＮ－80°－Ｅ。SC72，SD01を切り、SB46に切られる。SB29・31等とも重複する。

柱穴からは、**SP298**より糸切底の土師器皿片が多数出土し、中世の建物である。

SB45（Fig.31　上段中央）

SD01のＧ区をまたぐ位置で検出。長軸2.50m×短軸2.00mの２×１間の建物。方位はＮ－４°－Ｅ。SD01，SB33を切り、SB34に切られる。西に接するSB46と規模・プラン・方位が類似する建物であり、建て替え関係であろうか。中世の建物であろう。

柱穴からは、**SP268・271**より土師器皿片が、**SP264**より中世須恵質土器片が出土している。

SB46（Fig.31　上段右）

SD01のＧ区をまたぐ位置で検出。長軸2.78m×短軸1.72mの２×１間の建物。方位はＮ－４°－Ｅ。SD01，SB29・35を切る。SB45と建て替え関係か。中世の建物であろう。

柱穴からは、**SP277**より土師器皿片や粘土塊が、**SP399**より中世と思しき土師器片が出土している。

SB44（Fig.31　下段左）

SD11の西側、SD01のＦ区東の北側の柱穴密集範囲中央東部で検出。長軸3.00m×短軸1.28mの２×１間の小さく細い建物。方位はＮ－２°－Ｗ。一部の柱穴に柱痕跡が残る。SB41を切るほか、SB41・54等と重複関係にある。中世の建物であろう。柱穴からは、**SP222**より土師器鍋片が、また**SP222・231・233・237**より土師器皿片（糸切底含む）が出土し、時期を示すだろう。

SB53（Fig.31　下段中央）

SD01のＥ区の南側、柱穴密集範囲南部で検出。長軸5.04m×短軸1.98mの３×１間の建物。方位はＮ－55°－Ｗ。桁行の中央の柱間がやや広い。南東隅の柱穴は調査区外で不明である。SB21を切り、SB10に切られる。中世の建物であろう。柱穴からは、**SP301・309・315**より中世の土師器片（皿類が多い）が出土している。

SB54（Fig.31　下段右）

SD01のＦ区の北側、柱穴密集範囲中央で検出。長軸2.78m×短軸2.72mの１×１間の建物。方位はＮ－6°－Ｗ。SB25を切る他、SB23・32・41・44等と重複する。中世の建物であろう。柱穴からは、**SP212・223**より土師器皿片が出土している。

・**（Fig.32）**

SB47（Fig.32　上段左）

東部調査区（Fig.3）の東側で検出。長軸3.68m×短軸3.54mの１×１間の建物。柱間が広く、本来は中間に束柱があった可能性もあるが、削平されたものか。方位はＮ－65°－Ｗ。SB48と重複関係

にあるが切り合いは不明である。また東隅の柱穴はSA02と同じ場所で重複している可能性があるが、その場合の切り合いは不明である。中世の建物であろう。

柱穴の出土遺物は不詳である（出土なし？）。

SB48（Fig.32　上段右）

東部調査区の東側で検出。長軸5.74m×短軸5.67mの２×２間の建物。方位はＮ－35°－Ｅ。北側隅の柱穴はSA02と重複するが、先後関係は微妙である。北東側の柱筋方向はSB50と同じであり、SB50は同一の建物の一部分の可能性がある。その場合は長軸10.52m×短軸5.67m、４×２間の大型建物となる。中世の建物であろう。柱穴からは、**SP526**より土師器皿片と陶器擂鉢片が出土しており、中世後期であろう。

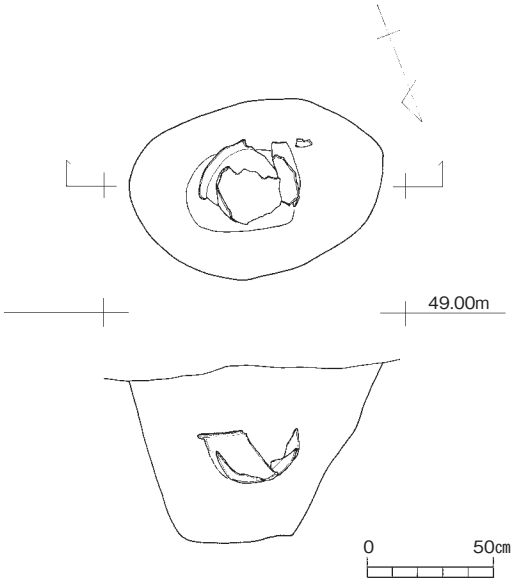


Fig.39　SK01（1/30）

SB43（Fig.32　左列2段目）

SX12の北西側、SD11の北側、SD16に重複し、柱穴密集範囲東部で検出。長軸5.22m×短軸2.90mの３×１間の建物。梁行が広い。方位はＮ－1°－Ｅ。柱穴のレベルは一部浅いが、調査状況から掘

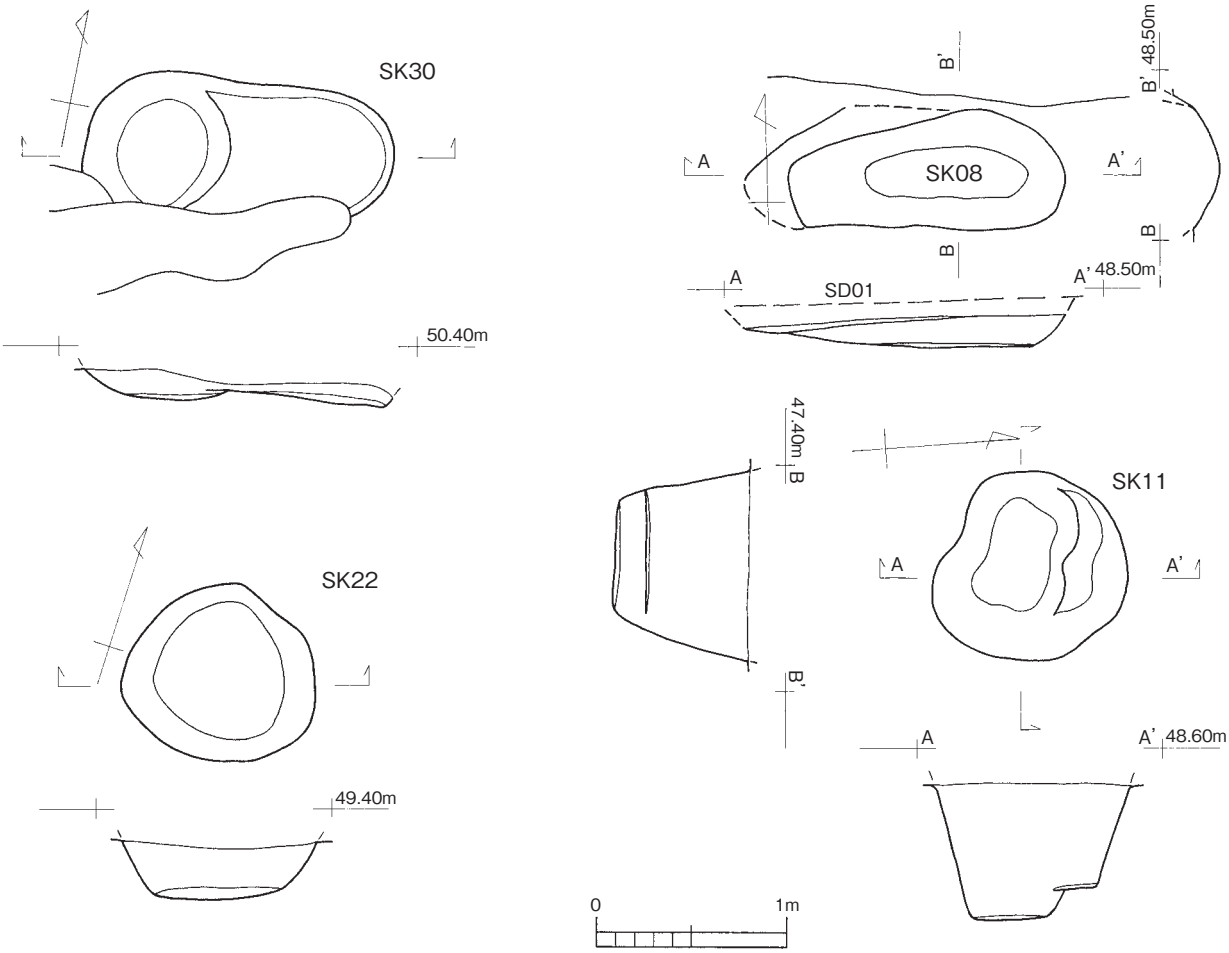


Fig.40　SK30・08・22・11（1/40）

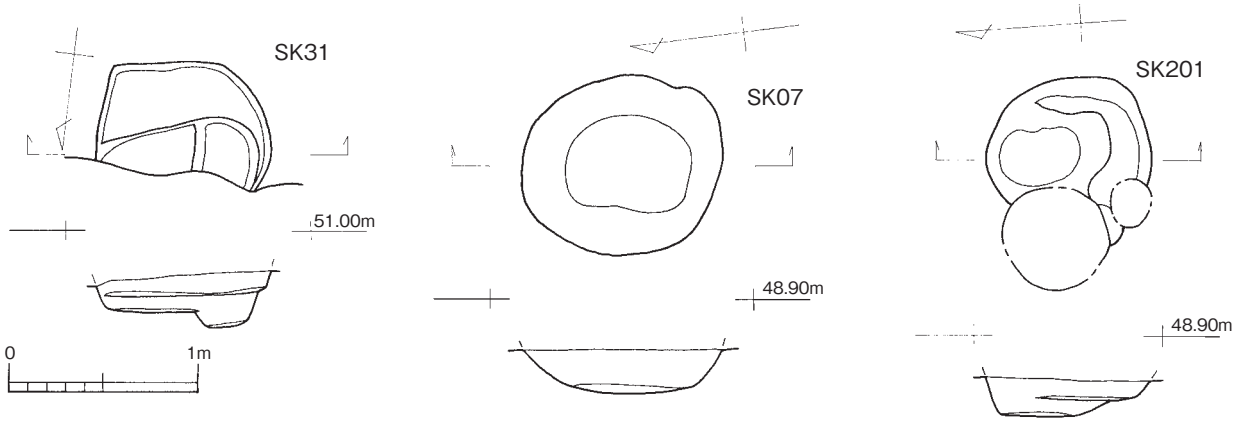


Fig.41　SK31・07・201（1/40）

り足りないものがある可能性がある。SB38・44等と重複関係にある。中世の建物であろう。柱穴からは、**SP410**より中世の土師器坏片が出土している。

SB41（Fig.32　右列2段目）

SD11の西側、柱穴密集範囲中央やや東部で検出。長軸3.80m×短軸3.70mの２×２間の建物。方位はN－38°－W。SB44に切られるほか、SB23・27・32・43・54と重複関係にある。中世の建物であろう。柱穴からは、**SP191**より龍泉窯系青磁碗や土師器皿の破片が出土している。

SB50（Fig.32　下段左）（PL.12-37）

東部調査区の東側で検出。西隅の柱穴はSB48と同一位置で共通し、SA02と重複する。柱筋の一致からSB50と同一の建物の一部分の可能性が高い（図では個別のものとしたが訂正する。Fig.3参照）。SB50とした部分は、長軸4.82m×短軸3.00mである。方位はN－30°－E（西側柱筋はSB48と同一）。中世の建物であろう。位置的にSA01とも重複関係にある。

柱穴からは、**SP522**より中世の土師器坏が出土している。

SB52（Fig.32　下段右）

SD01のD区西の南側、SD02南半の西側で検出。長軸5.78m×短軸3.47mの３×２？間の建物。梁行の一部は束柱だろう。方位はN－1°－W。SB03を切り、SB51と重複関係にある。中世の建物であろう。なお柱穴は総じて浅く残りが悪いものの、極端に浅いものは掘り足りない可能性もある。またSD02はこのSB52やSB51に伴う区画溝の可能性があろう。

柱穴からは、**SP1003**より擂鉢片、土師器皿片、粘土塊が出土しており、中世後期であろうか。

・**(Fig.33)**

SB49（Fig.33　上段）

東部調査区（Fig.3）の中央南東側で検出。長軸9.07m×短軸4.88mの４？×３？間の建物。柱筋が認められるものの、柱穴の検出場所に不足があり（特に桁行南辺の柱筋）、削平で遺構の残りが悪い範囲であることもあるが、調査状況を考えると（東部調査区は遺構検出作業が遅くやや不十分なまま調査を終了せざるを得なかった感がある）検出不十分の可能性を否定できない。方位はN－87.5°－W。中世の建物であろう。周囲にも柱筋が揃わない柱穴があるが、同様に遺構検出が不十分であった可能性は否めない。柱穴の出土遺物は不詳であり（出土なし？）、遺物から時期限定ができない。

SB55（Fig.33　下段左）

SD01のE区の北側、SD10に一部かかるように検出。柱穴密集範囲の西部にある。長軸5.20m×短

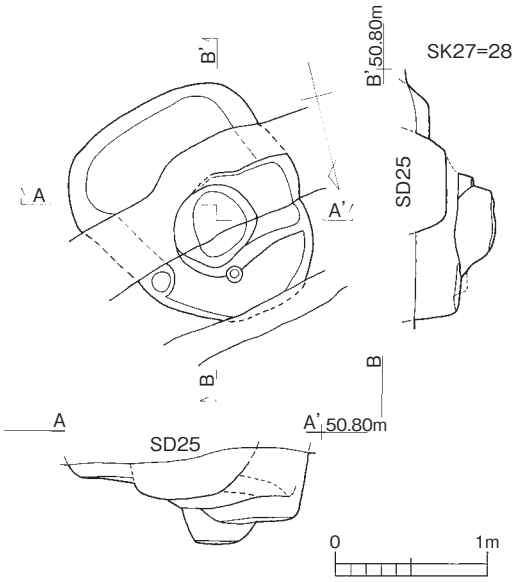


Fig.42　SK27=28（1/50）

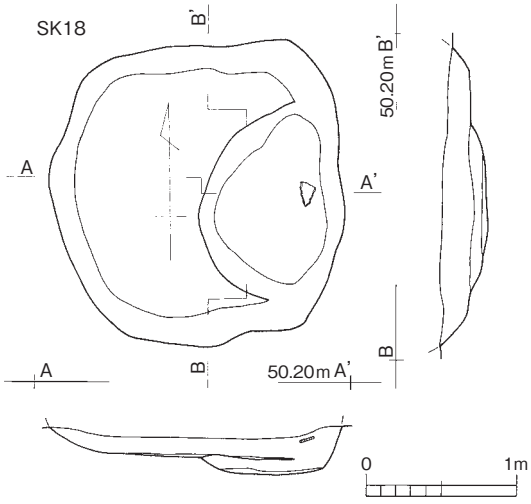


Fig.43　SK18（1/50）

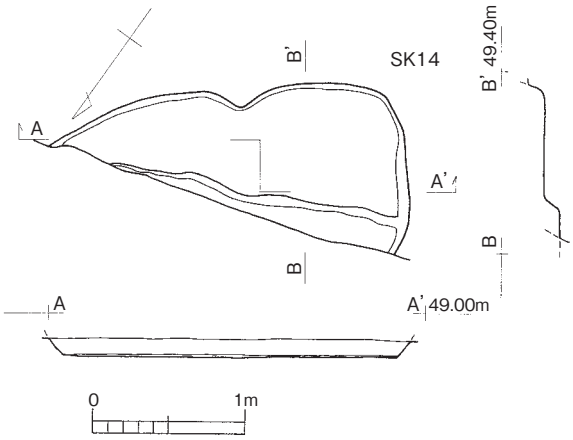


Fig.44　SK14（1/50）

軸3.16mの２×１間の建物。方位はN－48°－W。SB09・13・26等と重複関係にある。柱穴は総じて小さい円形で、一部に柱痕跡が残る。中世の建物であろう。柱穴からは、**SP150・153・157・173**より中世の土師器皿片が出土している。

SB51（Fig.33　下段右）

長軸6.02m×短軸5.96mの３？×３？間の建物。隅柱に不明確な部分があり、梁行と桁行それぞれに隅からややずれて位置する柱穴がある。方位はN－5°－W。柱穴は総じて小規模で浅く不均一・不等間隔で、主柱穴というより壁立ちでもたせる大壁形式のような建物か。中世の建物であろう。SB52と重複関係にあり、方位からSD01の区画と関係か。柱穴からは、**SP1078**より縄文土器？片、**SP1082**より弥生土器片が出土しているが、建物の時期は合致しないだろう。

以上の掘立柱建物は、SB01・18など一部を除き（柱穴掘り方がやや大きいものは弥生の可能性がある）、柱穴が比較的小さく円形基調のものや柱痕跡のある柱穴の大部分は中世に属すると思われ、建物平面で束柱があるものは中世といってよいだろう。建物方位については類似した方位を向くものがグルーピングできる可能性があり、時期別の変遷を示すかもしれない。中世の区画溝である**SD02・03**と近い方位を向く一群もある。ただし細かい時期については、総じて柱穴出土の出土遺物が小さくかつ少ない上に、整理時の混乱により一部の遺物が不明になっており、確認ができない部分がある。しかし、柱穴から中世の土師器皿・坏や白磁皿、土師質鉢などが確実に出土した例もあり（**SP261**；PL.2-6, **SP303**；Fig.90-136～138, **SP541**；Fig.90-139）、これらの柱穴の特徴と掘立柱建物の多くの柱穴の特徴が一致し、またSD01等の弥生時代遺構を切る掘立柱建物が多く、調査区内の出土遺物が弥生時代と中世に分かれることから、大部分は中世（判明した遺物からは12世紀～16世紀までがあるが）のものとしてよいだろう。なおSP261, SP54は掘立柱建物に復元できていないが、SP303はSB21の柱穴である。

また弥生時代の可能性があるとした建物よりも中世の建物の柱穴の方が多く残っている状況からは、いずれにしても遺構構築時の面そのものはさらに後の耕地化で削平されて不明であるが、中世の建物群の屋敷地が成立する頃にそれまでの（弥生時代以来の）地形を若干削平して屋敷地を整地したことが推測される。

②柵列（SA）（Fig.34）

SA01（Fig.34　上段）

東部調査区（Fig.3）の東側で検出。方位はＮ－40.5°－Ｅを測る。全長8.40m。SB50と重複関係にある。周囲の類似する方位の建物や柵列と同様、中世の屋敷地の変遷の一時期の囲郭施設であろう。柱穴の出土遺物は不詳であり（出土なし？）、遺物から時期限定ができない。

SA02（Fig.34　2段目）

SA01にほぼ平行してその西側で検出。現場では「**柱穴列Ａ**」としたものである。方位はＮ－42°－Ｅ。全長は9.20mだが、SB47の東隅の柱穴はSA02の柱穴と同一位置で重複している可能性があり、これを含めると10.15mとなる。SB48＝50と重複するが、重複部分のSP539内の切り合いが不明瞭である。方位の同一性から次のSA03と同一時期に存在した可能性がある。

柱穴の出土遺物は不詳であり（出土なし？）、遺物から時期限定ができない。

SA03（Fig.34　下段）

SA01の東側で検出。小規模な柵列で、全長4.36mを測る。柱穴自体も総じて小さい。方位はＮ－43.5°－Ｅ。中世の柵列と思われ、方位からSA02と共存した可能性がある。

柱穴の出土遺物は不詳であり（出土なし？）、遺物から時期限定ができない。

なお他に現場で「**柱穴列Ｂ**」として記録したものは、柵列ではなく掘立柱建物SB48＝50の西側柱筋に相当する。

③竪穴住居（ＳＣ）の可能性のある遺構（Fig35～Fig38）

以下、竪穴住居としたものは、全て明確なものではないが、土坑とするには浅く規模が大きく、方形ないし円形を思考するものである。いずれも周囲の削平が顕著であるため、掘り込みがきわめて浅くしか残っておらず、床面近くでの検出である。また現場では竪穴の壁があまりに浅いことと、他の遺構との重複で不明瞭であったため竪穴住居としての認識が浅く、床面および貼床掘り方の精査に欠けている部分があり、これらに伴う柱穴等を検出しきれていない可能性がある。

SC05（SX05）（Fig.35）

SD02の北側、Ｘ＝86，Ｙ＝10付近で検出した不明瞭な方形状凹み。底面が平坦であり、主柱穴らしき柱穴もあり（柱穴ａ・ｂ）、4本柱？の方形竪穴住居の可能性があるとみなす。東西5.6m前後、南北は2.6m以上（北側が既存水路により破壊）。SB16・17に切られると考えられる。図示には至らないが、弥生時代中期後半の土器細片が多いが、わずかに後期前半の甕の口縁部がある。

SC13（Fig.36）

Ｘ＝103，Ｙ＝7付近の柱穴密集範囲北側で検出した方形竪穴状遺構。やや不整な隅丸方形を呈する。明瞭な主柱穴は不明だが、床面からの柱穴がある。東西3.44m、南北2.2mだが北側はもう少し延びる可能性がある。北側の段落ちで1/4近くを破壊されている。住居ではないが何らかの機能を有する竪穴建物（小竪穴）か。出土遺物は整理時の混乱で不明になってしまっている。

SC20（SX20）（Fig.37）

SD01のハ・ニ区北側で検出。東西5.05m×南北1.95m以上で北側は既存水路により破壊か。不整形なプランの凹みだが、方形を指向し、底面は平坦である。主柱穴と思しき柱穴が床面よりあり、4本柱の方形竪穴住居の可能性があろう。出土遺物には弥生土器の細片が多いが、わずかにⅣ期前半の須恵器坏身が3片（同一個体か）あり、6世紀末～7世紀前半の住居とも考えられる。

SC72（Fig.38）

SD01のＥ・Ｆ区の南側の調査区端で検出。半分以上は調査区外となる。円形竪穴状に検出し、主

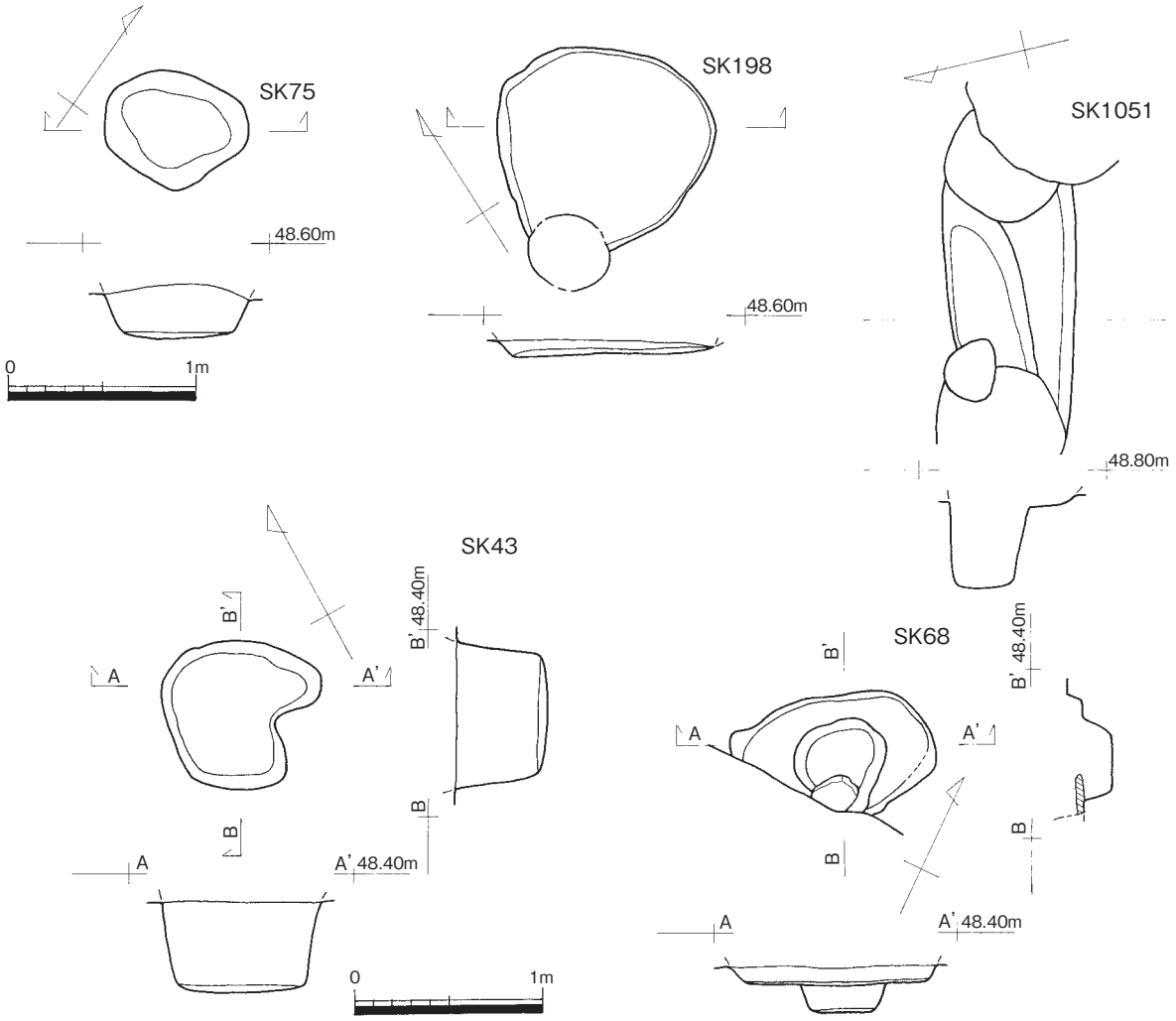


Fig.45　SK75・198・1051・43・63（1/40）

柱穴がやや不明瞭だが弥生時代中期の円形竪穴住居と考える。掘り込みはごくわずかしか残っていない。検出した東西幅は4.14m、推定径は4.3mである。弥生土器の細片が10片ありこれが時期を示すと思われるが（中期後半～末か）、中世の土師器坏皿類の破片が2点あるが、柱穴が多く重複しており混入であろう。

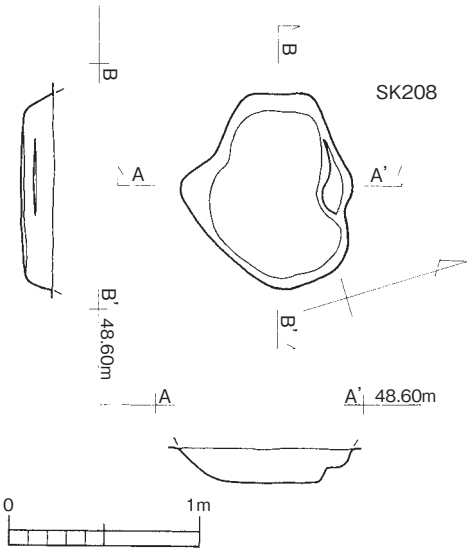


Fig.46　SK208（1/40）

②土坑（SK）（Fig.39～Fig.47）

SK01（Fig.39）（PL.2-3）

SD01のＣ区の北側で検出。SD1068（Fig.72）を切るとみられる。検出面で100cm×70cmの楕円形、検出面からの深さ70cm。底面から浮いた中位で弥生時代後期初頭ないし後期前半頃の略完形の鉢または甕形土器を出土した土坑である。残念ながら、整理時の混乱によりこの略完形土器が行方不明な状況になっており、土器の時期については写真からの推測および同じ土坑から出土した弥生土器の他の小片からの推測である。また現場では遺構番号に混乱があり、小片については「SK04」として上げている。

SK30（Fig.40　左上）

西端調査区で検出。西側が少し凹む。164cm×推定90cm

前後の不整長楕円形、深さ15cm。弥生土器細片が出土し、弥生時代水路網の一部と考えられるSD25に切られるため、弥生時代中期後半までの遺構だろう。

SK08（Fig.40　右上）

SD01のＣ区西で検出。172cm×64cmの長楕円形、深さ24cm。現場では上からの別の土坑の可能性を考えつつも、SD01との重複が不分明なまま掘削している。整理過程で白磁が出土していることが判明し（Fig.90-142）、中世の土坑と判断した。他に弥生土器小片が出土しているが、SD01からの混入だろう。

SK22（Fig.40　左下）

SD01のホ区の東側で検出。104cm×95cmの不整円形、深さ30cm。弥生土器細片が出土しており、弥生時代遺構の可能性がある。掘立柱建物SB01の柱穴掘り方などと類似し、あるいは弥生時代建物の柱穴かもしれないが、組み合う柱穴（土坑）は不明である。

SK11（Fig.40　右下）

SD10の西側、Ｘ＝100，Ｙ＝4付近で検出。100cm×105cmの不整円形、深さは72cm。底面近くは段掘りとなる。覆土中位で弥生時代中期の壺形土器の口縁部を出土（PL.2-4）。現場にて激しい降雨があり、土柱が崩れてしまい出土状況図を記録できなかった。壺は須玖Ｉ式でも古相か（Fig.90-135）。遺構の時期を示す。

SK31（Fig.41　左）

西端調査区で検出。94cm×60cm以上の不整方形、深さ30cm。出土遺物は不明だが、周囲遺構に弥生時代遺構が多く、あるいは大きさや柱を入れるような段掘りとなる形状から弥生時代のやや大型の柱穴の可能性もある。

SK07（Fig.41　中央）

SD01のＤ区中央の南側で検出。108cm×94cmのやや不整な円形、深さ23cm。弥生土器細片を出土。弥生時代の土坑とも考えるが、中世遺構も多い部分であり断定できない。

SK201（Fig.41　右）

SD01のＤ区北側の凹みであるSX01に接

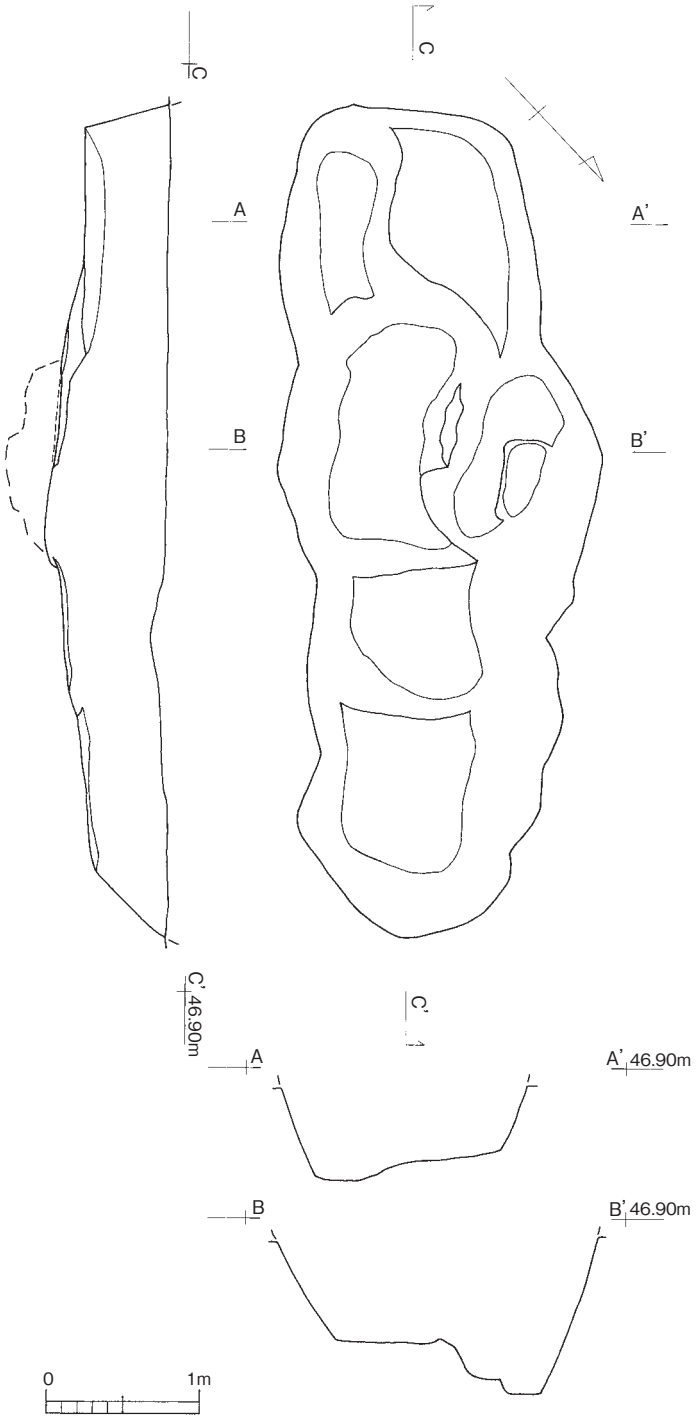


Fig.47　SK535（S=1/50）

して検出。SX01との関係は不詳。88cm×推定80cm前後の円形、深さ20cm。底面近くは段掘りとなる。現場ではSB12の柱穴であるSP144との重複不詳のまま検出・掘削したため、遺構番号と遺物取り上げに混乱が生じている。SB12のSP144には切られる。SK201の名称は整理過程で付したものである。出土遺物がそのため不明であるが、弥生時代の土坑かやや大型の柱穴の可能性があるか。

SK27・28（Fig.42）

西端調査区で検出。推定134cm×112cmの不整隅丸方形、深さは42cm。掘り方断面は段掘り状。弥生時代水路と考えられるＳＤ２５・２６に切られる。現場では弥生土器細片が出土していたはずだが、整理の混乱で不明になっている。確証を欠くが、弥生時代中期後半までの遺構だろう。

SK18（Fig.43）（PL.2-5）

SD01のイ区の北側で検出。160cm×155cmの隅丸方形、深さ26cm。底面は段掘り状。削平のためあまり深さがないが、弥生時代の土坑である。出土遺物には弥生時代中期末～後期前半の土器片（丹塗土器片含む）があり、SD01の存続幅に存在した土坑であろう。

SK14（Fig.44）

SD01のＣ区中央の北側で検出。調査区外の既存用水路に切られる。190cm×90cm以上の略長方形、深さ18cm。北側の底面が段落ちする。出土遺物不詳であるが、中世の柱穴に切られるとみられ、弥生時代遺構の可能性がある。

SK75（Fig.45　上段左）

SB22の平面内で検出。はじめSB22の平面範囲に相当する部分が包含層状に凹んでいたが、若干下げた結果、その南西部分のみが残って図にある土坑状となった。76cm×66cmの不整円形、深さ30cm。出土遺物は不明であるが、SB28の柱穴を切り、中世であろう。

SK198（Fig.45　上段中央）

SD01のＥ区中央に重複して検出。117cm×110cmの不整円形、深さ10cm前後。出土遺物は不明であるが、SD01が完全に埋没した後の掘り込みであり、中世の集落に伴うと考えられる。

SK1051（Fig.45　上段右）

SB18とSB19の柱穴に切られるように検出。東

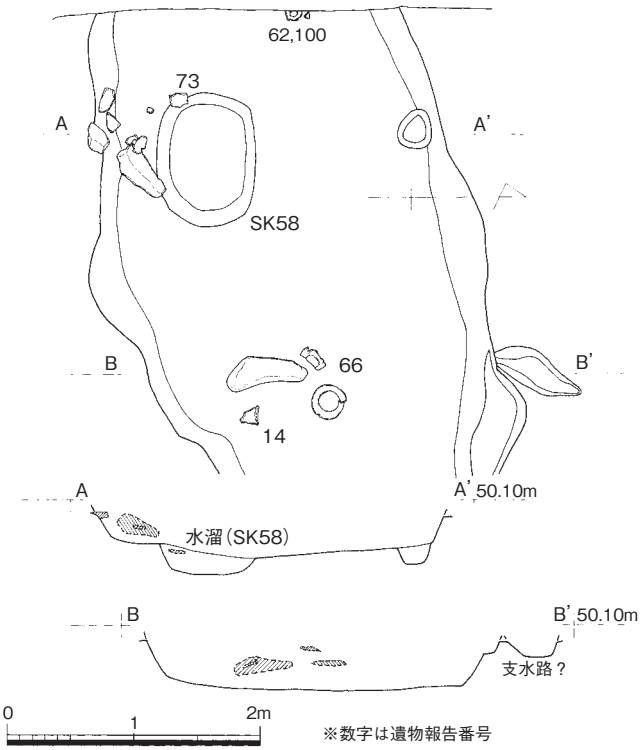


Fig.48　SD01－イ区詳細図（1/60）

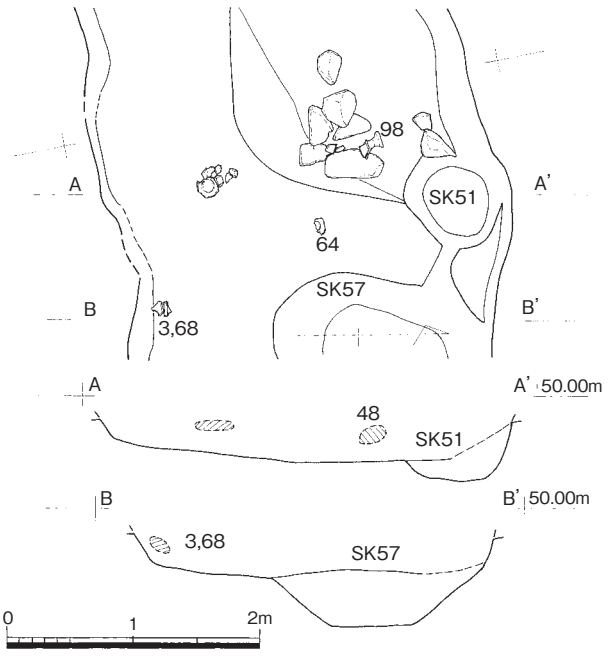


Fig.49　SD01－ロ区詳細図（1/60）

西134cm以上×南北72cmの長楕円形。深さ50cm。南側が浅くテラス状となり北側が溝状に深くなる。出土遺物は不明だが、これを切る２つの掘立柱建物は弥生時代の可能性が高いので、弥生時代中期までの遺構であろう。

SK43（Fig.45　下段左）

SD01のＦ区に重複して検出。80cm×76cmの不整形、深さ50cm。出土遺物には弥生土器小片があるが、SD01からの混入と考えられ、SD01が完全埋没後の掘り込みであることから、中世の可能性が高い。

SK68（Fig.45　下段右）

SD01のＦ区の南側で検出。110cm×70cmの不整長方形、深さは25cm。掘り方は段状で中央が凹み、あるいは柱穴か。出土遺物は不明だが、プラン的に弥生時代の大型の柱穴である可能性がある。

SK208（Fig.46）

SD01のＥ区東に重複して検出。105cm×96cmの不整形、深さ20cm。弥生土器片が出土しているが、SD01が完全埋没後の掘り込みであることから、中世の可能性が高い。

SK535（Fig.47）

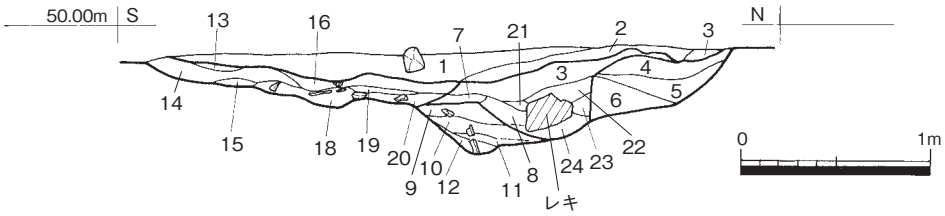
東部調査区で検出した長大な溝状の土坑（PL.12-37の写真右中央）。556cm×218cm、深さ108cm。短辺の各端から中央に向かって段状に底面が下がっていく。整理時の混乱により遺物が不明になっているが、現場では中世の遺物が出土したようであり、周囲の建物群との関連が考えられる。

③溝状遺構（SD）

弥生時代大溝（灌漑水路）SD01（付図1･2，Fig.3，Fig.48～70）（PL.2-7～12-36）

調査区を縦貫するように検出された大溝。延長140mを検出した。検出面の最大幅は4m、平均幅は2～3m前後、深さは残りが良い部分で1.4m前後（ただし遺構の削平状況から＋1m前後の深さはあったと予想される）、断面形は広い逆台形の部分が多いが、場所により狭くなりやや細い逆台形やＵ字形ないしＶ字形になる部分もある。遺構面の削平のため、場所によっては最下層相当の深さしか残っていない部分もある。微地形の尾根筋に沿った形でゆるく蛇行しつつも大局は直線的に西から東へ走行するが、調査区の中央東側で直角に近い形で南に屈曲し、調査区外へ延びる。後述するが、この大溝と同一と考えられる溝が他の調査区でも検出されている。また時期は出土土器（Fig.78～87）に見るように、弥生時代中期後半（須玖Ⅱ式）のある時点で掘削され、後期前半のある時点まで機能・存続したものと考えられる。

調査の都合上、大溝を西から東へＡ～Ｎ区（ただしＮ区は本来の調査対象区外のため確認のみで未



1．黒色色土
2．黒灰色土
3．明灰色粘質土（白色小礫を若干含む）
4．褐灰色粘質土（白色小礫を全体に含む）
5．灰褐色粘質土（粘性強い）
6．灰褐色粘質土（５層＋細砂）
7．暗灰色砂（暗灰色の細砂、白色礫、粗砂礫を若干含む）
8．暗灰色粘質シルト（暗灰色の粘質土＋暗灰色細砂）
9．暗灰褐色砂（暗灰褐色の砂、白色粗砂礫を含む）
10．暗灰褐色砂
11．黄褐色土（やや粘性あり）
12．灰褐色砂礫層（土器を含む、白褐色の小礫を含む）
13．黒灰色土（２層とほぼ同質）
14．暗灰色粘質土
15．暗灰褐色粘質シルト（14層＋灰色細砂）
16．明灰色粘質土（灰色細砂を若干含む）
18．灰褐色砂＋砂質土（灰色細砂＋白色粗砂＋褐色土、土器を多く含む）
19．灰色細砂
20．暗灰褐色砂礫層（灰色砂＋白色粗砂、大小の礫を多く含む）
21．明灰色粘質土
22．灰褐色粘質土（灰色細砂多く含む）
23．灰褐色粘質土（細砂を多く含む）
24．灰褐色粘質シルト（＋細砂、８層に近い）

Fig.50
SD01－ロ区・西側
土層（1/40）

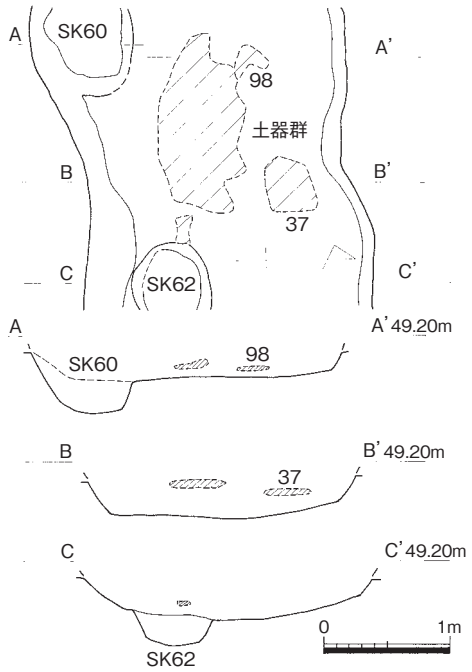


Fig.51　SD01－A区東詳細図（1/60）

掘削）、後で調査区を広げた西側調査区では東からイ～二区に分けて掘削・精査し、遺物も区ごとに取り上げた。また発掘区によっては例えば「E区東」「E区西」のようにさらに小区に細かく分けて精査・遺物取り上げを行っている。発掘区の境界には原則として土層ベルトを設定し、一部を除くベルトで土層の検討・記録を行った。小区の境界でも遺物の出土状況との対応などから必要と思われる箇所では土層の検討・記録を行っている。

SD01の性格についてであるが、調査当初は周囲調査区や２区の一部にもほぼ同時期（弥生時代中期後半～後期初頭）の集落遺構（竪穴住居・土坑・掘立柱建物）があり、集落を区画する条溝ないしは環濠の可能性を考えていた。L・M区付近で直角に曲がる部分やD区でややふくらんで蛇行する部分について、環濠にみられることがある「突出部」の可能性を考えたこともあった。しかし、溝の下半土層は砂・シルトの堆積から、かなり流水があったであろうこと、土層観察から何度も掘り直されていること、さらに溝底面に杭列が多数伴う部分があり井堰の可能性があることなど、灌漑水路とすべきと考えるに至った。水路と考えることにより、例えば溝の何箇所かで大きく幅がふくらむ場所があるが、そうした場所に土坑状の落ち込みが伴ったりするものは溜井的な水溜とも考えられ、また幅が広くなる箇所には杭列＝井堰が伴うことが多いなど、溝の諸特徴を合理的に説明できることになった。

出土遺物は、２区の出土遺物の大半を占める100箱前後が出土している。検出時および上層以下の遺物の多くは発掘区ごとの大まかな層位（上

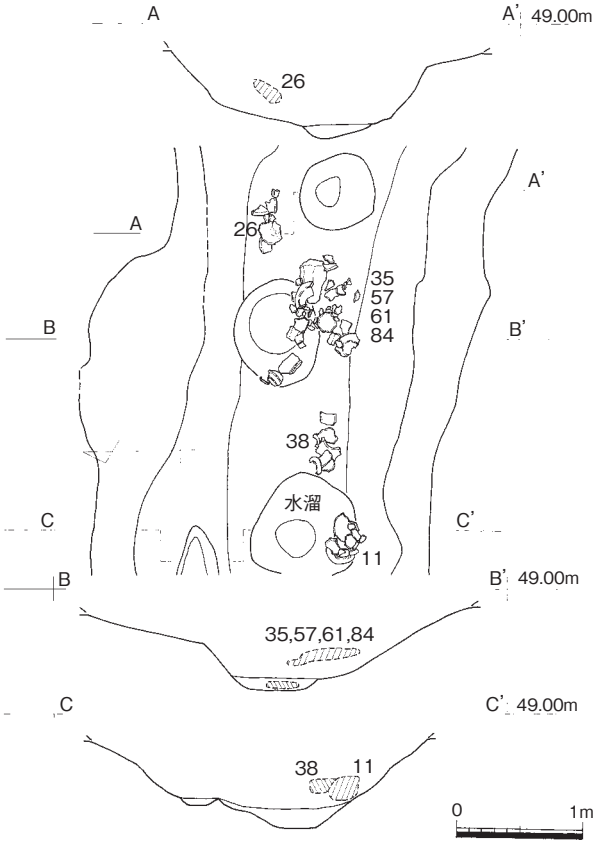


Fig.52　SD01－C区東詳細図（1/60）

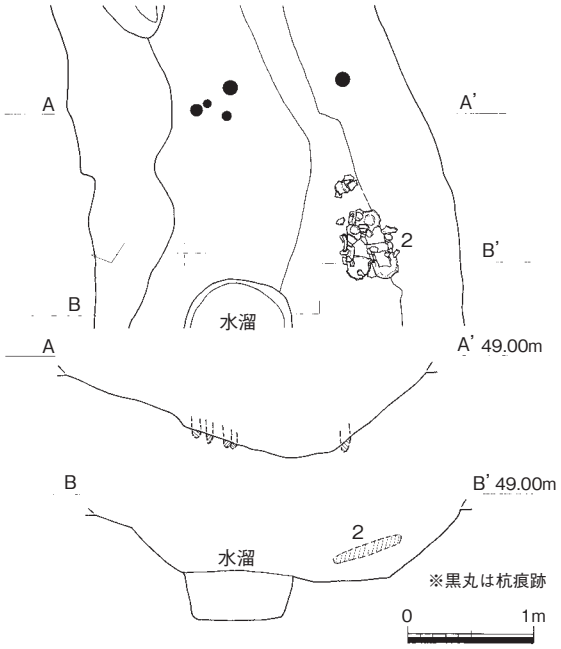


Fig.53　SD01－C区中央詳細図（1/60）

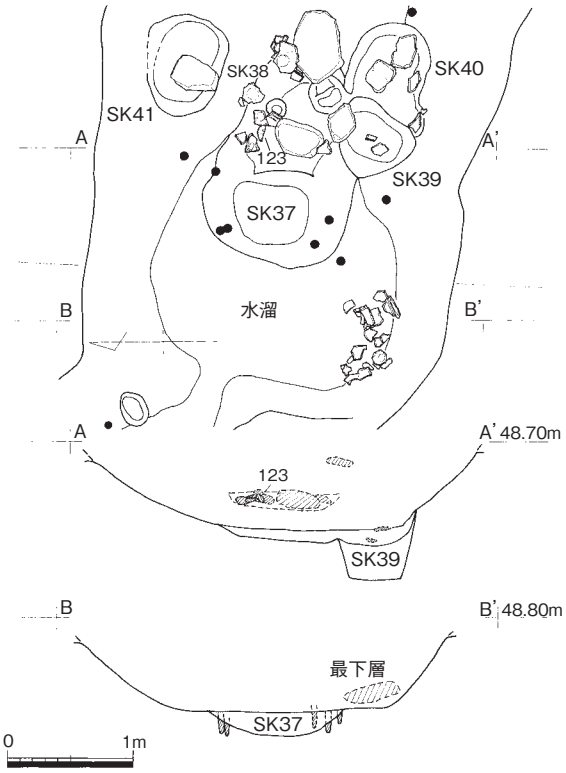


Fig.54　SD01－D区中央～東詳細図（1/60）

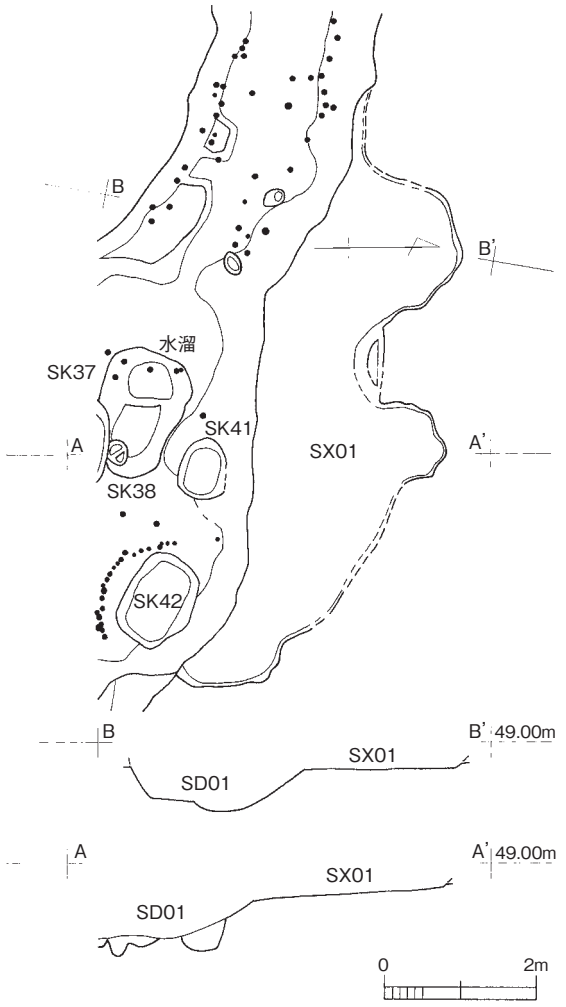


Fig.57　SD01－D区北側凹みSX01（1/100）

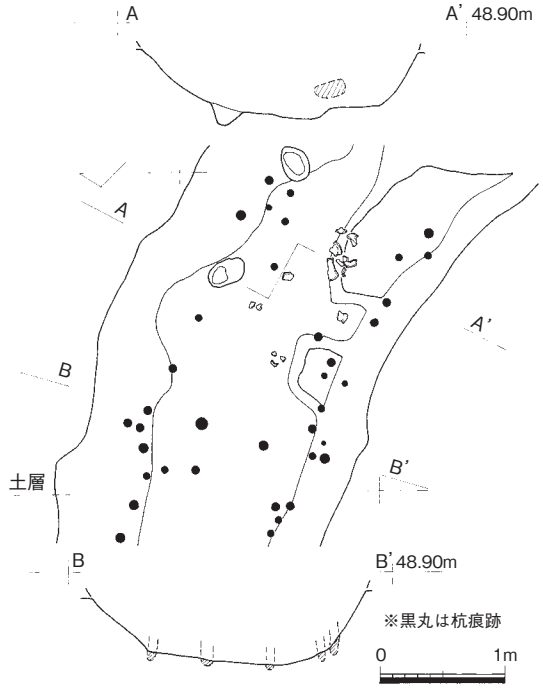


Fig.55　SD01－D区西～中央詳細図（1/60）

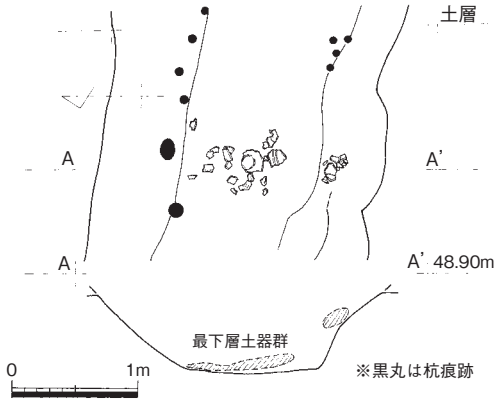
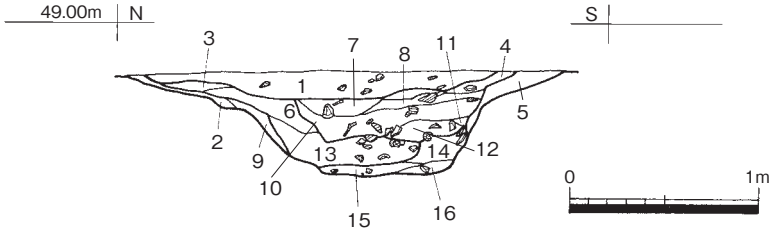


Fig.56　SD01－D区西詳細図（1/60）

層・下層ないし、上層・中層・下層、あるいは取り上げ回数で上層から下層へ「１回」～「７回」など）ごとで一括して取り上げているが、中層以下で遺存率の高い個体が出土した場合や遺物が集中して出土した部分については、出土状況の平面図を作成してレベリングを行い、土器の個体ないし廃棄ブロックごとに番号を付けて取り上げた。これらは溝の時期や、使用期間、祭祀行為などを明らかにするために行った記録方法である。しかし、整理時の混乱および指示不足とチェックミスにより、一部の遺物について、取上ラベルに書いていた番号や層位の注記を省略してしまったもの（D・E・F区の出



1．黒色粘土（灰色シルトの波が走る、土器片あり、礫、砂粒、炭化物を含む）
2．明褐色粘土（炭化物を含む）
3．暗灰色粘土（シルトの波あり、炭化物を含む）
4．暗褐色粘土（礫、炭化物を含む、土器片あり）
5．明褐色粘土（炭化物を含む、小砂粒ブロックあり）
6．暗褐色粘土（炭化物を含む、砂粒ブロックあり）
7．暗褐色粘土（炭化物、砂粒、礫を含む、土器片あり）
8．暗褐色粘土（6、7より明るい、炭化物を含む）
9．明褐色粘土（炭化物を含む）
10．黒暗褐色粘土（粘性強）（炭化物を含む、土器片、礫を多数含む）
11．明褐色粘土（粘性強）（炭化物を含む）
12．黒暗褐色粘土（粘性強）（10に似る、炭化物を含む、土器片を多数含む）
13．暗褐色粘土（炭化物を含む、土器片多数含む）
14．暗褐（灰）色粘土（炭化物を含む、砂粒が混、土器片含む）
15．暗灰色シルト（炭化物を含む、粗い砂粒混、土器片、礫を多数含む）
16．明褐色粘質シルト（土器片あり）

Fig.58　SD01－D区西・東側土層（1/40）

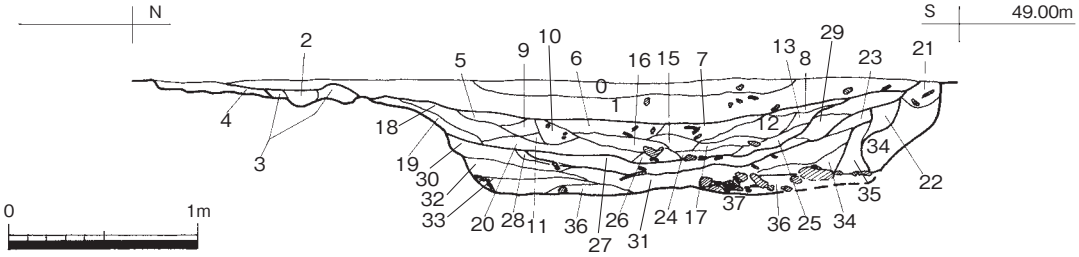
土遺物の大半）が少なからず生じてしまい（発掘区のみを注記）、それらについて記録と遺物の対応関係や出土遺物の層位が不明になってしまったことは大変悔いが残る。ただし今回提示する溝の詳細図中には（Fig.48以下）、出土位置記録が分かるものは挿図（Fig.78～89）の遺物番号を入れている。

以上の問題があるが、以下、SD01の各区の状況について詳述する。

SD01-イ区（Fig.48、PL.3-10）

SD01の検出範囲の最北端。深さ30cm前後しか遺存しない。**SK58**とした土坑状部分は溝上面からの深さ50cmを測り、水溜土坑の可能性もある。溝底面レベルは49.60m前後。検出幅は2.5～3.2m前後だが、削平の結果であり本来はかなり広くなる部分か。周囲地山は礫が多く混入する砂・シルト層で、杭痕跡を検出し難かった。遺物は主に南側から流入したように出土した。出土層位は本来の深さを考慮すれば下層である。Fig.48に出土位置を示す14、62、66、73、100は主に弥生時代後期初頭の土器である。ただし掘り直しや水溜土坑の掘削があり、これらは掘削時期より下るものだろう。また北側に北東に延びる水路の痕跡がある。

SD01-ロ区（Fig.49、PL.2-7･8）　イ区の東側に続く発掘区。検出幅3.0m前後、深さ20～30cmの

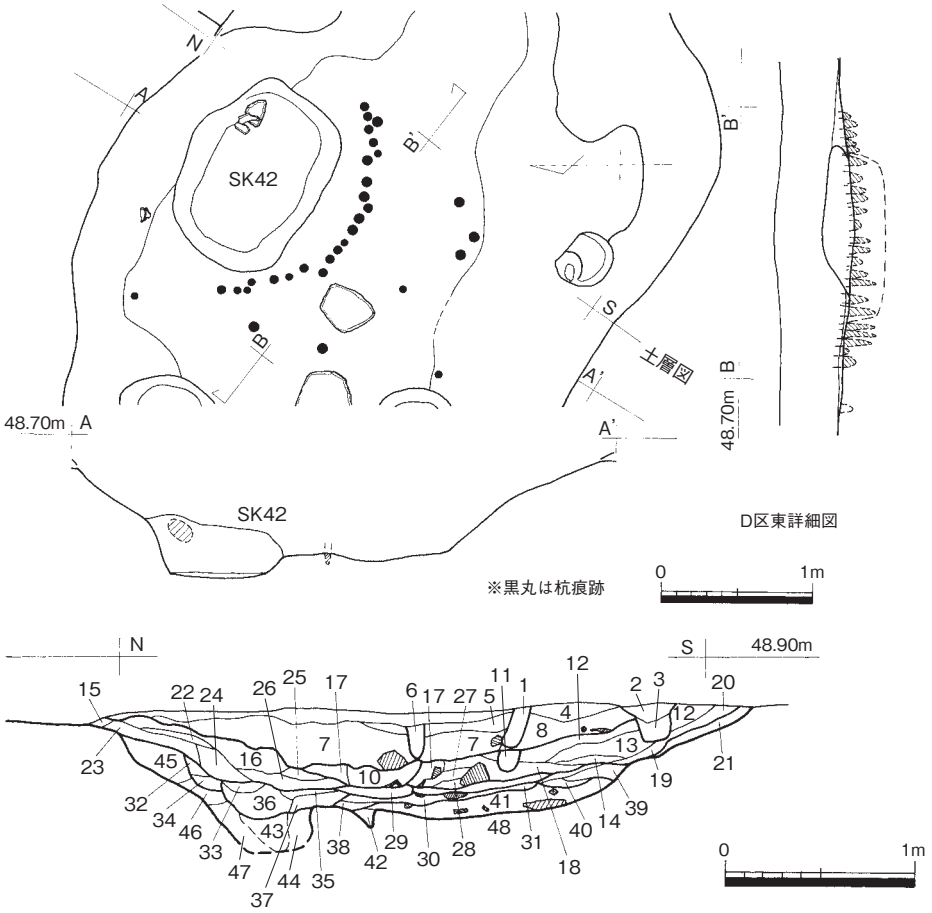


0．にぶい褐色粘質土
1．黒褐色粘質土（砂のブロックを含む、小礫を含む＋土器を含む）
2．茶褐色粘質シルト
3．灰褐色粘質土
4．褐灰色粘質土
5．にぶい黒褐色粘質土（小礫を含む）
6．灰褐色粘質土（土器を含む）
7．にぶい灰褐色粘質土（土器を含む）
8．褐灰色粘質シルト（上部に炭化物を含む）
9．褐色粘質シルト（白色粒子を含む）
10．褐灰色粘質シルト
11．にぶい褐色粘質土
12．褐灰色粘質土（白い斑紋を含む）
13．褐灰色粘質シルト
14．にぶい褐灰色粘質シルト（黄灰色や白色の斑紋を含む）
15．灰褐色粘質土
16．黒褐色粘質土
17．にぶい褐灰色粘質土（北側は砂を含む）
18．褐灰色粘質シルト（白い斑紋を含む）
19．にぶい褐灰色粘質シルト
20．褐灰色粘質土
21．黄褐色粘質シルト（下部に炭化物が多い）
22．明褐色粘質シルト（炭化物を含む）
23．明黄褐色粘質シルト
24．褐灰色粘質土
25．にぶい褐灰色粘質土（上部に土器を含む）
26．灰褐色粘質シルト（上部に土器を含む）
27．にぶい黒褐色粘質土（土器を含む）
28．にぶい黄褐色粘質土
29．褐灰色粘質土（上部に土器を含む、砂粒を含む）
30．明褐色粘質土
31．にぶい褐灰色シルト（上部に土器を含む）
32．灰褐色砂質シルト
33．灰褐色シルト砂（下半に土器や礫を含む）
34．黄褐色粘質土（白色の斑紋を含む）
35．灰褐色シルト
36．灰色砂質シルト（土器や礫を多く含む）
37．明褐色粘土（地山）

※ はレキ・遺物

Fig.59　SD01－D区中央・東側土層（1/40）

遺存。底面レベルは49.60m前後、北辺に**SK51**や**SK57**とした土坑状落ち込みがある。SK57は特に深く、溝上面から約60cmの深さとなる（底面レベル49.30m前後）。断面の様相から人為的掘削と考えられ、水溜土坑（溜井）であろう。溝は土層（Fig.50）の検討から何度か掘り直されている可能性が高い。土坑状部分に接して井堰が本来は伴う可能性もあるが、イ区と同様の地山で杭痕跡の検出が困難であったので不明である。しかし、**SX53**とした凹み（Fig.71）は、貯水をオーバーフローして北側水田に給水するものであろう。遺物は南側からの出土が多いが、ロ区北側底面付近はやや深くなり（Fig.50土層図参照）、底面からやや浮いて石組状に礫が置かれ（掘り直し最下層か）、ここに下半打ち欠きの丹塗り袋状口縁壺が出土した（Fig.83-48）。出土状況から祭祀の可能性があり、また細頸で袋状口縁壺出現期（須玖Ⅱ式中相）で、溝の機能期間のうち早い時期を示すものか。



1．にぶい褐灰色シルト
2．にぶい褐灰色シルト（下部に粗砂が多い）
3．褐色シルト（上部に粗砂が多い）
4．にぶい褐色粘土（灰白色の斑紋を含む）
5．にぶい黒色粘土
6．灰色シルト質粘土
7．黒褐色粘土（土器を含む）
8．にぶい黒褐色粘土（下部に土器、小石を含む）
10. 灰褐色粘土（下部に土器を含む）
11. 黒色粘土（2㎜大の砂粒を含む）
12. 褐色粘土
13. 灰褐色粘土
14. 褐灰色粘土
15. にぶい褐灰色シルト
16. にぶい褐灰色粘土
17. 褐灰色粘土
18. 黒褐色粘土
19. 褐灰色粘土
20. 灰褐色粘土
21. 明褐色粘土（地山とほぼ同じ、灰色の斑紋を含む）
22. 灰色粘土
23. 明褐色粘土（地山とほぼ同じ、灰色の斑紋を含む）
24. 褐灰色粘土
25. 灰褐色粘土
26. 灰褐色粘土
27. 黒褐色シルト質粘土
28. 褐色粘土
29. 黒褐色粘土
30. 褐灰色粘土
31. 黒色粘土
32. 明褐色粘土
33. にぶい褐灰色粘土
34. にぶい褐灰色粘土
35. 褐灰色シルト質粘土
36. 灰褐色砂質シルト
37. 灰褐色粘土
38. 黒色粘土
39. 灰色粘土
40. 褐灰色粘土
41. 灰色砂質シルト
42. 黄褐色シルト（灰色の砂質シルトのブロックを含む）
43. 灰褐色粘土（砂粒を含む）
44. 灰褐色粘土（砂粒を含む）
45. 明褐色シルト（灰色の斑紋を含む）
46. 黄褐色粘土
47. 黄褐色砂質シルト（上部に砂礫（5㎜大）を含む）
48. 明褐色粘土（地山）

※ はレキ・遺物

Fig.60　SD01－D区東詳細図（1/50）およびD区東・東側土層（1/40）

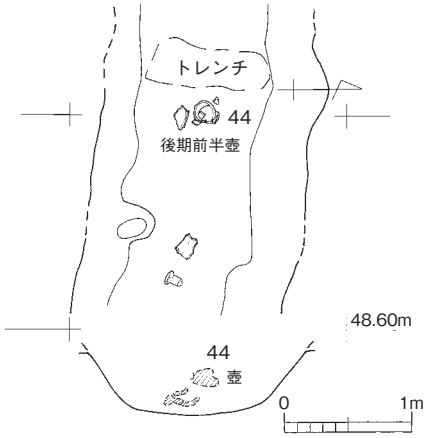
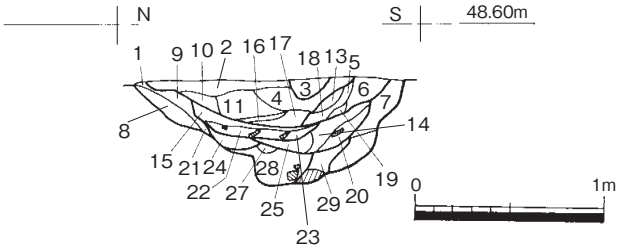
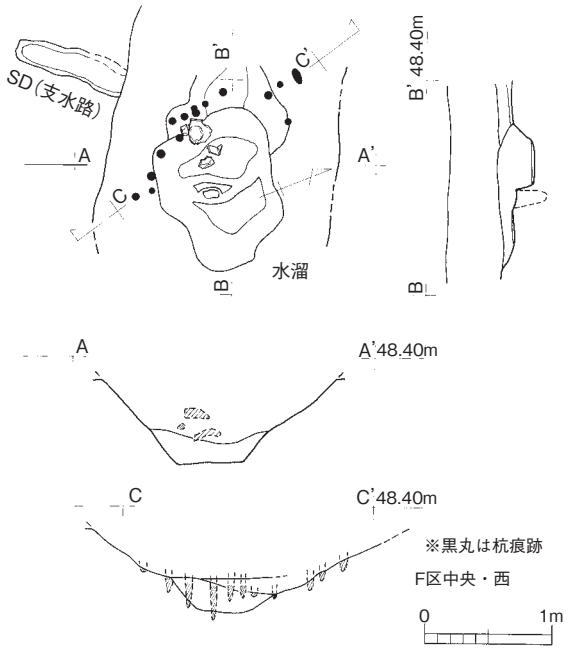


Fig.61　SD01－E区中央詳細図（1/60）



1．明褐色粘質シルト（炭化物を含む）
2．黒色粘質シルト（1より粗い、炭化物、礫を含む）
3．灰色シルト（炭化物を含む）
4．黒色粘土（2より明るい、炭化物を含む）
5．暗灰色粘土（3より暗い、炭化物を少量含む、礫を含む）
6．暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）
7．明褐色粘土（粘性強）（炭化物を含む）
8．明褐色粘土（炭化物を含む）
9．明褐色粘質シルト（炭化物を含む）
10．暗灰色粘質シルト（炭化物を含む、土器片あり）
11．暗褐色粘質シルト（炭化物、礫を含む）
13．暗褐色粘質シルト（礫を含む）
14．明褐色粘土（7より暗い、炭化物を含む）
15．暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）
16．暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）
17．暗灰色粘質シルト（炭化物を含む）
18．暗灰色粘土（17より暗い、炭化物を含む）
19．暗褐色粘土（炭化物を含む）
20．明褐色粘土（炭化物を含む、土器片あり）
21．暗褐色粘土（炭化物を少量含む）
22．暗褐色粘土（21より暗い、炭化物を含む、土器片が多数）
23．暗褐色粘土（赤味あり、炭化物を少量含む）
24．暗褐色粘土（灰色気味、炭化物を含む）
25．暗褐色粘質シルト（大きい炭化物を含む、砂粒を含む）
26．暗褐色粘土（粘性強）（大きい炭化物を含む、砂粒を含む、礫あり）
27．灰色粘土（径2㎝の礫を含む）
28．灰色砂質土（下部は礫が多い、土器片を含む）
29．明褐色粘質シルト（砂粒を含む）

Fig.62　SD01－E区東・東側土層（1/40）



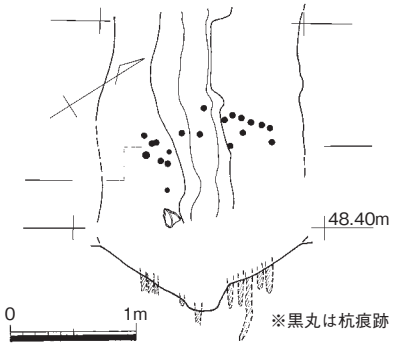


Fig.63　SD01－F区西詳細図（1/60）

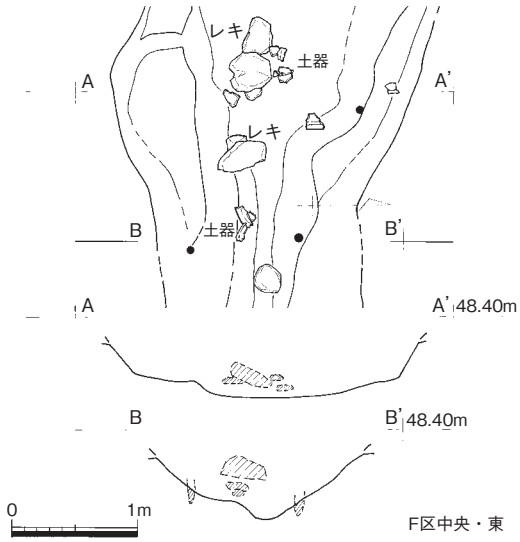


Fig.64　SD01－F区中央詳細図（1/60）

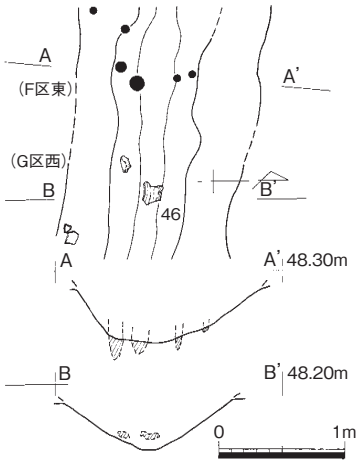


Fig.65　SD01－F区東（～G区西）詳細図（1/60）

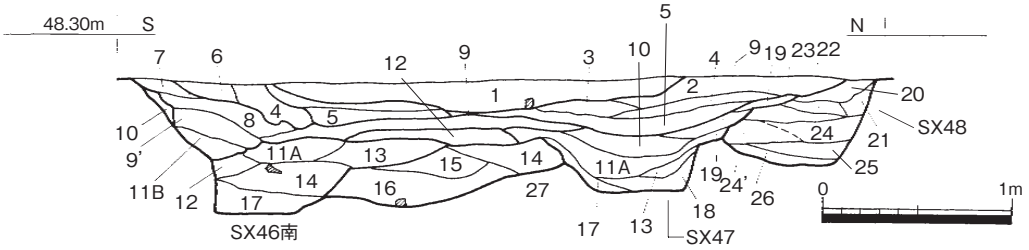
ハ～ホ区にかけては、削平が顕著となりホ区の中途で消失する。これは後世の削平のためであり、本来は8m東のＡ区に続くものであろう。なおニ区（PL.3-9）からホ区にかけて右回りに緩やかに蛇行する。

SD01-Ａ区（Fig.51、PL.3-11）　ホ区の東側8mから現れる発掘区。削平が著しいが、東側は残りがやや良好となる。Ａ区中央（Fig.51）では検出幅2.0～2.5m前後、深さ20～30cmの遺存である。東側は幅4.0m前後に広がる。底面レベルは西側49.90m、東側48.75m各前後を測る。南辺に**SK60・SK62**とした落ち込み（水溜土坑か）があり、その底面レベルは48.60～48.50mである。Ａ区の地山も礫が若干混じる層で、底面に杭痕跡を見いだせなかった。遺物は散漫に土器片が出土した。

SD01-Ｂ区（PL.3-11）　Ａ区の東側に続く10m長の発掘区。西側は幅4.0m前後あるが、東側は削平が顕著で幅2.0m前後の遺存である。地山は大きな礫が露出する砂礫層で、底面の状況が分かりにくかった。Ｂ区西側と中央の落ち込みは水溜土坑の可能性がある。底面レベルは西側で48.80m、東側で48.60m各前後と。遺物は遺存の良好なもの（Fig.83-45他）を含む土器片が散漫に出土した。

SD01-Ｃ区（Fig.52･53）　Ｂ区の東側に続く18m長の発掘区。Ｂ区東端からＣ区西側に直交して「旧河道」（実際は古代～中世の水路）の緩い落ち込みがあり、SD01の遺存は良好ではない。またＢ･Ｃ区間にその水路を境とする段差があるが、これは古い地形であろう。Ｃ区はＢ区よりも遺存が良好となる。検出幅は西側で2.0m、中央～東側は3.0～3.2m各前後である。底面レベルは西側で48.40m、中央～東側は48.20m前後を測る。C区中央から東は北にふくらむように緩く蛇行し、D区西で南東側に走行する。C区中央（Fig.53）では幅3.0m（西）～2.5m（東）、深さ50～70cmを測るが、土坑状に深くなる部分（溝上面から深さ85cm）がある（Fig.53下）。断面から人為的掘削だろう。この1.4m下流側に溝に直交する杭列があり井堰が想定できるから、井堰に伴う水溜土坑であろう（伴う支水路は不明）。この南側下層の土器群一括出土は後期初頭～前半である（Fig.78-２他）。

C区東（Fig.52）では、幅2.5～3.0m、深さ60cm前後を測る。この範囲には底面に3箇所の落ち込みがあるが、溝上面から深さ75cm前後で溝底面からあまり下がらず、杭痕跡（＝井堰）も無いことから（地山はシルト粘質土で検出容易）、水溜土坑ではなく流水作用による自然の落ち込みであろう。遺物の出土は、下層の数箇所に一括廃棄があり、南北双方からの流入がある。主に後期初頭の土器群だが、26（Fig.81）等は須玖Ⅱ式新相か。なおＣ区からＥ区は遺物の出土量が特に多い。



1.　黒褐色粘質土（白色砂礫を含む）
2.　灰黄褐色粘質土（微細黒斑紋含む）
3.　暗灰褐色粘質土（白色砂礫、小礫を含む）
4.　（暗）灰褐色粘質土
5.　黒に近い灰褐色粘質土（白色砂礫と炭粒若干含む）
6.　灰黄褐色粘質土（白色砂礫、黒斑紋を含む）
7.　黄褐色粘質土
8.　にぶい黄褐色粘質土（やや大きい白色砂礫を含む）
9.　明灰黄褐色粘質シルト（白色砂礫と微量の１cm大の炭化物を含む）
9'.　やや黄褐色気味
10.　にぶい黄褐色粘質シルト（白色砂礫を含む）
11A.　灰褐色砂質シルト
11B.　やや黄褐色気味
12.　灰褐色砂層（粗砂層）
13.　灰黄褐色シルト砂（粘質シルトと砂の互層）
14.　灰色砂質シルト（粗い小礫、粘質シルト混）
15.　灰黄褐色砂層（若干粘質土混、粗い砂）
16.　灰色粗砂層（中小の礫を多く含む）
17.　灰黄色砂質シルト（均質、黄褐色土ブロックを含む）
18.　灰色砂質シルト（やや粘性あり）
19.　灰褐色砂層（12層と同質）
20.　灰黄褐色粘質土（白色砂礫と黒斑紋を含む）
21.　灰黄褐色粘質土（白色砂礫含む、黒斑紋やや多く含む）
22.　灰黄褐色粘質土（微量の炭化物粒を含む）
23.　灰褐色粘質土（ややシルト質）
24.　灰黄褐色粘質シルト（しまり弱い、微量白色砂礫）
25.　灰黄褐色粘質シルト（砂礫ほとんど含まず）
26.　にぶい灰黄褐色粘質シルト（混ざりなく均質）
27.　明褐色粘質土（地山）

Fig.66　SD01－H区・西側土層（1/40）

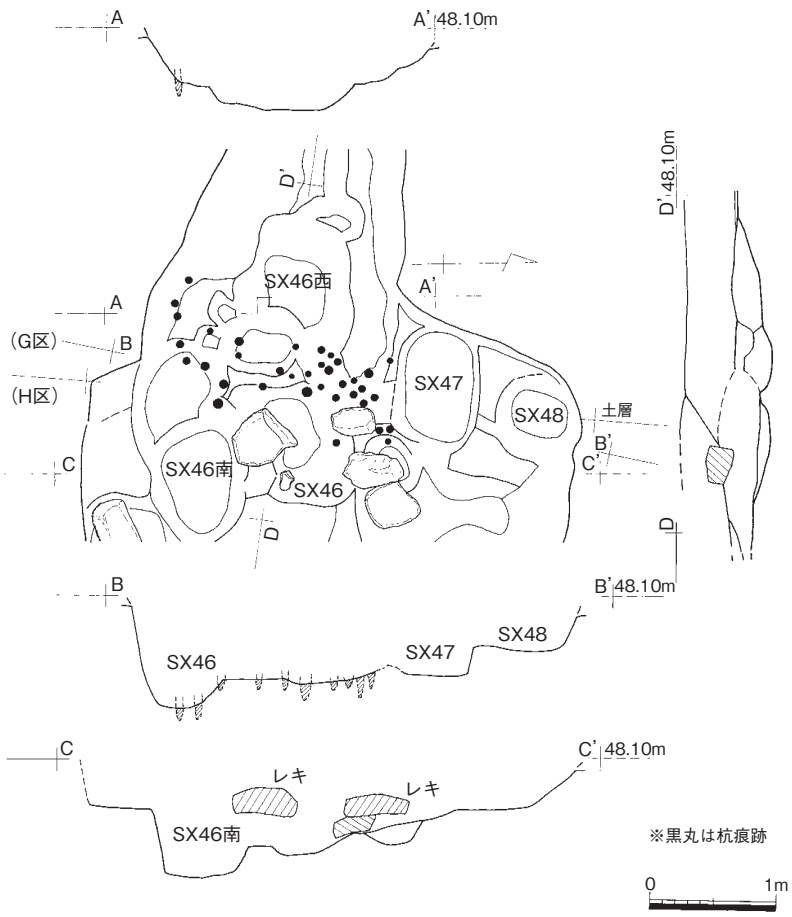


Fig.67　SD01－G・H区詳細図（1/60）

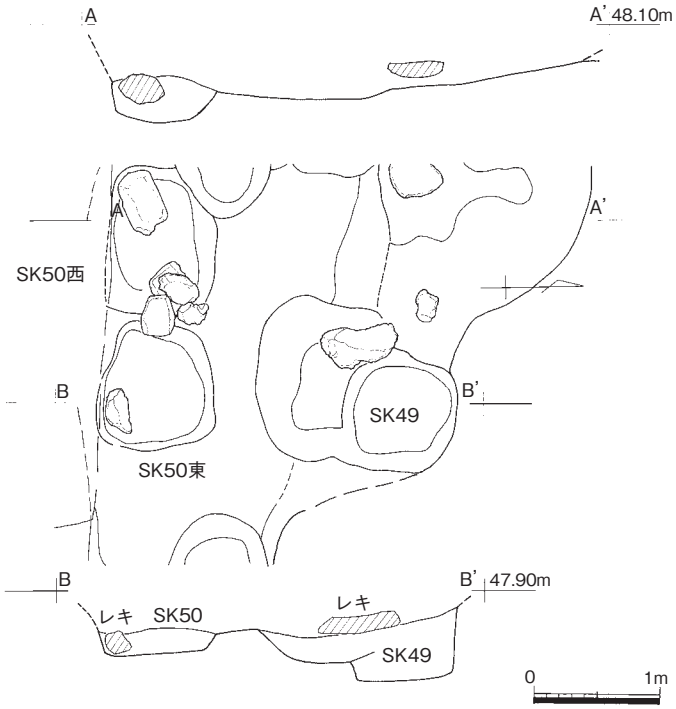


Fig.68　SD01－H区東詳細図（1/60）

SD01-D 区（Fig.54～60、PL.4-12～7-21、8-23）　C区の東側に続く11m長の発掘区。中央で中世溝SD02・03が直交する。中世溝との重複部分を境として西･中央･東の３小区に分けている。D区中央から東は、溝が北側にふくらむように緩い立ち上がりの浅い凹み（**SX01**）が続く（Fig.57）。検出幅はD区西で2.1～2.4m、中央で2.3～3.0m、東で3.0～3.5m各前後を測る（SX01を含むと幅4.0～5.5m）。底面レベルは西で48.20m、中央で48.10m、東で47.90m各前後を測るが、さらに底面には多くの凹みや水溜土坑が認められる。

D区西（Fig.56、PL.4-12、5-14・15）は断面逆台形をなし、深さ65cmである。底面両端に溝流路方向に平行して杭列痕跡がある。その位置からは井堰ではなく、水流を安定させ壁面の流失や崩壊を防止する護岸施設であろう。遺物は最下層底面付近で土器群が一括出土した。溝の機能期間の早い時期に関わるものであろうが、SD01の冒頭説明で述べたように、残念ながら記録と遺物の対応が分からない。D区西～中央（Fig.55）では、断面逆台形で深さ50～60cmとなる。D区西から続く底面両端の杭列が検出されたほか、溝に直交する杭列がある（Fig.55の断面B前後）。杭痕跡の検出数が少ないが、簡易な井堰の存在が考えられよう。この推定井堰に伴う支水路は、やや手前（７m上流）だが**SD1068**（Fig.72）であろう。なお土層（Fig.58）を検討すると、埋没過程に大きな再掘削が２回以上あったことが分かる。

次にD区中央～東（Fig.54）においては底面が広くなり、また**SK37**とした落ち込みが検出された。ここには溝に直交する杭列痕跡が検出されており（Fig.54中央のSK37前後）、少ない

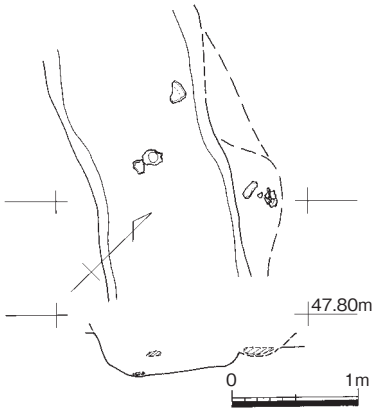
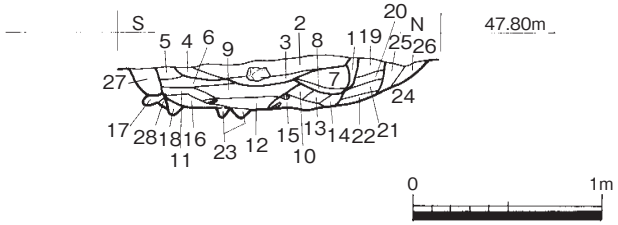


Fig.69　SD01－L区中央～東詳細図（1/60）



1．灰褐色シルト（黄灰＋灰褐）
2．黒暗灰褐色シルト（明黄褐色土含む）
3．暗灰褐色シルト（土器片を含む）
4．（黄）灰褐色シルト（砂礫を含む）
5．黄灰褐色シルト（4より明るい）
6．（黄）灰褐色シルト（砂礫を多く含む）
7．暗灰褐色シルト
8．暗灰褐色シルト（7より暗い、砂礫を少し含む）
9．暗灰色＋黄灰褐色砂質土（砂礫・小礫を多く含む）
10.（黄）灰褐色砂質土
11. 黄灰褐色砂質土（砂礫を多く含む）
12.（暗）灰褐色砂質土（土器片含む、砂礫を多く含む）
13. 暗灰褐色粘質土（10、14より明るい）
14. 灰褐色シルト＋黄灰色土
15. 灰褐色砂質土（土器片、小礫を含む）
16. 明褐色粘質土＋灰色土汚れ
17. 明灰褐色粘質土（16より明るい）
18. 明灰褐色粘質土（砂礫を少し含む）
19.（黄）灰褐色シルト
20. 灰褐色シルト（粘性あり）
21. 灰褐色粘質土
22. 明褐色粘質土（＋灰色土汚れ）
23.（暗）灰色粘質土
24. 明褐色粘土（地山）
25. 明褐色粘質土
26. 明褐色粘質土（25より暗い）
27. 明褐色粘質シルト
28. 明褐色粘質土（＋灰色土汚れ、地山～黄褐色粘質土）

Fig.70　SD01－L区・南東側土層（1/40）

杭数の検出であるが簡易な井堰の存在が推定される。その手前の広い底面（幅２ｍ）の範囲は水溜部分（貯水域）であろう。SK37自体は浅い凹みであり流水作用によるものであろう。またSD01北側の凹み遺構**SX01**はSD01と一連のものだが（Fig.57）、その西半部分はここの推定井堰で溜めた水をオーバーフローして水田に導水する部分と考えられる（Fig.57の点B’あたりからSX01から派生する支水路があったのであろう）。なおＤ区中央～東（Fig.54）の南西部分の壁面最下層に土器群が一括出土している（PL.5-16、6-18）。Ｄ区西最下層と同様に溝の初期に関わるものと考えられ、井堰祭祀の可能性がある（ただしこれも記録と遺物の対応が不明になってしまった）。この部分の深さは60～70cmだが、SK37やその北に接した複数の落ち込み（**SK38･39･40･41**）は溝上面からの深さ75～100cmを測る。これら落ち込みは、土層の検討が出来ていないため人為的掘削か流水作用によるものかは正確には不明で、また推定井堰との関係も不明瞭である。ただし**SK39**は溝上面から深さ100cmで鋭角的な掘り方で、人為的掘削の可能性が高く水溜土坑だろう。また溝壁面（斜面）にかかる**SK41**（溝上面から深さ80cm強）も同様であろう。これらは湧水点まで掘られ、あるいは水路に水流が不足している時に掘られた溜井とも考えられる（同様の土坑がＨ区に密集する）。これらの土坑群がある溝北側のSX01東半は北に大きくふくらみ、取水施設は不明だが（Fig.57の点A’付近から北側に支水路が延びていたと考える）、これらも水田への給水施設の一部をなすと想定したい。またSX01とは反対の南側には**SD472**（Fig.73）があり、この小溝は削平により遺存が悪いが、南側水田への支水路の痕跡であろう。なお溝底面の土坑群の上部に大きな礫が複数出土している。性格は不明だが、後述するＨ区と共通する。完形の石包丁を含む遺物の一括廃棄があることから（PL.7-20･21）、あるいは井堰祭祀（農耕祭祀または水の祭祀）の一部として大きな礫の投棄があるのかもしれない。

Ｄ区東では（Fig.57･60、PL.6-18、8-23）、溝の検出幅が3.5ｍ前後と広くなり、また底面も2.0ｍ前後と広くなる（Ｄ区中央～東の土坑群付近で一度狭くなっていた）。深さは60cm前後、底面北側のSK42は溝上面より80cmを測る。溝底が広くなる西端には、溝に直交する杭痕跡が４本検出され（Fig.60上）、検出数が少ないが、簡易な井堰の存在を推定できる。その場合、Ｄ区中央～東の溝底面土坑群の一部はこれに関係するものか。この杭列の北東側に、土坑状の**SK42**とそれを囲む杭列

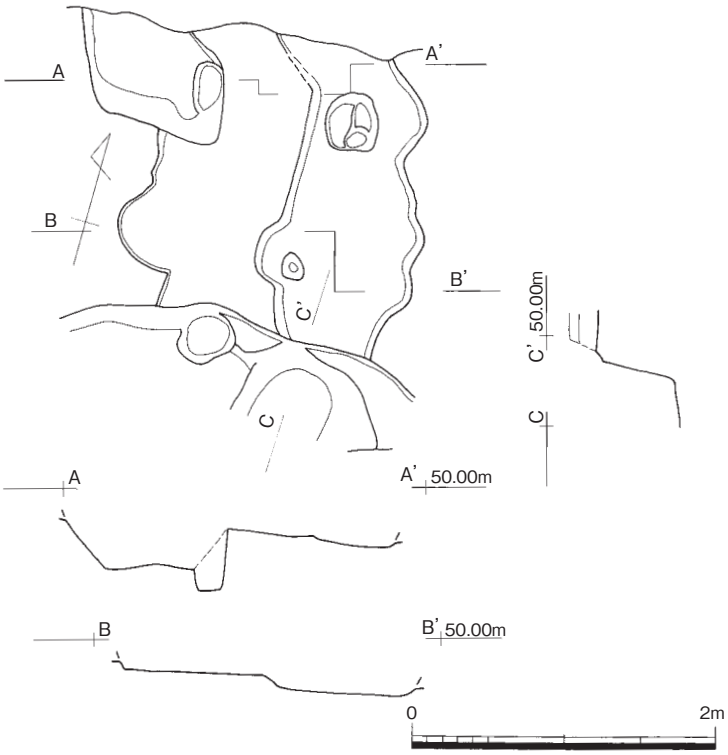


Fig.71　SD01－ロ区・北側凹みSX53（1/100）

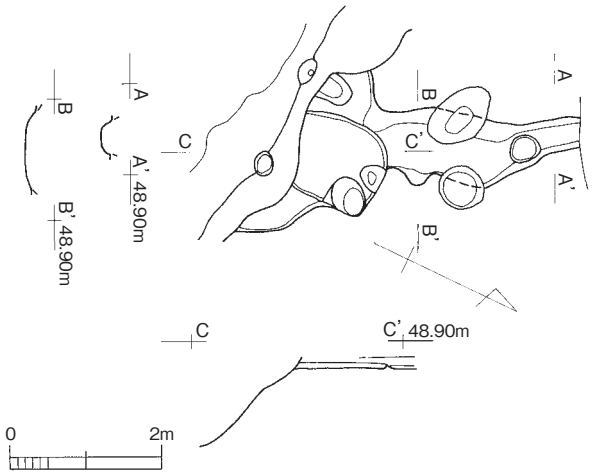


Fig.72　SD1068（SD01－C区東・北側）（1/100）

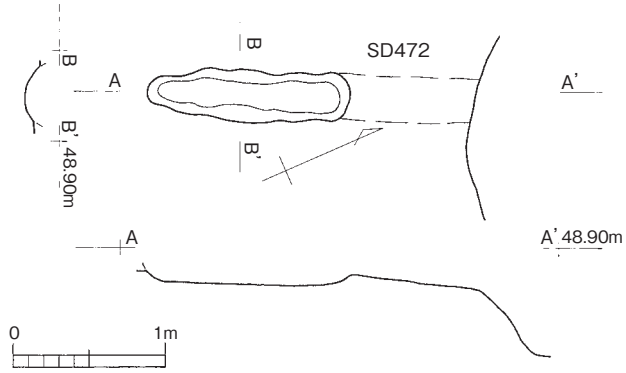


Fig.73　SD472（SD01－D区中央・南側）（1/50）

（PL.7-19）がある。

この杭列は溝の水流を止める位置ではなく意味がやや分かりかねるが、SK42と有機的関係にあるとすれば、おそらくは上述した手前の井堰で溜めた水の一部をさらにSK42の部分に導水して貯水し、北側のSX01東半を通じて水田に給水するという構造であろう。杭列は、溝の水位を調節して溜井的なSK42部分に貯水し（SK42自体も湧水レベルまで掘削されている）、溝側に漏れないようにするための構造物（一種の井堰）の痕跡と想像する。この杭列は溝を遮断せず、同時に水路下流にも一部の水を流すものであろう。

SD01-E 区（Fig.61･62、PL.7-22、8-24、9-25、10-27･28）　D区の東に続く12m長の発掘区。E区西端はD区から続き検出幅が3m前後と広いが、E区西の途中で急に狭くなり（狭くなる箇所はSX01東端と一致）、検出幅2.0～1.5m前後となる。溝底面も1.0m前後からそれ以下となる。溝の断面は逆台形か（Fig.61）、E区東端では底面幅50cm以下と細くなり、断面V字形となる（Fig.62、PL.10-28）。深さは50cm前後でD区に比べ急に浅くなるものではなく、溝幅の狭小化は削平の度合ではなく当初溝幅の相対的反映であろう。E区には杭痕跡（井堰）や水溜土坑（貯水域）が無く、溝の狭さと関係するか。底面レベルはE区西側で48.0m、中央で47.9m各前後を測るが、E区東端は47.7mとなり、底面が狭くなる部分でやや落ち込む。遺物の出土は比較的多く、各層位で多くの土器片が出土したが、掘り直しが何度も考えられ（Fig.62）、層位と土器の時期が単純に相関しない。中央中層で弥生時代後期前半の壺が出土した（Fig.83-44、PL.10-27）。またFig.82-31は西側上層（底面から40cm上）の出土である。

SD01-F 区（Fig.63～65、PL.9-26、10-29･30）　E区の東に続く７m長の発掘区。検出幅は、F区西と東は1.5m前後、中央が2.0m前後である。E区と同様、溝幅は元来の幅の相対的反映であろう。

底面幅は西と東では狭く20～50cm、中央の一部は広くなり幅1.0～1.2mの部分がある。底面レベルは西側で47.75m、東側で47.70mと高低差が少ない。F区西（Fig.63、PL.10-29）は、底面が狭い逆台形またはV字形断面で、溝に直交する密な杭列がある（E・F境界から２m東）。杭痕跡の多くはほぼ垂直に入っている（PL.10-30）。この杭列は井堰が構築されたことを示すが、D区等で見られた落ち込み（溝底土坑）や溝底面が広くなるということがない。この井堰に伴う支水路は、約３m上流側（西側）北岸にSD01の流水方向と逆に鋭角的に接合する**SD10**であろう（Fig.74）。

F区中央西側（Fig.64上）は、底面がやや広い断面逆台形となり、深さ50cmを測る。ここでは溝に斜交する杭列が検出され、井堰の構築が考えられる。推定斜交井堰の右（南）側にきわめて浅く短い遺存の小溝があり、これが水田への給水路の痕跡と推定する。この小溝はSD01に切られるが、SD01は何度も掘り直しされており、ある一時期の井堰と支水路と考えれば矛盾は無い。この井堰の下流側には、溝上面からの深さ60～70cmの落ち込みがあり、断面の状況は人為的掘削の可能性もある。上述の井堰の下流側であるためこの井堰には伴わず、異なる時期の水溜土坑（溜井）であろうか。

F区中央東側（Fig.64下）は、溝幅が上面・底面ともにやや広くなるが（上面2.5m／底面2.1m）（断面A）、水溜土坑は検出されていない。溝の深度はやや浅くなる（深さ45cm）。ここでは大きな礫の廃棄が下・中層に多く見られたが（PL.9-26）、D区のように遺存度の高い遺物の廃棄が必ずしも伴わず同一性格か疑問もある。さらに東側では再び溝幅が狭くなり、底面もすぼまり断面V字形に近くなる（断面B）。底面が細くなる部分で杭痕跡が２箇所検出されたが、残りが悪いとしても井堰痕跡とするには検出数が少なすぎる。しかし井堰を推定すると、手前（上流側）の溝幅が底面幅も広い理由が説明できる（杭が堆積土中に打たれる場合もあり、残りが悪い可能性がある）。

次にF区東側では（Fig.65）、溝幅が狭くなり（1.3～1.5m）、深さは40～50cmの遺存で、断面は緩いU字～V字形になる。F・G区境界で溝に直交する疎らな杭列痕跡があり（断面A）、井堰の痕跡であろう。ここでは井堰手前の落ち込みや底面の広幅化はない。ここが井堰とすれば、これに伴う支水路は1.2m上流側北岸に接続する**SD11**であろう（Fig.75）。SD11はSD01に切られるが、SD01の掘り直しの結果であろう。なお、以上のF区は遺物の出土量が東側のC～E区に比べるとやや減少している。集落域の範囲などとも関係するかもしれない。

SD01-G・H区（Fig.65～68、PL.10-31～12-33）　G区はF区に続く4.7m長の、H区はG区に続く3.6m長の発掘区である。説明の都合上まとめて記述する。G区西側から中央東側は幅1.3～1.7mの断面U字～V字形であるが（Fig.65断面B）、F・G区境界から3.8mのG区東で急に広くなり（Fig.67）、H区では幅3.0～4.0mとなる。底面レベルは、G区西側が47.70m、G・H区間SX46が47.43～47.16m（東に深い）、H区で47.5～47.6mを測る。

G区東は溝幅が2.0mに広くなり、底面もやや広くなり（幅0.5m）、かつ凹む（**SX46西**）。その東側の底面

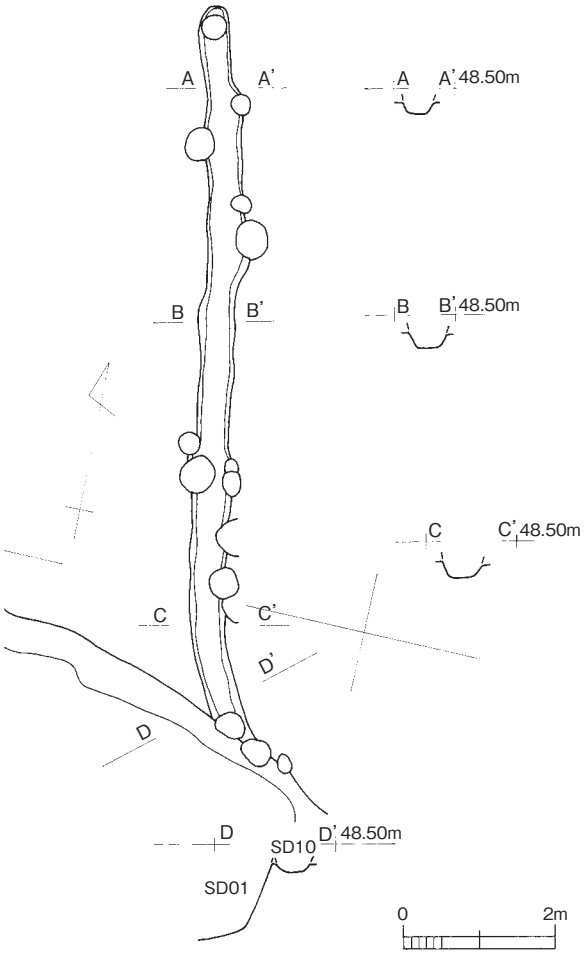


Fig.74　SD10（SD01－E区東・北側）（1/100）

は複数の土坑があるような凹凸があり（**SX46**）、溝がさらに幅3.5mに広がる部分には、溝に直交する杭列群があり、井堰跡とみられる。杭はおおむね垂直の打込みである（PL.10-31）。SX46の北側には**SX47**、**SX48**、東側には**SK49**、**SK50（東・西）**の凹みがある（Fig.68）。これらは土層（Fig.66）や立ち上がり状況から（PL.11-33）、多くは人為的に（何度も）掘削したもので水溜土坑あろうが（SX46南・SX47・SX48、SK49、SK50）、SX46の凹みの一部は井堰の流水作用によるものか。H区東端～Ⅰ区西は溝幅が狭くなり（削平が顕著になるのもあるが底面も狭くなり元来の状況を反映か）、H・Ⅰ区間に最近の小水路が直交しており精査できなかったが、ここにおそらく井堰があってH区の水溜土坑群が伴うのだろう。なお各土坑の底面レベルは、SX46南は47.16m、SK47は47.45m、SK48は47.65m、SK49は47.35～47.18m、SK50西は47.32m、SK50は47.40mである。**SX46**とそれに伴う井堰の支水路は、凹み遺構**SX12**（Fig.75）であろう（幅広の浅い溝とも言える）。この凹みをオーバーフローして北側の水田に給水したのであろう。H区の水溜土坑群に伴う支水路は、G・H区間を境に

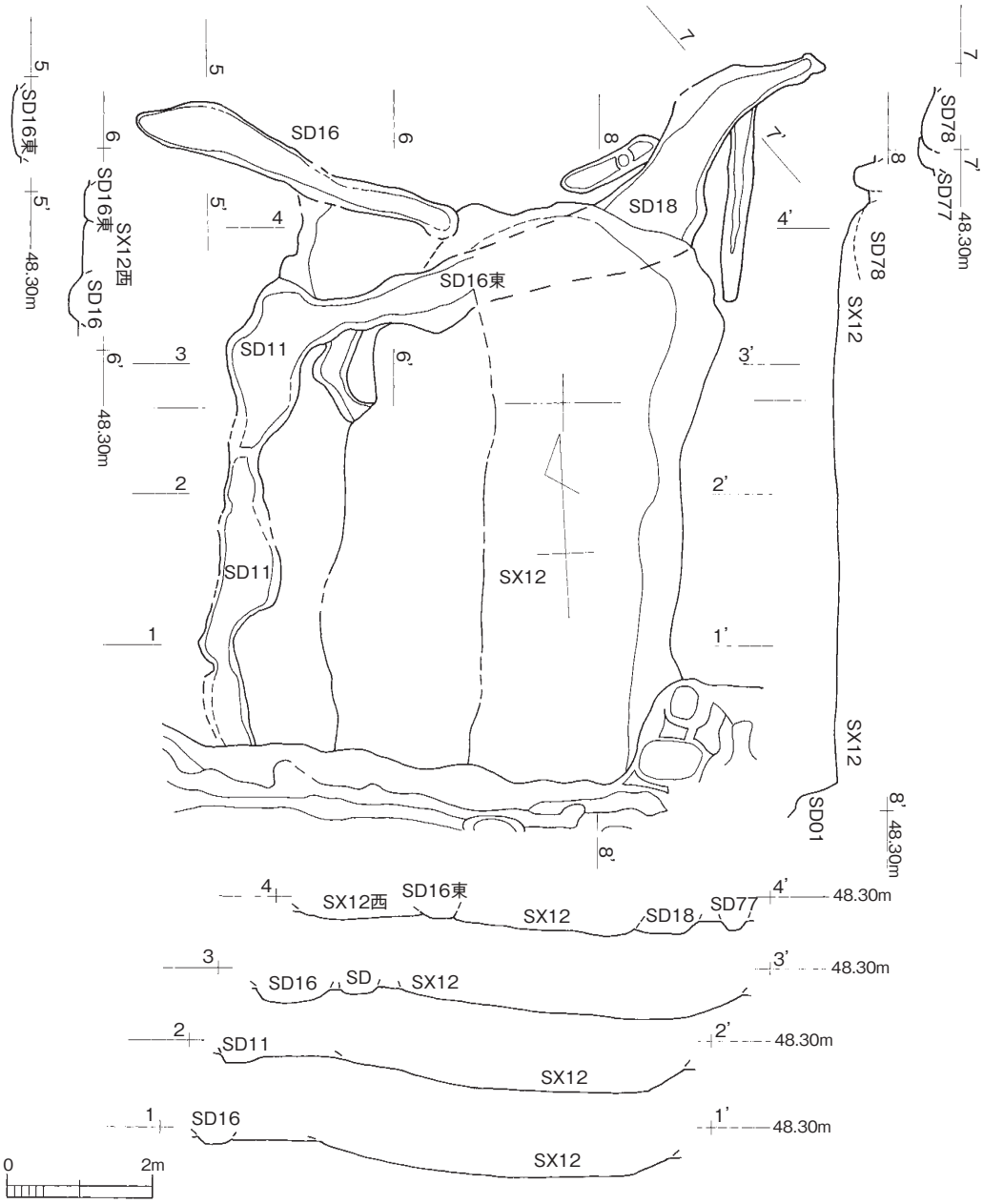


Fig.75　SX12、SD16・16東、SD18他（SD01－F・G区北側）（1/100）

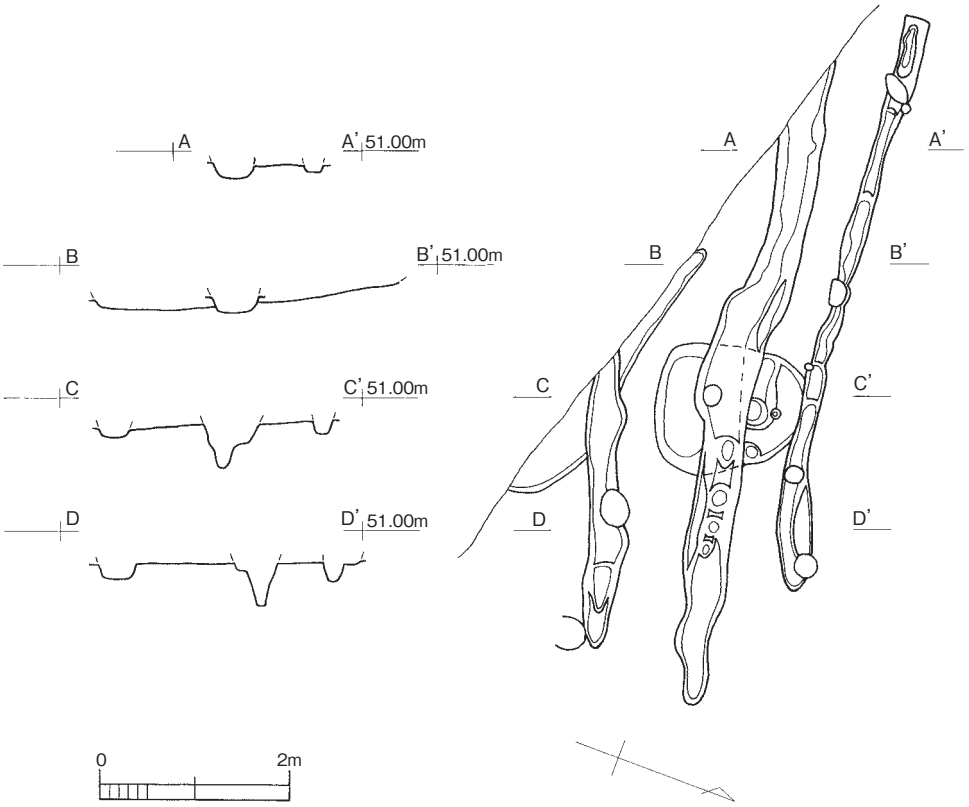


Fig.76　西端調査区SD24・25・26（1/80）

東へ削平が顕著になるため（付図２のX=116付近より東）、削平で失われたものと考えられる。南側は調査区外で不明だが、G・H区の貯水施設状況からは南側にも給水されたと考える。なおD区東に見られたように、H区の水溜土坑の上部に大きな礫の投棄が目立つ（PL.12-34･35）。祭祀行為の可能性もあるが、H区は遺物の出土が比較的少なく（人為的な一括廃棄が無い）、状況がやや異なる。

SD01-Ⅰ～M区（付図２）

H区より東は削平が顕著となり、深さ15～30cm前後しか遺存しない。またⅠ～M区では井堰の可能性がある杭痕跡は検出していない。またこの間は下層部分のみの遺存ということもあるが、遺物の出土が比較的少ない。**Ⅰ区**は西側の幅は1.7mだが、途中で急に細くなり幅1.0mとなる。Ⅰ区中央の凹みは底面レベル47.16mと深く水溜土坑か。他の底面は47.60～47.50mである。**J区**では幅1.4m（西）～2.0m（東）となり、底面レベルはⅠ区とほぼ同じ。J区中央の凹みの一つはやや深く（底面レベル47.32m）、水溜土坑か。**K区**は幅1.6～2.3m、底面は中央で47.50m。K区からL区にかけて北東に突出するように蛇行し、M区で南へ屈曲する。この屈曲の意味は後述する。なお屈曲部分には特に施設はない。**L区**は幅1.2～1.5mの遺存で、底面47.40m前後。中央で若干の土器片の出土があった（Fig.69）。土層を検討すると（Fig.70）、最下層まで複数回の掘り直しがあるのが分かる（Fig.70、PL.12-36）。M区等も同様である（PL.12-37）。**M区**は幅1.5～2.0mで、底面は南側で47.30mとなる。

大溝SD01に伴う溝状遺構（SD）および凹み遺構（SX）（Fig.71～75）

ロ区北側の**SX53**（Fig.71）は、浅い幅広の溝でもある。SD01との切合いはない。北側水田への給水施設であろう。土坑状落ち込み（断面A左）は溜井か。弥生土器片を出土。**SD1068**（Fig.72）はC区東の北側で、SD01の流水と逆方向に鋭角的に接続する浅い溝。接続部は幅広だが北西側は細くなる。SD01に切られるが、SD01は掘り直しがあり、ある一時期の支水路だろう。対応する井堰はD区西の東側。**SD472**（Fig.73）はD区中央の南側約80cmにある1.5m長の小溝で、削平されるが本来はSD01に接続すると推定したい。D区中央・東側の井堰が対応か。**SD10**（Fig.74）は、E区東の北側

にSD01の流水方向と逆に鋭角的に接続し、北端は削平で消失する。F区西の井堰に対応するか。G区北側に接続する**SX12**（Fig.75）は幅広の溝でもあり、**SD16**はその支水路か。G・H区間の井堰に対応する。また**SD11・16東・18**（Fig.75）はF・G区間の井堰に対応する支水路である。

その他の溝状遺構（Fig.76・77）

SD24・25・26（Fig.76）は西端調査区で検出したほぼ平行する小溝。おそらくはSD01水路の西側上流から北側水田に給水する支水路と思われ、何度か付け替えされたものであろう。

SD02・03（Fig.77）は略南北のほぼ平行する小溝。SD02は、南側は調査区外へ延び、北側は消失する。SD03は北側で東に曲がるが削平で消失し、南側は削平で不明。いずれも中世の屋敷地（建物群）を囲む溝で、土師器皿が出土したが（記録あり）、整理の混乱で遺物が不明になってしまった。

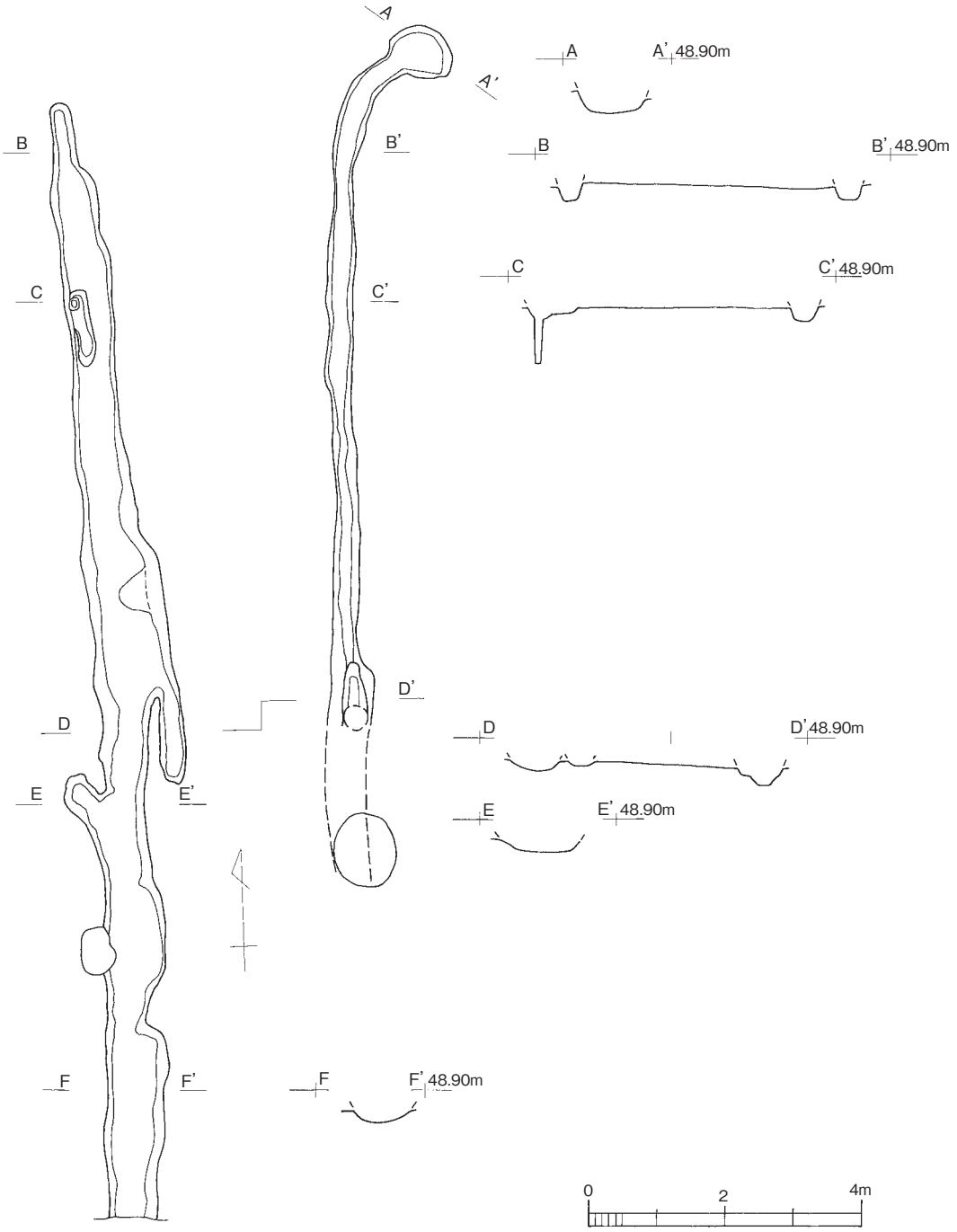


Fig.77　SD02・03（1/100）

（3）出土遺物

①SD01出土弥生土器（Fig.78～89）

中コンテナ約100箱が出土した。中・大型品に完形品は全くない。全体的に摩滅がひどく調整がわ

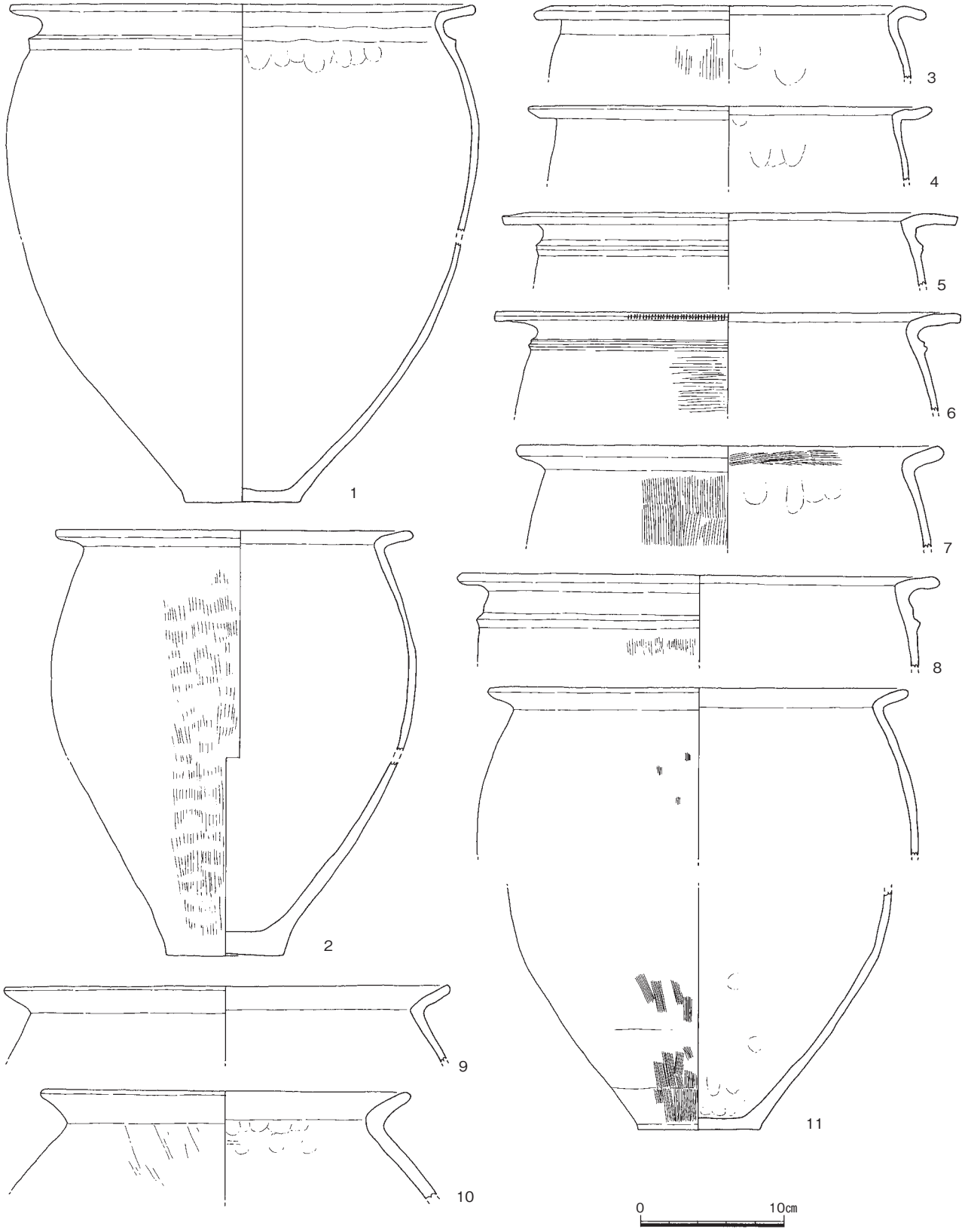


Fig.78　SD01出土土器１（1/4）

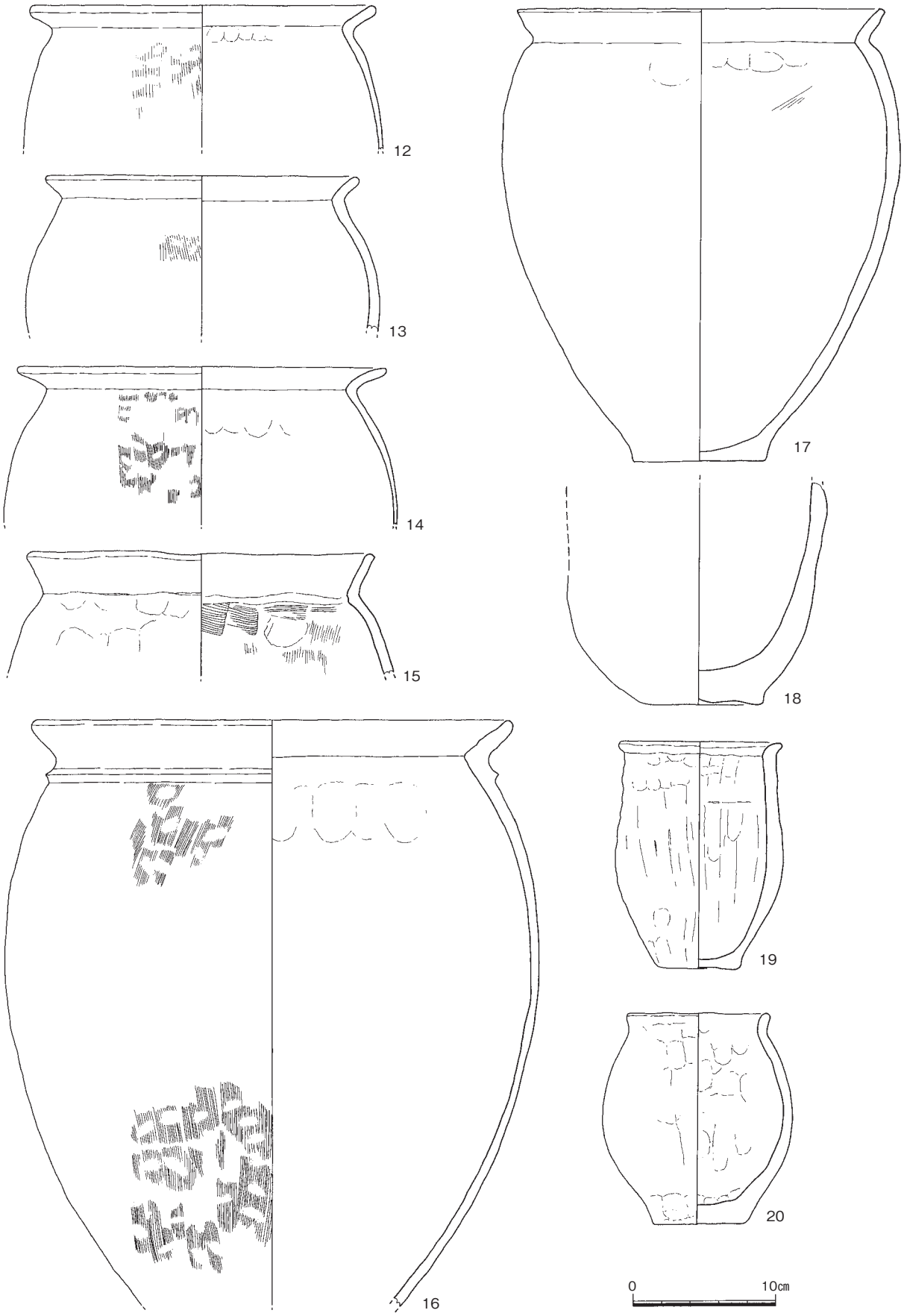


Fig.79　SD01出土土器２（1/4）

からないものも多い。壷・高坏には赤彩のものが多いが、赤彩のほとんどはとれているため図上で赤彩の表現は行っていない。以下器種毎に簡単に説明をするが、甕と壷の底部のみの破片については明確に分けきらないものもあるため、まとめた。出土位置等の情報は文末の一覧表に掲載した。

１～25は甕形土器の口縁部から胴部である。１は1/4の破片。器面の保持が極めて悪く調整はわからない。ほぼ色調は赤色を呈している。遺存部にススの付着はない。底部付近に黒班がある。２は上部と下部で接点が無く、図上復元である。器面の保持が悪く、外面にかすかにタテハケが確認できる。上半部の器面残存部分にススが確認できる。３は口縁端部が下がり、４は逆に上がっている。５・６は外面と内面の上部を赤彩した甕で、ともに精緻な胎土である。６は口唇部に刻目と刻目の中心に沈線を１条施している。７は被熱のため部分的に脆くなり、大きな剥離痕がある。口縁部を中心にススが多く付着しており、そのためかハケ目はよく残っている。８は胎土の粗い甕である。顔料とおぼしき赤い粒が１カ所あるが、赤彩ではないと思われる。９・10は白色に近い色調を呈する。摩滅がひどい。11は同一個体と考えられるが、胴部の傾きがあわず、復元ができない。白色に近い色調で摩滅がひどい。調整は底部近くを除いてほとんどわからない。口縁端と胴上部にススがついていたような痕跡がある。12・13も白色に近く、摩滅がひどい。14・15は黒色系の色調である。15は大粒の砂粒を多く含み粗い。16は胴部下半は被熱のためか全体がやや黒変し、小さな剥離痕がある。黒班も胴下半にある。大粒の砂粒を多く含み粗く、摩滅もひどい。17も胎土が粗い。外面の調整はほとんどわからない。胴下半は赤く、上部はやや黒みを帯びて

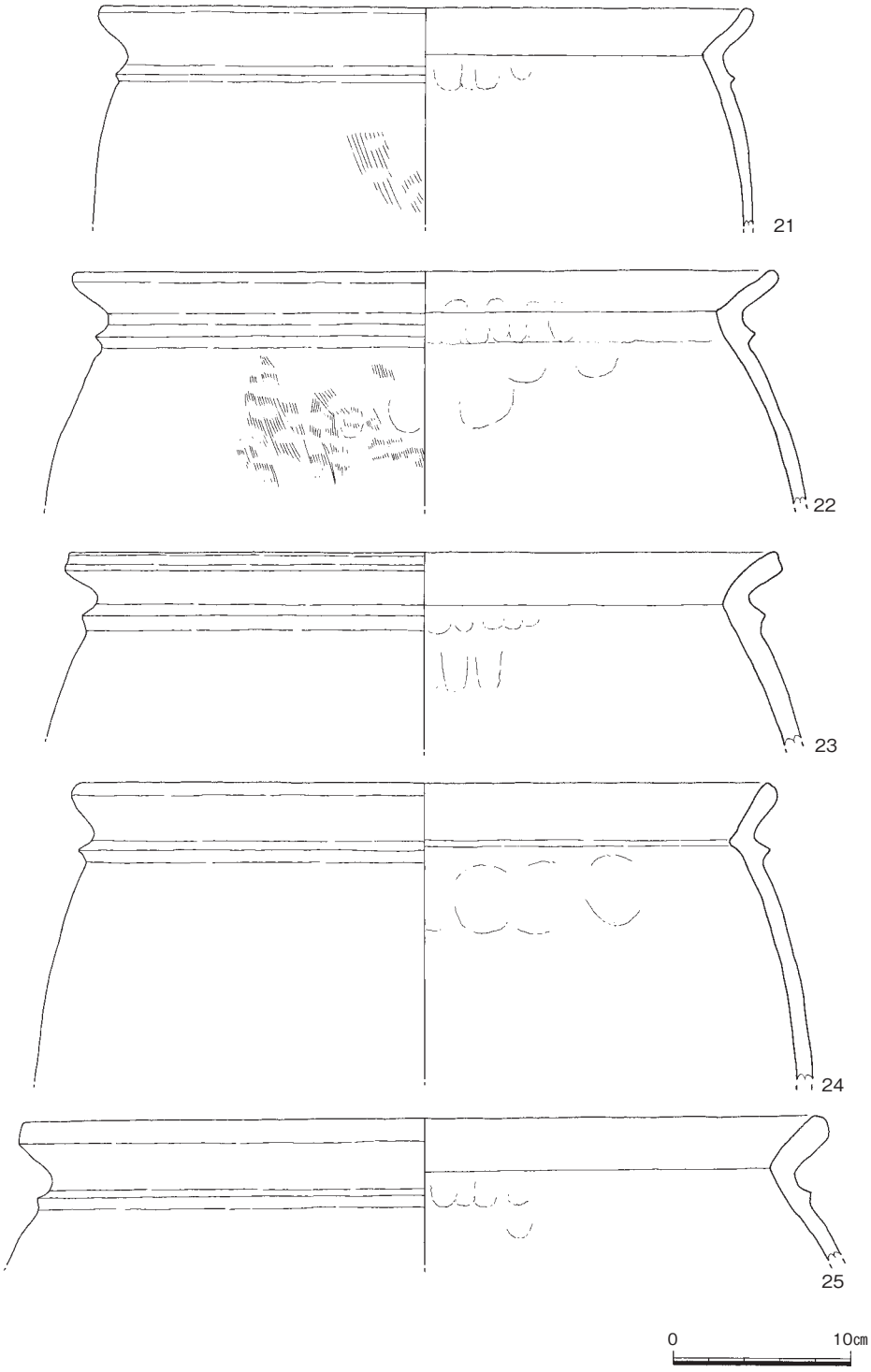


Fig.80　SD01出土土器３（1/4）

いる。口縁部下に黒斑がある。18・19は直立する胴部を持つ小型の甕である。18は１cm以上の厚い器壁である。内面下部の片側にススが付着している。あるいは特殊な用途に使うものか。19はごく短い口縁部が付き、全面ナデ・指ナデで作られた特殊な器形である。器壁も１cm前後と厚い。下部がやや黒変している。20も厚手で小型の甕である。口縁部直下と底部に黒斑がある。全面ナデで仕上げている。21～25は口径が40cm近い大口径の「く」字状口縁で、頸部に断面三角形の突帯を有する甕である。いずれも摩滅が著しく、調整痕が見えないものが多い。また明瞭にススが付着しているものはない。21は口縁端を上方につまみ上げている。22は口縁端と破片下部が黒変している。23～25は白色系～ピンク系の淡い色の土器である。23は器壁が１cmを超える。26は縦に半分の復元完形品である。外面は被熱と摩滅のため、特に上半部が損傷しており、点々と上半部にススが付着している。

27～64は壷形土器の口縁部～胴部である。27は同一個体であるが、接点がない。全体の７割前後が遺存している。わずかに鋤先口縁を成しているが、他の土器に比べ、口縁部内側の突出が少ない。また他の土器は口縁部が水平もしくは外側端部が下方に下がっているのに対して、これは端部が上がっている。頸部も口縁直下まで内傾したままで、胴部の張りも弱く、前期的な器形を成している。器表面の摩滅がひどいが、全面ナデもしくは指押さえで仕上げているようである。28は口唇部と突帯に刻目を持つ。外面は全面赤彩され、内面は不明瞭だが、顔料の痕跡が点々と確認できる。29は赤彩ではないが、胎土自身が赤みを帯びている。器面の剥落が多い。30は摩滅がひどいが、遺存部の両面ほぼ全面に点々と赤色顔料が確認できる。31も摩滅がひどいが、二次焼成を受けているような器表面をしている。胎土には大粒の砂粒を多く含み粗い。32は赤彩の痕跡が見あたらない。33はわずかに赤彩の痕跡がある。口縁部上面に黒斑がある。34は赤彩の痕跡はないが、器表面の色調が赤に近い。35は外面のみに赤彩が認められる。36は27に近い形態だが、鋤先口縁に成っていない。35・36は頸部にかすかに縦方向のハケ目が確認できる。37は両面のごく一部に赤彩の痕跡があるが、塗布範囲はわからない。38は「く」字状の口縁部であるが、甕のように頸部内面に稜を持たない。外面と口縁部内面に赤彩を施している。頸部のやや下に黒斑がある。摩滅のため調整はほとんどわからない。39は頸部に２つの三角突帯を持ち、外面に赤彩している。40・41は胴部中央にM字突帯を２条持つ。40は破片の上部に黒斑がある。黒斑の下部は木材が当たっていたためか、１cmの幅で線状に黒色とともに粘土が剥げ落ちている。外面には赤彩状の痕跡があるが、明瞭ではない。41は外面に赤彩の痕跡はないが、色調が赤っぽい色で、内面は白色系の色

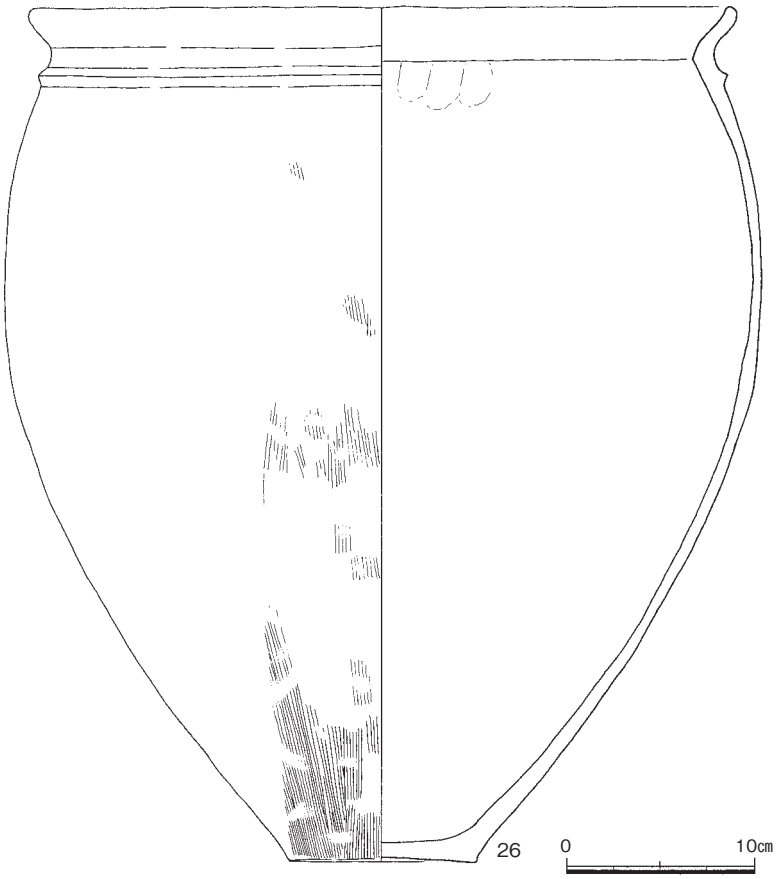


Fig.81　SD01出土土器４（1/4）

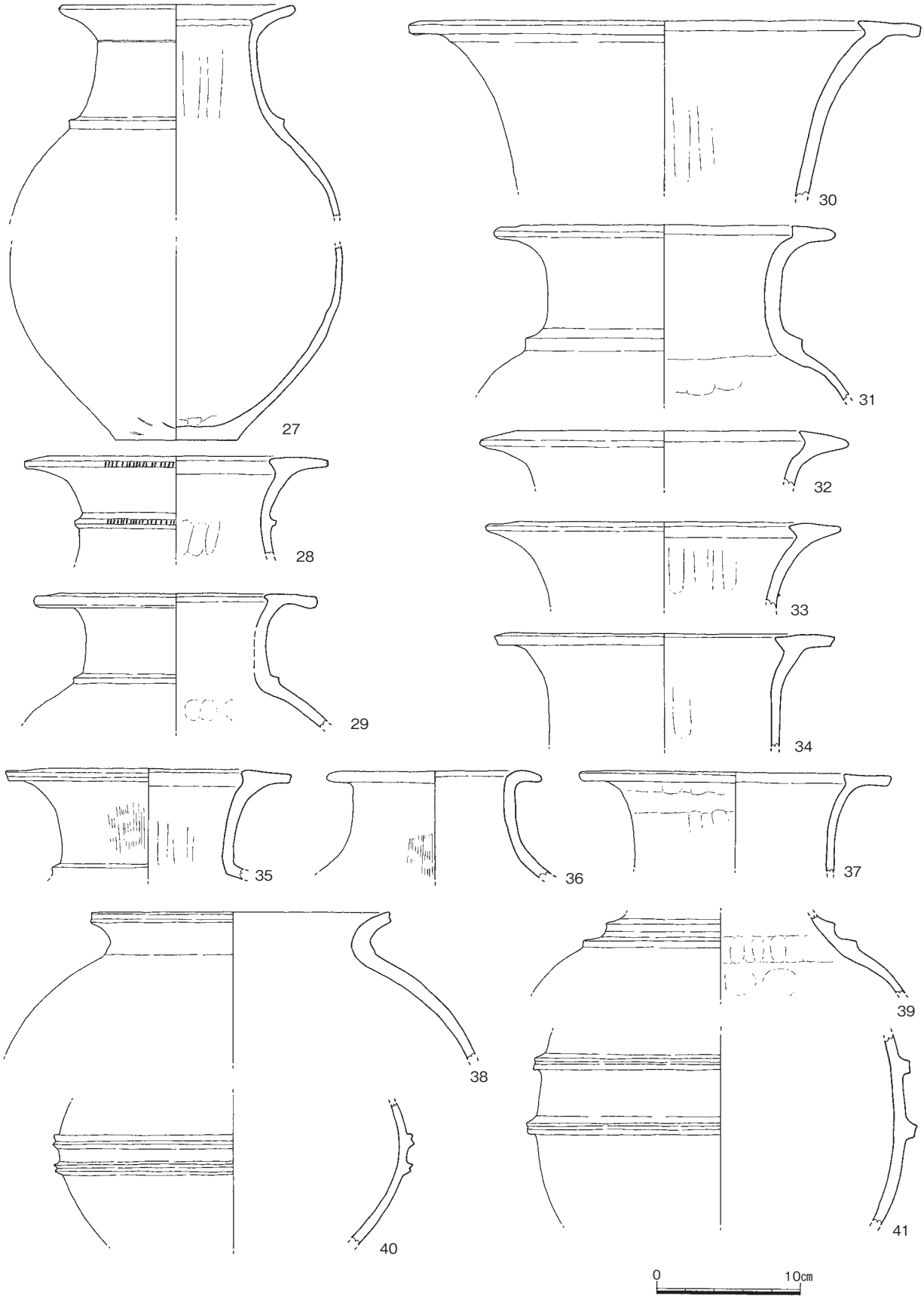


Fig.82　SD01出土土器５（1/4）

調であるが、数カ所に赤い部分がある。

42～52は袋状口縁を持つ壷・長頸壷である。いずれも白色に近い淡い色の色調を呈している。42は全体の８割ほどが遺存している。全面で器表面がかなり荒れており調整はよくわからない。器表面が剥落している部分が１カ所ある。底部から胴中央にかけて黒斑があり、その部分にわずかにハケ目が

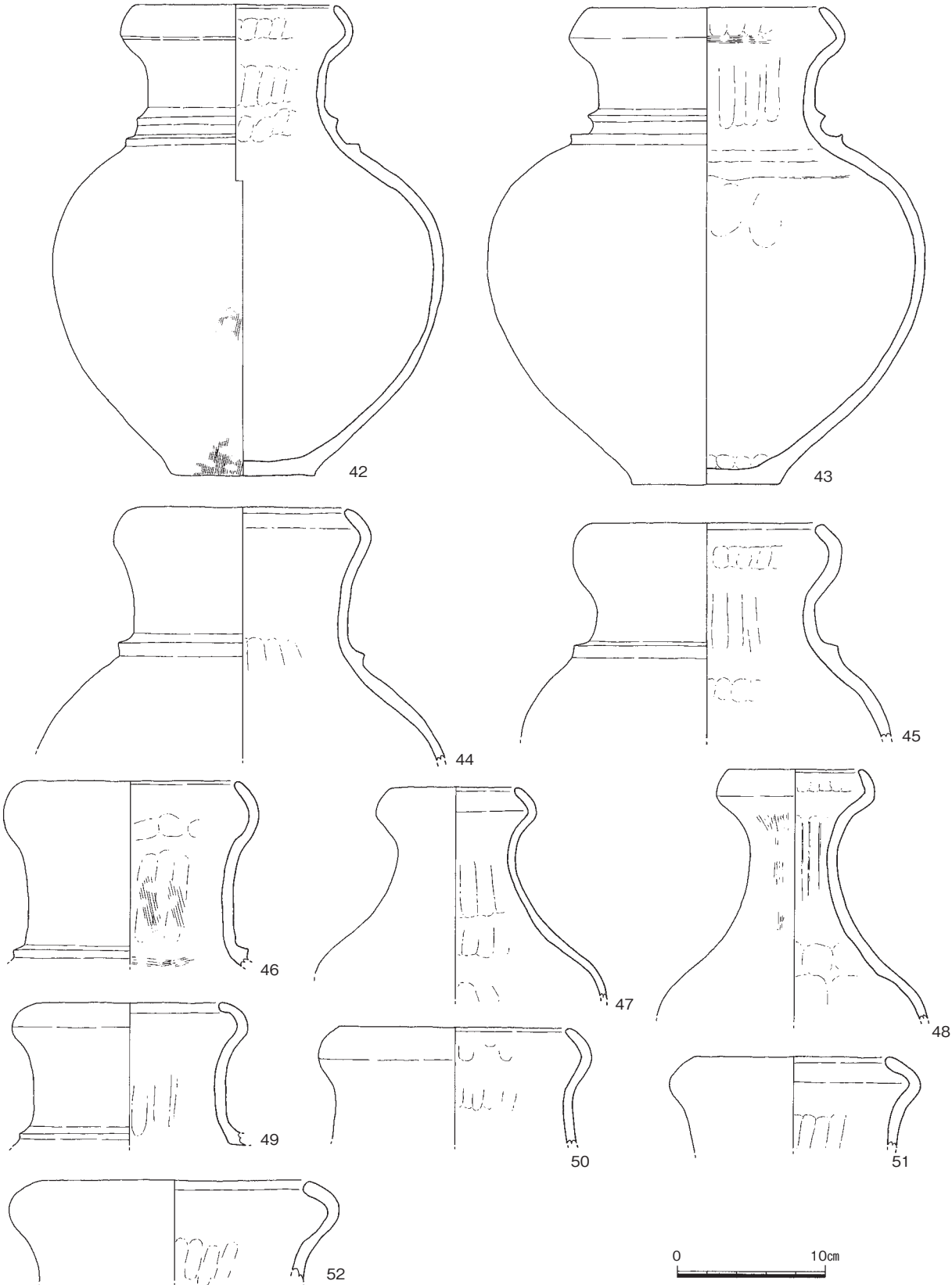


Fig.83　SD01出土土器６（1/4）

残存している。43は全体に鉄分が多く付着しているためか器表面がかなり荒れ、調整はわからない。胴最下部に黒斑がある。44の胎土には赤色顔料らしき粒が点々と見られるが、顔料を塗布したというより、胎土に顔料の粒を含んでいるようである。45が外面にかすかに赤彩の痕跡がある。口縁端に小さな黒斑がある。外面の調整はまったくわからない。46は内面にハケ目が施されている。47・48は頸部がすぼまる器形で長頸壷に分類できる。47は口縁部以外の内面が黒く、外面下部に黒斑がある。他は白っぽい色調である。内面の黒色は頸がすぼまっているため焼成時に酸素がまわらなかったためであろう。48は外面が赤彩で、頸部は絞っている。頸部から下の内面は黒い。49の外面はていねいになでており、赤彩痕がかすかに残っている。口縁部に小さな黒斑がある。50は外面にのみ赤彩痕が点々と認められる。51は両面にわずかに赤彩の痕跡がある。52は外面にかすかに赤彩が残っている。

53～84は甕・壷の底部である。53・54・56などは壷で、65～80などは甕であるが、83や84など大型品はどちらか判断がつかないものがあるため、まとめて掲載した。明確に壷である底部を見ると、部

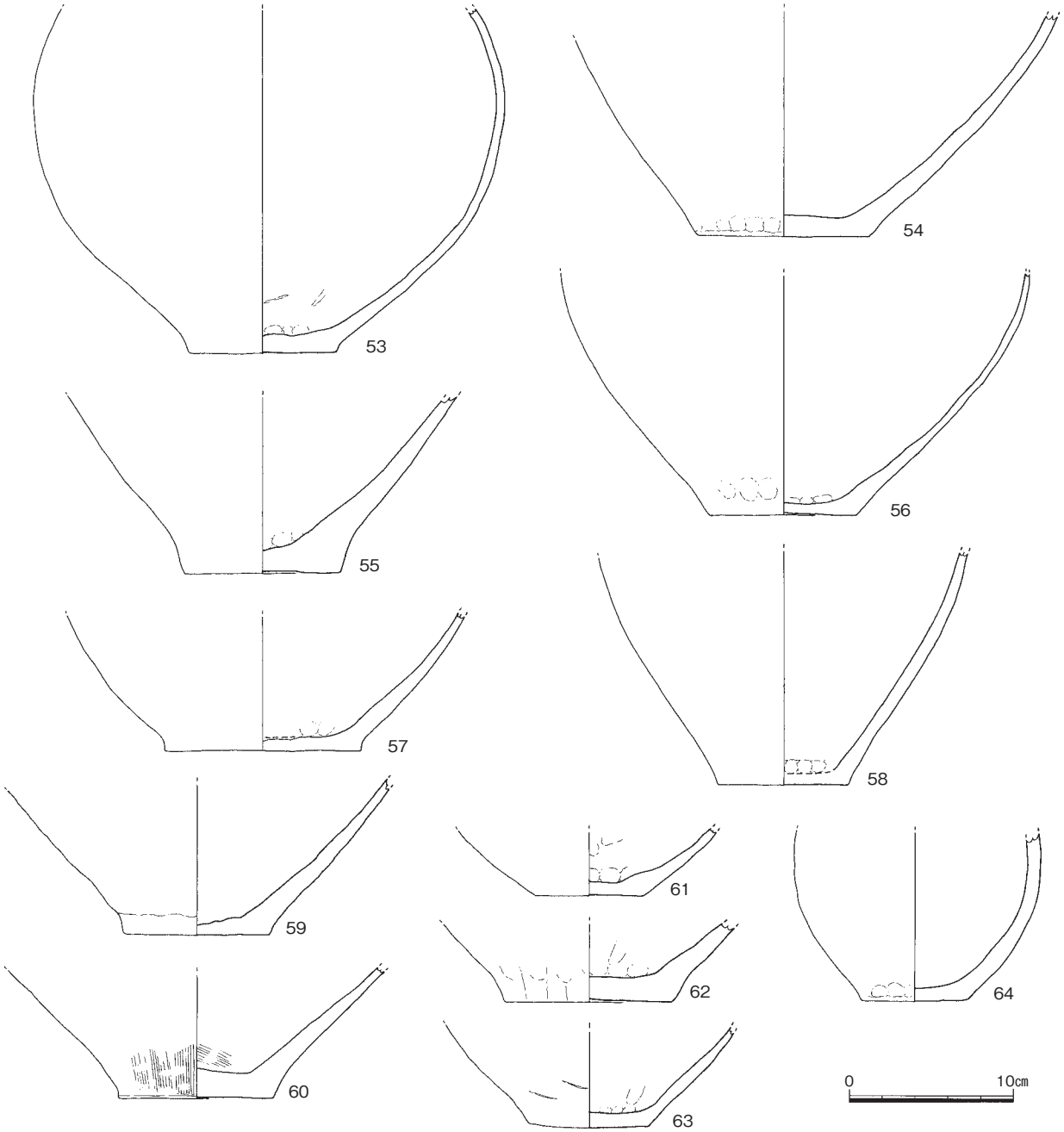


Fig.84　SD01出土土器７（1/4）

の形態は水平もしくはわずかな上げ底で、胴部と底部の境の稜は明瞭である。器面の摩滅が激しいため調整は不明のものが多いが、外面はナデ・ミガキ状ナデ、内面はナデ・指押さえが基本と思われる。53は壷で、内面底部周辺は部分的に剥離しているなど、器面の荒れが激しい。胎土には一見赤色顔料状の３㎜大の粒を点々と含んでいる。また底部全体から胴中部にかけて大きな黒斑がある。54・

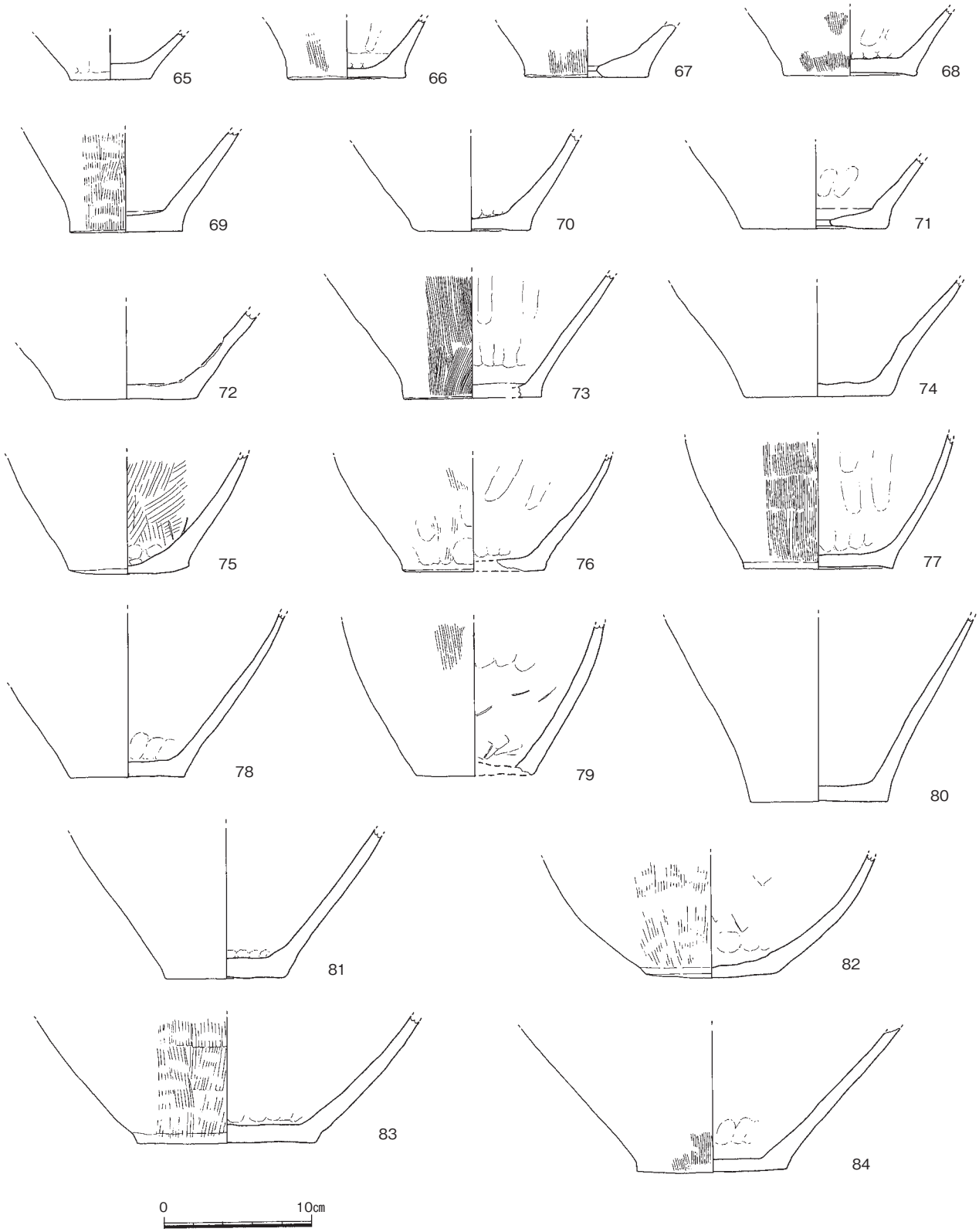


Fig.85　SD01出土土器８（1/4）

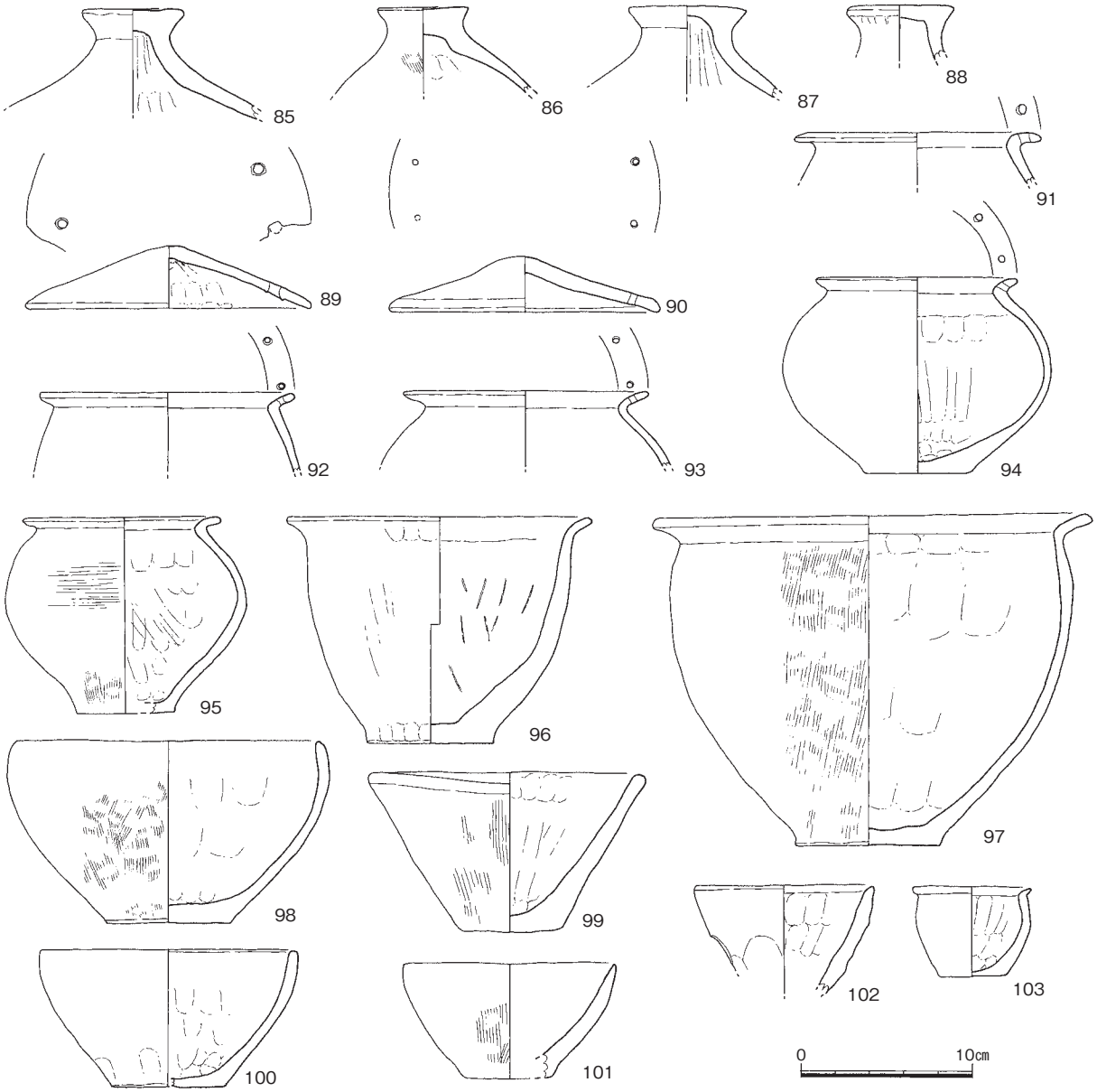


Fig.86　SD01出土土器９（1/4）

55は外面がほぼ全面赤化し、剥離している部分がある。また54の内面は逆に黒変しており、２次焼成を受けているのは明らかある。ともに壷に近い胴部の開き具合であるが、２次焼成をうけた壷あるいは甕の底部か。56は外面にわずかに赤彩痕があり、底部から胴部中央にかけて黒斑がある。壷である。59は底部内面に粘土を貼り付けた痕跡がある。底部から胴部下半が黒変している。59の底部内面にはヘラ状工具の痕跡が残る。61は外面赤彩である。64は小型の壷で、底部付近に黒斑がある。

65～84はのうち大型品を除くものは甕と思われる。甕の底部の形態は大きく２タイプある。69・78・80のように外底部が水平もしくは若干の上げ底で、底部と胴部の境が明瞭なものと、75や82のように外底部がわずかに凸レンズ状を成し、底部と胴部の境が前者に比べると曖昧なものである。胴部の立ち上がり角度は垂直方向に近いもの（79・80など）や開くもの（83・84など）があり、当然全体の器形とも関わっている。調整は外面ハケ目、内面ナデを原則とするが、75のように内面にハケ目を施しているものもある。67・71は底部中央を穿孔している。85～90は蓋で、85～88は大型土器にかぶせる蓋である。86は蓋としたが、胴部が内湾しており、壷の底部の可能性もあるが、底部（把手部）

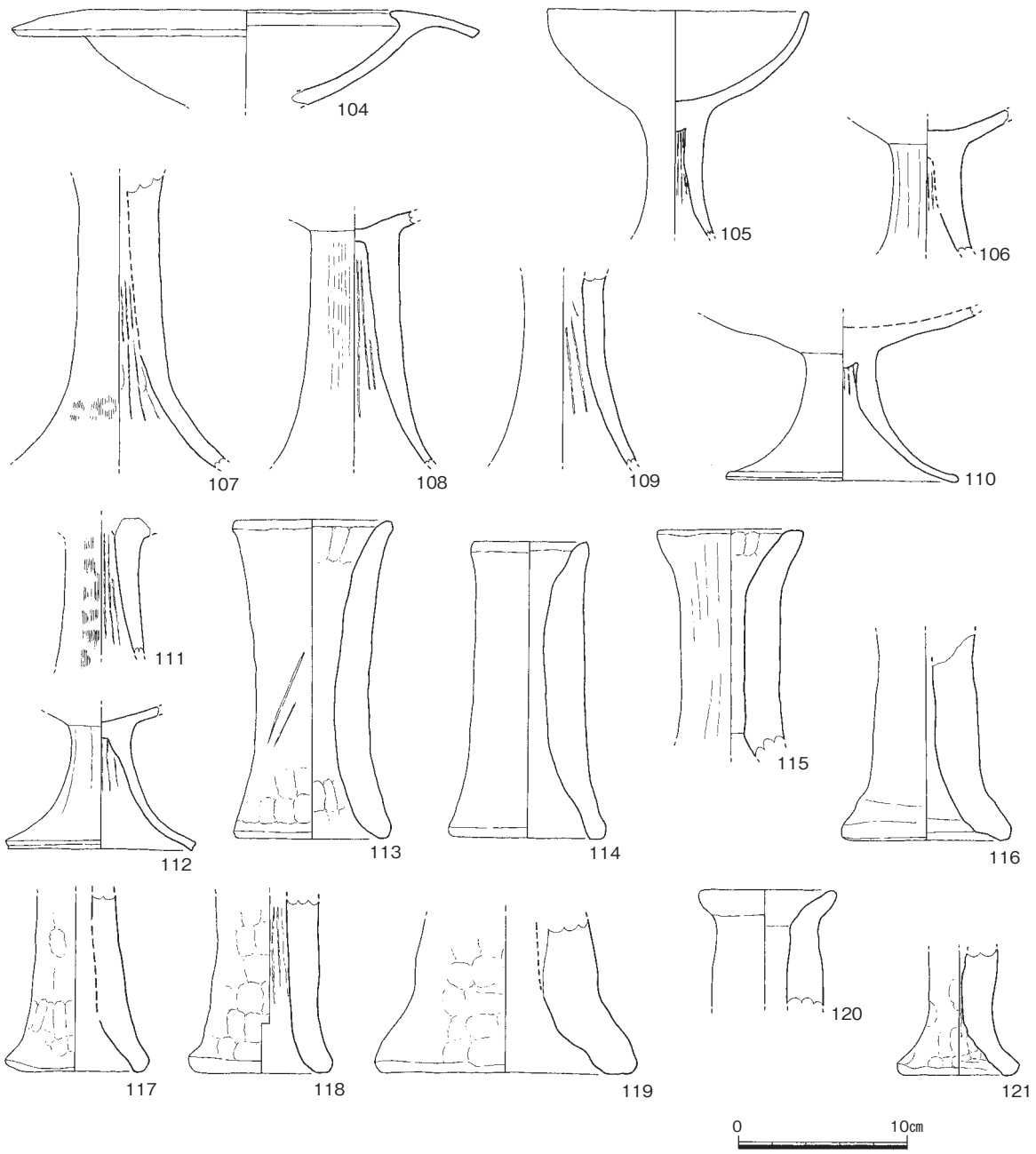


Fig.87　SD01出土土器10（1/4）

内面の作りや底部の小ささから蓋と判断した。86・87は底部に黒斑がある。89・90は鉢の蓋である。口縁部近くの２カ所に２つずつの穿孔を施している。89は内面頂部にヘラ状工具の跡がある。90は外面に赤彩の痕跡がごくわずかある。本来両方とも外面全面に顔料を塗布していたものと思われる。

91～97は有頸の鉢。91～94は口縁部に穿孔を施したもので２カ所に２つずつの穿孔があるものと思われる。91の口縁端部は水平位置より下がっている。94は白色系の色調で、底部に黒斑がある。摩滅のため顔料の痕跡はないが、本来は赤彩を施していたものであろう。95は外面全面と内面口縁部周辺を赤彩している。現存部分には穿孔はない。全面摩滅がひどいが、赤彩の痕跡はなく白色に近い色調を呈している。口縁部に穿孔が１ヵ所現存している。96は甕に分類するべきであろうか。器壁が厚く18などとと同類か。97も甕に近い。全面白色に近い色調で、胴上部とその反対側の胴下部に黒斑がある。摩滅がひどい。98～102は無頸の鉢である。99はこの遺跡では数少ない赤黒い色調を呈している。

内面は黒変し、ススが多く付着している。器壁も厚く特殊な用途の土器か。98・100・101は白色系統の色調である。102は胴下部がかなり剥離しており、失敗品の可能性がある。103はミニチュアか。赤い色調で、底部中央に穴が開いているが、自然に穿孔したものか人工的なものか判断が付かない。

104～112は高坏である。104は外傾する鋤先口縁部を持つ。白い胎土である。全面摩滅がひどく、内面には赤色顔料が点々と残っている。本来外面にも赤彩を施していたものと思われる。105は全体に内湾する坏部で、筒部内面以外に赤彩を施している。106はかなり粗い胎土である。筒部内面以外に赤彩を施す。器面の荒れがひどいが、筒部外面には縦方向のケズリ状の痕跡が見られる。107は器壁が厚く、焼成もあまり良くない。顔料は認められない。108も摩滅がひどい。器表面に小さな赤い点がいくつかあるか顔料かどうかわからないが、胎土が白いことから赤彩の可能性が高いと思われる。坏部の底に黒斑がある。109も摩滅がひどく顔料の痕跡もない。110は白色の胎土で顔料がわずかに残っている。器壁断面を見ると中にある黒い部分をサンドイッチするように両側が白い。111が外面にハケ目を施している。赤彩である。112もわずかに赤彩が残っている。

113～121は器台である。正確な点数は不明だが器台の点数は多い。器形は口縁部と脚部が外反し、体部が直線的な器形を成している。器壁が１cm以上と厚く、調整は指ナデもしくはナデで、115のようにヘラ状工具でなでているものもある。指ナデ仕上げのものにもヘラ状工具の痕跡をもつものがある。上下不明のものも多い。

②SD01出土石器（Fig.88・89）

SD01から出土した石器は、石包丁５点、石鎌１点、片刃石斧１ないし２点、打製石斧１点、磨製石斧１点、石戈１点、石剣２？点、砥石３ないし４点、凹石（砧石未製品？）１点、ポイント１点、スクレイパー３点と黒曜石・安山岩・サヌカイトの剥片が出土したが、用途が不明もしくはわけずらいものがある。122は完形品の石包丁で、２つに割れている。いわゆる小豆色を呈する立岩系の石材である。整形剥離痕・敲打痕が残っている部分がある。123も完形品の石包丁で立岩系の石材。ほぼ全面に研磨が及んでいる。図左側の紐孔のすぐ横にも片側から穿孔を試みて途中でやめた痕跡が残っている。124～126は石包丁の破片で、124は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製。摩滅が著しく研磨痕もほとんど残っていない。125は立岩系の石材である。一部に剥離・敲打痕が残っている。126は粘板岩系の石材を使用。127は小片のため明瞭ではないが、直線部に刃があり磨製の石鎌であろうか。直刃の石包丁の可能性もある。128は玄武岩製で、全体摩滅が著しいため明瞭ではないが、打製石斧と思われるが、刃部を中心とした剥離がかなり粗く未製品の可能性もある。129は玄武岩製太形蛤刃石斧の破片。130は完形品の柱状片刃石斧の形状をしているが、両面が極度の研磨で凹んでおり、砥石に転用したものか。粘板岩製。131は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石戈。全面ていねいに磨いている。132は扁平片刃石斧の基部のようでもあるが、破片の上部両側に抉りがあり、大型石剣の基部と判断した。133は磨製石剣。ともに安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製。134から136は砥石。134は小型の手持ち用、135は大型品、136は石皿のような形態である。134・135は細粒砂岩製、136は緑色片岩系の石材である。137は滑石製の製品で、ほぼ全面に磨いた痕跡が付いている。片面に凹みがある。砧石の未製品の可能性もあるが、全面ていねいに磨いており用途不明。138は安山岩製ポイントの基部である。139から141は安山岩製スクレイパーである。

③その他の遺構出土遺物

SK08出土遺物（Fig.90）

142は白磁碗で、口径14.4cmを測る。口縁部は小さな玉縁状を成している。両面とも灰白色の透明感の悪い釉を厚くかけている。

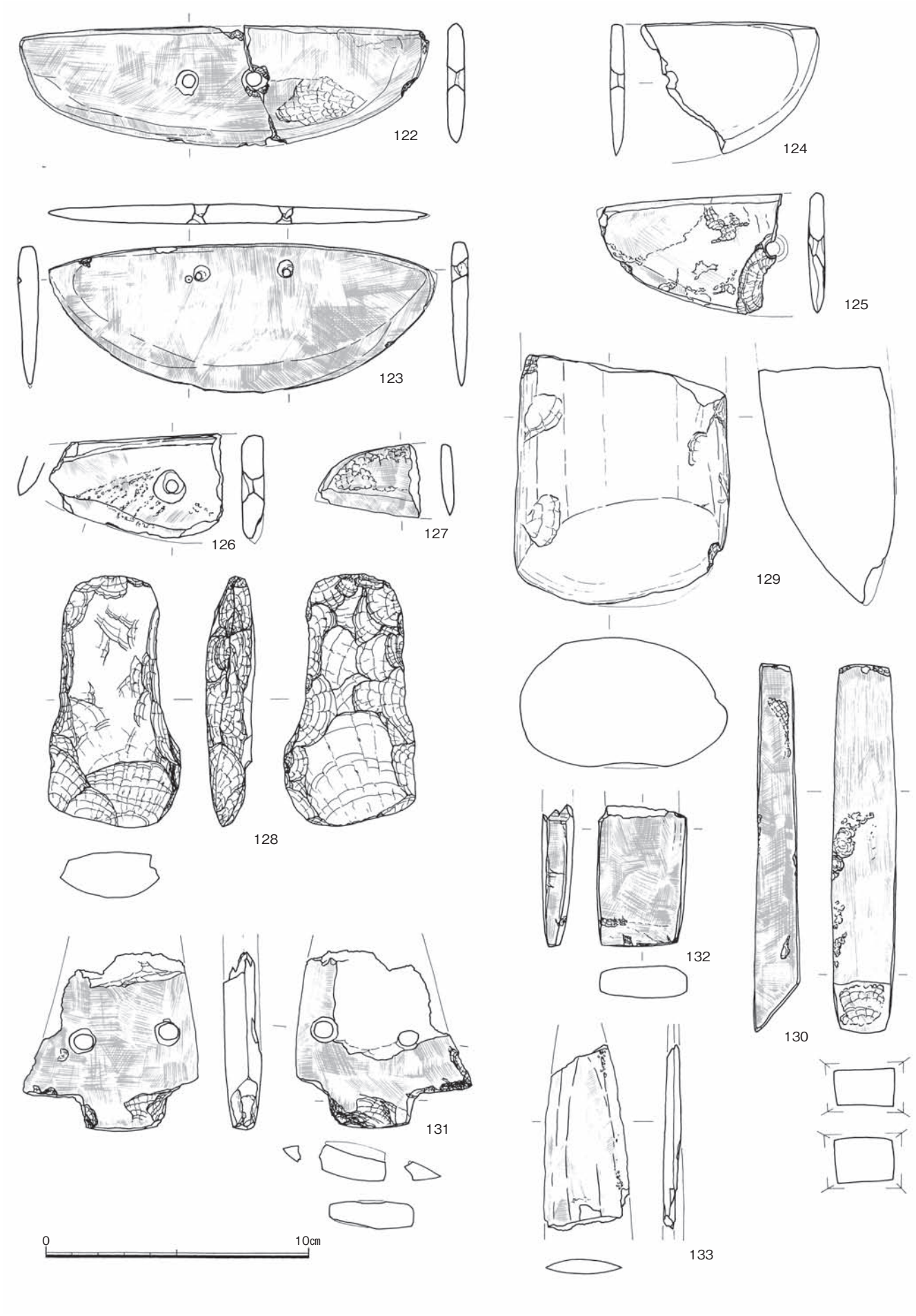


Fig.88　SD01出土石器１（1/2）

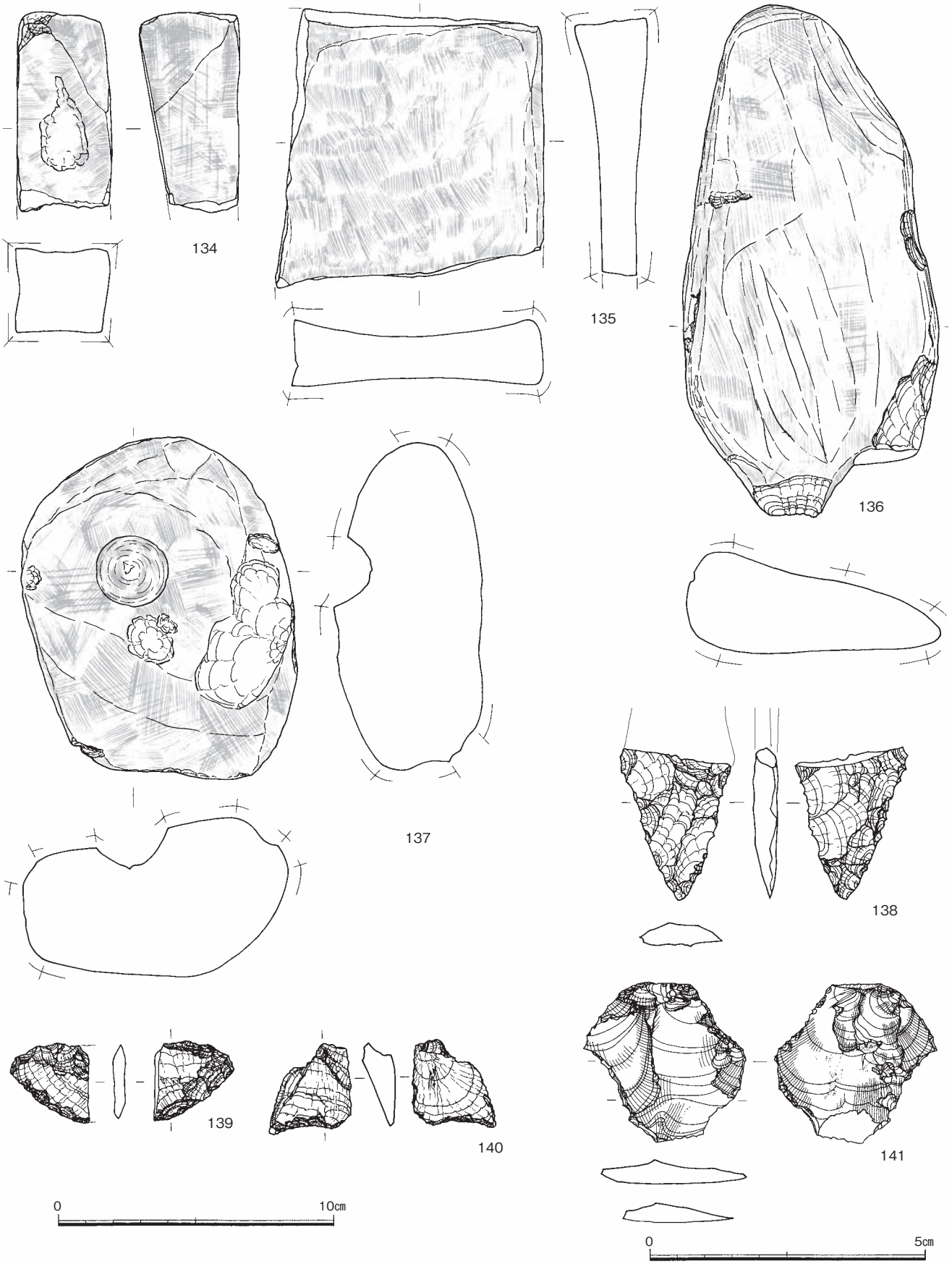


Fig.89　SD01出土石器２（1/2、1/1）

SK11出土遺物（Fig.90）

143は弥生土器の壷で、口径24.8cmを測る。口唇部に短沈線を５㎜～１cmおきに施している。全面摩滅がひどく、外面には赤彩を施している。

ピット出土遺物（Fig.90）

144はＰ303出土の土師器坏である。口径12.4cmを測る。摩滅がひどく底部の調整はわからない。外底部が赤化している。145もＰ303出土の土師器坏。口径12cm前後を測る。摩滅がひどく底部の調整は不明。146もＰ303出土。土師質の擂り鉢で、調整は不明。擂り目は５本のようで、全部で８カ所か。147はＰ350出土の銅銭。「皇宋通寶」で、1038年初鋳。148はＰ541出土の白磁の皿。口径10.3cmを測る。釉調は透明感の高い灰白色で、外底部は露胎。見込みと体部の境に圏線を１条施している。

その他の出土遺物（Fig.90・91）

149は表採の白磁碗。内面は全面施釉で、外面は破片の最上部のみ釉を施し、他は露胎。外面に櫛描きが１カ所、内面に櫛描きと沈線がある。釉調は透明感の低い灰白色を呈している。150～156は石鏃である。150は遺構面出土の安山岩製。押圧剥離はあまりていねいではない。151は遺構面出土の黒曜石製。長さ約２cmの小型品である。152も遺構面出土。黒曜石製で一見鋸歯鏃のようである。153は表採品で黒曜石製。脚の形態は鍬形鏃に近い。154も表採の黒曜石製。155も表採品。安山岩製である。156も表採品。特異な形態をしているが、欠損後に再利用した可能性がある。黒曜石製。157は黒曜石製UFである。158は黒曜石製のスクレイパー。159は黒曜石製石核である。160は安山岩製スクレイパー。161は玄武岩製磨製石斧である。

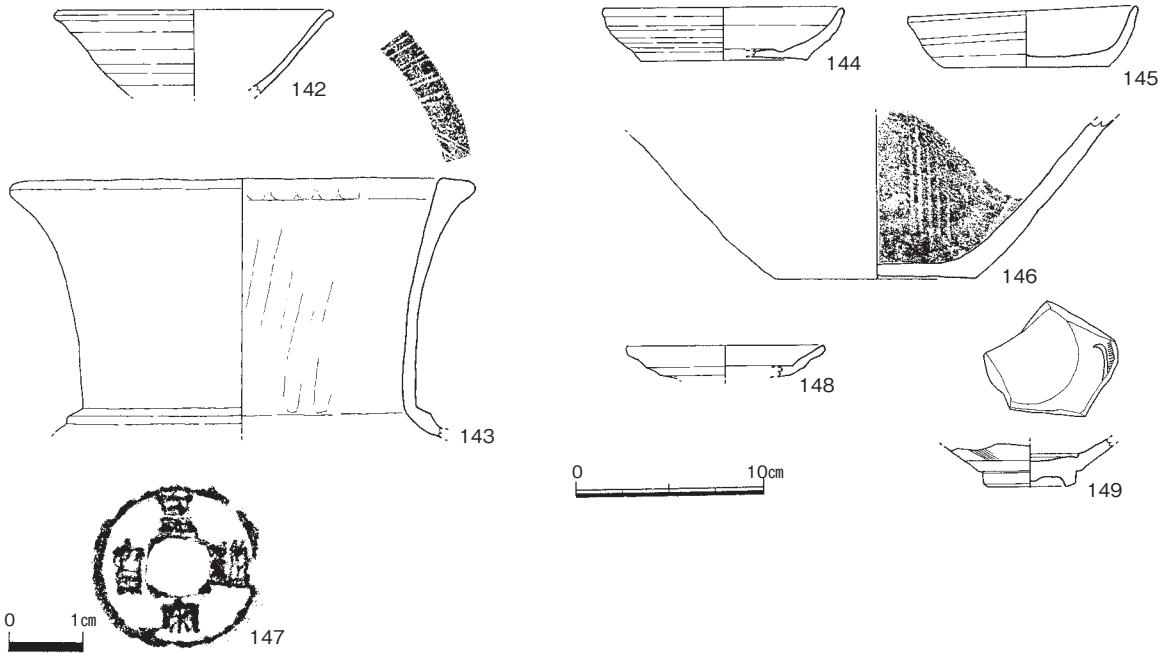


Fig.90　その他の出土遺物１（1/4、1/1）

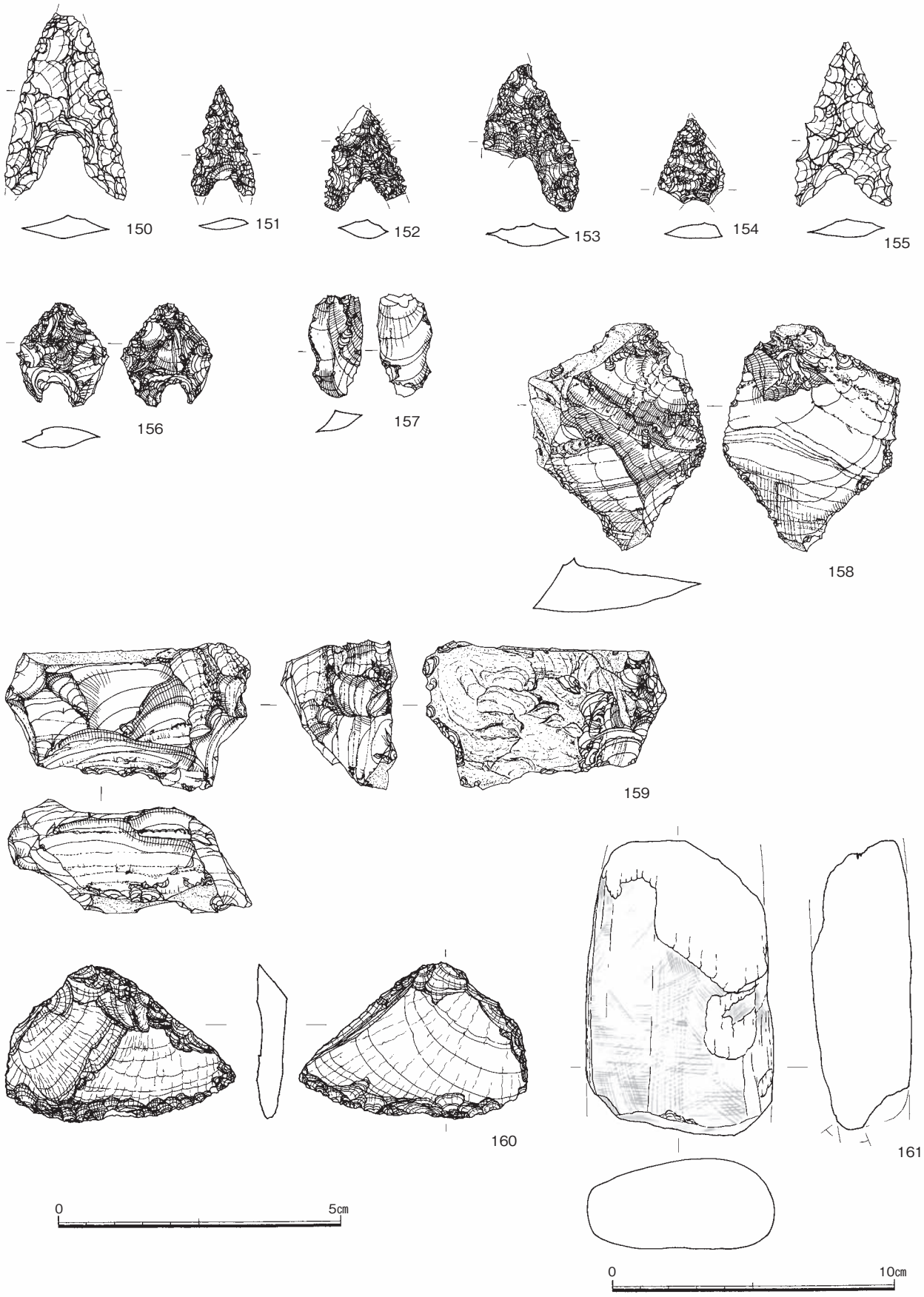


Fig.91　その他の出土遺物２（1/2、1/1）

掲載土器一覧表

図	No.	出土場所	器形	部位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
78	1	SD01 C区	甕	全	約35.0	32.4	8.2	摩滅	頸・底：指押さえ、胴：摩滅	灰白色	灰白色	5㎜以下の石英・長石多量、赤色粒・雲母少量	やや不良	
78	2	SD01 C区R11他	甕	全	約30	25.0	8.1	縦ハケ	摩滅	暗灰黄色	暗灰黄色	かなり粗い、5㎜以下の石英・長石多量	普通	
78	3	SD01 ロ区No.4	甕	口縁		27.4		縦ハケ	ナデ・指押さえ	灰白色	灰白色	5㎜以下の石英・長石多量	やや不良	
78	4	SD01 イ区西半北壁	甕	口縁		28.4		摩滅	摩滅(指押さえ)	灰白色	灰黄褐色	2㎜以下の石英・長石多量、赤色粒少量	やや不良	
78	5	SD01 C区	甕	口縁		32.0		摩滅	摩滅	にぶい橙色(赤彩痕)	にぶい橙色	精良、3㎜以下の石英・長石少量、雲母微量	普通	
78	6	SD01 A区	甕	口縁		32.6		磨研	ナデ	浅黄橙色(赤彩痕)	浅黄橙色	精良、白色粒微量	普通	
78	7	SD01西ロ・ハ間	甕	口縁		30.0		縦ハケ	口：横ハケ 胴：ナデ、指押さえ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	2㎜以下の石英・長石多量	普通	
78	8	SD01 E区	甕	口縁		33.2		ナデ・ハケ	ナデ	明褐色	明褐色	4㎜以下の石英・長石、金雲母微量	普通	割れ口2次焼成
78	9	SD01 B区西ベルト	甕	口縁		30.8		摩滅	摩滅	灰白色	灰白色	2㎜以下の石英・長石少量、黒色粒等微量	やや不良	
78	10	SD01 A区	壺	口縁		26.0		摩滅、縦ハケ？	指押さえ・ナデ	灰白色(赤彩痕)	灰白色	2㎜以下の石英・長石多量	やや不良	
78	11	SD01 C区R12他	甕	全	約30	29.2	8.6	摩滅(縦ハケ)	摩滅、底：指押さえ	灰白色	灰白色	4㎜以下の石英・長石多量	普通	
79	12	SD01 C区	甕	口縁		24.4		縦ハケ	摩滅	灰黄色	灰黄色	6㎜以下の石英・長石多量	やや不良	
79	13	SD01 D区	甕	口縁～胴上		22.0		ナデ・ハケ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	3㎜以下の粗細砂粒多量・赤色粒	良好	
79	14	SD01 イ区No.6	甕	口縁		25.6		縦ハケ	摩滅(指押さえ)	灰黄褐色	灰黄褐色	3㎜以下の石英・長石多量、金雲母・角閃石少量	普通	
79	15	SD01 E区	甕	口縁		24.0		ナデ？	指押さえ後縦ハケ後横ハケ	にぶい黄褐色	黄灰色	6㎜以下の石英・長石多量	普通	
79	16	SD01 C区	甕	口縁～胴		33.4		縦ハケ、摩滅	摩滅	灰白色	灰白色	6㎜以下の石英・長石多量、雲母少量	やや不良	
79	17	SD01E区	甕	全	32.0	26.0	9.3	摩滅	口:ヨコナデ,頸:指押さえ	褐色	褐色	5㎜以下の石英・長石多量	普通	
79	18	SD01 C区	甕	胴～底	20弱か		9.0	摩滅	摩滅	橙色	橙色	2㎜以下の石英・長石多量、黒色粒・赤色粒微量	普通	
79	19	SD01 ヘ・イ・ハ区	甕	全	16.2	11.0	6.5	頸：指押さえ、胴：ヘラナデ	指押さえ後ヘラナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	3㎜以下の石英・長石多量、赤色粒・金雲母少量	普通	
79	20	SD01E区	甕	全	14.9	9.9	6.4	口・胴：ナデ・摩滅,底：横ハケ・指押さえ	口:ナデ,頸:指押さえ,胴:ナデ・指押さえ	明赤褐色	明赤褐色	5㎜以下の石英・長石多量	普通	器壁厚い
80	21	SD01 C区	甕	口縁			36.6	摩滅(縦ハケ)	摩滅	灰黄色	灰黄色	5㎜以下の石英・長石少量	普通	
80	22	SD01 C区	甕	口縁		40.2		指押さえ後ハケ	頸：指押さえ、摩滅	灰白色	灰白色	5㎜以下の石英・長石多量、黒色粒少量	やや不良	
80	23	SD01 D区	甕	口縁		40.0		摩滅	指押さえ・ナデ	浅黄橙色	黄橙色	1㎝以下の石英・長石多量、雲母微量	普通	
80	24	SD01 イ・ロ区	甕	口縁		40.0		摩滅	摩滅	浅黄橙色	浅黄橙色	4㎜以下の石英・長石多量、角閃石少量	普通	
80	25	SD01 E区	甕	口縁		44.4		摩滅	摩滅	浅黄橙色	浅黄橙色	6㎜以下の石英・長石、黒色粒・金雲母少量	普通	
81	26	SD01D区黒褐色土・C区R16	甕	全		37.6	10.0	縦ハケ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	3㎜以下の砂粒	良好	
82	27	SD01 D区	壺	全	約28.5	約16.0	8.5	摩滅	頸：指ナデ、胴：ナデ？、底：指押さえ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	4㎜以下の石英・長石多量、金雲母・黒色粒少量	やや不良	
82	28	SD01 C区	壺	口縁	21.2			ナデ	ナデ	赤彩	にぶい橙色	2㎜以下の砂粒	良好	
82	29	SD01 イ区	壺	口縁		13.2		摩滅	剥離(頸：指押さえ)	淡橙色	淡橙色	6㎜以下の石英・長石多量	やや不良	
82	30	SD01D・E区	壺	口縁		36.0		摩滅	摩滅	浅黄橙色(赤彩痕)	浅黄橙色(赤彩痕)	3㎜以下の石英・長石少量、金雲母・雲母少量	普通	
82	31	SD01 E区西No.1	壺	口縁		24.0		摩滅	摩滅	灰白色	灰白色	6㎜以下の石英・長石	やや不良	赤彩？
82	32	SD01E区上層	壺	口縁		26.0		摩滅	摩滅	浅黄橙色	浅黄橙色(赤彩痕)	精良、白色粒・赤色粒微量	普通	
82	33	SD01 イ区No.5	壺	口縁		24.9		摩滅	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	2㎜以下の石英・長石、微細金雲母・黒色粒	普通	
82	34	SD01 イ区	壺	口縁		19.8		摩滅	摩滅	橙色	橙色	1㎜以下の石英・長石多量、赤色・黒色粒少量	不良	
82	35	SD01 C区R15	壺	口縁			20.0	摩滅(ハケ？磨き？)	ナデ	淡橙色(赤彩痕)	淡橙色	2㎜以下の石英・長石多量、微細金雲母微量	普通	
82	36	SD01 C区	壺	口縁		15.0		ハケ・ナデ	ナデ	橙色	橙色	3㎜以下の粗細砂粒多量	良好	
82	37	SD01 A区R04	壺	口縁		15.4		摩滅（ナデ）	摩滅（ナデ）	黄橙色(赤彩痕)	黄橙色(口縁赤彩痕)	4㎜以下の石英・長石多量	普通	
82	38	SD01 C区R13	壺	口縁			21.8	摩滅	摩滅	灰黄色(赤彩痕)	灰黄色(口縁赤彩痕)	精良、石英・長石	やや不良	
82	39	SD01 C区	壺	頸				摩滅	摩滅	灰白色	灰白色	4㎜以下の石英・長石多量、赤色粒・角閃石少量	やや不良	

図	No.	出土場所	器形	部位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
82	40	SD01 E区	壺	胴				摩滅	摩滅	浅黄橙色(赤彩痕)	黄橙色	1mm以下の石英・長石少量、金雲母・黒色粒少量	普通	
82	41	SD01 C区R18	壺	胴	突帯部径		27.4	摩滅	摩滅	灰白色	橙色	粗い、2mm以下の石英・長石多量	良好	
83	42	SD01 D区7回（黒色土）	壺	全	21.9	13.4	9.8	摩滅、僅かにハケ	指押さえ+ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	3mm以下の粗・細砂粒多量	良好	
83	43	SD01 D区	壺	全	32.3	15.4	10.3	摩滅	頸：指押さえ・ナデ,胴：板ナデ・ナデ	淡黄色	淡黄色	4mm以下の石英・長石多量、黒色粒少量	やや不良	
83	44	SD01 E区	壺	口縁		14.4		摩滅	指押さえ+ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	4mm以下の粗・細砂粒	良好	
83	45	SD01 B区R 01	壺	口縁		15.8		摩滅	指押さえ+ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	2mm以下の砂粒	良好	
83	46	SD01 G区 No.2	壺	口縁		14.2		摩滅	指押さえ+ナデ、縦ハケ	浅黄橙色	浅黄橙色	1mm以下の細砂粒	良好	
83	47	SD01 C区 R13	壺	口縁		8.6		摩滅	指押さえ	にぶい黄橙色	黄灰色	3mm以下の砂粒	良好	
83	48	SD01 ロ区 No.1	壺	口縁		8.8		摩滅	しぼり、指押さえ	灰白色(赤彩痕)	褐灰色	3mm以下の石英・長石多量、雲母少量	やや不良	
83	49	SD01 C区	壺	口縁			12.2	摩滅	ヨコナデ、ナデ	淡橙色	灰白色	精良、3mm以下の石英・長石・黒色粒	やや不良	
83	50	SD01 F・G区	壺	口縁		15.6		摩滅	指押さえ	にぶい黄橙色(赤彩痕)	にぶい黄橙色	3mm以下の石英・長石、黒色粒・金雲母少量	普通	
83	51	SD01 C区	壺	口縁	13.0			摩滅	指ナデ	浅黄橙色(赤彩痕)	浅黄橙色(赤彩痕)	3mm以下の砂粒	良好	
83	52	SD01 ?区 R 10	壺	口縁	17.8			摩滅	摩滅	浅黄橙色(赤彩痕?)	浅黄橙色	3mm以下の砂粒	良好	
84	53	SD01 D区東	壺	胴～底			9.0	摩滅(ナデ？)	摩滅	灰黄色	灰黄色	5mm以下の石英・長石、赤色粒・雲母微量	やや不良	
84	54	SD01 C区	甕？	底			10.5	摩滅	摩滅	にぶい橙色	灰黄色～暗灰黄色	5mm以下の石英・長石多量	普通	
84	55	SD01 F区	壺？	底			9.6	摩滅	摩滅	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	4mm以下の石英・長石	普通	
84	56	SD01 D区	壺	底			9.1	摩滅	摩滅	褐灰色(赤彩痕)	浅黄橙色	精良、4mm以下の石英・長石多量、黒色粒少量	普通	
84	57	SD01 C区R15	壺	底			12.0	摩滅	摩滅	灰白色	橙色	2mm以下の石英・長石多量	やや不良	
84	58	SD01 C区	甕	底			8.2	摩滅	摩滅・指押さえ	橙色～灰褐色	黒褐色	1mm大の石英・長石多量、赤色粒少量	普通	
84	59	SD01 C・E区	壺	底			8.8	摩滅	摩滅、板ナデ	橙色	橙色	1mm以下の石英・長石、金雲母微量	普通	
84	60	SD01 D区	壺？	底			9.5	縦ハケ	摩滅、ハケ目	浅黄橙色	浅黄橙色	3mm以下の石英・長石少量、雲母微量	やや不良	
84	61	SD01 C区R15	壺	底			6.6	摩滅	指押さえ	灰黄色(赤彩痕)	灰黄色	精良、2mm以下の石英・長石若干含む	やや不良	
84	62	SD01 イ区 No.1	甕	底			8.2	縦ハケ	指押さえ・ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	3mm以下の石英・長石多量	良好	
84	63	SD01 ハ区 No.1	壺？	底			7.4	摩滅(ナデ？)	摩滅、底：指押さえ	灰白色	灰白色	4mm以下の石英・長石少量	やや不良	
84	64	SD01 ロ区 No.3	鉢？	底			6.0	摩滅	摩滅	にぶい橙色	にぶい橙色	1cm以下の石英・長石多量、金雲母・角閃石少量	普通	
85	65	SD01 D区	鉢？	底			5.5	指押さえ	指押さえ	にぶい黄橙色	褐灰色	1mm以下の石英・長石少量	やや不良	
85	66	SD01 イ区 No.4	壺？	底			10.4	ナデ	摩滅、底：指押さえ	橙色	橙色	3mm以下の石英・長石多量	普通	
85	67	SD01 C区	甕	底			8.5	縦ハケ	摩滅	橙色	橙色	5mm以下の石英・長石多量、雲母・黒色粒少量	やや不良	底部穿孔
85	68	SD01 ロ区 No.4	甕	底			9.0	縦ハケ	ナデ・指押さえ	灰白色	灰白色	5mm以下の石英・長石多量	やや不良	
85	69	SD01 D区	甕	底			7.6	縦ハケ	摩滅	灰褐色	橙色	4mm以下の石英・長石多量、雲母微量	普通	
85	70	SD01 D区R1	甕	底			8.0	摩滅	指押さえ	褐灰色	灰白色	3mm以下の石英・長石多量、微量の雲母	普通	
85	71	SD01 D区 No.2	甕	底			10.0	ナデ	指押さえ+ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	5mm以下の粗・細砂粒	良好	底部穿孔
85	72	SD01 B区 R 02	甕	底			9.8	摩滅	指押さえ,ナデ(剥落多)	橙色	橙色	3mm以下の粗細砂粒多量	良好	
85	73	SD01 イ区 No.2	甕	底			9.3	縦ハケ	指押さえ後ナデ	暗灰黄色	灰黄褐色	微細石英・長石・金雲母	普通	
85	74	SD01 D区	甕	底			10.0	摩滅	摩滅	褐灰色	浅黄橙色	4mm以下の石英・長石多量	やや不良	
85	75	SD01 E区	甕	底			8.2	摩滅	指ナデ後ハケ	灰黄褐色	にぶい橙色	7mm以下の石英・長石	普通	
85	76	SD01 E区	甕？	底			8.0	摩滅、ハケ	指押さえ後ナデ	灰黄色	黄灰色	3mm以下の石英・長石、角閃石微量	普通	
85	77	SD01 G区	甕	底			10.2	ハケ・指押さえ	指押さえ・ナデ	橙色	橙色	2mm以下の石英・長石	良好	
85	78	SD01 D区	甕	底			7.8	摩滅	摩滅	橙色	灰黄褐色	5mm以下の粗・細砂粒	良好	
85	79	SD01 F区	甕or鉢	底			8.0	ハケ・摩滅	指押さえ・板ナデ	黄灰色	灰黄色	5mm以下の石英・長石、角閃石・金雲母少量	普通	

図	No.	出土場所	器形	部位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
85	80	SD01 C区 R18	甕	底			9.4	摩滅	摩滅	にぶい橙色	にぶい橙色	3mm以下の粗細砂粒多量	良好	
85	81	SD01 C区	甕	底			8.2	摩滅	摩滅	灰白色	灰白色	3mm以下の石英・長石多量、赤色粒少量	普通	
85	82	SD01 B区	甕	底			9.0	縦ハケ	摩滅（工具痕あり）	灰色	灰白色	2mm以下の石英・長石多量	やや不良	
85	83	SD01 F区	甕？	底			12.2	ハケ	摩滅・指押さえ	浅黄色	黄灰色	4mm以下の石英・長石、微量雲母	良好	
85	84	SD01 C区 R15	甕	底			10.2	摩滅	指押さえ+ナデ	にぶい黄橙色	灰褐色	2mm以下の砂粒多い	良好	
86	85	SD01 D区	蓋	つまみ				摩滅	しぼり、ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	精良、1mm以下の石英・長石少量、雲母微量	やや不良	
86	86	SD01 DE間ベルト1層黒	蓋？	上半				ハケ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	2mm以下の粗細砂粒多量・赤色粒	良好	
86	87	SD01E区	蓋	つまみ				摩滅	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	3mm以下の石英・長石多量、金雲母微量	普通	
86	88	SD01 D区	蓋	つまみ	つまみ径		6.3	摩滅	摩滅	浅黄橙色	灰色	2mm以下の石英・長石多量、黒色粒少量	やや不良	
86	89	SD01 G区	蓋	全	3.6	16.8		摩滅	指押さえ・板ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	精良、4mm以下の石英・長石少量	普通	
86	90	SD01 イ区中	蓋	全	3.3	15.4		摩滅	指押さえ・ナデ	灰白色(赤彩痕)	灰白色	4mm以下の石英・長石多量	普通	口縁穿孔有
86	91	SD01 D区	鉢	口縁		14.4		摩滅	摩滅	灰白色	灰白色	精良、1mm以下の石英・長石少量	やや不良	口縁穿孔有
86	92	SD01 C区	鉢	口縁		14.6		摩滅	摩滅	淡橙色(赤彩痕)	淡橙色(赤彩痕)	2mm以下の石英・長石多量で粗い	やや不良	口縁穿孔有
86	93	SD01 B区	鉢	口縁		14.0		摩滅	摩滅	灰白色(赤彩痕)	灰白色(赤彩痕)	精良、微細白色粒少量	普通	口縁穿孔有
86	94	SD01 D区	鉢	全	11.5	11.4	6.0	摩滅	指押さえ・ナデ	灰白色	灰白色、外底黒変	精良、石英・長石少量・赤色粒・金雲母微量	やや不良	口縁穿孔有
86	95	SD01 ハ区最上層	鉢	全	11.5	11.6	5.8	摩滅（ヘラ研磨？）	指押さえ後ナデ	橙色	橙色	精良、微細白色粒	やや不良	
86	96	SD01 H区	鉢	全	13.3	18.0	7.4	摩滅(ハケ？)	口：横ナデ胴：ナデ、指押さえ	明赤褐色	にぶい褐色	5mm以下の石英・長石、金雲母・黒色粒・赤色粒を含む	普通	
86	97	SD01 I・J区中層・下層	鉢	全	19.5	26.0	8.8	ハケ	摩滅・指押さえ	灰白色	灰白色	6mm以下の石英・長石	やや不良	一部赤彩？
86	98	SD01 A 区 R08A	鉢	全	10.7	17.6	7.4	縦ハケ	指押さえ・ナデ	橙色	褐灰色	3mm以下の石英・長石多量	良好	
86	99	SD01 D区	鉢	全	9.3	16.2	6.0	縦ハケ	指押さえ+ナデ	明赤褐色	黒色	5mm以下の粗・細砂粒	良好	内面黒顔料？
86	100	SD01 イ区 No.1	鉢	全	8.1	15.0	6.6	下部：ナデ・指押さえ	指押さえ後ナデ	淡橙色	淡橙色	3mm以下の石英・長石多量、黒色粒少量	普通	
86	101	SD01 D区	鉢	全	12.4	6.8	5.0	ハケ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	4mm以下の粗細砂粒多量	良好	
86	102	SD01 E区	鉢？	口縁		10.2		ナデ？	指押さえ+ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	5mm以下の粗・細砂粒	良好	
86	103	SD01 D区	小鉢	全	5.3	6.9	4.0	摩滅	指押さえ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1mm以下の細砂粒	良好	
87	104	SD01 I・L区	高坏	坏		28.0		摩滅	摩滅	灰黄色(赤彩痕)	灰黄色(赤彩痕)	精良、4mm以下の石英・長石微量	やや不良	
87	105	SD01 B区	高坏	略全		15.5		摩滅	摩滅	赤彩	赤彩	1mm以下の細砂粒	良好	
87	106	SD01 D区	高坏	脚～坏下				摩滅	しぼり・ナデ	にぶい黄橙色(赤彩痕)	にぶい黄橙色	4mm以下の石英・長石多量、金雲母・角閃石少量	普通	
87	107	SD01 C・G区	高坏	筒				摩滅・ハケ	しぼり	浅黄橙色	浅黄橙色	4mm以下の石英・長石	普通	
87	108	SD01 D・E・H区中・下層	高坏	筒				摩滅(磨研？)	しぼり	灰白色	灰白色	2mm以下の石英・長石、金雲母・黒色粒少量	やや不良	赤彩？
87	109	SD01 D区東	高坏	筒				摩滅	しぼり	橙色	橙色	2mm以下の砂粒・赤色粒、精良	良好	
87	110	SD01 C区	高坏	脚～坏下部			14.0	摩滅	摩滅	淡橙色	淡橙色	1mm以下の砂粒	良好	
87	111	SD01 D区東③	高坏	筒				ハケ	しぼり	赤彩	浅黄橙色	精良、細砂粒	良好	
87	112	SD01 C区	高坏	脚			11.0	摩滅	しぼり・ナデ	浅黄橙色(赤彩痕)	浅黄橙色	4mm以下の石英・長石多量、金雲母・角閃石少量	普通	
87	113	SD01 D区中区中層	器台	脚			10.0	摩滅	摩滅	橙色	橙色	精良、2mm以下の赤色粒少量	良好	
87	114	SD01？	器台	全	17.8	6.8	9.4	指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	橙色	橙色	3mm以下の砂粒・赤色粒	良好	
87	115	SD01 M区下層一括	器台	口縁		8.6		ナデ？	指押さえ+ナデ	橙色	橙色	3mm以下の砂粒、赤色粒	良好	
87	116	SD01 C区東下層	器台	全			10.0	摩滅	摩滅	橙色	橙色	精良、2mm以下の砂粒・赤色粒	良好	
87	117	SD01E区	器台	脚			6.7	ナデ・指押さえ	指押さえ・ナデ	橙色	橙色	4mm以下の石英・長石多量、金雲母微量	普通	
87	118	SD01 C区	器台	脚			9.0	指押さえ・ナデ	摩滅	橙色	橙色	3mm以下の砂粒	良好	
87	119	SD01 D区	器台	脚			15.7	指押さえ	指押さえ	橙色	橙色	1cm以下の粗・細砂粒	良好	
87	120	SD01 C区	器台	口縁	8.2			ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	4mm以下の粗細砂粒多量	良好	

図	No.	出土場所	器形	部位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
87	121	SD01 G区	器台	脚			5.6	指押さえ	指押さえ・板ナデ	橙色	橙色	4mm以下の石英・長石・赤色粒	普通	
90	142	ＳK08（白磁碗）	碗	口縁		14.8				半透明灰白色釉	半透明灰白色釉	灰白色、空隙あり	良好	
90	143	SK11（弥生土器）	壺	口縁		24.8		摩滅	指ナデ・摩滅	淡黄色	淡黄色	2mm以下の石英・長石含む	良好	
90	144	P303（土師器）	皿	全	2.8	12.4	8.8	回転ナデ	回転ナデ	淡黄色	淡黄色	精良、2mm以下の石英・長石若干含む	良好	
90	145	P303（土師器）	皿	全	3.0	12.0	9.0	回転ナデ	回転ナデ	淡橙色	浅黄橙色	精良、2mm以下の石英・長石若干含む	良好	
90	146	P303（土師質土器）	擂鉢	底			10.4	摩滅	摩滅	浅黄橙色	浅黄橙色	5mm以下の石英・長石多く含む	やや不良	
90	148	P541（白磁）	皿	略全		10.3				灰白色透明釉	灰白色透明釉	灰白色、緻密	良好	
90	149	表採（白磁）	碗	底			4.9	櫛歯文	花文？	灰白色	灰白色	灰白色、緻密	良好	
		銅銭計測表												
図	No.	出土場所	外径	文字		初鋳								
90	147	P350	2.3	皇宋通寶		1038年								

掲載石器一覧表

図	No.	器種	出土場所	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
88	122	石包丁	SD01 ハ区西上層・ロ区東最上層	小豆色凝灰岩ホルンフェルス	4.65	15.6	0.65	73	
88	123	石包丁	SD01 D区東No.4	小豆色凝灰岩ホルンフェルス	5.7	14.75	0.8	90	
88	124	石包丁	SD01 ４区中下層	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス	−	−	0.55	−	
88	125	石包丁	SD01 ハ区西上層	小豆色凝灰岩ホルンフェルス	−	−	0.6	−	
88	126	石包丁	SD01 K区最下層	粘板岩ホルンフェルス	−	−	0.85	−	
88	127	石鎌？	SD01 L区東	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス	−	−	0.45	−	
88	128	打製石斧	SD01 C区下層	玄武岩	9.65	5.05	1.75	122	
88	129	太形蛤刃石斧	SD01 E区下層	玄武岩	−			−	
88	130	砥石	SD01 D区東No.２	粘板岩	14.1	2.45	1.75	98	
88	131	石戈	SD01 D区西上中層	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス	−	6.65	1.45	−	
88	132	磨製石剣？	SD01 １区東最上層	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス	−	3.45	1.15	−	器種？
88	133	磨製石剣	SD01 E区東側	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス	−	−	0.65	−	
89	134	砥石	SD01 イ区中央最下層	中細粒砂岩	−	3.4	3.6	−	
89	135	砥石	SD01 D区東下層	細粒砂岩	10.2	9.75	3	−	
89	136	砥石	SD01 E区中層	緑灰色片岩	18.7	9.25	3.5	884	
89	137	凹み石	SD01ハ区西上層	滑石	12.6	9.95	5.9		
89	138	ポイント	SD01 H区	古銅輝石安山岩	2.65	2.03	0.45		
89	139	スクレイパー	SD01 K区下層	古銅輝石安山岩	−	2.85	0.45	−	
89	140	スクレイパー	SD01 H区	黒曜石	2.93	2.96	0.58	3.4	
89	141	スクレイパー	SD01 イ区中層	古銅輝石安山岩	3.25	3	1.1		
91	150	石鏃	遺構面	古銅輝石安山岩	3.4	2.15	0.4	2.0	
91	151	石鏃	遺構面	黒曜石	1.98	1.12	0.22	0.4	
91	152	石鏃	遺構面	黒曜石	−	1.45	0.32	−	
91	153	石鏃	表採	黒曜石	2.68	1.68	0.42	1.0	
91	154	石鏃	表採	黒曜石	−	−	0.3	−	
91	155	石鏃	表採	古銅輝石安山岩	2.93	1.72	0.37	1.3	
91	156	石鏃	表採	黒曜石	1.86	1.67	0.46	1.1	
91	157	UF	遺構面	黒曜石	1.8	0.95	0.35	−	
91	158	スクレイパー	遺構面	黒曜石	4.06	3.2	0.95	9.5	
91	159	石核	P159	黒曜石	2.65	4.34	1.75	20.3	
91	160	スクレイパー	遺構面	古銅輝石安山岩	5.65	8.15	1.1		
91	161	石斧	P29						

（4）まとめ

遺構の時期は、次の二つの時期に大きく分かれる。遺物から他の時期はほとんど無いようである。

Ａ：弥生時代中期から後期前半の遺構

掘立柱建物：SB01・03・16・17・18・19？

竪穴住居：SC05・13？・72（・SD01－ロ・ハ区に切られた南の円形部分？）※SC20は6～7世紀か

土坑：SK01・22・11・31・07？・201？・27＝28・18・14？・1051・68

溝状遺構など：大溝SD01、SD10・11・16・16東・77・78・472？・1068、SX53、SX12（以上は弥生時代の灌漑水路および灌漑施設）

これらのうち、切り合いや出土遺物からSK30・11・27＝28等はSD01とそれに伴う支水路が成立する前の遺構である（中期後半以前）。またSD01とそれに伴う水路網は中期後半から後期前半である。

Ｂ：中世（12～16世紀）の遺構

掘立柱建物・柵列：SB02・04・05？・07？・10・06？・11・20・15・14・13・25・21・22・28？・24・26・27・30・29・34・33・32・31・40・38・39・42？（弥生時代の可能性もある）・36・35・45・46・44・53・54・47？・48・43・41・50・52・49？・55・51？、ＳＡ01・02・03

溝状遺構：SD02・03　　**土坑**：SK08・75・198・43・208・535

なお中世遺構については、多数検出した柱穴群はまだ多くの建物や屋敷の柵列を構成すると思われ、遺物は少ないが、比較的長期間（遺物から12～16世紀）続いた村落があったと考えられる。また、建物方位を検討すれば時期別変遷も復元できる可能性がある。今後の課題としたい。

次に**弥生時代水路SD01**について触れておきたい。SD01は、井堰や支水路の存在から**灌漑水路**と考えられる。浦江５次の調査では水田跡は検出できなかったが、後世の開発（特に中世集落による造成と、近世？以降の再耕地化）により削平されたものと考えられる。水田域は扇状地地形の低い部分に広く開発された可能性を考える（Fig.92の薄アミ部分の水田a～e）。この水田は立地と地下水位からは半乾田と考えられ、高低差があり小区画水田が想定される。水田域を取り囲んでやや高い地形部分に集落遺構が営まれている（集落①～⑤）。図示した水田域は最大可耕範囲であるが、さらに調査地がある扇状地段丘の下部（東側）の低地部にもより古くからの水田域が存在したと思われ、この水田域は生産量拡大のために新たに開発されたものであろう。推定面積は最大約6ha前後である。この水路掘削に動員された集落単位は、Fig.92の集落①～⑤は当然少なくともは参加していたと考えられ、灌漑による大きな協業があったことになり、各集落単位は分立しているように見えて実は一体だったと考えられる。１区墳丘墓の経営期間中に水路が掘削（須玖Ⅱ式中頃か）されたのは興味深い。

SD01の掘削地形を見ると、扇状地段丘のFig.92のA3から高台の大塚地区へ延びる尾根部の北側を走行するが、途中で南に屈曲する。SD01の上流には谷A1－A3またはそれに接した南側に水路があると思われ、さらに上流で龍谷川から取水したと考えられる。２区SD01部分は主に北側水田（水田a）に給水している。本来は、尾根筋両側の水田に給水するためには尾根頂上線に掘削したかったはずであるが、これだと龍谷川からの給水地点とのレベル調整が困難であり、また当時の土木技術や労働結集力からも困難であったため、可能な範囲で尾根筋よりやや下に水路を通し、途中で屈曲させて尾根筋南側に水路を変更し（尾根の低くなった部分を断ち切ったのであろう）、南側水田（水田b･c･ｄ）にも給水することを可能にしたものであろう（水田b北半は未発見の別の水路が谷Fに平行して存在する可能性がある）。あるいは水路を屈曲させることで水流を緩やかにし、水を温める効果をも

考えられる。SD01の延長は、12-2区のSD1106、17区のSD01、18区のSX11･SD12で検出され、16区SD06･07と1区西SD3001（16区SD02）を見ると、東部でさらに北側へ屈曲する。また支水路は２区以外でも6･7･16･19区等で検出された。水路は出土土器から、後期前半のある時期に機能停止したものとみられ、同時に水田も廃絶したのであろう。集落①～⑤も遺構が後期前半までには廃絶している。

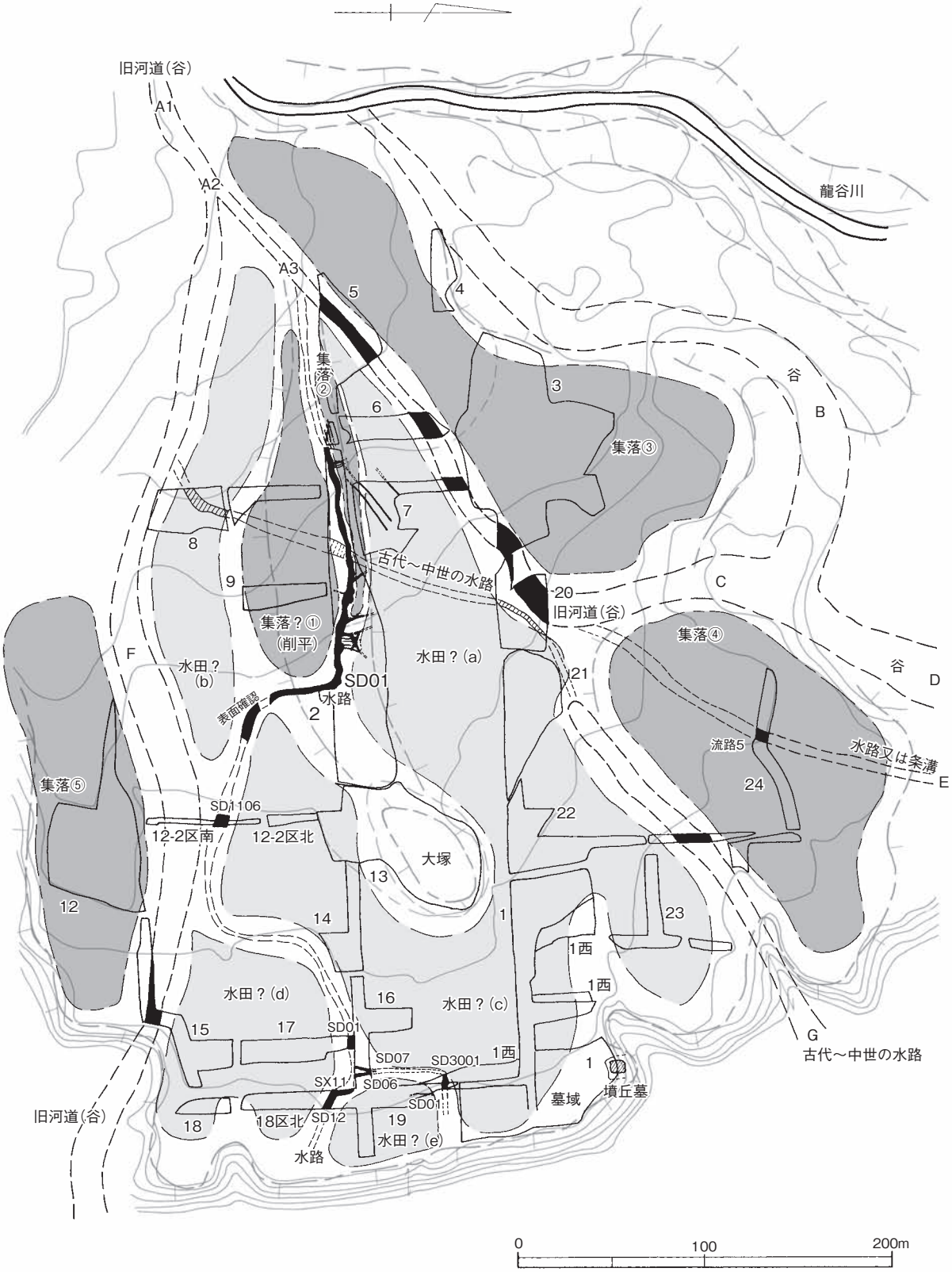
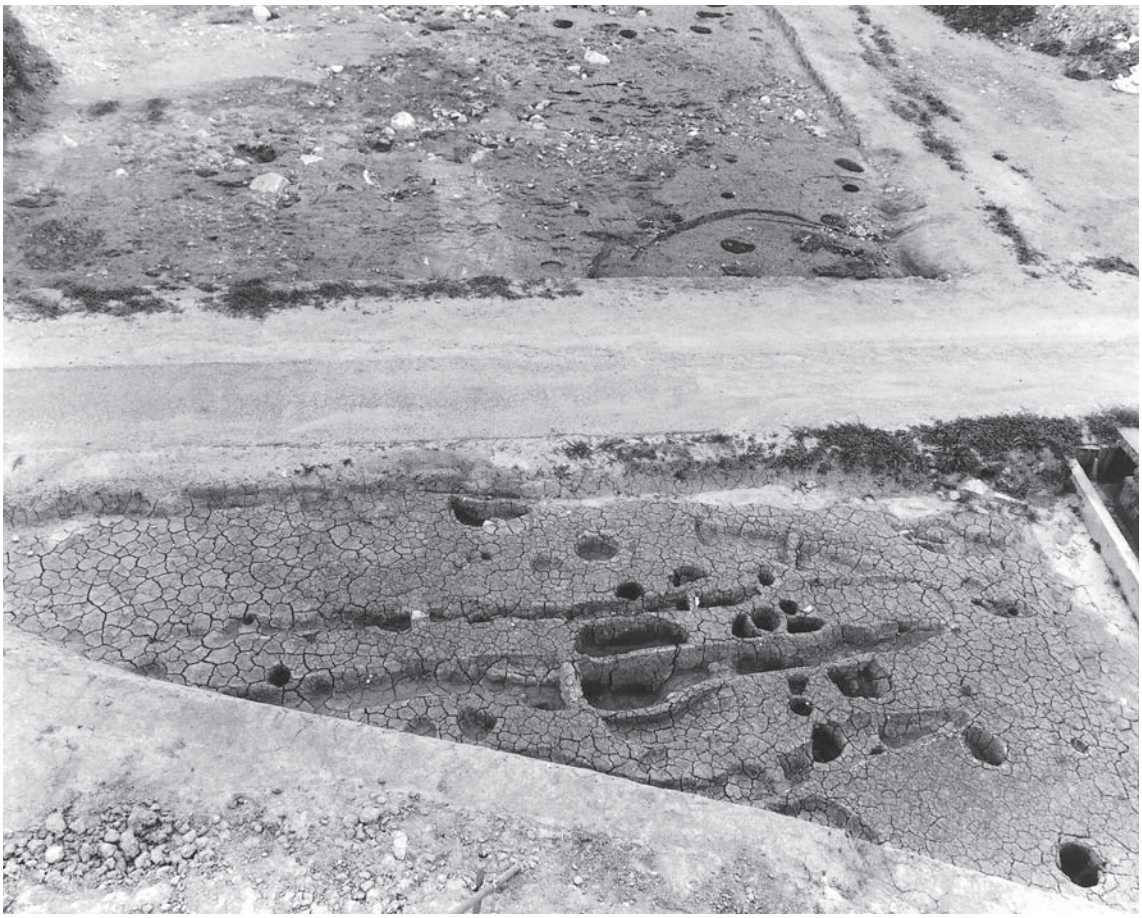
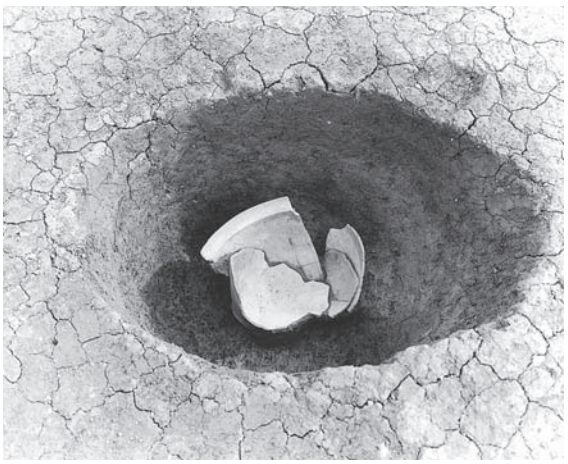


Fig.92　調査区周辺における弥生時代中期後半～後期前半の水路と可耕地（1/3,200）

1. 浦江５次調査２区（他）全景（空撮）



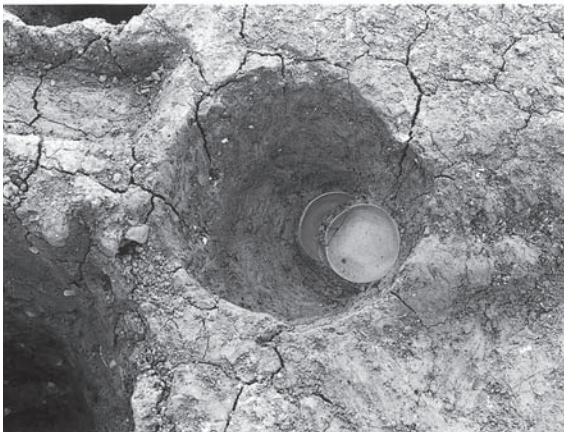
2. ２区西端調査区（南から）※後方は６区



3. SK01（北から）

4. SK11（東から）

5. SK18（西から）



6. SP261（東から）

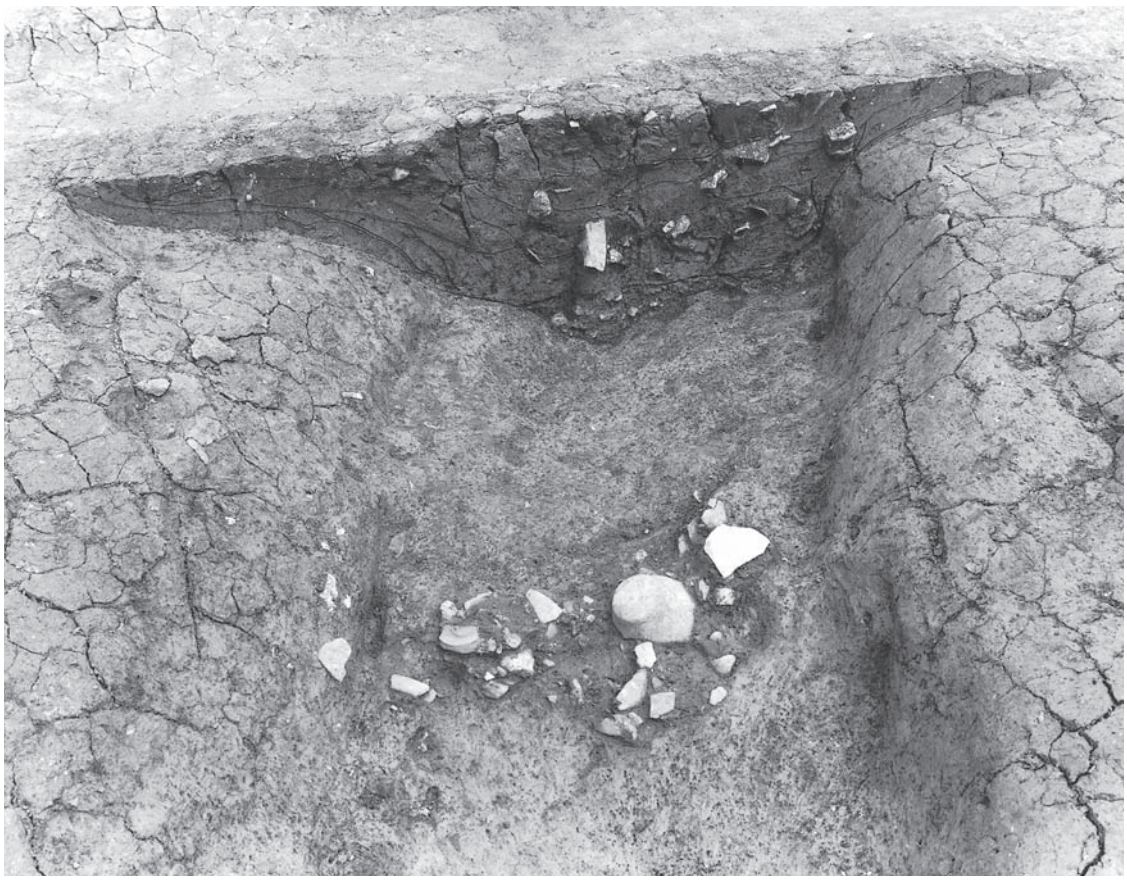
7. SD01－ロ区・西側土層、出土状況（東から）

8. SD01－ロ区西出土状況（北から）

9. SD01－二区西出土状況、
（後方）SB01（北から）

10. SD01－イ区出土状況
（東から）

11. SD01－B区・西側土層、
（後方）SD01－A区
（東から）



12. SD01－D区西・東側土層、出土状況（西から）

13. SD01－D区中央・東側土層（西から）

14. SD01－D区西・西側土層、
出土状況（東から）

15. SD01－D区西・中央
土器群出土状況（東から）

16. SD01－D区中央・東側
（南壁）土器群出土状況
（西から）

17. SD01－D区中央・東側（南壁）土器群出土状況（北から）

18. SD01－D区東、出土状況（北から）

19. SD01－D区東・底面杭列痕跡（北東から）

20. SD01－D区東・西側出土状況（西から）

21. SD01－D区東・西側
（北壁）出土状況（東から）

22. SD01－E区西
出土状況（東から）

23. SD01－D区東・東側土層（西から）

24. SD01－E区（全体）出土状況（北西から）

25. SD01－E区（全体）出土状況（東から）

26. SD01－F区中央（東）出土状況（北から）

27. SD01－E区中央出土状況（北から）

28. SD01－E区・東側土層（西から）

29. SD01－F区西、出土状況（南東から）

30. SD01－F区西・底面杭列痕跡（南東から）

31. SD01－H区・底面杭列痕跡（東から）

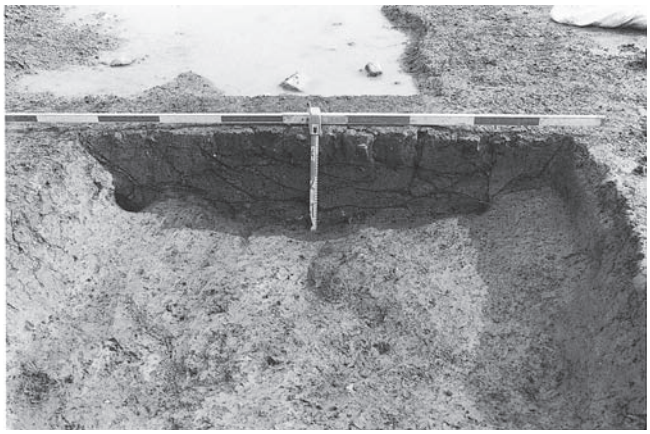
32. SD01－G区出土状況（西から）

33. SD01－H区・西側土層（東から）

34. SD01－H区礫・土坑出土状況（東から）

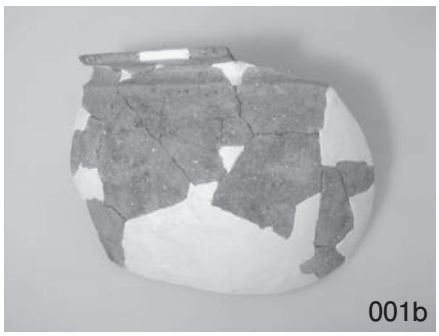
35. SD01－H区礫・土坑出土状況（北から）

36. SD01－L区・南東側土層（北西から）



37. SD01－M区南側土層（北から）

38. 東部調査区東端SA01・02、SB50、SK535（北から）

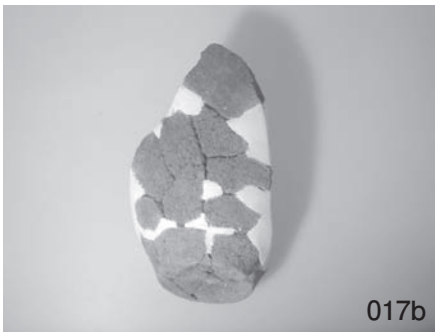

001b

001a

002b

002a

017a

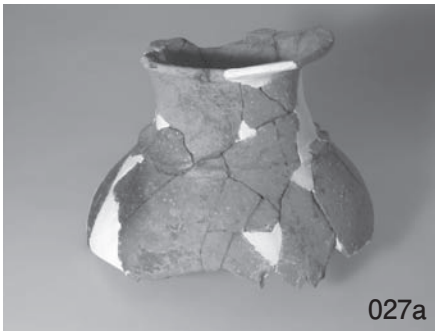

017b

018

019

020

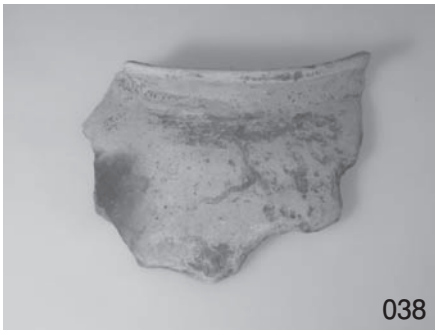
026

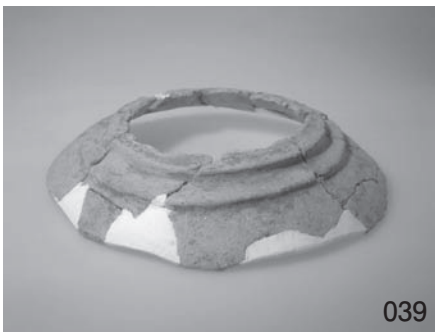

027a

027b

031

035


038


039

041

042

043

044

045

047

048

049

050

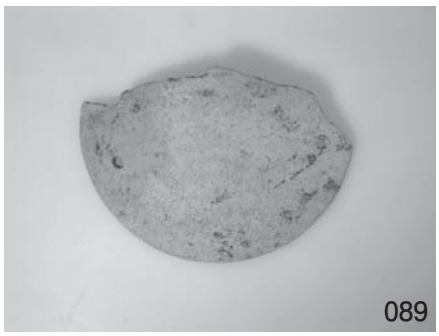
052

053

056

058

084


089

090

095

096

097

103

104

105

110

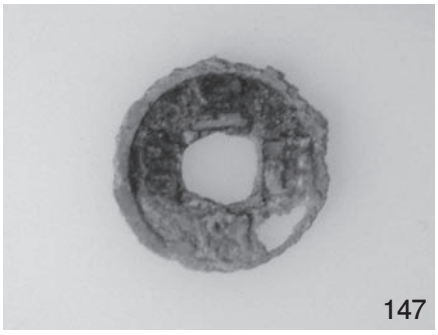
107

108

143

145

146


147

123

122

124

127

126

132

129

128

130-2

130-1

133

131

134

135

136

137

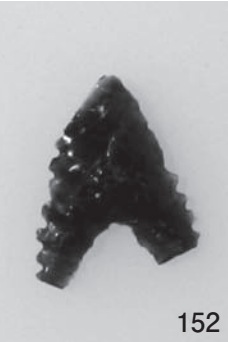
138

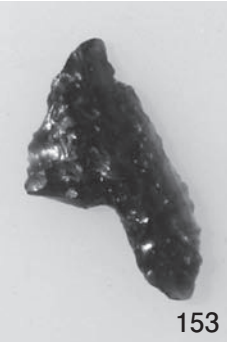
139

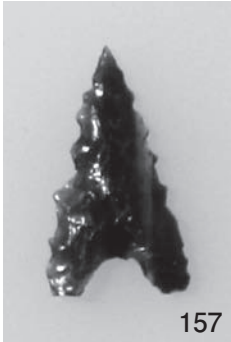
141

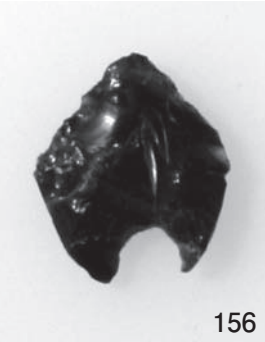
150

151


152


153


157


156

159

158

161

４．３区の調査

（１）調査概要

３区は浦江遺跡第5次調査地の北西側に位置し、弥生時代集落、古墳群（浦江古墳群）を始めとする縄文時代から中世にいたるまでの遺構、遺物を検出している（付図３）。これまで、３度にわたる報告を行ってきたが（赤坂・藏冨士2004、吉留他2005、藏冨士編2005）、ここでは、既往の報告において触れることの無かった遺構、遺物についての報告を行う。

赤坂　亨・藏冨士寛2004「3区の調査」『金武１』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第792集

吉留秀敏・遠部　慎・角縁　進2005「3区の調査（縄文）」『金武２』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第866集

藏冨士寛編2005『浦江古墳群1号墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第862集

（２）遺構と遺物

①竪穴住居（SC）

ここでは５軒の竪穴住居を報告する。出土した遺物は、いずれも弥生時代中期後半を中心とするもので、遺構の遺存状況は良いものではなく、遺物の出土量は少ない。

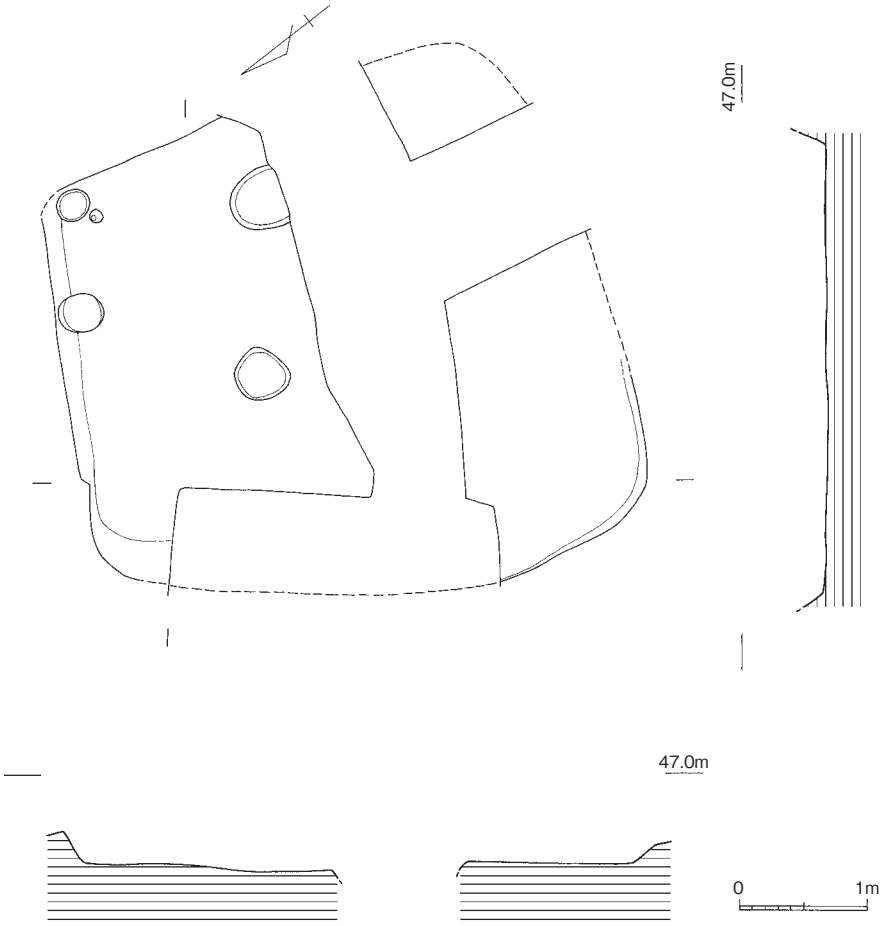


Fig.93　SC22（1/60）

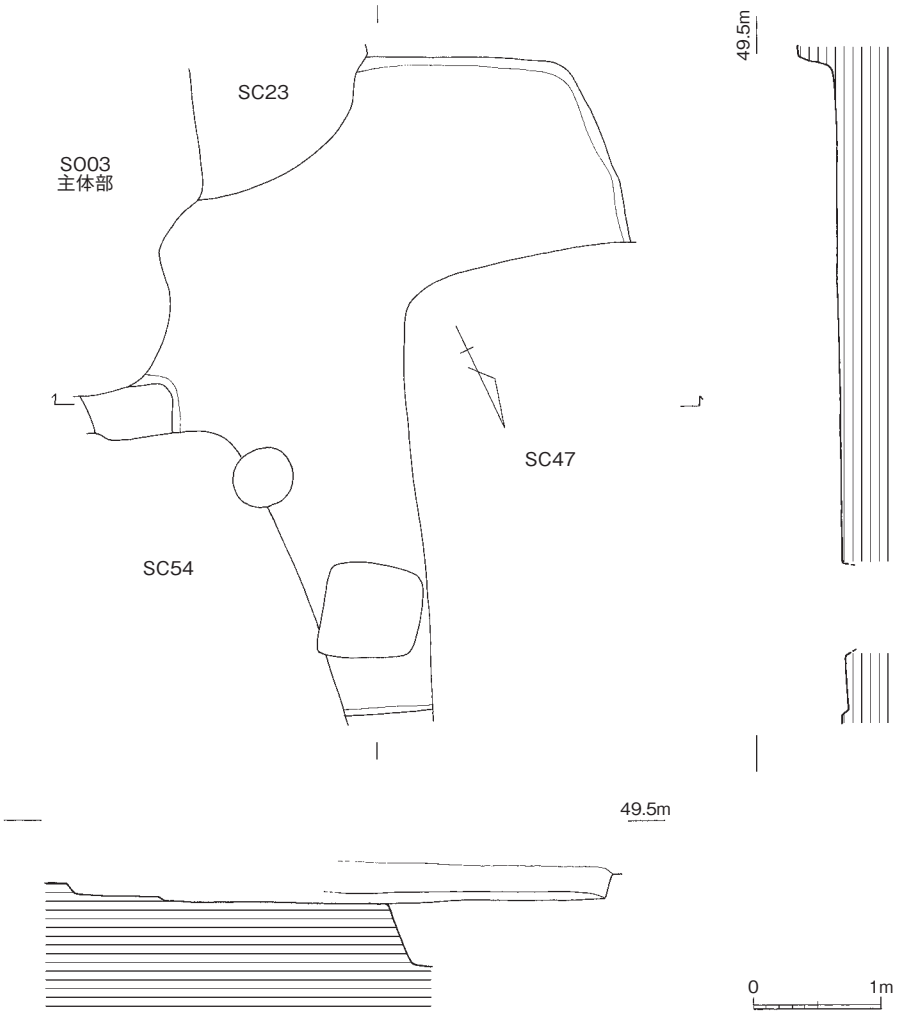


Fig.94　SC46（1/60）

SC22（Fig.93）

調査区の北東側、SO09の墳丘中に存在する。平面は一辺４ｍ程の方形を呈し、遺構の深さは20cm程。住居内にはいくつかピットが存在しているが、住居に伴うものであるかは不明。

出土遺物（Fig.97）　１は甕の口縁部片、３・４は底部片である。２は器台の底部片。

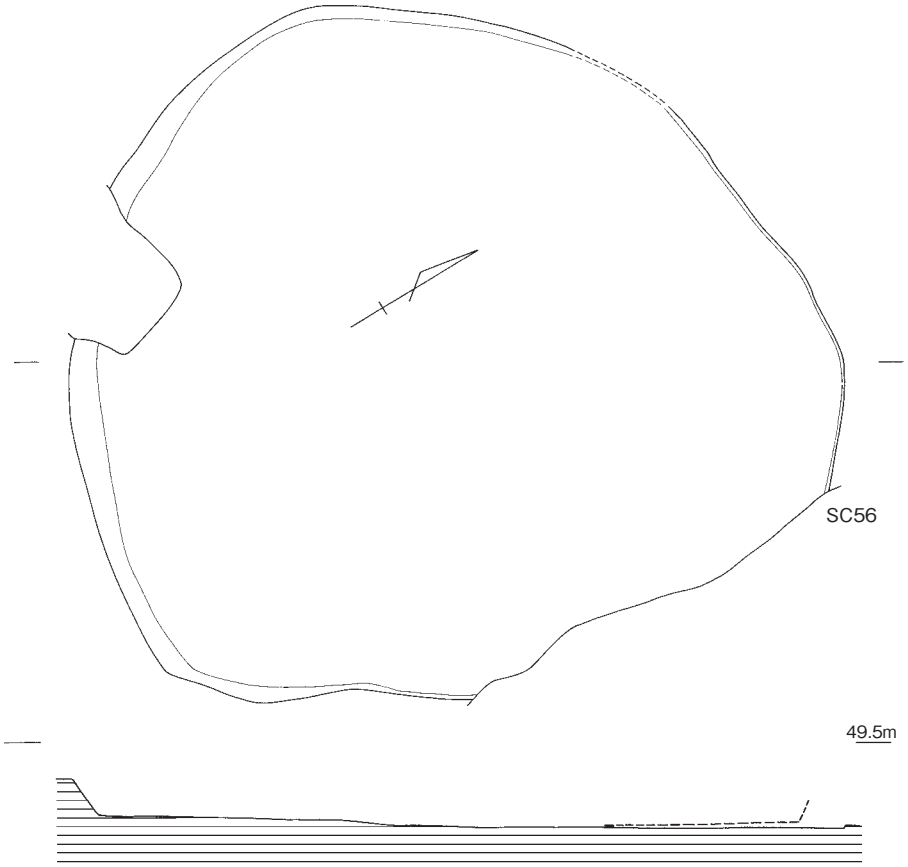
SC46（Fig.94）

調査区の中央やや西寄り、SO3の墳丘中に存在する。周囲をSC23・47・54に切り込まれており、ごく一部のみが検出できるに過ぎない。遺存部分から考えれば、平面は一辺５ｍ程の方形を呈するといえようか。遺構の深さは10～30cm程で、住居の東側にはベッド状の地山の高まりが存在する。住居に伴う柱穴は不明。

出土遺物（Fig.97）　５は甕の口縁部片。口縁部は「く」字形を呈し、外器面には一部ハケ目が残る。６は甕底部片。平底を呈する。

SC54（Fig.95）

調査区の中央やや西寄り、SO3の墳丘中に存在する。SC46を切り込んでいる。長さ４ｍ、幅３ｍの長方形プランを呈し、遺構の深さは20～30cmを測る。住居に伴う柱穴は不明。



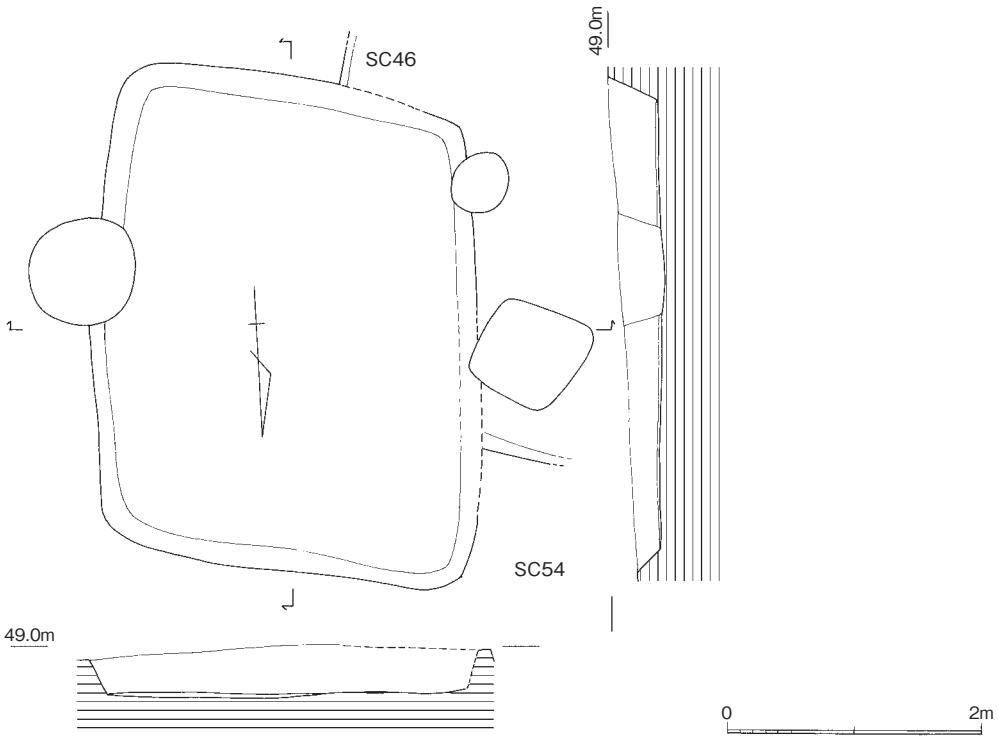


Fig.95　SC54・56（1/60）

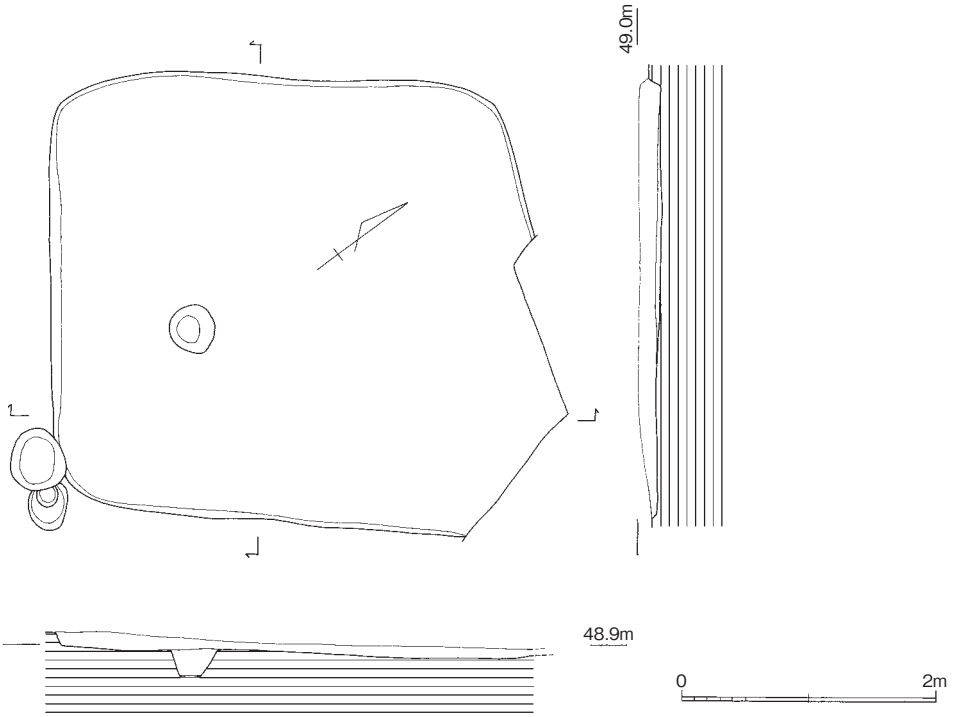


Fig.96　SC86（1/60）

出土遺物（Fig.97）　７は甕口縁部片である。端部はわずかに肥厚し、水平方向に張り出す。外器面に一部、ハケ目調整が残る。８は甕底部片。平底を呈する。外器面はハケ目調整を施す。

SC56（Fig.95）

調査区の中央やや西寄り、SO3の墳丘中に存在する。一部をSO03等に切られている。平面は径6mを測る円形を呈し、遺構の深さは10～30cm程。住居に伴う柱穴は不明。

出土遺物（Fig.97）　遺物の出土はごく少ない。９は甕口縁部片、10は底部片である。

SC86（Fig.96）

調査区の中央南寄りに存在するもので、一部をSO01に切られている。平面は一辺3.5m程の方形を呈し、遺構の深さは10～20cm程を測る。住居に伴う柱穴は不明。

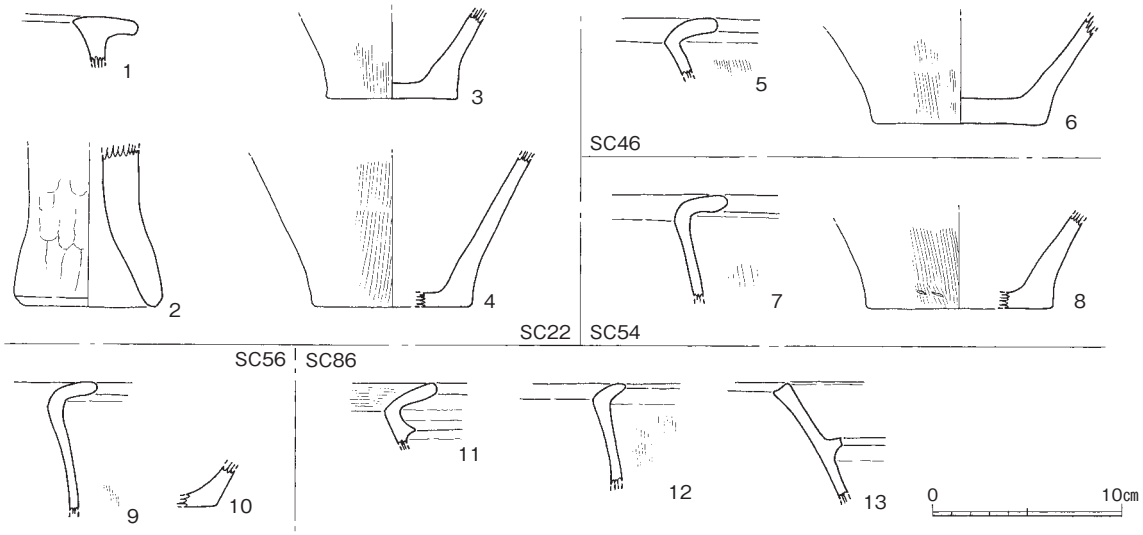


Fig.97　SC出土遺物（1/4）

出土遺物（Fig.97）　11・12は甕口縁部片である。11は口縁が「く」字形に外反し、頸部下に突帯を一条巡らしている。13は壷口縁部片。口縁は内傾しており、口縁部下方には突帯を一条巡らす。外器面には丹塗りを施している。

②土坑（ＳＫ）

調査区内には多くの土坑が検出されている。性格不明なものも多いが、Fig.98・100に示したものは貯蔵穴である可能性が高い。SK66・68・106出土品を除けば、出土した土器は、多くが弥生時代中期後半を中心とするもので、竪穴住居と時期的な違いはない。

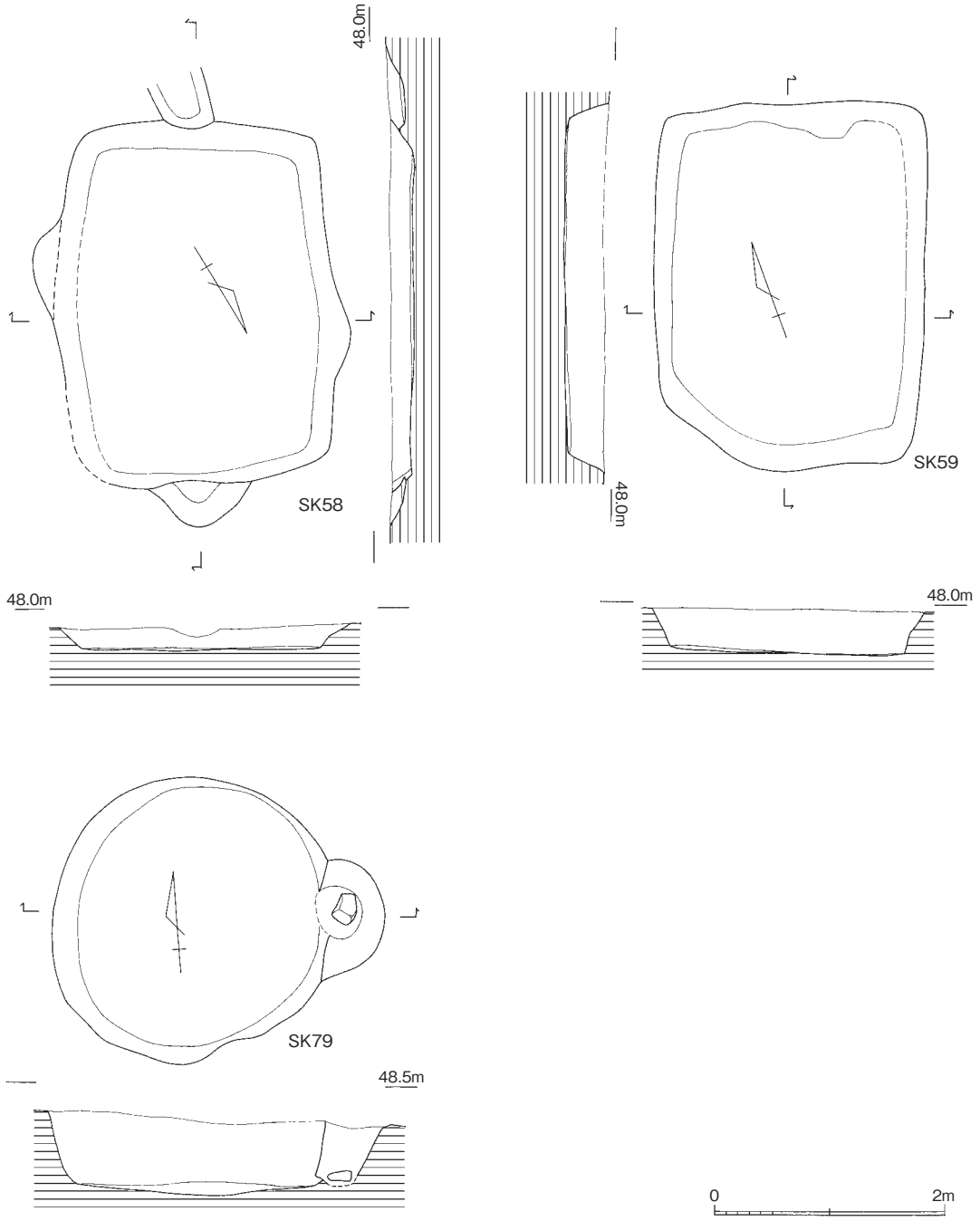


Fig.98　SK58・59・79（1/60）

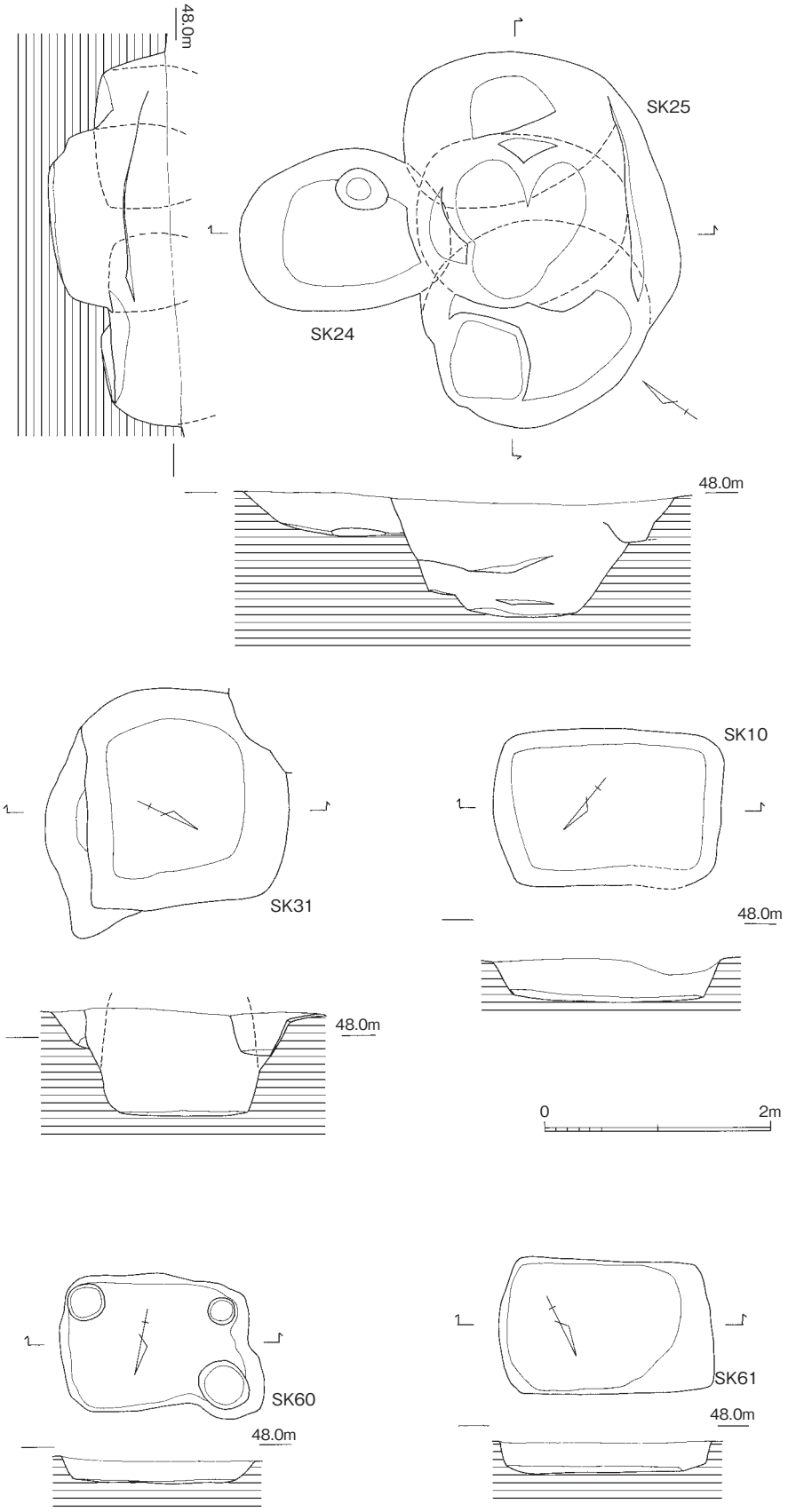


Fig.99　SK10・24・25・31・60・61（1/60）

SK58（Fig.98）

調査区中央やや北寄りに存在するもので、一部をSO07 周溝に切られている。平面は長さ3.2m、幅2.3mの長方形を呈し、遺構の深さは10～20cm程と、遺存状況は悪い。出土遺物はわずかで、図化していない。

SK59（Fig.98）

調査区中央やや北寄り、SK58の西側に存在するもので、平面は長さ3.2m、幅2.4mの長方形を呈し、SK58とほぼ等しい大きさを示す。また、SK58と59は主軸の方向も等しくしている。遺構の深さは30cm程を測り、底面は平坦に仕上げられている。

出土遺物（Fig.100）　１・２は甕口縁部片である。いずれの口縁部は水平気味に張り出しをみせている。３は甕底部片。４は器台脚部片。５は壷胴部片で、口頸部を欠損する。外器面には細かいヘラミガキ、および丹塗りを施している。

SK79（Fig.98）

調査区の東よりに存在するもので、一部をSO01周溝によって切られている。平面は径2.5mの円形を呈し、遺構の深さは60cm程を測る。底面は平坦に仕上げられている。

出土遺物（Fig.100）　６～８は甕口縁部片である。６・７は口縁部がいずれも鋤先状を呈している。６は口縁部下に突帯を一条巡らす。８は口縁が「く」字形に外反するもので、端部付近はわずかに肥厚する。９は甕底部片。

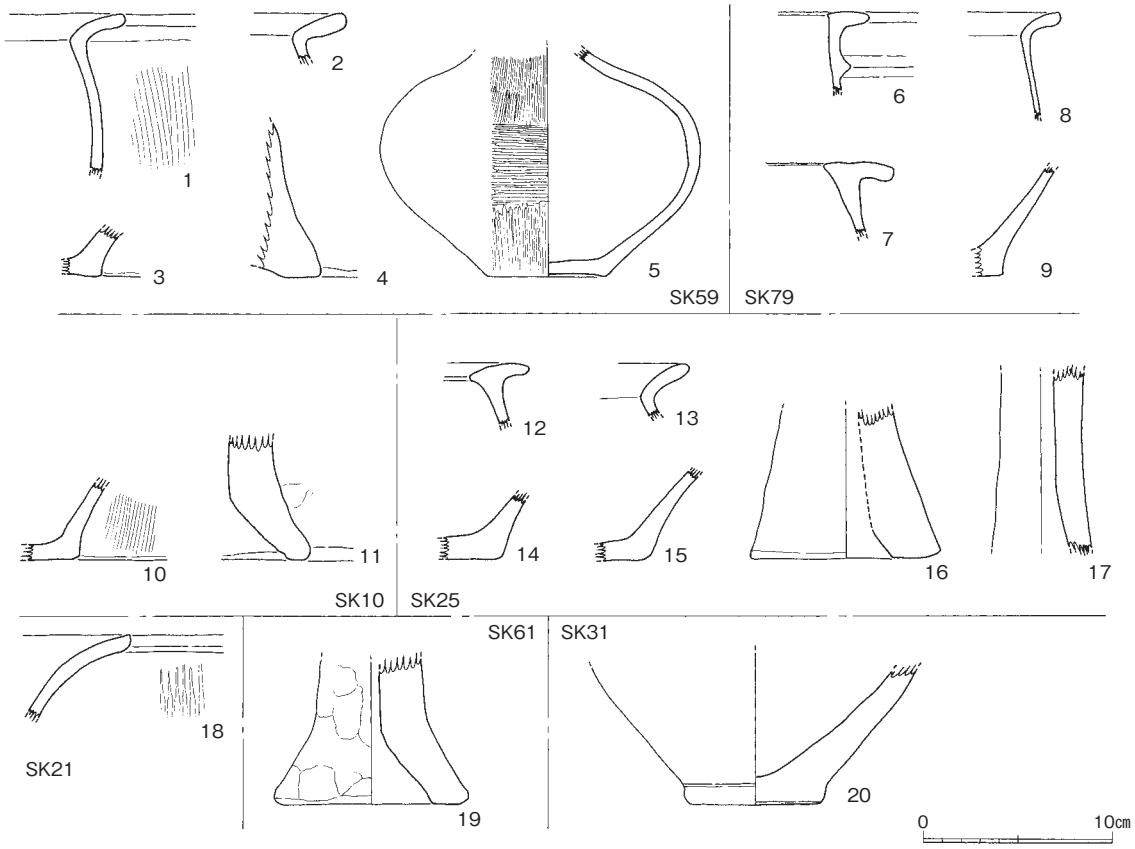


Fig.100　SK出土遺物１（1/4）

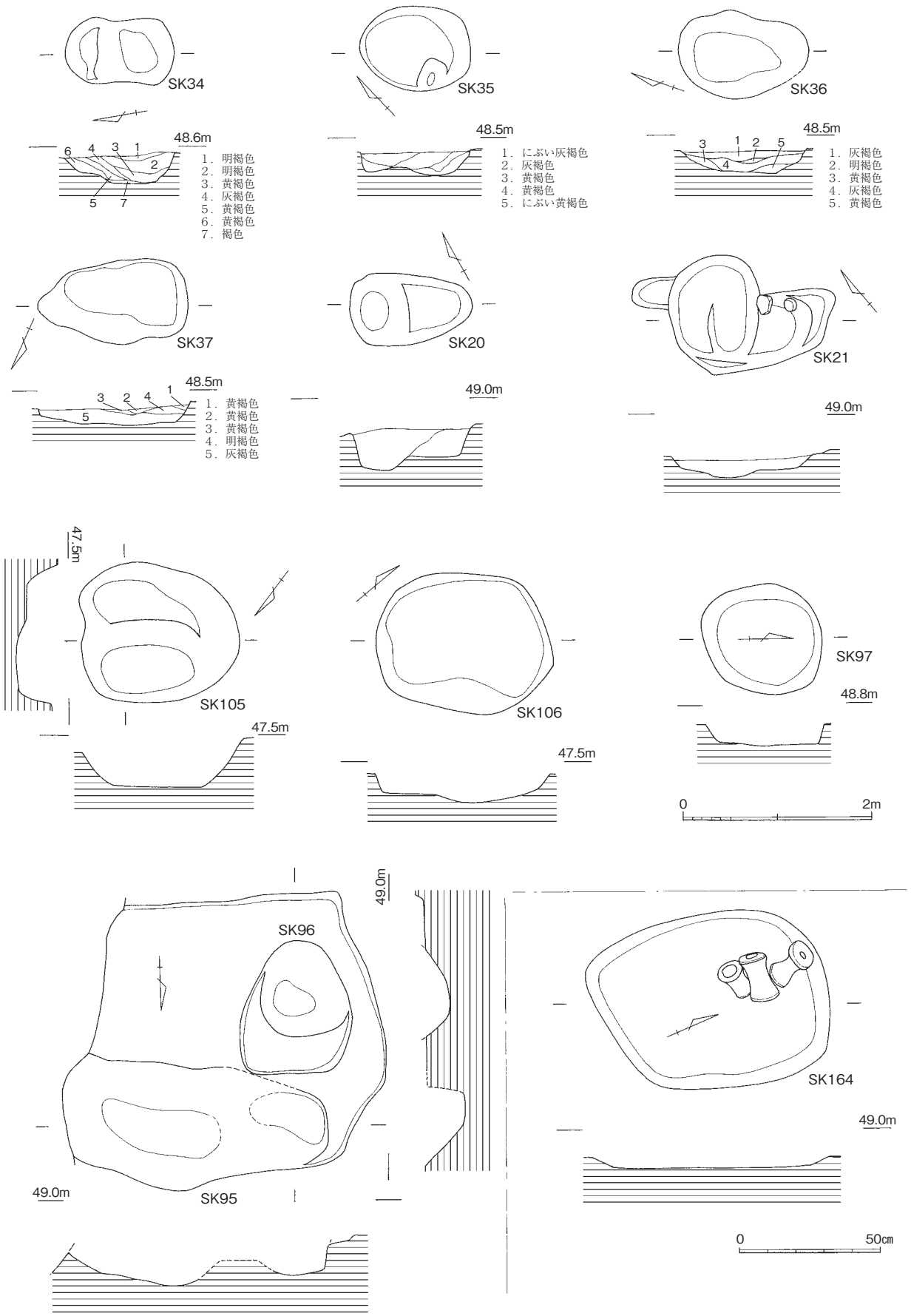


Fig.101　SK各種（1/20・1/60）

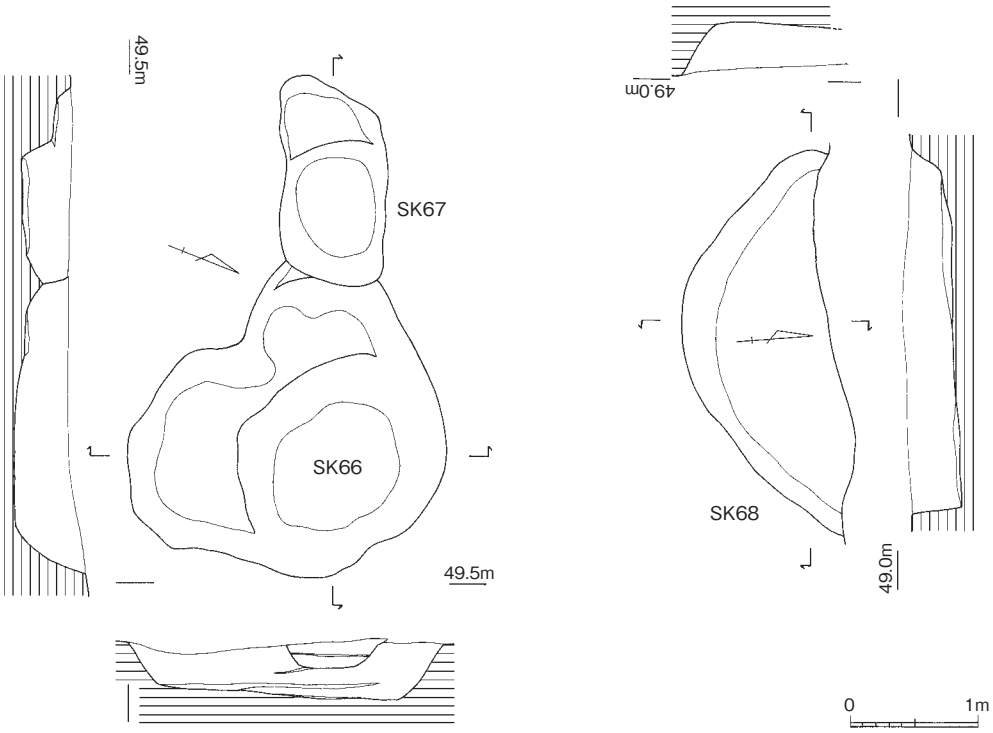


Fig.102　SK66・67・68（1/60）

SK10（Fig.99）

調査区中央やや北東より、SO02の主体部入口付近に存在するもので、平面は長さ２m、幅1.4mの長方形を呈する。遺構の深さは30～40cm程。底面は平坦に仕上げられている。

出土遺物（Fig.100）　10は甕底部片。外器面にはハケ目が残る。11は器台底部片である。

SK24（Fig.100）

調査区中央のやや東寄り、SO01北東側に存在する。本来はSO01と切り合い関係にあったのだろう。南側をSK25に切り込まれている。平面は長さ1.8m、幅1.5mの楕円形を呈し、深さは40cm程。壁面の立ち上がりは比較的急で、底面もほぼ平坦に仕上げられている。

SK25（Fig.99）

SK25の南側を一部切り込んでいる土坑で、本来は3基の土坑が切り合ったものである。3基とも径1.5m程の円形、もしくは楕円形を呈していたものと思われ、大きさ、形状ともSK24とほぼ等しい。遺構は中央の土坑が一番深く１m、他は60cm程の掘り込みを残している。底面は段状を呈する部分もあるが、ほぼ平坦に仕上げられる。

出土遺物（Fig.100）　12・13は甕口縁部片である。12は鋤先状、13は「く」字形に折れ曲がる口縁形態を有する。14・15は甕底部片、16は器台脚部片。17は高杯脚部片で、基部径4.4cm。

SK31（Fig.99）

調査区の東寄り、SO01の東側に位置するもので、平面は長さ２m、幅1.6mの略方形プランを呈している。遺構は深さ１m程を測り、各壁面は垂直気味に立ち上がっている。底面は平坦。

出土遺物（Fig.100）　20は壷底部片である。平底で、底面付近の外面はややくびれを有する。

SK60（Fig.99）

調査区の北側、SO07の西側に位置するもので、いくつかのピットに切り込まれている。長さ1.7m、幅1.2mの長方形を呈する平面プランを有し、遺構の深さは20cmを測る。遺構の遺存状況は悪いが、壁面の立ち上がりはしっかりとしている。出土遺物はごく少なく、図化していない。

SK61（Fig.99）

調査区の北側に位置し、SK60の南東側隣に存在する。平面は長さ1.8m、幅1.2mの長方形を呈し、深さは20cm程である。各壁面は垂直に立ち上がっており、底面は平坦。

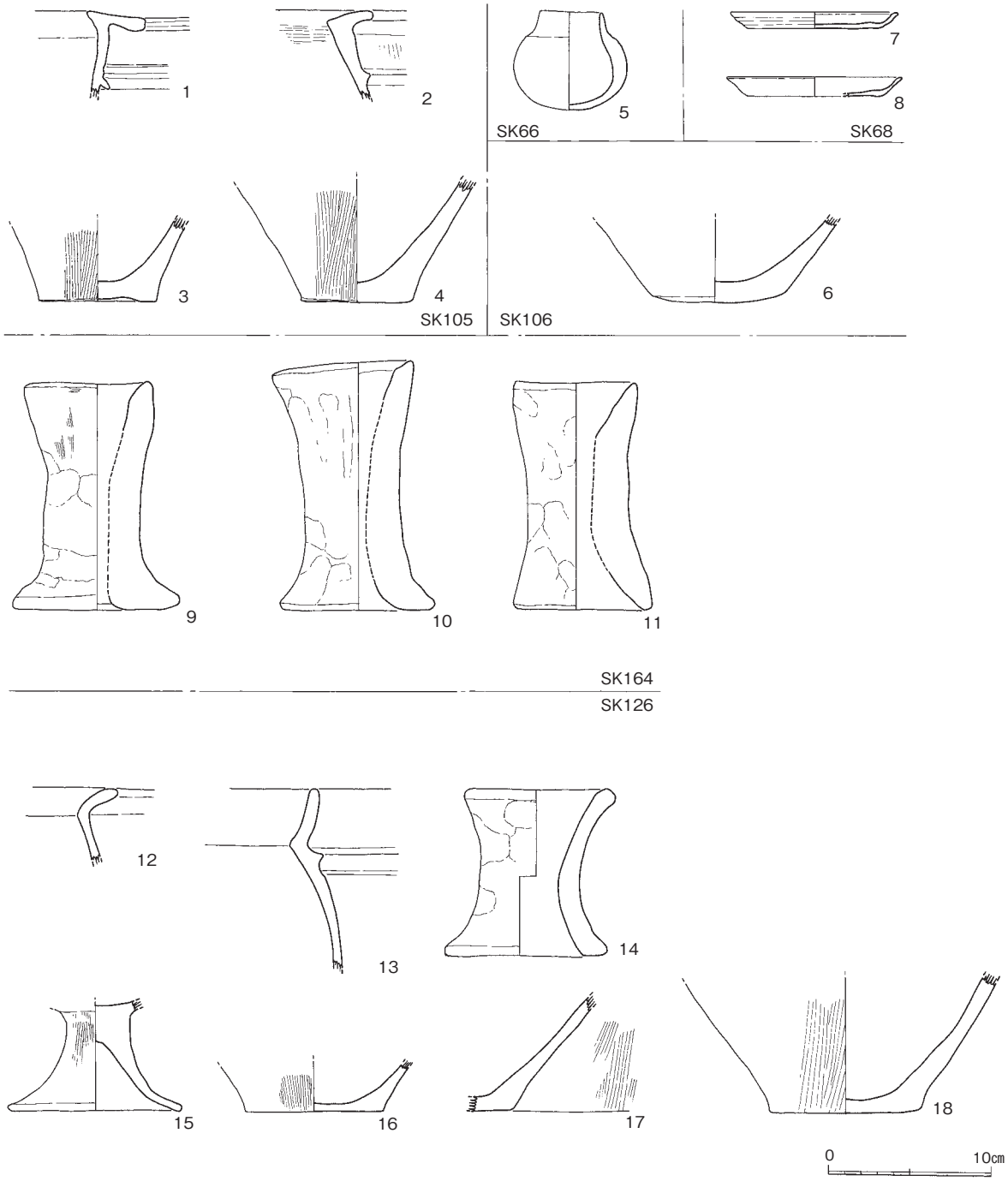


Fig.103　SK出土遺物２（1/4）

Fig.104　SK126（1/40）

出土遺物（Fig.100）　19は器台底部片である。底径9.6cmを測る。

SK34（Fig.101）

SO01の墳丘中に存在するもので、長さ1.2m、幅0.6mを測る。ピット状を呈する。北側には段状を呈する部分があり、掘り込みは2段となっている。出土遺物はごく少なく、図化していない。

SK35（Fig.101）

SO01墳丘の東側に存在するもので、径１～1.2m程の略円形を呈している。断面をみれば複数ピットが切り合ったものである可能性が高い。出土遺物はごく少なく、図化していない。

SK36（Fig.101）

SO01墳丘の東側、SK35の北側に位置するもので、長さ1.4m、幅１mのやや不定形な楕円形を呈している。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面も起伏が多い。出土遺物は少なく図化していない。

SK37（Fig.101）

SO01墳丘の東側、SK35・36の東側に位置するもので、長さ1.6m、幅0.9mを測る。不定形な平面プランで、遺構の深さは20cm程を測る。底面は平坦。出土遺物は少なく図化していない。

SK20（Fig.101）

調査区のほぼ中央、SO03の東側に存在するもので、長さ1.4m、幅0.8mを測る。東側には段状を呈する部分があり、掘り込みは2段となっている。ピット状を呈しているといえる。出土遺物は少なく図化していない。

SK21（Fig.101）

調査区のほぼ中央、SO03の東側に存在するもので、平面形態、および断面をみれば複数の土坑が切り合ったものであることが分かる。深さ10～20cm程で、いずれの土坑も浅い。

出土遺物（Fig.100）　18は広口壷口縁部片である。外器面には丹塗りを施し、縦方向のヘラミガキが暗文状に残っている。

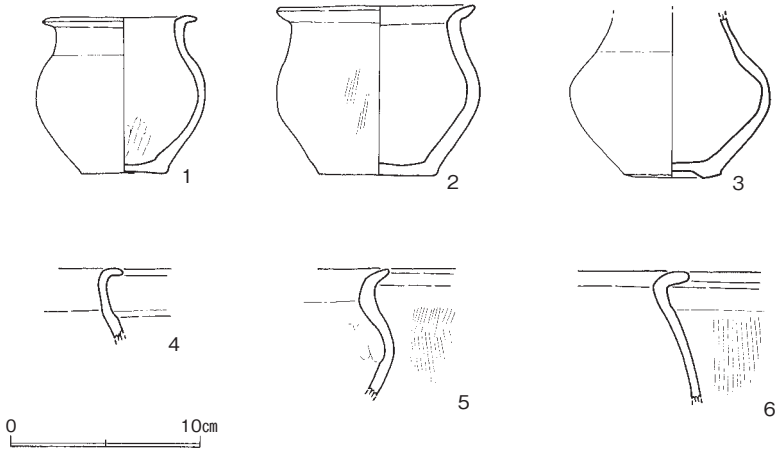


Fig.105　その他の遺物（1/4）

SK105（Fig.101）

調査区の北側、SO15の墳丘中に存在するもので、径1.5m程のややいびつな円形を呈している。南東側には段状を呈する部分があり、掘り込みは2段となっている。遺構の深さは30cm程。

出土遺物（Fig.103）　１・２は甕の口縁部片である。いずれも鋤先状の口縁部を有し、口縁部下には突帯を一条、巡らしている。３・４は甕底部片である。３・４とも平底を呈している。

SK106（Fig.101）

調査区の北側、SO15の墳丘中に存在するもので、SK105の南西側に位置する。平面は径1.5～1.8mのいびつな円形を呈し、底面には起伏があり、壁面の立ち上がりも一様ではない。遺構の深さは最深で30cm程を測る。

出土遺物（Fig.103）　６は甕底部片。底部は凸レンズ状を呈する。

SK97（Fig.101）

調査区のほぼ中央、SO01と03の間に位置するもので、平面は径1.2m程の円形を呈し、遺構の深さは20cmを測る。壁面は比較的立ち上がり、底面は平坦。出土遺物は少なく、図化していない。

SK95・96（Fig.101）

調査区のほぼ中央、SO01の西側に存在するもので、平面形態、および断面をみれば複数の土坑が切り合ったものであることが分かる。SK96は北側に段状を呈する部分があり、掘り込みは2段となっている。遺構の深さは30～40cm程。出土遺物は少なく、図化していない。

SK164（Fig.101）

調査区の西側に位置し、SO04の墳丘中に存在する。1.9×2.4mの不定形な土坑で、深さは10cm程と浅い。底面は平坦。尚、土坑内からは、器台が3固体まとまって出土している。

出土遺物（Fig.103）　９～11は器台である。いずれもほぼ完形の状態で出土した。

SK66（Fig.102）

調査区南側に位置するもので、SO01の南側に存在する。径２m程の不定形な土坑で、深さは50cm程を測る。底面はほぼ平坦だが、南側にはわずかに段状の高まりが存在する。

出土遺物（Fig.103）　５は短頸壷である。口径3.8cm、器高6.0cmを測る。古墳時代後期頃の土師器である。

SK67（Fig.102）

調査区南側に位置するもので、SK66の西側に位置し、その一部を切り込んでいる。長さ1.5m、幅0.7mを測る楕円形のもので、西側には段状の高まりがあり、掘り込みは2段となっている。各壁面の立ち上がりは急で、遺構の深さは40cm程を測る。出土遺物は少なく、図化していない。

SK68（Fig.102）

調査区南側に位置し、SO01の周溝により土坑の半ば以上を失っている。しかし出土遺物をみれば、SK68はSO01に後出することは明らかであり、これは切り合いの認定ミスで、SO01周溝掘り下げの際、削りとばしてしまったものである。遺構の残存長は３m程で、深さは30cmを測る。底面は平坦で、壁面の立ち上がりもしっかりとしている。

出土遺物（Fig.103）　７・８は土師皿である。底面はヘラ切りによる。口径は７が10.1cm、８が10.8cmをそれぞれ測る。

SK126（Fig.104）

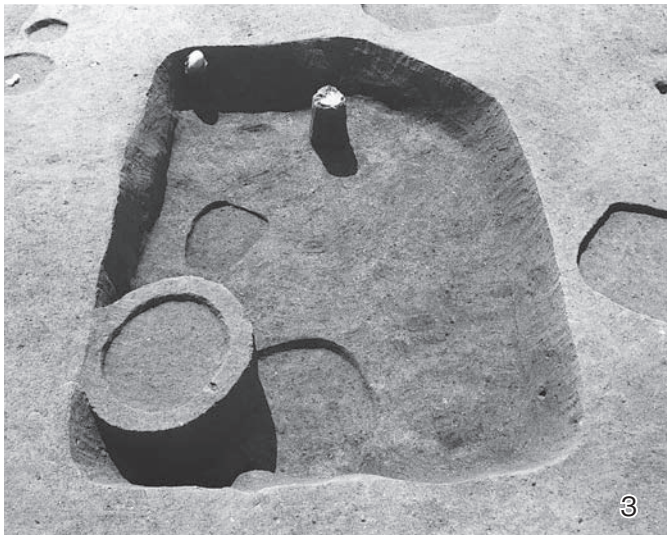
調査区の東側に存在するもので、SC124に切り込まれている。残存長は３m程で、本来は楕円形を呈していたのであろうか。深さは10cmにも満たない浅いものである。尚、土坑の内部からは多くの土器が出土している。

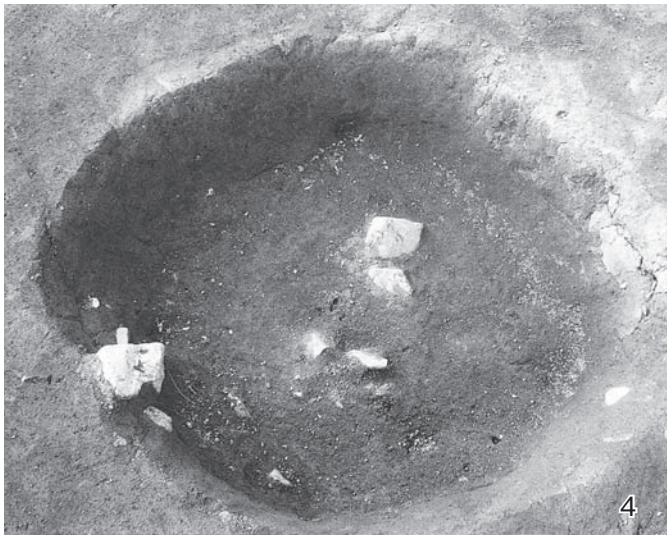
出土遺物（Fig.103）　12・13は甕口縁部片。13は頸部に突帯を一条巡らしている。14は器台。15は台付鉢等の台部。16～18は甕底部片で、いずれも平底である。

その他の遺物（Fig.105）

遺構は不明だが、小形壷等がまとまって出土しているので報告をする。１～５は小形の壷。平底もしくは若干の上げ底（３）で、胴は上部に最大径を有し、口縁部は大きく外方へ張り出している。６は甕の口縁部片。

1　SC54（北から）　　2　SC86（北から）





3　SK59（北から）
5　SK60（西から）
7　SK95・96（北から）

4　SK79（東から）
6　SK61（東から）
4　SK81（北東から）

１．６区の調査（Fig.106）

１）調査の概要

６区は事業地の西側にあり、水田造成により削平を受ける部分を対象とした。現状は水田であり、西から東に下がる棚田の一部である。現在の標高は50～52mである。６区は南北約60m、東西約18mの範囲と南西端につながる道路拡幅部分の南北約5m、東西約16mの範囲である。道路拡幅部分は2004年刊行の『金武１』で５区の報告内で６b区として既に報告している。以下では残部６a区を報告する。

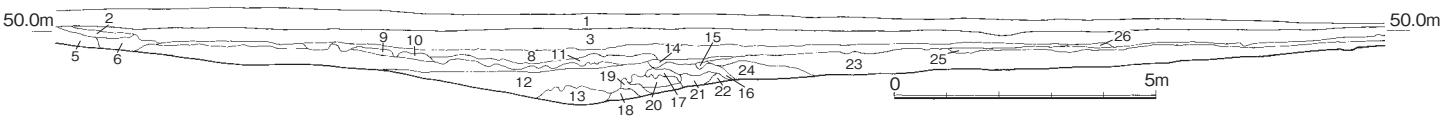
本調査区の基盤標高は南側が高く、東側に低い。遺構検出面は南側が古期扇状地形成土であり、基盤礫層上に赤色ローム質粘土が硬く堆積する。北側の基盤礫層上は新期扇状地形成土であり、基盤礫層上に砂・シルトが堆積し、これが遺構検出面となる。遺構面より上部には水田耕作土、床土等の累層があり、全域に約0.5～0.8mの被覆土がある（Fig.107）。調査区内の遺構検出面はおおよそ平坦であるが、水田造成時に相当の削平が予測される。特に調査区内西側や南半部では基盤礫層が現れ、多くの遺構は失われていると見られる。検出された遺構は竪穴式住居跡２棟、溝状遺構２条、土器集中遺構１、柱穴約60基、自然流路１などである。このうち自然流路SX01は南西側の５区SX01の延長であり、北東側の７区SX01から20区SX01に繋がる一連の流路である。なお柱穴類のなかで建物構成をなすものは見出すことができなかった。

２）遺構と遺物

竪穴式住居SC02･03（Fig.108）

SC02は調査区南端で検出した径約６mと推定される円形住居跡であり、北東側の住居SC03を切る。住居南半分は農道下となり、調査不可能であった。また東側は棚田の段差により失っている。既に水田造成などにより大きく削平され、保存の良い西側で壁高約10cmの残存状態であった。SC02は全体の三分の一程度の検出し、床面、壁、柱穴等を確認した。床面に張床はないが、焼土面と炭

Fig.106　６区全体図（1/300）



1．黄色みを帯びた灰色砂質土。径５㎜程の砂礫を含む。この層の底部分から下の２、３層の上の部分にみられる、より黄色みを帯びた部分は水田の床土の痕跡と思われる。
2．暗褐色シルト質土。礫、砂礫、炭化物、鉄分を含む。３層との境に鉄分の脈がある。
3．灰色砂質土。１と同じ砂礫を含む。
4．暗灰色砂質土。礫、炭化物を含む。鉄分の脈が全体的に走る。１、３層間にみられる水田床土よりも古い床土の可能性もある。（25層も同様）
5．暗茶褐色シルト質粘土。炭化物を少量含む。
6．暗褐色シルト質土。砂層が混入している。
7．暗茶褐色シルト質粘土。礫、砂礫、炭化物を含む。
8．暗灰色砂質土。砂礫、炭化物、鉄分を含む。
9．暗茶褐色シルト質土。砂礫、炭化物を含む。全体的に鉄分を多く含む。
10．暗茶褐色シルト質土。含有物も９層に似る。
11．暗茶褐色シルト質粘土。全体的に鉄分を多く含む。
12．暗褐色シルト質粘土。礫を含む。
13．暗褐色粘土。炭化物のブロックあり。
14．暗灰色シルト質粘土。砂礫、鉄分を含む。
15．灰色シルト質土。砂粒を多く含む。
16．黄色みを帯びた灰色シルト質土。下層（17、21、22層）との間に鉄分の脈が走る。砂礫を含む。
17．暗褐色シルト質粘土。砂礫、炭化物を含む。
18．暗褐色シルト質粘土。きめ細かい。
19．暗茶褐色砂質土。きめ細かい。
20．暗茶褐色シルト質粘土。きめ細かい。土色は19層に似る。
21．暗灰色の砂粒層。
22．暗茶褐色砂質土。地山に似る。
23．灰色みを帯びた暗茶褐色土。鉄分を含む。黄色の砂粒ブロック、少し緑色を帯びた灰色の粘土ブロックを含む。
24．暗茶褐色の荒いシルト質土。鉄分の脈あり。径20cm程の暗灰色の砂粒ブロックあり。
25．暗茶褐色粘土。20mの辺りから全体的に鉄分を含み、赤みを帯びる。
26．暗褐色粘土。鉄分を含む。

Fig.107　６区東壁土層断面図（1/150）

化物分布が認められた。柱穴と壁溝の分布から２～３回の建て替えが予測される。床面直上に土器類が少量出土した。SC03は南側をSC02、東側を近年の棚田の段差により削平され、深さ約5cmで南北2.2m、東西1.4mの掘り方が残存する。本来の規模は不明であり、壁溝がなく、柱穴２を確認した。残存形態から平面楕円形の小型竪穴式住居の可能性が高い。住居の時期は不明であるが、少量の土器片から弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式段階とみられる。なお、Fig.109-1～6は既報告のSC04出土土器の追加分であり、ほぼ同時期である。

溝状遺構

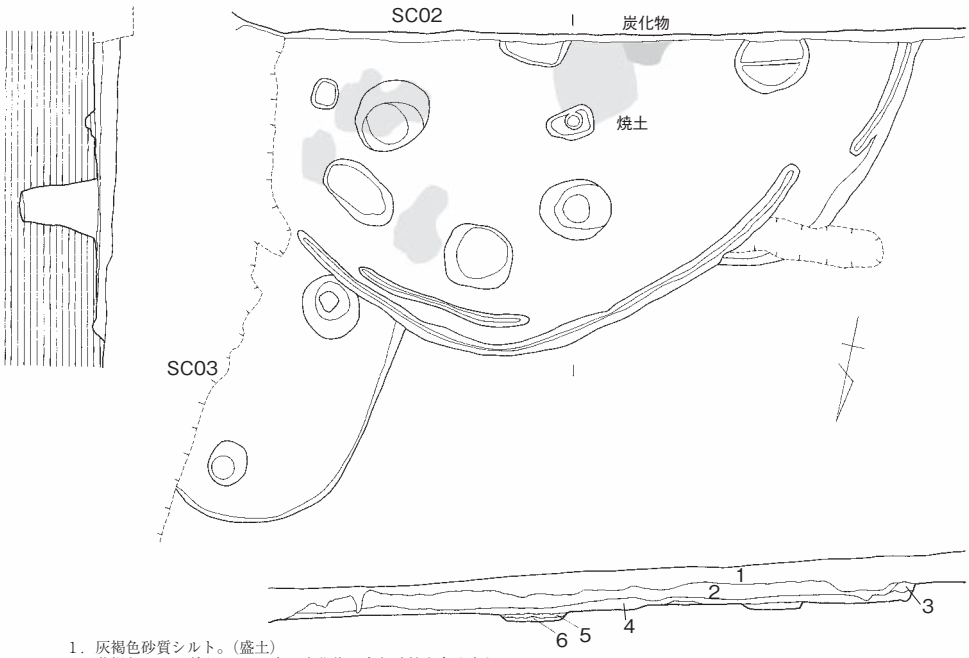
調査区中央にあり、何れも南西から北東に延びる溝状遺構である。SD21は長さ7m、幅30cm、深さ5cmであり、覆土は砂層である。SD22は長さ8m、幅50cmであり、覆土は砂層である。

土器集中遺構SX35

自然流路SX01の北側にあり、遺構検出時点で土器類の集中出土を確認したため、周辺の精査を行ったが明瞭な遺構を見出せなかった。出土状況は須恵器坏類が一部重なり、周囲に須恵器壷、甕類、土師器坏、甕破片が分布していて、拳大から人頭大の円礫も集中していて、一部は自然流路SX01の覆土上部にも広がる。こうした分布状態から竪穴式住居などの遺構とは考え難い。土器類は須恵器（Fig.110-25～32）、土師器（同33～35）があり、古墳時代後期で小田編年ⅢＢ式段階の一括遺物であり、同時期の祭儀にかかわる資料とみられる。この時期は自然流路SX01の北側に浦江古墳群が造営されており、本遺構は古墳周溝や周辺の関連遺構である可能性がある。

自然流路SX01

調査区北側に南西から北東に流れる自然流路である。規模は幅4.5～6m、深さ約0.6mである。覆土は下部が砂質土、上部がシルト質土であり、水成堆積物が主体である。下半部には弥生時代中期土器類、最上部にはSX35と関連する古墳時代後期の土器類が出土し



1．灰褐色砂質シルト。（盛土）
2．茶褐色シルト質土。１cm大の炭化物、白色砂粒を多く含む。
3．黄褐色粘質土。0.5㎜以下の炭化物、白色砂粒を含む。
4．灰黄褐色粘質土。0.5㎜以下の炭化物、白色砂粒を均質に含む。
5．灰黄褐色粘質土。多量の炭化物、焼土粒を含む。
6．黄褐色粘質土。小礫を含み、ややシルト質。（地山）

Fig.108　竪穴式住居SC02・03（1/60）

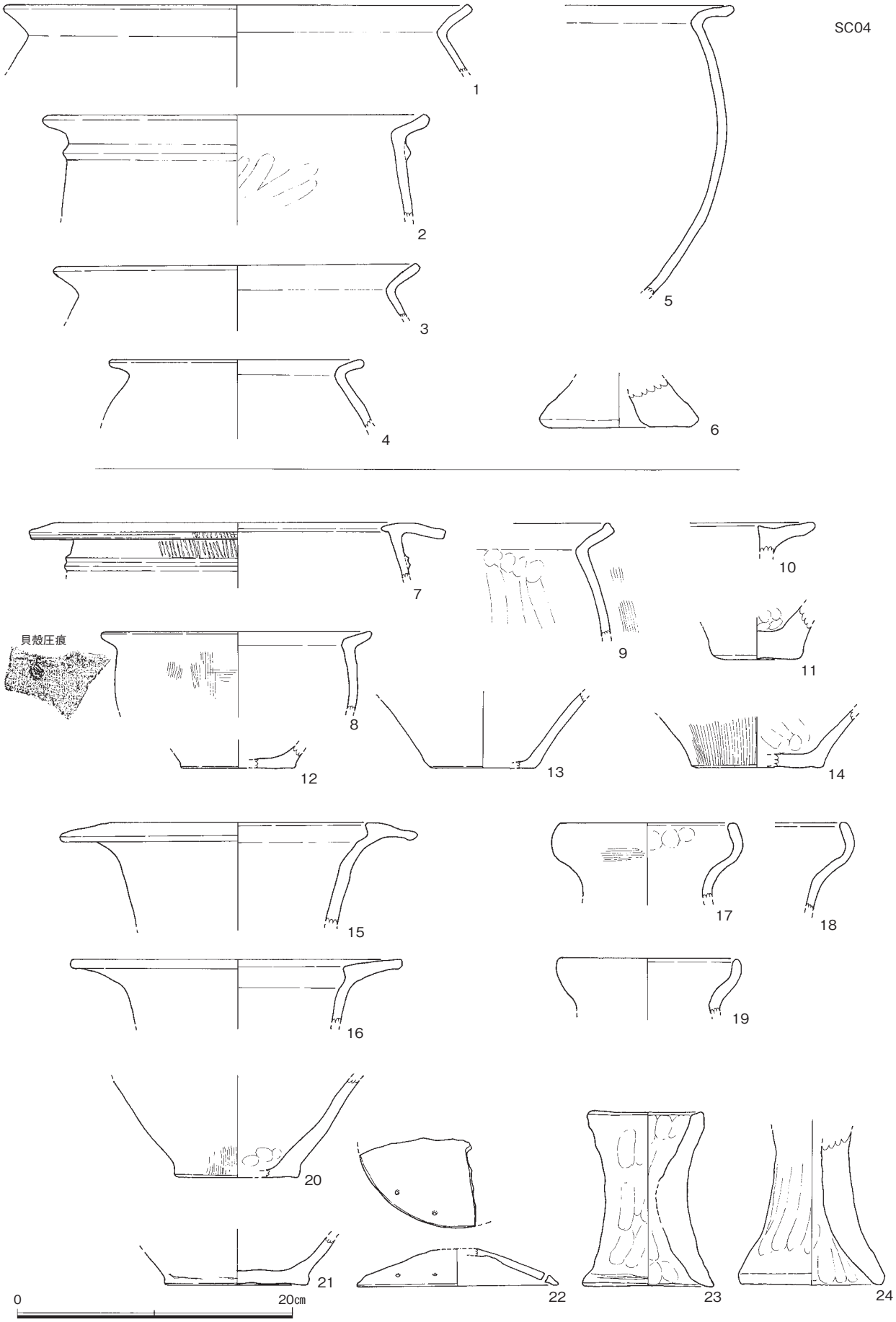


Fig.109　6区出土遺物（1/4）

た。下部の弥生時代土器類は７区とは異なり土器類の集中や大破片などはなく、小破片が散在状態であった。土器類には甕（Fig.109-7～13）、壷（同14～20）、鉢蓋（同21）、器台（同22、23）などがあり、須玖Ⅱ式で弥生時代中期後半に位置付けられる。

３）まとめ

本調査区では浦江扇状地の扇頂部に近い位置にあり、弥生時代中期後半の竪穴式住居跡３棟、柱穴などが出土した。これらは何れも調査区南側に偏って分布している。周辺における同時期の集落は２区北側地域と３区にあり、その間には自然流路SX01が分断するように存在する。この流路は本来、南側の古期扇状地域と北側３区内の残丘の間を流れた旧竜谷川氾濫河道の残存部であり、埋没土壌の様相からこの段階には雨水時などを除き通常流水はなかったとみられるが、浅い谷状の窪地として南北２つの集落を分断する地形区分をなしていたと考えられる。なお、SC04とSC02、03は棚田の上下段に分布し、直線で約13mの距離にありながら床面標高に約1mの落差がある。周囲は耕地造成に伴い相当削平されてはいるが、棚田そのものが本来の地形傾斜を生かしており、住居経営時点も同様の傾斜があったと推定できる。つまり本来この付近は西から東に約９～10度の斜面で下がっていたと復元できる。なお、６区東側の７区では扇央部の緩やかな平坦地となり、６区との間に自然地形の変換点があったと推定できる。２区と６区にひろがるこの住居がなにゆえ平坦地ではなく、こうした傾斜地を選地したのかは問題であり、改めて検討したい。

２．７区の調査（Fig.111）

１）調査の概要

７区は事業地の西側にあり、水田造成により削平を受ける部分と構造物（道路・水路等）を対象とした。現状は水田であり、比較的平坦な水田である。この地点は浦江扇状地のほぼ中央に位置し、２区を含む南側の古期扇状地域と接する新期扇状地域にあたる。南側の２区とは現在道路を隔てて１ｍほど下がり、北側の３区残丘との間は旧竜谷川氾濫河道の低地であり、全体が新期扇状地堆積物により覆われている。また西側の扇頂部に近い５、６区側からの緩斜面がこの付近でさらに緩やかとなり、これより東側には比較的平坦地な地形となっている。現在の標高は約50mである。調査対象地は南北約40m、東西約7mの範囲と南側の水田切り下げ部分の南北約23m、東西約40mの範囲である。本調査区の基盤標高は南西端が高く、北～東側に低い。また、調査区北端には自然流路SX01があり、

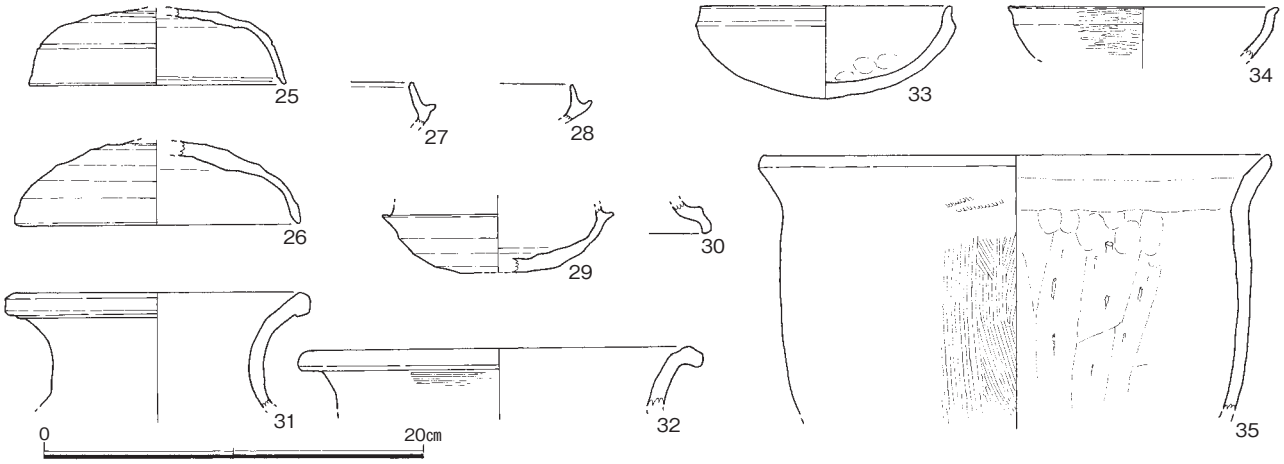


Fig.110　SX35出土遺物（1/4）

北岸は基盤である花崗岩風化層の崖面となっている。南側の遺構検出面は新期扇状地形成土であり、基盤礫層上に砂・シルトが堆積し、これが遺構検出面となる。遺構面より上部には水田耕作土、床土等の累層となり、全域に約0.2～0.6mの被覆土がある。調査区内の遺構検出面はおおよそ平坦であるが、水田造成時に相当の削平が予測される。特に調査区内南東側では基盤礫層が現れ、多くの遺構は失われていると見られる。

2）遺構と遺物

検出された遺構は竪穴式住居跡１棟、溝状遺構１４条、土坑３基、柱穴約20基、自然流路１条などがある。このうち自然流路SX01は西側の５区SX01、６区SX01から20区SX01に繋がる一連の流路の一部である。なお柱穴類のなかで建物構成をなすものは見出すことができなかった。

竪穴式住居跡SC08

調査区西側にあり、ほぼ直角で深さ5cm程度の落ち込みを検出した。東側では削平で失われ全体規模は不明である。東西3m以上、南北3.8m以上である。床面は不明であり、柱穴も注意したが確認できなかった。住居ではない可能性もある。検出時にはSK04に切られていた。覆土中から弥生中期甕片（Fig.116-60）が出土した。跳ね上げ口縁の特徴をもつ。

溝状遺構SD19～SD30

調査区南半部で多数の溝状遺構を検出した。何れも幅0.5m以下、深さ0.2m以下で直線的である。近年の水田造成による削平で遺構底部の遺存で、覆土は何れも砂質であり水成堆積物とみられる。流走方向から２群に大別される。SD19～26、28の９条は南西から北東方向に、等高線にほぼ直角に向かっている（A群）。この溝A群には枝溝の突出部や、接して浅い水成作用による不整形土坑SX13、15､16が分布する。これに対しSD27、29～32はほ

Fig.111　７区全体図（1/300）

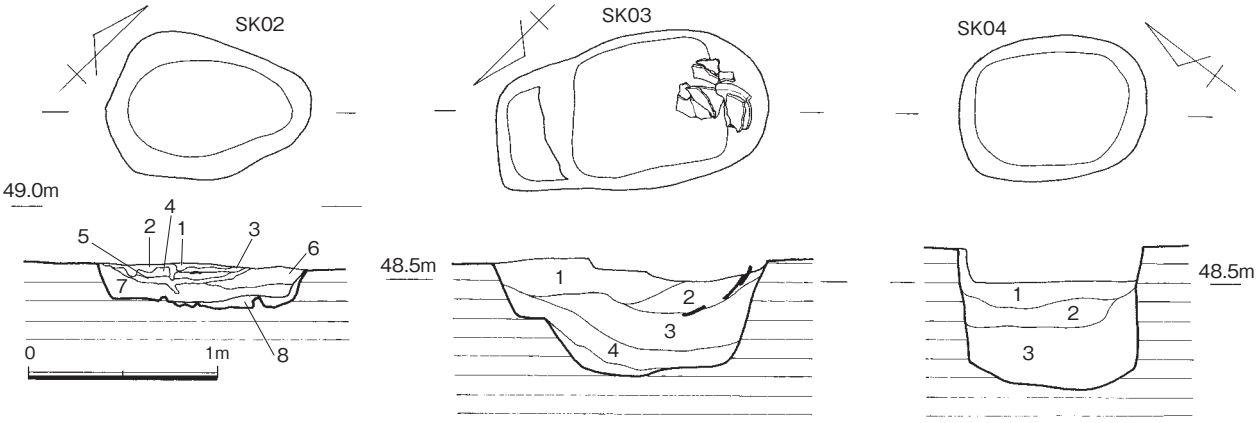
ぼ東西方向で、現在の水田区画と並行している（Ｂ群）。出土遺物にはSD19から甕片（Fig.116-62）、SD22から甕片（同63）、SD25から甕、壺片（同64､67）、SD26から甕片（同68）、またSX13から甕片（61）が出土した。何れも弥生時代中期後葉の須玖Ⅱ式である。SD24からは布留式甕片（Fig.116-66）が出土している。溝Ｂ群からは弥生時代から中世の土器細片が出土したが、摩滅が著しく図化出来ない。以上の点から溝A群は弥生時代中期後半から古墳時代、溝Ｂ群は断定しかねるものの、周辺の状況から中世以降に所属すると考えられる。これらの溝は水成埋土が認められることや、ことに溝Ａ群に水口やそれに接して水溜り状の遺構が認められることなどから、何れも水田灌漑に関わる用水路とみられる。

土坑SK02～SK04（Fig.112）

調査区西側に土坑と柱穴が集中して分布する。調査範囲では建物や関連遺構を検出できなかった。SK02は調査区中央北寄りで検出した。南北1.1m、東西0.8m、深さ0.2mの平面卵形の土坑である。検出面では中央最上部に堅く締った焼土面、直下に炭化物層があり、平坦な土坑内は炭化物が多く含まれていた。遺物の出土はなく時期は不明である。SK03は南北1.5m、東西0.8m、深さ0.6mの不整楕円形の土坑であり、北側に階段状の段がある。柱痕跡はなく、壁面の上部が緩やかとなり、埋土はレンズ状堆積を示す。埋土上部に南側から流れ込んだ状態で甕１個体の破片（Fig.116-59）が出土した。土器は須玖２式であり、弥生中期後半に位置付けられる。SK04は南北1.0m、東西0.8m、深さ0.8mの隅丸長方形の土坑である。SC08を切る。壁面は垂直に近く、埋土は水平堆積となる。遺物の出土はなく、時期は不明である。

自然流路SX01

調査区北端で検出した。幅4.8～5.2m、深さ0.7～0.8mの流路である。５、６区と同様に下半部は砂層で水成堆積物であり、上部に従い土壌化が進む。本調査区内では他調査区に比べて、壁面の傾斜が急であり、床面に近い位置で土器類の出土が多い。土器破片も大きく、完形に近い甕破片（Fig.113-11、12）が一括投棄状態で出土する箇所もあった。この調査地点は北側３区の弥生時代集落に最も近い位置にあり、何らかの関連が予測される。出土した土器類には甕（Fig.113～114-1～33）、壺類（Fig.115-34～44）、鉢類（同45～49）、高坏（同50）、器台（同51～58）などがあり、須玖



1．灰黄橙色土。固く締まる。（焼土）
2．黒褐色土。炭ブロック。
3．赤みの混じる灰色土。炭粒が混じる。
4．暗赤褐色土。褐色土と焼土ブロックが混じる。
5．灰黄褐色土。炭粒、白色砂粒を多量に含む。
6．灰褐色土。黄色粘質土ブロックが混じる。
～１cm 大の炭化物を多く含む。
7．暗褐色土。わずかに炭化物を含む。
8．10cm 以下の小礫層。（地山）

1．茶褐色土。やや粘性が弱く、固く締まる。
３～５mm 大の白色砂粒、炭化物を多く含む。
2．暗茶褐色砂質土。粘性はなく、白色砂粒も少ない。
微小の炭化物を多く含む。
3．黄褐色砂質土。黄色粘質土をブロック状に含む。
１、２層より粘性あり。
少量の白色砂粒、炭化物を含む。
4．黄褐色砂質土。３層より黄色粘質土を多く含む。
２～３cm 大の小礫を含む。

1．暗茶褐色砂質シルト土。
黄褐色土をブロック状に含む。
2．黄褐色砂質土。黄色粘質土をブロック状に含む。
少量の白色砂粒、炭化物を含む。
3．褐色土。～５cm 大の小礫を含む。

Fig.112　土壙SK02～04（1/40）

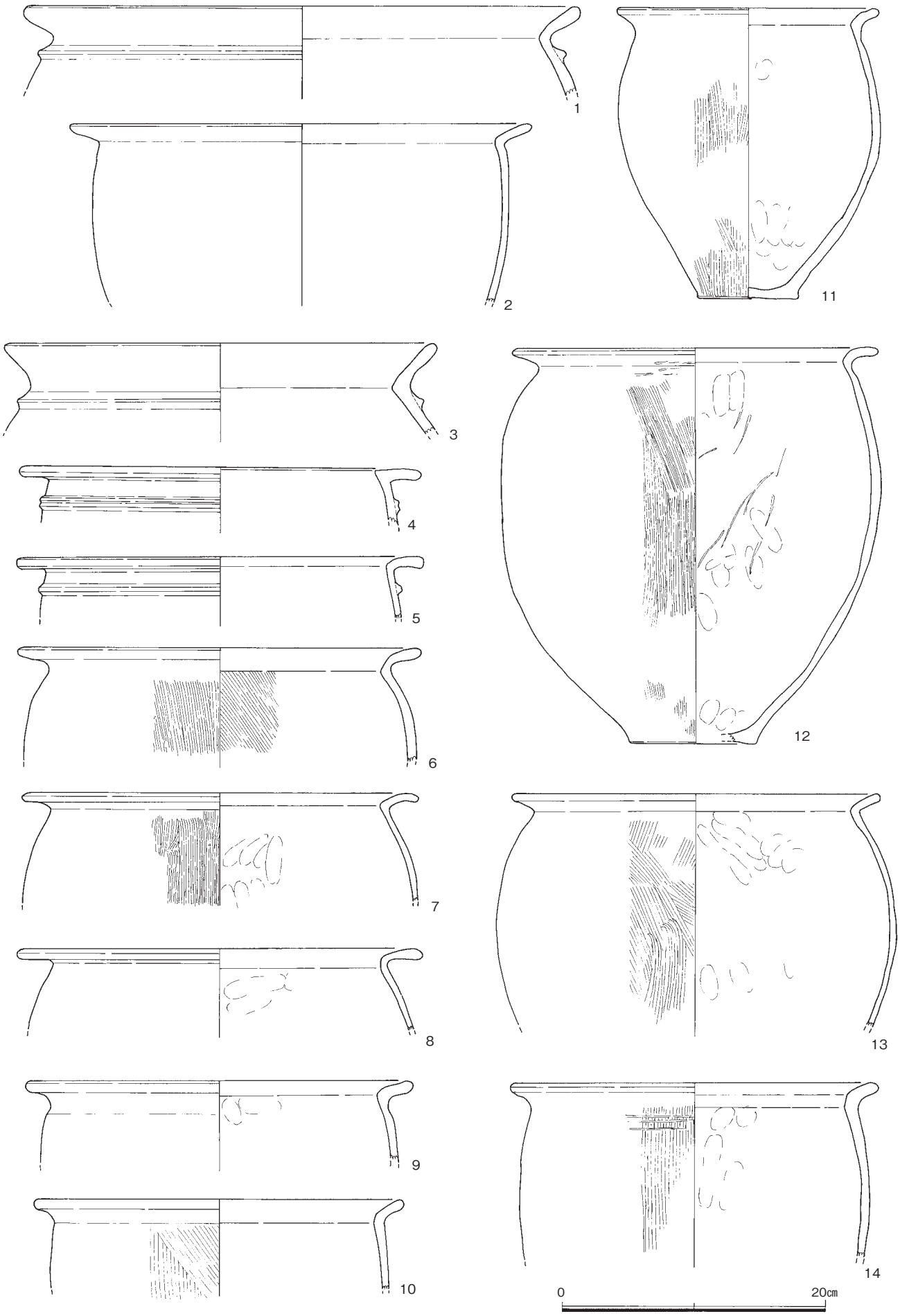


Fig.113　７区出土遺物１（1/4）

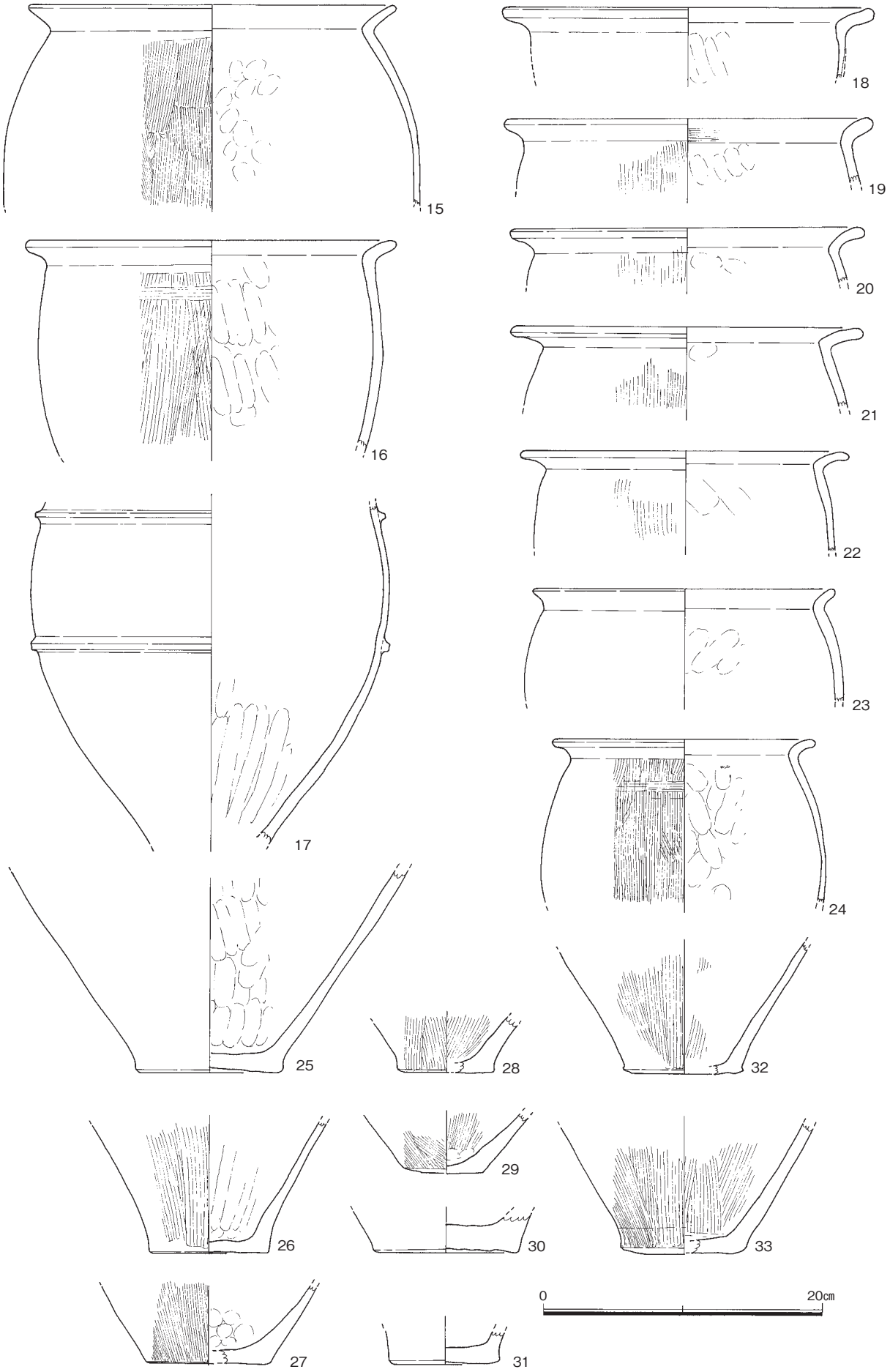


Fig.114　７区出土遺物２（1/4）

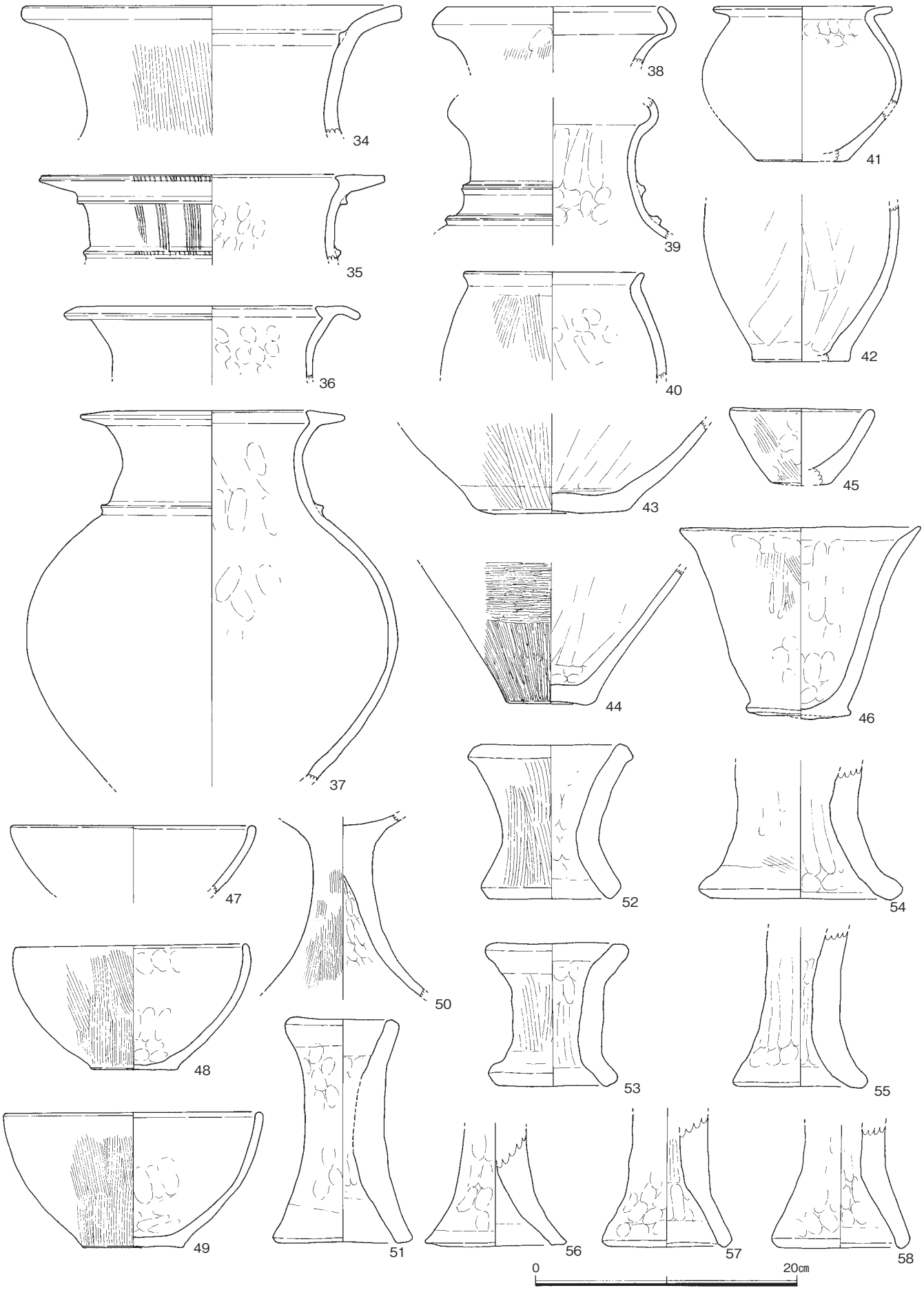


Fig.115　７区出土遺物３（1/4）

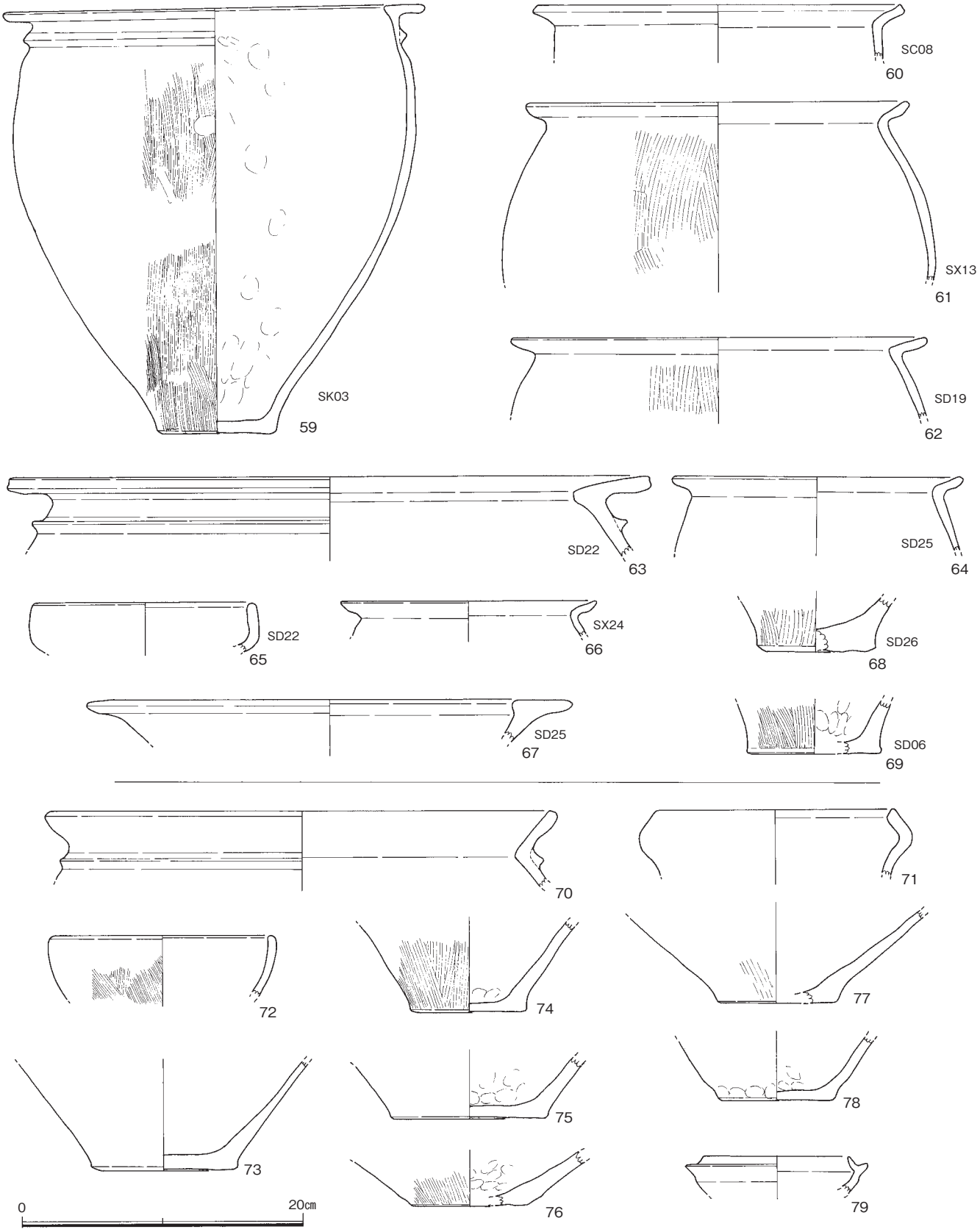


Fig.116　７区出土遺物４（1/4）

Ⅱ式で弥生時代中期後半に位置付けられる。

3）まとめ

７区は浦江扇状地のほぼ中央に位置し、比較的平坦地な地形に立地している。浦江扇状地内の低地部にあたり、弥生時代中期後半期の溝群などを検出した。これらの溝群は灌漑用の水路とみられるが、削平のために関連する水田面などの遺構は既に失われている。この溝には水田と連結された水口や流水作用により形成されたと見られる水溜り状遺構が認められることから、排水路ではなく、給水路と考えられる。SD24を除くとほとんどの溝は北側に水口などが接続していることから、この溝群より北側で自然流路SX01の間を水田化したものと考えられる。また溝群には一部に切り合いがあることからすべてが同時期に存在したのではなく、一定期間に幾度かの造営があったものと予測される。水路への用水給源は調査区外にあり不明だが、この低地部のSX01はこの段階に流水はない。溝群は扇状地の等高線に直交しＮ－40～50°－Ｅの範囲で南西から北東方向へ向かう。上流である南西側の延長をみると、１ｍ強の段差を越えて古期扇状地側の丘陵となる。この丘陵部に河川などはなく、想定されるのは２区で検出された同時期の溝SD01である。したがって、本調査区の溝群は２区検出の幹線水路SD01から分岐した枝水路であると考えられる。

３．20区の調査（Fig.117）

1）調査の概要

20区は事業地の中央にあり、３区の東側に連続する調査区である。水田造成により削平を受ける部分と構造物（道路・水路等）を対象とした。現状は南から北に下がる水田の一部である。調査対象地は標高45～46mであり、南北約28m、東西約45mの範囲である。

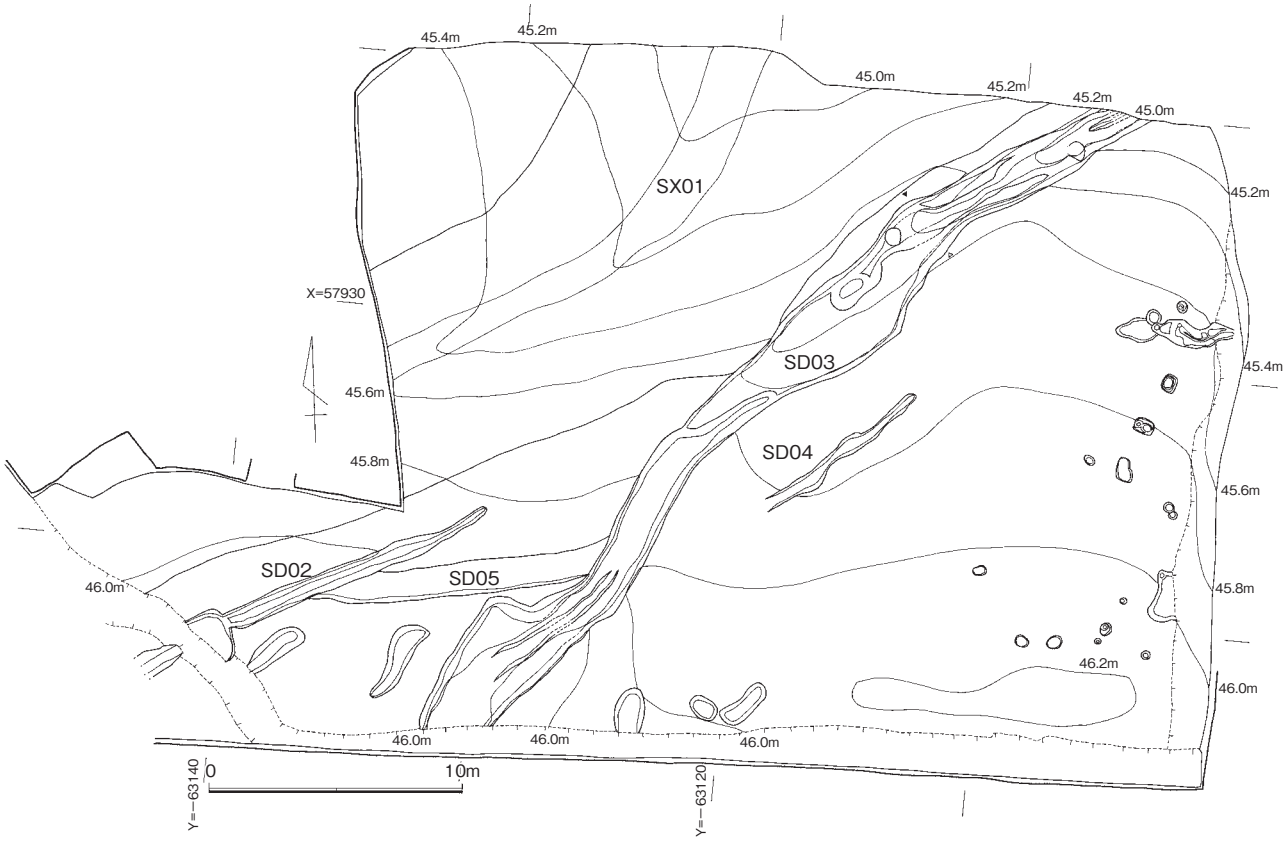


Fig.117　20区全体図（1/300）

2）遺構と遺物

本調査区はSX01を境にして南側が高く、北側が低い小段丘をなしている。これは上流域とは逆転している。遺構検出面は新期扇状地形成土であり、基盤礫層上に砂・シルト、粘質土が堆積している。遺構面より上部には水田耕作土、床土等の累層となり、全域に約0.4～0.6mの被覆土がある。調査区内の遺構検出面はおおよそ平坦であるが、水田造成時に相当の削平が予測される。特に調査区内南東側では基盤礫層が現れ、多くの遺構は失われていると見られる。検出された遺構は溝状遺構４条、自然流路１条、柱穴などがある。

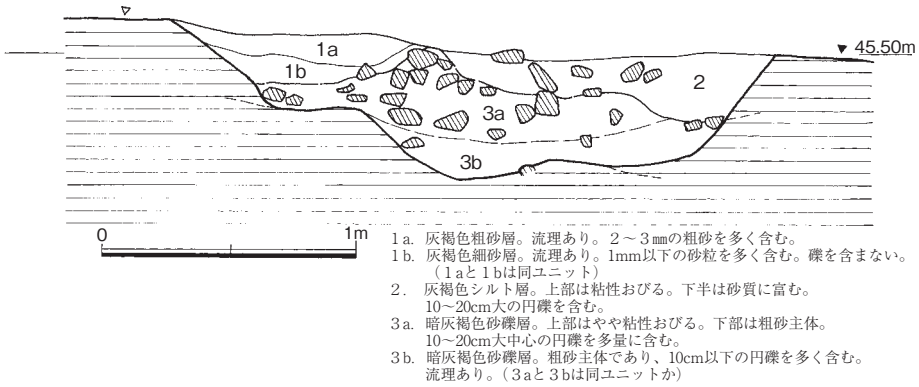


Fig.118　溝SD01～03土層断面図（1/30）

溝状遺構SD02～SD05

調査区中央付近を南西から北東方向に溝状遺構を検出した。一部に切り合いがあり、SD05がSD02とSD03を切っている。SD02は調査区南西側にあり、３区から連続し、本区中央で途切れる。幅１～0.8m、深さ0.3～0.4mを測る。覆土は暗褐色粗砂であり、水成土である。出土遺物には甕（Fig.119-20～25）、鉢（26）があり、弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式段階である。SD03は調査区を斜めに切り南西から北東に蛇行しながら流れる。数回の掘り直しが認められる（Fig.118）。覆土は全体に拳大を主とする亞円礫を多く含む粗砂層であり、最終段階の掘削部は礫が少ない粗砂層のみの堆積が認められる。全体として幅1.5～3.5m、深さ0.3～0.6mを測る。出土遺物には須恵器坏類（Fig.120-36～60）、鉢（61､62）、高坏（63～65）、甕（66）がある。これ以外に溝検出段階での出土遺物として白磁（32）、瓦器（34）、土師器（33、35）などがある。溝の時期は坏類の様相から上限は６世紀末、下限は８世紀中葉とみられる。検出時の古代末（11世紀代）の遺物は、溝調査時に埋土中からは出土せず直接関連するかは不明である。このほかに混入遺物として土器類（67～77）、石器として今山産玄武岩製の太形蛤刃石斧（78、79）、立岩産石製穂摘み具（80）、結晶片岩製扁平打製石斧（81）がある。SD04とSD05は本来連続していたと見られる溝である。溝底のみの僅かな残存であり、調査区中央で途切れる。なお、遺構が浅く、検出作業段階で失われた場所も多い。幅1.0～0.5m、深さ0.1mを測る。出土遺物は少なく弥生土器（27～29）、須恵器坏（30､31）がある。8世紀後半以降の時期か。

自然流路SX01

調査区北側で検出した。５，６，７区を通り北東方向に流走する。下流に従い上部幅が拡がる。本調査区では遺構の検出面が今回の造成工事レベルより低くなったため、上面検出にとどめ、掘り下げは行わず保存措置をとった。上面検出時に多くの土器類の出土があった。土器類には甕（Fig.119-1～9、14～16）、壷（同10～12）、鉢（同13）、高坏（同17～19）などがあり、須玖Ⅱ式で弥生時代中期後半に位置付けられる

3）まとめ

20区は新期扇状地内にあって、旧河道SX01を境とした南側の微高地部分である。近世以降の水田造成により削平が進み遺構は少ないが、３条の溝状遺構、不整形土坑、柱穴などを検出した。溝状遺

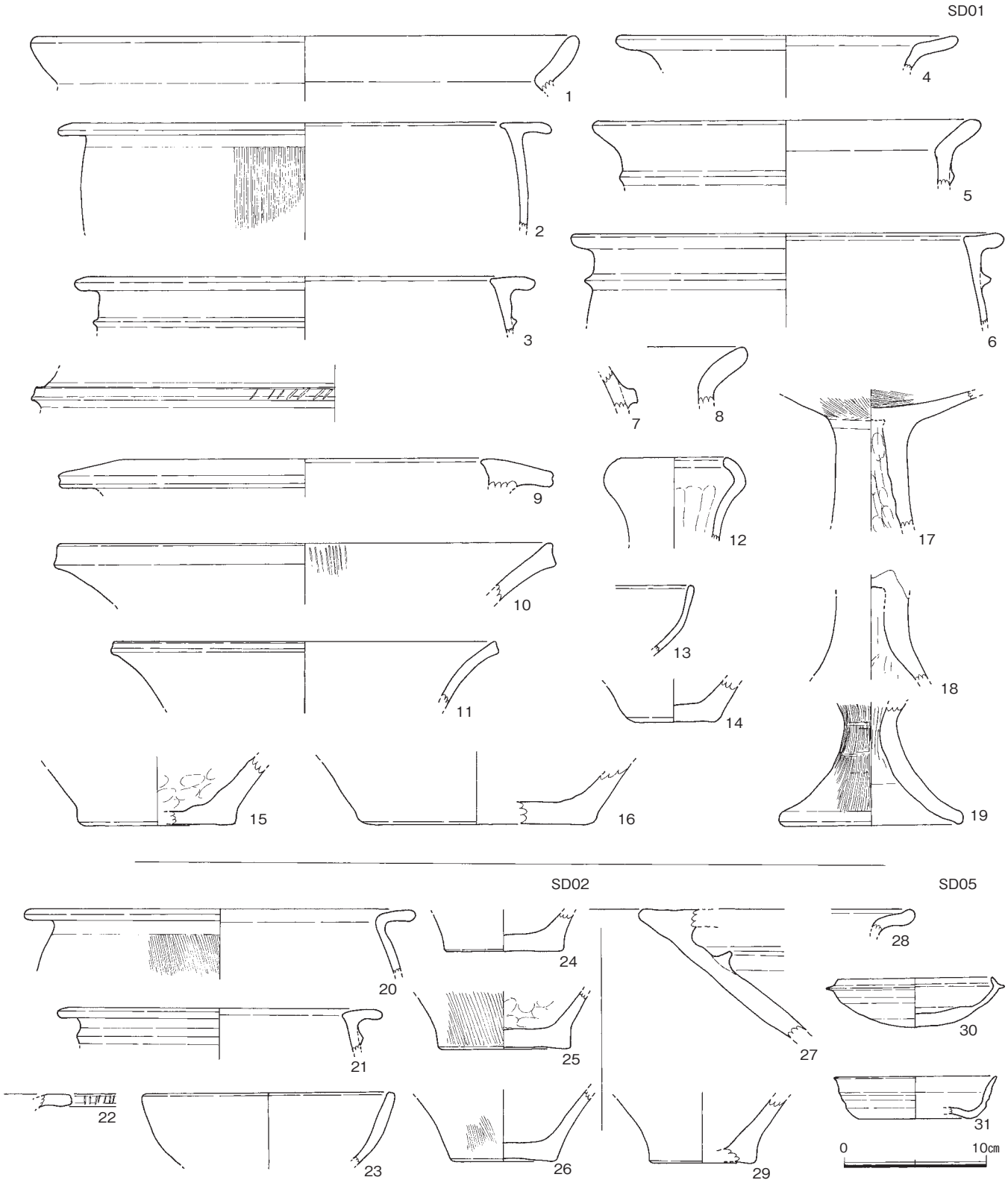


Fig.119　溝SD01～03出土遺物（1/4）

構のうち、SD02は弥生時代中期後半であり、位置と方向から７区SD19の連続の可能性がある。SD03､04は古代の水路であり、灌漑施設と見られる。上流部で関連する遺構は８区SD001があり、連続する可能性がある。両調査区の中央に位置する２区での関連遺構は「流路」状遺構である。ただ

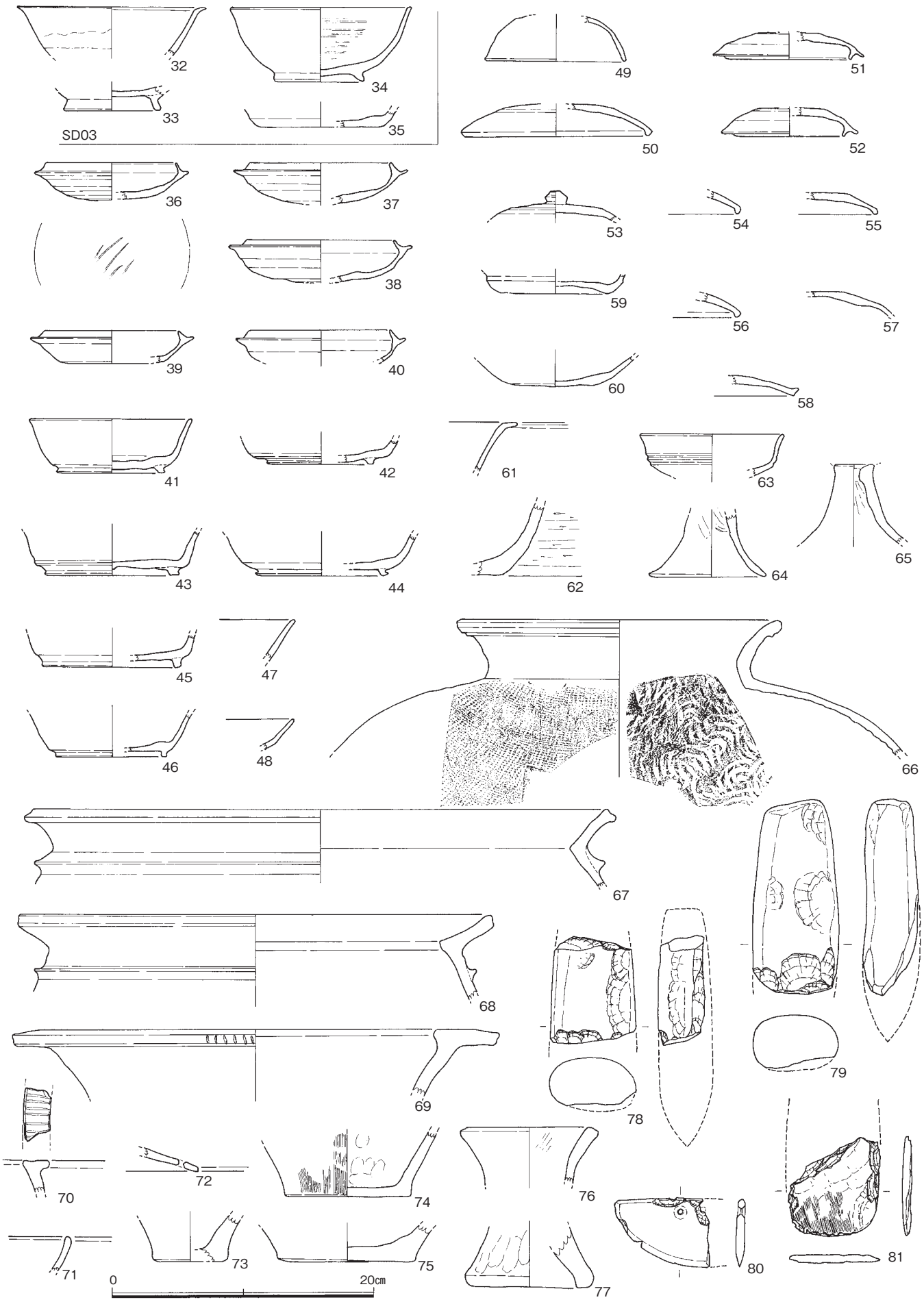


Fig.120　20区出土遺物（1/4）

し、近世水田の削平で上半部は大きく失われている。

４．21区の調査（Fig.121）

１）調査の概要

21区は20区の東側で農道を挟んで連続する地点である。新期扇状地形成で北東に下がっている。標高は45.6～44.2mの範囲である。遺構面は黄灰色のシルト質土である。遺構面より上部には水田耕作土、床土等の累層となり、全域に約0.2～0.4mの被覆土がある。調査区内の遺構検出面はおおよそ平坦であるが、近年の水田造成時に相当の削平が予測される。特に調査区内北東側では段造成が行われ、多くの遺構は失われていると見られる。検出された遺構は竪穴式住居１棟、掘立柱建物１棟、柱列１，溝状遺構３条、土坑14基、柱穴多数などがある。

２）遺構と遺物

竪穴式住居SC02

（Fig.122）

調査区中央にあり、後世に削平を受け遺存状態は悪い。南側は壁高5cm程度残存し、北半部は失われている。規模は東西6.2m、南北4m以上である。覆土は暗褐色土であり、床面の区分は明瞭であった。南側壁に沿って壁溝が断片的に幅10cm、深さ5cm以下で遺存する。床面東側に径40cm、深さ5cmの浅い穴があったが、中央穴や柱穴は未検出である。床面に土器片と径10cm以下の円礫10数個が２箇所に集中して出土した。出土した土器には甕（Fig.124-1、2､7～9）、壷（3～5）、鉢

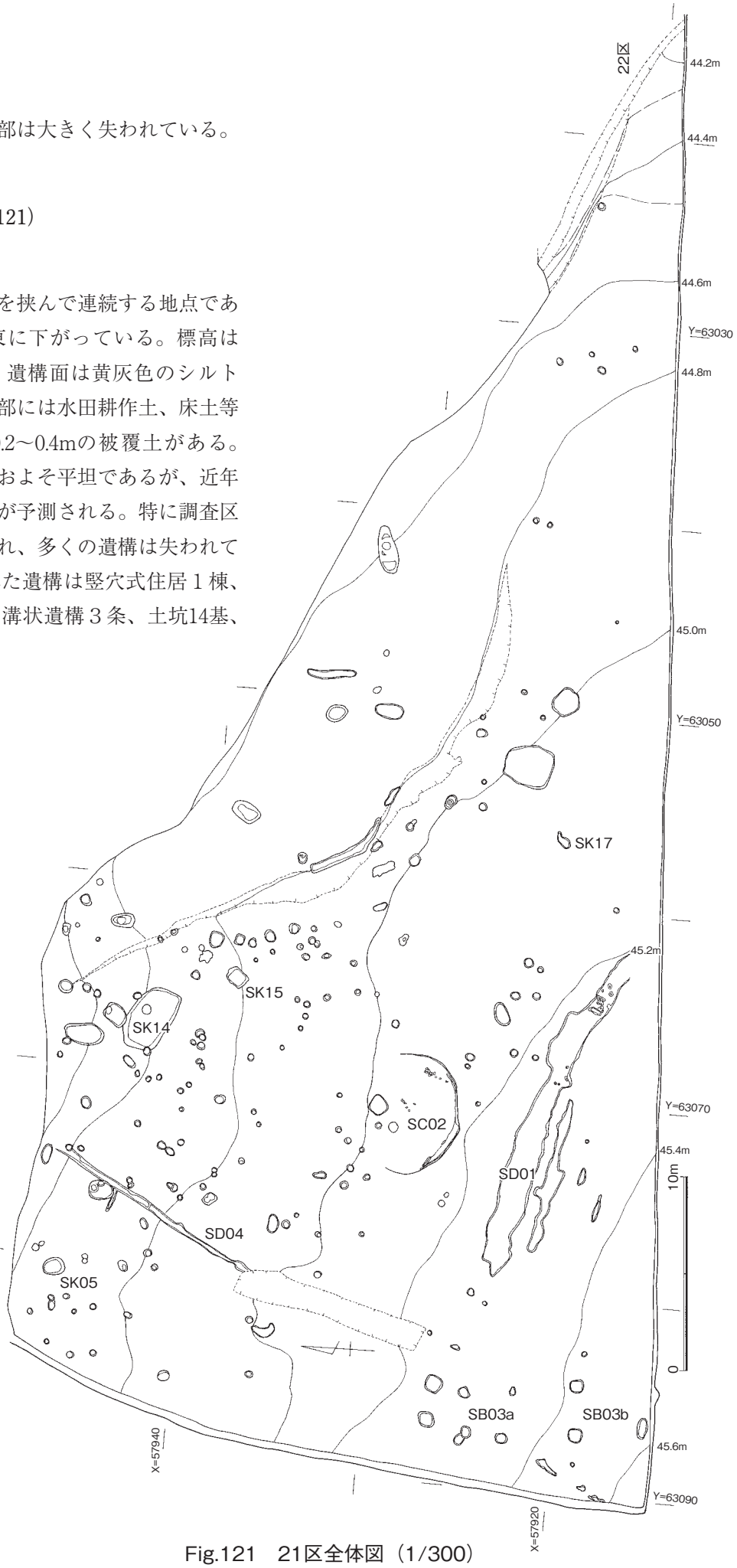


Fig.121　21区全体図（1/300）

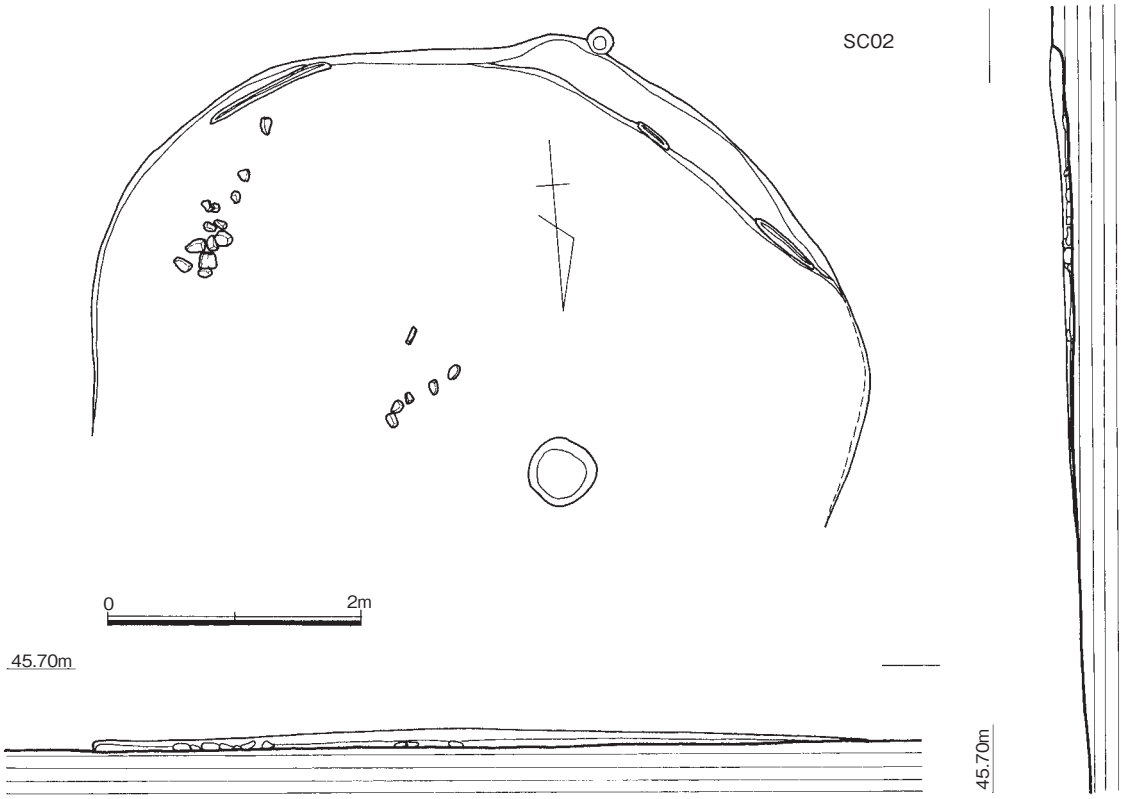


Fig.122　竪穴式住居SC02（1/60）

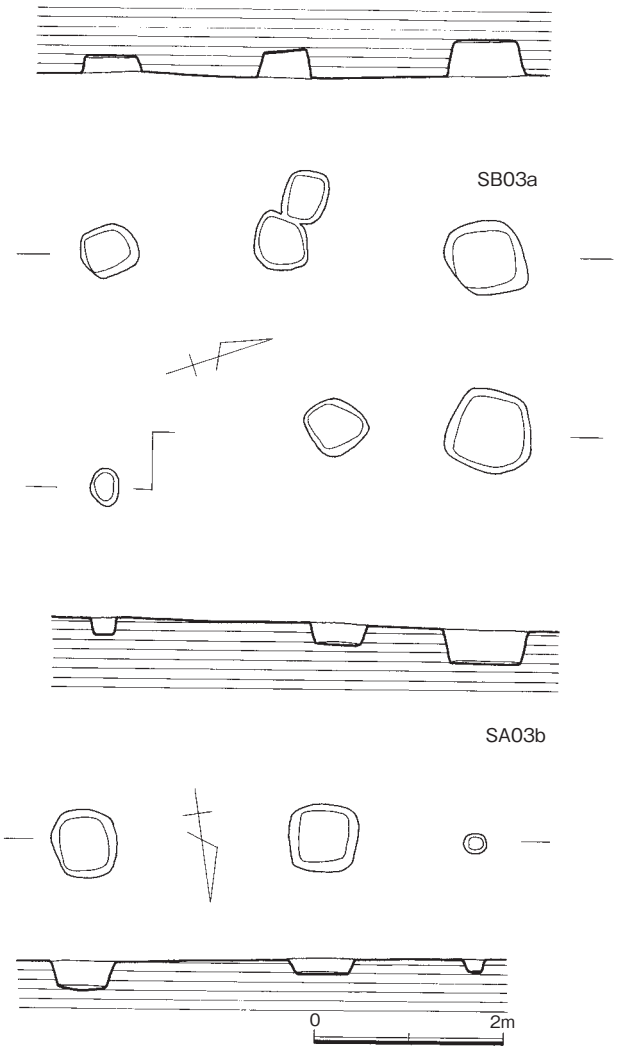


Fig.123　掘立柱建物SB03他（1/60）

（6）などがある。甕は何れも跳ね上げ口縁が特徴である。弥生時代中期後半に位置付けられる。

掘立柱建物SB03a・柱列SA03b（Fig.123）

調査区南東端で近接して検出した。柱掘り方は方形を基調とし、覆土も共通しているが、柱筋や柱痕跡は明瞭でない。両者をここでは別の施設と理解したが、一連の施設の可能性もある。SB03aは南北4.1m、東西1.9mを測る。SA03bは東西4.1mである。遺物の出土はなく時期不明である。

その他

調査区内では隅丸長方形、不整楕円形などの土坑を検出した。時期や性格が不明なものが多いが、SK07からは土器類がやや多く出土した。土器には甕（10､14）、鉢（11）、蓋（12、13）がある。溝はすべて近世以降と見られるもの

であり、等高線に沿ったSD01とそれに直交するSD04などがある。SD01は幅1.5m前後であり、底面に小杭痕跡があることから灌漑用の幹線水路と付設された堰跡と見られた。SD04はその支線水路であろう。その他の出土遺物として弥生時代土器類（15～20）、中世土器類（21、22）、砥石（23）、石鏃（24）などがある。

3）まとめ

本調査区では弥生時代中期後半の住居と建物、土坑などを少数検出した。ほかに中世以降の遺構もあるが、おもに水田関連遺構と見られた。弥生時代の遺構は継続性に乏しく、短期間に途絶えたと見られる。竪穴式住居SC02からは少数であったが跳ね上げ口縁甕のみが出土し、７区SC08と同様に特異な存在といえる。

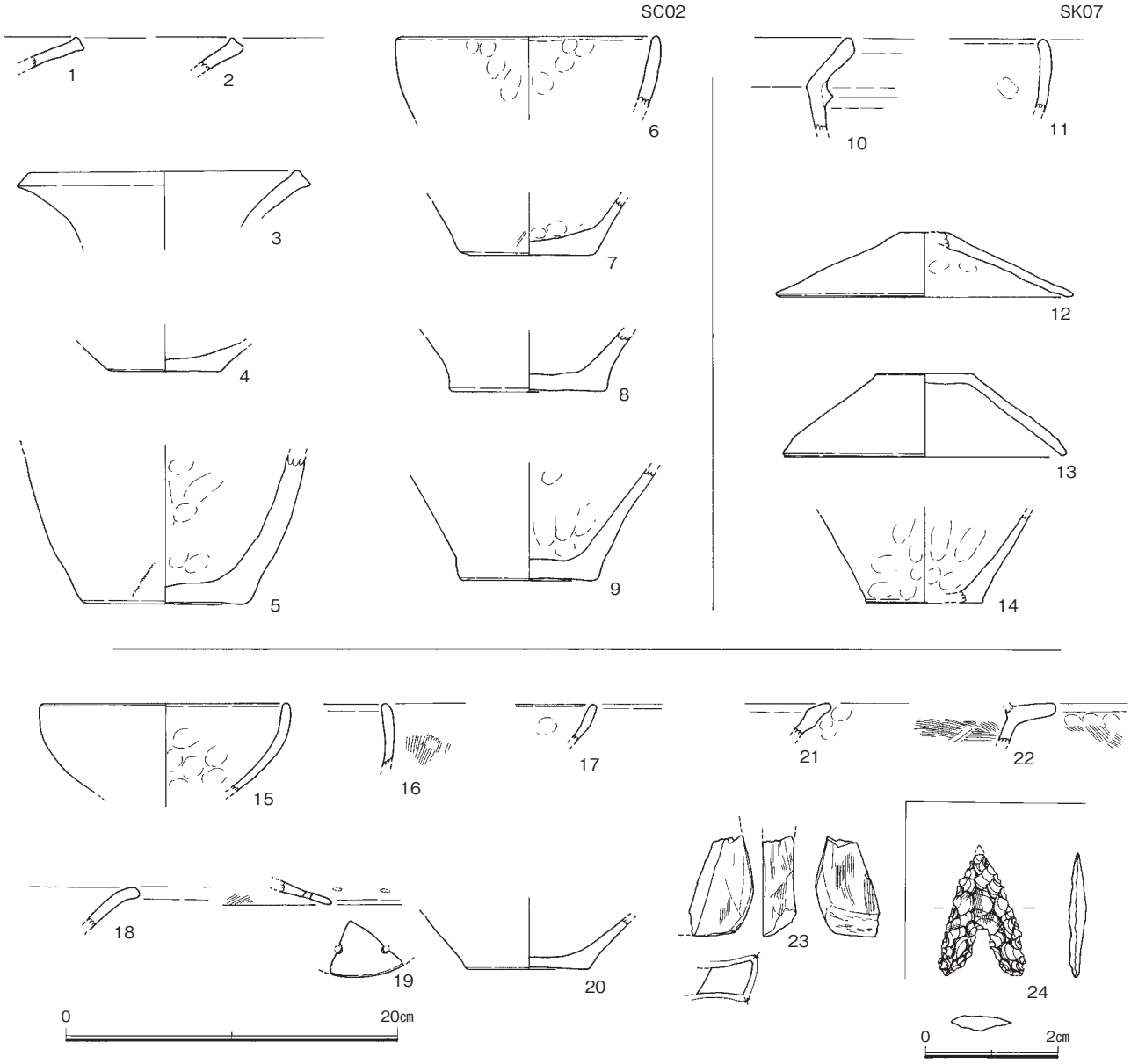


Fig.124　21区出土遺物（1/4・1/1）

5．22区の調査（Fig.125）

1）調査の概要

22区は21区の東側に連続する地点である。試掘で溝、柱穴などが検出されている。新期扇状地上にあり北東に下がっている。標高は44.2～43.2mの範囲である。遺構面は黄灰色のシルト質土である。遺構面より上部には水田耕作土、床土等の累層となり、全域に約0.3～0.6mの被覆土がある。調査区内の遺構検出面は僅かに緩斜面であるが、近年の水田造成時に相当の削平が予測される。特に調査区内北側では段造成が行われている。検出された遺構は溝状遺構３条、土坑4基、柱穴などがある。

2）遺構と遺物

溝状遺構

調査区東側で溝SD02、03を検出した。また隣接して不整形落ち込みSX01、04があり、関連する遺構と見られた。SD02は幅0.6m、深さ0.3mでSD03に連結し、南東方向に直線的に伸びている。覆土は砂層である。SD03は南西調査区外から北東方向に蛇行しながら伸び、調査区内で途切れている。掘り直しがあり溝底は断面W形となっている。最大幅1.5m、深さ0.4mを測る。覆土は砂～砂質シルトである。覆土中から安山岩製の石錐（Fig.126-2）が出土した。不整形落ち込みSX01は調査区東端に現れ

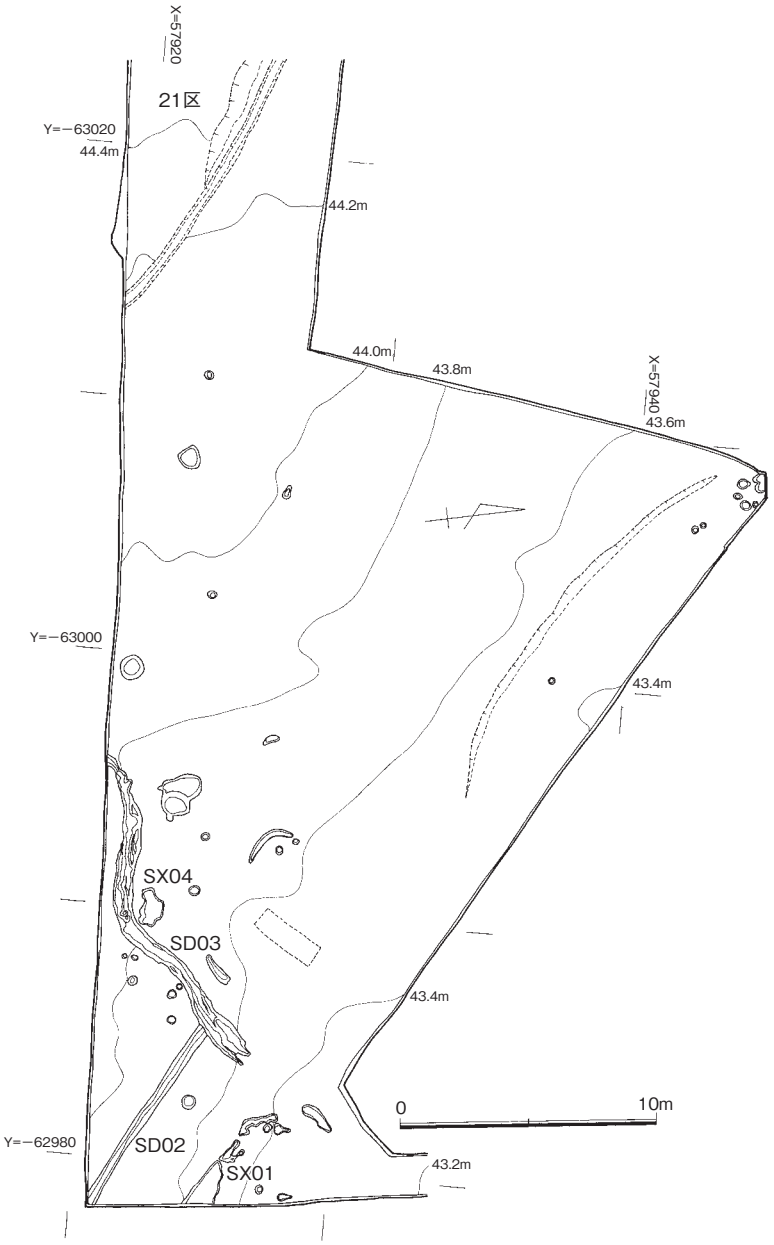


Fig.125　22区全体図（1/300）

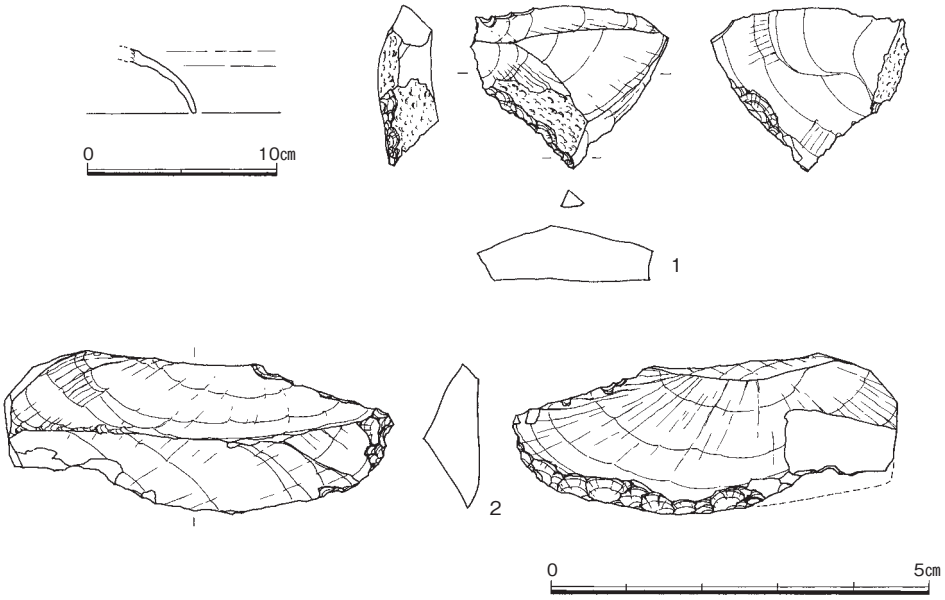


Fig.126　22区出土遺物（1/4・1/1）

た幅1.2m、深さ0.1m前後の断続的な落ち込み状の遺構である。本来溝の底部であり、削平によるものと見られる。SD02と並行し、SD03と直交することからSD02に接続した用水路であろう。SX04はSD03の蛇行部にあり、水成覆土である。水溜り状の遺構である。これらは覆土や近年の水田畦畔との比較からSD03に関連するものと見られた。遺構内からの出土遺物は少なく、遺構検出段階に少量の土器類（1)、安山岩製削器（3）がある。

3）まとめ

20区は扇状地中央の低地部にあたる。削平を受けているためか、弥生時代の遺構はほとんど検出されず、中世以降と見られる溝状遺構などを検出したに過ぎない。これらから出土した石器類は縄文時代～弥生時代の混入品と見られる。溝群は中世以降の水田灌漑に関わる支線路と見られる。

6．23区の調査（Fig.127）

1）調査の概要

23区は事業地の東側にあり、構造物（水路・道路）の範囲を対象とした。そのため幅６～７ｍの細長い範囲であり、全体としてT字形の調査区となった。現状は水田であり、比較的平坦な地形である。この地点は浦江扇状地の先端に近く、全体が新期扇状地内にあたる。前述の22区とは現在道路を隔てて１ｍほど下がり、北西側の24区との間は浅い侵食谷の低地で介入している。現在の標高は約42m～40.5mである。本調査区の基盤標高は南西端が高く、北～東側に低い。遺構面標高は南側41.4m、北側39.2mで北側にしたがい次第に傾斜が増す。調査対象地は生活道路のために連続した全体の調査は困難であり、南側の南北約40m、東西約49mの範囲（a区）と北側の南北約20m、東西約5mの範囲（b区）に分割して調査した。遺構検出面はa区で暗灰色シルト質土であり、水田造成により削平部では基盤礫層が露出する。b区は全体に削平が進み礫混じり粘土層となっている。

2）遺構と遺物

狭い調査区ではあったが、比較的多数の遺構が検出された。a区では掘立柱建物６棟、炉跡１基、溝状遺構３条、土坑3基、柱穴多数がある。b区には溝状遺構３条、柱穴等がある。掘立柱建物は調査区の狭さから全体が明らかになったものが少ない。規模は何れも小さく、２間×２～３間の建物が５棟、２間×２間の総柱建物が１棟である。

掘立柱建物（Fig.128）

SB01はa区中央に位置し、建物西側は調査区外に延びる。２間×１間以上の東西棟である（SB01-a）。規模は梁行392cm、桁行200cm以上である。梁間196cm、桁間160～192cmである。柱穴掘方は径20cm前後の円形であり、柱痕跡は不明である。本建物には内部に石組炉SR02があり、炉を挟んで2本の柱穴がある。その主軸は建物主軸と一致する。炉跡については後述する。またこの建物に重複して同じ方位の建物がある。２間以上×１間以上の東西棟であり、梁行225cm、桁行200cm以上である（SB01-b）。梁間110～120cm、桁間196cmである。柱穴掘方はやや大きく径30cm前後の円形であり、柱痕跡は不明である。建物SB01-a出土遺物は柱穴P-8から出土した滑石製石鍋片（Fig.130-19）がある。

また建物SB01-b出土遺物にはP-12･19出土の瓦器椀（11、13）、土師皿（14、17、19）がある。SB06はa区中央西寄りにある2間×2間の総柱建物である。北側は近年の水田段造成により削平されている。梁行420cm、桁行470cmである。梁間210cm、桁間240cmである。柱穴掘方は径30～40cmの円形であり、柱痕跡は不明である。SB15はa区西寄りにある２間×２間以上の南北棟である。SB16と重複するが、切り合いはなく前後関係は不明である。南側は調査区外に延びている。梁行360cm、桁行190cm以上である。梁間180cm、桁間180cmである。柱穴掘方は径約25cmの円形であり、柱痕跡は不明である。SB16はa区西寄りにある2間×2間以上の南北方位の建物である。SB15と重複するが、直接の切

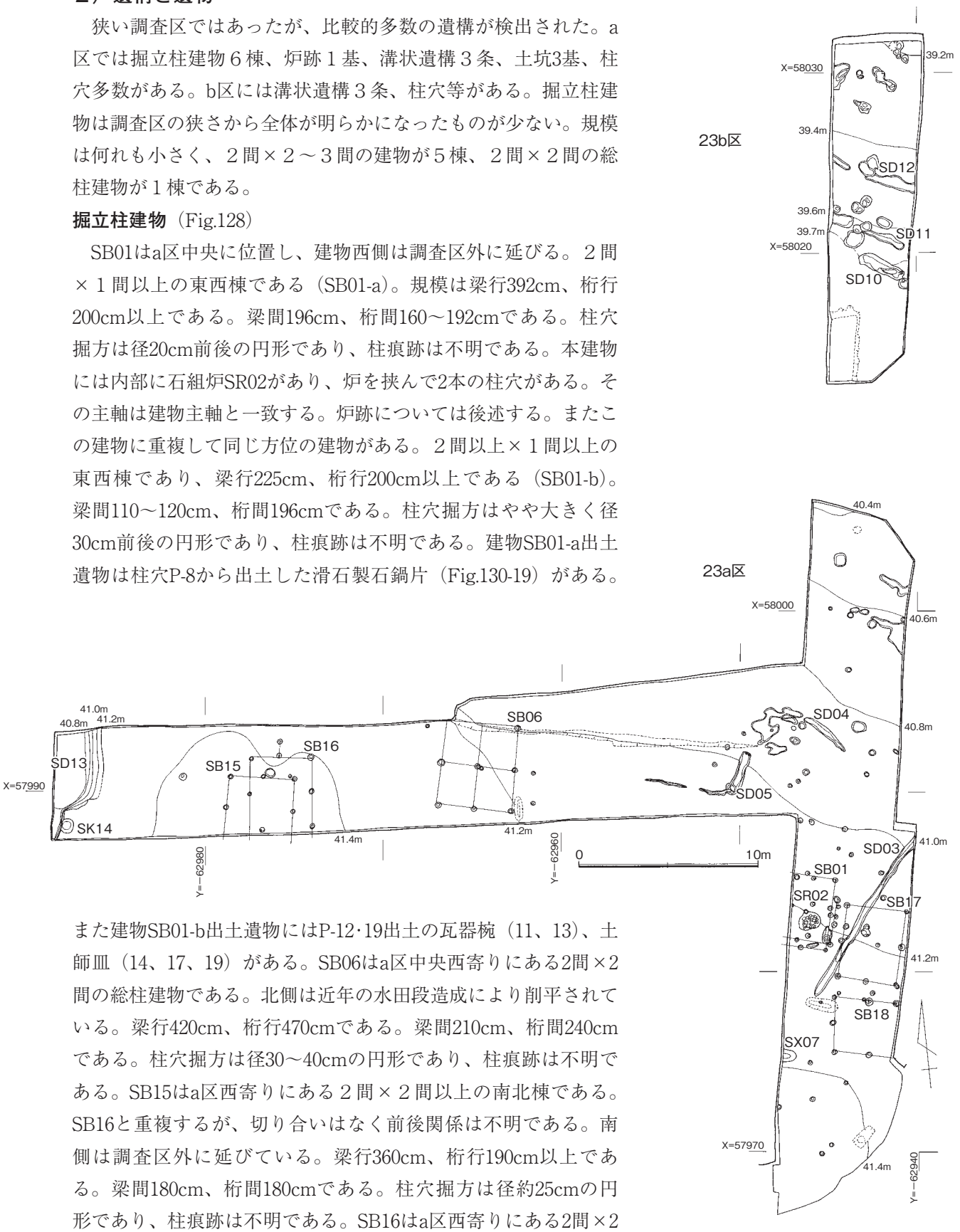


Fig.127　23区全体図（1/300）

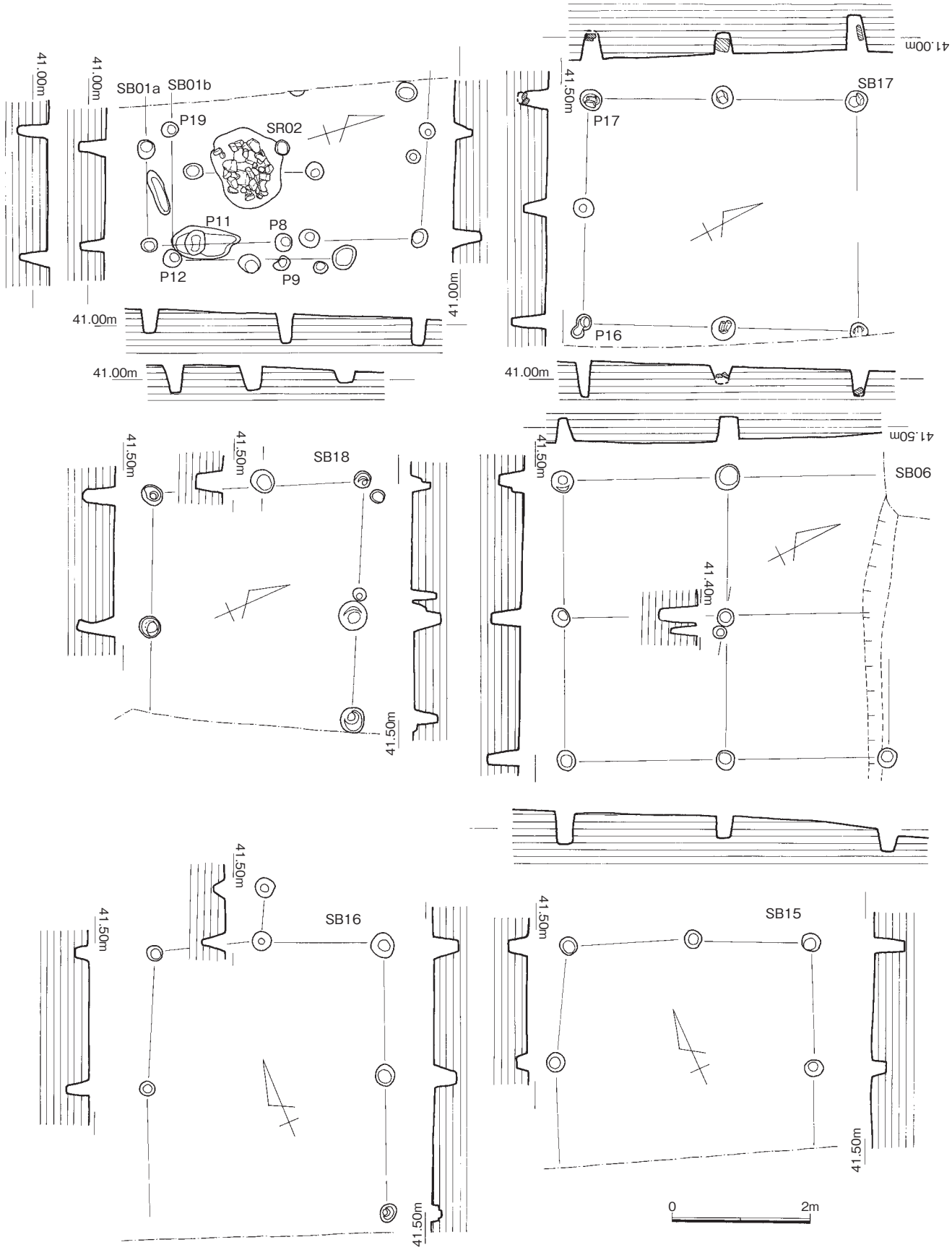


Fig.128　掘立柱建物（1/80）

り合いはなく前後関係は不明である。南側は調査区外に延びている。梁行340cm、桁行400cm以上である。梁間160～180cm、桁間180cmである。この建物で注目されるのは梁行中央から80cm離れて棟持柱と見られる柱穴が検出されたことである。柱穴掘方は何れも径約40～25cmの円形であり、柱痕跡は不明である。南側の梁部が未調査であり断定はし難いが、棟持柱掘り方は垂直に掘られており、棟持柱建物であろうと考えられる。SB17はa区東寄りにある2間×2間の南北建物である。梁行330～340cm、桁行400cmである。梁間160～170cm、桁間200cmである。柱穴掘方は径40～30cmの円形であり、掘り方内に根締めと見られる角礫が含まれるものが多い。柱痕跡は不明である。建物SB17出土遺物には柱穴P-16･17から出土した滑石製石鍋片（20）、土師皿（17）がある。SB18はa区東寄りにある2間×2間の東西建物である。梁行300cm、桁行350cmである。梁間150cm、桁間160～200cmである。柱穴掘方は径40～30cmの円形であり、柱痕跡は不明である。

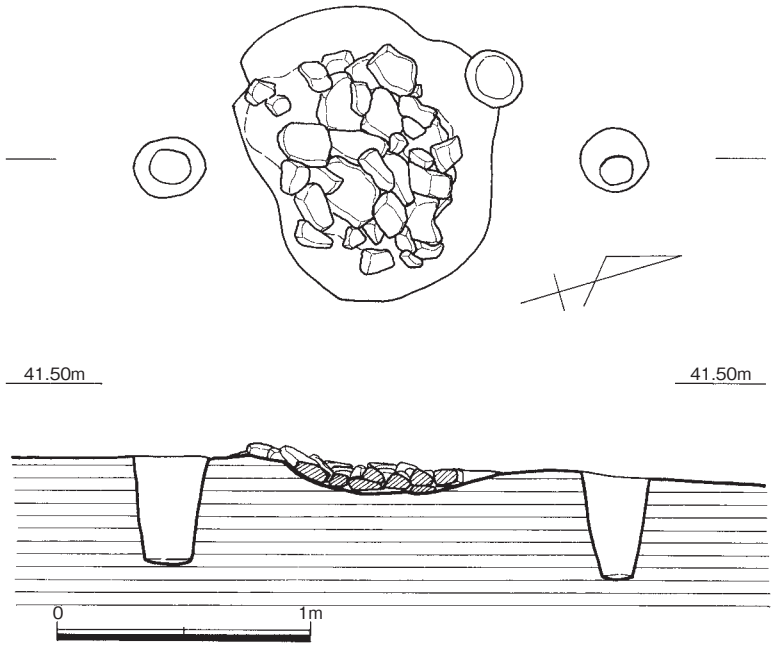


Fig.129　炉跡SR02（1/30）

炉跡（Fig.129）

掘立柱建物SB01内部で検出した。その位置は建物中央ではなく、南東隅部に近い。炉は東西100cm、南北120cm、深さ15cmの浅い皿状の掘り方を持つ。まず掘り方床面に一辺15～25cm、厚さ10cm以下の扁平礫を敷詰めている。検出時は礫と土坑全体が炭化物で覆われ、敷石は一部しか現れていなかった。なお、礫は花崗岩が主体であり、少量の片岩を含んでいる。周縁の礫は赤変していた。遺物は少量の土師器皿と鉄滓がある。土坑の南北に20～30cm離れて柱掘り方がある。掘り方は何れも南北28cm、東西24cm、深さ44cmである。両柱間の距離は180cmである。

溝状遺構

SD03はa区南東側にあり、SB17を切る。幅0.3～0.4m、深さ0.1mで北東方向の調査区外に直線的に伸びている。覆土は砂質土である。SD04とSD05はa区南中央で近接し、全体としてクランク状の形態をなしている。溝底部のみの残存であり、幅0.3～0.4m、深さ0.1m前後である。SD10～12はb区にあり、北西から南東方向に並行して掘られている。SD10は幅0.7m、深さ0.2mで東側調査区外から調査区中央まで延びて途切れる。SD11は幅0.4～0.6m、深さ0.2m西側調査区外から延びて調査区内で途切れる。SD12は幅0.6～0.3m、深さ0.1mで東西両側に延びるが、中央が途切れる。SD13はa区西端にあり、一部を検出したものである。現在の道路下に並行して遺存する溝状遺構の一部と見られる。幅3m以上、深さ0.7mを測る。覆土は下半部が砂礫層、上半部が砂～シルト質土である。下部から弥生時代土器片（21）や染付細片が出土している。近世以降の所属とみられる。

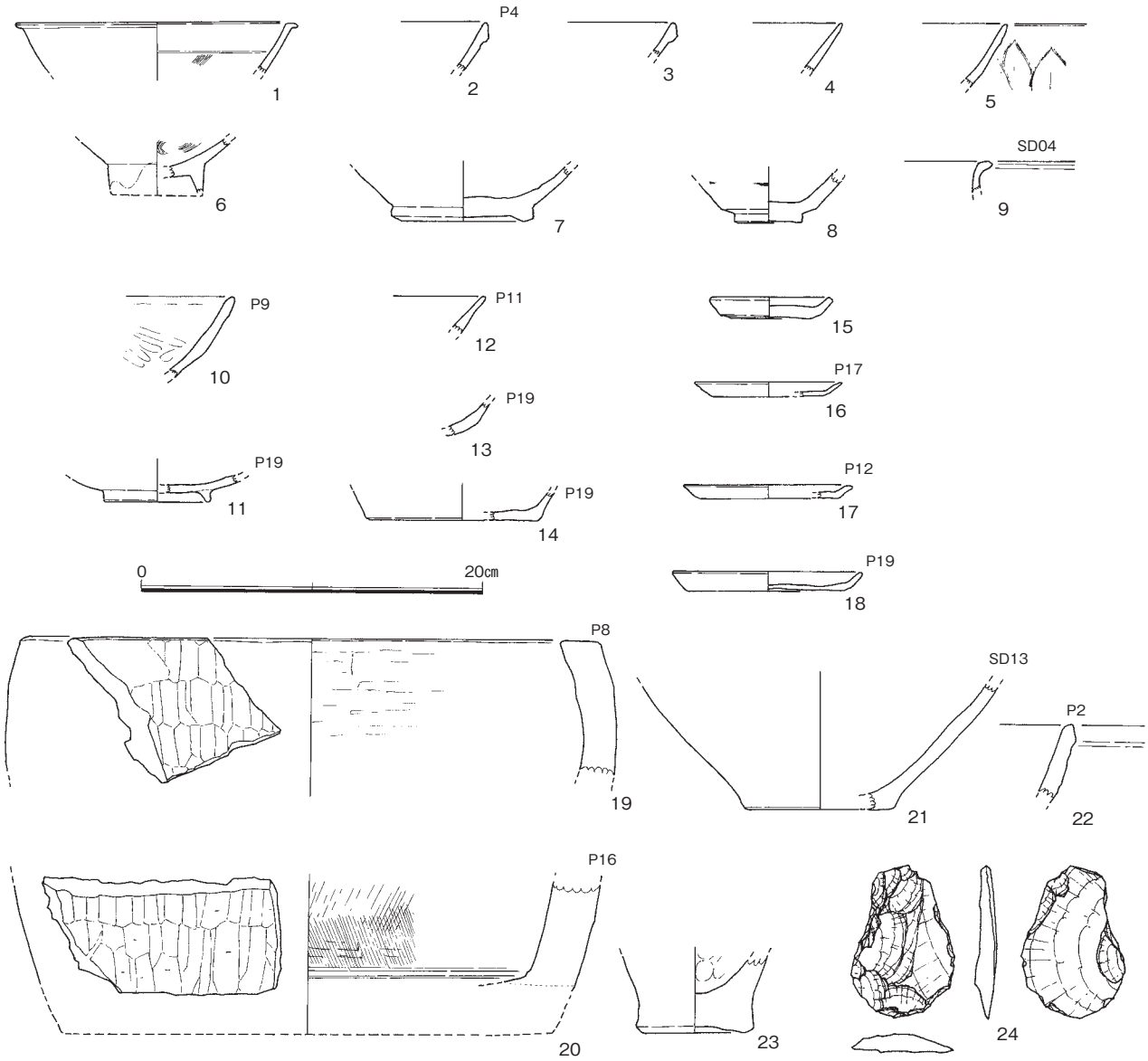


Fig.130　23区出土遺物（1/4）

その他

SK07はa区南東側にあり、西側は調査区外に延びる。長さ0.8m以上、幅0.7m、深さ0.2mを測る。瓦片が出土している。SK14はa区西端にあり、溝状遺構SD13に近接している。径約0.8m、深さ0.4mであり、壁面と底部に桶状の木質断片を認めた。覆土は砂質土であり、近世以降の「野壷」遺構と見られる。その他に遺構検出時の出土遺物として白磁椀（1、3、4、6、7）、竜泉窯系青磁（5）、天目茶椀（8）、土師皿（15）がある。また混入遺物として縄文時代晩期の今山産扁平打製石斧（24）、弥生時代中期前葉の甕（23）、同中期後葉の壷（21）などがある。

遺構外からの出土遺物には少量ではあるが、鍛冶滓も出土している。

3）まとめ

23区ではa区で12～13世紀代の建物群を検出した。同時期の建物は隣接する１区西側に続く。今回は限られた範囲の調査であり、出土遺物も少なく不明な部分も多いが、特徴的部分について触れておきたい。検出された建物は規模が小さく、規格性に乏しい建物もある。しかし建物の配置は全体に主軸を正方位基調としている。遺構のない空間的余裕もありながら、近接建物やSB01やSB15、16などに重複がある点から、すべてが同時期ではないにしても、この期間に存続した小集落の一部と推定される。さて総柱建物は高床倉庫と見られるが、その他の多くの建物は平地式住居と考えられる。分布は総柱建物SB06を中心に東側のSB01、17、18と西側のSB15、16に区分される。東側の3棟は近接しながらも一定の間隔があり、建物が同時期の存在した可能性もある。柱掘り方も比較的大きく、周辺での出土遺物も比較的多い。SB01内の炉SR02の性格は不明であるが、基本的に通常の居住域と考えられる。これに対し、西側の２棟は微地形上ではもっとも高い位置に立地する。ただしこの２棟は重複し同時期には１棟であったと見られる。いずれも柱掘り方が小さく、うちSB16は棟持柱建物である。この建物の性格は判断し難いが、地形上最も高い位置に選地されていること、棟持柱から切妻形態で簡易な施設と推定されることなどから、通常の住居と異なり、たとえば宮座制などの祭儀に関わる施設とも考えられる。本調査区は中世初期の小規模集落の一部であり、中央の倉庫を中心に東側に居住区を設け、西側に祭儀施設を配置する空間構成がなされていたと考えられる。

1．浦江５次２区
2．浦江５次３区
3．浦江５次８区
4．浦江５次９区
5．浦江５次12区
6．浦江４次３区
7．浦江谷１次３区
8．浦江谷１次６区
9．乙石Ｄ遺跡（乙石２次18区）

Fig.131　浦江遺跡群旧石器時代遺跡分布（1/10,000）

７．浦江遺跡5次調査出土の旧石器時代資料

１）地形環境（Fig.131）

浦江遺跡は西山北麓から早良平野中央の室見川に注ぐ小河川である竜谷川により形成された通称「浦江扇状地」上に立地する。竜谷川は基盤である花崗岩の山塊を浸食し深い谷部を形成しているが、浸食に伴う土砂は早良平野への谷開口域に扇状地を形成する。扇状地形成は更新世後期の最終氷河期を挟み古・新期に区分されるが、早良平野では新期扇状地形成に伴う堆積物が古期扇状地面をすべて覆うことはなく、後者が部分的に現地表面に露出している場合が多い。これは、南側の背振山地の隆起現象に伴い河川堆積が次第に北側へ推移するためである。新期扇状地面は完新世の形成であり、地表面は平坦で浸食による谷部形成も未発達である。これに対し古期扇状地は浸食が進み、複雑な丘陵地形となっている場合もある。浦江扇状地は標高約60mの妙見崎付近を扇頂部とし、室見川を見下ろす標高約40mの扇端部までの長さ約600m、扇角70°で展開し、扇端は室見川と比高差約15mの段丘崖となっている。扇状地中央付近より南側が古期扇状地、北側が新期扇状地である。古期扇状地面が比較的平坦であるのは、浸食谷部に完新世段階も少量の堆積があることと、扇状地面が早くから水田造成による削平が進んだためである。なお扇状地内の大塚地区（13区）と塚原地区（3区）の二ヶ所に基盤の花崗岩残丘が残されている。後者の残丘はその高まりを取り込み後期古墳が築造されている。こうした点からも分かるように浦江扇状地上の堆積環境は複雑である。古期扇状地上では、基盤礫層上に硬質シルト、Aso-4を含む赤褐色ローム質粘土が堅く堆積する。さらに保存状態の良い場所では新期ローム、レス層、表土としてクロボク質土が形成される。新期扇状地上では基盤礫層上に砂・シルトが堆積し、表土として砂質腐植土が形成される。旧石器時代遺物はおもに古期扇状地面で出土したが、包含層などの形成をみる安定した堆積状況はなく、すべて遊離して出土したものである。

２）遺跡と遺物

２区は遺跡のほぼ中央に位置し、古期扇状地の北側斜面である。標高48～49mである。本区は水田造成による削平のために調査区内で東西に検出された溝SD01から旧石器時代遺物が出土した。何れも本来の包含層を遊離したものであるが、表面に傷や摩滅などは少なく遠隔地からの流入は考え難い。出土した資料にはナイフ形石器（Fig.132-1）、三稜尖頭器（2）、使用痕有剥片（3～5）、剥片などがある。１はナイフ形石器の基部破片である。素材は漆黒色良質黒曜石の縦長剥片を素材とし、打点部を先端として一側縁にブランティングを施す。中央付近で欠損しており、現存値は長さ2.3cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。２は三稜尖頭器の先端欠損品である。石材は漆黒色良質黒曜石の縦長剥片であり、全体に二次調整を施している。基部にやや平滑な自然面が残り、背面右側に素材剥離面が僅かに残る。素材は厚手の縦長剥片と推定される。二次調整は左側縁、右側縁基部のほかに腹面と背面稜部に入念に施される。そのため断面形は三角形ではなく、やや扁平な台形を呈する。中央付近で欠損しており、現存値は長さ4.2cm、幅2.0cm、厚さ1.2cmを測る。３は使用痕有剥片である。漆黒色良質黒曜石で、背面に自然面を残す幅広の不定形剥片を素材とする。二次調整はないが、二側縁に微細剥離が認められる。現存値は長さ2.0cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。４は使用痕有剥片である。漆黒色良質黒曜石で、背面に自然面を残す幅広の不定形剥片を素材とする。現存値は長さ2.4cm、幅2.4cm、厚さ0.8cmを測る。５は使用痕有剥片である。漆黒色良質黒曜石で、背面に自然面を残す縦長剥片を素材とする。現存値は長さ3.4cm、幅2.0cm、厚さ0.7cmを測る。

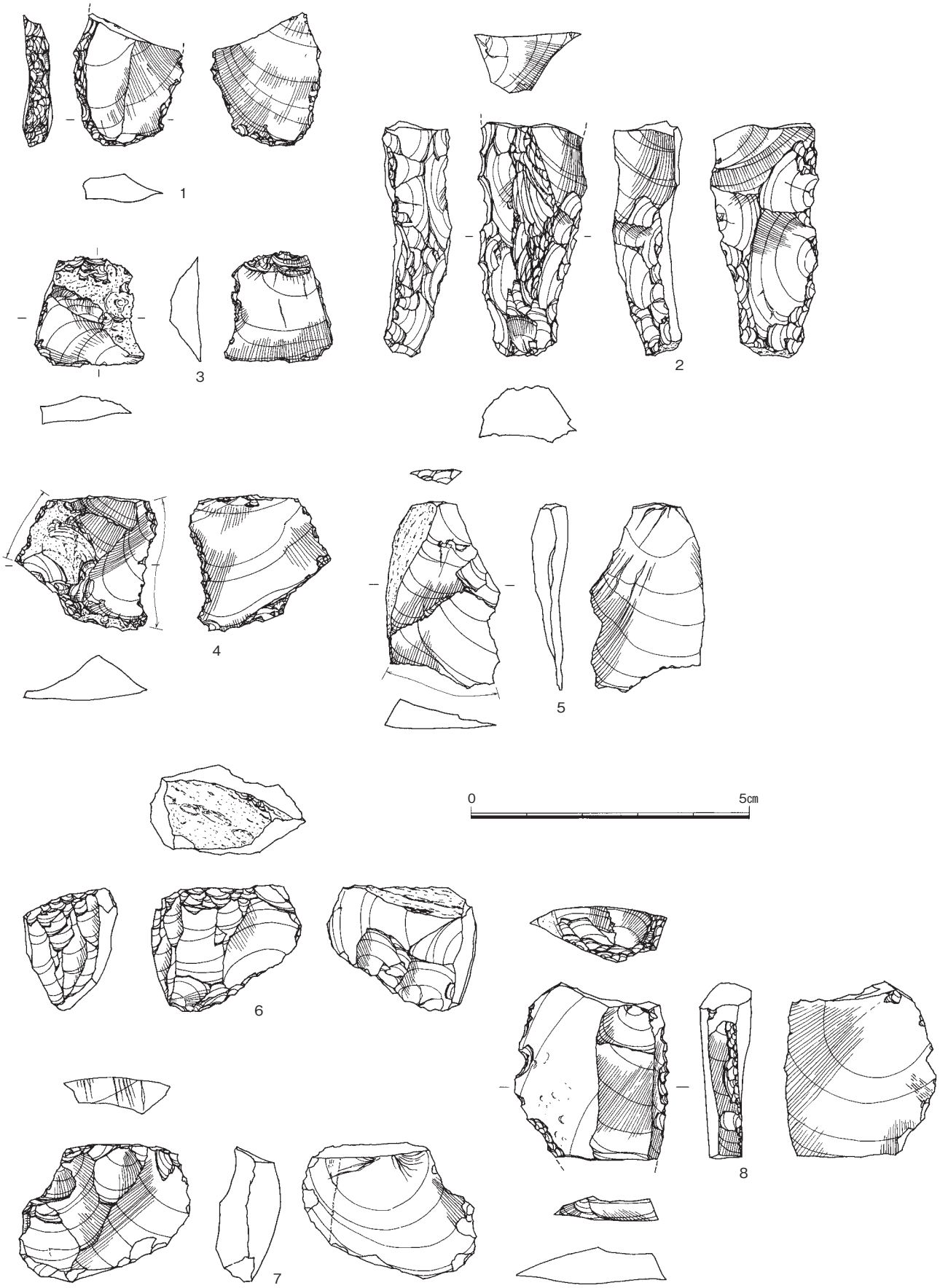


Fig.132　浦江遺跡群第５次出土旧石器時代資料１（1/1）

３区は新期扇状地内であるが、1号墳の直下が基盤の花崗岩残丘であり、周辺に僅かに更新世堆積物が残されている。また、この残丘の西側一帯は縄文時代早期の包含層があり（『金武２』Ⅲ-2参照)、新期扇状地の中でもいち早く形成後安定した場所であったと見られた。ここでは細石刃核が出土している。標高49～48mである。６は黒灰色黒曜石の細石刃核である。打面は自然面で、作業面に向かって左側面に主剥離面が残されていることから素材は分割礫か、厚手の縦長剥片と見られる。石核調整は打面並びに下縁から施し、楔形に整えている。打面は作業面に対し傾斜しているが、連続した細石刃剥離痕が残る。中央部分に階段状剥離が生じ、作業を中止している。表面はやや摩滅が進んでいる。現存値は高さ2.2cm、幅1.6cm、長さ2.7cmを測る。

８区は遺跡の南西側に位置し、古期扇状地内である。標高52～50mを測る。現在の水田耕土直下は赤褐色ローム質土であり、一部に基盤礫層が露出していた。８－２区において検出時と後世の遺構内から少量の旧石器時代資料が出土した。遺物には台形石器と剥片がある。なお、台形石器は整理過程で紛失している。７は漆黒色良質黒曜石の不定形剥片である。平坦打面であり、先行剥離も同様の剥片剥出が予測できる。周縁に傷が多く、摩滅も著しいために二次調整や使用痕は不明である。現存値は長さ2.5cm、幅3.0cm、厚さ1.0cmを測る。

９区は８区の東50mの位置にあり、標高は49mとなり同じ地質環境である。遊離した状態で一部に欠損のある彫器が出土している。８は漆黒色良質黒曜石の厚手の幅広剥片を素材とする彫器である。素材は背面もポジティブ面であり、分割礫のポジ面を作業面として最初に剥離した剥片と考えられる。素材打面部に再度打面調整を施し、彫刻刀面を削出している。同じ打面から背面側に剥離が見られるが、彫刻刀面の幅を狭める意味があると考えられる。彫刻刀面には小剥離が多く認められ、使用痕と考えられる。また彫刻刀面に対峙する縁辺には微～小剥離があり、削器的機能も併用したと考えられる。下端を欠損するが、現存値は長さ3.1cm、幅2.7cm、厚さ0.9cmを測る。

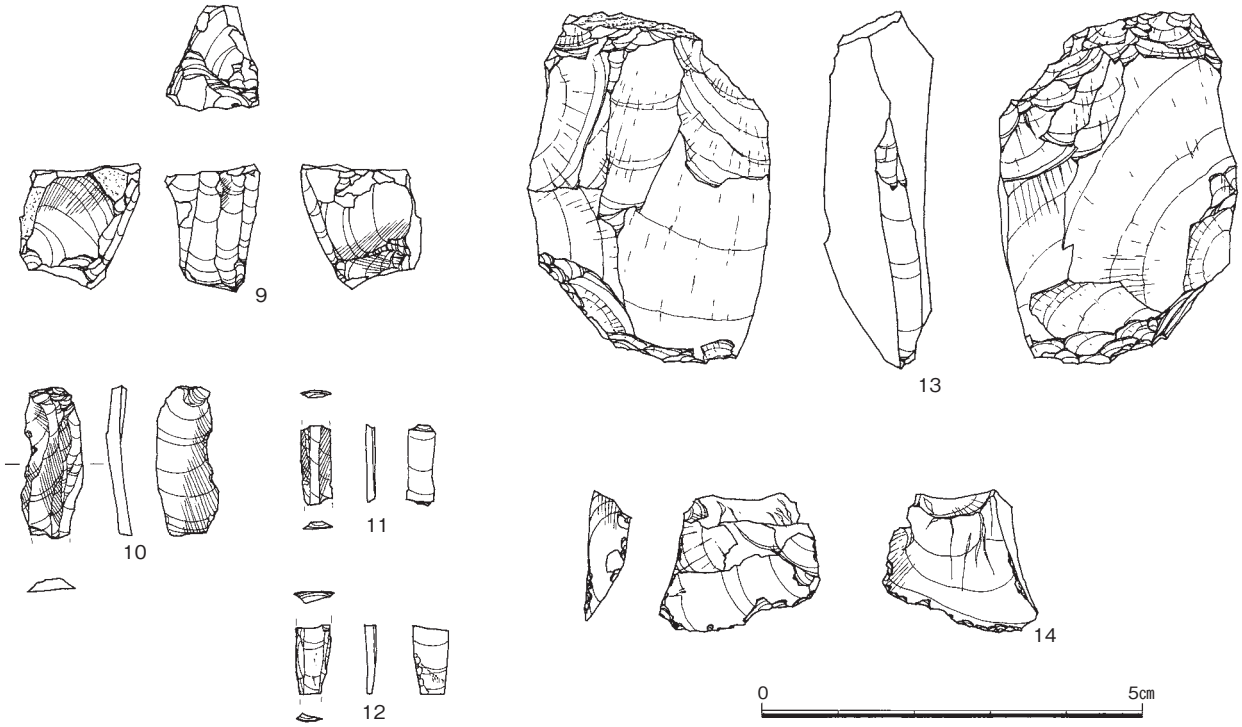


Fig.133　浦江遺跡群第５次出土旧石器時代資料２（1/1）

12区は遺跡の南端に位置し、古期扇状地と南側の花崗岩山塊の間を西から東に流れる浸食谷に面する扇状地丘陵南側緩斜面にある。標高46～47mを測る。弥生時代掘立柱建物SB012周辺の暗褐色礫混じりローム質土で一括採集された遺物である。出土遺物には細石刃核（Fig.133-9）、細石刃（10～12）、くさび形石器（13）、使用痕有剥片（14）、砕片などがある。９は漆黒色良質黒曜石を素材とする細石刃核である。背面は自然面、打面は分割面である。背面側からの荒い石核調整を施し、作業面からの打面調整の後、細石刃剥離を行っている。現存値は高さ1.6cm、幅1.3cm、長さ1.5cmを測る。10～12は細石刃である。何れも黒曜石を素材としている。10は打面を残し、先端を折断する。左側縁に刃こぼれがある。現存値は長さ1.9cm、幅0.8cm、厚さ0.2cmを測る。11は両端を折断している。現存値は長さ1.1cm、幅0.4cm、厚さ0.1cmを測る。12は両端を折断している。右側縁に刃こぼれがある。現存値は長さ0.9cm、幅0.5cm、厚さ0.1cmを測る。13はサヌカイトを素材とするくさび形石器である。上部には自然面がある。両端からの打撃により下端部は潰れている。現存値は長さ4.6cm、幅3.2cm、厚さ1.3cmを測る。14はやや不純物を含む漆黒色黒曜石を石材とする使用痕有剥片である。素材は幅広の不定形剥片であり、右側縁から下縁部に刃こぼれ状の微細剥離が認められる。現存値は長さ4.6cm、幅3.2cm、厚さ1.3cmを測る。

８．浦江遺跡群第5次調査のまとめ

浦江遺跡群第５次調査（以下では“浦江５次”と略す、他も同じ）は金武～吉武地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の中で最初に実施した。およそ１年に及ぶ調査で24地点、約36000㎡を調査した。浦江遺跡では過去に４次の発掘が行われたが、今次の調査で遺跡を取り巻く地形環境が大きく変化したことから、今後に引き継ぐ意味からもこれまでの調査の成果を簡単にまとめておきたい。

１）旧石器～縄文時代

浦江５次では主に古期扇状地上で旧石器時代遺物が出土した。５地点からの出土であり、二時期に区分される。2･8･9区にはナイフ形石器段階の石器類、3･12区には細石刃段階の石器類が出土した。これうち2･9区の石器類はナイフ形石器段階後半期中頃であり、浦江4次の三稜尖頭器が同時期である。また、３区の細石刃核は楔形であり、浦江谷１次６区に類似資料があり、細石刃段階後半期に位置付けられる。また、12区の細石刃は小型の野岳型であり、浦江谷遺跡１次３区に類似資料があり、細石刃石器段階前半期に位置付けられる。

縄文時代早期は2･3･6･12･24区で遺構・遺物の出土がある。6･24区ではフラスコ

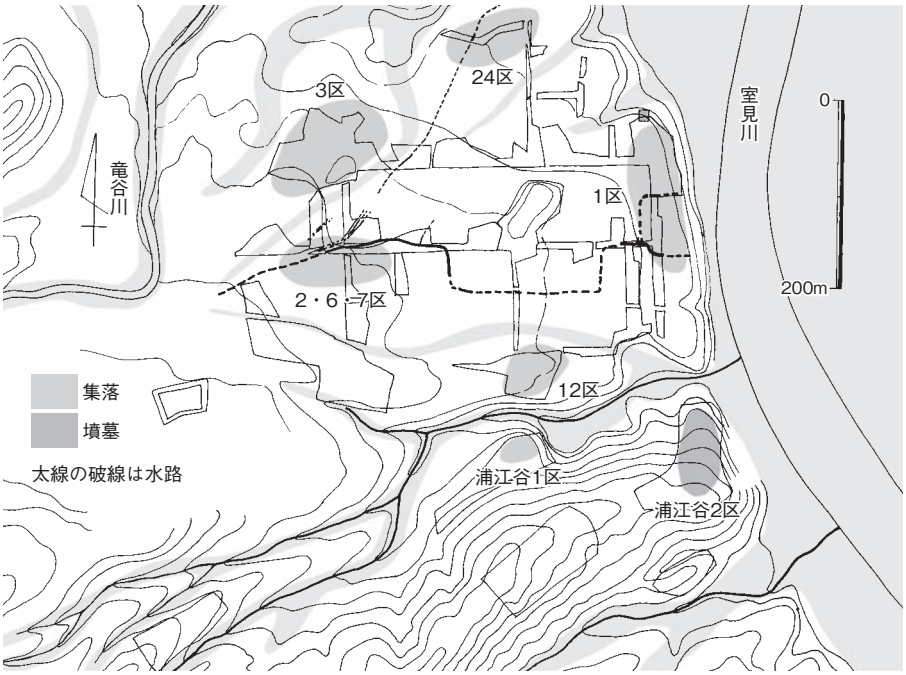


Fig.134　弥生時代の主要遺構の配置（1/8,000）

状土坑や集石遺構があり、土坑内から撚糸文・条痕文土器が出土した。この土坑内炭化物のC14年代測定は補正値でBP9580～9350±60の値が示された。現在本地域で最古段階の貯蔵施設と考えたい。2･3･12区は早期中葉～後葉とみられる土器や、石鏃を主とする石器類が出土する。また周辺の浦江谷１次６区で早期押型文土器等の資料が多く出土している。浦江谷１次２区や浦江４次に時期不明の落し穴状遺構がある。少なくとも縄文時代前半期には浦江扇状地上から後背地の西山山麓の広範囲が狩猟採集活動や活動拠点の場であったと推定される。前期～後期前半の資料は乏しく、後期後半になると再び出現する。2･3･23区では古閑式～黒川式段階の土器類や石器類がある。石器には在地産の結晶片岩や今山産玄武岩による扁平打製石斧がある。周辺の山麓斜面でも浦江谷１次１区で小規模の集落、３区でフラスコ状貯蔵穴群と推定される遺構等があり、一帯が焼畑などに利用されたことも推定される。

２）弥生時代

弥生時代前期は不明だが、浦江谷１次２区で前期初頭の突帯文土器による埋甕と前期末の伯玄式甕棺が少数ある。しかしこの時期に浦江扇状地内に関連する集落などは不明である。中期前葉には１区と24区の扇端部の段丘崖上に小規模な集落が形成される。両地区は直線で150mの近距離だが、中央に浅い谷があり異なる集落である。集落内からは石包丁などの収穫具が出土するが、扇状地内では同時期の遺構・遺物は認められない。この時期は集落から見下ろす室見川左岸の後背湿地が水田開発されたものとみられる。須玖Ⅰ式段階に１区の集落は途絶え、須玖Ⅱ式段階には24区も途絶える。換わって扇頂部に近い３区と2･6･7区、12区に新たな集落が出現する。それぞれの集落は旧河道を挟む。北側の３区は花崗岩残丘を中心に竪穴式住居、掘建柱建物、貯蔵穴群等で構成される。南側の2･6･7区や12区は古期扇状地の帯状丘陵に沿って展開するが、最高所は後世の水田造成で削平されている。2区で東西に貫流する溝SD01は竜谷川上流から分水された灌漑用水路であり、溝底に井堰の柱穴列や水溜状遺構が検出された。この水路は２区で丘陵を横断し南側の低地を流下し、17･19区で分流した後、扇端部に抜ける。この水路で灌漑された水田は２区のまとめで示されるように、扇状地内低地部の広範囲に及んだと推定できる。灌漑域の範囲からみると、１区と24区の集落断絶はこうした扇状地上の乾田化に伴い発生したものと考えらる。したがって両集落は水田開発の伴い扇頂部に移動したと考えられる。この時期の埋葬遺構は１区北端に墳丘墓があり、扇状地全体を見下ろす浦江谷１次２区に群集墓が造営される。

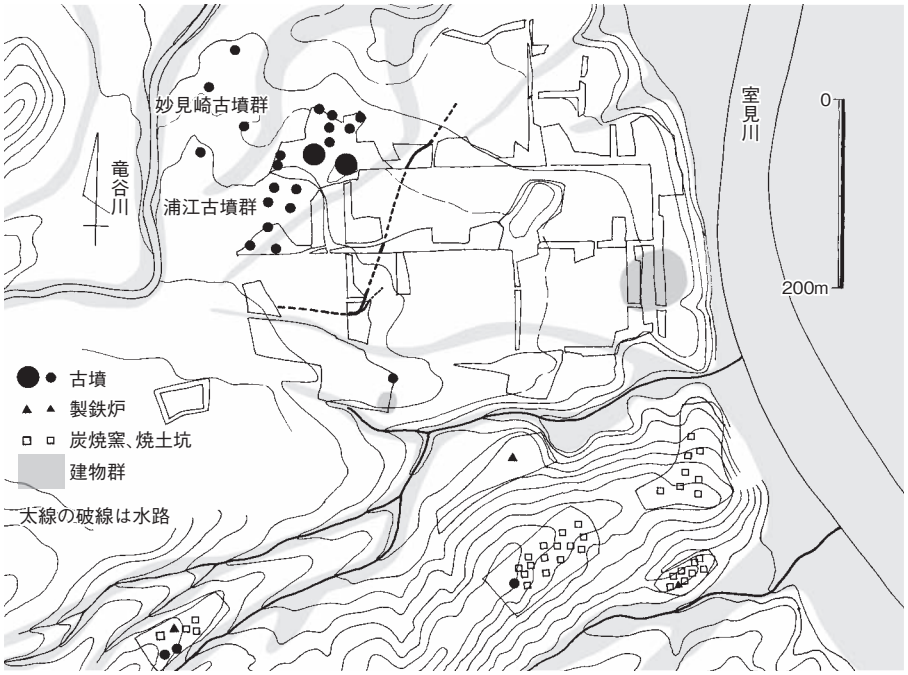


Fig.135　古墳時代－古代の主要遺構配置（1/8,000）

３）古墳時代～古代

古墳時代前期には若干の水路と遺物があるが、集落等は

存在しない。再び遺構が集中するのは古墳時代後期であり、群集墳の造営である。扇状地内では3･5区に浦江古墳群、４区西側に妙見崎古墳群、南側の山麓部に西山古墳群がある。このうち最も早い築造は浦江古墳群であり、１，３号墳の大型円墳を盟主とする。特徴的であるのは鉄滓の供献例が多いことである。５区２号墳では鍛冶滓、浦江谷１次４区１号墳や西山１号墳では２～３kgの精錬滓が出土した。６～７世紀の古墳への鉄滓供献例は北部九州で早良平野に集中し、この浦江地域も製鉄集団との関連が指摘できる。１号墳の新羅系遺物とともに新たな技術集団の出現についての検討が望まれる。

奈良時代から平安時代前期には8区SD01から20区SD03へと扇状地を横切る灌漑水路が設けられる。再び扇状地上での水田開発が進んだとみられる。水路底の標高や配置･規模から竜谷川からの取水口は弥生時代よりさらに上流に設けられたと推定できる。また浦江谷１次や浦江4次などの南側山麓地域では各所に製鉄炉（鍛冶･精錬）、横口式炭焼窯、焼土坑群が見られる。なおその一部に古墳時代に遡る例もありうる。近接して工人の住居群や管理棟とみられる大型建物等が検出されている。遺物には墨書土器や新羅系瓦も出土している。部分的調査であるが、扇端部の17・19区には真北軸に沿った大型建物群があり、官衙的様相を見せる。こうした施設の出現は前段階からの製鉄関連集団との関係が予測され、各遺構の時期限定を含めてさらに検討が必要である。

４）中世～近世

12～14世紀代には浦江４次2･3区、浦江５次1、2、12、13、15、18、23、24区、浦江谷１次１区で集落が、南側丘陵の尾根線である浦江谷１次2･4区に墓域が設けられる。この時期は室見川東岸沖積地に条里的水田区画が造成され、その区画は対岸の浦江扇状地上まで展開する。この時期に再び広域に及ぶ水田造成が行われた。しかし新たな水田開発というより、それまでの不規則な水路や田面を規格性の高い水路網と水田面に改変することが主な目的と見られる。扇状地上はこの段階に近世以降に続く水田面がほぼ完成したと考えられる。中心集落は明確でないが、出土遺物の豊富さや井戸などの配置から見て、12区～15区付近ににあり、周囲の１区や23区、浦江４次２区などに傘下の小集落が点在したと見られる。大塚地区中央の残丘部には13世紀代の区画溝と、16世紀代に大規模に造成して設けられた城郭がある。しかしいずれも出土遺物が少なく、日常的施設ではなく、戦時等の城砦的機能が考えられる。15世紀以降は扇状地内や南側山麓部の遺構は少なくなる。溜池や灌漑水路の整備を通じて棚田などが山麓部まで造成されている。集落は竜谷川沿いの妙見崎一帯や、旧河道に沿った金武宿付近のほぼ現在の位置に集約されたと見られる。

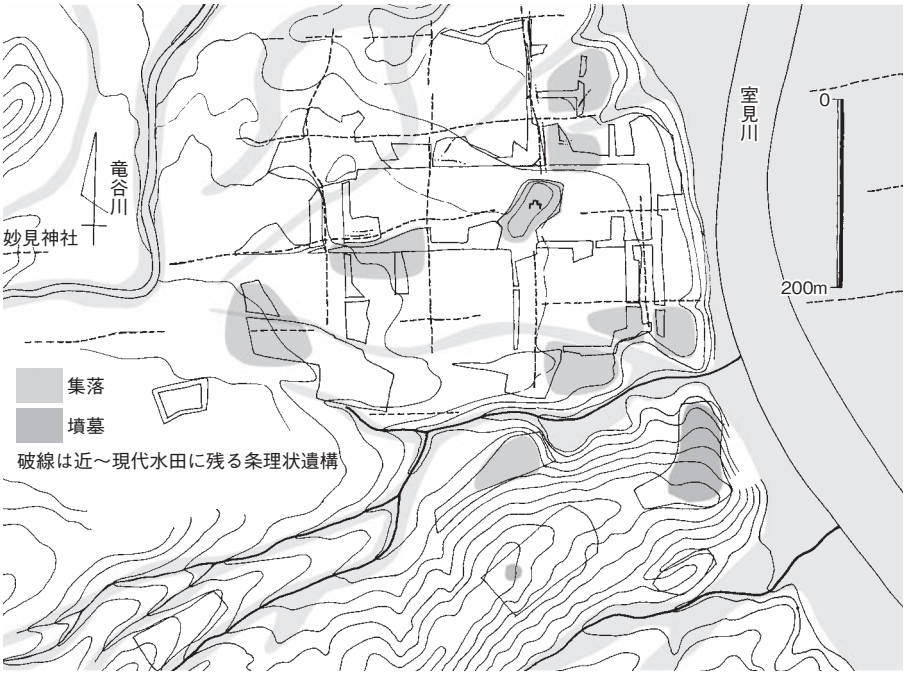


Fig.136　中世の主要遺構配置（1/8,000）

第３章　城田遺跡第２次調査の記録

１．城田遺跡の位置

現在の行政区では福岡市早良区に当たる早良平野は、背振山系から西方に派生する西山・飯森山・叶岳に南から西を限られ、東は油山から北に派生する低丘陵に囲まれる平野である。この平野は主に室見川とその支流によって開析された沖積平野で、現在は北部から幹線道路沿いに市街地化が進んでいるが、旧来広大な水田地帯であった。この沖積平野の西を限るように西入部から金武周辺にかけて比高差約10mの段丘崖がみられる。これの上部は更新世中～後期にかけて形成された扇状地形である。この扇状地は室見川を主としてその支流の龍谷川・塔尾川に浸食され、複数の台地状の地形となって残っている。

城田遺跡は、この扇状地上に形成された弥生時代～中世にわたる複合遺跡である。

２．調査概要

城田遺跡第２次調査は圃場整備事業に伴う発掘調査の常として、圧倒的な遺構・遺物量、それも貴重なものが多いという遺跡の内容に比して圧倒的に少ない人員・時間で作業が進められた。しかし１遺跡を広範囲にわたって発掘調査するという希有な事例であり、数々の重要な遺構・遺物の発見があった。以下、時代ごとに遺構・遺物の概要を報告書既刊の部分について概観したい。

縄文時代は、６区・16区に当該期の遺物包含層が検出された。

弥生時代は、城田遺跡がのる扇状地の北部（６区）に墳丘を持つ区画墓が営造される。埋葬主体は汲田式から須玖式、立岩式期までの甕棺〇基で構成される。このほか４区でも甕棺墓を検出しているが、削平が激しく残りは悪い。本来区画墓の周囲には甕棺墓が多く存在していたと推測される。その他８区、９区、11区で中期後半頃の水路が検出されている。

古墳時代は、まず３区検出の城田１号墳が挙げられる。葺石を有する円墳で、主体部の竪穴式石室から細線式獣帯鏡が出土した。周溝出土の土師器から、時期は５世紀前半頃と推測される。古墳は１号墳の南に２号墳が営造され、６世紀前半頃と推測される。集落址は、扇状地の最高所である中央部の６区・７区・10区に後期の竪穴住居・掘立柱建物が集中する。氾濫原である16区にも当該期の住居・掘立柱建物が検出される。特筆される遺構に半島系の大壁建物が挙げられる。６区に２棟、16区に１棟検出された。

古代は、大規模な掘立柱建物群が５区、６区、８区で検出される。厳密かつ計画的に造営されたというよりむしろ地形に合わせて建てられている形である。とりわけ５区（未報告）では基壇を築造した上で掘立柱建物を建てている状況が見られるほか、礎石が１基出土している。遺物は緑釉陶器、越州窯系青磁、新羅系土器などが出土した。調査区全域にわたる削平のため詳細は不明であるが、遺構と遺物の内容から基壇建物は神社関連遺構、そのほかの建物群は官衙関連の遺構と推測される。このほか13区で製鉄遺構、14区で鉄滓の集中出土がみられ、製鉄が盛んに行われたことが推測される。

中世の遺構・遺物は浦江遺跡に比べ多くはない。１区・２区・３区に溝が検出される。地形に沿って緩く弧を描き、水路であると思われる。

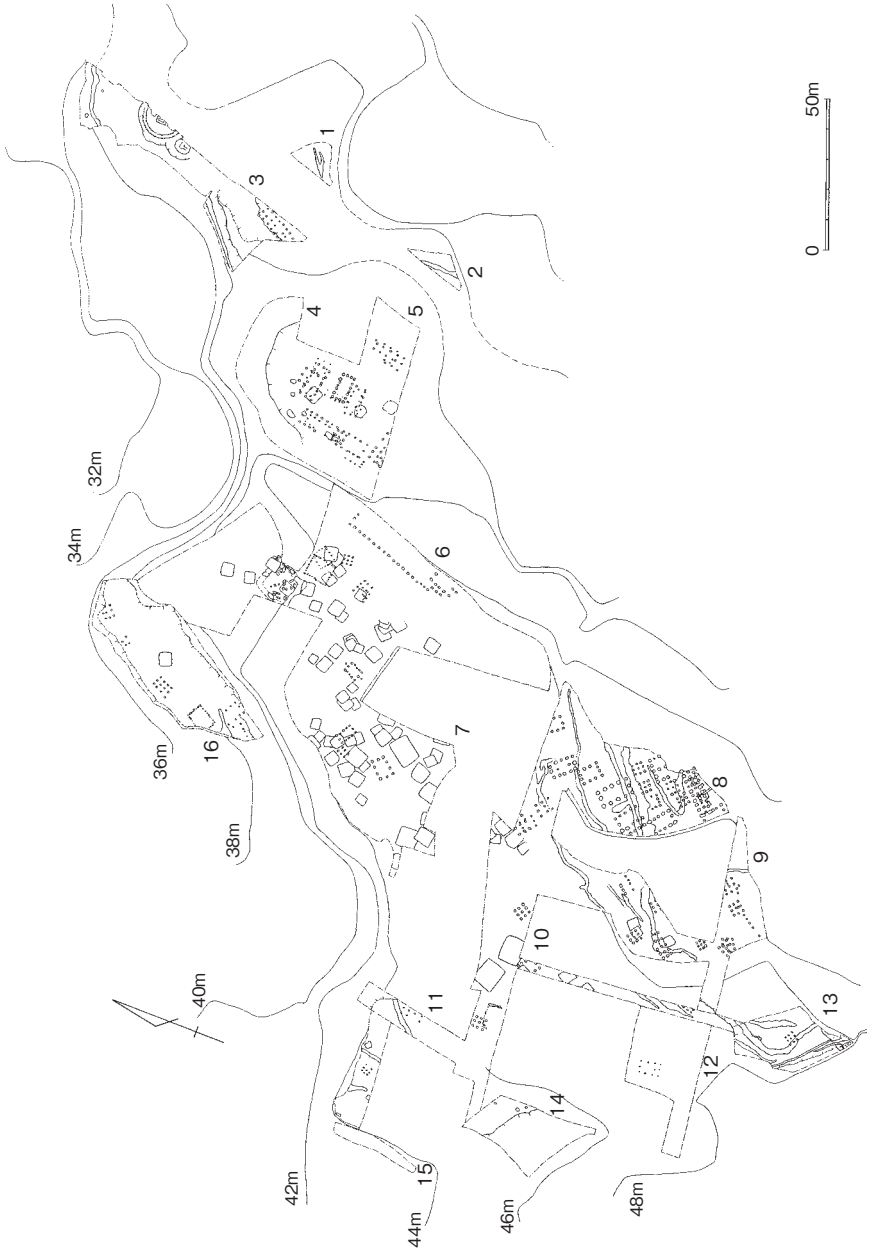


Fig.137　城田遺跡第２次調査区位置図

11区・17区の調査

11区・17区は互いに隣接する調査区である。ここでは一括して章を設け、各区ごとに遺構・遺物の報告を行う。

1．11区の調査概要

11区は、城田遺跡第２次調査地の西端部にあたる調査区である。

調査区西壁土層をFig.139に示す。３層みられる耕作土の下層に遺物包含層が堆積し、その下面から0.5m程度で遺構検出面の黄褐色砂礫層となる。調査区北部は段丘崖となり、急激に標高を下げる。

遺構面は２面設定した。第１面にて検出した遺構は、土壙・ピットである。第２面にて検出した遺構は、溝１条・ピットである。第１面にて検出された土壙は、第２面検出の溝状遺構の一部である可能性が高い。

2．遺構と遺物

a.溝（SD）

SD100（Fig.138・PL.2-3）遺構の埋土が遺構面の土質と酷似していたため上面で検出できず、第２面にて検出した。調査区北部を南西から北東にぬける溝である。調査区西壁付近で緩く北方に蛇行し、その後北東に向け緩く弧を描く。幅0.7～1.8m、深さ15cm程度を測る。西壁付近でややくぼむ以外は底面はほぼフラットである。土層断面の観察から流水の痕跡は認められない。

出土遺物（Fig.141）遺物が集中する部分が２カ所検出された。出土状況をFig.140に示す。状況から推して、個体の土器が投棄されたものと推測される。取り上げ時・水洗時の混乱により遺物の出土位置が不明で、わかるもののみFig.140に記入している。SD100からはほかに弥生土器細片がビニール袋１袋程度出土した程度で、遺物は非常に少ないといえる。

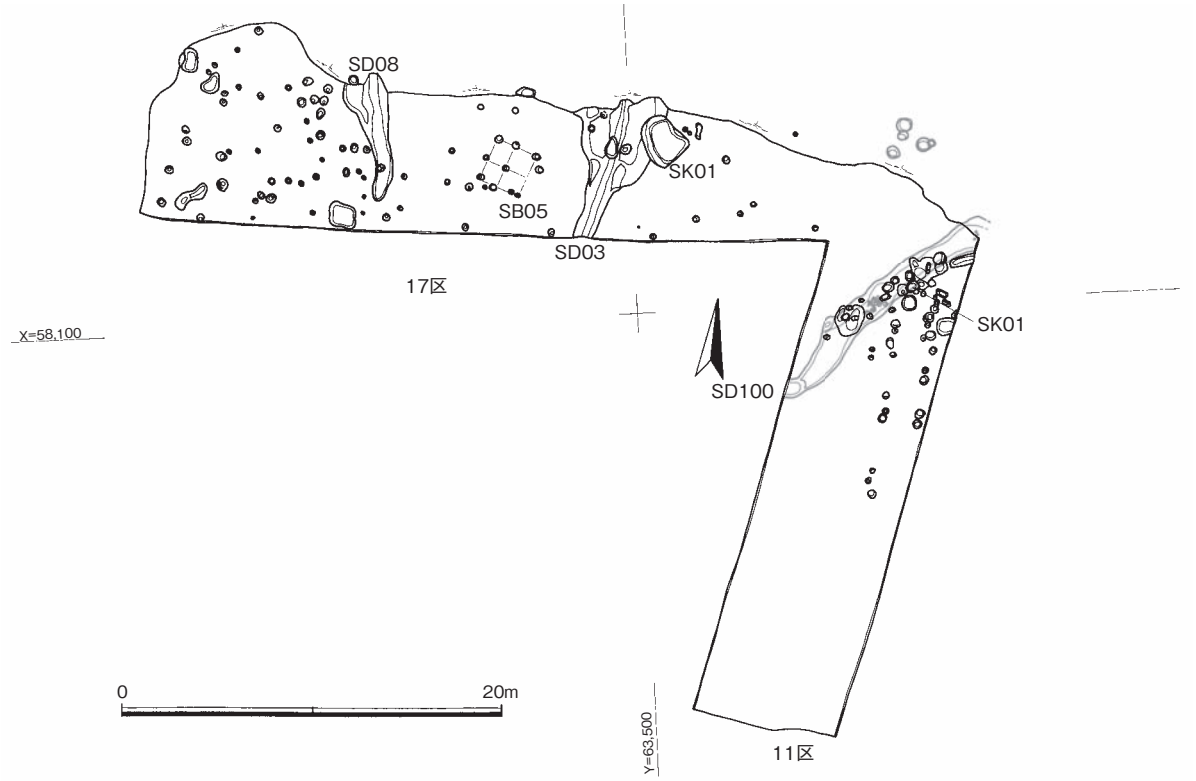


Fig.138　城田遺跡第2次調査11区・17区全体図（1/400）

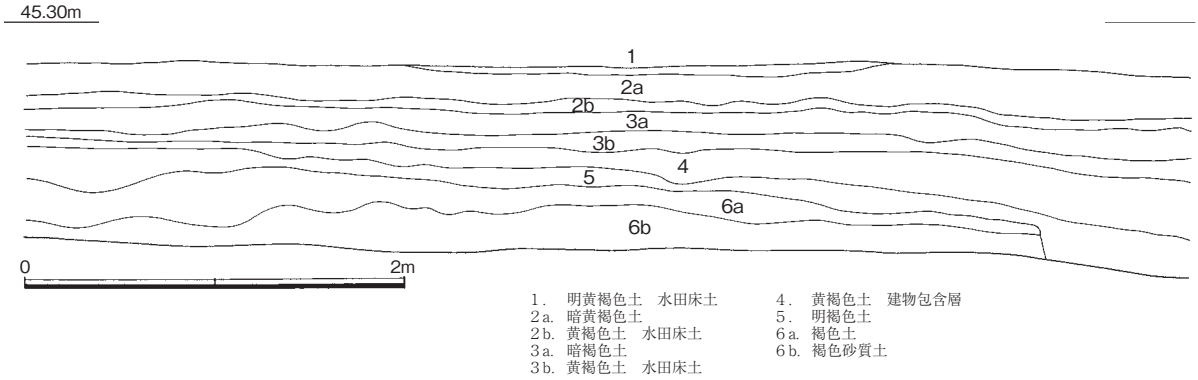


Fig.139　11区西壁土層断面実測図（1/40）

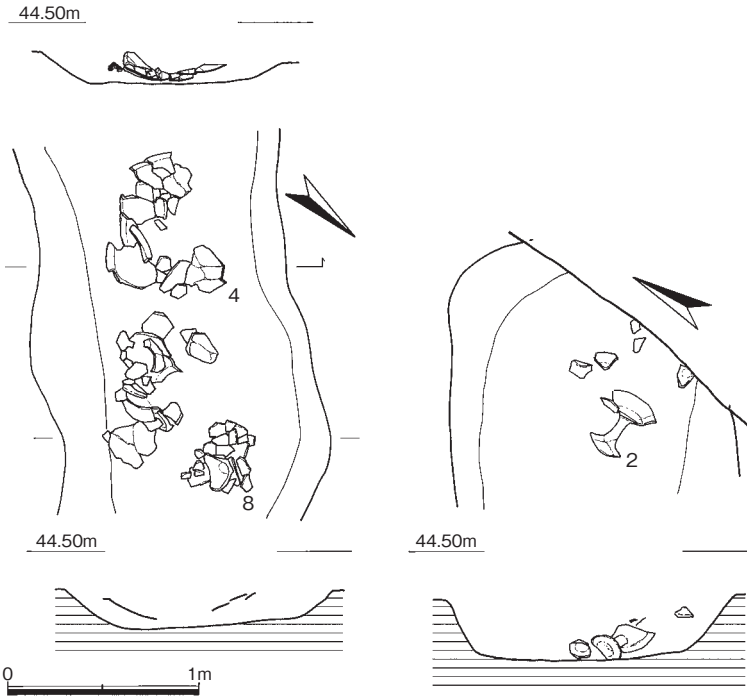


Fig.140　11区SD100遺物出土状況実測図（1/40）

すべて弥生土器である。１は、鉢形土器である。1/2個体残存し復元口径18.2cm、器高10.3cm、底径6.2cmを測る。外底面をのぞく全面に丹塗り痕が、内底面に指押さえ痕がみられる。胎土は精良で焼成は良好である。２は、高坏である。4/5個体残存しほぼ完形に復元できた。坏部口径24.9cm、器高26.3cm、脚部底径16.6cmを測る。坏部外面中程に１条突帯を有し、坏部内面から脚部外面にかけ赤彩される。坏部は回転ナデ、脚部には下部は磨滅が著しいが、外面に縦方向の疎なミガキがみられる。内面にはシボリ目が観察される。胎土は非常に精良で焼成は良好である。３は甕である。上部を欠損し2/3個体残存する。底径は9.8cmに復元される。内面は剥落が顕著で調整不明、外面はハケメをナデ消している。胎土はごく精良で丹塗りの可能性があり、焼成は良好である。４は甕である。3/4個体残存し口径33.9cm、器高48.1cmに復元でき胴部最大径35.4cm、底径10.0cmを測る。口縁部の下に断面三角形の突帯を１条巡らす。胴部下半は被熱し器壁が剥落する。胎土は精良で焼成は良好である。５・６は壺形土器である。５は口縁部から肩部にかけて1/2残存する破片で、口径22.6cmに復元できる。頸部外面に縦方向の疎なミガキがみられ、内面から外面全体に赤彩される。肩部内面に爪痕と推測される圧痕を有する。胎土は非常に精良で焼成は良好である。６は口縁部から肩部にかけて1/2残存する破片で、口径22.0cmに復元できる。頸部外面に縦方向の疎なミガキがみられ、内面から外面全体に赤彩される。内面は丁寧なナデにより仕上げられる。胎土は非常に精良で焼成は良好である。７は壺形土器である。上部を欠損する個体で、この個体の上部に接合する破片はなく意図して打ち欠いた可能性がある。残存高34.3cm、胴部最大径41.8cm、底径9.8cmを測る。胴部に断面M字形の突帯を２条巡らす。外面は磨滅するが、内面は良好に器壁が残存する。胴部内面下部に指押さえ痕がみられる。胎土は非常に精良で丹塗りの可能性があり、焼成は良好である。８は甕であ

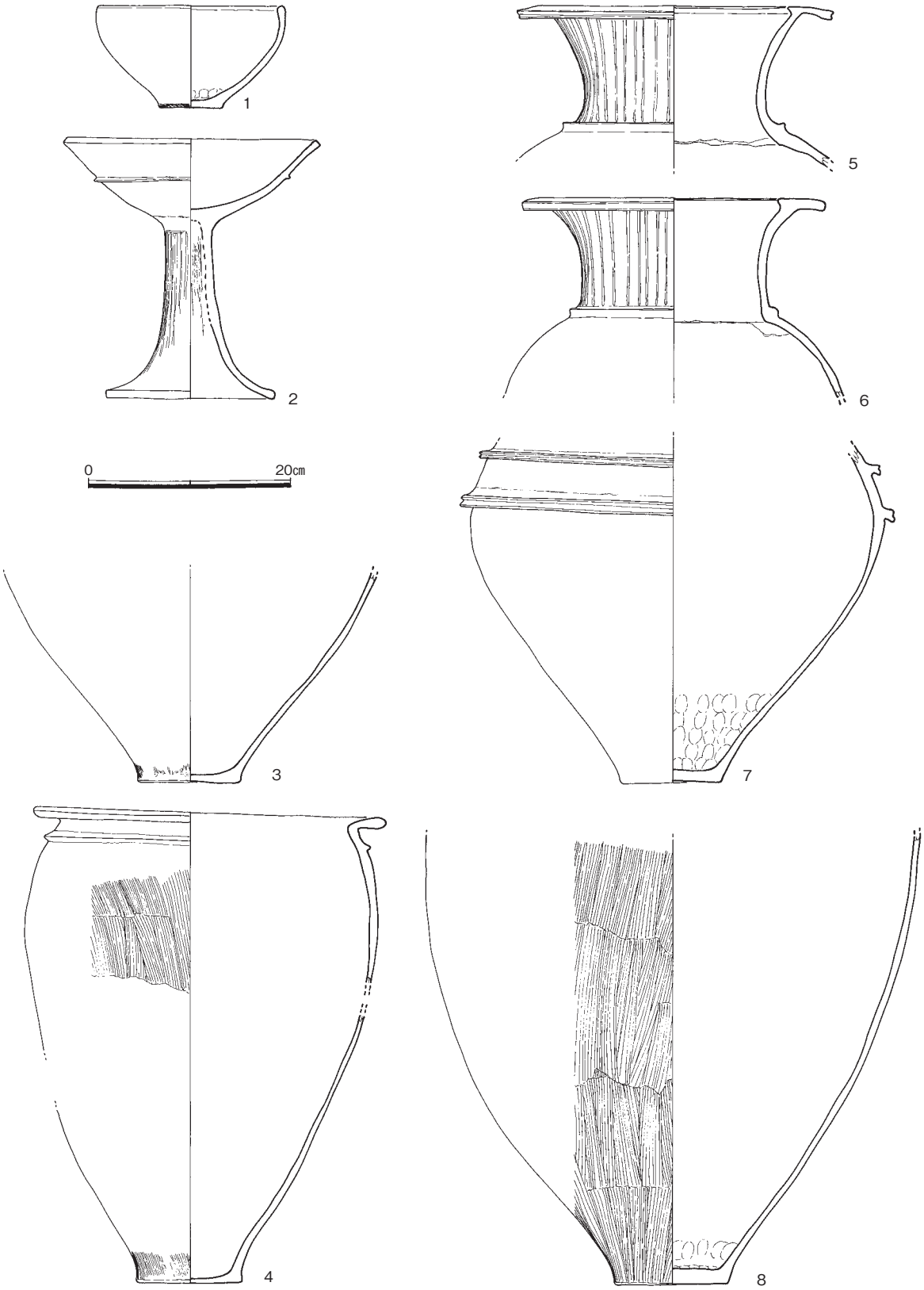


Fig.141　11区SD100出土弥生土器実測図（1/6）

る。上部を欠損し1/2個体残存する。残存高45.7cm、底径11.0cmを測る。外面は縦方向のハケ調整で一部にスス状の炭化物がうすく付着する。内面はナデ調整で底部付近に指押さえ痕が残る。胎土は精良で焼成は良好である。

b.土壙（SK）

SK01（Fig.142）第１面にて検出した土壙である。ただしSK01の直下からSD100が検出されており、SD100の上部を検出したものの可能性がある。平面プランは不整な楕円形を呈し、長軸を南西－北東方向に向ける。長軸で径0.88m、短軸で径0.57mを測る。底面はほぼフラットだが北東部に３cm程度のくぼみを有する。深さは8～12cmを測る。

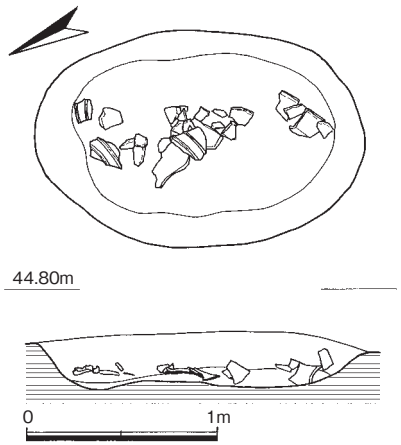


Fig.142　11区SK01実測図（1/20）

遺物は弥生土器、鉄製刀子片が出土した。

このほか、ピットからは弥生土器、土師器（碗・甕など）、須恵器、鉄滓が出土した。北端の崖には包含層が残っており、ここから土師器甕・坏、須恵器坏が出土した。いずれも小片～細片である。

３．小結

11区では２面の遺構面を設定し、溝、土壙、ピットを検出した。第１面では調査区北部にピット、土壙などが集中して検出されるが、SD100がこれらの遺構の下で検出されており、第１面のそれも北部に集中して検出された遺構は、SD100の上部を部分的に検出していたものがふくまれると推測される。したがって、第２面で検出されたSD100は第１面から掘り込まれていたと考えられ、純粋に面が異なる遺構はほとんど存在しないと推測される。出土遺物の観察からも時期差はほとんどみられなかった。

SD100からは、個体で投棄されたと思われる弥生土器が２カ所に集中して出土した。SD100からはこれ以外の遺物はビニール袋１袋程度の弥生土器細片以外出土していない。精製・赤彩されたものを含む土器が個体で投棄されたことはなんらかの祭祀的行為を想起させる。遺物の少なさ、流水の痕跡がみられなかったことから、SD100は区画溝であったと推測される。しかしSD100の北は段丘崖である。何らかの施設を想定するならば南側であるが、それに比定できるような遺構は、今回の調査では検出できなかった。いずれにせよ11区での調査結果は城田遺跡における弥生中期後半期の遺構の範囲、性格を考える上での１資料となるだろう。

４．17区の調査概要

17区は城田遺跡第２次調査地の西端部、のり面設置のため地下げされる予定の部分にあたる調査区である。遺構は水田床土直下で検出されるが、約0.2m掘り下げたところで遺構検出面を設定した。

検出された遺構は掘立柱建物１棟・溝２条・焼土壙１基である。焼土壙SK01は溝SD03を切る。掘立柱建物は、城田遺跡２次調査３区（市報第866集）にみられる掘立柱建物と焼土壙の関係からSK01とほぼ同時期の遺構と推測される。今回併せて報告する城田遺跡２次調査14区では製錬滓を中心とする鉄滓が多量に出土しており、焼土壙と合わせ製鉄関連の遺構の可能性が指摘できよう。

５．遺構と遺物

a.掘立柱建物（SB）

SB05（Fig.143・PL.3-3）調査区中央部にて検出した。２間×２間の総柱建物である。東部の柱筋中央の柱穴は精査を繰り返したが検出できなかった。磁北とほぼ平行な柱筋を持ち、柱穴同士の間隔は0.9～1.2mを測る。柱穴の平面プランは不整な円形を呈し、径0.3～0.5m、深さ0.14～0.35mを測る。柱穴の埋土は遺構検出面の黄褐色砂礫層よりやや明るい同質の土で、当初検出に苦労した。

b.溝（SD）

SD03（Fig.138、PL.4-1）調査区東部にて検出した。南北方向に掘られる溝で、北は段丘崖まで伸び、南は調査区外に伸びる。焼土壙SK01に切られる。平面プランは不整で、調査区南壁付近で0.9m、北端の崖付近で5.1mを測る。底面に凹凸は少ないが東西にテラスを有し、断面は逆凸字形となる。底面は北に向かって標高を下げ、比高差0.15mを測る。

土層断面をFig.144に示す。調査区南壁部で観察した。ここからは少なくとも２回の掘り直しが推測され、流水の痕跡は認められない。

出土遺物（Fig.146）２は、須恵器である。高台付き坏の小片で、底径9.6cmに復元される。内底面は不定方向ナデ、外底面はヘラ切り後未調整である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。

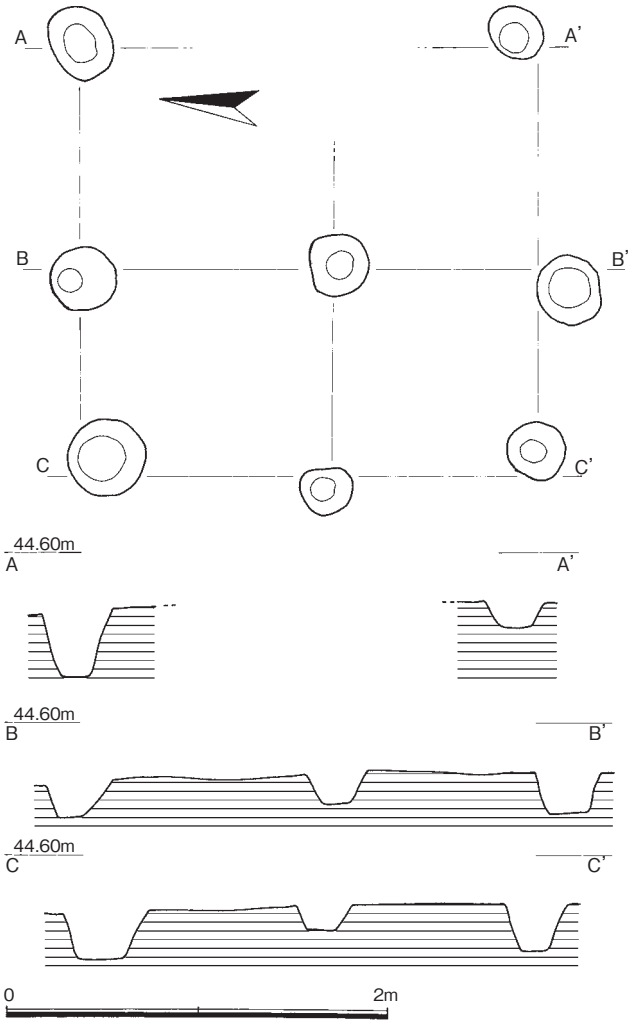


Fig.143　17区SB05実測図（1/40）

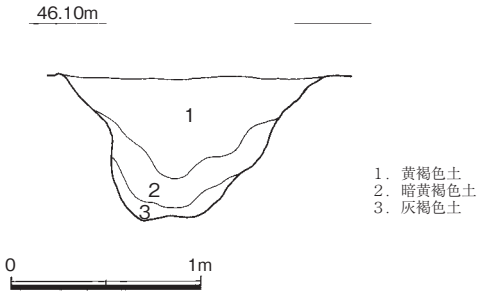


Fig.144　17区SD03土層断面実測図（1/40）

SD08（Fig.138）調査区西部にて検出した。南北方向に掘削され、緩く西に蛇行しつつ調査区北端の崖にまで続く。南端は調査区南壁から1.6mで検出された。平面プランは不整で南端付近で0.6m、北端付近で2.3mを測る。底面は西面にテラスを有するがおおむねフラットである。底面は北に向け傾斜し、比高差約0.5mを測る。埋土は暗褐色土である。埋土の堆積状況から１回の掘り直しが認められ、下部に細砂層がみられることから掘り直す前に流水があったと推測される。

c.土壙（SK）

SK01（Fig.145・PL.4-2・3）調査区東部にて検出した。溝SD03を切る焼土壙である。平面プランは不整楕円形で南東－北西方向に長軸を向ける。底面はおおむねフラットだが北面～西面にかけテラス

を有する。このテラスより下位の壁面に被熱痕が認められ、還元焼成により灰青色を呈する部分もある。土層断面の観察から中央部に炭化物層がみられ、炭化物層の上層は炭化物混じりの土で一気に埋められている。この焼土壙は木炭を製造する目的に用いられたと推測される。

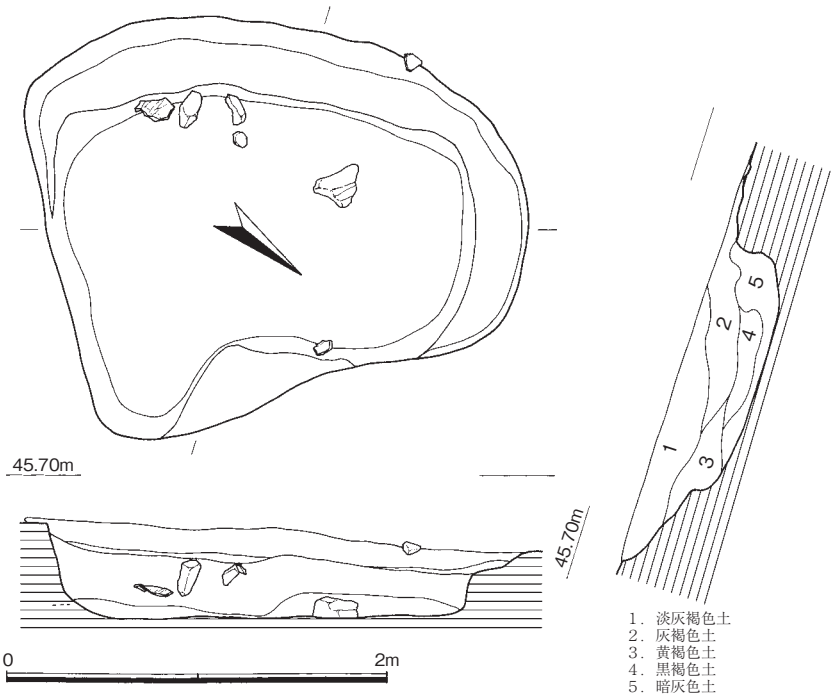


Fig.145　17区SK01実測図（1/40）

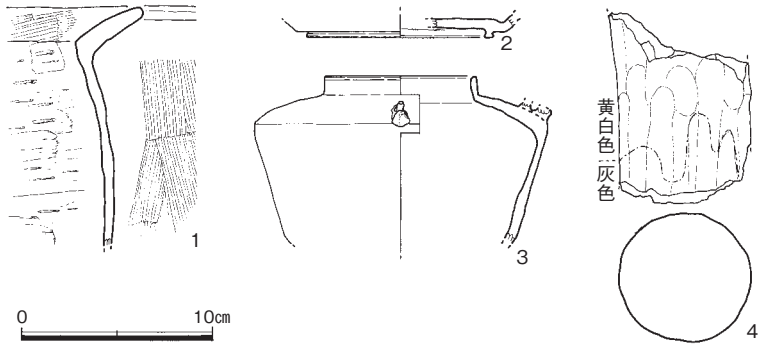


Fig.146　17区出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（Fig.146）1は、土師器である。甕の小片で、口縁部内面はヨコハケ、胴部外面はタテハケ調整である。胴部内面は横方向にヘラ削りされる。胎土は精良で焼成は良好である。3は須恵器である。短頸壺の小片で、底部を欠損する。口径7.6cmに復元される。肩部に耳を有し、粘土塊を貼り付け焼成前に向かって右側より穿孔して成形している。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。

d.ピット出土の遺物（Fig.146）

4は、SP07から出土した鞴羽口である。両端を欠損するが被熱痕跡から下方が先端に近いと思われる。残存長9.9cm、径7.0cmを測る。土師質で、胎土は精良である。

6．小結

17区では、掘立柱建物1棟・溝2条・焼土壙1基が検出された。焼土壙SK01は溝SD03を切る。掘立柱建物は、城田遺跡2次調査3区（市報第866集）にみられる掘立柱建物と焼土壙の関係からSK01とほぼ同時期の遺構と推測される。したがって溝と土壙・建物の間に直接の関係は少ないと思われる。今回併せて報告する城田遺跡2次調査14区では製錬滓を中心とする鉄滓が317.5kg箱出土しており、焼土壙と合わせ製鉄関連の遺構の可能性が指摘できよう。

1．11区第１面全景（南より）

2．11区第２面全景（東より）

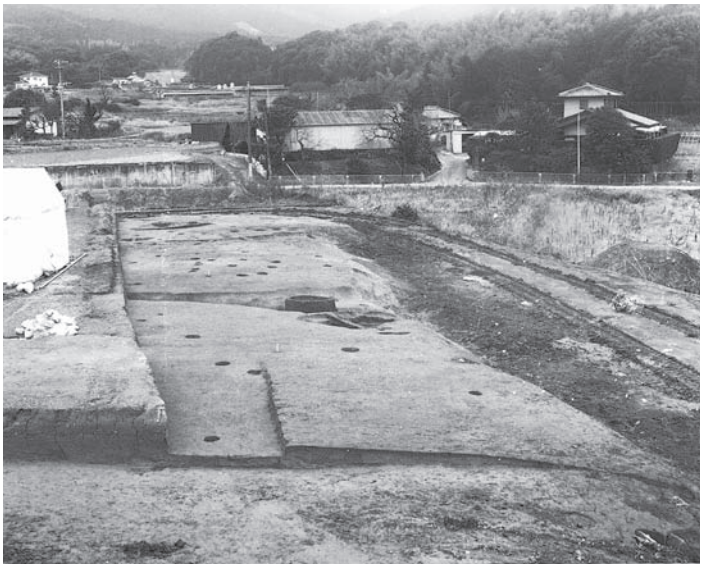
3．11区西壁土層（南東より）

1．11区SD100土器群①（西より）

2．11区SD100土器群②（西より）

3．11区SD100土層（西より）

1．17区全景①（西より）



2．17区全景②（東より）

3．17区SB05（南より）

1．17区SD03土層（北より）

2．17区SK01（南より）遺物出土状況

3．17区SK01完掘状況（東より）

14区の調査

１．調査概要

14区は、城田遺跡第２次調査地のほぼ南西端部に位置する調査区である。14区の南は崖が切り立っているが、ここには鉄滓を含む土層が露頭している。14区を調査するに当たっては鉄滓の出土状態に留意しつつ作業を進めた。Fig.148に調査区西壁の土層断面図を示す。14区では水田床土直下の黄褐色砂礫層を遺構面とした。地形としては調査区北端から約５mで砂礫層の落ちを検出し、南西方向にゆるやかに標高を下げる。この落ち込みの埋土である黒褐色～暗褐色土に多量の鉄滓が含まれていた。鉄滓を含む土層の下層は砂礫層および腐植土層となり、水性の堆積状況を示す。

検出した遺構は、溝１条である。このほか土壙状の落ちを複数検出したが、遺構と認定するには至らなかった。

なお、14区出土鉄滓の分類・所見については、福岡市教育委員会文化財整備課長家伸氏の助言・協力を得た。

２．遺構と遺物

a.溝（SD）

SD07（Fig.147・PL.1-3）調査区北部にて検出した。東西方向に緩く蛇行しつつ伸びる溝である。谷状の落ち込みSX01の周囲を巡るように掘削され、幅は0.2～0.3mとほぼ一定である。深さは5～30cmを測り、東に向かって低くなる。

出土遺物（Fig.151）１は、須恵器蓋である。小片で口縁部を欠損する。天井部内面に当て具痕が観察される。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。このほか鉄滓がビニール袋１袋出土した。

b.谷状の落ち（SX）

SX01（Fig.147・PL.2-1）調査区南部2/3をしめる部分である。鉄滓が多量に出土したため独立して報告する。土層断面実測図をFig.149に示す。最上層の１層に鉄滓が含まれる。上部・下部・底面に集中することなく一様に含まれている。下層の２～３層は砂礫からなり、水性の堆積物と考えられる。

Fig.147　14区全体図（1/200）

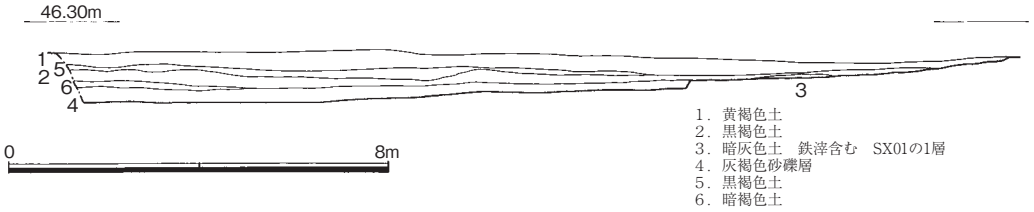


Fig.148　14区西壁土層断面実測図（1/160）

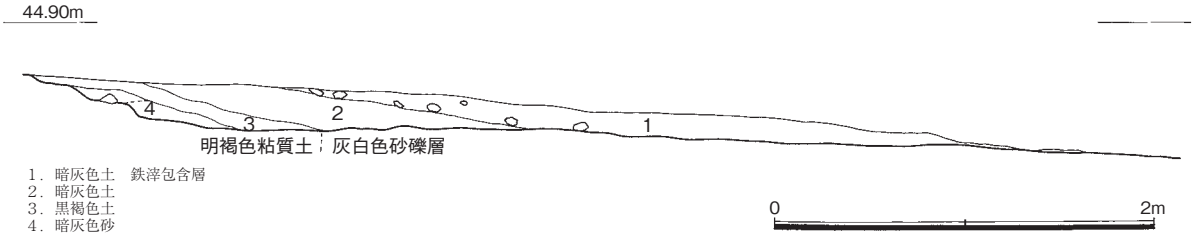


Fig.149　14区SX01土層断面実測図（1/40）

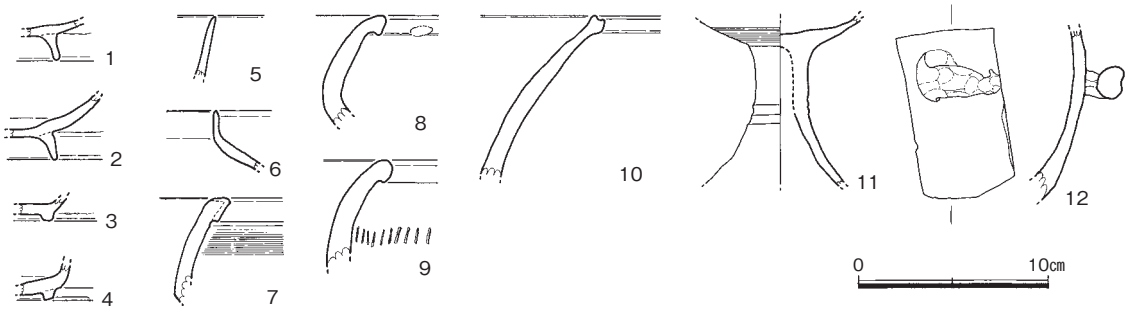


Fig.150　14区SX01出土土器実測図（1/4）

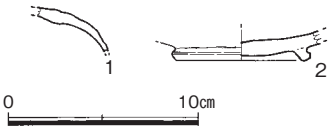


Fig.151　14区SD07・遺構検出面出土土器実測図（1/4）

SX01出土の鉄滓は磨滅のため分類不能の個体が多いため製錬滓と鍛冶滓に大別し、肉眼観察のみではあるが分類を行った。発泡するもの・底部に砂粒が付着するもの・碗形のものは鍛冶滓（鉄塊系遺物は鍛冶滓に含めた）、ガラス化したものは製錬滓に分類した。重量にして製錬滓212.0kg、鍛冶滓15.05kg、分類不能90.45kgという結果を得た。精錬滓には小割になったものが多く、炉底塊が多く炉壁は少ない。製錬滓は長方形箱形炉の滓と思われる。鍛冶滓の鍛造剥片の付着は磨滅のため不明である。

出土遺物（Fig.150）１・２は、土師器碗である。底面から出土し、鉄滓が流入した時期を示すと思われる。以下は須恵器。３～５は、碗である。６は短頸壺。７～10はいずれも甕の口縁部である。11は高坏である。12は甕か。胴部に手捏ねの耳を有する。以上の遺物はいずれも小片である。

３．小結

14区では、溝１条の他、鉄滓を多量に含む谷状の落ちを検出した。分類の結果から14区の周辺で製鉄が行われていた可能性が高いが、今次調査では製鉄に直接関わる遺構は検出できなかった。15区検出の焼土壙が製鉄に必要な木炭を供給するための炭窯であったとも思われるが、推測の域を出ない。いずれにせよ14区の周囲に製鉄関連遺構が存在する可能性が高く、今後の周辺の調査に期待したい。

1．14区全景①（西より）

2．14区全景②（北より）

3．14区SD07（東より）

1．14区SX01南北土層（西より）

2．14区西壁土層（東より）

3．14区東壁土層（西より）

15区の調査

1．調査概要

15区は、城田遺跡第2次調査地の西端部、17区に隣接する南北に細長い調査区である。遺構検出面は西に向かって標高を下げ、比高差約0.3mを測る。人為的な遺構は検出されなかったが、不整なくぼみに散漫にではあるが遺物の出土をみた。遺物についてはFig.153に図示しているが、このほか調査区周辺で銅銭が1点採集されている。

2．遺構と遺物

a.不整なくぼみ（SX）

SX01（Fig.152）調査区南部にて検出した自然地形である。大きく２カ所に分かれるがここでは一括して取り扱う。SX01は調査区の南部約16mの範囲に広がる。底面は凹凸が激しく、深い部分でも10cm程度であり、多くの箇所はそれより浅い。

出土遺物（Fig.153）復元しうる遺物のみ掲載した。

１は、土師器坏である。口縁部を欠損し1/2個体残存する。残存高4.6cmを測る。外底面にはヘラ切り痕および板状圧痕がみられる。胎土は精良で焼成は良好である。２は、黒色土器B類である。口縁部の小片で、口径15.2cmに復元できる。外面中程まで燻しがかかり、密なヘラミガキが施される。胎土は精良で焼成は良好である。３は、土師器である。高台付きの碗で口縁部を欠損するが2/3個体残存する。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。残存高5.5cm、底径8.5cmを測る。胎土は径2～5㎜の砂粒および雲母片を含み、焼成は良好である。

図示した以外に、土師器・須恵器甕、弥生土器が出土している。

3．小結

15区では、人為的な遺構は確認できなかった。15区は隣接する17区より0.6m低く、遺構はないか、削平されたものと思われる。

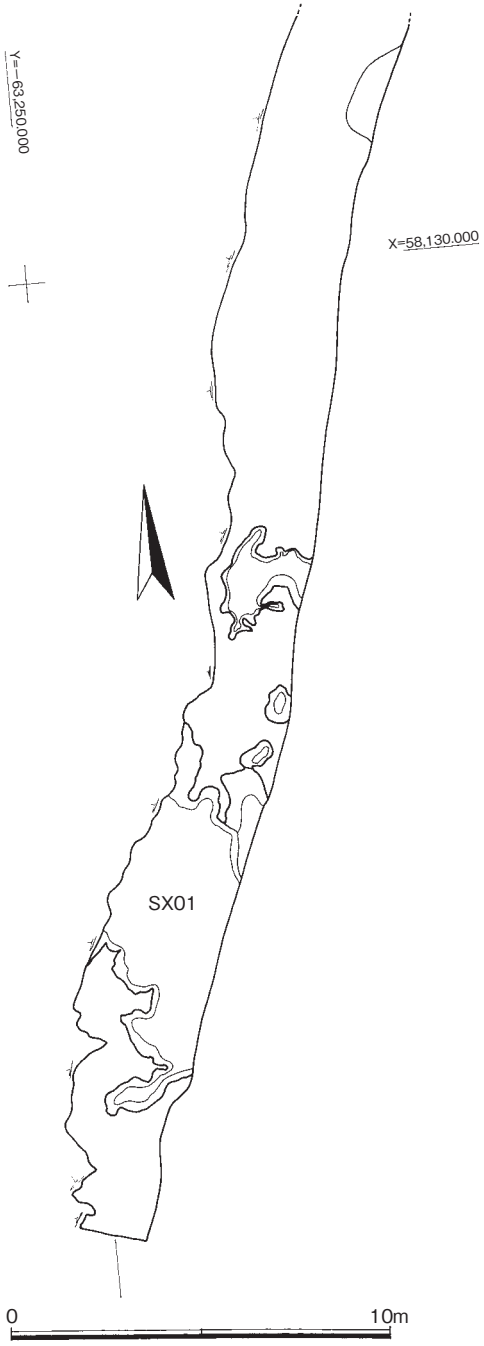


Fig.152　15区全体図（1/200）

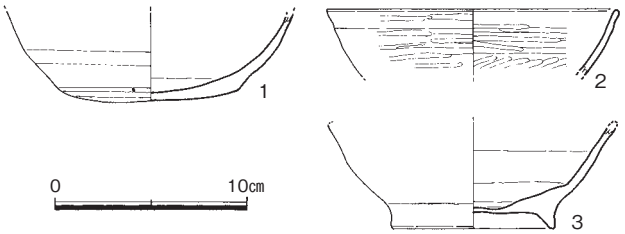


Fig.153　15区SX01出土遺物実測図（1/4）

15区全景（南より）

Ⅲ　乙石遺跡第２次調査の記録

Ⅰ　はじめに

１．調査経過

平成16年度の事業地は乙石遺跡を主とする約６haの範囲である。（Fig.3）ほぼ全域が水田で、一部に畑地や道路、水路などがあった。

発掘調査は遺跡が確認された範囲で道路や用排水路などの構造物が建設される範囲、遺構面に及ぶ田面の削平や大規模な盛り土により遺跡保存に影響を与える範囲に限定した。調査面積は24241.6㎡である。

調査進行にあたって、期間中は地権者を含む土地改良区、福岡市農業水産局、教育委員会の三者による月１回の定例会議を開催し、事業遂行過程で生じた問題に対応することとした。

調査は西端の１区から表土剥ぎを開始し、夫婦塚１号墳、２号墳（金武古墳群H群）の周溝と考えられる溝を検出した。夫婦塚古墳は市内有数の巨石円墳である。１号墳は昭和53年に石室の調査が行われ、２号分は現在も石室、墳丘の保存が良く市指定史跡となっている。今回の調査で検出した周溝は古墳を方形に巡り、２基の古墳が全国的に見ても大型の方墳であることが分かった。この調査については、重要性と古墳の様相を明らかにする目的から本体調査から切り離し、別途重要遺跡確認調査として調査を進める事となった。

その後の調査は、酷暑や度重なる台風の襲来があったものの10月4日に終了した。

２．立地と過去の調査

室見川左岸の丘陵地帯は、西山から飯盛山、叶岳に連なる山塊の東麓に形成された複合扇状地である。乙石遺跡はその中でも日向峠に発する日向川、塔ノ尾川水系の扇状地の南端に位置し、中期更新世に形成された古扇状地上に立地する。

遺跡の周辺には西側の山麓に150基からなる金武古墳群が分布し、扇状地の先には都地遺跡、都地南遺跡、都地泉水遺跡が、さらに北東には吉武遺跡が広がる。

乙石遺跡は平成６年改訂の文化財分布地図ではA、B、Cの３遺跡に分けて登録されていたが、今回の調査に伴う試掘調査の結果、連続しさらに広がることを確認した。このため乙石遺跡として統合し登録している。1979年（昭和54年）には乙石A遺跡として1次調査が行われている。調査地点は今回の11区南の現在の道路部分にあたり、２棟の掘立柱建物が検出され、６、８世紀の須恵器坏、白磁皿が出土している。今回はこれに続く２次調査となる。

今回の事業地は日向峠に向かう県道の南側に広がる６haで、西から東へと傾斜し標高71mから61mを測る。南側は比高差15mの段丘涯を成している。事業地内は浅い谷状地形が2本入り、それを挟んで３つの緩やかな丘陵が走る（Fig.231）。西側は市指定史跡である夫婦塚（金武古墳群H群）２号墳に接し、夫婦塚1号墳が調査された金武古墳群３次調査地点が範囲内である。また、南側の丘陵、特に今回調査の20地点は旧石器時代、縄文時代の遺物散布地として知られ石器が採集されていた。さらに県道沿いの北側の丘陵には畦に大形の礫が露出し、古墳の存在も予想された。

試掘調査では113本のトレンチを設定し、遺構の分布は全体に薄いもののそのほとんどで遺物が確認された。特に南側の谷筋で土器、鉄滓が出土し、製鉄遺跡の存在が予想された。

乙石１次調査：1981『都地南遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告第74集

夫婦塚古墳：1980『夫婦塚古墳』四箇周辺遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告第51集

Fig.154　調査区位置図（1/2000）

Ⅱ　調査の記録

１．調査の概要

調査は重機による表土剥ぎから行った。表土剥ぎにおいては耕作土とそれ以下の土の分離を行っている。遺構面は茶褐色粘質土でこの下層となる礫が露出する部分がある。水田造成土を除去した面が遺構面となる部分が多いが、谷部にあたる18-6区等では若干の遺物包含層が形成されていた。調査区は便宜的に20区を設定し（Fig.154）、区毎に遺構番号を付した。そのうち、１、２区は前述の夫婦塚古墳を重要遺跡確認調査として調査したため欠番となる。また6、8区は7区に、15区は11区に含めた。

検出した遺構遺物は古代を中心とする。旧石器時代は南側の丘陵で採集が行われており、調査ではナイフ型石器、台形石器等が出土した。縄文時代では石鏃、石匙と曽畑式土器、粗製土器が若干出土している。また、18-1、19区等で落とし穴状遺構を検出し、覆土等からこの時期のものの可能性がある。弥生時代では土器は確認していなが、玄武岩製の石斧がこの時期のものと考えられる。弥生時代までの遺物は遺構に伴わず、各区に散布するため巻末にまとめて報告する。古墳時代は予想された後期古墳は確認されず、６世紀代の須恵器が各地点で散見される程度である。検出した主な遺構遺物は７世紀の終わりからで８世紀を主体とし、９世紀はじめに至る。検出した遺構は溝、焼土坑、製鉄関連遺構、掘立柱建物である。溝は４区から７区にかけての北側の丘陵３を小規模な３条の溝が、18区の谷部１をやや大規模な溝が流れる。製鉄関連遺構はその溝、谷の周辺の４、５、７、18区で確認した。掘立柱建物は18-2区から14区、11区へ連なる丘陵２上で多く検出し、特に14区に集中する。溝以外は遺物が少なく時期を決めがたいが、８世紀を中心とすると考えられる。

以下の報告にあたっては、特に記載していない遺構からは遺物は出土していない。また出土した遺物は遺構覆土中からである。製鉄関連遺構から出土した鉄滓については大まかな量を記すに止め、来年度に自然科学的分析を含めた報告を行う予定である。

２．３区

事業地の北西で県道に沿う水路計画に伴って調査を行った。（Fig.155）東西に長い調査区で、面積1100㎡を測る。焼土坑３基、掘建柱建物１棟、多数のピットを検出した。調査前に畦の角に巨石が見られることから古墳の存在が予想されたが掘削の結果確認できなかった。

（1）焼土坑

SK001（Fig.155）丸みを帯びた長方形を呈し北側がすぼまる。平面110×65cm、深さ18cmを測る。側壁が被熱赤変し、床面には4cmほど炭粒が堆積する。

SK002（Fig.155）残りが悪く歪な楕円形を呈す。長さ174cm、幅114cm、深さ15cmを測り、側面および床の一部が被熱赤変する。床には１から２cmの厚さで炭粒が堆積する。

SK003（Fig.155）平面楕円形を呈し、２つのピットに切られる。長さ128cm、幅76cm、深さ10cmを測り、側面および床の一部が被熱赤変し、側壁の赤変部内側は還元により黄緑色を呈す。床面に厚さ１cmほどの炭粒が溜まる。

SK004（Fig.155）平面長方形を呈し、長さ118×幅94cm、深さ32cmを測る。側壁が被熱赤変し、その内側の大部分が還元し黄緑色を呈す。床に炭粒が薄く溜まる。覆土中より土師器の甕片が出土した。外面に縦方向の刷毛目調整を施し、内面は横方向の削りである。胎土に砂粒を多く含む。

（2）掘建柱建物

多くのピットを検出したが、小さなものが殆んどでまとまらない。遺物が出土したものはなく人工

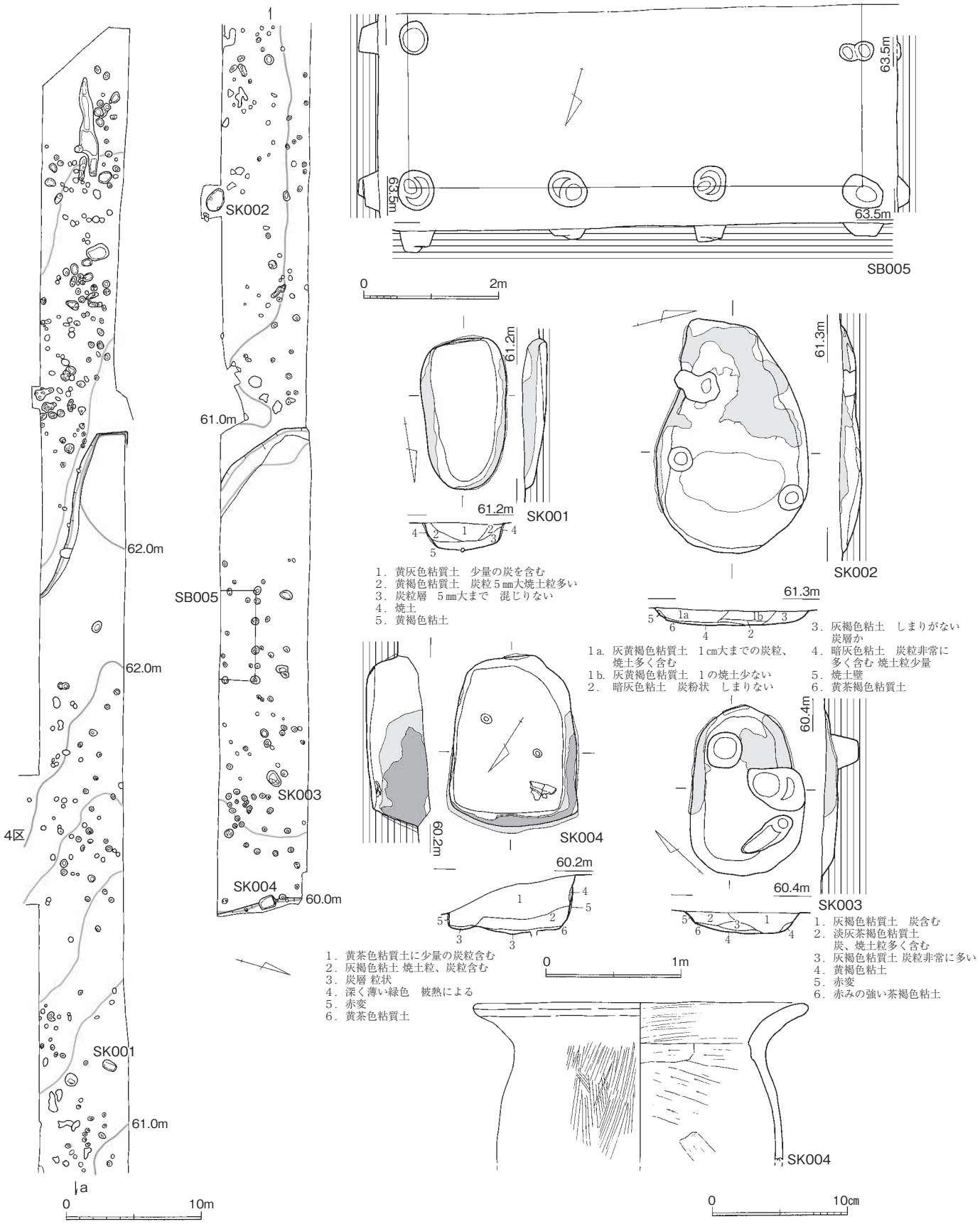


Fig.155　３区全体図、掘立柱建物、焼土坑、SK004出土遺物実測図（1/400、80、40、1/4）

的でないものが多いと考えられる。その中でやや大きめのものが並ぶ箇所に建物を想定した。

SB005（Fig.155） 調査区南側に位置する。桁行３間、梁行１間＋αで調査区外に広がり、２×３間を想定している。方位はN-74°-Eで、桁行き6.8mを測る。ピットの平面は円形を呈し径は50から60cmである。南西のピットが一つ小さい。遺物は出土していない。

３．４区

事業地の南西に位置する。田面の切り下げに伴い1700㎡を調査した。溝、焼土坑、製鉄関連遺構、土坑、掘建柱建物、ピットを検出した（Fig.156）。

（1）溝

SD002（Fig.156、157） 調査区南側で傾斜に沿って走る。幅は広いところで４ｍを測る。深さ５から10cmほどでほぼ床のみが残存する。覆土は粗砂で遺物は比較的多く、コンテナケース１箱分が出土した。8世紀後半代と考えられる。

出土遺物１から33がSD002出土である。１から24は須恵器である。１から８は高台付きの坏で２が1/6からの他は1/4以上からの復元である。３は茶色を呈し、３から７は高台内に削りかなでを施す。9から13は蓋で9、10に低いつまみが付き焼きが甘い。14は坏、15から17は蓋の小片を示した。18は長頸壺、19は壺の底部か。20は提瓶　21は甕で外面に自然釉がかかる。口縁部は回転なで、胴部外面は平行叩き、内面同心円状当て具痕が残る。22は甕の口縁部で口唇部に円形の粘土を貼付する。頸部には５条の横線とその下に斜線を施す。23は甕の口縁で口縁部は帯状に成形する。24は高坏の脚部で上部に１条の沈線を施す。25から33は土師器である。25から30は甕で28内面に刷毛目が見られる他は内面削りで器面は荒れる。31、32は取手。33は底に回転へら削りが残る。他に羽口の小片、3200ｇの鉄滓、炉壁が出土している。

（2）焼土坑

SK001（Fig.159）調査区北西で検出した。隅丸長方形を呈し、長さ210cm、幅112cm、深さ35cmを測る。壁が被熱赤変する。

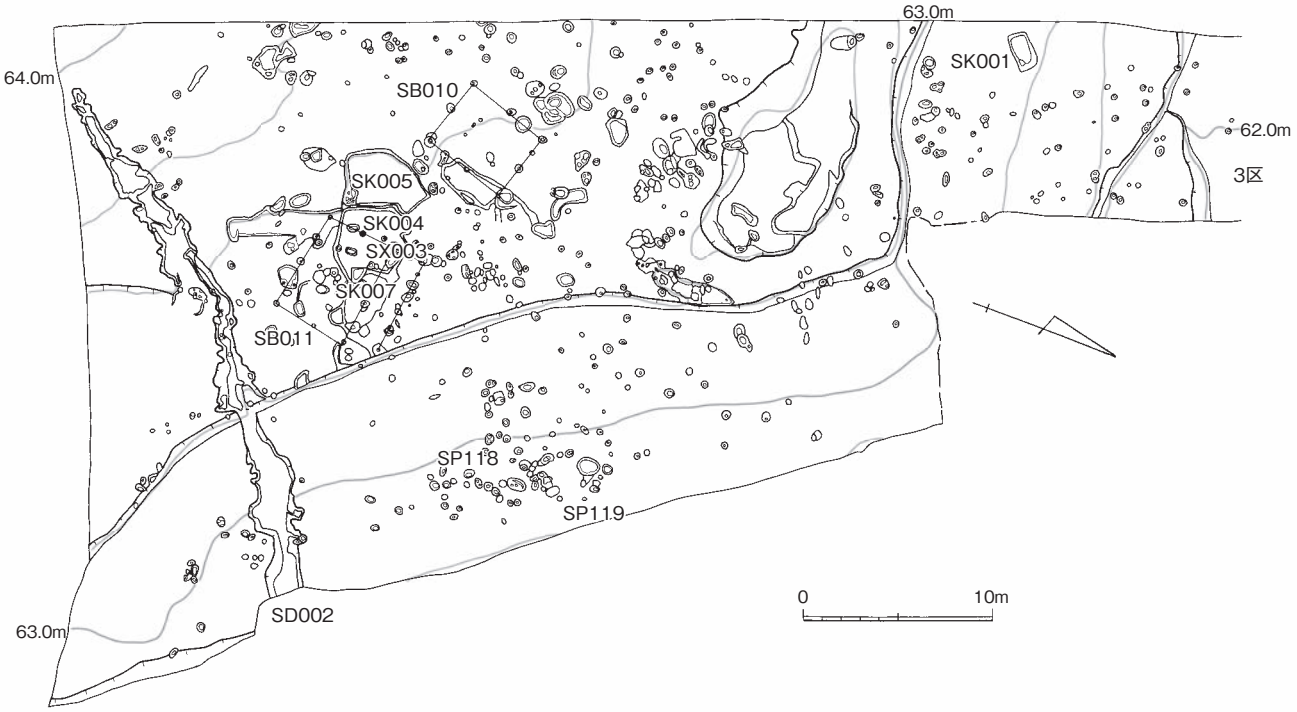


Fig.156　４区全体実測図（1/400）

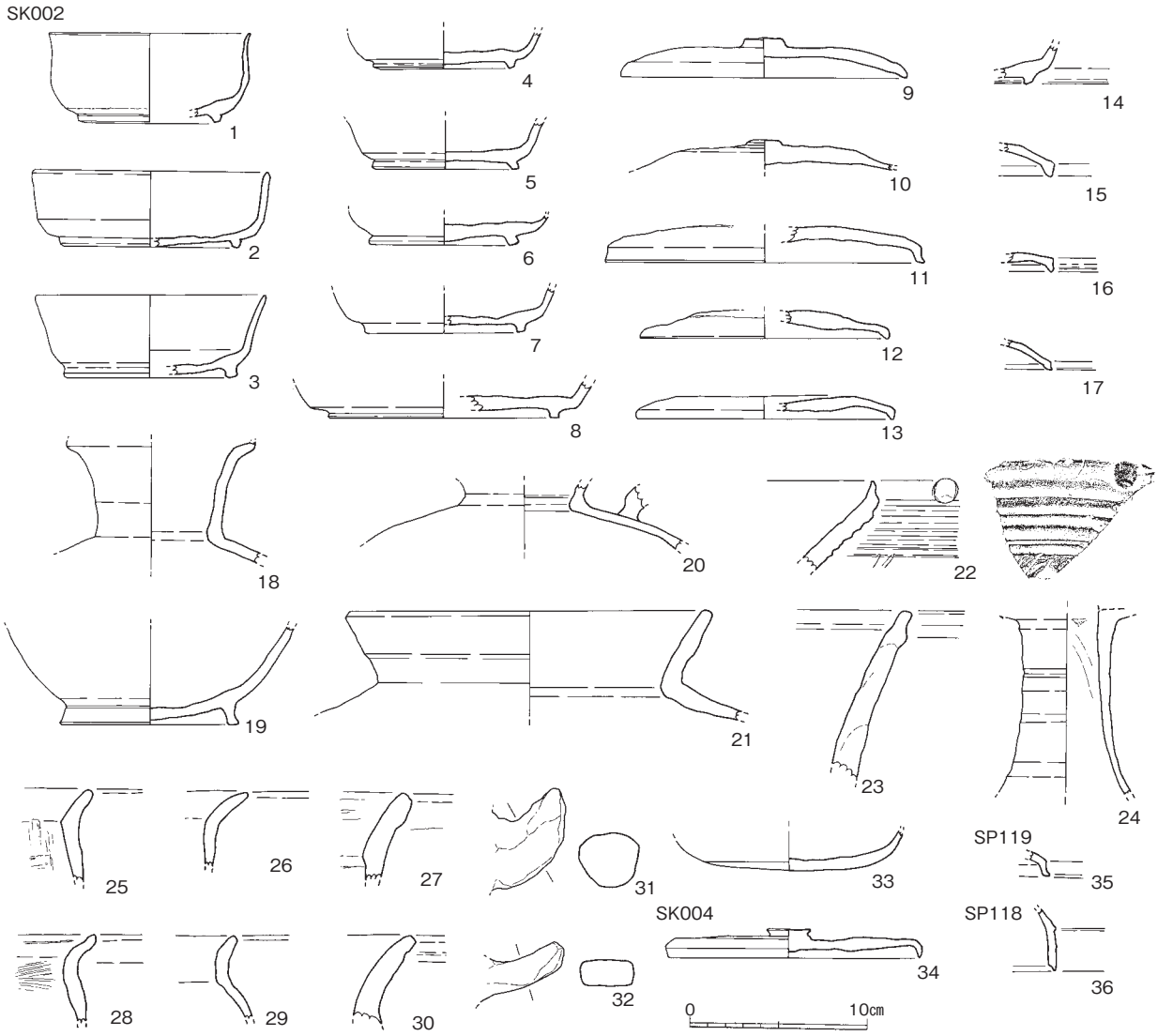


Fig.157　４区出土遺物実測図（1/4）

（3）掘建柱建物

SB011（Fig.158）SK003を囲むものを想定した。梁行２間、桁行４間ほどを考えたが、柱筋、柱間隔等ずれが大きく建物にならない可能性の方が大きい。参考程度に留めておきたい。

SB010（Fig.158）南北にやや長い２間×２間の建物である。桁行4.6m、梁行3.95mを測り、ピットの径は18cmから60cmとばらつきがある。

（4）製鉄関連遺構

SK003（Fig.159、巻頭図版）調査区南側中央で検出した２基の遺構からなる。SK004を切る。南側には径24cm、深さ6cmほどのすり鉢状のくぼみに焼土混じりの土が溜まる。床全面の厚さ約3cmほどが被熱で黒褐色を呈し、その外側２cmほどが赤変する。30cm弱北には平面長楕円形で72cm×40cm、深さ7cmほどの土坑に茶褐色土が溜まり、鍛冶滓715ｇが出土した。鍛冶炉と廃滓坑と考えられる。この遺構を覆う建物SB011を想定したが柱筋、柱痕の形状等そろわず、参考程度に留めたい。

（5）土坑（Fig.158､157）

浅い不正形の土坑SK004、005、007を検出した。４m大ほどの不整方形を呈し、深さ６から10cmを測る。SK007が004を、SK004が005を切る。単なるくぼみとも考えられるが、平面プランと立ち上が

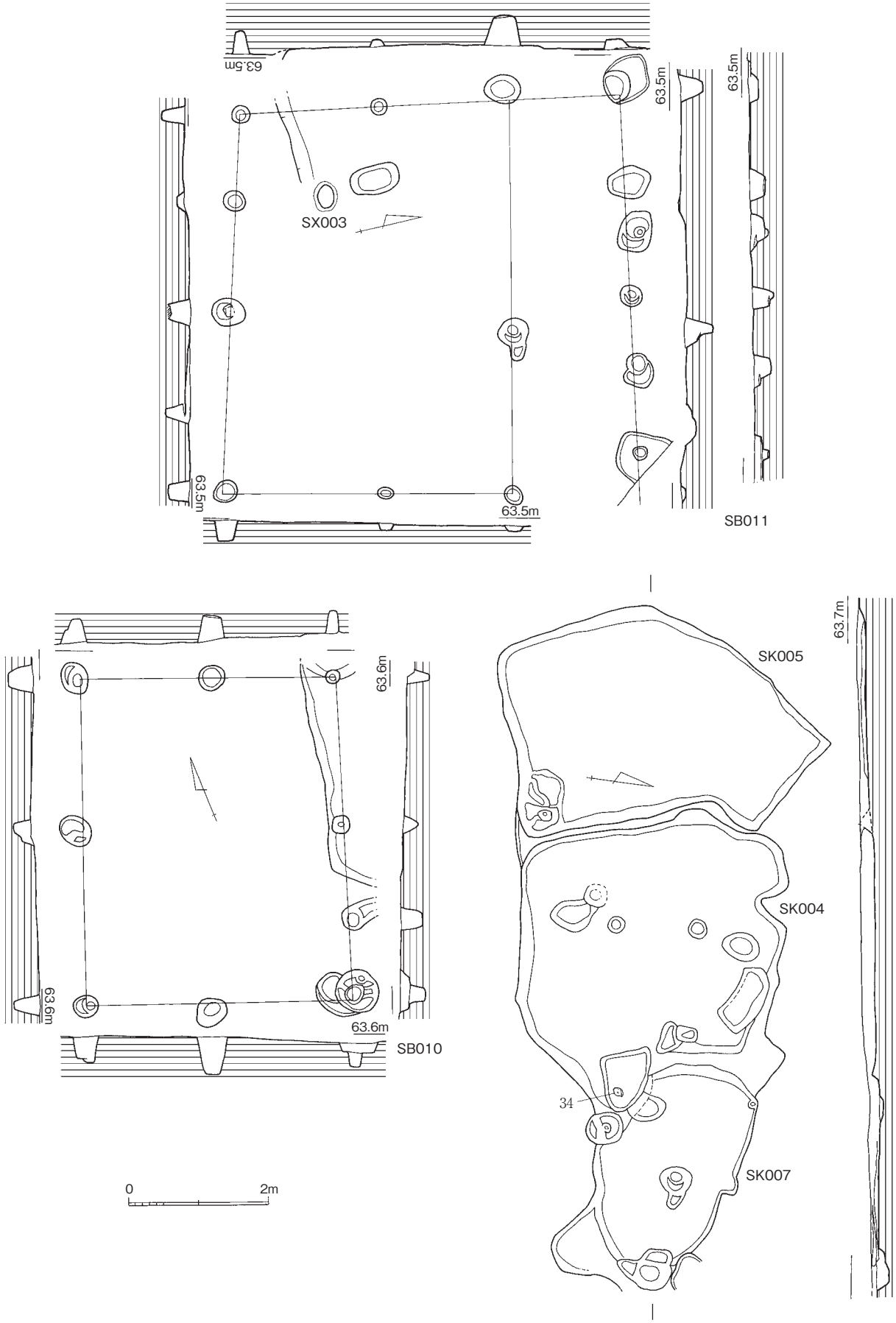


Fig.158　４区掘立柱建物、土坑実測図（1/80）

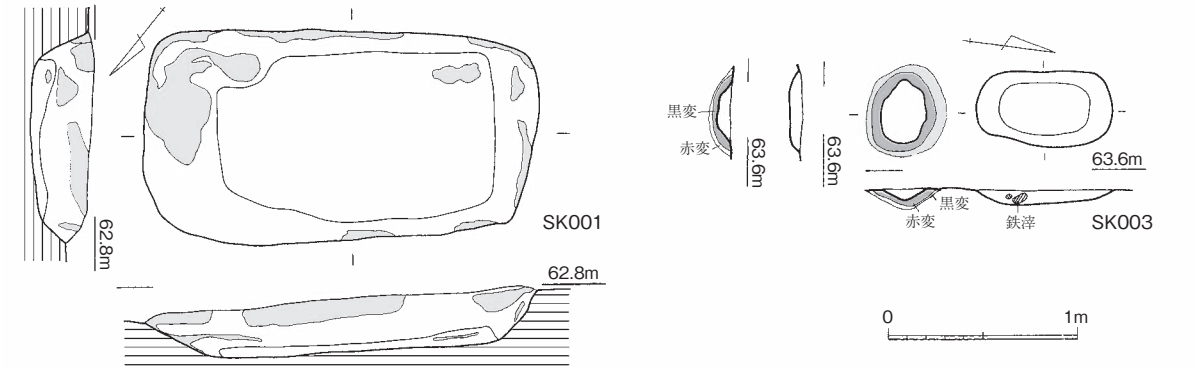


Fig.159　４区焼土坑、製鉄関連遺構実測図（1/40）

りを確認したためここで取り上げた。遺物はSK004より須恵器の蓋34、鉄滓25ｇが出土した。34は天井部を回転なで調整で仕上げる。SK005より須恵器の坏、蓋の小片が出土した。

（6）ピット

多くのピットを検出したがまとまらない。径20㎝強の小形のものが多い。調査区中央東側のピットには、覆土、壁面が焼け、焼土塊を出土するものがある。何らかの遺構があった可能性があるが確認できなかった。南西隅には径60㎝ほどで深いものがあるがまとまらない。28基から遺物が出土したがほとんどが土師器、須恵器の小片で建物に伴うものはない。２点を図化した（Fig.157）。35は須恵器の蓋の小片である。36も須恵器の蓋で６世紀後半と調査区内では古手である。他に6基から鉄滓の小片が出土した。

（7）小結

SD002、SX003が特筆される。SD002は8世紀前半から中頃の遺物が出土し、その時期と考えられる。SX003はSK004で出土した須恵器の蓋34より新しいが、近い時期と考えている。ピット出土遺物もこれより明らかに新しい物は見あたらない。

４．５区

4区の東側に位置し、田面の切り下げに伴い2600㎡を調査し、溝5条、焼土坑、土坑、製鉄関連遺構、ピットを確認した（Fig.160）。全体に緩やかな丘陵上にあり、南東側が浅い谷状となる。

（１）溝

SD002（Fig.160、161、162）調査区中央を東に走り、西側は削平で失う。4区のSD001の続きと考えられる。幅は最大で3.4m、深さ25㎝を測り、断面は深いレンズ状を呈す。覆土上部は砂質土、下部は粗砂で、遺物はビニール袋小1袋と少ない。

出土遺物　37、38は須恵器の坏身で破片からの復元である。他に須恵器、土師器の小片が出土した。

SD003（Fig.160、161、162）SD002の北13mを蛇行する。幅は最大で2.6m、深さ50㎝を測り断面逆台形状を呈す。覆土は上部が暗褐色の粘質土、下部は灰茶色の砂質土である。床は礫が露出する。位置、形状、覆土等から4区のSD002の続きと考えられる。

出土遺物　39から48は須恵器である。39から43は坏で、40は下層からの出土である。44から48は蓋で口縁形態各種を示した。45は外面回転なで調整で仕上げる。49は土師器の甕、50は取手である。他に鉄滓6780ｇが出土している。

SD004（Fig.160、161、162）調査区北辺を走る。幅は最大で4.1m、深さ50㎝を測り、断面は広い逆台

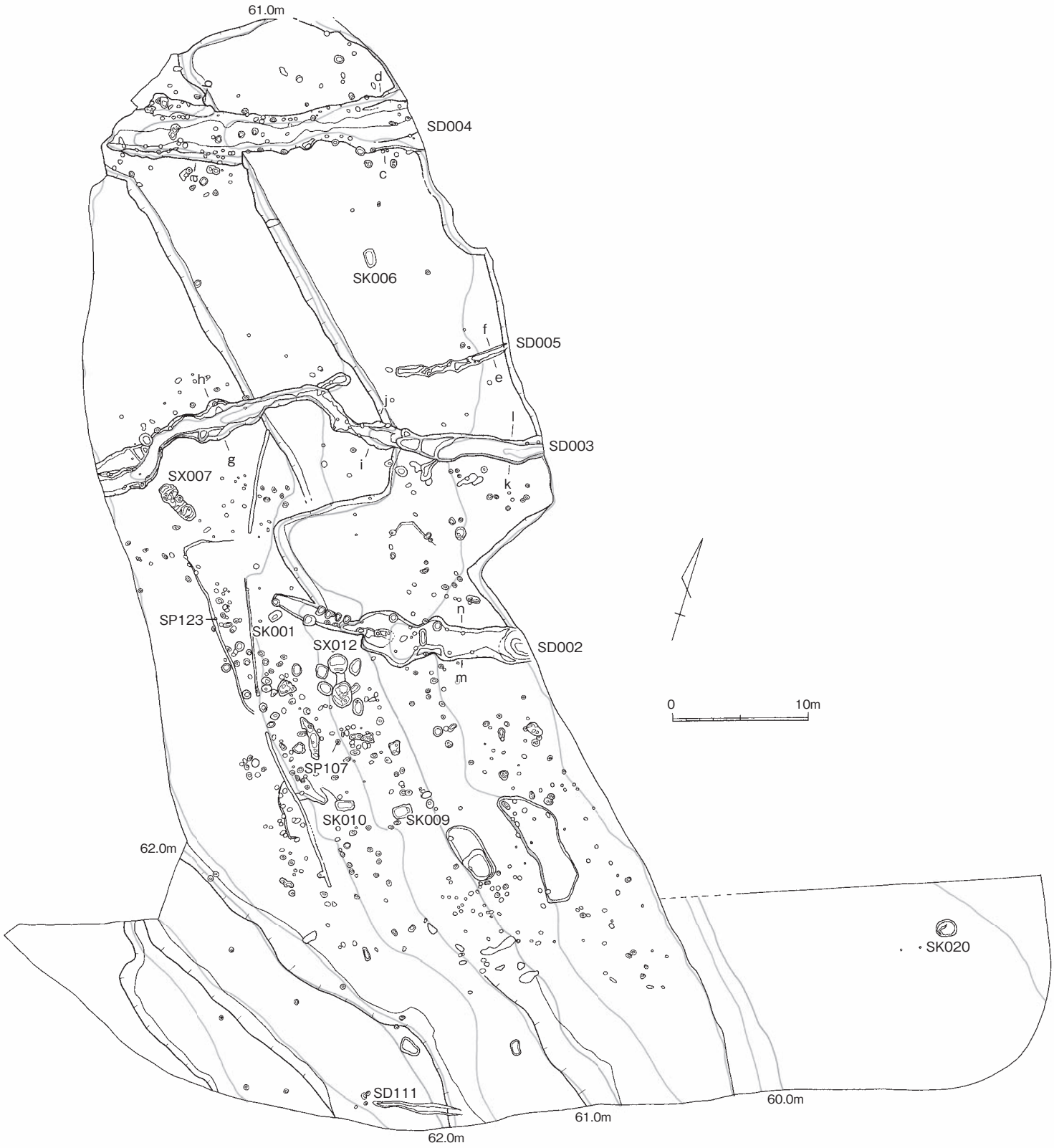


Fig.160　５区全体図（1/400）

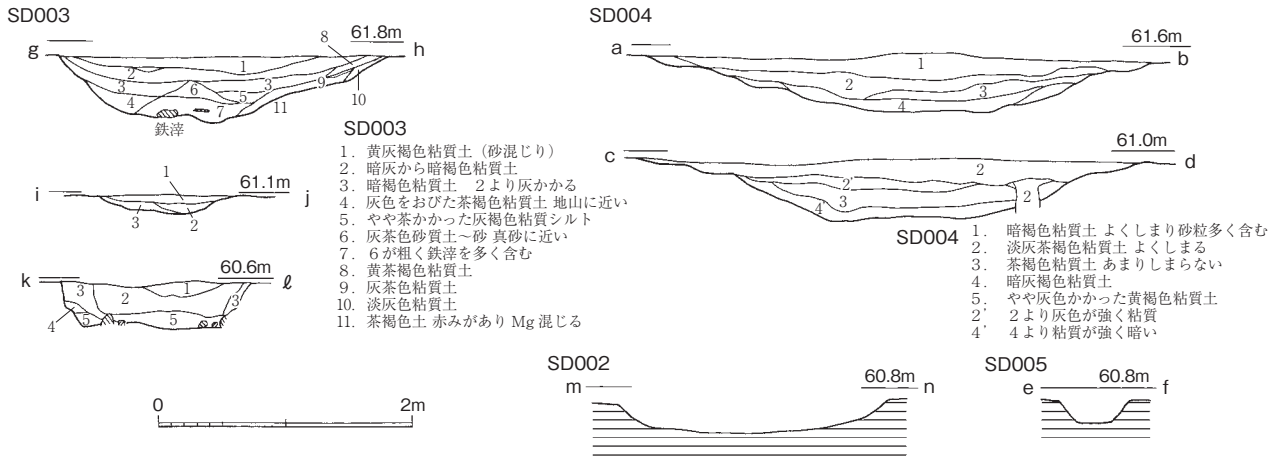


Fig.161　５区溝土層、断面実測図（1/60）

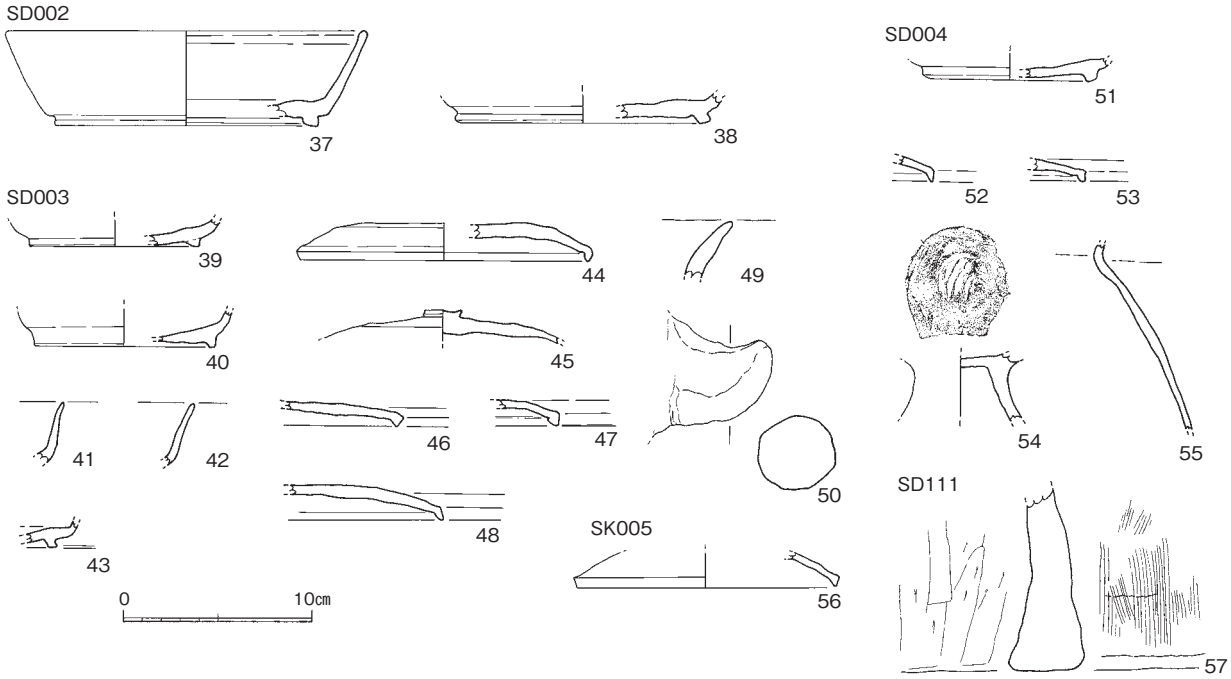


Fig.162　５区出土遺物実測図（1/4）

形状を呈す。覆土は暗褐色粘質土で他より粘質が強い。床面に小ピットが多い。遺物は少ない。

出土遺物　51から54は須恵器である。51は坏で小片からの復元。52、53は蓋。54は高坏で坏部内面底に当て具痕が残る。55は土師器の甕で最下層からの出土である。

SD005（Fig.160、161、162）SD003に切られ、途切れながら北東に走る。幅55cm、深さ20cmを測り、断面逆台形を呈す。覆土は粗砂で床面には鉄分が沈着する。遺物は少ない。

出土遺物　56は須恵器の蓋で小片からの復元。灰褐色を呈し砂粒を多く含む。

SD111（Fig.160、162）調査区の南端に延長7mを検出した。幅60cm、深さ25cmを測り、断面逆台形を呈す。覆土は粗さ混じりの灰褐色砂質土である。竈と鉄滓１点である。

出土遺物　57は土師器で移動式竈の脚部分である。外面は刷毛目、内面は削り調整を施す。4mm大までの砂粒を多く含む。

（2）焼土坑

SK001（Fig.163）丸みを帯びた長方形を呈し、中央にピットがある。平面94×52cm、深さ30cmを測る。

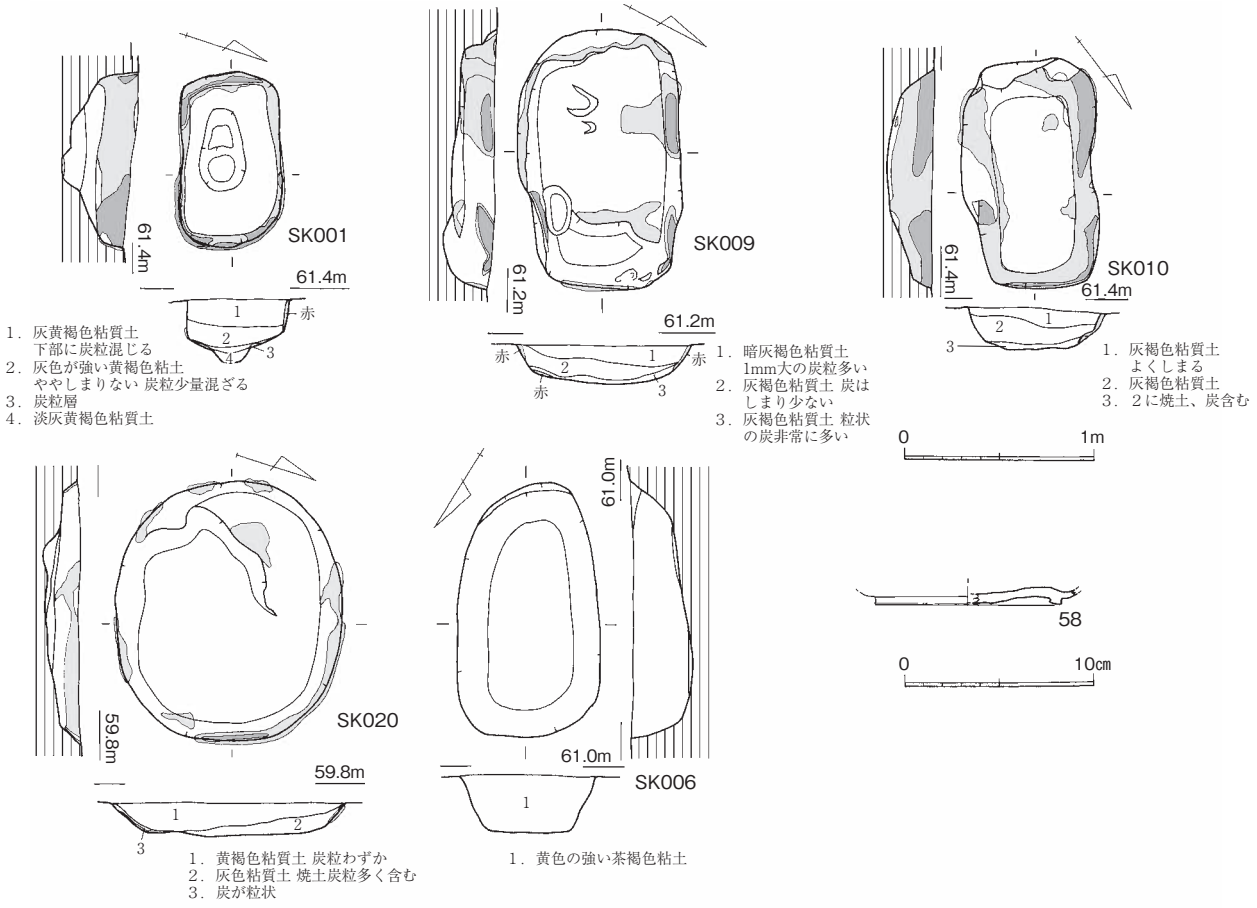


Fig.163　５区焼土坑実測図（1/40）

側壁が被熱赤変し、その内側の一部は黄緑色を呈す。床面には3cmほど炭粒が堆積する。

SK009（Fig.163）隅丸長方形を呈す。長さ136cm、幅87cm、深さ23cmを測り、側面および床の一部が被熱赤変し、その内側の一部は黄緑色を呈す。床上の粘質土に炭粒を非常に多く含む。

SK010（Fig.163）長方形を呈し、長さ120cm、幅70cm、深さ25cmを測る。側面および床の一部が被熱赤変し、その内側の一部は黄緑色を呈す。床の粘質土に焼土粒、炭粒を多く含む。遺物は須恵器の坏の底部58が出土した。高台内はなで仕上げで他個体の一部が付着する。

SK020（Fig.163）長円形を呈し、長さ140×幅120cm、深さ18cmを測る。側壁が被熱赤変し、一部黄緑化する。

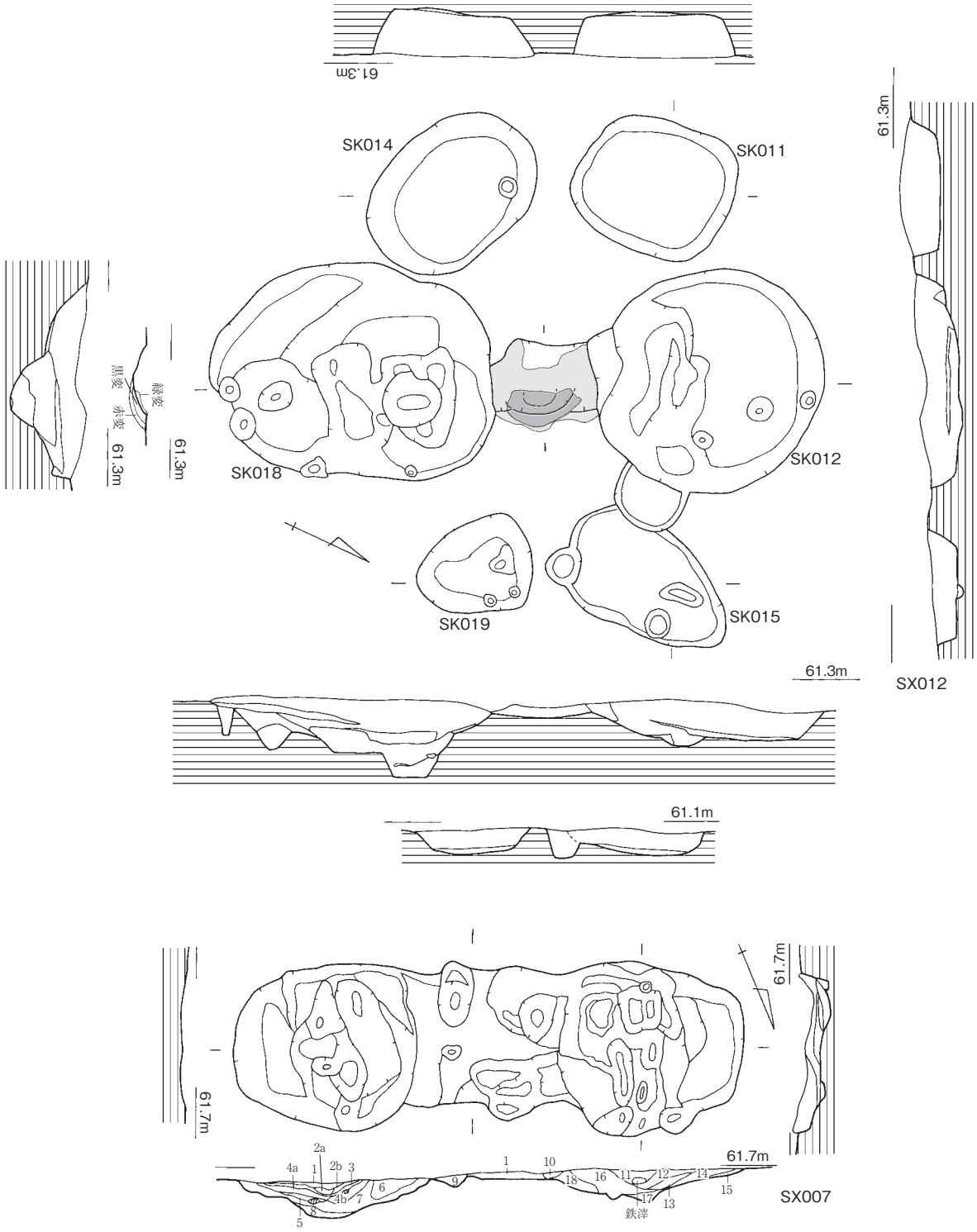
（3）土坑

SK006（Fig.163）長楕円形を呈し、長さ123cm、幅75cm、深さ30cmを測る。覆土は黄茶色粘質土で均一である。

（4）製鉄関連遺構

SX007（Fig.164、巻頭図版）炉の両側に廃滓土坑を持つ製鉄炉で全長326cmを測る。炉の方向は等高線に併行である。炉は深さ5cmの堀方が残るのみで長さ90cm、幅94cmを測る。両側の廃滓坑は径120cm、深さ20ほどの不整円形を呈す。廃滓坑の覆土は暗褐色粘土で焼土、炭粒、鉄滓を多く含み、東側では焼土層と互層となる。床面は凹凸が多い。コンテナケース5箱分の鉄滓、炉壁が出土している。

SX012（Fig.164、巻頭図版）炉の両側に廃滓土坑を持つ製鉄炉で全長395cmを測る。炉の方向は等高線に併行である。送風関連施設と考えられる土坑を東西に２基ずつ配す。炉は長さ70cm、幅45cmを測る。幅60cmほどが赤変し、中央の径45cmのくぼんだ部分の底が還元し黄緑色を呈す。西半は破損



1. 淡黄色粘土
2a. 焼土
2b. 淡黄色粘土
3. 混じりのない焼土
4a. やや粘質の灰色土に少量の炭粒と多くの焼土入る
4b. 焼土が少ない
5. 焼土層混じりなく上部は黄色
6. 灰色土に焼土、炭の小粒少量入る 粗砂多く含む
7. 暗褐色土に焼土、炭、鉄滓粒、多く含む　炭非常に多い 砂は6よりかなり少ない
8. 灰褐色土に焼土を多く含む 焼土主体
9. 灰褐色土に炭粒多くいる
10. 灰褐色土に黄色の鉄滓入る
11. 鉄滓 黄褐色を呈す
12. 灰褐色粘質土に焼土粒、炭の小粒少量入る
13. 黄褐色鉄滓
14. 灰褐色土に炭、焼土粒が多くいる
15. 12に近い
16. 灰褐色粘質土に焼土、粒状鉄滓、炭多く入る 特に炭は非常に多い
17. 暗灰色粘質土混じり少ない
18. 暗灰褐色砂質土 焼土、鉄滓粒少量入る 砂粒多い
19. 灰褐色砂質土 粗砂多く含み焼土粒含む

Fig.164　５区製鉄関連遺構測図（1/40）

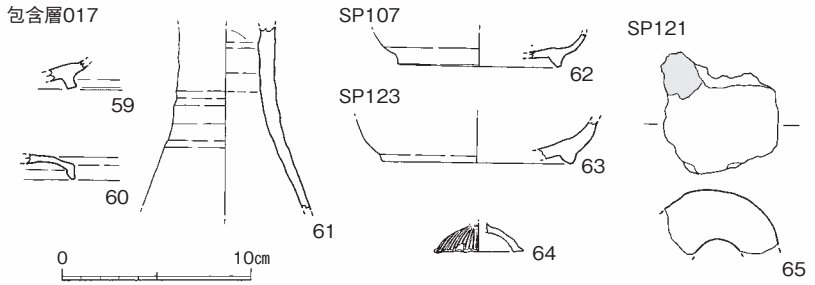


Fig.165　５区出土遺物実測図（1/4）

する。廃滓坑のうち北側のSK012は径140cmを測り、覆土は茶褐色土に焼土粒、炭粒を多く含み、床には焼土混じり土が溜まる。鉄滓類1箱が出土した。南側のSK018は長さ180cm、幅85cmの楕円形を呈し、床面は凹凸が著しい。覆土は北と同様だが、焼土と炭層が互層を成す。検出時はSK018からSK019に炉壁、鉄滓類が広がっていた。鉄滓類は上部を覆っていた物を含めて3箱が出土した。送風関連土坑は黄褐色粘質土を覆土とし、SK011が100×85cmを測り鉄滓類1袋、SK014が118×85cmを測り鉄滓類1箱が出土した。東側のSK015は110×70cmを測り鉄滓類850ｇが出土し、SK019は66×56cmを測る。

（5）ピット、包含層

製鉄炉SX012を中心に多くのピットを検出したが建物は復元できなかった。径20cmほどの小形のものが多い。土器類が出土したものは８基と少なく、15基から鉄滓または炉壁が少量出土した（Fig.165）。

出土遺物　62は土師器の碗の底部で黄茶色を呈す。63は須恵器の坏の底部、64は白磁の合子の蓋である。65は鞴の羽口で断面径6.5cm、内径2.5cmほどと考えられ、表面の一部がガラス化している。

段落ちの際を中心にわずかながら灰褐色砂質シルトの遺物包含層017を掘削した。遺物は須恵器、土師器、粘土塊などで大半が小片で１袋ほどの量である。59から61は須恵器で、59は坏の高台部、60は蓋、61は高坏の脚部である

（6）小結

時期を決定できる遺物量があるのはSD003くらいで、8世紀後半と考えられる。4区のSD002の続きとして間違いなかろう。他の溝は遺物が少ないが、SD003と大差ない時期と考えられ、矛盾した遺物も出土していない。このことは、小土坑、製鉄関連遺構についても同様である。製鉄炉SX018は炉自体は残存していないが、還元した部分から小型の物が想定される。

５．７区

北側の道路に沿った水路建設と田面切り下げに伴い2740㎡を調査した。調査時の呼称6、7、8区をまとめ7-1、7-2、７-3、7-4区とした。7-3区中央は東側に開く浅い谷となり、北側の尾根上にピット等遺構が多い。検出した遺構は溝、焼土坑、土坑、製鉄炉、ピットである（Fig.166）。

（1）溝

SD002、008（Fig.166、167、168）途中調査区外となるが同一の溝である。幅60cm、深さ15cmを測り直線的に走る。灰褐色の砂質土を覆土とし、底はやや粘質である。北東端は削平により失われる。5区のSD003の続きと考えられる。

出土遺物　66から69は須恵器である。66、67は坏で66は床面からの出土である。68、69は蓋で天井部に回転削りを施す。70は土師器の碗で胎土が粗い。外面口縁部はなで、胴部には刷毛目を施し、内面

Fig.166　７区全体図（1/400）

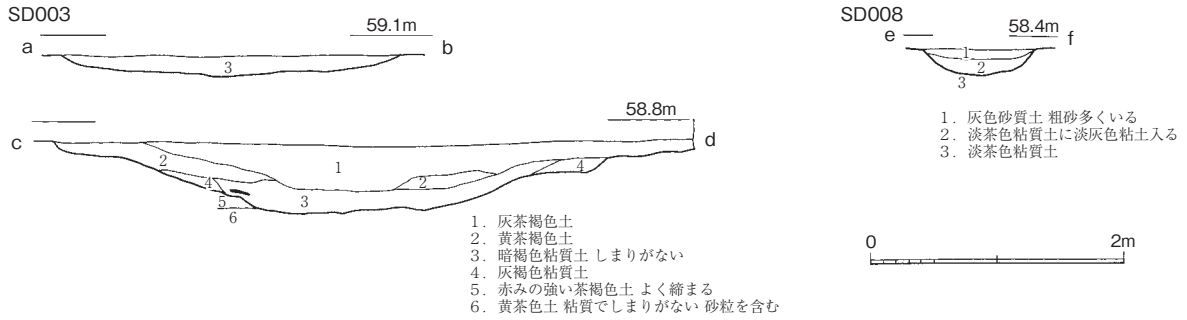


Fig.167　７区溝土層、断面実測図（1/60）

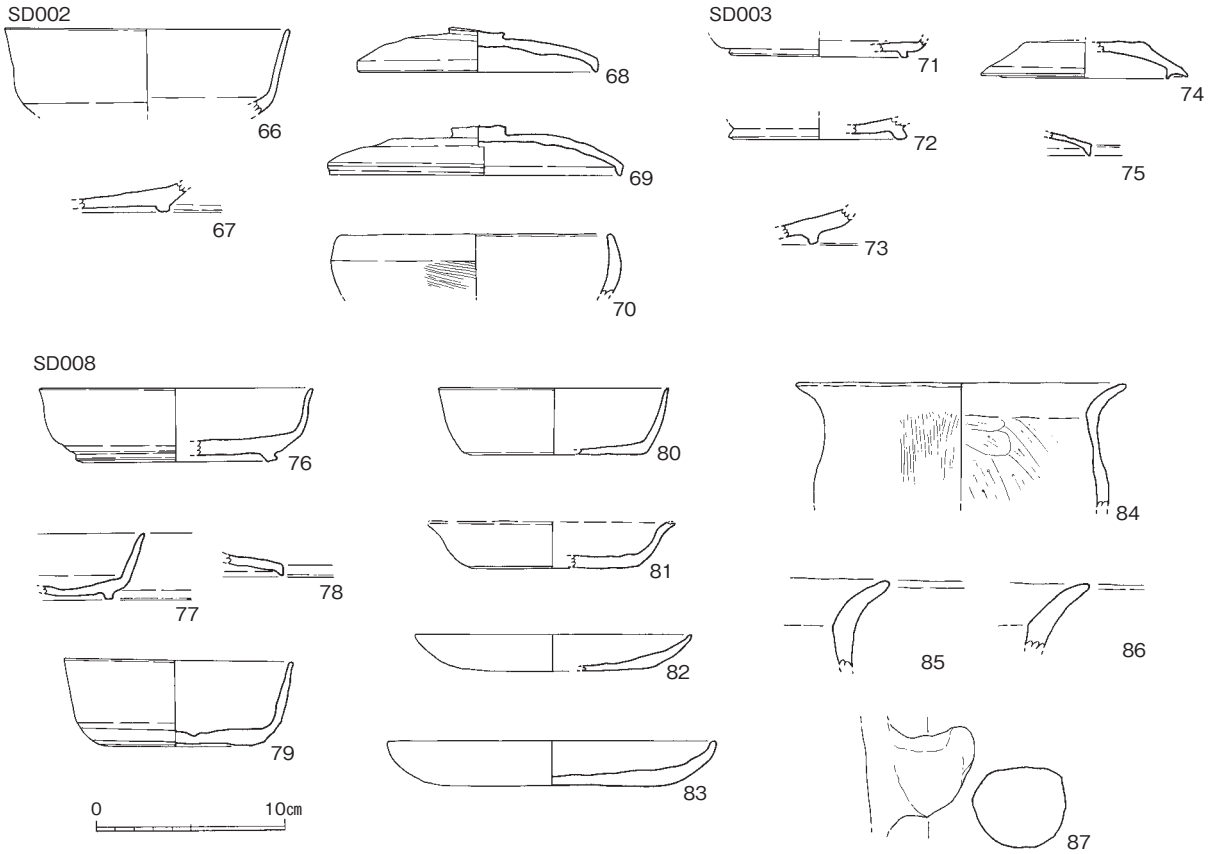


Fig.168　７区溝出土遺物実測図（1/4）

はなで調整である。76から87はSD008部分の出土で79までは須恵器である。76、77、79は坏身で76は高台内なで仕上げである。79はやや焼きが甘く灰茶色を呈す。78は蓋小片である。80、81は坏で焼きが悪い須恵器か。82、83は土師器の皿である。84から86は土師器の甕で内面削り調整、84の外面に刷毛目を施す。87は土師器の取手で砂粒を多く含む。他に鉄滓が1129ｇが出土している。

SD003（Fig.166､167､168）SD002の北側を流れる。幅３ｍ、深さ40㎝を測り断面は緩やかな逆台形を呈す。覆土は暗褐色の粘質土で遺物は土師器、須恵器片2袋と鉄滓94ｇと少ない。底、壁には小ピットが見られる。5区のSD004の続きと考えられる。

SD012（Fig.166）谷の落ち際で延長12ｍ程を検出した。幅３ｍ、深さ20㎝を測る。覆土は灰褐色砂質土で底は粗砂となる。炉壁が１点出土している。

（2）焼土坑

SK007（Fig.169）隅丸長方形を呈し114㎝×84㎝、深さ36㎝を測る。側壁が被熱赤変し、床面に厚さ

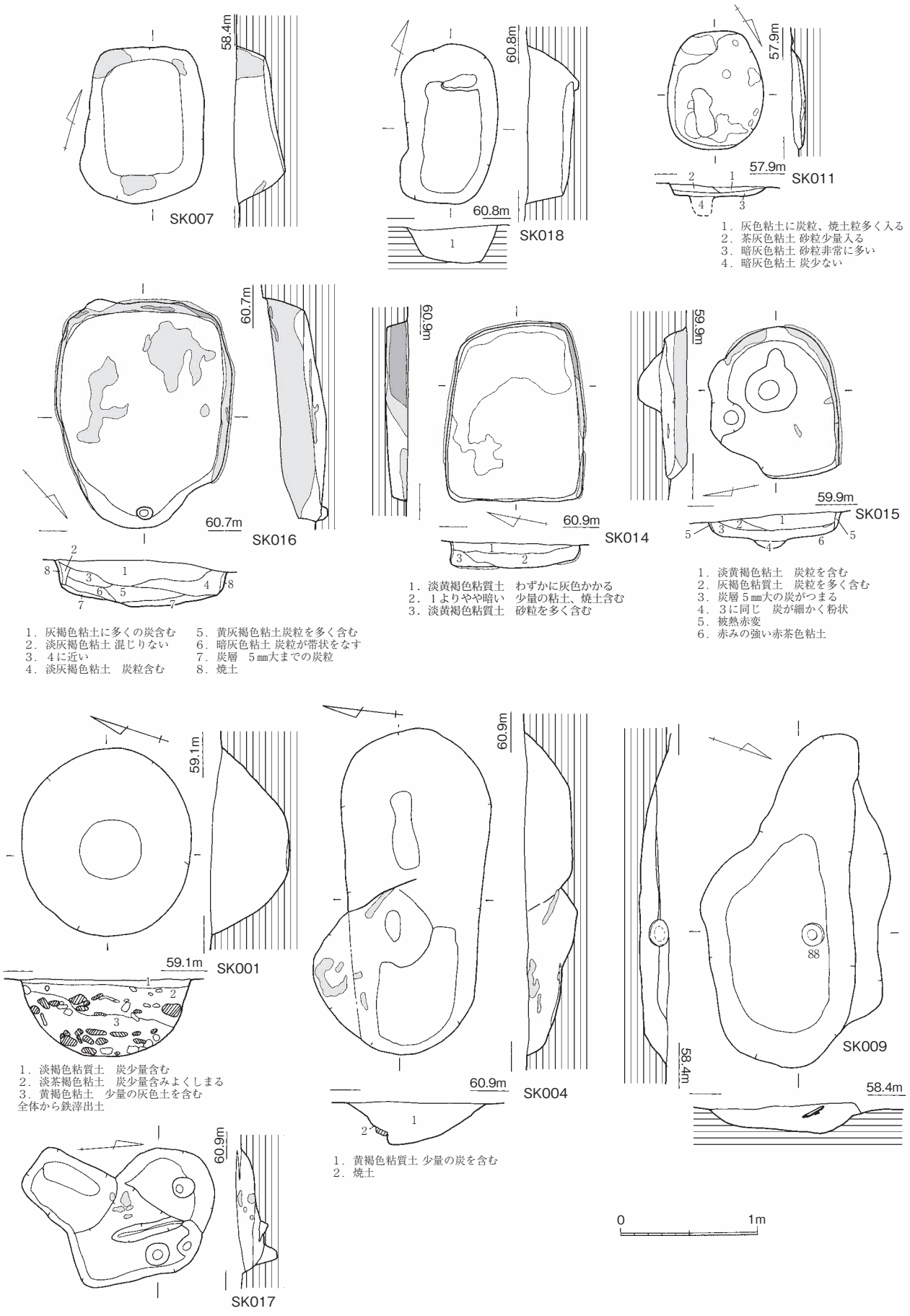


Fig.169　７区焼土坑、土坑実測図（1/40）

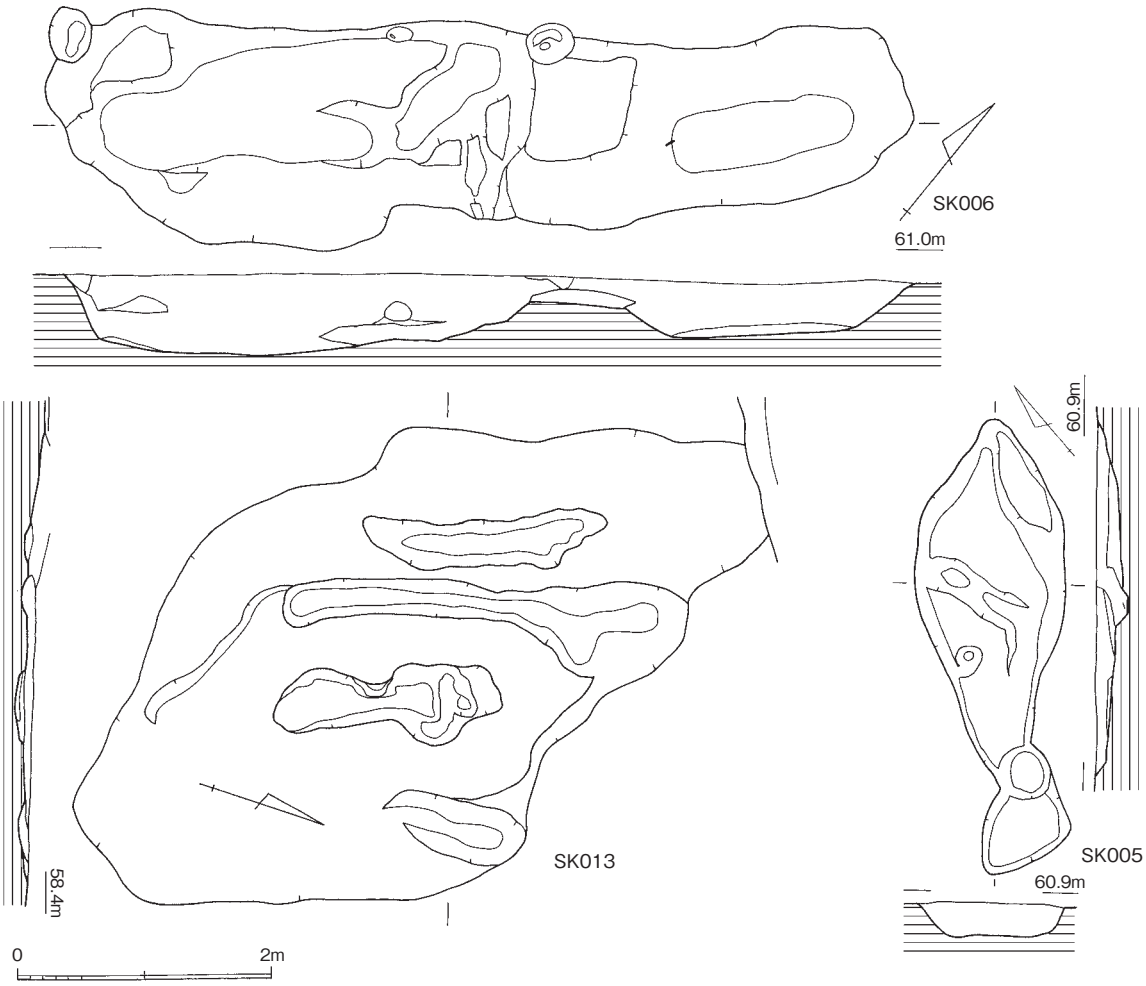


Fig.170　７区土坑実測図（1/60）

４cmほどの炭粒層を形成する。

SK011（Fig.169）8-3区の製鉄炉SX013南側の近くで検出した。底付近のみの残存で楕円形を呈す。長さ90cm、幅70cm、深さ10cmを測り、床の一部が被熱赤変する。床に広がる暗褐色土には非常に多くの炭粒を含む。

SK014（Fig.169）8-4区南端で検出した。平面長方形を呈し、長さ130×幅104cm、深さ17cmを測る。側壁と床のかなりの部分が被熱赤変し、側壁内側の大部分が還元し黄緑色を呈す。床に炭粒が薄く溜まる。

SK015（Fig.169）西側が攪乱に切られる。隅丸長方形を呈し、底にピットを有す。現存で長さ114cm、幅95cm、深さ18cmを測る。側面が被熱赤変する。

SK016（Fig.169）平面隅丸長方形を呈し北側を近現代の溝に切られる。現存で長さ170cm、幅132cm、深さ45cmを測る。側面と床の一部が被熱赤変し、側壁の一部は黄緑色を呈す。床面には厚さ5cmの炭粒が溜まる。

（3）土坑

SK001（Fig.169）平面円形の土坑で径120cm、深さ56cmを測り、断面すり鉢状を呈す。覆土は灰褐色、黄褐色の粘質土で5から15cm大の花崗岩の礫が多く出土した。下層は炭を少量含み、全体から鉄滓が出土した。炉に接した廃滓坑とは様子を異にする。

SK004（Fig.169）長楕円形を呈し、長さ240cm、幅110cm、深さ35cmを測る。覆土は黄茶色粘質土である。西半は北に張り出し焼土が散在し、底に立ち上がりがある。二つの遺構の切り合いの可能性が高い。また、人為的なものかはっきりしない。

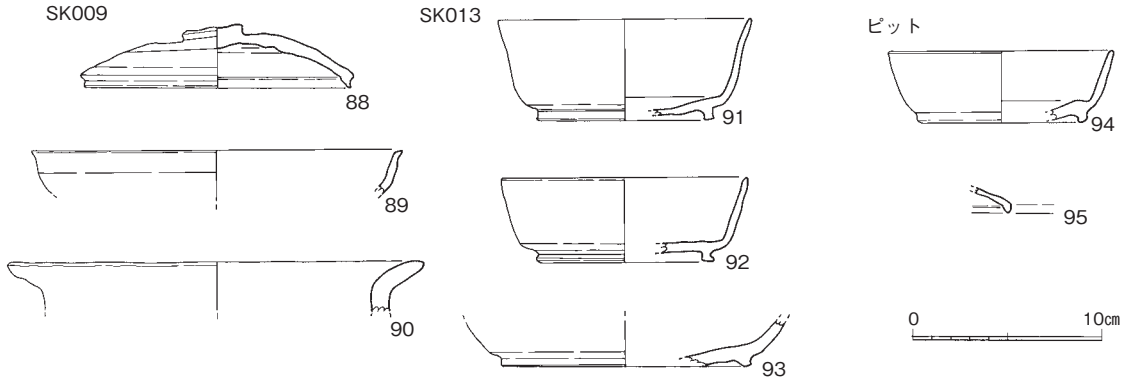


Fig 171　７区土坑、ピット出土遺物実測図（1/4）

SK005（Fig.170）溝状を呈し長さ360cm、幅120cm、深さ20cmを測る。覆土は黄茶色粘質土で人為的なものか疑いがある。

SK006（Fig.170）溝状を呈し、長さ690cm、幅130cm、深さは東側が45cm、西側が60cmを測る。中心に立ち上がりがあり二つの遺構の立ち上がりの可能性がある。覆土は黄茶色粘質土で均一で、人為的なものか疑いがある。

SK009（Fig.169､171）不整形のくぼみ状を呈す。長さ140cm、幅125cm、深さ22cmを測る。覆土は灰褐色砂質土でSD008に近い。須恵器の蓋88は裏を上にして出土した。

出土遺物　88は須恵器の蓋、89は須恵器の皿で口縁部が小さく外反する。90は土師器の甕で器面は荒れ、砂粒を多く含む。

SK013（Fig.170､171）不整形のくぼみ状を呈し底に溝が4条みられる。SD008に近い粗砂まじりの灰褐色砂質土を覆土とする。

出土遺物　91から92は須恵器の坏。93は土師器の坏で内面は研磨調整。他に土師器小片が出土した。

SK017（Fig.170）SK004西の不整形のくぼみ状の遺構で黄褐色土を覆土とし、SK004と同様に焼土が散在する。

（4）製鉄炉

SX010（Fig.172）２基の略円形の土坑を検出し鉄滓等が多く出土した。製鉄炉の廃滓坑で中央の炉が削平されたものと考えられる。谷の落ち際に位置し、方向は等高線に平行する。東側の土坑は径90

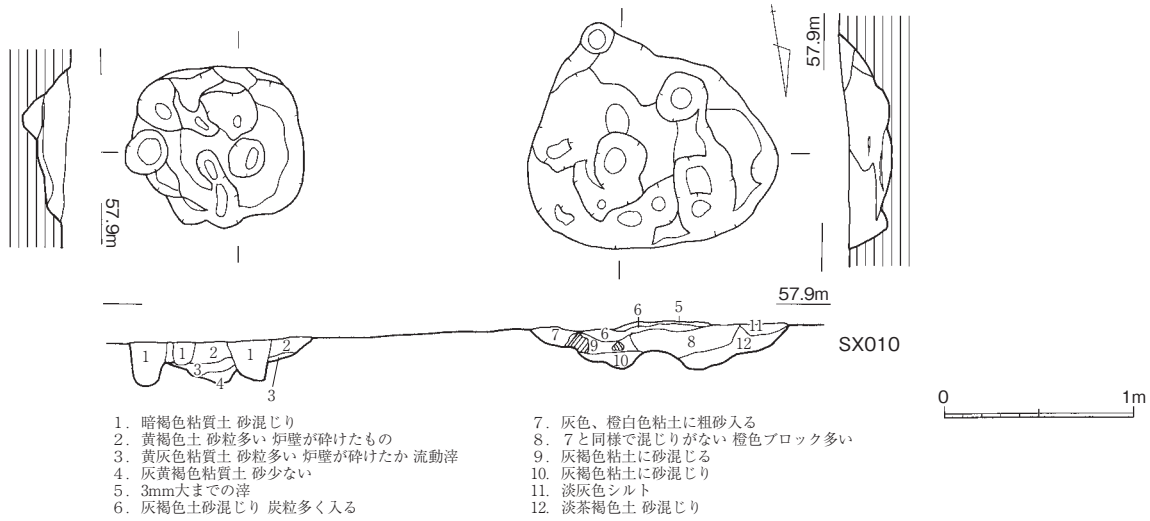


Fig.172　７区製鉄関連遺構実測図（1/40）

cm、深さ22cmを測り、ピットに切られる。黄灰色粘質土に炉壁が破砕したと考えられる砂質土、鉄滓１箱が出土した。西側は平面130cm×100cmほどで深さ25cmを測る。床には凹凸がある。

（5）ピット

特に北側の8-2区で多くのピットを検出した。北側の集中する部分にまとまりそうな一群もあるが難がある。小振りのものが多く、遺物が出土したのは14基で、ほとんどが土師器の小片である。SP101からは1200ｇ、SP104からは269ｇの鉄滓が出土している。

出土遺物　94は須恵器の坏、95は同じく蓋である。

（6）小結

北半の7-1、２区は４、５区と同一丘陵上でSD002、003が続きであるほか、ピットの量など遺構の状況は近い。7-3区中央の谷はやはり5区南東部の続きである。遺物は8世紀後半のものがほとんどで、おおかたの遺構はこの時期のものと考えている。

８．９区

７区の東に位置する。道路に沿った部分は水路建設、他は田面の盛土に伴い調査を行った。調査区中央は７区からの続きで浅い谷状を成す。溝、焼土坑、ピットを検出した（Fig.173）。道路際はこれより東は遺構面は下がり遺構は見られない。

SD001（Fig.173）７区SD012の続きと考えられる溝の痕跡を検出したが明確ではない。須恵器、土師器の小片が出土している。

SK002（Fig.173）南側の段差部分で検出した焼土坑だが、掘り過ぎにより原形を失ってしまった。長さ120cm以上、幅120cm弱の規模で壁は被熱赤変していた。

７．10区

南北方向の水路建設に伴う調査である。丘陵上にあたり、北側は11区との間に段差がある。焼土

Fig.173　９区全体図（1/400）

坑、土坑を検出した（Fig.174、175）。

SK001（Fig.174）平面長方形の焼土坑で長さ175cm、幅120cm、深さ38cmを測る。側壁は被熱赤変する。

SK002（Fig.174）長方形の土坑で長さ112cm、幅72cm、深さ52cmを測る。覆土は均一な黄褐色粘質土で、18区で落とし穴としたものに似る。

８．11区

北側の道路に沿った部分は水路建設、東側は田面の切り下げに伴って調査を行った。北東端の北側に１次調査地点が接している。北側は東端部以外は浅い谷状の地形で、東側は丘陵上に位置する。遺構は焼土坑、土坑、掘建柱建物、ピット等を検出した。調査時に11区、15区としたものをまとめ（Fig.175）、11-1、11-2区とした。

（1）焼土坑

SK012（Fig.174）11-2区南端で検出した。平面隅丸長方形を呈し100×65cm、深さ24cmを測る。床面にピットが２つあり、側面と床面の一部が焼成により赤変する。

（2）土坑

11-2区東側の段落ち際に不整形のくぼみ状の遺構013から017がある。黄褐色粘質土を覆土とする。人為的なものではないと考えているが、そのうちのSK016からナイフ型石器が出土した。それ以外に遺物はない。

（3）掘建柱建物

SB001（Fig.176）2間×2間の総柱建物で方位はN-50°-Eで南北290cm、東西344cmを測る。柱穴は円形で径50から80cmを測り、径18cmほどの柱痕跡があった。覆土は暗褐色砂質土を主体とする。

SB002（Fig.176）径40から60cmのピットが並ぶ。壁立建物と呼ばれているものと考えられる。方位はN-52°-Eで東西640cm、南北360cm以上を測る。須恵器の小片が出土している。

SB003（Fig.176）1間×2間の建物で、方位N-70°-E、桁行240cm、梁行160cmを測る。柱穴は径30cmから40cmと小振りである。須恵器と土師器の小片が出土している。

SB004（Fig.176、179）SB001に重なる2間×2間以上を想定したが、調査区外に広がるためはっきりしない。総柱の可能性もあろう。方位N-32°-W。北西端の柱穴はSB001を切る。柱穴は間柱が径28cmで

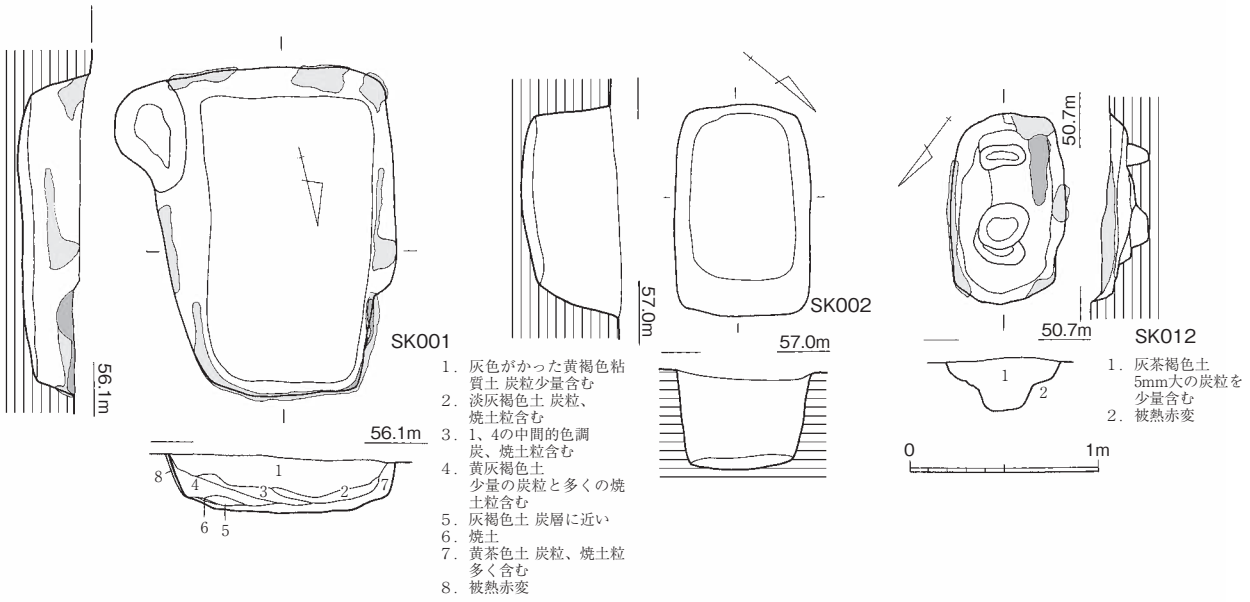


Fig.174　10区、11区焼土坑、土坑実測図（1/40）

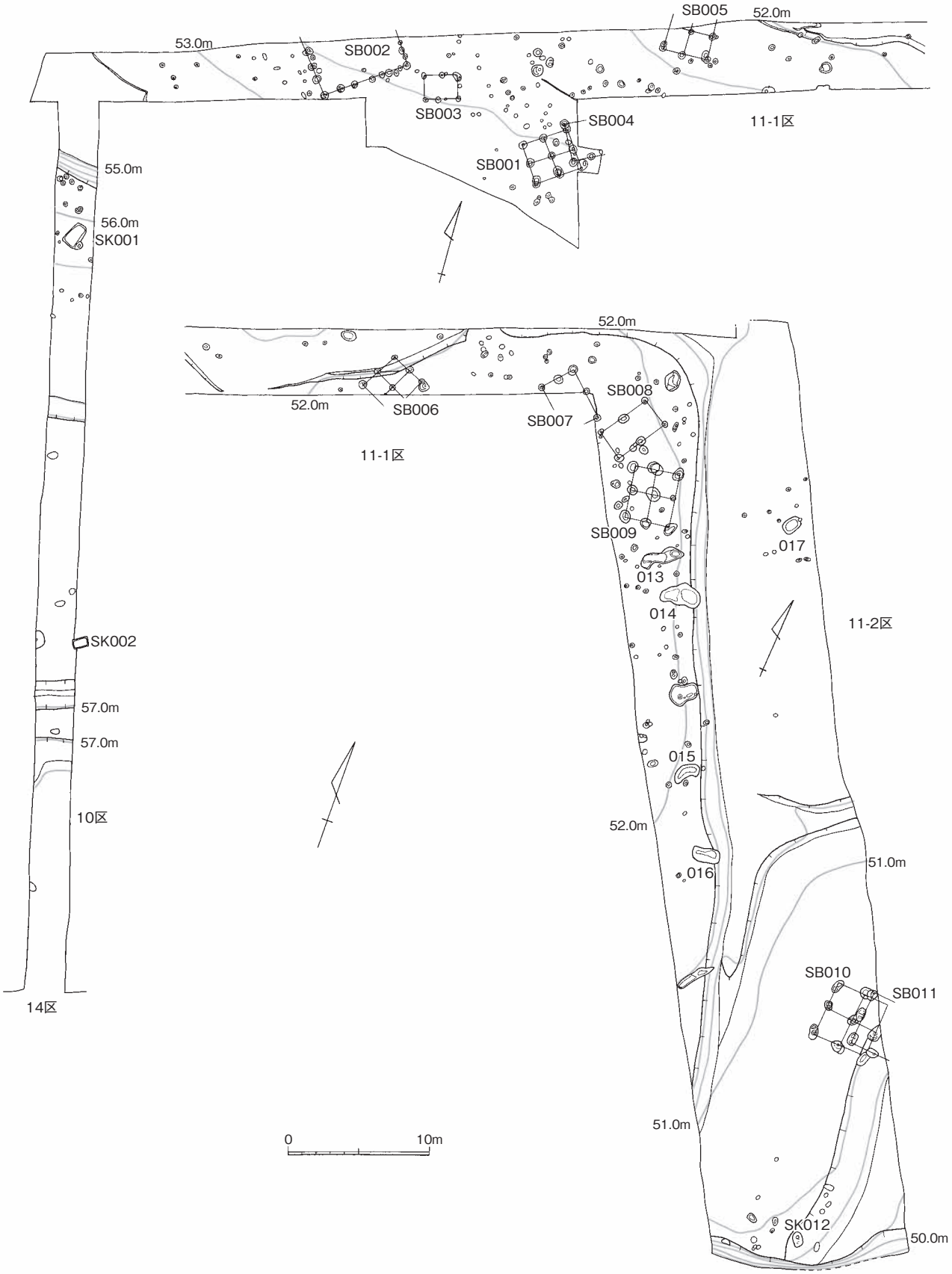


Fig.175　10、11区全体図（1/400）

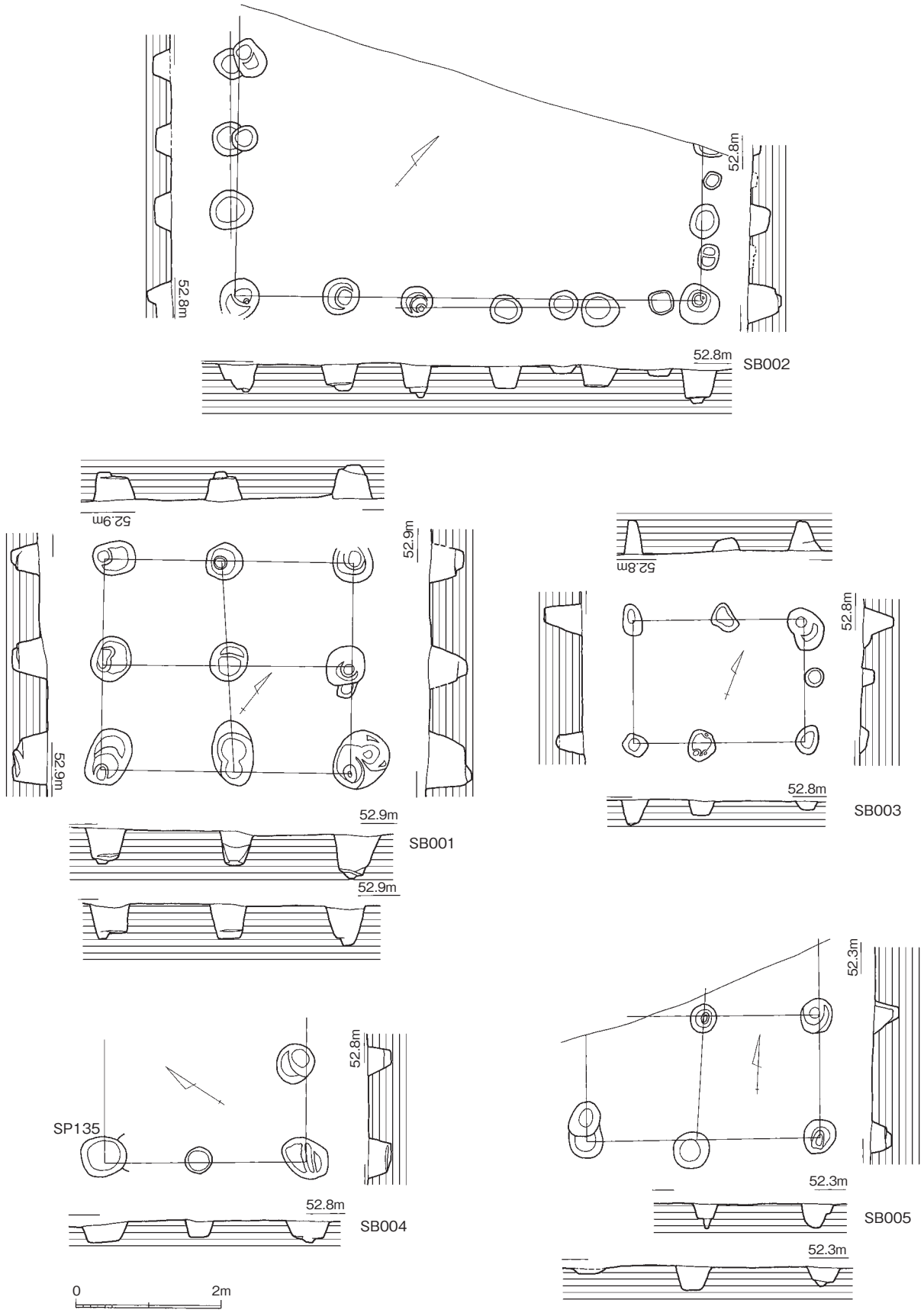


Fig.176　11区掘立柱建物実測図１（1/80）

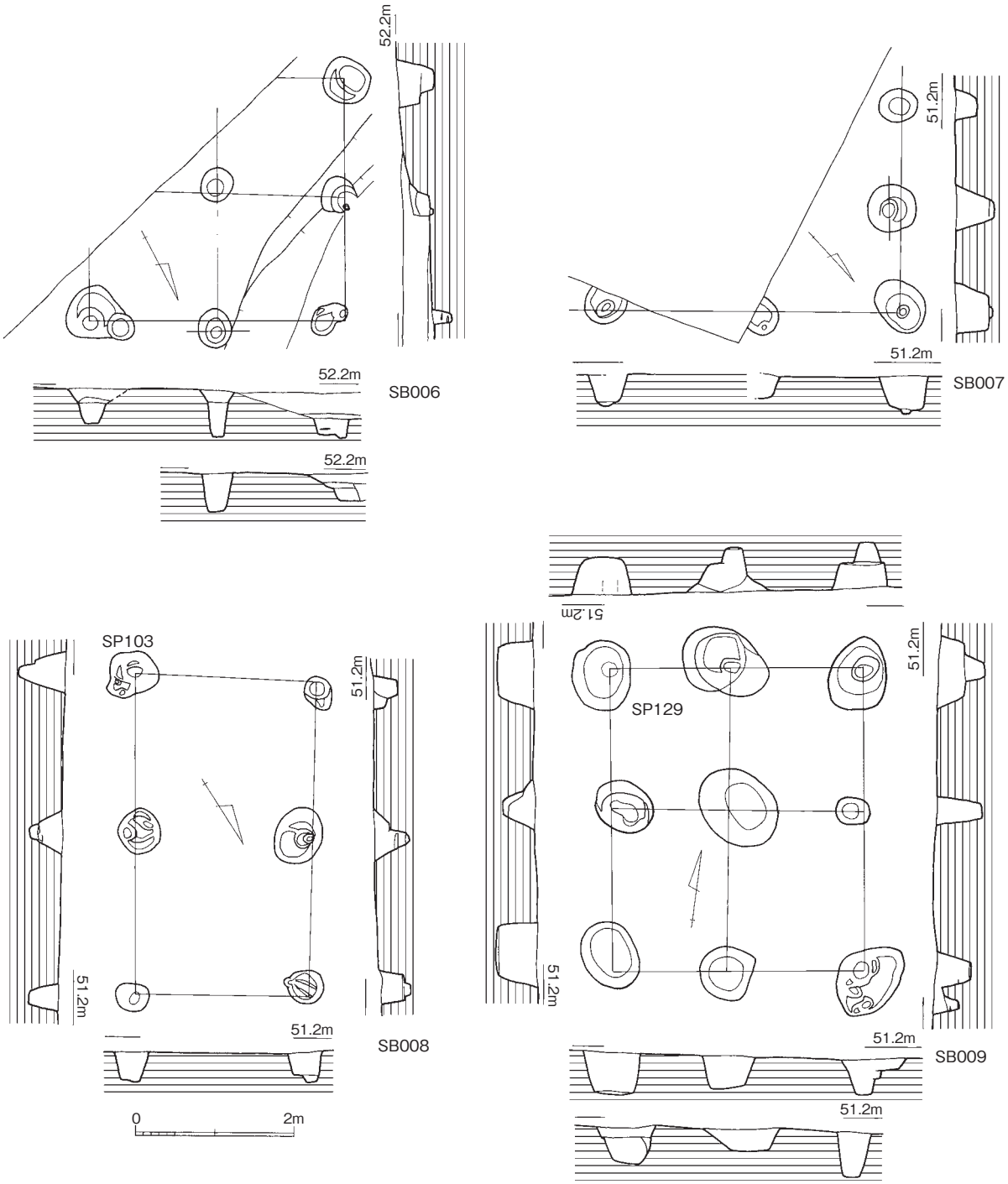


Fig.177　11区掘立柱建物実測図２（1/80）

他は径60cmほどを測る。

出土遺物　96は土師器の甕で器面は荒れ、胎土に砂粒を多く含む。他に須恵器と土師器の小片が出土している。

SB005（Fig.176）北側の調査区外に広がる2間×2間の総柱建物を想定している。方位N-3°-Wで東西長320cm、南北長265cm以上を測る。柱穴は30から50cmの円形で柱痕跡は検出していない。

SB006（Fig.177）南側が調査区外に広がる2間×2間の総柱建物を想定している。方位N-61°-Wで東西長150cm、南北長153cmを測る。柱穴は径40cmから60cmほどの円形で柱痕跡は確認していない。

SB007（Fig.177）2間×2間の建物と考えているが南西側が調査区外で確実ではない。方位N-45°-Wで

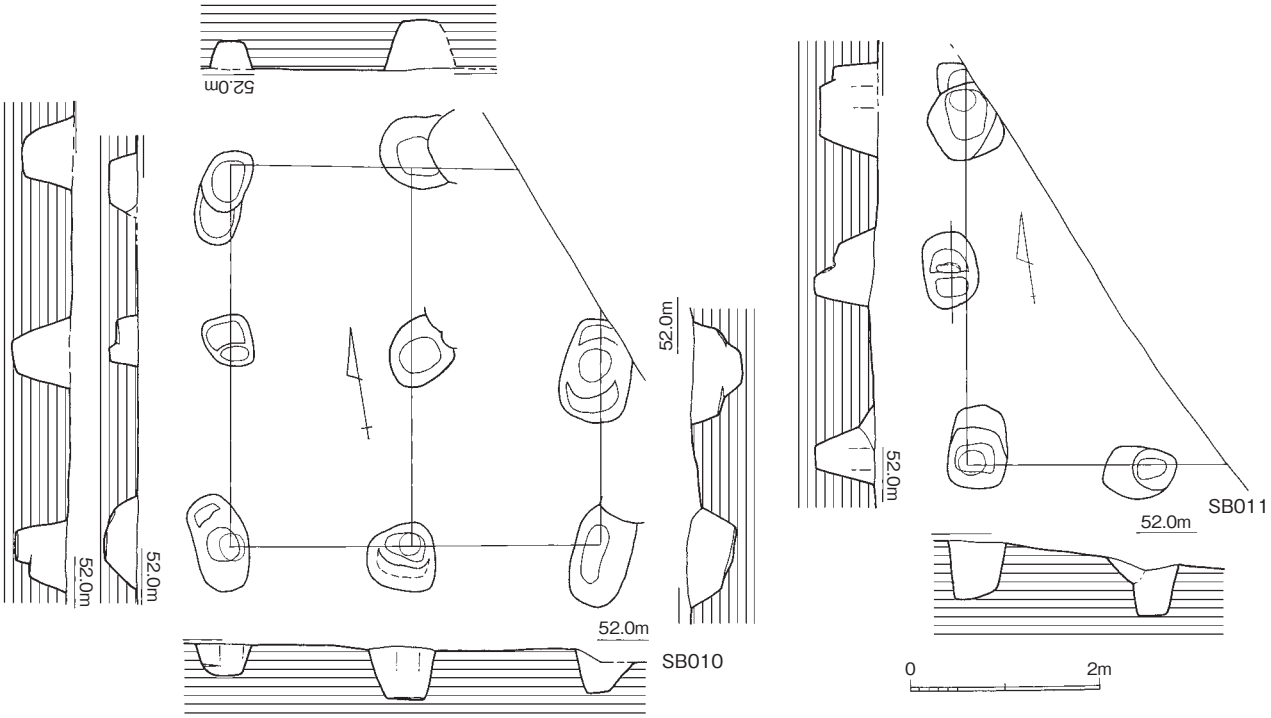


Fig.178　11区掘立柱建物実測図３（1/80）

桁行380cm、梁行260cmを測る。柱穴は径50から60cmの円形で、2箇所で柱痕跡を確認した。土師器の小片が出土している。

SB008（Fig.177､179）1間×2間の建物で桁行400cm、梁行110cmを測る。方位はN-34°-W。柱穴は径30から50cmの円形である。

出土遺物　98は須恵器の蓋。99は須恵器の坏である。他は土器の小片と鉄滓が少量出土した。

SB009（Fig.177､179）柱穴の形状等に不揃いがあるが2間×2間の総柱建物を想定した。方位はN-8°-Wで、南北380cm、東西320cmを測る。柱穴は径60から80cmの円形で、径18cmほどの柱痕跡を確認した。

出土遺物　97は須恵器の蓋である。他に土師器の小片が出土している。

SB010（Fig.178）調査区南東で検出した２間×２間の総柱建物で、SB011に切られる。方位はN-8°-Eで、東西400cm、南北400cmを測る。柱穴は50cmから70cm大で、円形のものと楕円形のものがある。径22cmほどの柱痕跡を確認した。土師器の小片が出土している。

SB011（Fig.178）SB010を切る2間×2間の建物を想定しているが東側が調査区外で確実ではない。方位はN-9°-Eで、南北380cm、東西280cm以上を測る。柱穴は60cmほどの楕円形で径約22cmの柱痕跡を確認した。須恵器の小片、土師器の甕片が出土している。

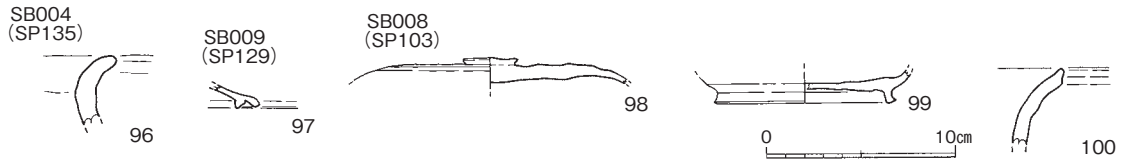


Fig.179　11区出土遺物実測図（1/4）

（5）ピット

建物周辺を中心にピットを検出した。調査範囲内ではまとまらない。遺物は土師器の小片がほとんどである。100は土師器の甕の口縁で須恵器を模したもの（Fig.179）。

（6）小結

掘立柱建物を11棟検出した。東側の丘陵部11-2区は14区の続きで掘立柱建物もその一連のものである。北側の谷部11-1区は７、９区の続きで谷部での掘立柱建物は他の区では見あたらない。1979年の1次調査地点は北東端に接し、掘立柱建物が2棟検出されている（Fig.154）。谷部の続きであろう。建物の時期は遺物が少なく不明確である。８世紀代を考えているが、97のように７世紀代の遺物があり、複数時期ありそうである。

９．12区

田面削平に伴い275㎡を調査した。検出した遺構は焼土坑、土坑、ピットである（Fig.180）。

（1）焼土坑

SK001（Fig.181）平面長方形を呈し、底には小ピットがある。長さ144cm、幅100cm、深さ30cmを測る。壁の一部が被熱赤変し、底には15cmほどの炭粒層を形成する。土師器の甕片、須恵器の小片が出土している。

SK002（Fig.181、182）平面楕円形を呈し、底に小ピットがある。長さ80cm、幅60cm、深さ10cmを測る。壁の一部が被熱赤変する。土師器の取手103が出土した。

（2）土坑

SK003（Fig.181、182）段落ちに切られる。平面長方形で長さ230cmが残存し、幅170cmを測る。断面逆台形を呈し、深さ30cmを測る。覆土は黄褐色粘質土である。土師器の皿101、甕102の他甕の小片が出土している。102は器面が荒れ、非常に多くの砂粒を含む。

SK004（Fig.181、182）平面径100cmほどの円形を呈し、深さ120cmと深い。覆土はやや粘質の茶褐色土で上部は礫がつまる。土師器の取手104が出土している。胎土に非常に多くの砂粒を含む。

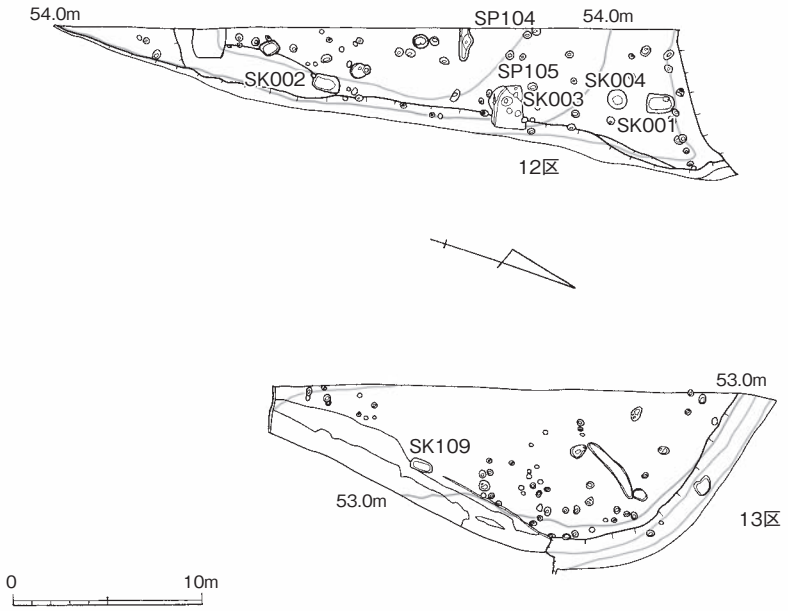


Fig.180　12、13区全体図（1/400）

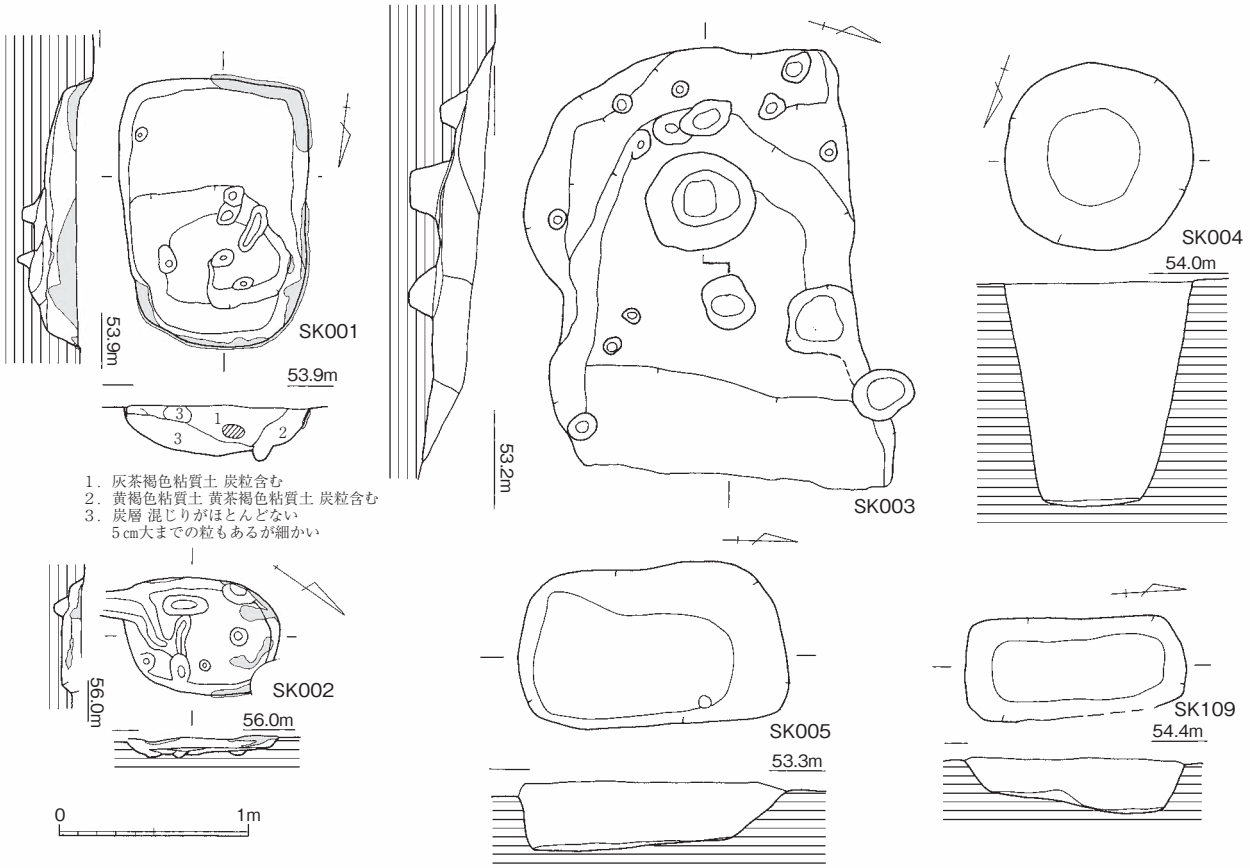


Fig.181　12、13区土坑、焼土坑実測図（1/40）

（3）ピット

径50、60㎝で深めのものがあるが、調査区内ではまとまらない。15基から土師器、須恵器の小片が出土した（Fig.182）。105は須恵器の蓋、106は須恵器の坏、107は須恵器で長頸壺の体部下部と考えられる。

（4）小結

12、13区は14区に続く丘陵上にあり、ピットの中には建物を成すものがあると思われるが確認できる。鉄滓の出土はなかった。

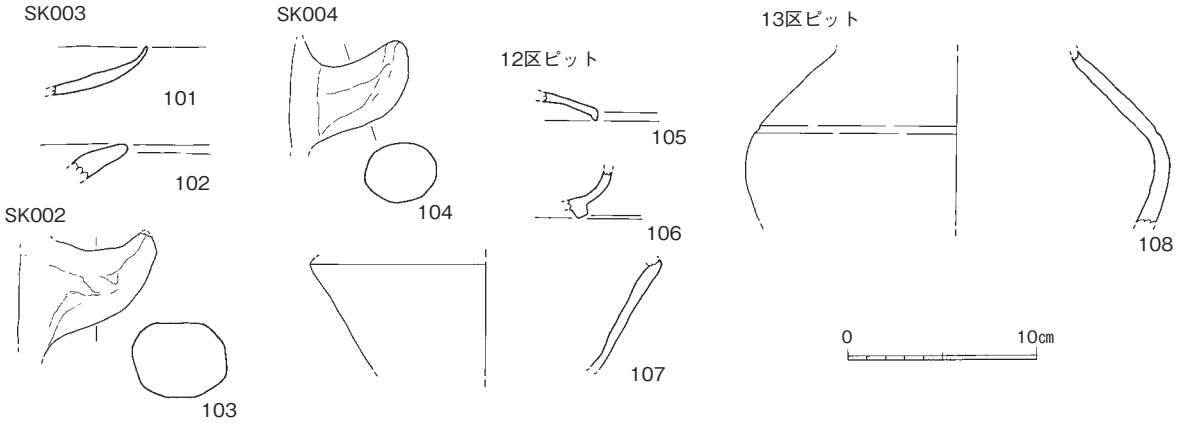


Fig.182　12、13区出土遺物実測図（1/4）

10. 13区

12の東側で田面削平に伴い175㎡を調査した。検出した遺構は土坑、ピットである（Fig.180）。

（1）土坑

SK109（Fig.181）平面長方形を呈し、長さ118㎝、幅50㎝、深さ25㎝を測る。覆土は淡茶色土で土師器の坏小片が出土した。

（2）ピット

段落ち際周辺で検出した。小形のものがほとんどでまとまりはない。９基から土師器の小片を中心とした遺物が出土した（Fig.182）。108は須恵器の壺で沈線を一条施す。最大頸部より上は回転なで、下は回転へら削りを施す。

11. 14区

事業地中央を東西に縦断する調査区で、尾根状地の頂部に当たる。東へ向かって段を成して下がり西端の標高57.8m、東端は51mを測る。溝、周溝状遺構、焼土坑、土坑、掘建柱建物、ピット等の遺構を検出した。特に掘建柱建物は他の調査区と比べて集中する。遺構面はほとんどの場所で床土直下である。Fig.183部分を西半、Fig.184部分を東半と呼称する。

（１）溝

以下とりあげる以外の溝は近現代の水田に伴うものと考えている。

SD007（Fig.183､185）西半東端部を東西方向にわずかに弧を描いて走る溝で、途中に立ち上がりがある。東側は水田に伴う溝に切られる。幅210㎝、深さ30㎝を測り、断面は緩やかな台形状を呈す。覆土は粗砂混じりの灰褐色シルト質土である。土鍋と鉄滓が1点出土している。

出土遺物　109は土鍋で内面と外面下部は刷毛目、他はなで調整で外面中位に炭化物が多く付着する。

SD020、022（Fig.183､185）SD020は西半西端近くを南北に直線的に走りSB011を切る（Fig.189断面図参照）。幅110㎝深さ50㎝を測る。覆土は暗灰褐色粘質土で床面には薄く粗砂が溜まり、古代の須恵器を主体とし、土師器が少量、鉄滓138ｇが出土した。南側の延長は直線上には見られず、東西方向に走る同様の溝に屈曲して続くと考えられる。さらに東側の延長は直線上には現れない。北端は西に屈曲しSD022に続くと考える。SD022は現在のU字溝下に走る東西溝と大部分が重なり、その部分で中近世陶磁器等、鉄滓785ｇが出土している。

出土遺物　取り上げ時に両溝の遺物が混ざった。110から112はSD022を切る溝部分からの出土である。110は近世の染め付け碗、111は玉縁口縁の白磁碗、112は口縁部に三角突帯を付す土鍋である。113から116は須恵器で本来のSD020の時期に近いものであろう。113は蓋、114は坏、115は甕の口縁部である。116は高坏の脚で回転なで調整で仕上げる。他に須恵器の甕等の破片が出土している。

SD030（Fig.184､185）東半西側を南北方向に走り南端で西に緩やかに曲がる。幅250㎝、深さ25㎝を測り、断面は緩やかな逆台形を呈す。覆土は暗灰褐色粘質土である。

出土遺物　117は土師器の甕で器面は荒れる。118、119は須恵器の坏で内面小豆色を呈し同一個体の可能性がある。このほかに須恵器の甕片が出土している。

SD035（Fig.184､185）段落ち際をコ字型に屈曲して巡る溝で幅1m、深さ15㎝を測る。覆土は青灰色砂質シルトで底には粗砂が薄く見られる。水田に伴う溝と思われるが、居住地を巡る可能性もあろう。

出土遺物　120は陶器の甕で暗褐色の釉を施す。122は磁器碗で２次焼成で釉は飛ぶ。見込みと畳付に胎土目が残る。121は白磁碗である。このほか土師器の高坏片、須恵器、土師器の小片が出土している。

SD037（Fig.184、185）調査区東側の段落ち際を南北に走り、青灰色砂質土を覆土とする。ピットはすべて切る。水田耕作に伴うものと考えられる。

出土遺物　123は土師質に近い丸瓦で器面は荒れる。124はクリーム色の釉を施す磁器碗で畳付は露胎である。他に須恵器、土師器片、鉄滓2点355ｇが出土した。

（２）焼土坑

SK001（Fig.186）平面長方形の北側がすぼまる。長さ160cm、幅120cm、深さ34cmを測る。側面は被熱赤変し北側は黄緑色を呈す。床に厚さ10cm弱の炭粒層を形成する。須恵器の坏、土師器の小片が出土している。

SK002（Fig.186）平面楕円形を呈し、長さ146cm、幅104cm、深さ15cmを測る。床に炭粒が薄く広がる。

出土遺物　125は土師器の取手である。このほかに土師器の小片が出土している。

SK003（Fig.186）隅丸方形を呈し、長さ104cm、幅96cm、深さ13cmを測る。側壁、床が被熱赤変し、床に薄く炭粒層を形成する。

出土遺物　126は須恵器の坏身の小片である。他に土師器の小片が出土している。

SK006（Fig.186）平面楕円形を呈す。長さ118cm、幅72cm、深さ18cmを測る。側壁が一部被熱赤変する。

出土遺物　127は須恵器の坏の口縁部で小片である。他に須恵器の蓋、土師器の取手、小片が出土している。

（3）土坑

SK004（Fig.186）東半西端に位置する。平面隅丸長方形を呈し、長さ175cm、幅120cm、深さ105cmを測る。覆土は黄褐色粘質土を主体とする。18区の落とし穴状

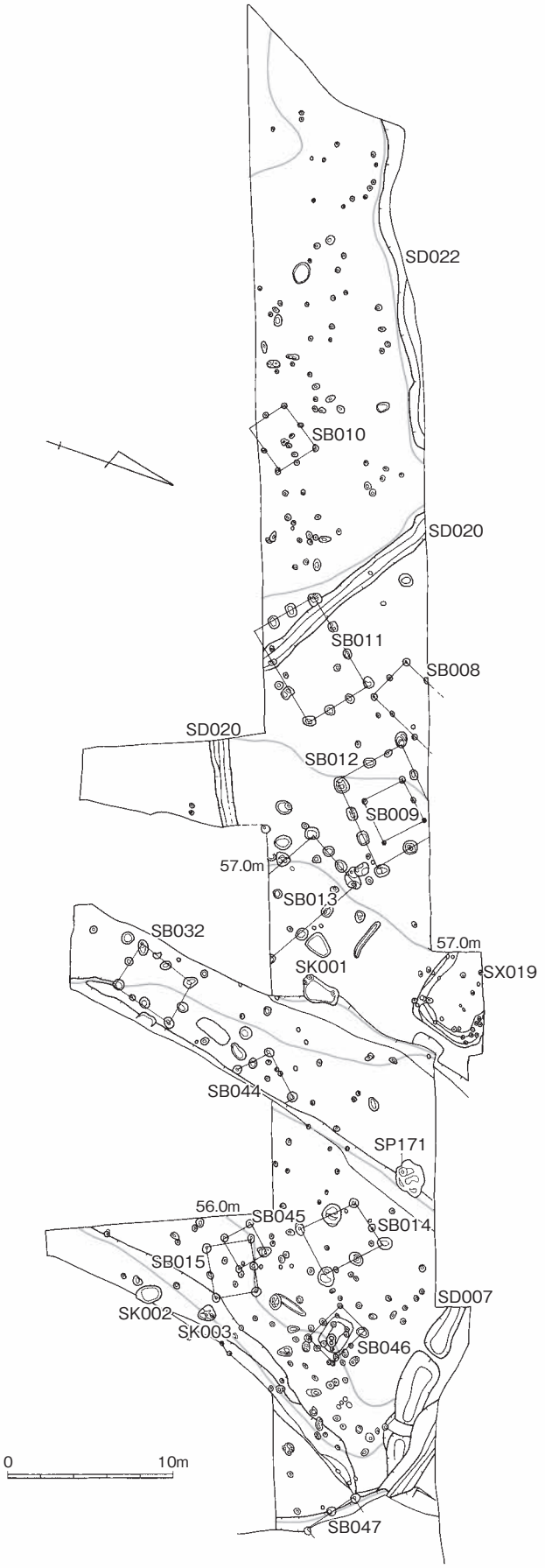


Fig.183　14区全体図西半（1/400）

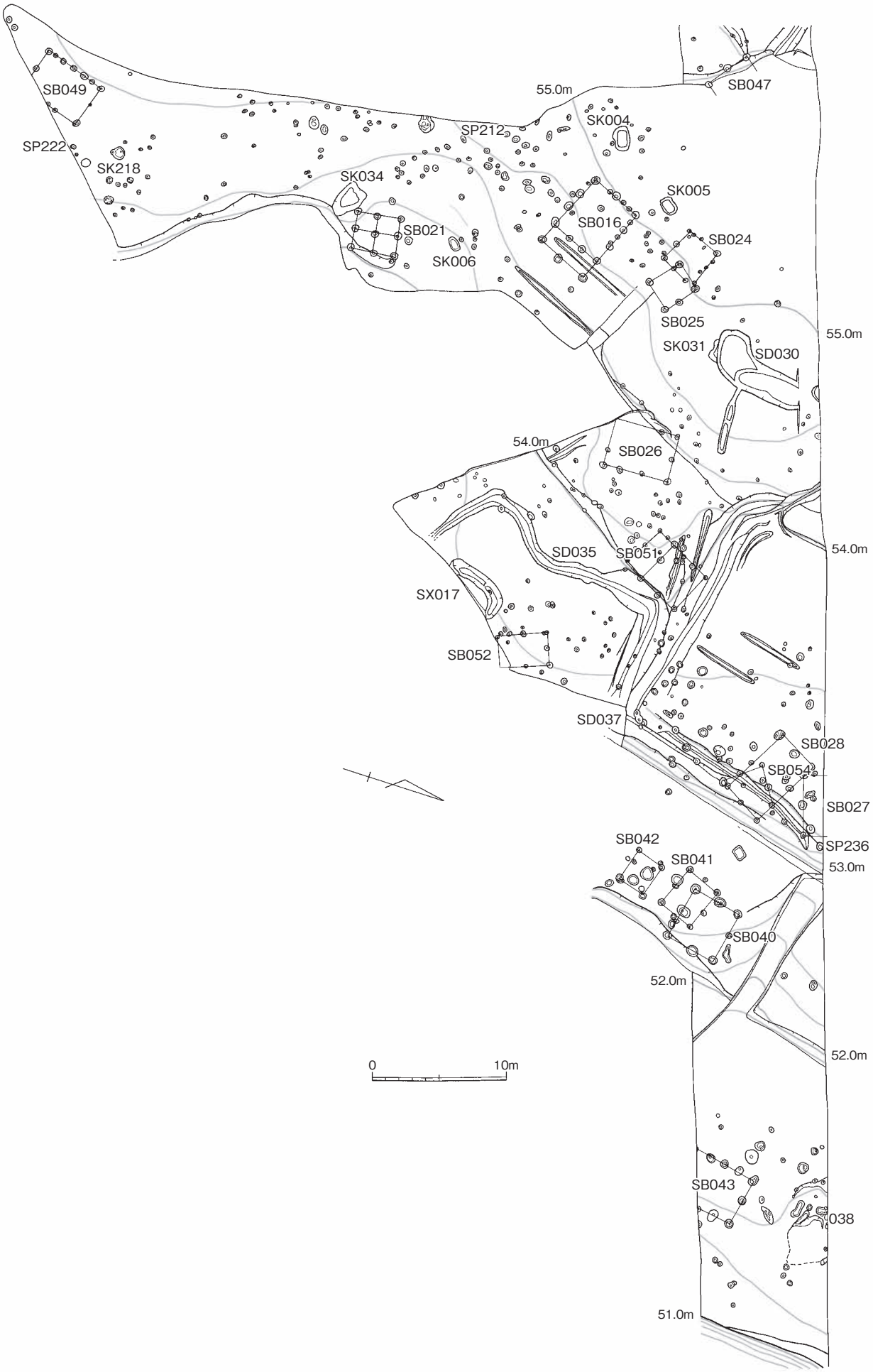


Fig.184　14区全体図東半（1/400）

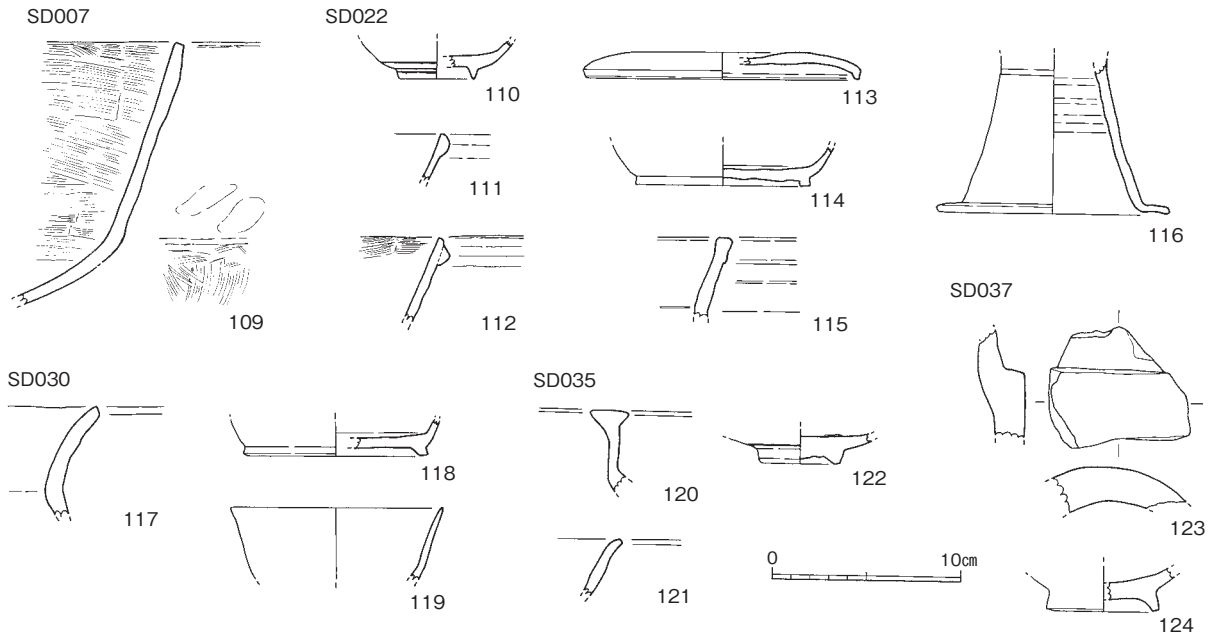


Fig.185　14区溝出土遺物実測図（1/4）

遺構と類似する。SK005も同様である。

SK005（Fig.186）SK004の北東に位置する。平面隅丸長方形を呈し、長さ132cm、幅106cm、深さ58cmを測る。覆土は灰黄褐色粘質土を主体とする。

SK031（Fig.186）SD030に切られ、平面楕円形を呈し、長さ172cm、幅110cm、深さ30cmを測る。灰褐色粘質土を覆土とする。遺物は須恵器の甕の小片が出土したのみである。

SK034（Fig.186）東半西南側に位置する。浅いくぼみ状を呈し、包含層が溜まった状況と考えられる。覆土は茶褐色粘質土である。

出土遺物　図示した２点が出土した。128は須恵器の蓋、129は坏で焼きが甘い。

SK218（Fig.186）SK034の南に位置する。径95cmほどの略円形を呈し深さ16cmを測る。覆土は茶褐色粘質土で砂粒を多く含む。

出土遺物　覆土中より比較的多くの遺物が出土した。130、131は須恵器の蓋である。このほかは須恵器片２点と土師器の甕片がある。

（3）周溝状遺構

SX017（Fig.187）東半中央南側に位置し、南側が調査区外に広がる。幅1m、深さ45cmほどの溝がコの字状を呈す。端部は緩やかに立ち上がる。内側は外側より30cmほど低い。覆土は茶褐色粘質土である。

SX019（Fig.187、188）西半中央東よりに位置し北西が調査区外に延びる。幅55cmから100cm、深さ30cmほどの溝がコの字状を呈し、四方を巡る可能性がある。溝の内側には特に遺構はなく、南北320cm、東西430cm以上を測る。溝の底、内側には径15から25cmほどの小ピットが多い。周囲にこのような状況はなく溝に伴うと考えている。溝、ピットの覆土は茶褐色粘質シルトで、溝の底には薄く砂が溜まる部分がある。溝からは土師器の坏が比較的多く出土した。完形に近いものもあるが細片が多い。ピットにも少量ではあるが土師器片を出土するものがある。

出土遺物　132は黒色土器Aの皿で口唇部外面まで黒色を呈す。胎土には３㎜大までの砂粒を含む。133から146は土師器で、140までは坏、146までは皿である。140の胎土が精良である他は砂粒を多く

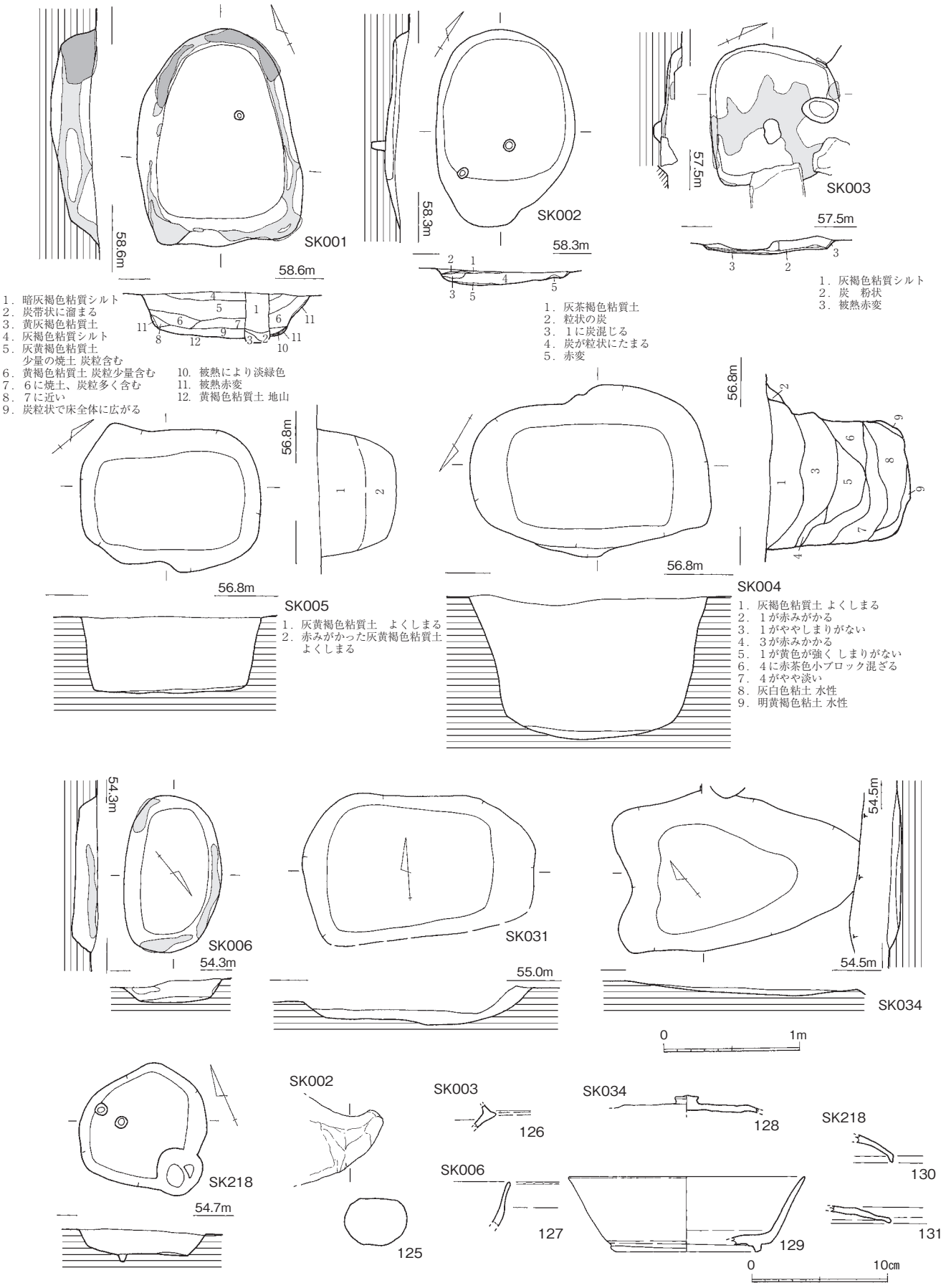


Fig.186　14区焼土坑、土坑実測図、出土遺物実測図（1/40、4）

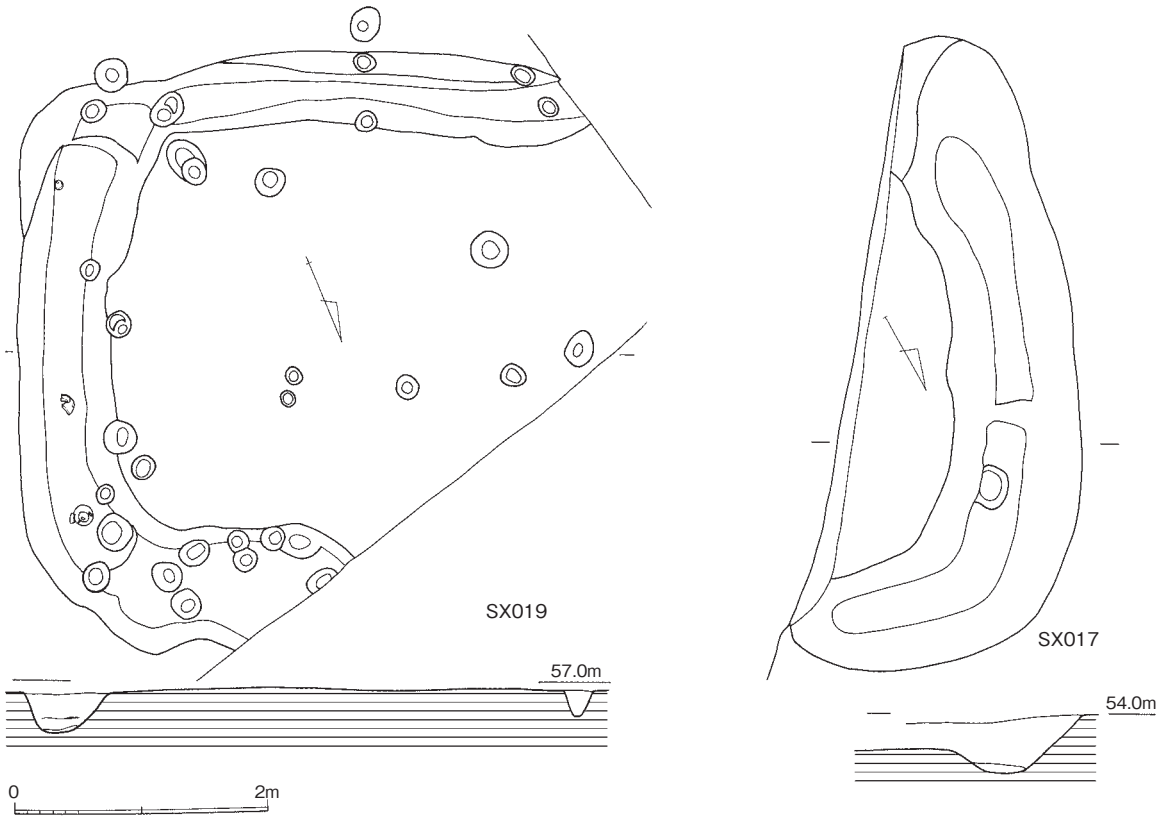


Fig.187　14区周溝状遺構実測図（1/60）

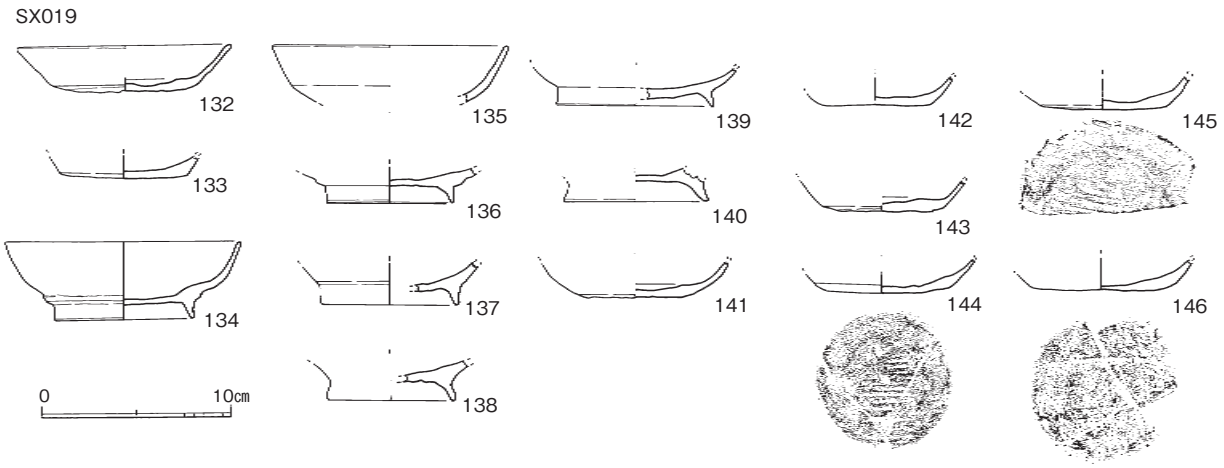


Fig.188　14区周溝状遺構出土遺物実測図（1/4）

含む。142、144、145、146の底部には板目圧痕が見られる。137、143の内面には黒色の付着物がある。時期は9世紀末から10世紀初めと考えられ、周囲の出土遺物と隔たりがある。

（4）掘建柱建物

27棟の建物を復元したが不確実なものも含む。遺物は少なく時期がわかるものはほとんどない。覆土の多くは粘質の暗灰褐色土で砂粒を含む。取り上げた以外にも柱筋が通りそうなものがいくつかあるが展開しなかった。

SB008（Fig.189）西半中央で東西２間、南北２間を確認した。北東の調査区外に広がる2間×3間の

建物を想定している。方位はN-26°-Eで、梁行330cm、桁行330cm以上を測る。柱穴は径30cmほどと小形である。

SB009（Fig.189）SB008の南東で1間×1間を確認した。SB012の内側に位置し、その一部の可能性がある。方位はN-45°-Eで、南北278cm、東西280cm以上を測る。柱穴は22cm大ほどの円形の小形である。土師器の坏片、小片が出土している。

SB010（Fig.189）西端部で検出した2間×2間の建物で南東隅は調査区外。方位はN-39°-Eで梁行263cm、桁行320cmを測る。柱穴は径30から40cm大ほどの楕円形である。土師器の小片が２点出土している。

SB011（Fig.189）西半中央に位置する3間×3間の建物で南西隅は調査区外。SD020に切られる。方位はN-40°-Eで、梁行420cm、桁行640cmを測る。柱穴は60cm大前後の方形または円形で径約18cmほどの柱痕跡を確認した。遺物は土師器の甕片、土師器小片が出土したのみである。

SB012（Fig.190）SB011の北東に並ぶ2間×3間の建物で北隅は調査区外に出る。方位はN-41°-Eで、梁行440cm、桁行600cmを測る。柱穴は50から80cm大の不整円形で径約22cmほどの柱痕跡を確認した。遺物は土師器の小片が微量出土したのみである。

SB013（Fig.190）西半中央で2間×3間の建物を想定した。南側が調査区外で確実ではない。方位はN-59°-Eで、梁行680cm、桁行400cmを測る。柱穴は径60から80cmほどの円形で径約18cmの柱痕跡を確認した。須恵器の坏片、土師器の小片が出土している。

SB014（Fig.189）西半中央やや東に位置に1間×2間を想定した。柱の並びが歪だが柱痕跡がありまとめた。方位はN-46°-Wで、梁行315cm、桁行380cmを測る。柱穴は径50から120cmと不揃いで径約18cmの柱痕跡を確認した。土師器の甕小片、須恵器の小片が出土している。

SB015（Fig.190）SB014の南に1間×2間の建物を想定した。方位はN-60°-Eで梁行260cm、桁行330cmを測る。柱穴は径50cm前後の円形である。土師器の甕片、小片、須恵器坏片が出土している。

SB016（Fig.191）東半西端部で確認した建物で、2間×4間の南東１間を仕切る柱列を配す。方位はN-66°-Wで、梁行430cm、桁行610cm以上を測る。柱穴は径40から60cmcmほどの円形で径約20cmの柱痕跡を確認した。土師器の小片が出土している。

SB021（Fig.191）SB016の南で検出した2間×2間の総柱建物である。方位はN-6°-Wで、南北320cm、東西280cmを測る。柱穴は径50cmほどの円形である。

SB024（Fig.190）東半西側で2間×2間の建物を想定したが、北側は柱筋、間隔がそろわない。方位はN-62°-Wで、南北240cm、東西280cm以上を測る。柱穴は径40cm前後の円形である。土師器の坏小片が2点出土した。

SB025（Fig.190）SB024と重なる1間×1間の建物である。方位はN-50°-Wで、南側230cm、東側260cmを測る。柱穴は径50cm前後の円形である。

SB026（Fig.191）東側中央西よりで2間×3間の建物を想定したが南西側が調査区外である。方位はN-3°-Wで南北360cm、東西500cmを測る。柱穴は径40cmほどの円形である。土師器の小片が出土している。

SB027（Fig.191）東半中央で2間分の柱筋を検出した。北側の調査区外に展開すると考えている。方位はN-72°-Eで、延長450cmを測る。柱穴は50cmほどの円形である。

SB028（Fig.191、194）東半中央東よりの段落ち際に2間×3間の建物を想定した。南側の柱間隔が揃わず、やや難がある。方位はN-64°-Wで、梁行350cm、桁行560cmを測る。柱穴は径40から60cm大の円形である。須恵器の蓋151がSP234から出土している。

SB032（Fig.192）西半中央の西に張り出した位置で検出した2間×2間の建物である。方位はN-15°

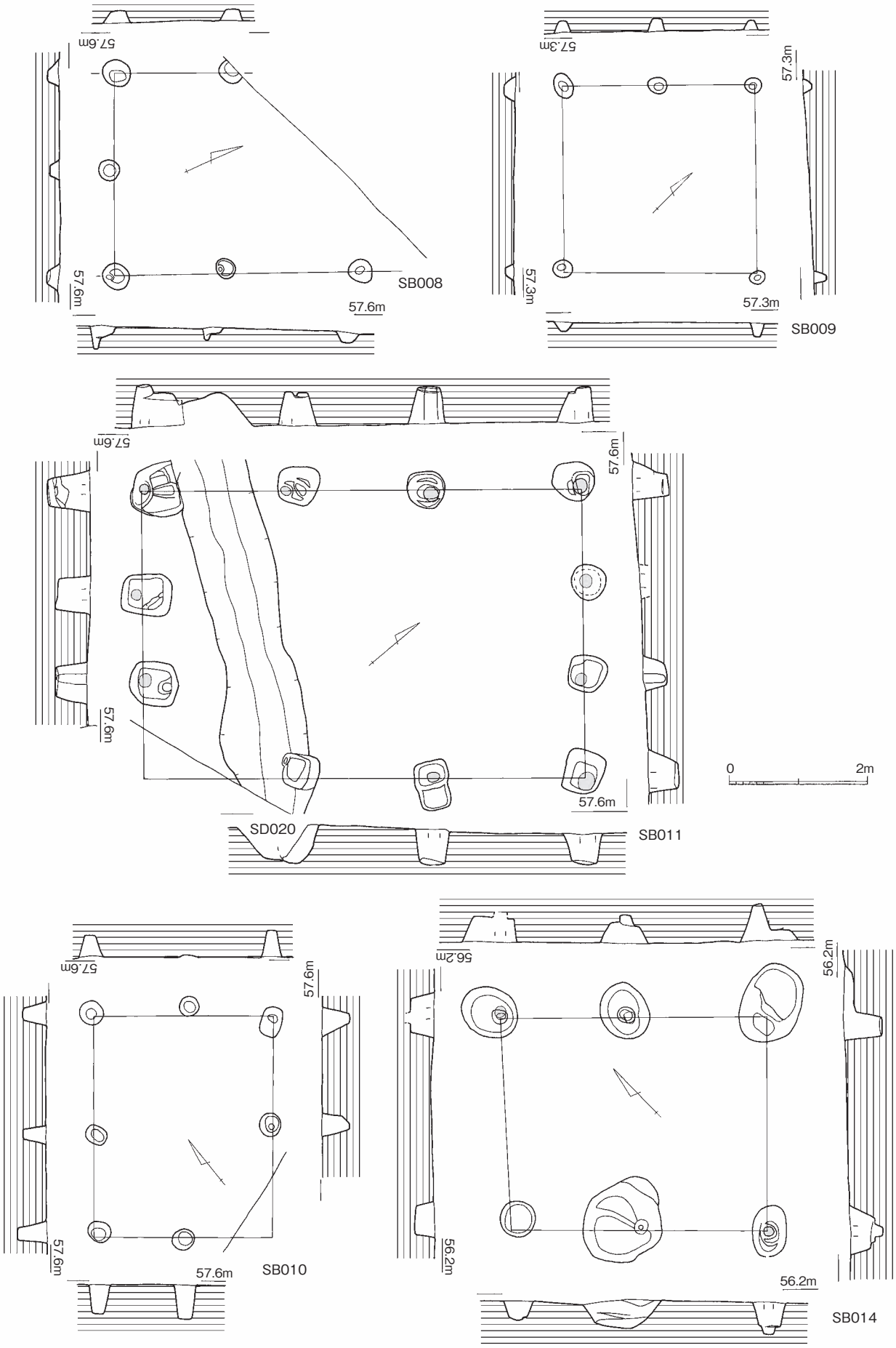


Fig.189　14区掘立柱建物実測図１（1/80）

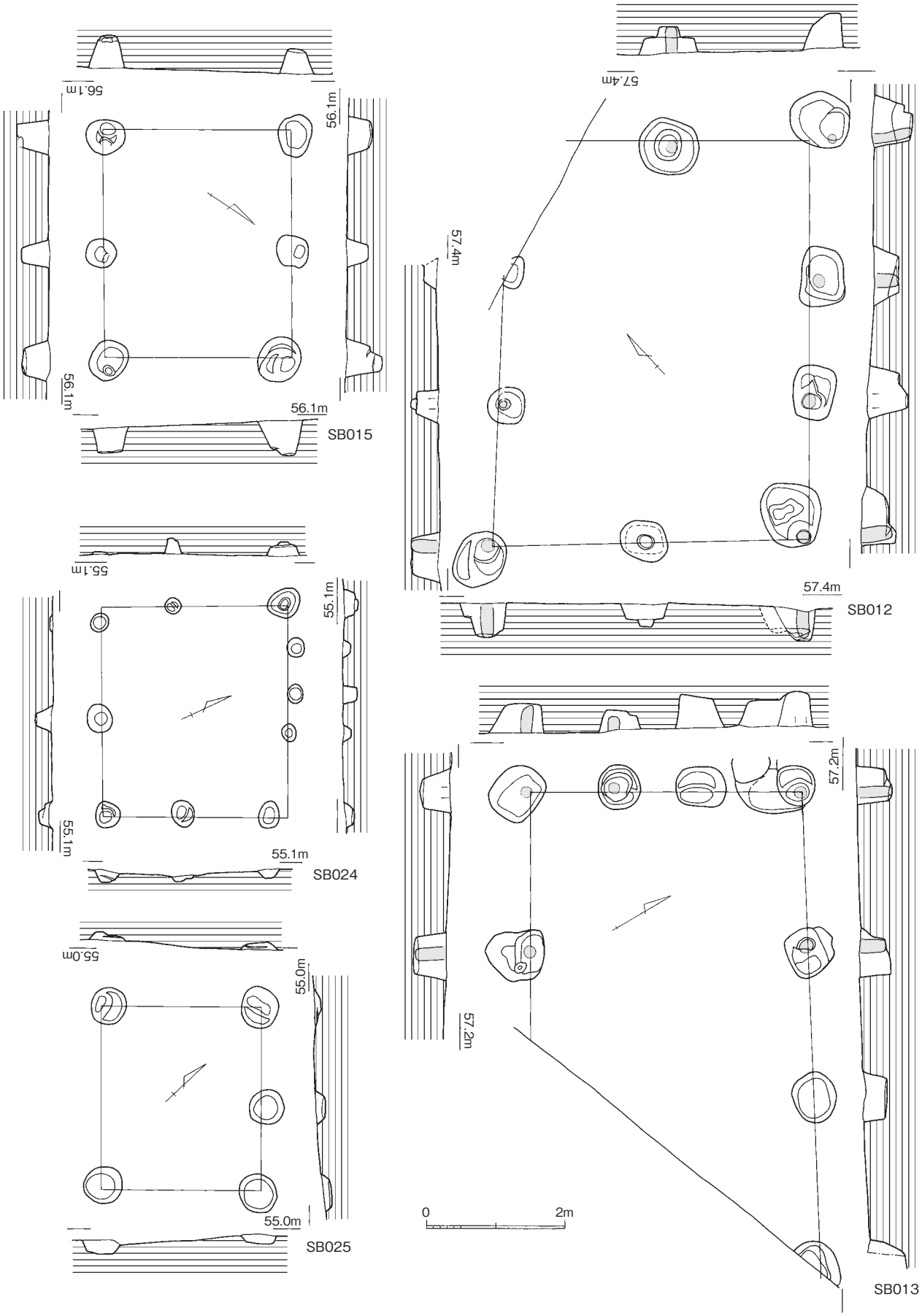


Fig.190　14区掘立柱建物実測図２（1/80）

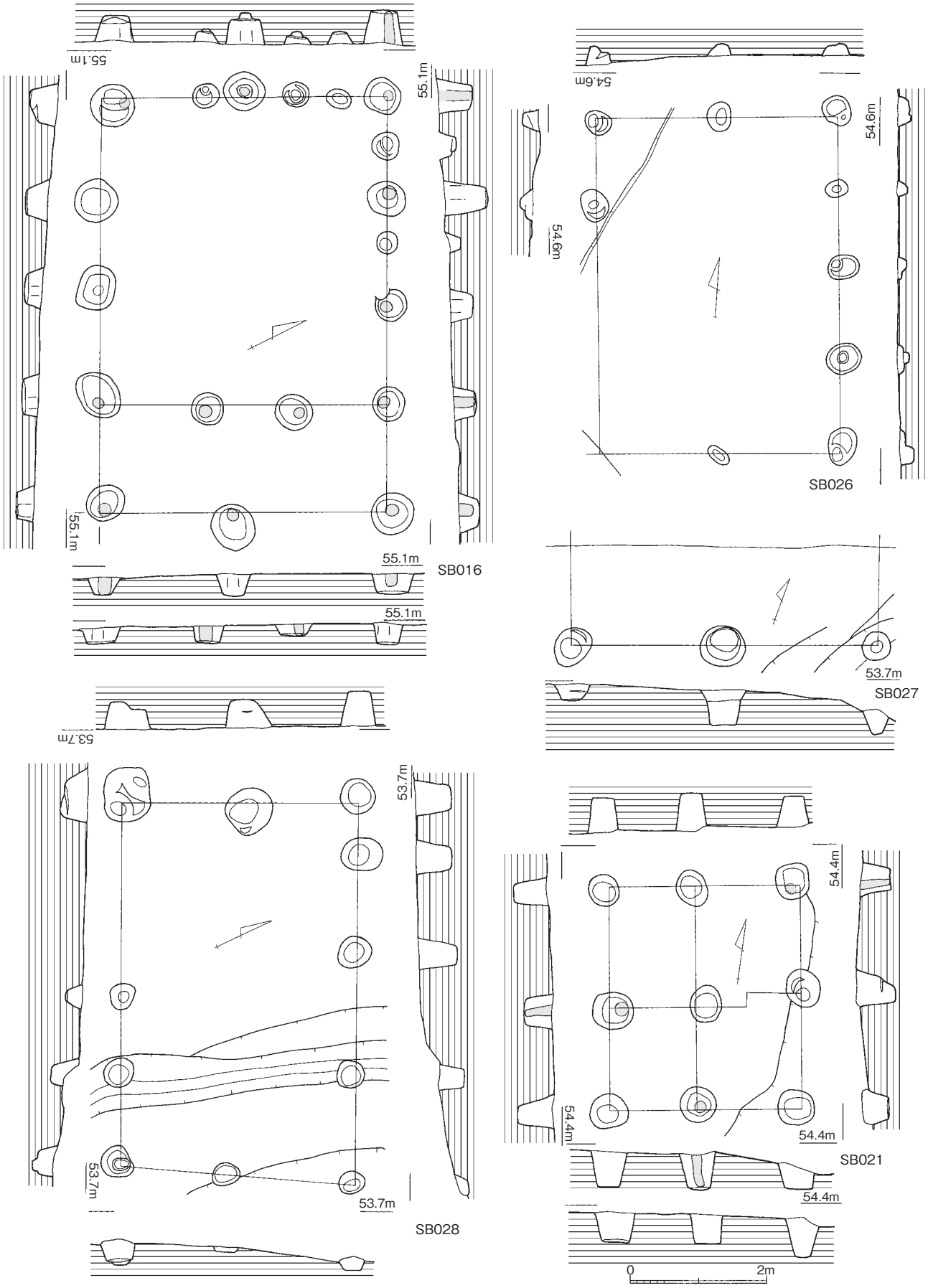


Fig.191　14区掘立柱建物実測図３（1/80）

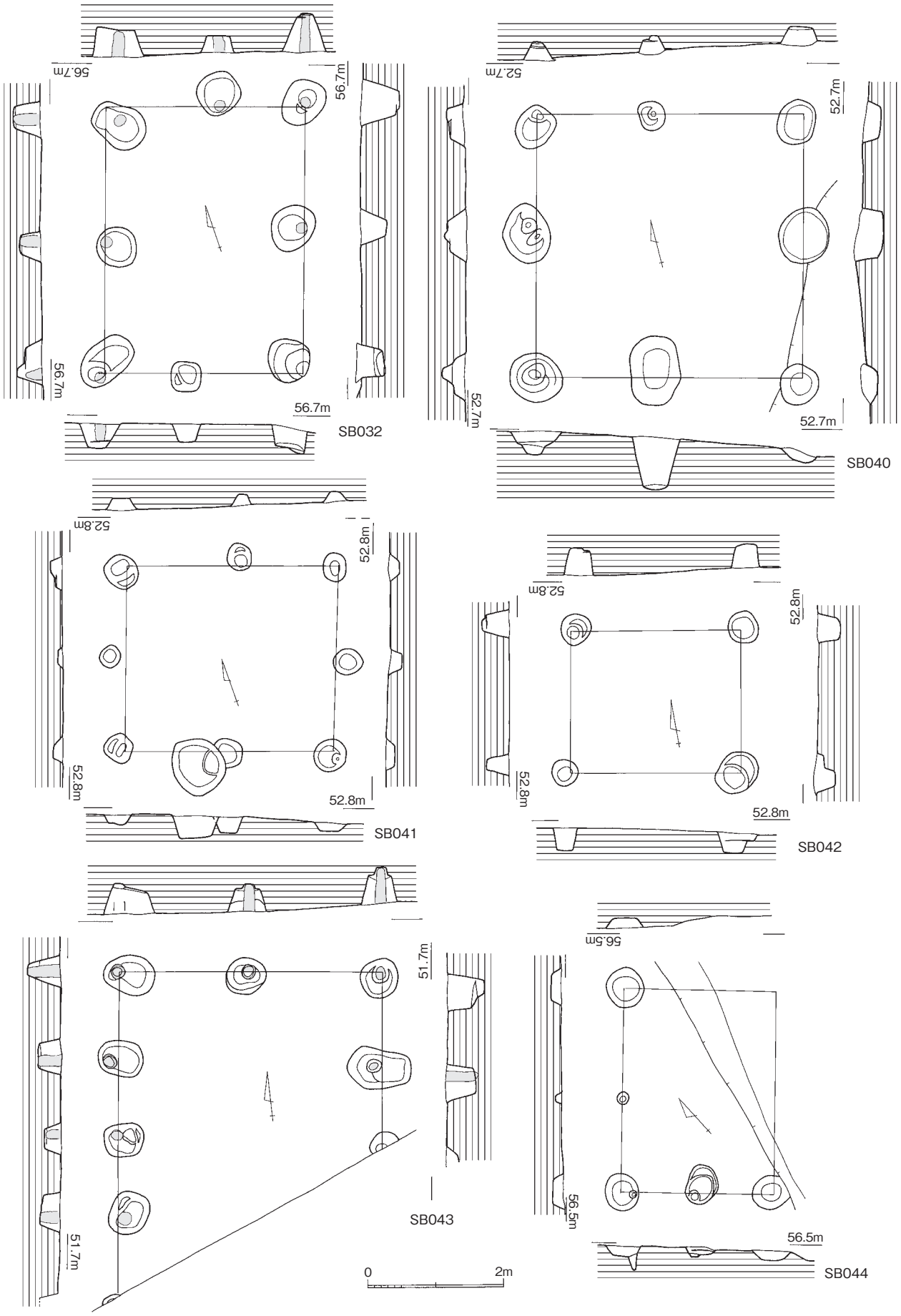


Fig.192　14区掘立柱建物実測図４（1/80）

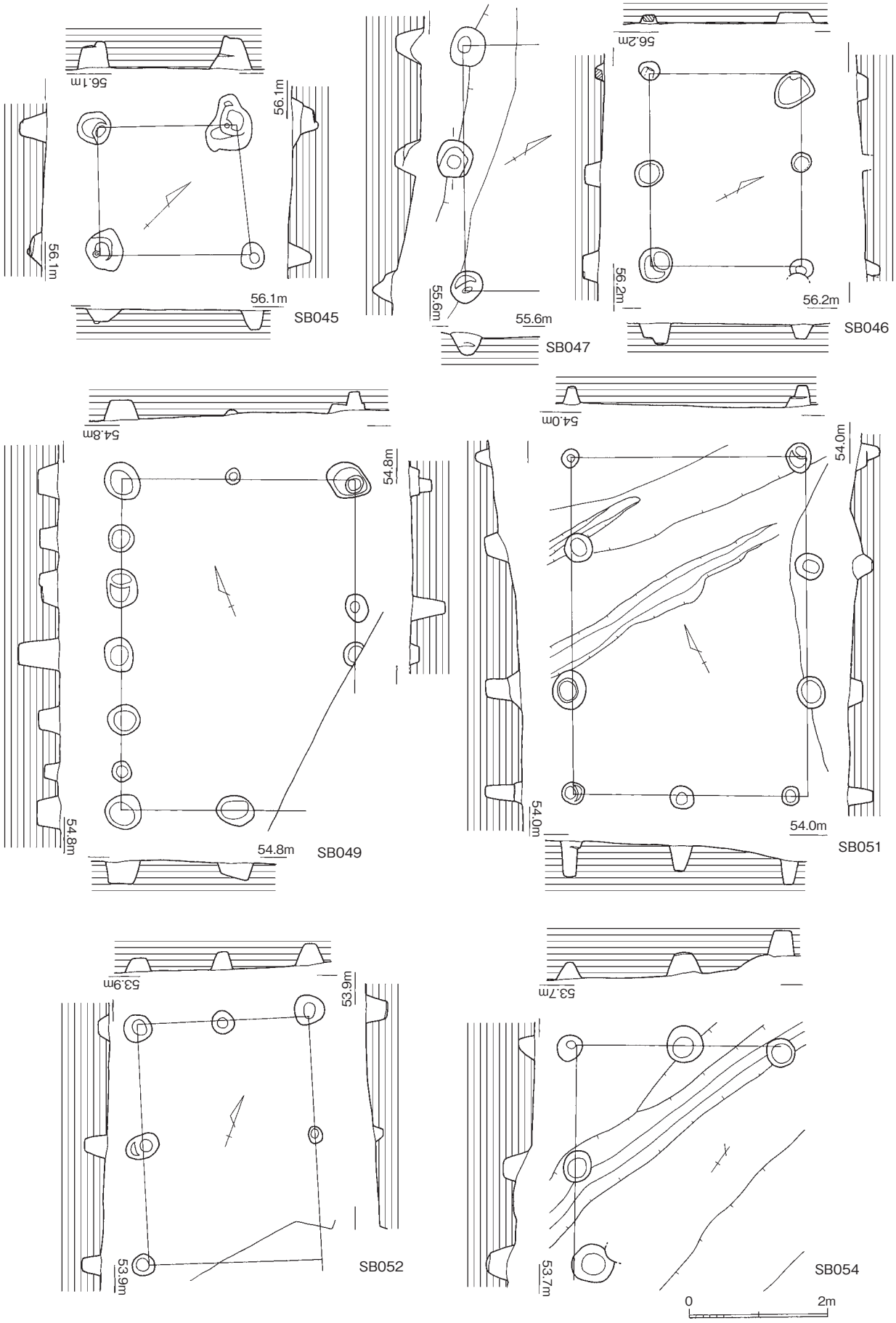


Fig.193　14区掘立柱建物実測図５（1/80）

-Eで、梁行400cm、桁行300cmを測る。柱穴は径60cmほどの円形、楕円形で径約18cmの柱痕跡を確認した。土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SB040（Fig.192）東半中央東よりで検出した2間×2間の建物である。方位はN-10°-Eで、南北380cm、東西380cm測る。柱穴は径60から80cmほどの円形を呈す。須恵器の坏片、土師器の小片が出土している。

SB041（Fig.192）SB040の南西側に重なる2間×2間の建物である。方位はN-80°-Eで、梁行270cm、桁行310cmを測る。柱穴は30cmほどの円形である。

SB042（Fig.192）SB040の南西側で検出した1間×1間の建物で、SB040と方位をほぼ同じくし北西側の柱筋がとおる。方位はN-75°-Wで、南北210cm、東西240cmを測る。柱穴は径40cmほどの円形である土師器の甕片が出土している。

SB043（Fig.192）東半東隅で2間×4間を検出し、さらに南の調査区外へ広がる。方位はN-9°-Eで、梁行380cm、桁行490cm以上を測る。柱穴は径60cm前後の楕円形で径18cmほどの柱痕跡を確認した。土師器の小片が出土した。

SB044（Fig.192）西半中央で2間×2間の建物を想定したが南東側が調査区外で確実ではない。方位はN-45°-Eで、梁行220cm、桁行300cmを測る。柱穴は径50cmほどの円形を呈す。

SB045（Fig.193）西半中央東よりで1間×1間の建物を想定した。南北180cm、東西200cmを測る。柱穴は径30から60cmほどの円形である。土師器の甕片、須恵器の小片が出土している。

SB046（Fig.193）西半東隅で1間×2間の建物を想定した。方位はN-60°-Wで、梁行220cm、桁行280cmを測る。柱穴は径30から40cmほどの円形である。土師器の小片が出土した。

SB047（Fig.193）西半東端で2間分の柱筋を確認した。東側に展開すると考えるが削平で失われる。方位はN-55°-Wで、延長360cmを測る。柱穴は径50cmほどの円形である。

SB049（Fig.193）東半南西端で検出した2間×2間の建物で南東側が調査区外となる。桁行西側は1間の間に間柱を2基づつ配す。方位はN-18°-Eで、梁行480cm、桁行340cmを測る。柱穴は50cm大ほどの円形である。土師器の小片と須恵器の壺片が出土している。

SB051（Fig.193）東半中央で検出した2間×3間の建物で、方位はN-27°-E、梁行340cm、桁行490cmを測る。柱穴は径20から40cmほどの円形である。

SB052（Fig.193）東半中央南側で確認した2間×2間の建物で南東隅は調査区外である。方位はN-18°-Wで、梁行250cm、桁行350cmを測る。柱穴は径20から40cmほどの円形である。

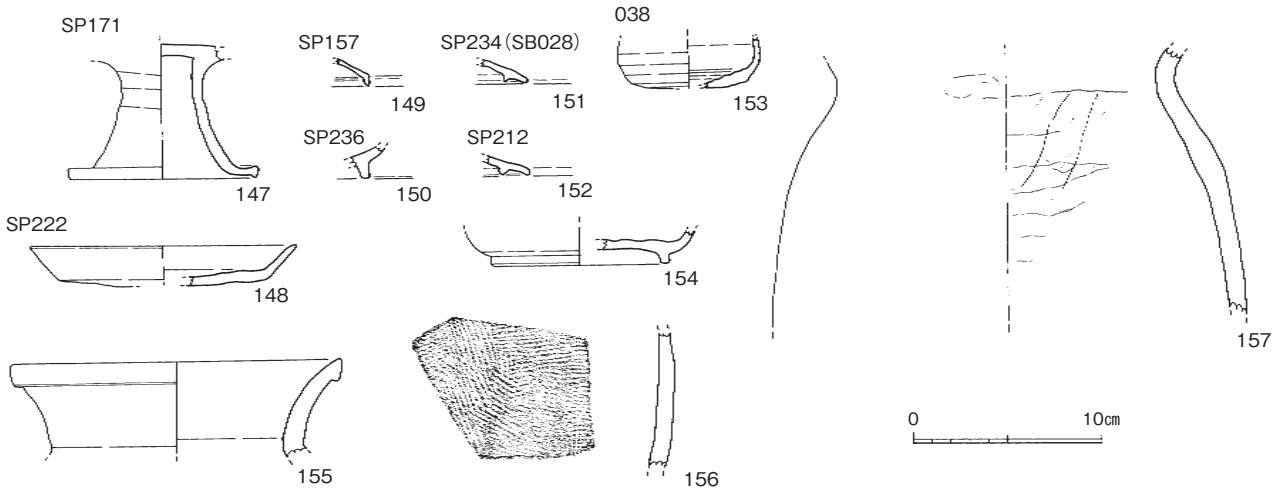


Fig.194　14区ピット、包含層出土遺物実測図（1/4）

SB054（Fig.193）東半中央東よりの段落ち分で2間×2間の建物を想定したが東側が削平され確実ではない。方位はN-34°-Wで、南北320cm、東西300cmを測る。柱穴は40cm大の円形である。この周囲は、しっかりしたピットが多いが、東側の削平のため復元できない。

（5）ピット

建物を復元した以外にも多くのピットを検出した。展開しないが並ぶものもある。遺物が出土したものもかなりあるが、ほとんどが土師器の小片で時期がはっきりするものはない。そのうちの6点の須恵器をFig.194に示した。147は高坏の脚で焼きが甘い。148は皿、149、151、152は須恵器の蓋、150は坏である。

（6）包含層

尾根筋の調査区であったため表土直下が遺構面となり包含層は少ない。SB021周辺、SB043の北側の包含層038で見られるくらいである。153から156（Fig.194）は包含層038で出土した須恵器で153は壺の底部、154は坏身。155、156は同一個体と考えられる須恵器の甕で焼きが悪い156は胴部で外面なで、内面に当て具痕が残る。同一個体の破片が10数点ある。

157はSB011南東付近で出土した土師器の甕で器面は荒れるが外面刷毛目、内面削りを施す。

（7）小結

緩やかな丘陵２の頂部に位置し、掘立柱建物を中心とした遺構を検出した。一連の遺構が11区へ続き、また調査区周辺へ広がると考えられる。

ピット出土の遺物はSB028（151）、SP212（152）の7世紀代の須恵器の蓋以外は8世紀代のものが多い。またSD020の時期が8世紀後半に求められ、これに切られるSB020は溝より古い。ピット内の小片遺物は積極的に遺構の時期を決める材料にはならないが、建物の多くは8世紀代で、7世紀後半、9世紀代のものもあると考えられる。この他SB019が黒色土器、土師器を出土し９世紀と考えられる。SB019の覆土は建物の柱穴の覆土とは異なり、時期差を示すと考えることもできよう。SK004、005が覆土から18-1区の落とし穴状遺構に近い。

12. 17区

事業地南東部で道路、水路建設に伴い280㎡の調査を行った。弧を描いて調査区を縦断する溝SD001を検出した（Fig.195）。幅120cm、深さ25cmを測り、砂混じりの灰褐色土を覆土とする。遺物は少ない。耕作に伴う溝と考えられる。158（Fig.196）は染め付けの碗で外面に花文を施す。畳付き付近は露胎である。159は表採品の龍泉窯系青磁碗で高台内は露胎である。

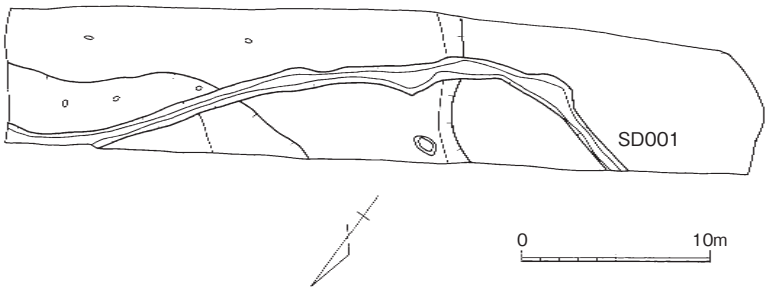


Fig.195　17区全体図（1/400）

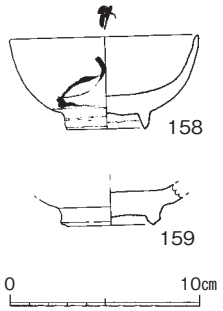


Fig.196　17区出土遺物
実測図（1/4）

13. 18区

事業地南よりに計画された道路、水路部分とそれに接する田面切り下げに伴う調査区で、調査面積は7264㎡を測る。便宜的に６つの区に分け記載する。18-1区と18-2区の北側が丘陵状の地形にあり、他は浅い谷の中になる。

1）18-1区

緩やかな丘陵の頂部から北側斜面に位置する。溝、焼土坑、土坑、掘建柱建物、ピットを検出した（Fig.197）。土坑では落とし穴と考えられるものがある。

（1）溝

現在の水路が調査区中央を縦断し、これに重なりながら溝SD030が併行する（Fig.197）。また、SD030に合流する小溝SD034、SD035を検出した。覆土は暗褐色から暗灰褐色の粘質土でそれぞれ多少色調が異なる。遺物は近世陶器片が1点出土した他は、古代の須恵器、土師器が出土している。近世、近代の耕作に伴うものと考えている。

（2）焼土坑

SK001（Fig.198）底のみが残る。炭粒が溜まり、床の一部が被熱赤変する。

SK002（Fig.198）隅丸三角形を呈す。長さ132cm、幅118cm、深さ20cmを測る。側壁が被熱で赤色、黄緑色に変化し、床に炭層を形成する。

SK003（Fig.198）底のみ残存する。床面には炭粒が残り、床の一部が被熱赤変する。

SK011（Fig.198）大部分を耕地造成の削平により失う。長さ140cm以上を測り、深さ33cmが残る。側壁は被熱で赤色、黄緑色化し、底に薄く炭粒が溜まる。

SK018（Fig.198）平面長方形を呈し、長さ180cm、幅100cm、深さ24cmを測る。側壁と床の一部が被熱赤変し、壁の内側は黄緑色を呈す。床に薄い炭粒層を形成する。

SK024（Fig.198）平面長方形を呈し、長さ156cm、幅112cm、深さ30cmを測る。側壁は被熱して赤色、黄緑色を呈す。炭層は南側の一部に残るのみである。

SK038（Fig.198）長楕円形を呈し長さ200cm、幅114cm、深さ32cmを測る。現在の水路に切られる。側壁北半が被熱により赤色、黄緑色になる。

（3）落とし穴状土坑

黄褐色粘質土を覆土とし、長方形に近い明瞭な平面形と垂直に近い壁を持つ土坑を落とし穴状の土坑として取り上げる。この種の土坑は14区、19区でも見られたが、ここで集中する。同様の覆土を持つ不整形のくぼみがあるが、壁がはっきりしないため人為的なものではないと考え、掘削しなかったものがある。

SK005（Fig.199）長さ140cm、幅74cm、深さ82cmと細長い平面形を呈す。底が幅30cm弱と狭い。

SK006（Fig.199）隅丸長方形を呈し、長さ125cm、幅75cm、深さ80cmを測る。底で径６cmほどの小穴を8個検出した。

SK008（Fig.199）170×100cmの浅い土坑の内側を、平面95×70cm、深さ170cmまで掘り込み、礫層に達している。浅い部分のピットの覆土は深い部分と同様である。内側の側壁はほぼ直に立つ。

SK010（Fig.199）平面長方形で長さ120cm、幅80cm、深さ38cmを測る。他と比べると浅いが、壁の立ち上がりは明瞭である。

SK012（Fig.199）平面長方形を呈し長さ166cm、幅100cm、深さ40cmを測る。底には幅30cmほどの小穴２つがある。

SK015（Fig.199）平面長方形で長さ124cm、幅90cm、深さ80cmを測る。底中央には径25cm、深さ25cm

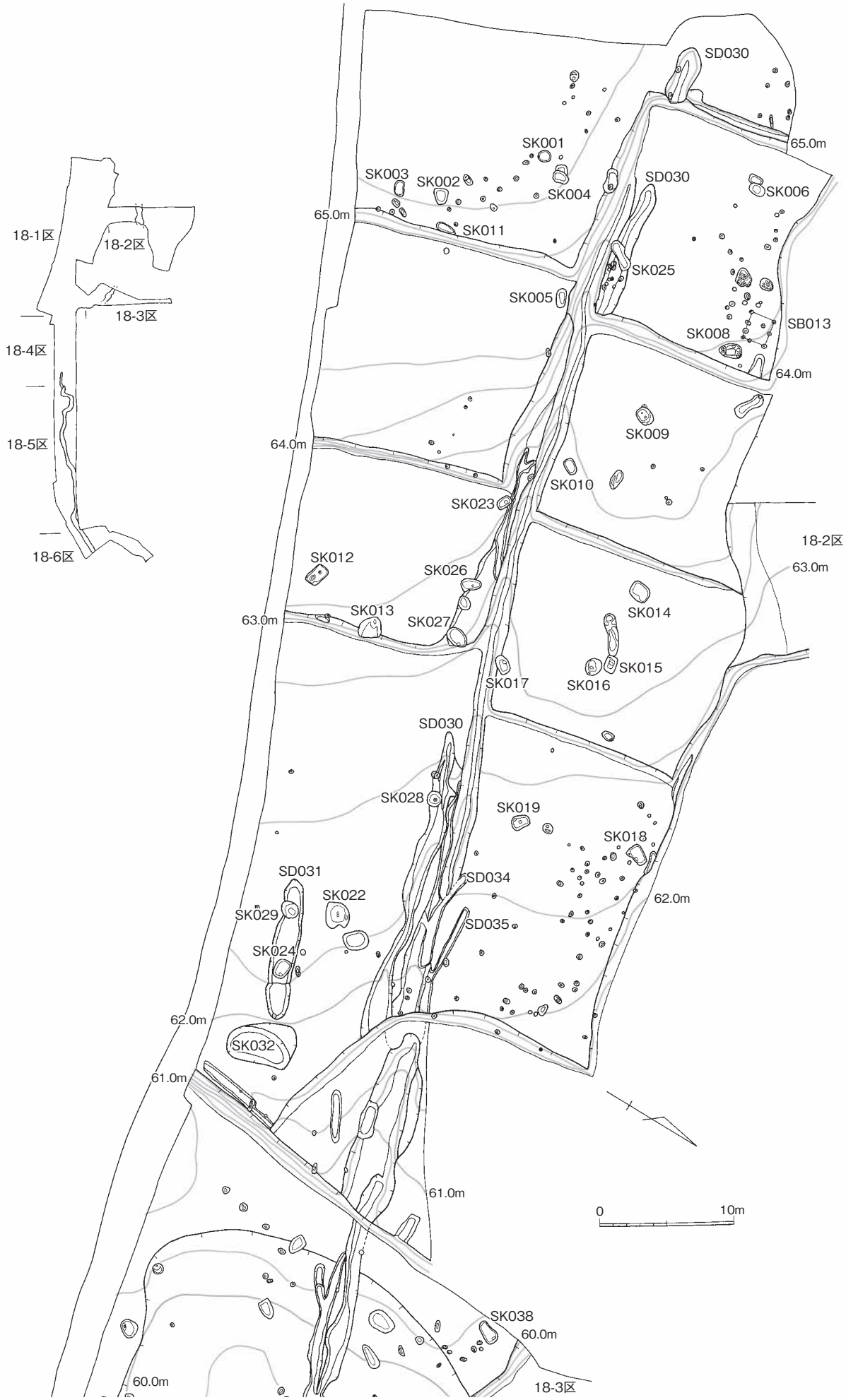


Fig.197　18-1区全体図（1/400）

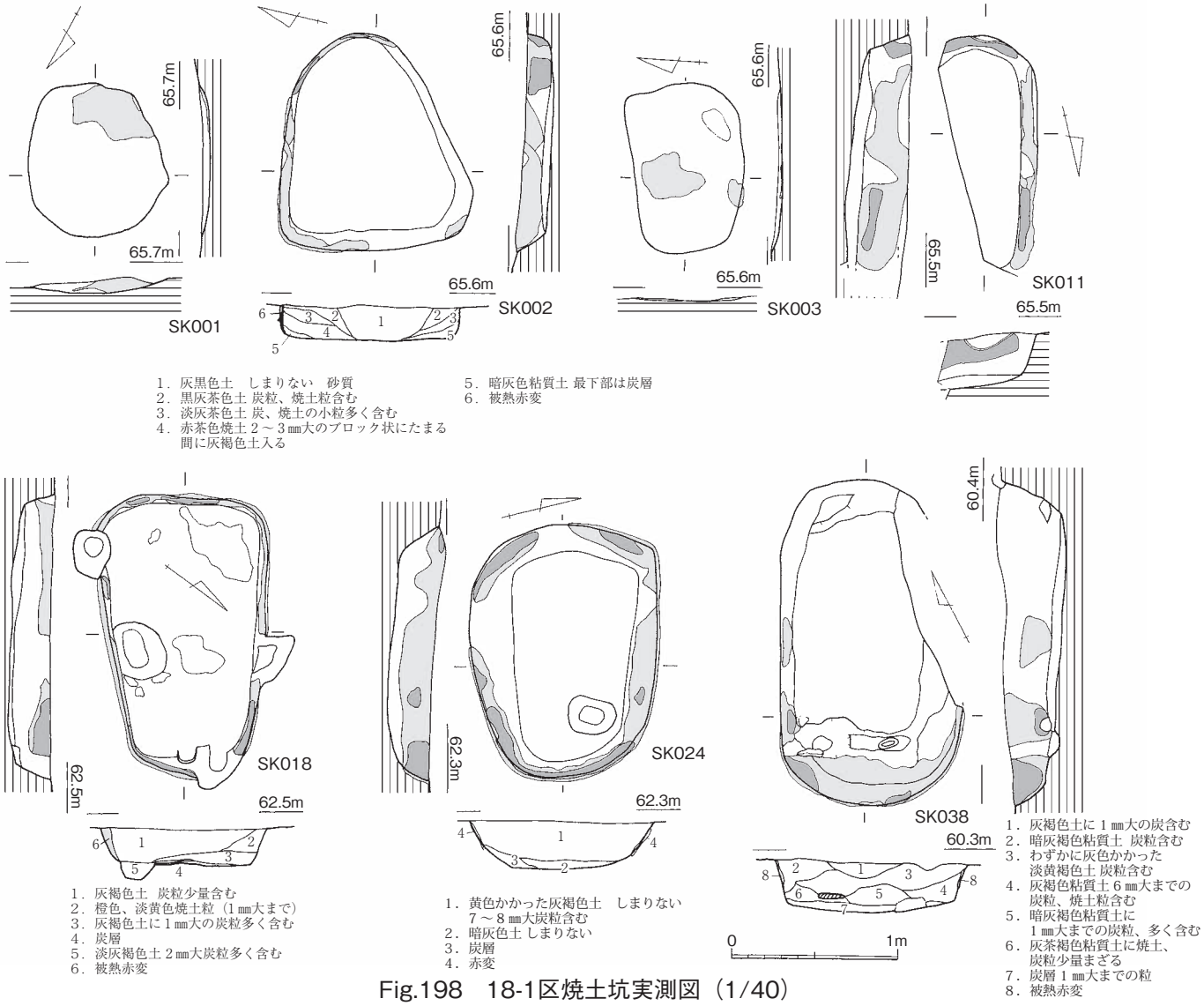


Fig.198　18-1区焼土坑実測図（1/40）

ほどの小穴がある。

SK016（Fig.200）上端は平面不整円形だが、深く掘り込んだ部分は平面長方形で長さ95cm、幅75cm、遺構面からの深さ136cmを測り、底は礫層に達する。

SK017（Fig.200）上端の平面楕円形で、中位から平面長方形を呈し、95cm、幅65cm、遺構面からの深さ145cmを測り礫層に達する。底の中央には幅20cmほどの小穴がある。

SK022（Fig.200）上端は不整形で、中位から平面長方形を呈し、長さ130cm、幅90cm、遺構面からの深さ100cmを測る。底中央には径14cm、深さ20cmほどの小穴２つがある。

SK023（Fig.200）平面長方形を呈し、長さ114cm、幅65cm、深さ45cmを測る。底には径25cm、深さ25cmほどの小穴がある。

SK028（Fig.200）平面隅丸方形を呈し、平面110×105cm、深さ70cmを測る。底には径25cm、深さ28cmほどの小穴がある。

SK029（Fig.200）平面楕円形を呈し、長さ115cm、幅93cm、深さ70cmを測る。溝に切られる。

（4）土坑

SK004（Fig.201）平面不整方形、断面すり鉢状を呈す。覆土はやや粘質の淡黄褐色土で若干の炭化物を含む。風倒木痕の可能性がある。

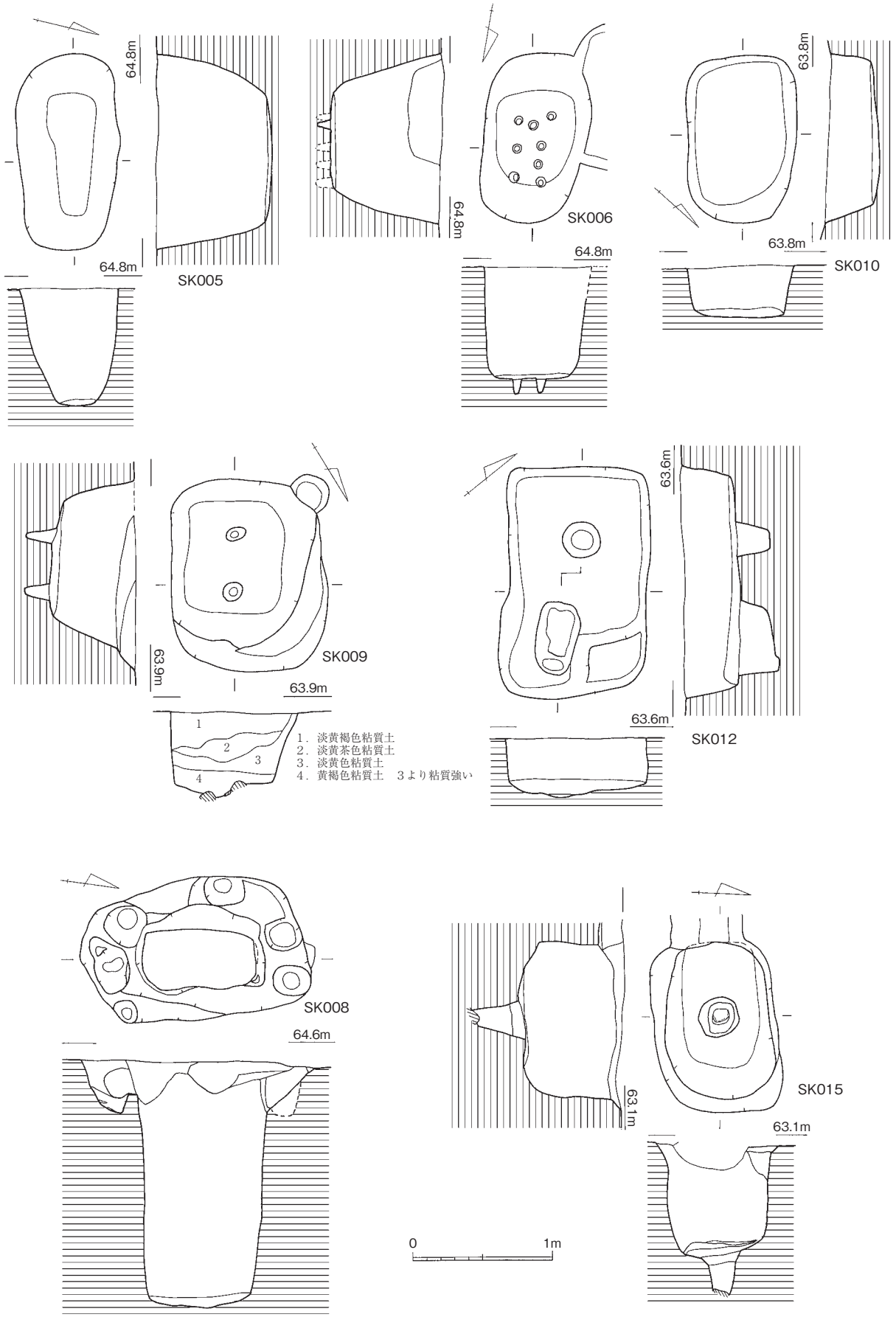


Fig.199　18-1区落とし穴状遺構実測図１（1/40）

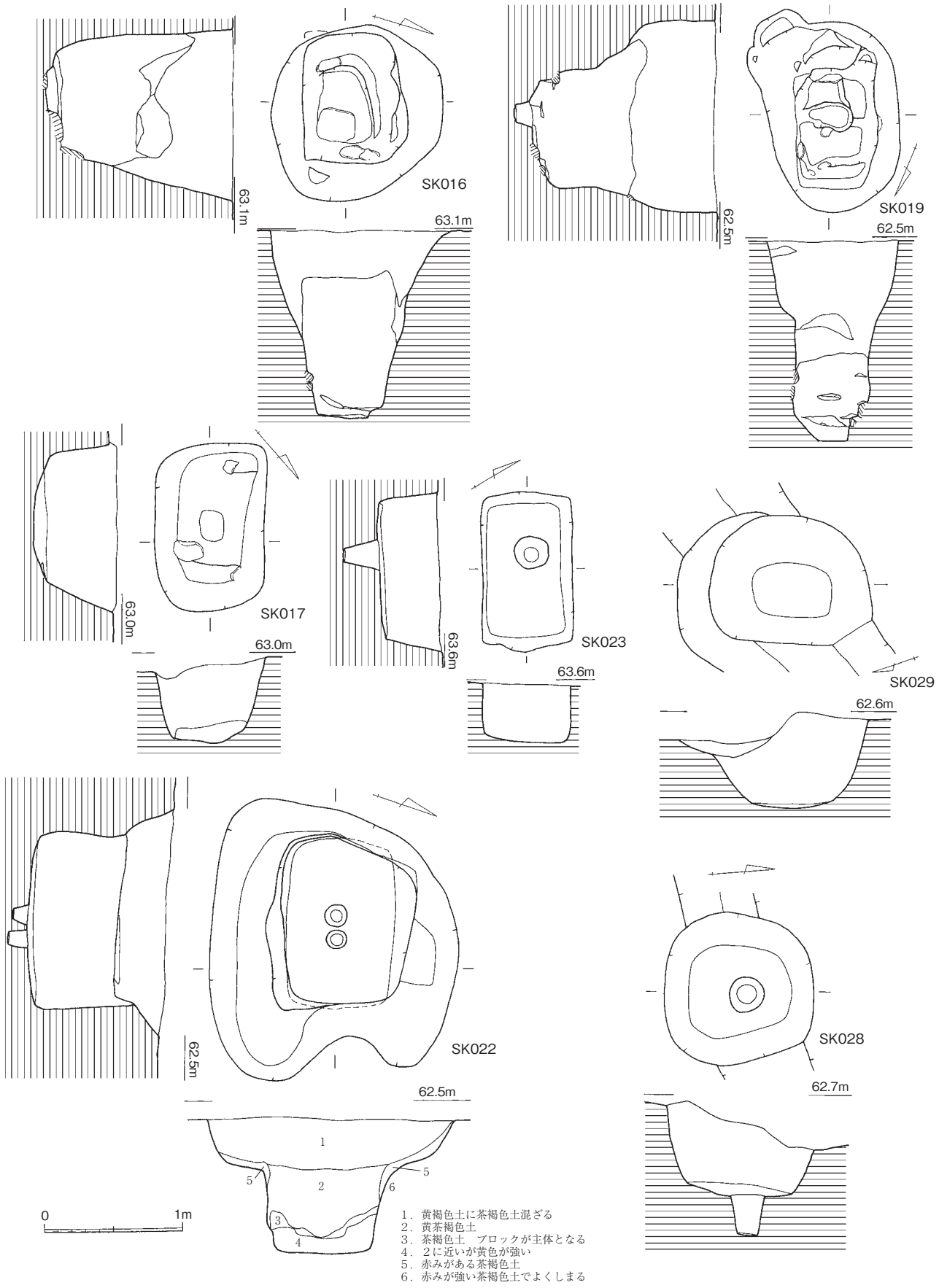


Fig.200　18-1区落とし穴状遺構実測図（1/40）

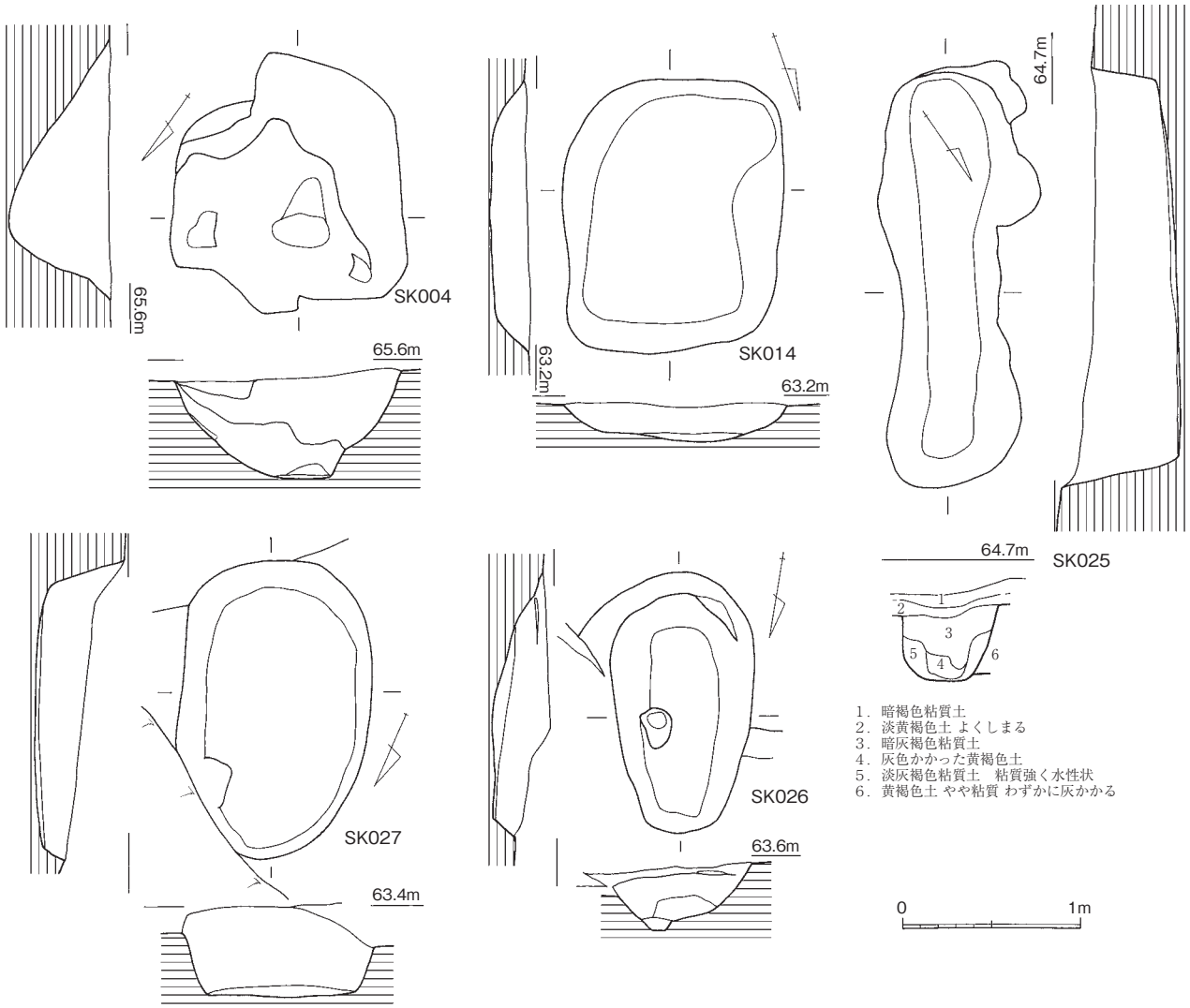


Fig.201　18-1区土坑実測図（1/40）

SK014（Fig.201）平面長方形を呈す。155×120cm、深さ22cmを測る。立ち上がりは緩やかで、覆土はやや粘質の黄褐色土である。

SK025（Fig.201）溝状を呈し長さ238cm、幅74cm、深さ64cmを測る。SD030に切られる。覆土は灰色がかった黄褐色粘質土である。

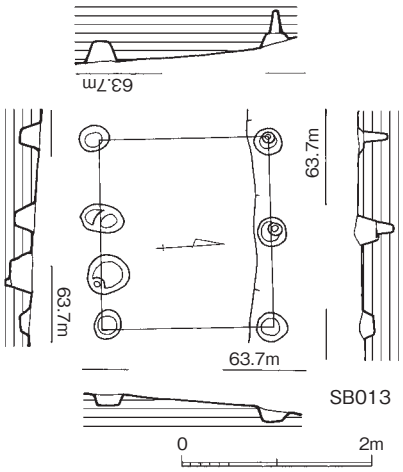


Fig.202　18-1区掘立柱建物実測図（1/80）

SK026（Fig.201）平面楕円形を呈し、長さ168cm、幅108cm、深さ50cmを測る。溝、耕地の段造成で削平を受ける。

SK027（Fig.201）平面楕円形を呈し、北側は段造成で削平を受ける。長さ146cm、幅95cm、深さ35cmを測る。

（5）掘建柱建物

SB013（Fig.202）調査区西端部で1間×2間の建物を想定した。方位はN-85°-W。梁行180cm、桁行200cmを測る。柱穴は平面円形で径30cm前後と周囲のピットと変わらない。

（6）ピット

北側の斜面でピットを検出した。まとまるのは

SB013のみである。遺物が出土したのは1基のみで須恵器、土師器の小片である。

2）18-2区、18-3区

両区とも北側は緩やかな丘陵の南側斜面、南側は浅い谷となる。溝、土坑、掘建柱建物、製鉄関連遺構を検出した（Fig.203）。

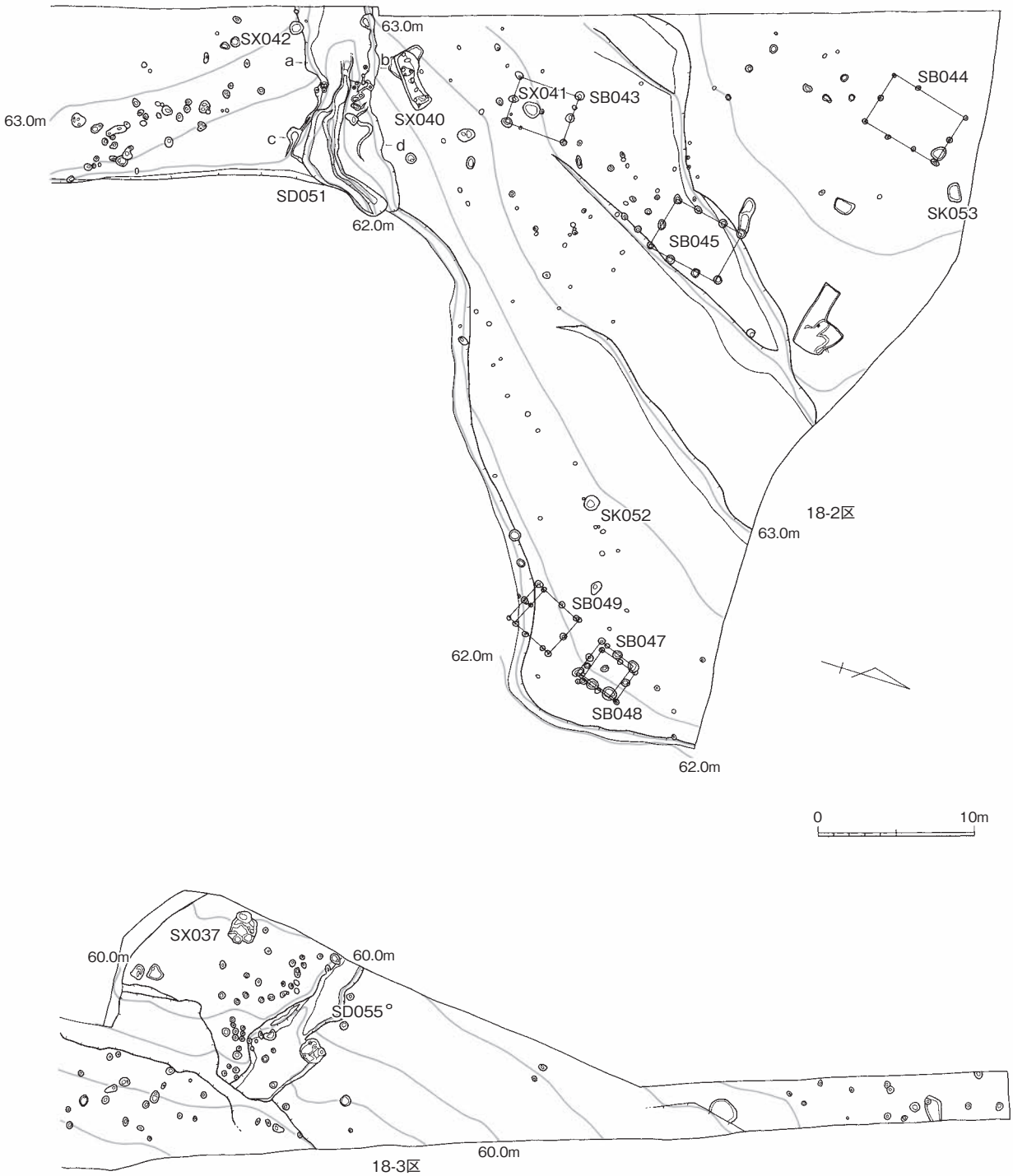


Fig.203　18-2、-3全体図（1/400）

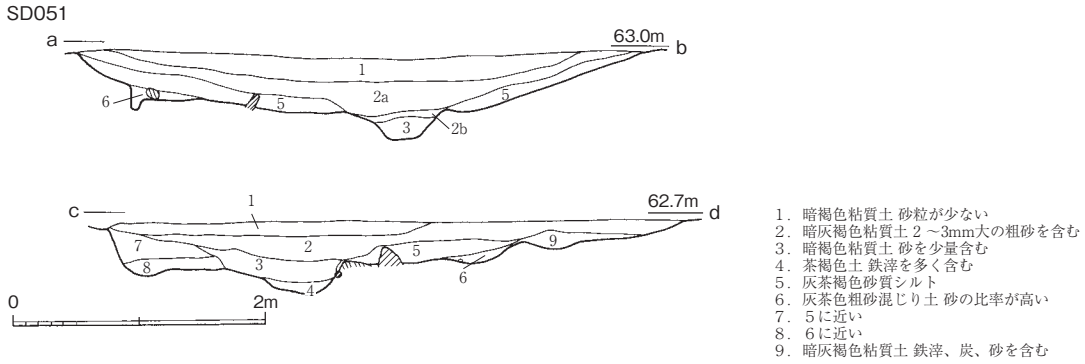


Fig.204　18-2区溝土層実測図（1/60）

（1）溝

SD051、055（Fig.203､204､205）18-2、-3区それぞれの南側で検出した。位置関係と覆土、出土遺物等から同一の溝と考えられる。SD051は幅450cm、深さ60cmを測る。底は幅60cmほどが深い。南端では北へ蛇行する。SD055は南東方向へ向かい、南端は削平で失う。幅200cm、深さ30cmを測り一部底が深い。覆土は暗灰褐色、茶褐色粘質土で鉄滓の混入が目立つ。SD051両岸のSX040、042のほか、さらに上流に製鉄遺構の存在が予想される。遺物は比較的多い。

出土遺物　160から180はSD051部分の出土である。160から173は須恵器である。160は坏、161から164は高台付き坏、165は坏、166から170は坏蓋、171、172は甕である。174、175は土師器の坏である。174は口縁が広がる。176、177は須恵器の甕の胴部で176は外面平行叩き、内面の当て具も平行である。177は外面疑似格子目叩き、内面は同心円状叩き痕を施す。178から180は土製の羽口である。先端部にはガラス質が付着し、周辺は青みを帯びる。178は胎土が細かく、179、180は砂粒を多く含む。

181から196はSD055出土である。181から192は須恵器である。181から184は高台付き坏で184は焼きが甘い。185から188は蓋、189から191は皿である。192は壷の底部であろう。193から196は土師器である。193、194は甕で193胴部は外面刷毛目、内面削り調整。194は器面が荒れ、砂粒を多く含む。195は坏で胎土精良。2次焼成で外面底の一部が桃色を呈す。196は高台付き坏である。両地点とも須恵器が多く土師器は少ない。鉄滓はSD051で14箱、SD055で1箱出土している。

（2）土坑

いずれも18-2区で検出した。

SK052（Fig.206）径90cmの円形の土坑で深さ160cmを測る。覆土は灰褐色粘質土である。落とし穴か。

SK053（Fig.206）平面隅丸長方形を呈し、長さ145cm、幅95cm、深さ85cmを測る。底に径20cmのピットを有す落とし穴状遺構である。

（3）掘建柱建物

いずれも18-2区検出である。

SB043（Fig.207）鍛冶遺構SX041を覆う１間×2間の建物を想定した。方位はN-1°-E。短辺は150cmを測り間に柱を配す、長辺は200cmで1間である。

SB044（Fig.207）2間×3間の建物で梁行175cm、桁行264cmを測る。方位はN-13°-E。柱穴は径20から30cmと小形で浅い。覆土は淡茶色粘質土である。西側の柱穴１つは検出できなかった。

SB045（Fig.207）2間×3間の建物で梁行170cm、桁行240cmを測る。方位はN-10°-E。柱穴は径50cmほ

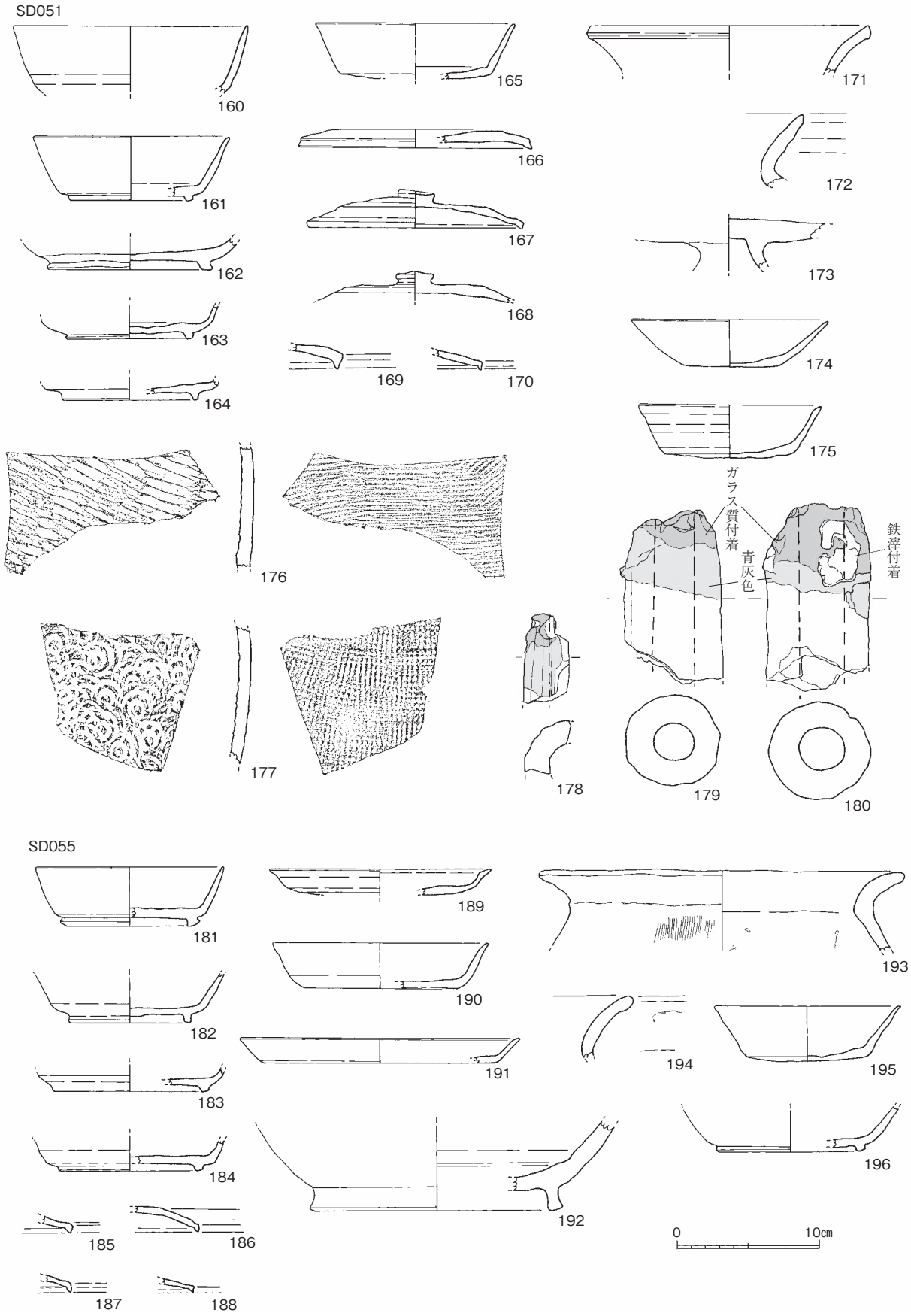


Fig.205　18-2、-3区溝出土遺物実測図（1/4）

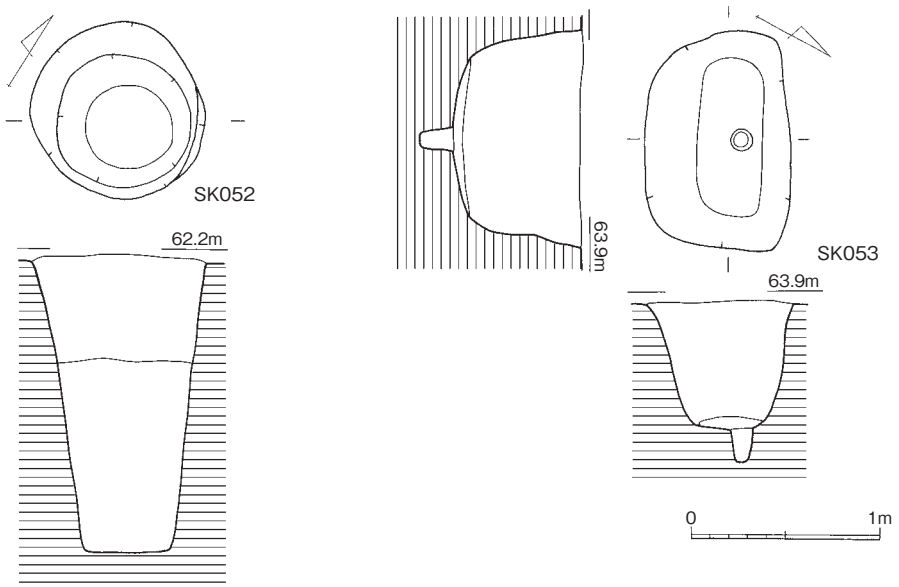


Fig.206　18-2区落とし穴状遺構、土坑実測図（1/40）

どの円形で、北側の１つは検出できなかった。覆土は灰茶褐色土である。南側には東西にピットが並び、関連する可能性がある。

SB047（Fig.207）2間×2間の総柱建物でSB048と重なる。1辺130cmを測る。方位はN-21°-E。柱穴は円形で径40から80cmとばらつきがある。覆土は灰茶褐色砂質土である。

SB048（Fig.207）1間×2間の建物で梁行110cm、桁行230cmを測り、柱穴は25cm前後である。方位はN-16°-E。覆土は灰茶褐色砂質土である。

SB049（Fig.207）SB048の南に位置する。2間×2間の建物の南に庇が付く。方位はN-23°-E。一辺145cmを測り、柱穴は径30cm程の円形である。

（4）製鉄関連遺構

SX037を18-3区、040から042を18-2区で検出した。

SX037（Fig.208）西側の200cm大の不整形土坑と東側の50cm大の土坑からなる。中央の製鉄炉が削平を受け、廃滓土坑が残存したものと考えられる。長軸は等高線に沿った方向で、残存長270cmを測る。西側の土坑の底は凹凸があり、南側は壁が抉れる。鉄滓4箱が出土した。

SX040（Fig.208､209）長さ375cm、幅90cmほどの東西に長い土坑で、両端の幅は広がる。床面は凹凸が著しい。覆土は鉄滓、焼土、炭粒を多く含み、上層は中央に向かって堆積する。中央が炉と考えられるが焼けた部分はない。両側の廃滓坑は特に深いわけではなく、平面プランも広がらない。鉄滓類2箱が出土した。

出土遺物　197、198は須恵器の坏身である。このほかに須恵器の小片が出土した。

SX041（Fig.208）径25cmの範囲が深さ5cmほど赤変していた。鍛冶炉の底を想定している。南側の浅い土坑は赤変範囲を切る。1袋分の鍛冶滓が出土している。SB043がこれを覆う。

SX042（Fig.208、巻頭図版）径25cmの範囲が厚さ3cmほど赤変し、炉跡と考えられる。その東には二つの浅い土坑が並び、北側の覆土は炭粒を多く含む。鍛冶炉を想定した。

（5）ピット

数は他区と比べて少ない。遺物が出土したものもあるが小土器片のみである。

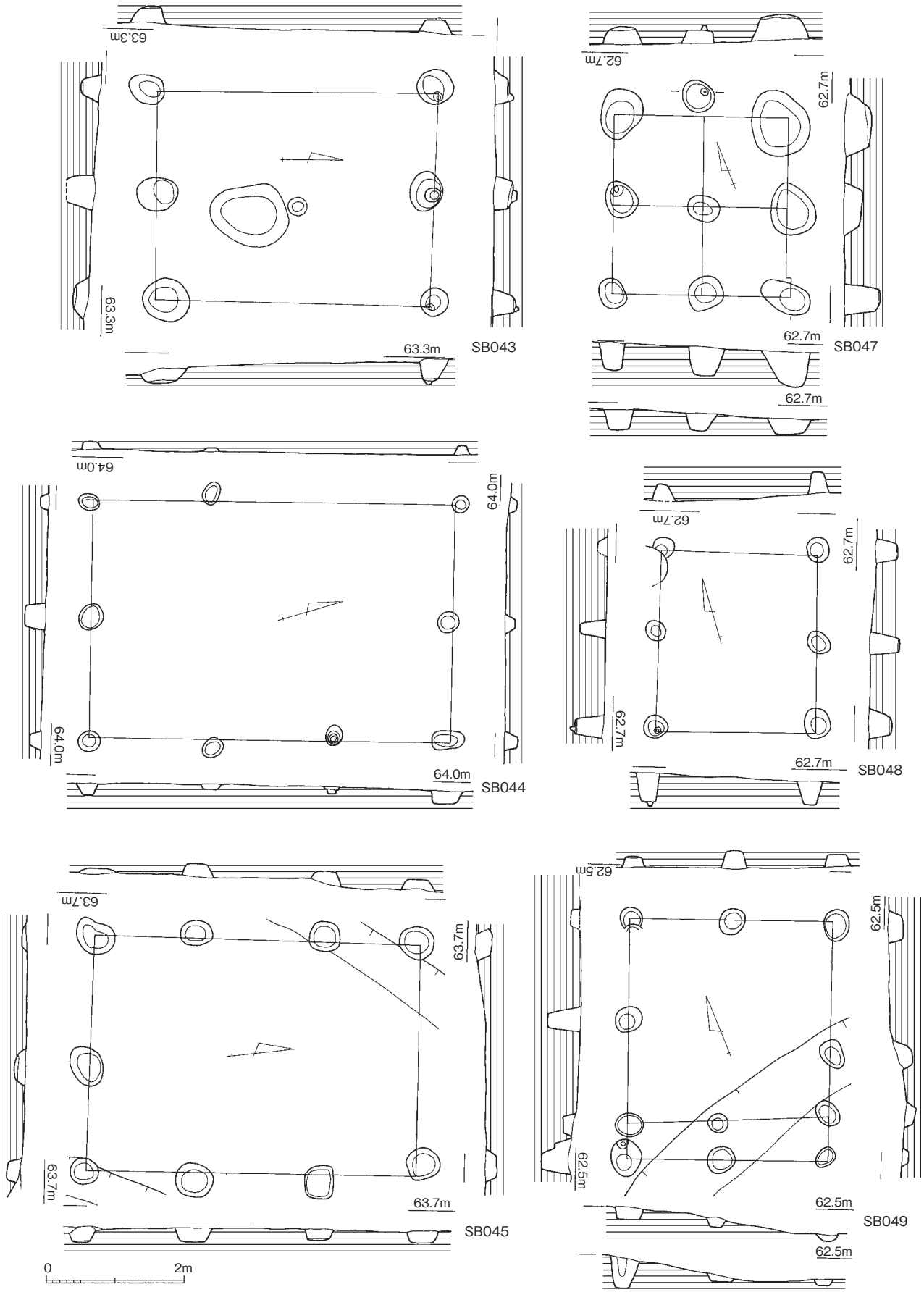
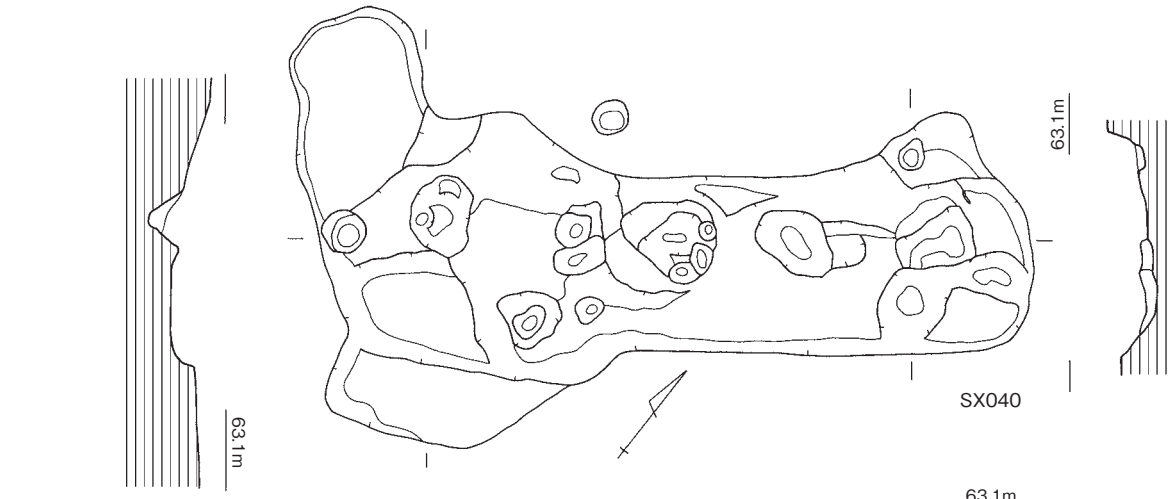
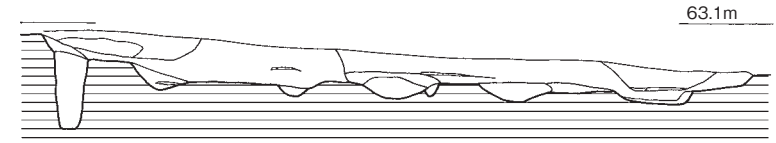
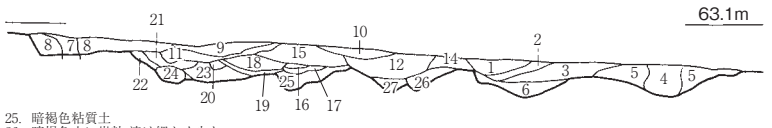


Fig.207　18-2区掘立柱建物実測図（1/80）

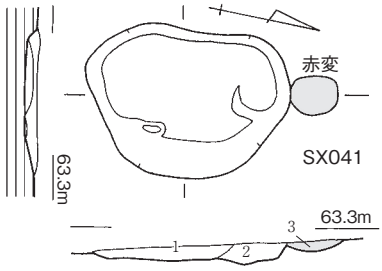


1．黄茶褐色土に鉄滓入る
2．暗茶褐色土に細かな鉄滓
3．黄茶褐色土に１㎜大の鉄滓
4．炉壁主体 5より明るい茶褐色土
5．暗茶褐色土に鉄滓、炉壁
6．灰かかった茶褐色土 1㎝大の鉄滓が充満
7．灰褐色土 砂粒が多く入る
8．灰色粘質土 砂は他より少ない
9．灰茶色土
10．１にほぼ同じ
11．黄色土に暗灰色土が筋状に入る 砂少ない
12．暗茶褐色土
14．黄褐色滓の集まり
15．黄色をおびた暗茶褐色土に滓
16．炭
17．明黄色滓
18．15に近い
19．橙色砂 焼土
20．やや大型の滓
21．灰褐色土に小型の滓
22．炭
23．上部は淡黄褐色土 下部は橙色が強い
24．滓

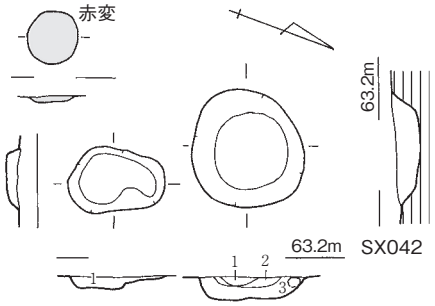




25．暗褐色粘質土
26．暗褐色土に炭粒 滓は細かく少ない
27．灰褐色土
すべて粗砂混じり
特に記していないものは滓が入る

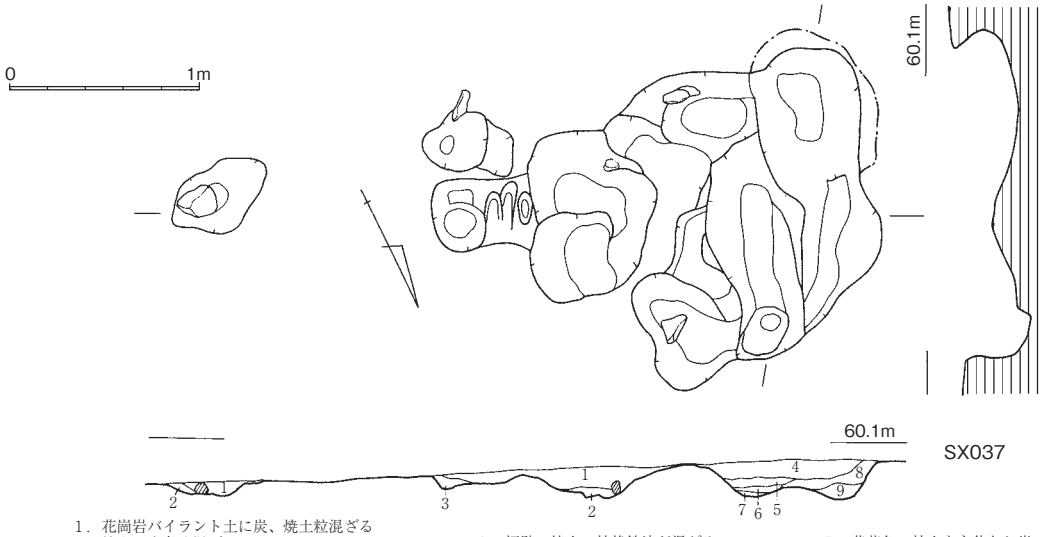


1．灰茶褐色、黄褐色粘質土の混土
2．黄褐色土に淡灰色土少量含む



1．黄褐色粘質土に淡灰色粘質土

1．暗灰色土３㎜大の炭粒入る
2．灰かかる淡黄褐色粘質土に炭粒少量含む
3．暗褐色粘質土に炭粒入る



1．花崗岩パイラント土に炭、焼土粒混ざる
2．焼土　炭多く混ざる

1．炉壁、焼土、粒状鉄滓が混ざる
2．暗茶褐色土　しまりない　少量の炭
3．２に近い
4．焼土、1、2㎝大の鉄滓　炭多く含む
全体的に灰色系の色調

5．黄茶色の粘土を主体とし炭、焼土が少量混ざる
6．茶色系の粘土に炭粒、焼土、鉄滓が多く入る
7．暗褐色系の粘土に微細炭粒入る
8．黄色をおびた灰褐色土に炭粒混じる
9．淡黄灰色粘質土に少量の炭粒

Fig.208　18-2、-3区製鉄関連遺構実測図（1/40）

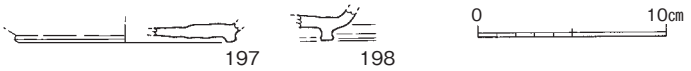


Fig.209　18-2区SX040出土遺物実測図（1/4）

3）18-4、5、6区

調査区全体が浅い谷地形の中にある。溝、焼土坑、土坑、製鉄関連遺構、ピットを検出した。SD060が調査区を縦断し、土器、鉄滓が今回の調査中最も多く出土した。周囲に製鉄炉が点在しSX062は規模が大きめである。

（1）溝

SD060（Fig.210～215）18-4区南端付近から現れ調査区を縦断する。位置関係、覆土等から18-2、3区のSD051、055の続きと考えられる。便宜的に12の小区に分け、遺物を取り上げた。SX062周りの1、2区ではSX062を迂回するように半円を描く。幅2mを測り、深さ50cm、断面逆台形を呈す。黒褐色の粘質が強い覆土を主体とし、焼土粒、炭粒を多く含む。（Fig.210）特に2区では底に鉄滓が張り付くように溜まる。3、4区ではわずかに蛇行しながら走る。鉄滓は出土したが2区ほどの量ではない。5、6区では南側が削平され、北岸と床のみが残存し、東端では床のみである。従って遺物は少ない。7、8、9区は幅2mほどで断面逆台形を呈す。覆土は暗褐色の粘質シルトで2区付近より粘質が弱い。また8区から下は浅い谷状の落ち全体を砂粒を多く含む灰褐色粘質シルトが覆う。10、11区では幅3から4mと広がり、断面は浅く緩やかになる。12区ではさらに浅くなり、谷の堆積の底という様相を呈す。

出土遺物　遺物は12区に分けて取り上げた。以下４つに分けて示す。201から210は1、2区からの出土で208までは須恵器である。201は高台付き坏、202は坏、203から206は蓋、207、208は甕である。208の外面頸部にはヘラ描きがあるが意識的なものか不明である。209、210は土師器の坏と皿である。ともに胎土は細かい。

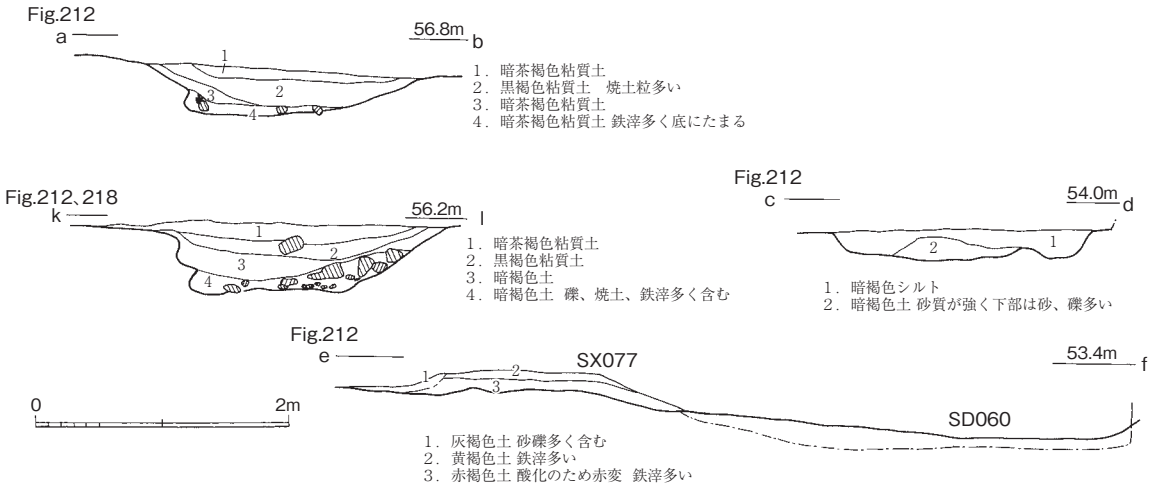


Fig.210　18区SD060土層実測図（1/60）

Fig.211　18-4区全体図（1/400）

Fig.212　18-5、-6全体図（1/400）

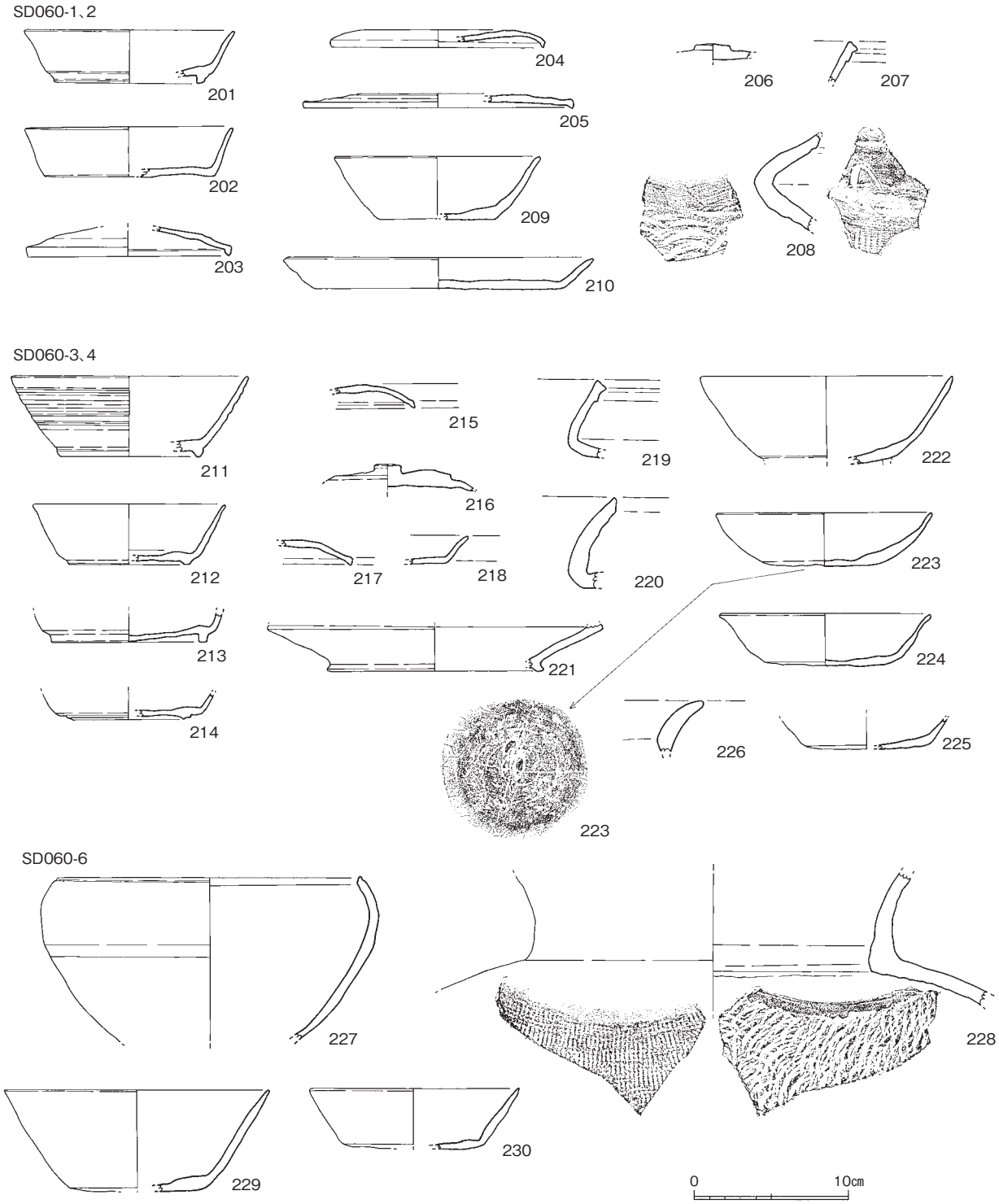


Fig.213　18区SD060出土遺物実測図１（1/4）

211から226は3、4区出土で221までは須恵器である。211から214は高台付きの坏。211は体部外面に成形時の凹線が入る。小片からの復元。215から217は蓋。216は鉄滓が少量付着する。218は皿、219、220は甕の口縁、221は壷の底部である。222は土師器の坏で高台が剥げる。胎土精良。223は土師器の坏で底には浅い十字のヘラ描きがある。胎土精良。224、225は焼きの悪い須恵器か。226は土師器の甕で胎土に砂粒を多く含む。227から230は６区の出土である。227、228は須恵器で鉢と甕。228は外面疑似格子叩き、内面同心円状叩き痕が残る。229、230は土師器の坏である。

231から268は8、9区出土である。231から261は須恵器。231から240、253は高台付き坏で237は焼き

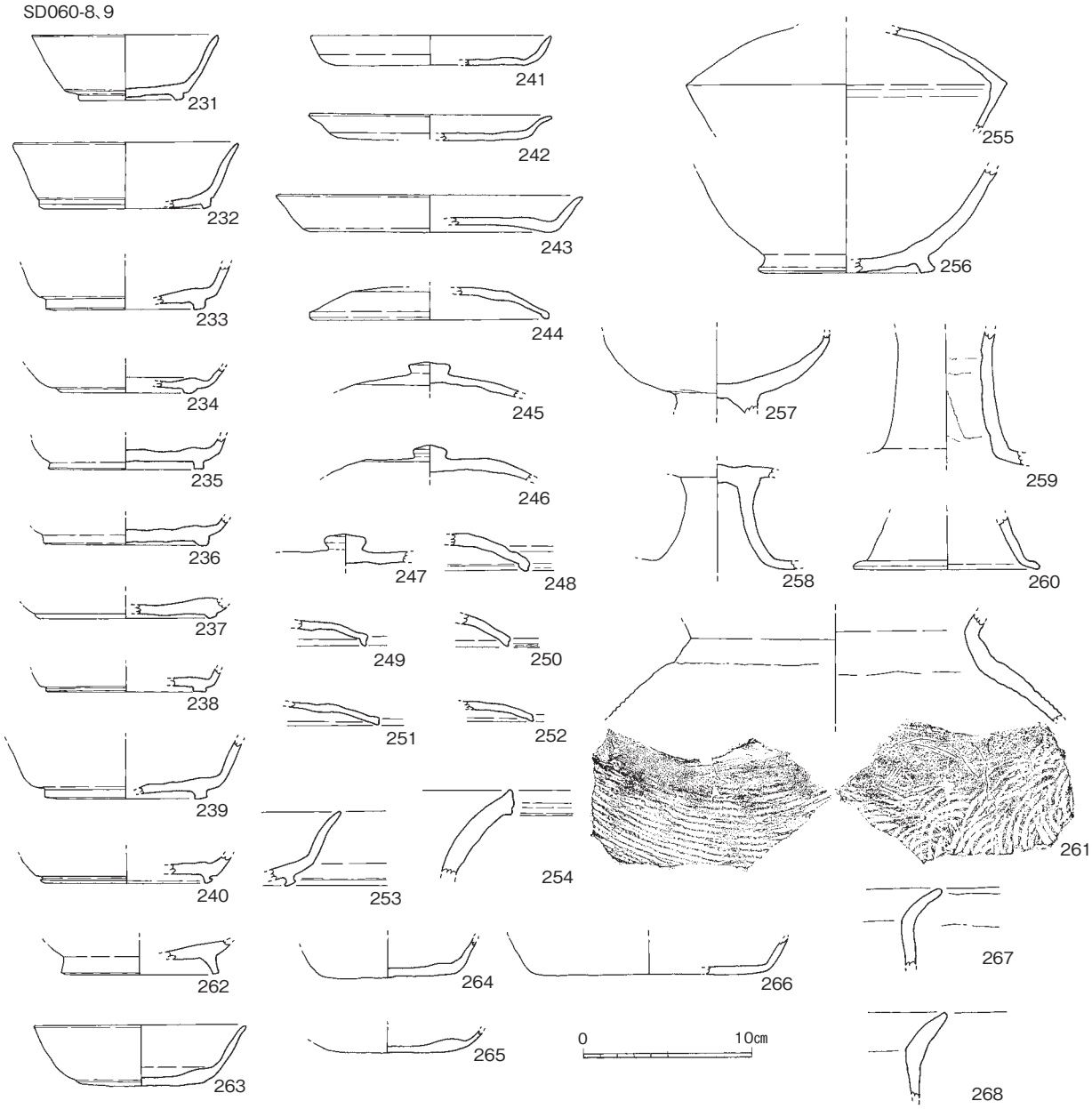


Fig.214　18区SD060出土遺物実測図２（1/4）

が悪い。241から243は皿で241の底は回転ヘラ削り、242はヘラ削りを施す。244から252は蓋で248は焼きが甘く淡橙色を呈す。254は甕の口縁部、255は長頸壷、256は壷の底部である。257から260は高坏で257坏部下部にはヘラ削りを施し、小豆色を呈す。261は甕で外面は平行叩き、内面同心円状当て具痕が残る。内面小豆色を呈す。262から268は土師器で262は高台付き坏。263から265は坏でいずれも胎土精良。266は皿で胎土精良。267、268は甕で多くの砂粒を含む。

269から279は10区出土で276までは須恵器で上層の灰褐色粘質シルトの遺物も含む。269から271は高台付き坏、272は壷、273は蓋、274、275は皿である。276は鉢で焼きが悪く瓦質に見える。277から279は下層のSD060部分の出土で277、278は須恵器で蓋と高台付き坏。279は土師器の甕の口縁部で外面に刷毛目がわずかに残る。

280から283は11、12区出土で上層を含む。280は須恵器の高台付き坏、281は須恵器の壷の底部である。282は須恵器の壷で沈線間に掻き目の後、板状工具の木口により有軸羽状文を施す。283は土師器

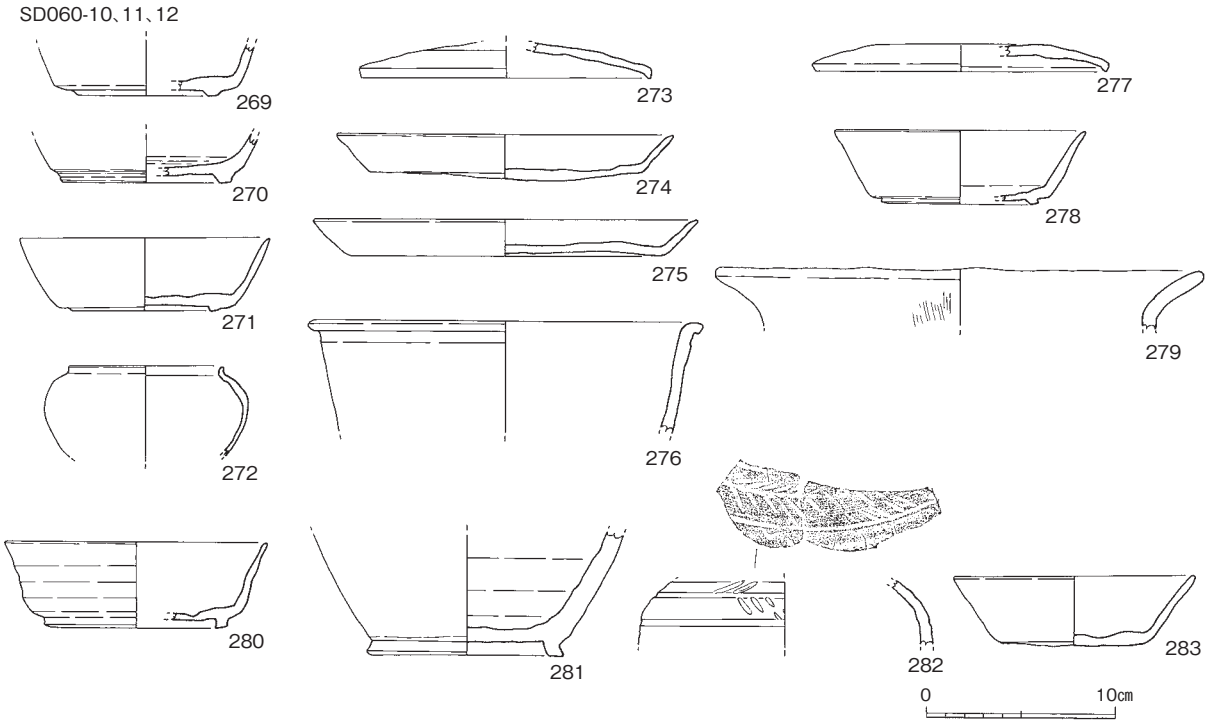


Fig.215　18区SD060出土遺物実測図３（1/4）

の坏で完形に接合した。鉄滓は全体で19箱出土している。

SD063（Fig.212）SX062の南側を流れる浅い溝で東西端は途切れる。幅2mを測る。（Fig.219cd土層）覆土は暗褐色粘質土である。遺物は須恵器の坏の小片、鉄滓1箱が出土している。

SD064（Fig.212）SD053の東に4条の溝が重なるように走る。覆土暗灰褐色粘質土で鉄滓1700ｇ出土した。同一溝の流れの違いか。

SD071（Fig.211）SD060の北に浅く東西に長いくぼみを検出した。SD060の痕跡と考えられる。

（2）焼土坑

SK065（Fig.216）18-4区南端で北半は調査区外になる。隅丸長方形で幅72cm、深さ28cmを測る。側壁、床の一部が被熱赤変し、壁の一部は黄緑色を呈す。床に10cmほどの炭粒層を形成する。土師器の甕片、鉄滓少量が出土した。

SK069（Fig.216）18-4区中央北側に位置する。楕円形を呈し、底のみの残存で深さ10cm弱である。壁と床の一つが被熱赤変する。床に薄い炭粒層がある。須恵器の皿、土器の小片が出土した。

SK079（Fig.216）18-５区東の谷斜面で検出した。楕円形を呈し、底付近のみ残る。壁の一部が被熱赤変し、床に薄く炭粒が溜まる。

SK080（Fig.216）18-6区中央で検出した。底のみが残り、覆土は炭粒である。

（3）土坑

SK061（Fig.211、217）SD060の1区の北西に隣接する不整形の浅いくぼみ状遺構で、南北600cm、深さ20cmを測る。覆土は暗灰褐色粘質シルトである。土器類が出土した。

出土遺物　284から289は須恵器である。284は高台付きの坏、285から287は返りが付く坏身である。288は直口の蓋。290は壺の口縁部である。289は土師器の甕の口縁部。ここでは周辺の遺構にはない285から287のような6世紀末から7世紀初めの遺物が出土している。直接この遺構の時期を示すとは限らないがこの時期の遺構の存在を示唆している。土師器片も比較的多く出土している。

SK066（Fig.211、217）18-4区中央で検出した浅いくぼみで、灰褐色砂質土が3、4cmたまり、床面は鉄

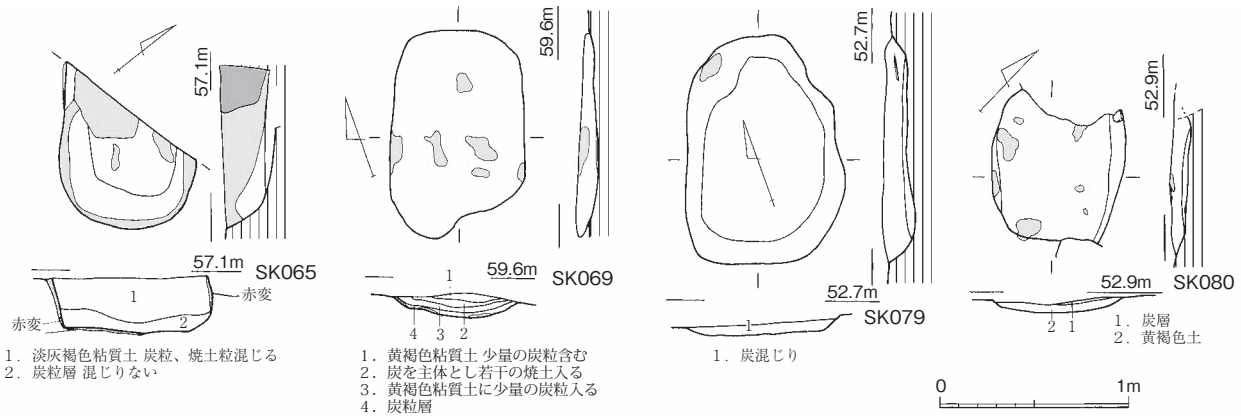


Fig.216　18-4、-5、-6区焼土坑実測図（1/40）

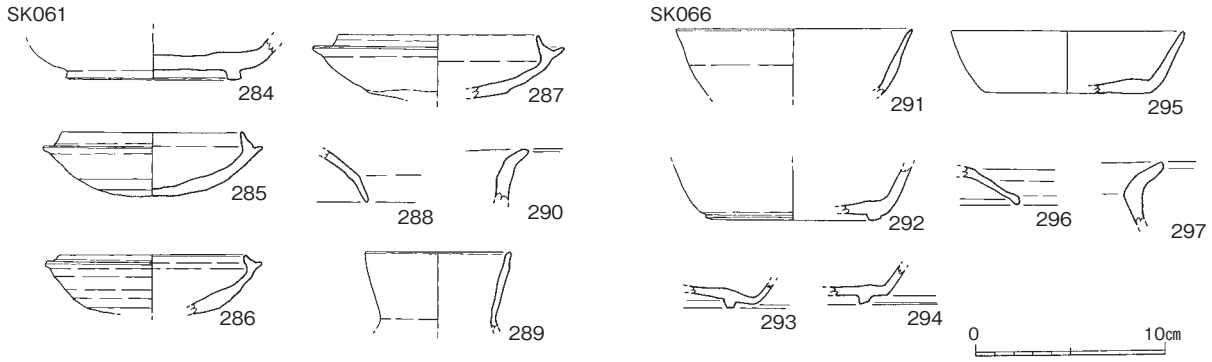


Fig.217　18-4、-5区土坑出土遺物実測図（1/4）

分が沈着している。鉄滓1箱と土器類が出土した。

出土遺物　291から296は須恵器である。291から295は坏で295は焼きがあまい。296は蓋。297は土師器の甕の口縁部で砂粒を多く含む。

（4）製鉄関連遺構

炉

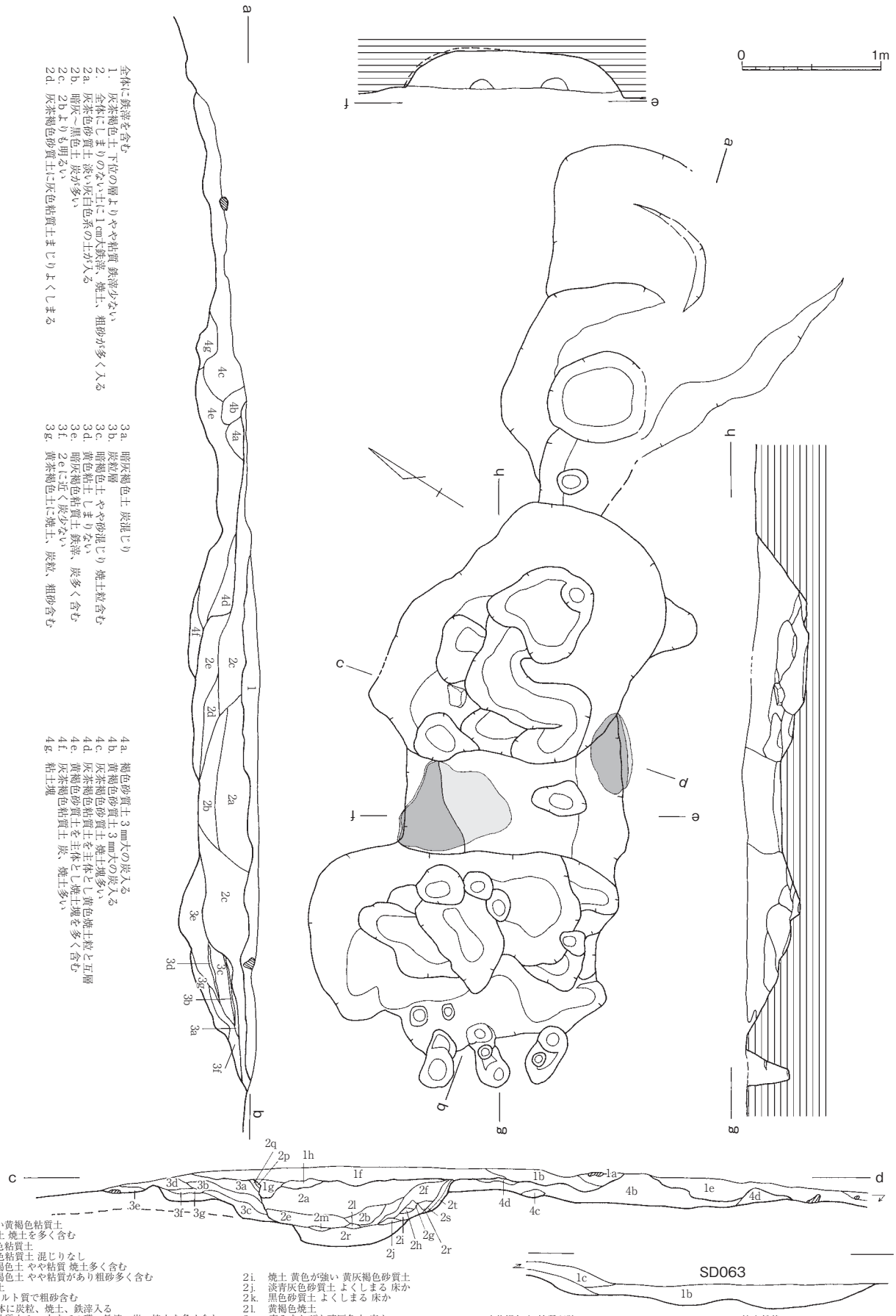
SX039（Fig.221、220、巻頭図版）18-4区中央北寄りに位置する。２基の不整形土坑間の径40cmが厚さ1cm弱ほど被熱赤変する。製鉄炉の痕跡と廃滓土坑と考えられる。谷に向かって直交し、残存長230cmを測る。廃滓坑は75cm離れ、床には凹凸がある。覆土は炭粒、焼土粒を多く含む暗褐色土で鉄滓、炉壁、粗砂混じり粘土塊出土した。鉄滓類は3袋ほどである。

出土遺物　298は須恵器の甕で口縁部横なで、胴部は外面格子目叩き、内面は削り調整を施す。

SX062（Fig.218、219、220、巻頭図版）18-5区で検出した製鉄炉で斜面に併行し、東西両側に廃滓坑をもつ。全長で390cmを測る。浅い谷の中央に位置し、溝SD060の流路の方向にあるが溝が迂回している。

炉底部は断面Ｕ字形に堀込まれ、側面、床の一部が被熱して赤褐色を呈している。炉底、炉底塊、炉壁等は残存していない。堀方は幅180cm、長さ南側で120cm、深さ27cmを測る。c-d土層を見ると、3、4層を堀込んで堀方が成されている。北側の立ち上がりでは被熱面2ｐ、2ｑ層が見られ、北壁は平面より少なくとも50cmは東に延びていたものを、掘り過ぎていることが分かる。廃滓坑は西側は幅210cm、長さ140cm、深さ50cm、東側は幅155cm、長さ185cm、深さ40cmほどで、いずれも床面に凹凸がある。覆土はa-b土層を見ると、中央の炉部分を中心に堆積している。中央では２a、b層が炉の位置に近いがずれており、２ｃ層とはっきり分離できるものではなく、廃滓坑部分と一緒に埋まった状況である。西側では3層を2層が切り、掘り直しがあったことが伺われる。土層からは炉底の規模等を推

Fig.218　18-4区SX062、SD060実測図（1/100）



全体に鉄滓を含む
1. 灰茶褐色土 下位の層よりやや粘質 鉄滓少ない
2. 全体にしまりのない土に1cm大鉄滓、焼土、粗砂が多く入る
2a. 灰茶色砂質土 淡い灰白色系の土が入る
2b. 暗灰～黒色土 炭が多い
2c. 2bよりも明るい
2d. 灰茶褐色砂質土に灰色粘質土まじりよくしまる

3a. 暗灰褐色土 炭混じり
3b. 炭粒層
3c. 暗褐色土 ややや砂混じり 焼土粒含む
3d. 黄色粘土 しまりない
3e. 暗灰褐色粘質土 鉄滓、炭多く含む
3f. 2eに近く炭少ない
3g. 黄茶褐色土に焼土、炭粒、粗砂含む

4a. 褐色砂質土3mm大の炭入る
4b. 黄褐色砂質土3mm大の炭入る
4c. 灰茶褐色砂質土 焼土塊多い
4d. 灰茶褐色粘質土を主体とし黄色焼土粒と互層
4e. 黄褐色砂質土を主体とし焼土塊を多く含む
4f. 灰茶褐色粘質土 炭、焼土多い
4g. 粘土塊

1a. 赤っぽい黄褐色粘質土
1b. 灰褐色土 焼土を多く含む
1c. 黄灰褐色粘質土
1d. 暗灰褐色粘質土 混じりなし
1e. 暗灰茶褐色土 やや粘質 焼土多く含む
1f. 暗灰茶褐色土 やや粘質があり粗砂多く含む
1g. 灰色粘土
1h. fよりシルト質で粗砂含む
2a～2d 全体に炭粒、焼土、鉄滓入る
2a. 灰茶色砂質土1mm大までの礫、鉄滓、炭、焼土を多く含む
2b. 暗灰～黒色砂質土
2c. 灰茶色砂質土
2d. 淡黄灰色砂質土 しまりない 焼土北側に多い
2e. 灰茶褐色砂質土 炭、焼土含む しまりない
2f. 暗灰～黒色砂質土 よくしまる
2g. 赤みを帯びた茶色土 粒が細かい砂質
2h. 青みをおびた暗灰色土 焼けた壁か
2i. 焼土 黄色が強い 黄灰褐色砂質土
2j. 淡青灰色砂質土 よくしまる 床か
2k. 黒色砂質土 よくしまる 床か
2l. 黄褐色焼土
2m. 青みをおびた暗灰色土 床か
2n. 暗茶色砂質土 よくしまる 壁か
2o. 赤茶色焼土 壁か
2p. 青みをおびた暗灰色砂質土 しまる 壁か
2q. 青みをおびた暗灰色砂質土 しまる 壁か
2r. 暗灰褐色粘質土 鉄滓、炭を多く含む
2s. 淡黄色粘土 被熱赤変
2t. 赤色粘土 被熱赤変

3a. 暗茶褐色土 粘質が強い
3b. 茶褐色土 粘質強い 焼土粒を非常に多く含む
3c. 灰褐色土 しまりなくやや砂質 焼土粒、炭粒含む
3d. 灰色砂質土
3e. 茶褐色土 粘質強く焼土粒を非常に多く含む
bより淡い
3f. 茶褐色砂質土 よくしまる 鉄分の沈着か
3g. 焼土ブロック

4a. 焼土粉状
4b. 暗灰褐色土 粘質強い 炭粒含むが焼土なし
4c. 焼土ブロック
4d. 黄褐色砂質土

Fig.219　18-4区SX062実測図（1/40）

定できる状況は見られない。全体に鉄滓、炭粒、焼土を多く含む。東側には溝状のくぼみがあり、廃滓坑から連続した堆積が見られる。

炉の周囲は北半をSD060が巡り、南側はSD063と溝が環状に囲む。溝の内側で東西370cm、南北250cmを測る。一見高く見えるがFig.218のa-b断面のように、周囲の傾斜に沿っている。落ち際には径20cm前後のピットがあり、北側は並ぶ。簡単な覆い屋を想定しても良いのかもしれない。ピットの覆土にも鉄滓が多く入る。SD060はc-d断面のように、西端部分でやや急に深くなり、SX062を意識して深くした感がある。覆土には鉄滓を多く含むが、特に北側と東側に多く、断面m-n部分（Fig.218）付近の底は隙間なく溜まり、掘削が困難なほどであった。西側はこれに比べると少ない。SD063はSD060に比べ浅く、覆土も異なり鉄滓も少ない。

出土遺物　コンテナケース120箱の鉄滓と少量の土器類が出土した。299から309は須恵器で、299から301は坏、302は皿、303から308は蓋、309は高坏の脚部である。310から313は土師器で310は坏で砂粒を含む。312は高坏で胎土精良。311、313は取手である。

SX070（Fig.221、巻頭図版）18-5区で検出した。東西に長い平面溝状を呈し、西側の幅がわずかに広がる。谷に平行し長さ350cmを測る。中央部は幅100cmを測り、南北壁に厚さ3cmほどの被熱赤変部、黄緑部が認められる。底は凹凸があり、中央がわずかに高く、深さ25cmを測る。中央の製鉄炉と両側が廃滓坑となると考えられる。縦断土層では両側を堀込んだ様な状況が見られ、両側に鉄滓が多い。中央の最下層にも炉壁が見られる。須恵器、土師器甕の小片と鉄滓9箱が出土している。

SX072（Fig.221）18-5区西側で検出した。北半が調査区外にでるが円形の土坑と考えられる。覆土は灰黄褐色土に炭粒、鉄滓多く含む。SX039等と同様、製鉄炉の廃滓坑の可能性がある。

SX078（Fig.221、222）18-6区北端で検出した。東西に長い平面溝状を呈し、長さ335cmを測る。両側に廃滓坑をもつ製鉄炉と考えられる。谷に直交する。中央は幅100cm、深さ20cmを測り、底はほぼ平坦である。西側は幅130cmの円形プランを成し、上端から43cmと深い。西側は深さ38cmで中央より下がる。削平により円形のプランを失っていると考えられる。覆土は中央から西の底は焼土、炭粒を含む3層黄灰褐色粘質土で、東西両端はこの層を切る1、2層がみられる。3層は炉の下部構造の可能性があろう。中央部からは幅50cm、深さ10cmほどの浅い溝が谷に向かい、焼土、炭粒を多く含む暗褐色粘質土から鉄滓、炉壁が出土した。

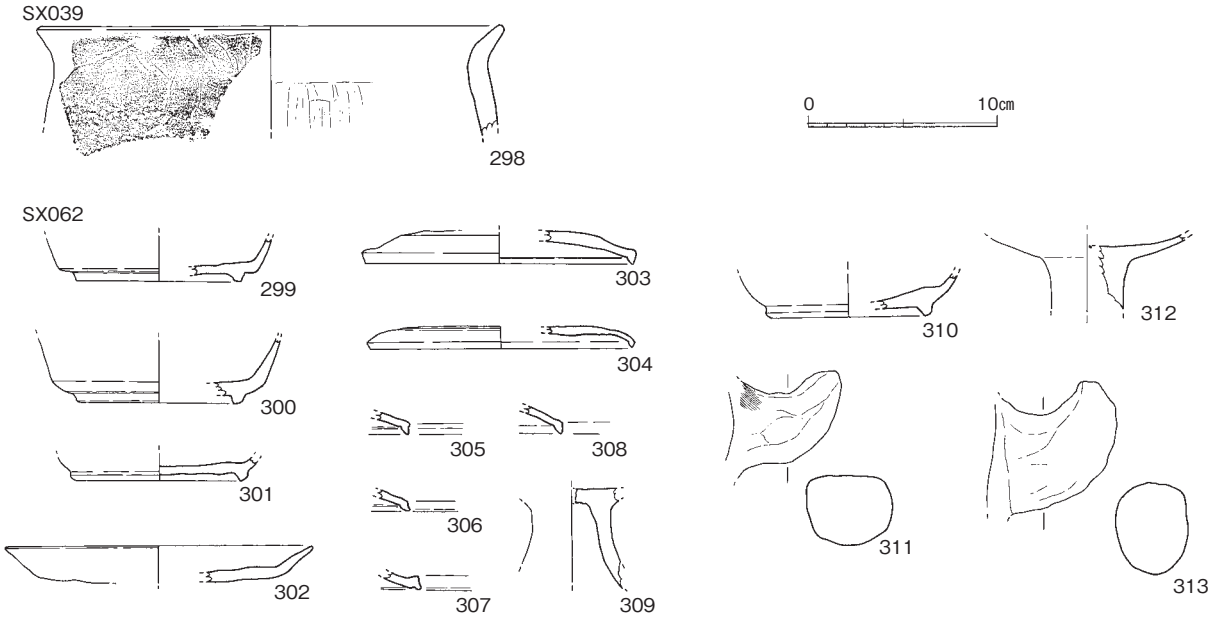


Fig.220　18-4区SX039、SX062出土遺物実測図（1/4）

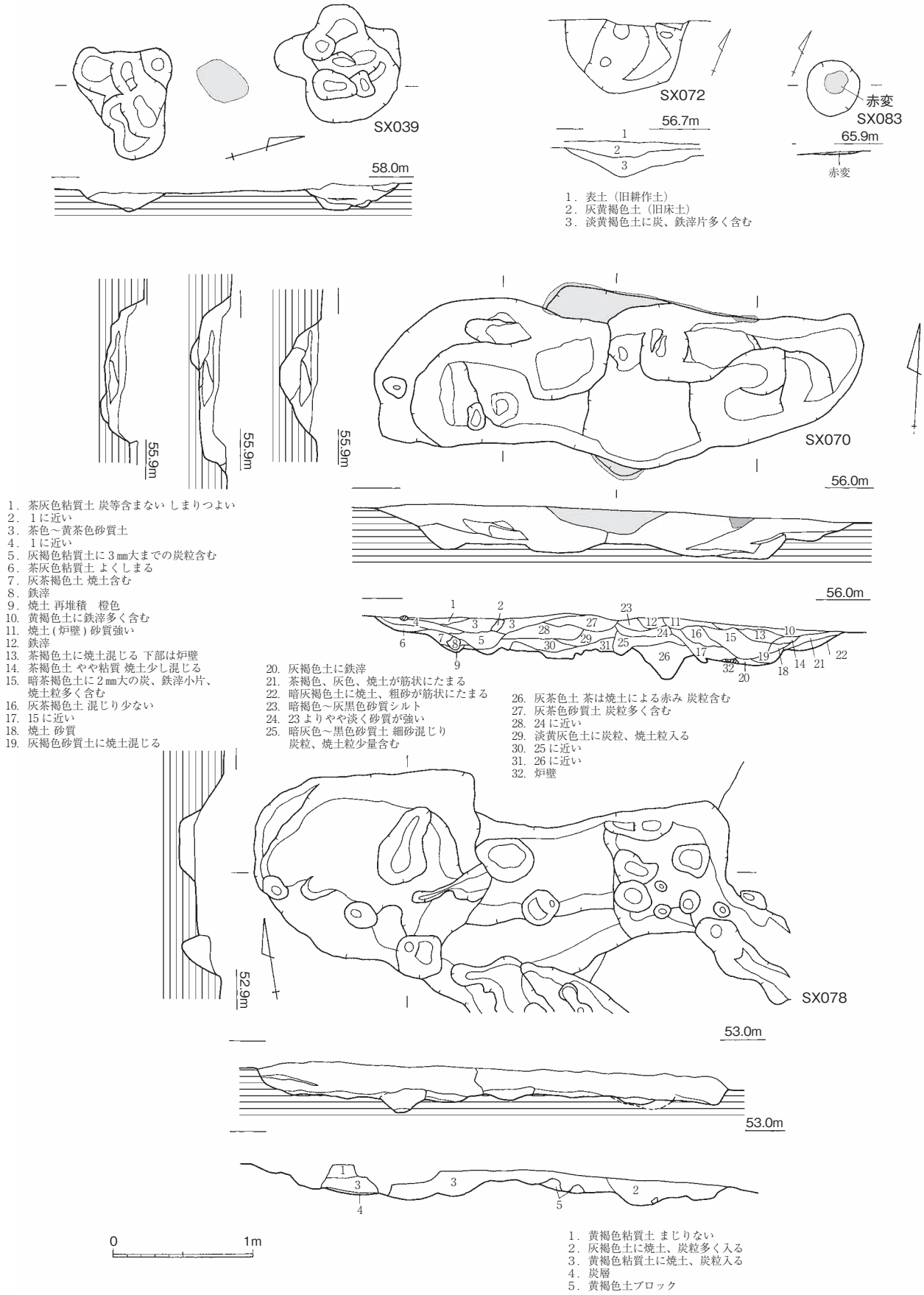


Fig.221　18-4、-5、-6区製鉄関連遺構実測図（1/40）

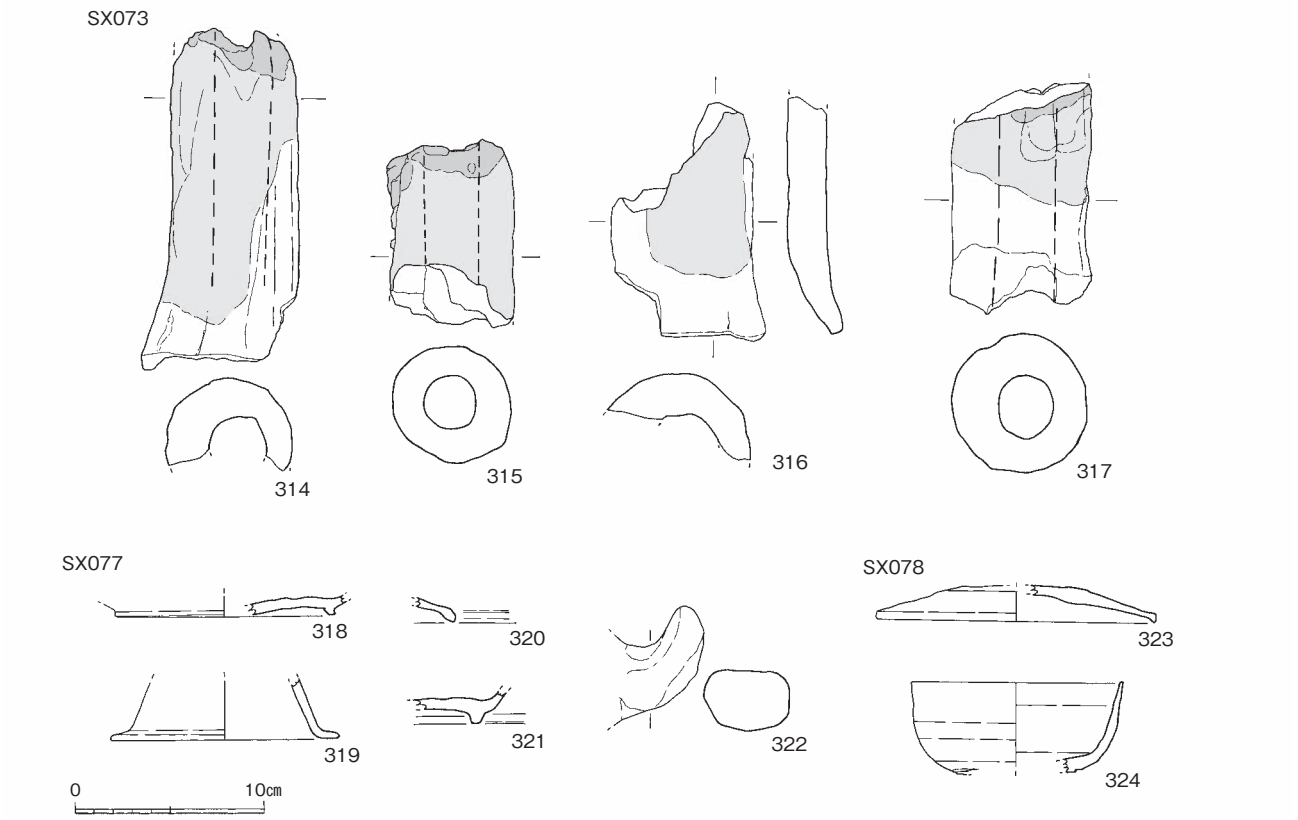


Fig.222　18-4区SX073、077、078出土遺物実測図（1/4）

出土遺物　323は須恵器の蓋、324は坏と考えられる。他に須恵器片、鉄滓5箱が出土している。

SX083（Fig.212、221）SX070の北東で検出した被熱赤変部で径20cmの略円形を呈す。赤変した厚さ2cmを測る。鍛冶炉の痕跡の可能性があろう。

土坑状

SX073（Fig.212、222）18-5区東側の谷の落ち際で検出したくぼみ状の土坑で、少量の鉄滓と送風管が出土した。平面溝状で長さ320cm、幅110cm、深さ15cmを測り、暗褐色から黒色粘質土を覆土とする。鉄滓を出土した遺構は多いが送風管は少なく特異である。鉄滓が2箱出土している。

出土遺物　314から317は土製の羽口で内径３cm弱、外径7cm前後を測る。316のように基部が広がる形態をもつのであろう。完存するものはなく、314から長さ20cm弱と考えられる。先端はガラス質の滓が付着し、器面の大部分が灰色に変色する。他に小片もあるが多くとも6個体ほどと考えられる。

SX077（Fig.210、212、222）18-5区南端のSD060南岸際の平地に鉄滓が広がる。Fig.210断面e-fにその状況を示した。鉄滓5箱が出土し、5cm大で比較的大きさが揃う。南側の高い位置に炉の存在が予想される。

出土遺物　鉄滓に混じって土器も出土した。318から321は須恵器で318、321は坏で321は焼きが甘く灰黄褐色を呈し、内面に茶褐色の付着物が薄く付く。319は高坏の脚、320は蓋である。322は土師器の取手である。他に須恵器、土師器の破片がある。

（5）ピット

多くのピットを検出したが建物としてまとまるものはない。20から30cm大の小ぶりのものがほとんどで、覆土は灰茶褐色粘質シルトを主体とする。遺物が出土したものは少なく、須恵器の坏、土師器の小片が多い。ほとんどは８世紀代に収まる。

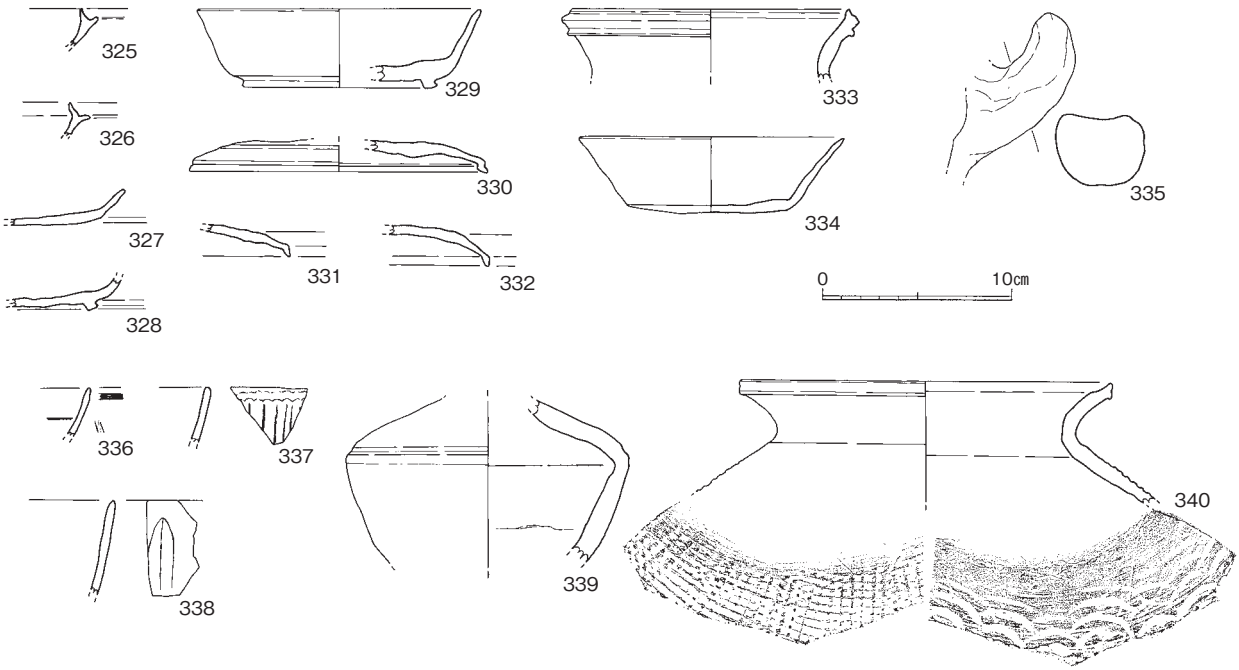


Fig.223　18区ピット出土遺物,表採遺物実測図（1/4）

出土遺物　325から333は須恵器である。325、326は返りが付く坏身、327は皿、328と329は高台付き坏、330から332は蓋、333は甕の口縁部である。334は土師器の坏、335は土師器の取手である。

（6）そのほかの遺物

表採品を示す（Fig.223）。336から338は青磁埦である。336は外面に櫛目を描く同安窯系、337、338は鎬蓮弁を描く龍泉窯系である。中世の遺物は少なく、図示したくらいである。339は須恵器の壷で肩部に浅い沈線を施す。340は須恵器の甕で外面疑似格子目叩き、内面同心円状当て具痕が残る。

（7）小結

18-1区では19区につながる低い丘陵の北側にあたり、落とし穴状遺構を中心とした土坑を多数検出した。遺物がなく時期ははっきりしない。覆土から縄文時代になるのではないかと考えている。

18-2区北側の丘陵では掘立柱建物を5棟検出した。これらは、同じ丘陵上にある14区につながるものと考えられる。

他の部分は谷部になり、SD051から060へ続く溝の周囲に製鉄炉7基、鍛冶炉3基を確認したことが特質される。さらに上流、周囲に関連する遺構が存在すると考えられる。炉自体に遺物は少ないが、そこから出た鉄滓を含む溝から8世紀代の遺物が多く出土し、炉の時期もそこに求められる。ただし9世紀代も遺物も少なからず出土しており、幅があると考えられる。

14. 19区

調査区南側の丘陵上に立地し、18-1区の南に位置する。田面の切り下げに伴い1805㎡を調査した。現在の田面で３つに分かれる。検出した遺構は、落とし穴状遺構、土坑、ピットである（Fig.224）。ピット以外の遺構はいずれも覆土が淡黄褐色粘質土で、検出次に明瞭な方形プランを確認し側壁が立つ。これに対し同様の覆土でも不整形で輪郭がはっきりしないものは、壁が立たず不明瞭で浅く遺構ではないと判断した。以下に取り上げる以外は遺構と考えていない。

（1）落とし穴状遺構

調査区南側の区画で５基を検出した。

SK001（Fig.225）長楕円形を呈し、長さ124cm、幅37cm、深さ64cmを測る。底には15cm大のピットが３つある。

SK002（Fig.225）隅丸長方形を呈し、長さ130cm、幅96cm、深さ75cmを測る。底中央に30cm大のピットがある。

SK003（Fig.225）隅丸長方形を呈し、長さ113cm、幅68cm、深さ70cmを測る。底に40cm大のピットがある。

SK004（Fig.225）長楕円形を呈し、長さ195cm、幅75cm、深さ125cmを測る。底が幅23cmと狭い。

SK005（Fig.225）隅丸長方形を呈し、長さ152cm、幅98cm、深さ75cmを測る。底に6cm大のピット6つを検出した。

（2）土坑

SK006（Fig.225）　北東の区画で検出した。平面略円形を呈し、径130cm。底は掘りきれず、深さ

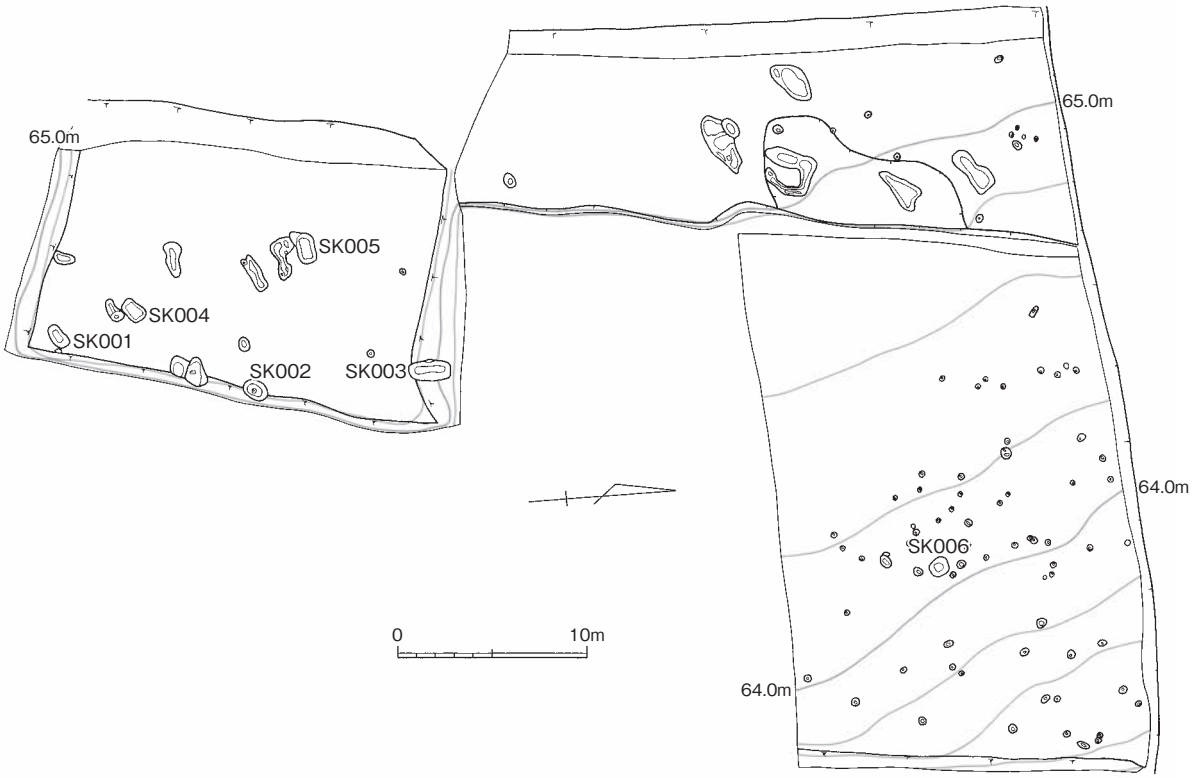


Fig.224　19区全体図（1/400）

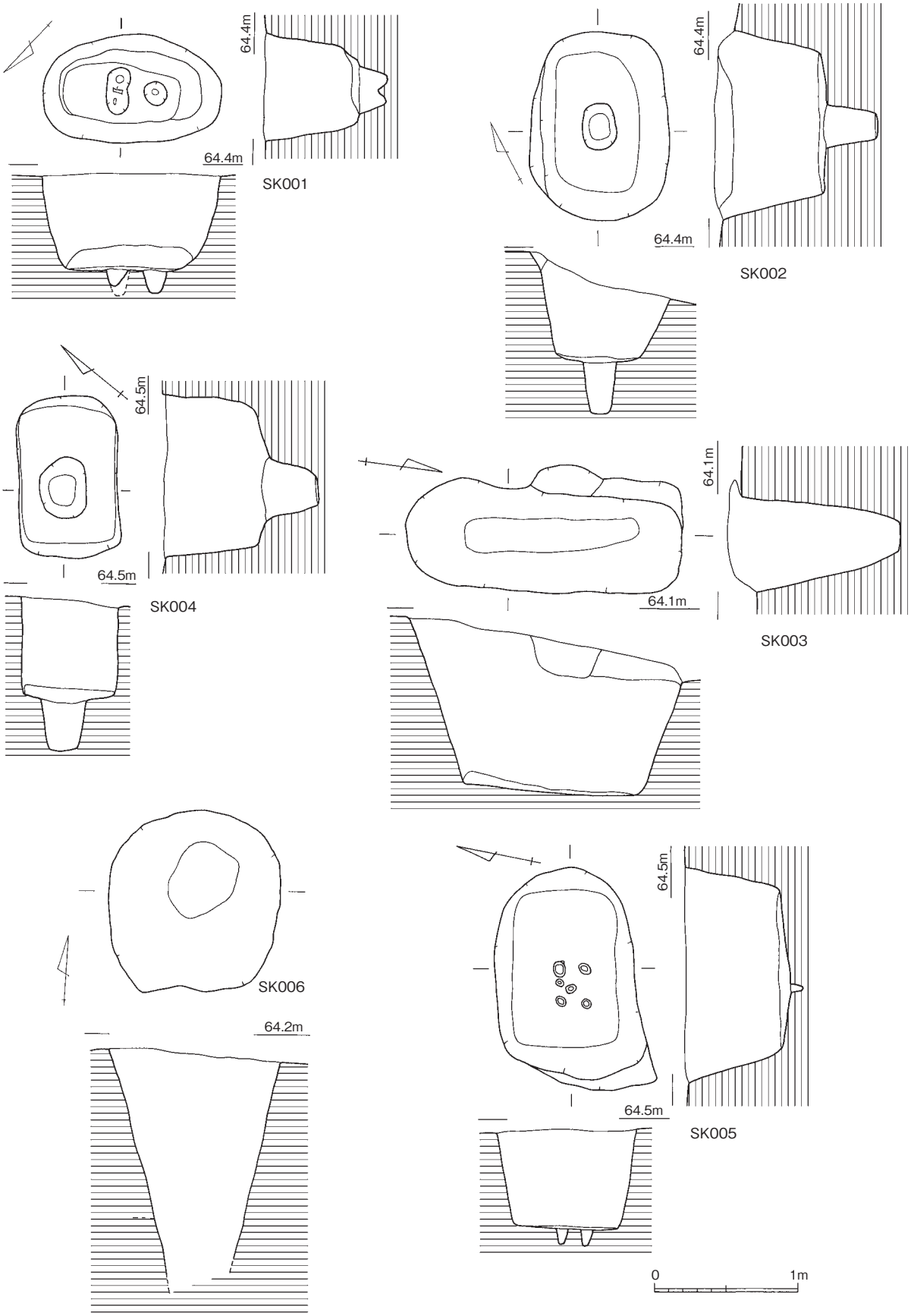


Fig.225　19区落とし穴状遺構、土坑実測図（1/40）

160cmまでを確認した。

（3）ピット

北東の区画で多くのピットを検出した。径20cmほどの小さなものがほとんどで、覆土は淡灰褐色粘質土で遺物は出土していない。

（4）小結

検出した主な遺構は落とし穴状遺構である。形態、覆土が18-1区と同じで時期が近い一連のものと考えられる。遺物も同様に出土していない。

15. 20区

以前から乙石D遺跡と仮称され三稜尖頭器等旧石器時代の遺物が表採されていた地点で、包含層はすでに削平を受けていたため、表土を掘削して遺物の採集に努めた。その結果遺物は少なかった。遺物は後の旧石器時代の遺物の項で報告する。

16. 縄文時代、弥生時代の遺物（Fig.226、227）

調査区内で出土した遺物をまとめて報告する。いずれも遺構から遊離している。

１は14区東端で出土した曽畑式土器片で浅い沈線で幾何学紋を施す。胎土には滑石を多く含む。２は４区出土の底部片で底に木骨痕状のくぼみがあり、内面は強いなでを施す。胎土に多くの砂粒を含む。３、４は18区出土で縄文土器か不明。３の口縁かには強い横なでを施す。砂粒を含むが胎土は細かい。４は砂粒を多く含み、器面が荒れる。他に縄文土器の可能性があるものは見られない。

５から16は黒曜石、17から19は安山岩製の石鏃である。図に出土地点と重量を示した。17以外は基部に三角形または深い抉りが入る。表裏面に調整剥離を施して成形するが、６、16には主剥離面が残る。15の側辺は鋸歯状に作り出す。14区からの出土が最も多く、他も丘陵上からがほとんどである。形態から早期後半から前期のものが主体を占めると考えられる。20は黒曜石製の石錐で基部を欠く。20は黒曜石のつまみ形石器である。22は黒曜石の使用痕がある剥片で縦長の剥片の片辺に微細な剥離が見られる。23、24は安山岩製の石匙である。23つまみ部が大きく、その頭部に自然面を残す。24の片面には自然面が全面に残り、刃部の調整剥離は浅い。

25から28は玄武岩製の石斧で、いずれも破損し、25は基部、他は刃部のみが残存する。25には敲打痕が残るが、他はよく研磨されている。使用時に破損廃棄されたものであろう。弥生時代のものと考えられるが、土器は確認できなかった。

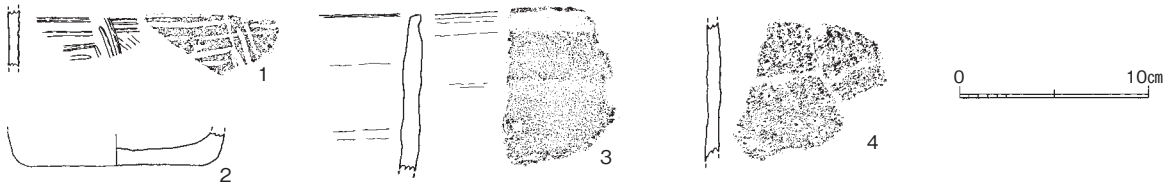


Fig.226　縄文土器２実測図（1/4）

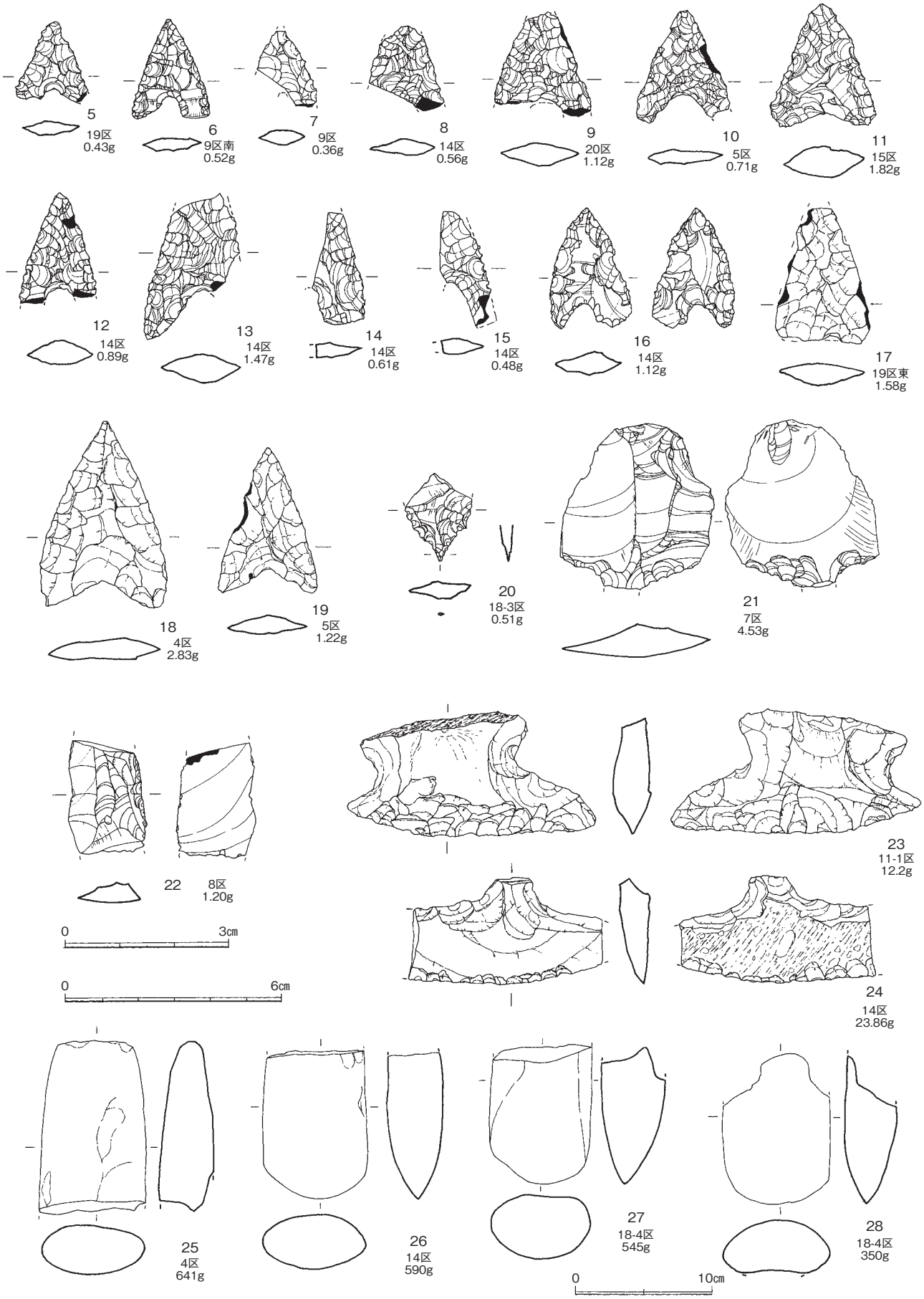


Fig.227　縄文時代、弥生時代の遺物実測図（1/1、2/3、1/4）

17. 旧石器時代の遺物（Fig.228、229）

１．旧石器時代の遺物

乙石遺跡群２次調査で出土した旧石器時代遺物を一括報告する。乙石遺跡群の展開する室見川左岸の丘陵地帯は、西山から飯盛山・叶岳に連なる山塊の東麓に形成された複合扇状地である。そのうち吉武・乙石地区は日向峠に端を発する日向川、塔ノ尾川水系の扇状地であり、その南端に位置する乙石地区は中期更新世に形成された古扇状地である。地表部は旧河道や浸食による浅谷形成で複数の帯状丘陵が連なっている。旧石器時代遺跡はこうした丘陵上や丘陵斜面に分布している。旧石器時代遺物を出土した地区は表１に示す13箇所である。このうち比較的まとまった遺物が出土したのは14区、18区、20区であり、その他の地区はすべて１～２点の出土である。これらのうち20区は調査以前から旧石器時代遺物散布地と知られており、調査以前は「乙石D遺跡」と仮称されていた。どの地区も洪積世堆積物等による本来の包含層からの安定した出土ではない。棚田など農耕地造成に伴う削平で遊離し、表土中や後世の遺構・包含層に混在して出土したものである。

４区は標高約63mの丘陵上にあり、黒曜石製の二次調整剥片１（Fig.228-1）と砕片1がある。５区は標高約61mの丘陵上にあり、黒曜石製石核１がある。7-1区は標高約59mの丘陵上にあり、黒曜石製台形様石器2（Fig.228-2、3）がある。7-4区は標高約60mの丘陵上にあり、黒曜石製台形石器1（Fig.228-4）、砕片1がある。９区は標高約57mの谷部にあたり、黒曜石製砕片1がある。11-1区は標高約52mの丘陵南側斜面にあたる。黒曜石製スクレイパー1（Fig.228-5）がある。13区は標高約52mの丘陵上にあり、黒曜石製剥片1（Fig.228-6）がある。14区は標高54～57mの丘陵斜面にあり、ナイフ形石器1（Fig.228-7）、二次調整剥片3（Fig.228-8、9）、剥片5、砕片4、石核1がある。石材はすべて黒曜石である。11-2区は、標高約51mの丘陵上にあり、黒曜石製ナイフ形石器1（Fig.228-10）がある。17区は標高約52mの谷部にあたり、黒曜石製台形石器1（Fig.228-11）がある。18区は標高56～65mの谷部にあり、東西約100mの範囲である。安山岩製三稜尖頭器1（Fig.229-12）、二次調整剥片1（Fig.229-13）、剥片5、砕片2がある。石材は尖頭器以外すべて黒曜石である。19区は標高約65mの丘陵上にあたり、黒曜石製砕片1がある。20区は標高58mの段丘崖に近い丘陵上にある。以前から畑地内の径約10mの範囲内から石器類が採集されていた。発掘調査では人力による表土除去など細心の注意を図ったが、表土直下は基盤の赤色粘土層であり、遺物包含層や遺物集中区などは未検出であったが、表土中から遊離状態の石器類を採集した。安山岩製三稜尖頭器1（Fig.229-14）、母核1（Fig.229-15）、ドリル1（Fig.229-16）、剥片7（Fig.229-17）、砕片9、分割礫1がある。石材は尖頭器以外で剥片3が安山岩、砕片1がチャートであり、その他は黒曜石である。

以上の石器類はすべて遊離遺物であり、本来の一括性も判断し難く、帰属する石器群や遺跡構造についても明確にはできない。定型石器からみた時期比定も少ない資料では困難であるがあえて検討してみたい。最も古く位置付けられるのは7-1区の台形様石器である。形態からAT以前と判断される。18･20区は三稜尖頭器があり、AT以降第二段階に比定される。14・11-2区は小型ナイフ形石器があり、17区は「百花台型」台形石器がある。第三段階以降とみられる。石材組成は20区が多種であるのに対し、14区が黒曜石のみの単純なものとなっている（Fig.230）。細石刃石器段階は20区の母核が細石刃核素材の可能性がある。このように本遺跡群では資料数は少ないものの後期旧石器時代の各時期に及ぶ石器群が各所に存在していることから、当地に対して狩猟活動などに伴う人類活動が繰り返し行われたことが推定される。（この項吉留）

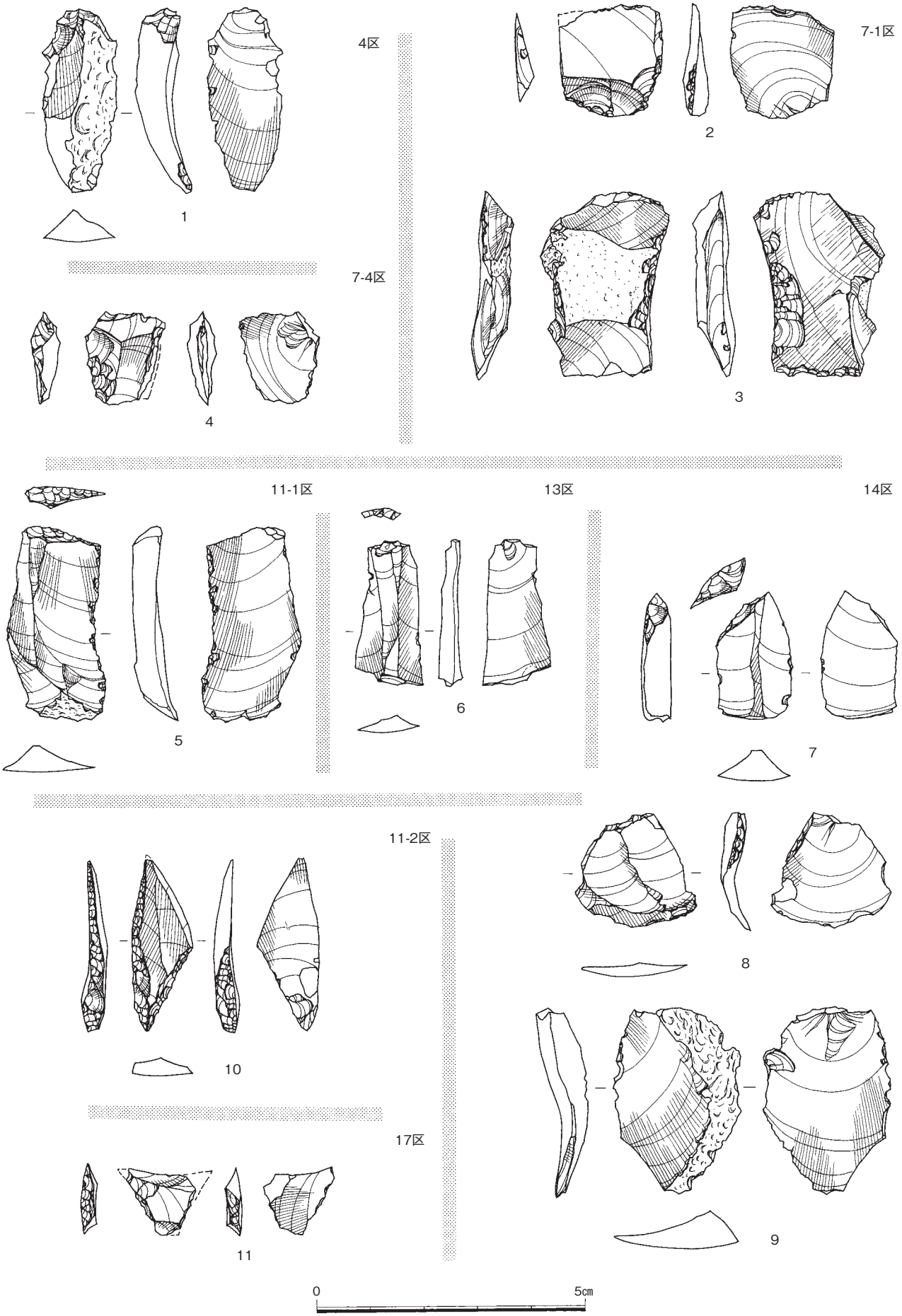


Fig.228　旧石器時代の遺物実測図１（1/1）

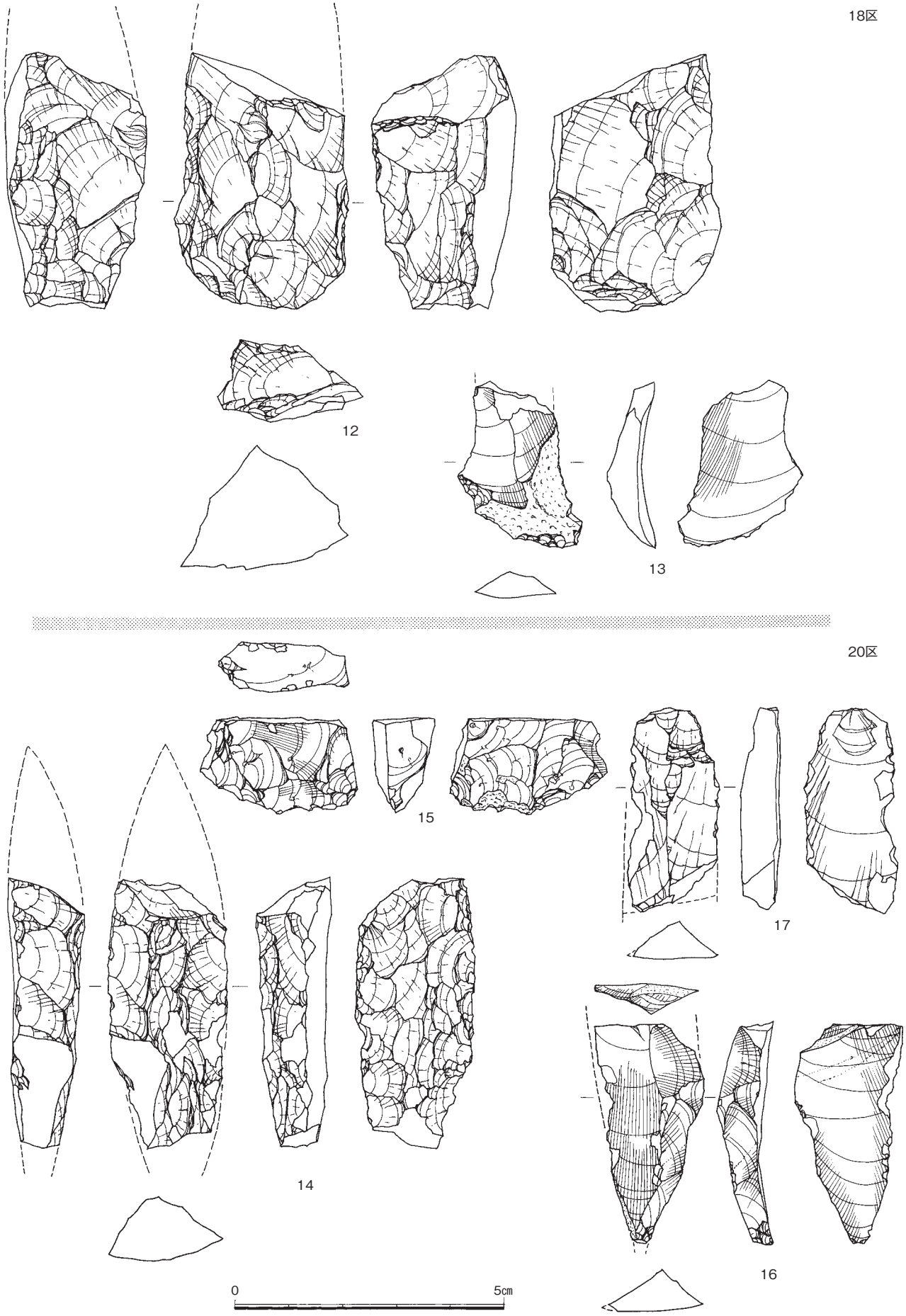


Fig.229　旧石器時代の遺物実測図２（1/1）

表１．地区別石器組成一覧

地区	標高(m)	地形	ナイフ形石器	台形石器	三稜尖頭器	Scrper	U・Flake	Flake	Chip	Core	合計
4	63	丘陵	0	0	0	0	1	0	1	0	2
5	61	丘陵	0	0	0	0	0	0	0	1	1
7-1	59	丘陵	0	2	0	0	0	0	0	0	2
7-4	60	丘陵	0	1	0	0	0	0	1	0	2
9	57	谷部	0	0	0	0	0	0	1	0	1
11-1	52	斜面	0	0	0	1	0	0	0	0	1
13	52	丘陵	0	0	0	0	0	1	0	0	1
14	54～57	斜面	1	0	0	0	2	6	4	1	14
11-2	51	丘陵	1	0	0	0	0	0	0	0	1
17	52	谷部	0	1	0	0	0	0	0	0	1
18	56～65	谷部	0	0	1	0	1	5	2	0	9
19	65	丘陵	0	0	0	0	0	0	1	0	1
20	58	丘陵	0	0	1	0	0	8	9	2	20
合計			2	4	2	1	4	20	19	4	56

表２．地区別石材組成一覧

地区	標高(m)	地形	黒曜石	安山岩	チャート	合計
4	63	丘陵	2	0	0	2
5	61	丘陵	1	0	0	1
7-1	59	丘陵	2	0	0	2
7-4	60	丘陵	2	0	0	2
9	57	谷部	1	0	0	1
11-1	52	斜面	1	0	0	1
13	52	丘陵	1	0	0	1
14	54～57	斜面	14	0	0	14
11-2	51	丘陵	1	0	0	1
17	52	谷部	1	0	0	1
18	56～65	谷部	8	1	0	9
19	65	丘陵	1	0	0	1
20	58	丘陵	15	4	1	20
合計			50	5	1	56

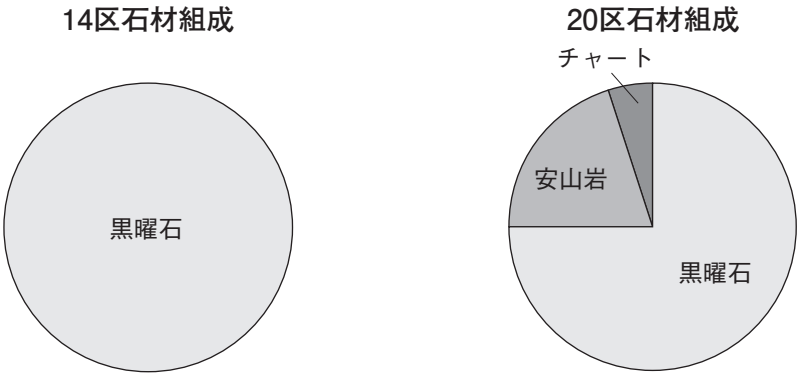


Fig.230　14、20区の石材組成比率差

表３．乙石遺跡群２次調査旧石器時代遺物一覧

番号	地区	取上No,	取上日	器種	石材	部位	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	実測	挿図番号	備考
1	4			U・Flake	黒曜石	完形	3.4	1.3	0.7	2.71	済	228-1	
2	4	111		砕片	黒曜石	完形	2	1.3	0.3	0.65			
3	5			石核	黒曜石	完形				8.26			
4	7-1	003-3.4下層		台形様石器	黒曜石	完形	2.1	1.9	0.5	1.36	済	228-2	
5	7-1	003-3.4上層		台形様石器	黒曜石	完形	3.4	2.4	0.7	5.99	済	228-3	
6	7-4		40623	台形石器	黒曜石	傷多し	1.8	1.5	0.5	1.06	済	228-4	
7	7-4		40623	砕片	黒曜石					1.49			
8	9	試掘T-73		砕片	黒曜石					0.71			
9	11-1			Scrper	黒曜石	完形	3.6	1.8	0.6	3.17	済	228-5	
10	13	103		剥片	黒曜石	先端欠	2.7	1.3	0.5	1.21	済	228-6	
11	14			ナイフ形石器	黒曜石	完形	2.4	1.4	0.6	1.97	済	228-7	
12	14			石核	黒曜石					2.73			被熱
13	14			U・Flake	黒曜石	完形	2.1	2.2	0.3	1.19	済	228-8	
14	14			U・Flake	黒曜石					1.90			
15	14			剥片	黒曜石					9.35			
16	14	14-3区		砕片	黒曜石					1.64			
17	14	019R1		砕片	黒曜石					0.57			
18	14	37		剥片	黒曜石					0.96			
19	14			剥片	黒曜石					1.04			
20	14			剥片	黒曜石					1.99			
21	14	38		U・Flake	黒曜石	完形	3.5	2.4	0.7	4.91	済	228-9	
22	14			剥片	黒曜石					3.46			
23	14	141		砕片	黒曜石					0.72			
24	14	183		砕片	黒曜石					0.94			
25	11-２	黄色土坑中 SK016		ナイフ形石器	黒曜石	完形	3.2	1.2	0.4	1.17	済	228-10	
26	17	東端078		台形石器	黒曜石	一部欠	1.3	1.3	0.4	0.46	済	228-11	
27	18	表採		三稜尖頭器	安山岩	先端欠	4.8	2.6	2.7	39.36	済	229-12	
28	18			剥片	黒曜石					0.89			
29	18			砕片	黒曜石					0.55			
30	18	156		剥片	黒曜石					1.82			
31	18	18-2区		剥片	黒曜石					4.14			
32	18	18-4区		剥片	黒曜石					2.17			
33	18	18-4区		剥片	黒曜石					1.98			
34	18	18-4区		砕片	黒曜石					0.66			
35	18	18-6区		U・Flake	黒曜石	基部欠損	3.1	2.4	0.7	3.17	済	229-13	
36	19	試掘T-25		砕片	黒曜石					0.27			
37	20	試掘T-35		砕片	黒曜石					0.52			
38	20	旧乙石D地点表採	021024	三稜尖頭器	安山岩	先・基部欠	5	2.1	1.4	16.48	済	229-14	
39	20	旧乙石D地点表採	021024	分割礫	黒曜石					8.57			
40	20	旧乙石D地点表採	021024	砕片	黒曜石					0.36			
41	20	旧乙石D地点表採	031217	母核	黒曜石	完形	2.9	1.8	1.2	6.22	済	229-15	
42	20	旧乙石D地点表採	031217	砕片	黒曜石					1.09			
43	20	旧乙石D地点表採	031217	砕片	黒曜石					0.81			
44	20		040927	ドリル	黒曜石	基部欠損	4.1	2	0.8	4.92	済	229-16	
45	20		040927	剥片	黒曜石					3.71			
46	20		040927	剥片	黒曜石					10.06			
47	20		040927	剥片	黒曜石					2.57			
48	20		040927	剥片	黒曜石					0.67			
49	20		040927	剥片	安山岩	傷多し	3.8	1.8	0.8	4.99	済	229-17	
50	20		040927	剥片	安山岩					2.72			
51	20		040927	剥片	安山岩					3.76			
52	20		040927	砕片	黒曜石					0.35			
53	20		040927	砕片	黒曜石					0.30			
54	20		040927	砕片	黒曜石					0.11			
55	20		040927	砕片	黒曜石					0.14			
56	20		040927	砕片	チャート					0.75			

18.おわりに

1）調査の成果の概要

乙石遺跡は日向峠直下の交通の要衝に位置し、東側緩斜面に立地、金武古墳群を背後に控えるという背景から、各時代の集落、墳墓が密に展開すると予想されていた。調査で検出した主な遺構は8世紀を中心とした古代の建物群、製鉄遺構で、墳墓、それ以前の集落は確認できなかった。調査区内の地形、各時代ごとに検出した遺構、遺物を振り返る。

地形Fig.231に現在の等高線、調査成果から調査区内の微地形を示した。浅い3つの谷が入り、その間が丘陵状の地形を呈す。

旧石器時代　すべて遊離遺物で台形様石器、ナイフ形石器、三稜尖頭器等、時期幅がある。狩猟活動等の活動が繰り返されたものと考えられる。

縄文時代　落とし穴状遺構を丘陵１を中心とした14、18-1、18-2、19区で検出した。特に19から18-1区は連続して密集する。いずれも丘陵上に位置する。遺物の出土はないが、覆土から縄文時代以前のものと判断した。遺物はすべて遺構から遊離している。土器は曽畑式土器片が1点、他になで調整の土器が少量出土している。石器では石鏃19本、石匙2本を表採に近い状況で採集している。やはり丘陵上が多い。狩猟等の活動の場であったと考えられる。

弥生時代　玄武岩製の石斧が4点出土するのみで土器は確認していない。

古墳時代　群集墳の分布が予想されていたが確認できなかった。4区、18-4区で6世紀後半の須恵器が少量出土している。当初1区とした夫婦塚1号墳で6世紀の竪穴式住居を確認している。

古代　溝、製鉄関連遺構、掘建柱建物、焼土坑がこの時期のものと考えられるが、溝以外は遺物が少なく確実ではない。

溝は谷１（Fig.231）には18区SD060が、谷２に7区SD013が流れ、丘陵３に5区SD002から005が流れる。SD060は谷の中央を流れ、主に8世紀後半の土器が出土しているが9世紀に入るものも多く時期幅がある。丘陵3の溝群は一連の4区002、5区SD003、7区SD002以外は遺物が少ないが、やはり主に8世紀後半の土器が出土し、確実に9世紀に下るものはない。存続期間はSD060より短いと考えられる。

製鉄遺構のうち製鉄炉は、谷１で7基、谷２で1基、丘陵３で2基を検出した。いずれも両側に廃滓土坑を伴うタイプである。遺物は18区のSX062から8世紀後半の須恵器片が少量出土したくらいで少ない。近接する溝から鉄滓が出土していることから、溝と同様の時期と考えられるが細かなところは不明である。18区SD060と比べ、5区SD002から出土した鉄滓は少量で、谷1により多くの製鉄炉が比較的に大規模に操業されていたものと考えられる。その中でも18区SX062およびこれを迂回するSD060部分では、多くの鉄滓が出土し規模の大きさを伺わせる。18-2区西側の試掘でも多くの鉄滓が出土してお

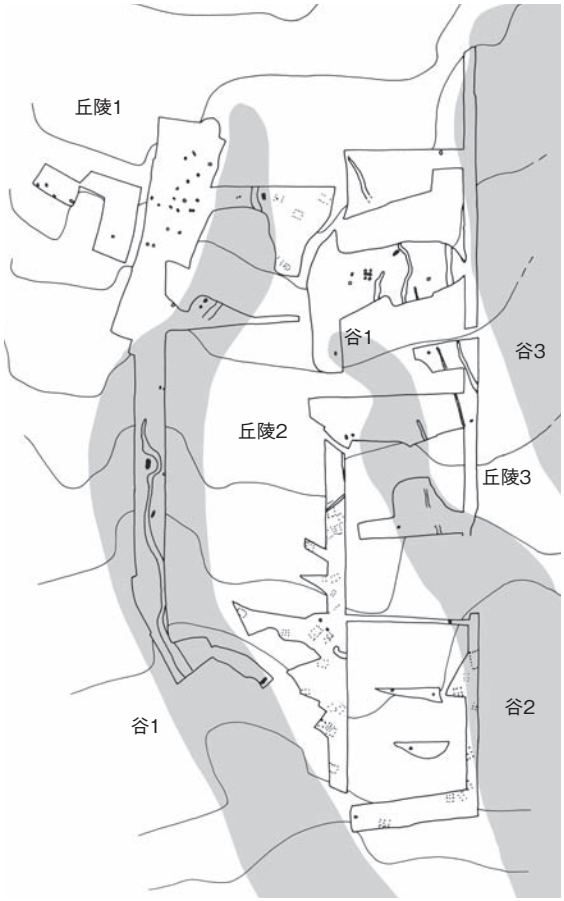


Fig.231　調査区地形概念図（1/4,000）

り、谷1の周囲にはさらに製鉄炉が存在するものと考えられる。

掘建柱建物は丘陵２の18-2区、14区、11区で検出した。特に14区に多い。遺物は少なく、その中でも時期がわかるものはまれで、出土状況も時期比定の決め手になるものはない。7世紀から8世紀の須恵器が少量見られる程度である。調査区全体の遺構遺物の出土状況から考えて、8世紀を中心とした時期で溝と同様の存続幅を考えておきたい。建物は重複するもの、あまりに近接するものがありこのことからも時期幅が想定される。ただし、14区には9世紀末から10世紀はじめと考えられるSX019がありここまで下る建物も存在する可能性がある。調査区外には特に14区、11区周辺に建物が広がることは確実である。

焼土坑は各調査区に点在し、丘陵部、谷部ともに検出した。遺物はやはり少なく、3区、5区で8世紀後半の土師器甕、須恵器坏が1点ずつ出土したくらいである。その時期を中心にした8世紀以降という理解に留めておきたい。製鉄に関連する炭焼きに伴うものがほとんどと考えられる。

中世　14区の溝、18区の表採で玉縁口縁の白磁、龍泉窯系の青磁、土鍋が少量出土している。集落に伴う遺構は確認できなかった。中世では耕地として利用されていたものと考えられる。集落遺跡の立地は現在の集落と重なるのではないだろうか。

近世　14区、18-6区、17区で染め付け碗等が少量出土した。溝のいくつかはこの時期と考えられ、水田等の耕地であったと考えられる。

以上のように各時代の遺構遺物を確認したが、そのほとんどが古代の8世紀後半前後に集中する。それ以外の時期は痕跡を残すような活動は狩猟以外に成されておらず、中世のある時期から耕作地となるまで単発的に利用されるのみでなかったかと考えられる。

２）製鉄遺構

今回の調査で検出した遺構で、遺跡の性格をもっとも端的に表すのは製鉄炉である。両側に廃滓坑を持つタイプの炉は復元を含めて9基、鍛冶炉と考えられるものは4基検出した。溝等出土の鉄滓を考えると分布は周囲に広がるであろう。掘建柱建物群も製鉄に関連する施設である可能性が考えられる。

次に周辺の調査例に触れておく。今回の調査地点の西の丘陵裾に広がる金武古墳群には6世紀段階から鉄滓の供献が始まり、6世紀後半から7世紀には盛行期を迎え、6世紀後半には比較的安定的な鉄生産が行われていたと考えられている（長家2001）。この時期の製鉄遺構は検出例が少ないが、城田遺跡２次調査14区で精錬遺構が確認されている（未報告）。8世紀になると全国的な趨勢と同様に調査例が増加し、都地遺跡５次調査、城田遺跡１次調査、浦江谷遺跡１次調査６区、浦江５次調査23区（未報告）、城田２次調査５、13区（未報告）で鍛冶、精錬を含む炉跡が確認されている。乙石遺跡もこれら遺構群の増加という一連の流れの中でとらえることができよう。また、乙石遺跡において古代に遺構が集中する現象も製鉄炉の操業に伴って生じたと考えられる。製鉄炉と鉄滓については冶金学的分析を含めた報告を次年度以降行いたい。

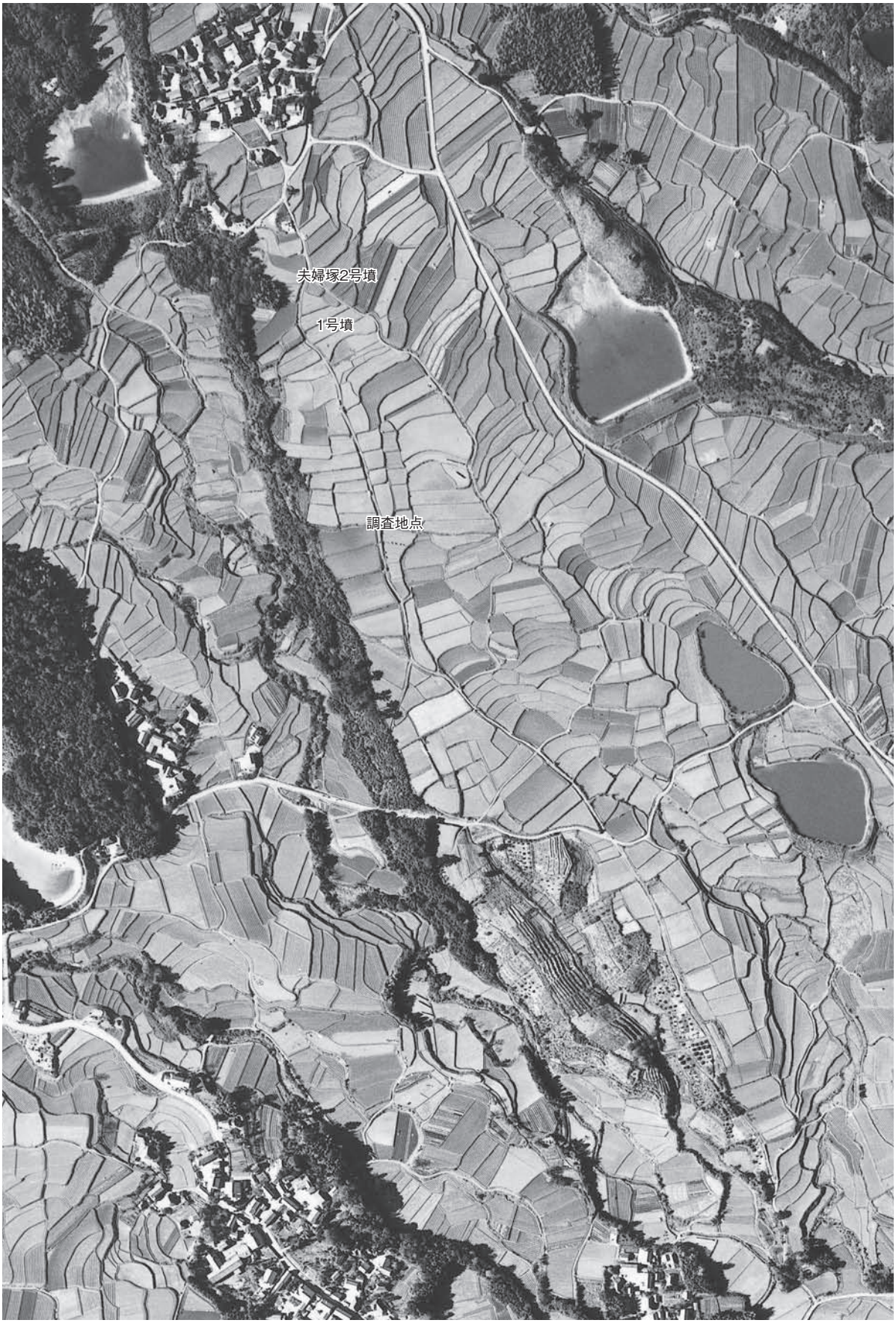
参考文献

長家 伸 2001「九州の鉄生産について」『我が国初の一貫製鉄操業開始100年記念公開シンポジウム』日本鉄鋼協会

『都地遺跡・金武城田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第186集　1988：城田遺跡第１次

『室見が岡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第614集　1999：浦江谷遺跡１次

『都地遺跡⑷』福岡市埋蔵文化財調査報告書第434集　1995：都地遺跡第５次



Ph.1　乙石遺跡全景（昭和30年代）上が西

Ph.2　調査開始前（東側上空から）

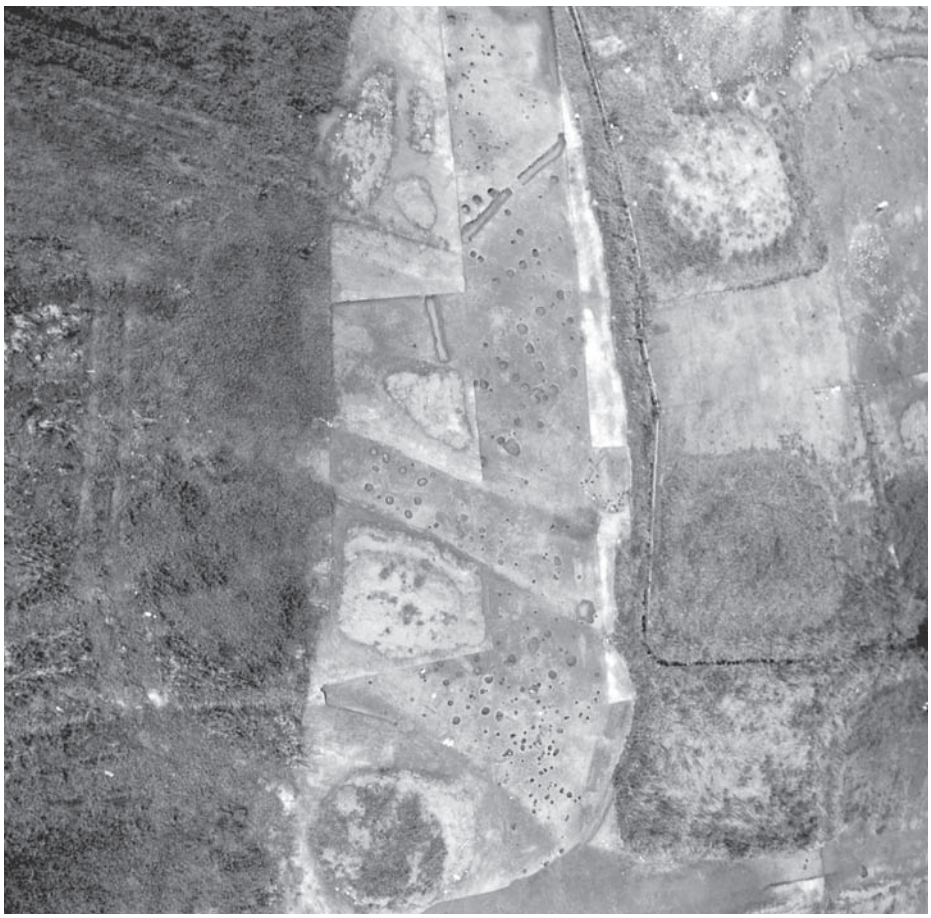
Ph.3　14区を中心に（北東から）

Ph.4　14区全景（東から）

Ph.5　５区全景（東から）

Ph.6　７区全景（西から）

Ph.7　11、12、13、14区東端（東）



Ph.8　14区西半（東から）

Ph.9　14区東半（東から）

Ph.10　18-1区、19区（北から）

Ph.11　18-2区（北から）

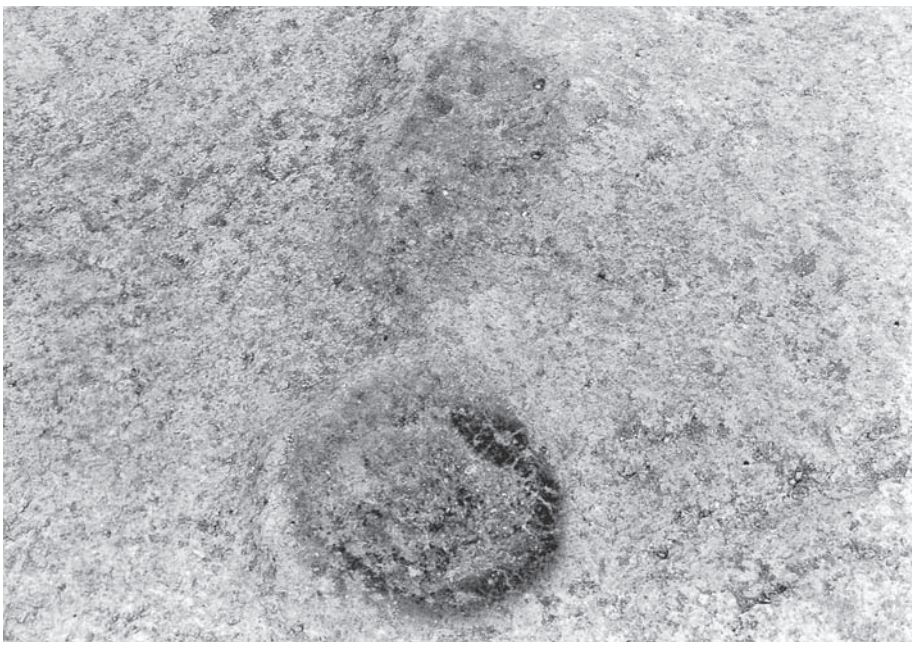
Ph.12　18-5区（北から）

Ph.13　18-5区SD060、SK062（北から）

Ph.14　3区（東から）

Ph.15　3区SK004（東から）

Ph.16　4区全景（南から）



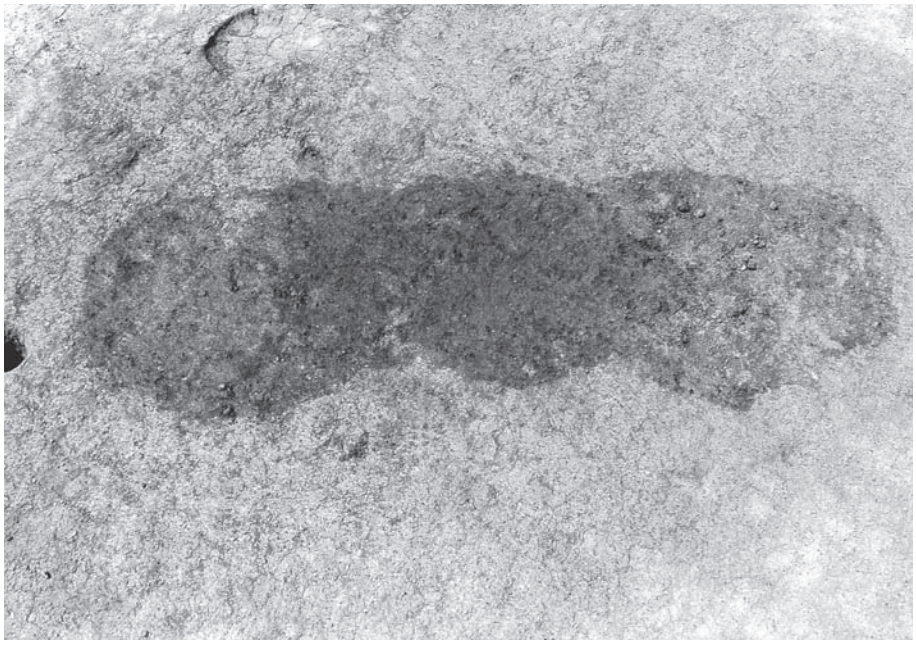
Ph.17　4区SX003（南から）

Ph.18　4区SD002（東から）

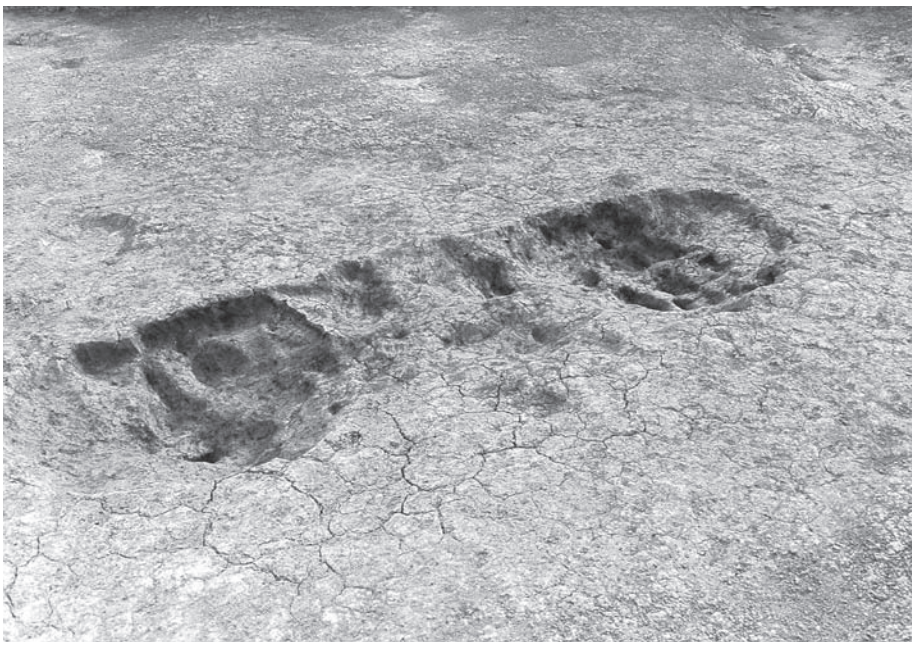
Ph.19　5区南半（東から）

Ph.20　5区北半（東から）

Ph.21　5区SD004（東から）

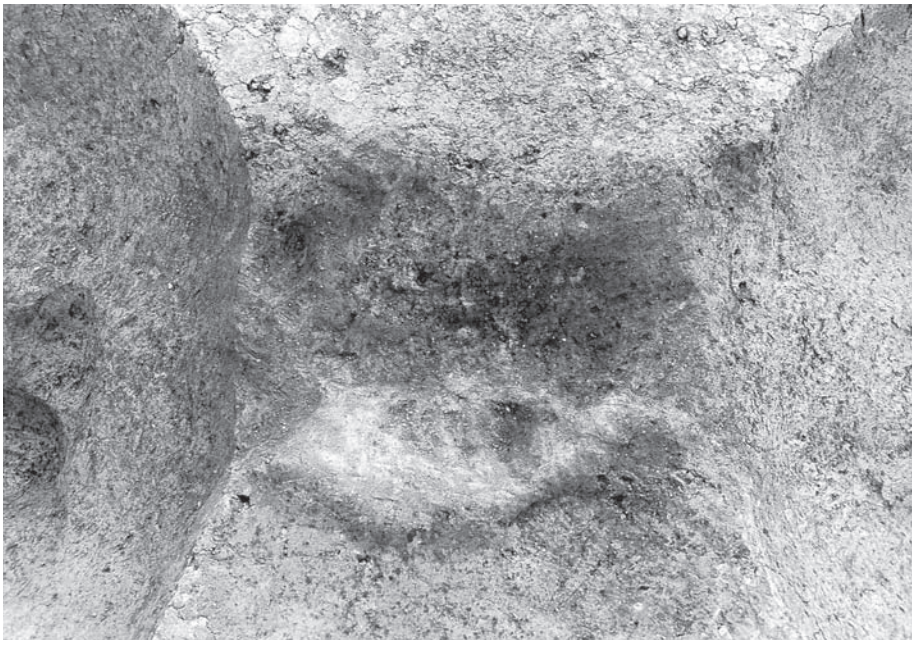


Ph.22　5区SX007検出時
（北東から）



Ph.23　5区SX007（東から）

Ph.24　5区SX012（東から）



Ph.25　5区SX012炉部分（東から）

Ph.26　5区SK018土層（東から）

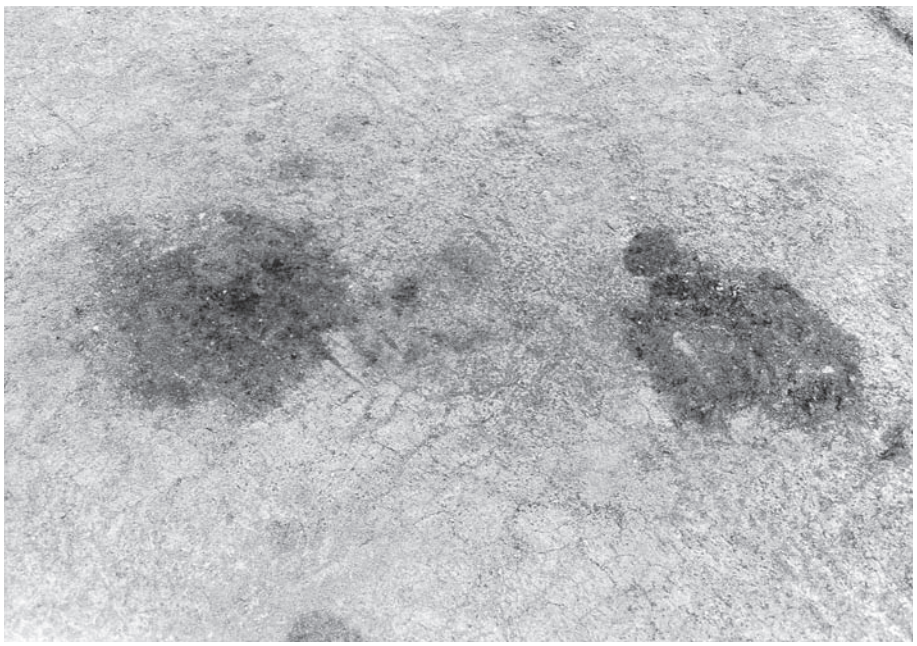
Ph.27　7-3区（南から）

Ph.28　7-2区（西から）

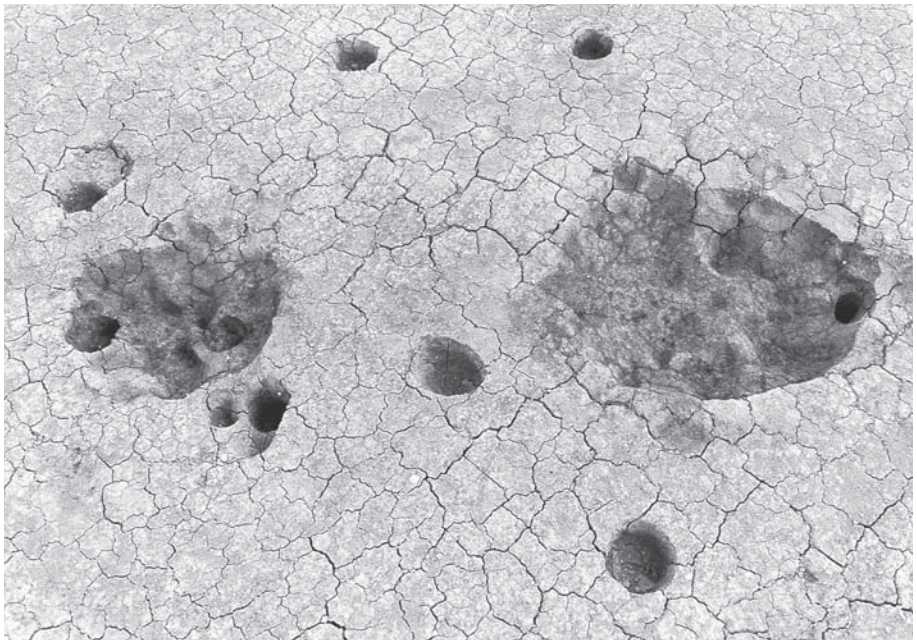
Ph.29　7-1区（南から）

Ph.30　7-4区（北から）

Ph.31　7-1区SK001（東から）



Ph.32　7-3区SX010検出時
（北東から）



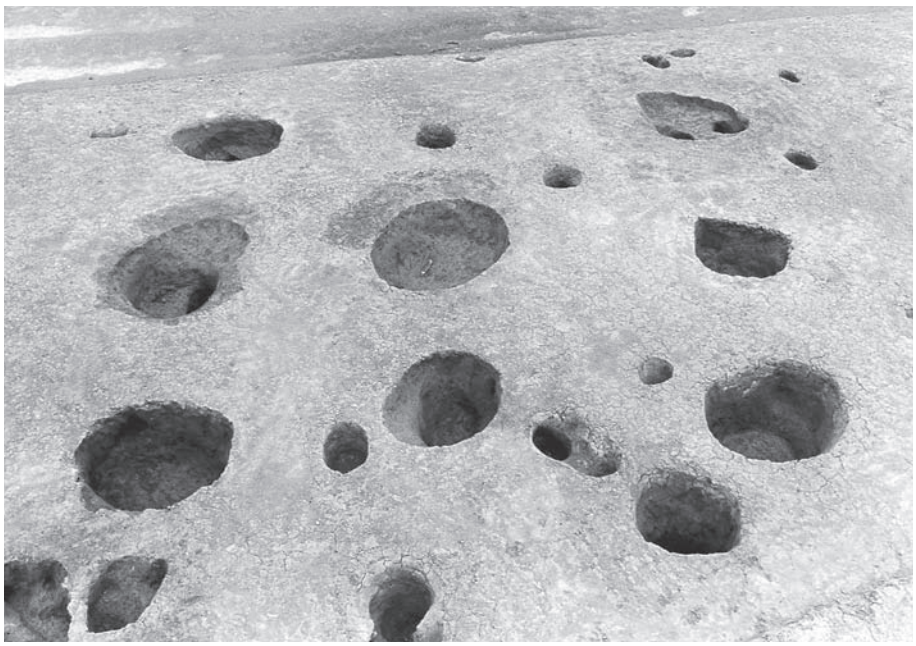
Ph.33　7-3区SX010（北東から）

Ph.34　10区北端（南から）

Ph.35　11-1区西側（南東から）

Ph.36　11-2区北側（南から）

Ph.37　11-1区SB001（南から）



Ph.38　11-2区SB009（西から）

Ph.39　11-2区SB010、011
（南西から）

Ph.40　13区（北東から）

Ph.41　12区SK002（西から）

Ph.42　14区SD020（南東から）

Ph.43　14区SB011、SD020
（南西から）

Ph.44　14区SB012（南西から）

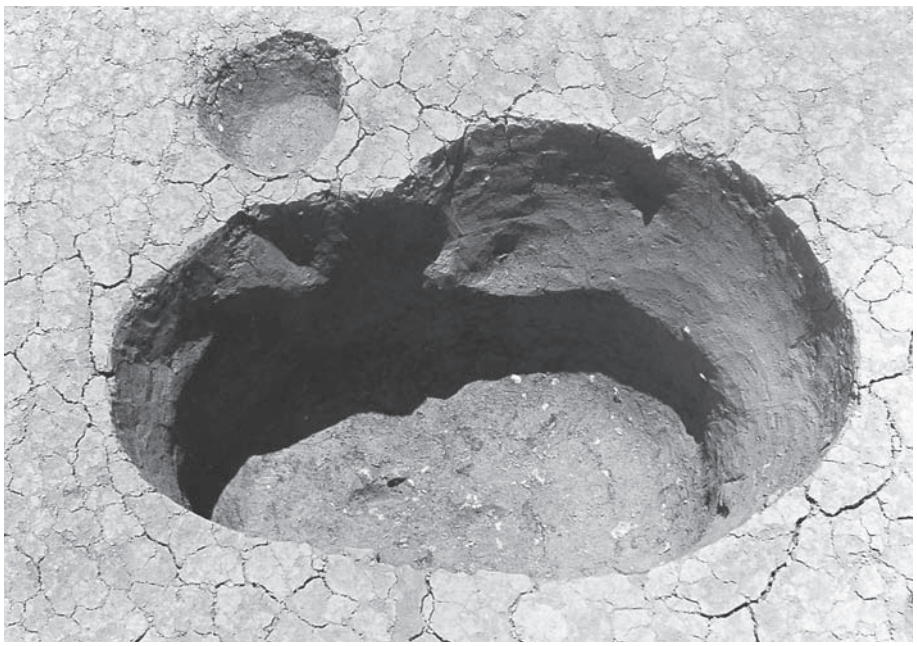
Ph.45　14区SB021（北西から）

Ph.46　14区SB013（北西から）

Ph.47　14区SB016（北西から）

Ph.48　14区SB049（北から）

Ph.49　14区SB032（北から）

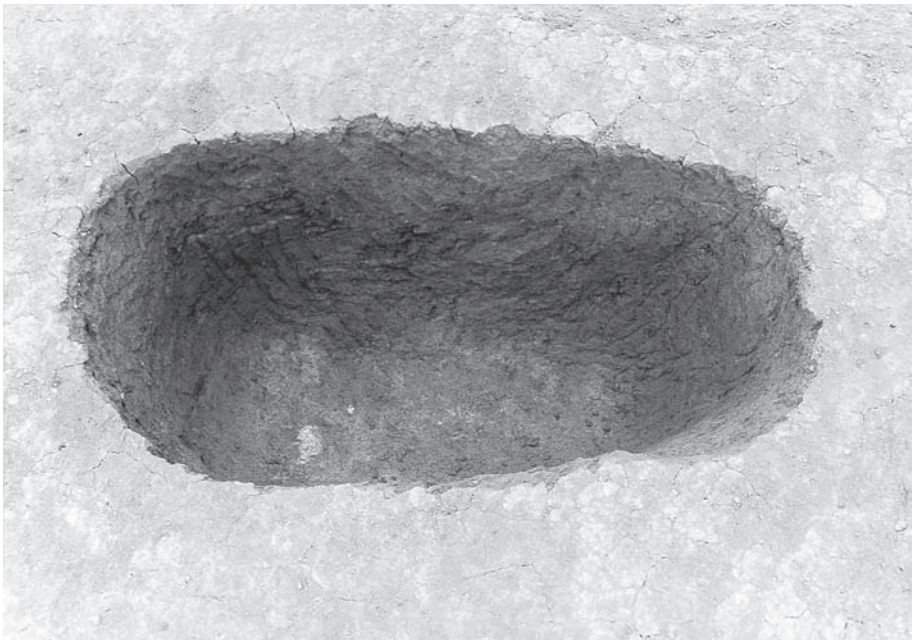


Ph.50　14区SB004（北から）

Ph.51　14区SX017（東から）

Ph.52　14区SX019（西から）

Ph.53　17区全景（西から）

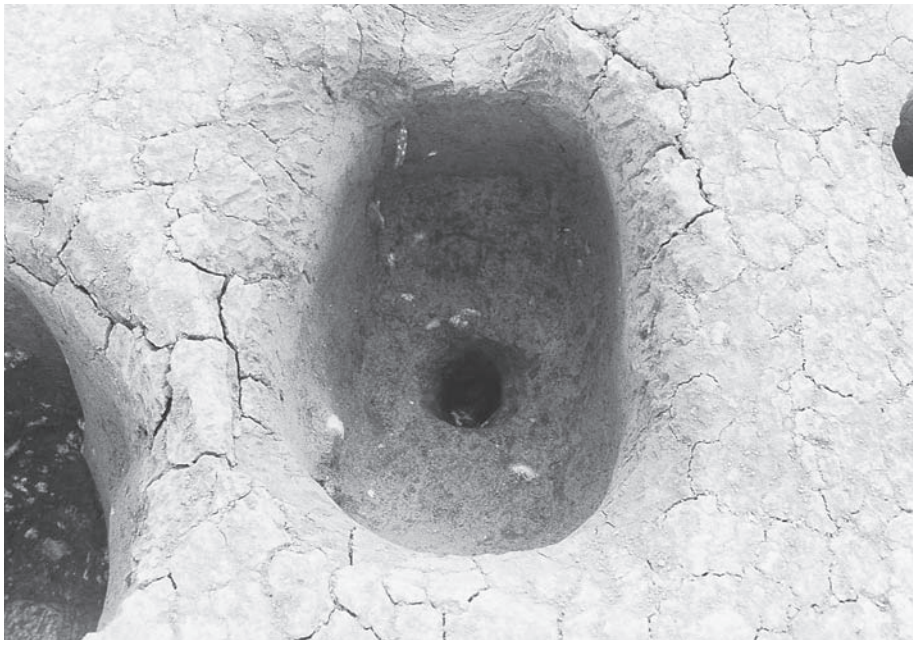


Ph.54　18-1区SK005（南から）

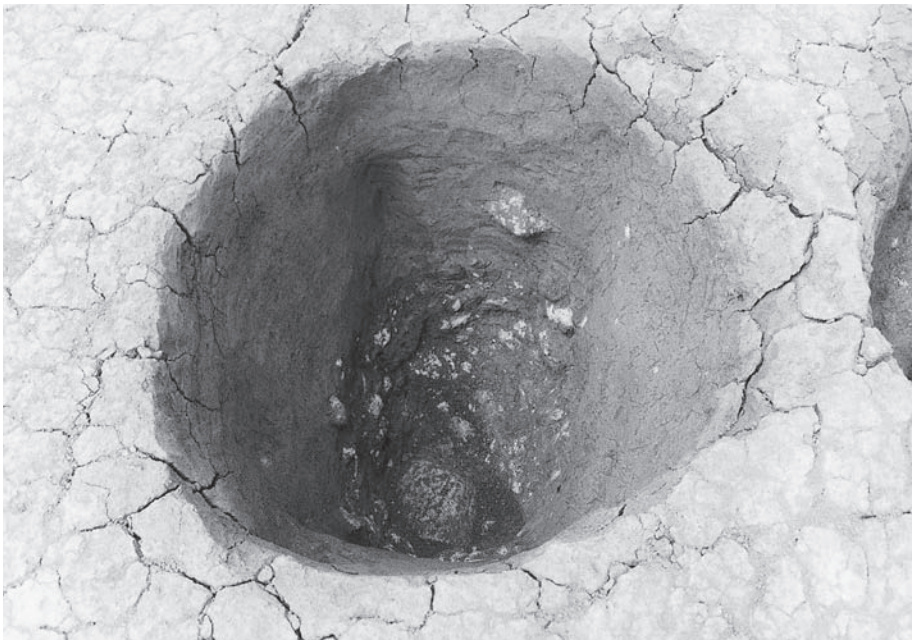
Ph.55　18-1区SK006（東から）

Ph.56　18-1区SK008（南から）

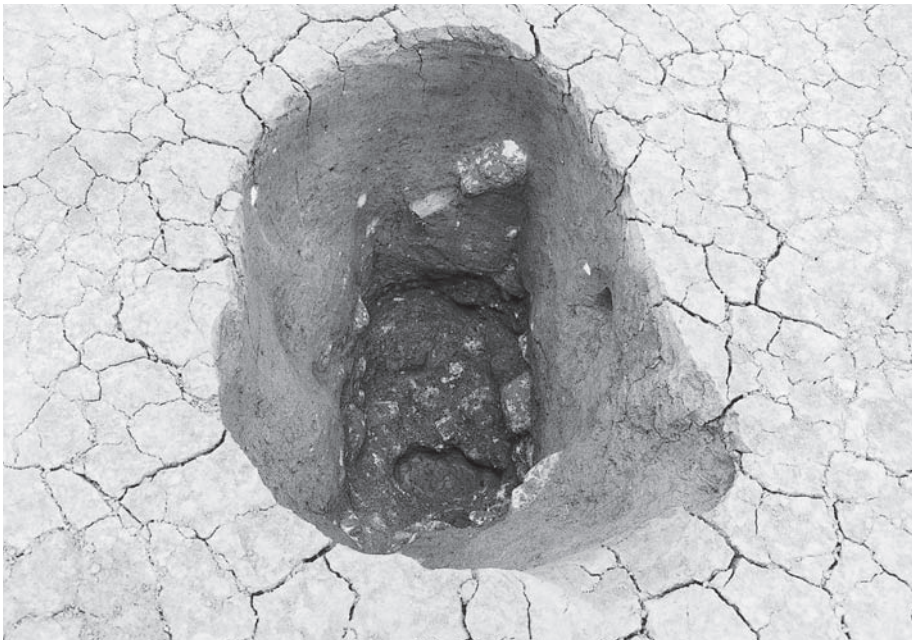
Ph.57　18-1区SK009（南から）



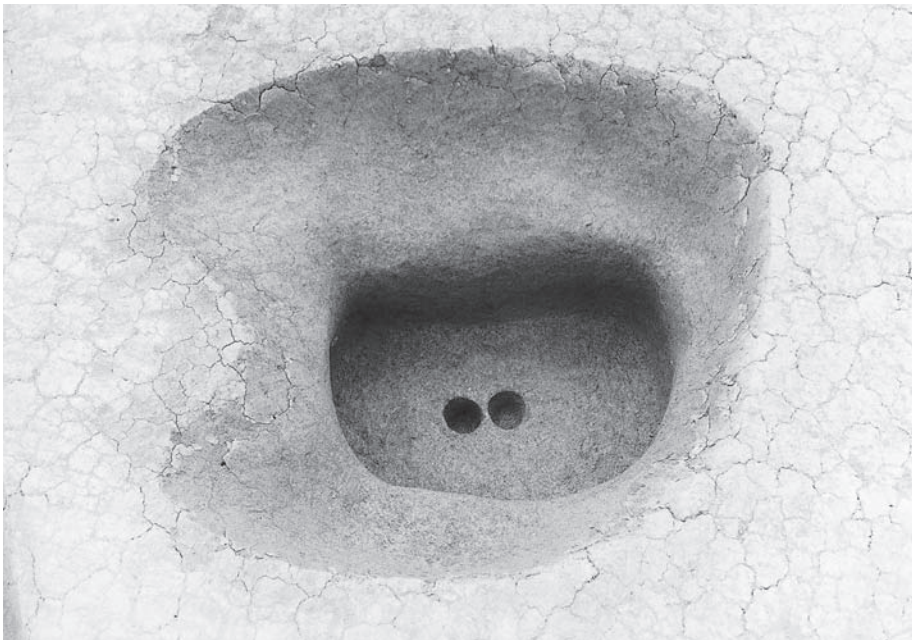
Ph.58　18-1区SK015（東から）



Ph.59　18-1区SK016（東から）



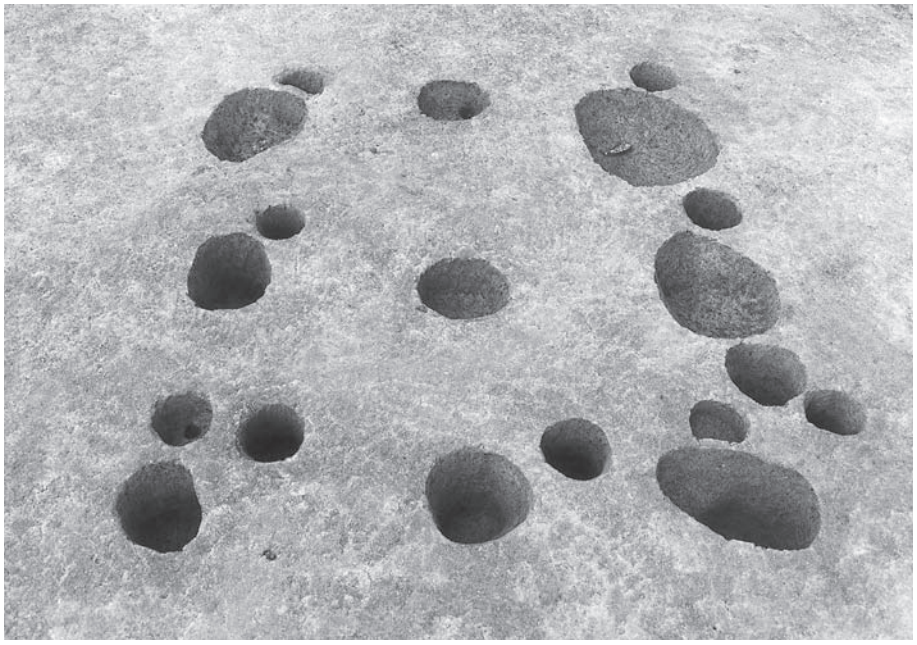
Ph.60　18-1区SK019（南から）



Ph.61　18-1区SK022（北から）

Ph.62　18-2区SD051（東から）

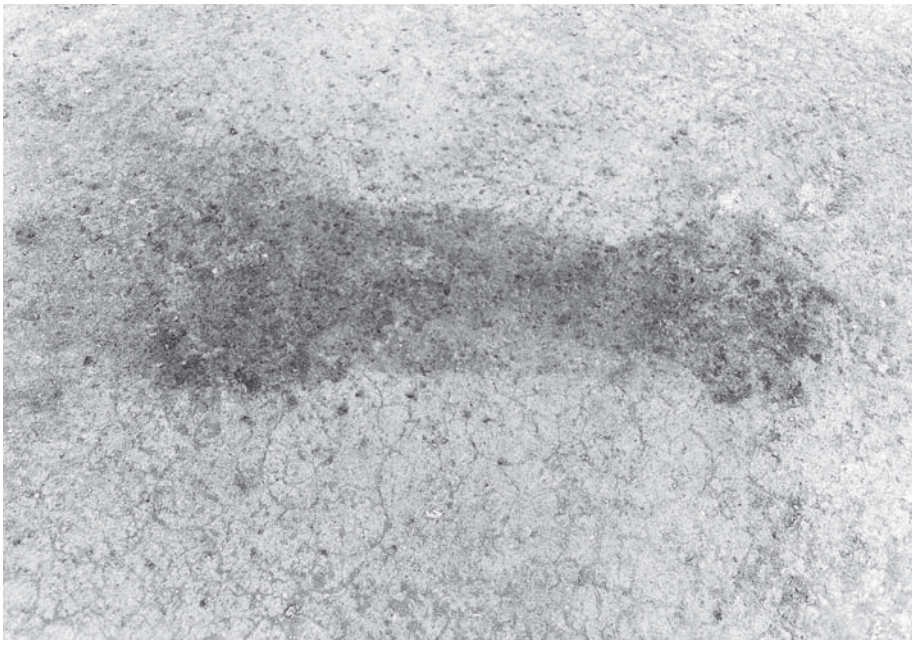
Ph.63　18-2区SB044（南から）



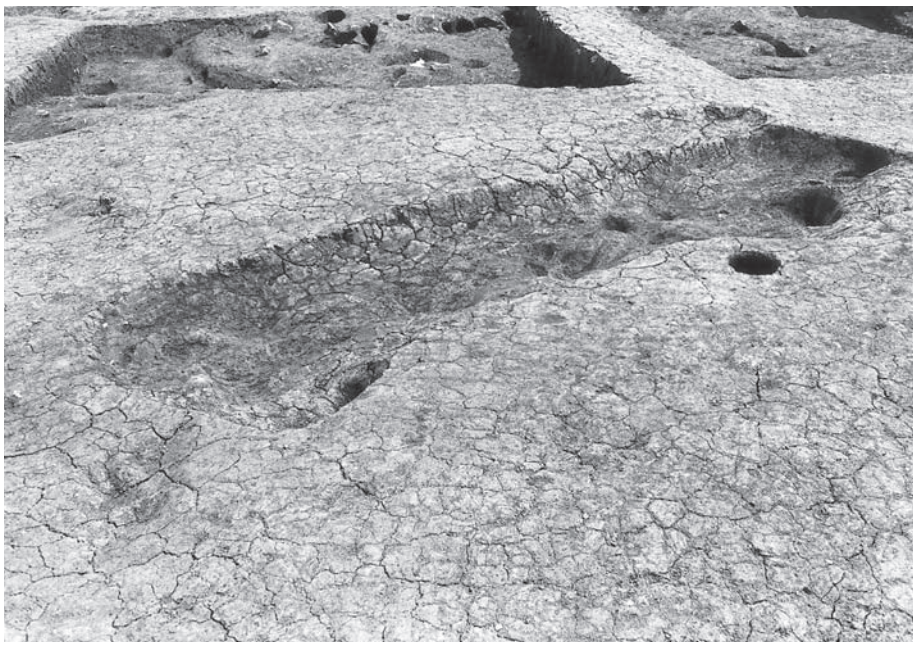
Ph.64　18-2区SB047、048
（南から）

Ph.65　18-2区SB043、SX041
（東から）

Ph.66　18-2区SB049（南から）

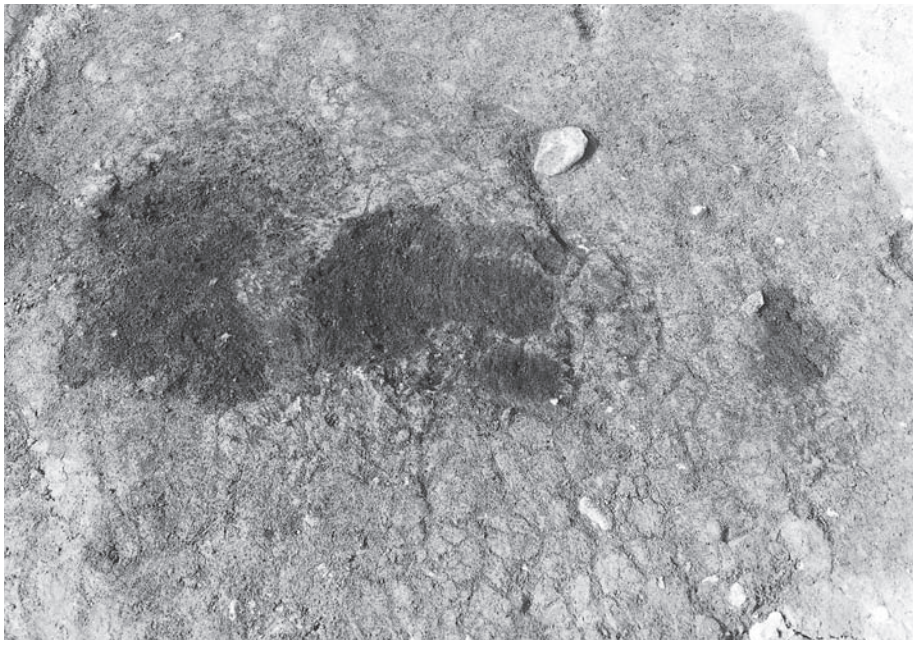


Ph.67　18-2区SX040検出時
（南から）

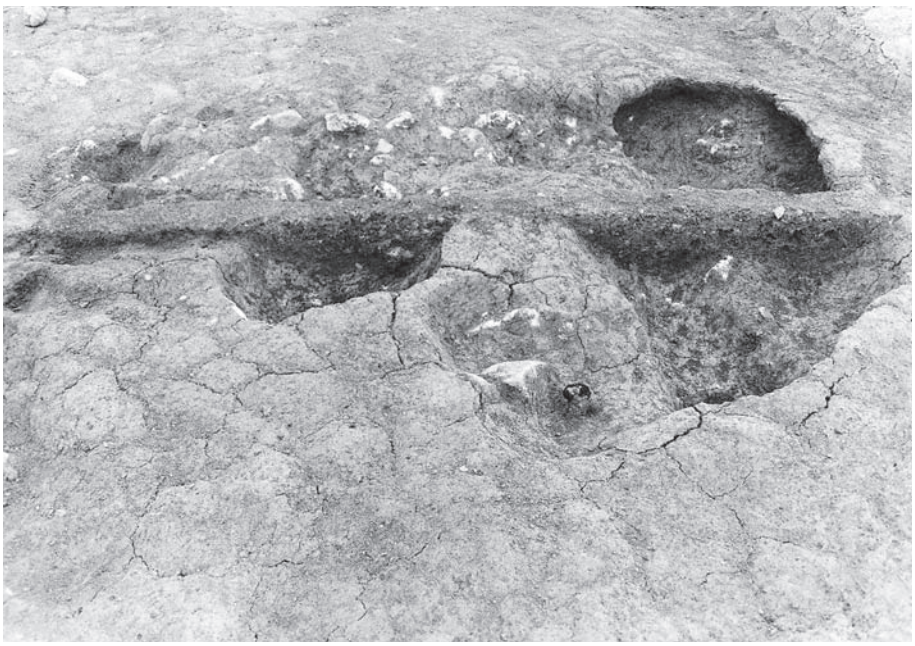


Ph.68　18-2区SX040（北から）

Ph.69　18-3区南側（北西から）



Ph.70　18-3区SX037検出時
（南西から）



Ph.71　18-3区SX037土層（北から）

Ph.72　18-3区SX037（北から）

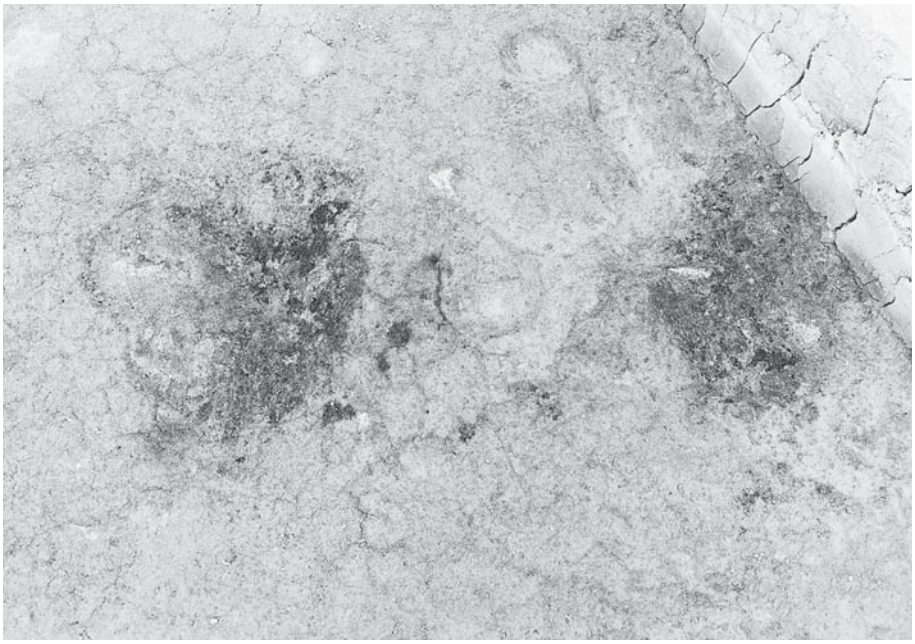
Ph.73　18-5区（北東から）

Ph.74　18-5区SD060 3区
（東から）

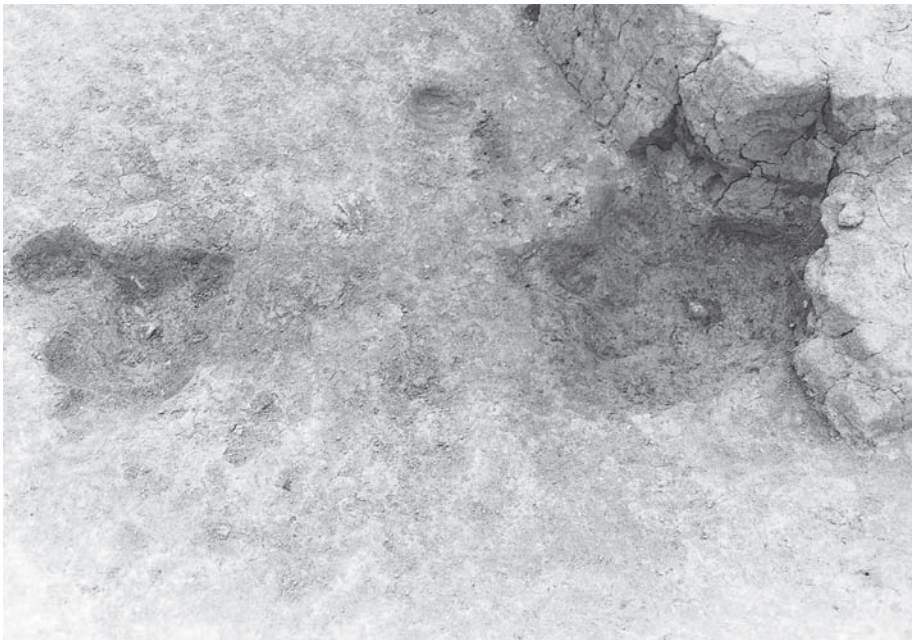
Ph.75　18-5区SD060 3 区
（南西から）

Ph.76　18-6区（東から）

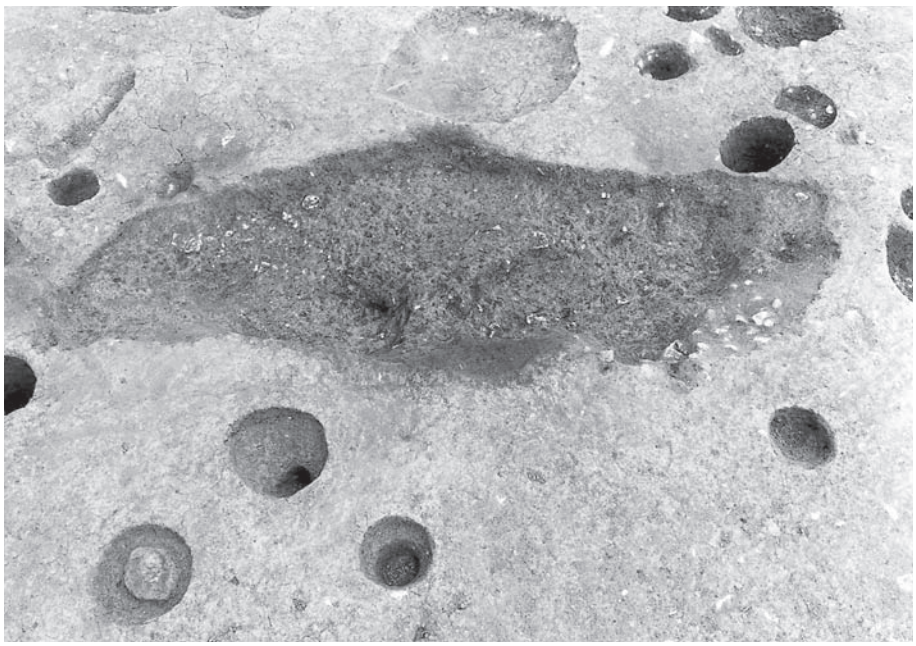
Ph.77　18-6区SD060k-l土層
（東から）



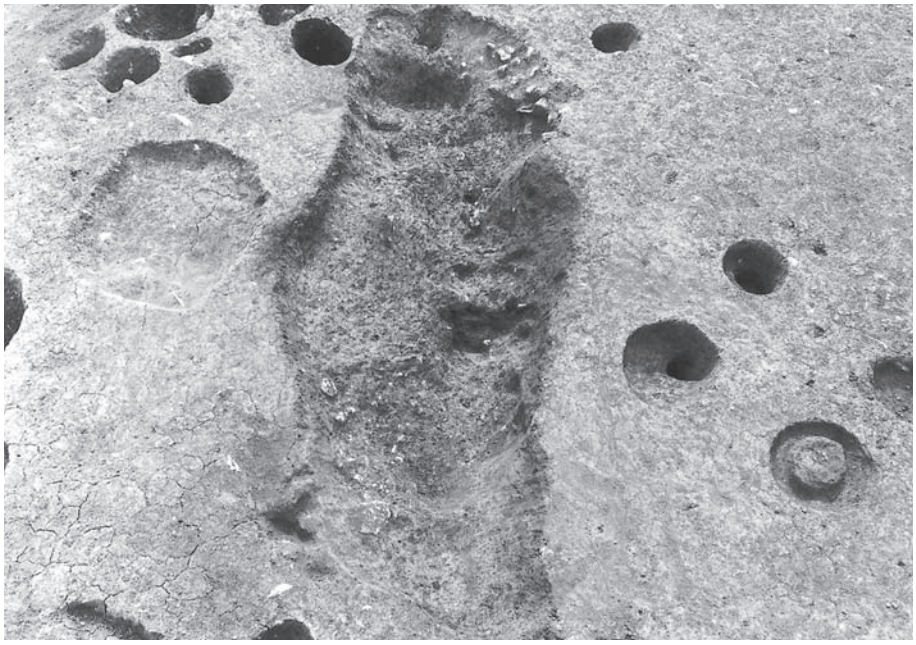
Ph.78　18-4区SX039検出時
（東から）



Ph.79　18-4区SX039（東から）



Ph.80　18-5区SX70、SX082
（北から）



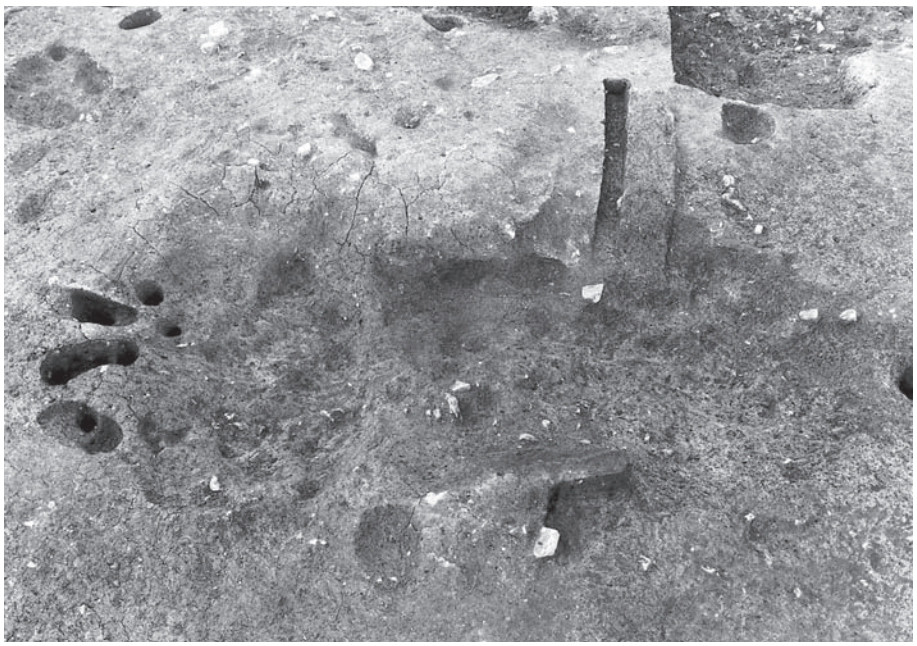
Ph.81　18-5区SX70、SX082
（東から）

Ph.82　18-5区SX062検出時
（南から）

Ph.83　18-5区SD060、SX062（西から）

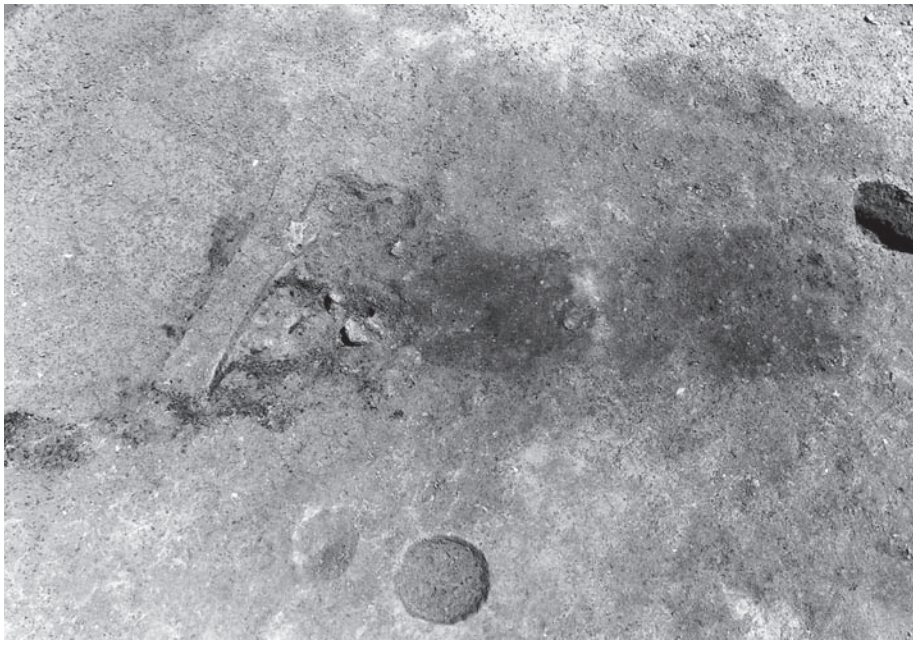
Ph.84　18-5区SD060、SX062（南から）

Ph.85　18-5区SX062（西から）



Ph.86　18-5区SX062（南から）

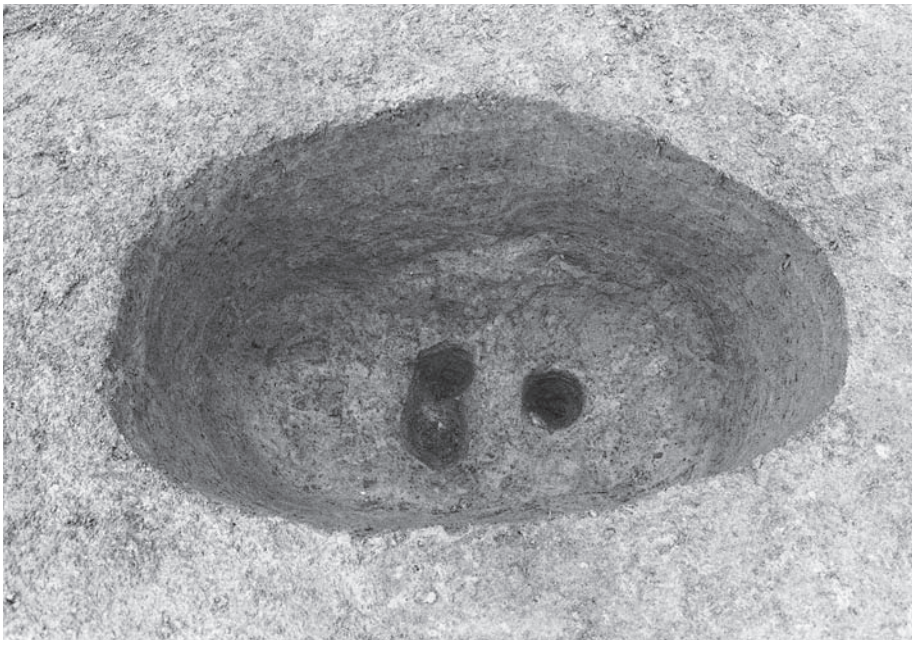
Ph.87　18-5区SX062調査中
（北から）



Ph.88　18-5区SX078検出時
（南西から）

Ph.89　18-5区SX078（北東から）

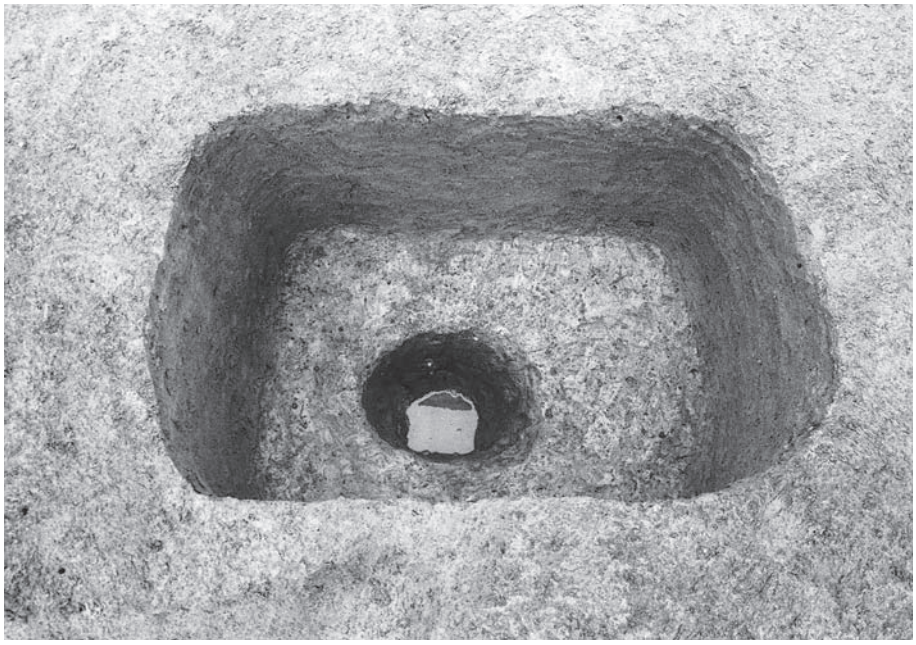
Ph.90　19区南側（北から）



Ph.91　19区SK001（南東から）

Ph.92　19区SK002（東から）

Ph.93　19区SK003（北から）



Ph.94　19区SK004（南から）

報告書抄録

ふりがな	かなたけ
書　　名	金武３　－金武地区農村振興総合整備統合補助事業関係調査報告－
副 書 名	浦江遺跡第５次調査５・城田遺跡第２次調査２・乙石遺跡第２次調査
巻　　次	３
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	874
編著者名	吉留秀敏・米倉秀紀・常松幹雄・池田祐司・久住猛雄・藏冨士寛・阿部泰之
編集機関	福岡市教育委員会
所 在 地	福岡市中央区天神１－８－１
発行年月日	2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
浦江遺跡（うらえいせき）	西区大字金武（にしくおおあざかなたけ） 字塚原・大塚（あざつかはら・おおつか）	40135		33° 31′ 24″	130° 19′ 10″	2002. 04. 01 ～ 2003. 01. 31	36,387㎡	圃場整備
城田遺跡（じょうたいせき）	西区大字金武（にしくおおあざかなたけ） 字城田（あざじょうた）	40135		33° 31′ 35″	130° 18′ 56″	2003. 05. 08 ～ 2004. 01. 30	16,927㎡	
乙石遺跡（おといしいせき）	西区大字金武（にしくおおあざかなたけ） 字乙石（あざおといし）	40135		33° 31′ 39″	130° 18′ 41″	2004. 04. 05 ～ 2004. 10. 28	24,241㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浦江遺跡	散布地＋集落＋墓地＋城郭	縄文/弥生/古墳/古代/中世	集石＋溝＋掘立柱建物＋竪穴住居＋古墳	弥生土器＋縄文土器＋須恵器＋土師器＋陶磁器＋石器	弥生時代の区画墓・装飾古墳・中世末頃の小規模城郭
城田遺跡	散布地＋集落＋墓地	縄文/弥生/古墳/古代/中世	竪穴住居＋壁建ち式建物＋掘立柱建物＋古墳	弥生土器＋縄文土器＋須恵器＋土師器＋陶磁器＋石器	１号墳から細線式獣帯鏡出土・古代の官衙建物群
乙石遺跡	集落＋製鉄遺構	旧石器/縄文/弥生/古墳/古代/中世	落とし穴＋掘立柱建物＋製鉄遺構	縄文土器＋須恵器＋土師器＋陶磁器＋石器	ナイフ形石器・台形様石器・曽畑式土器出土

福岡市埋蔵文化財調査報告書第874集

金　武　3

－金武地区農村振興総合整備統合事業関係調査報告－

－浦江遺跡第５次調査５・城田遺跡第２次調査２・乙石遺跡第２次調査１－

平成18年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　ダイヤモンド印刷株式会社
福岡市東区松田３丁目９－32